

FAIRY TAIL～魔龍の滅竜魔導士

長之助

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

滅竜魔導士……それはドラゴンを倒すためにドラゴンから魔法を教わった者達

ロストマジックと呼ばれるものであり、自分の属性に合ったものを体内に取り込んで魔力にする強者達

そして、その中の一人である天空の巫女、天空の滅竜魔導士と呼ばれる少女がいた

そして、彼女のそばには彼女を守る存在が二人いた。猫のような姿をしたシャルル、そしてもう一人……魔龍の滅竜魔導士と呼ばれる少年である

この物語は、魔龍の滅竜魔導士と呼ばれる彼の物語……力の強さ故に傷つける事を嫌う少年が、何かを守るために奮起する物語である

目次

六魔将軍編

プロローグ | 1

連合軍にて | 4

天空の巫女、とは | 13

突撃 | 22

過去 | 31

魔食 | 41

滅竜 | 49

終劇 | 58

ジエラール | 66

妖精の尻尾へ | 75

ギルダーツの帰還 | 84

エドラス編

妖精の尻尾が消えた日 | 92

エドラス | 100

王都へ | 109

合流 | 118

マルク・オーグライ | 126

決戦 | 135

偽竜 | 143

竜鎖砲 | 151

ドロマ・アニメ | 159

ドロマ・アニメ黒天 | 169

エドラスとの別れ | 177

リサーナ・ストラウス

188

S級魔導士昇格試験編

S級魔導士昇格試験

197

悪魔の心臓

207

妖精の尻尾対悪魔の心臓

216

刻印

225

攻めと守り

234

雷炎竜

243

破滅

251

アキノロギア

261

七年後編

再開

270

仕事

279

真相

288

結末

296

ポーリュシカ

305

ブランクの埋め立て

314

束の間の三ヶ月

322

大魔闘演武編

第二魔法源

332

不意打ち

340

二日目バトルパート

349

バトルパート

359

三日目エキシビジョンマッチ

368

三日目競技パート

376

心機一転	594
冥府の門編	
クロツカスの街を	584
そして帰路へと	576
パーティ	568
1分	558
竜王祭	547
月蝕	538
優勝	529
未来	519
今の悪夢と未来の絶望	510
一時の勝利	501
快激	492
ただひたすらに	483
最終日	474
最終日前日	465
ドラゴン	457
滅竜魔導士対決の行く末	448
白影氷	437
四日目バトルパート	427
四日目競技パート	418
リュウゼツランド	409
バトルパート最終戦、Aチーム	400
3回戦バトルパートBチーム	392
三日目バトルパート、その裏で	384

別れ	793
案外仲間は欺けない	786
発現	778
兆候	770
蛇姫の鱗で	762
妖精の尻尾解散編	
解散	753
決着	745
魔を取り戻す	738
悪の真実、魔なる勇氣	729
消えたドラゴン	722
覚悟	713
分裂	705
喰の呪法	697
一転攻勢	688
苦戦	679
裏切り	671
情報源	663
暗雲立ち込める	655
妖精の尻尾メンバー	647
悪魔祓い	639
異変の中の異変	630
はぐれた先で	621
トレジャーハンター	612
ウォーロード・シーケン	603

対面	802
ゼロで馴染ませ	809
新たな虎の元へと	817
新たな氷竜	825
真氷竜	833
ジョーカー	840
出陣	848
代償召喚魔法	855
マグノリアへ	863
フェアリーテイル再建	871
メスト	879
アタラクシアへ	887
新たな2人	896
アルバレス皇帝とその配下	904
帰還	912
妖精と妖精	920
妖精の心臓	927
戦争編	
襲来アルバレス	936
砂嵐が止む頃に	944
イシュガルVSアタラクシア	952
戦女神デイマリア	960
最後の魔法	968
復活の強敵	976
勝利の余韻	984

声	992
決死のチャンス	1000
2つの悪魔と悪魔狩り	1008
メイビス	1016
ラーケイド・ドラグニル	1023
氷帝竜	1031
白影氷／魔天剣	1039
アイリーン・ベルセリオン	1047
エンチャントの祖	1054
ドラゴンの女王	1062
親子と絶望	1069
魔竜と魔龍	1077
時の狭間	1085
アクノロギアを	1093
完全なる滅竜	1101
最後の戦い	1109
妖精の尻尾	1118
番外編：悪魔の力	1125

六魔將軍編 プロローグ

一人の少年がいた。紫の髪を持った未だ年若い少年は3本の杖を持ってとある森を歩いていった。

歩き続けていると森の奥から巨大な何かが段々とこっちに迫ってくる音が聞こえてくる。響く地鳴り、パニックで鳴きながら飛んでいく鳥達。そして木々の薙ぎ倒されていく音。少年はその音のする方向に視線を向ける、耳を向ける、感覚をそれ一つに集中させる。

「GRAAAAAAAAAA!!」

中から現れたのは巨大な手足に、それに人一人分はありそうなほどの長さを持った爪を持ったモンスターだった。

本来の人間ならば、こんなものに出会った瞬間に死を悟るだろう。はたまた無謀にも戦おうとするか、懸命に逃げようとするか。

しかし、少年にはそれを倒すだけの力があつた。ただの人間でないからだ。

「……大人しく戻ってくれば、俺は怪我をさせたりしない……だから、効いてくれよ……!」

少年は1本の杖を背中から取り出してモンスターに向ける。瞬間、幾つもの魔法陣がモンスターに展開していく。

モンスターはそれに驚きつつも、それでもなお走っていきこうとする。だが一瞬でも意識を向けた瞬間に既に敗北は決まっていた。

「睡下三重ノ型……浅神楽!!」

瞬間、モンスターは何かにつまづいたかのようにバランスを崩して、倒れる。しかし、スピードが思ったよりもあつたのかそのままの勢いで地面を滑って少年の方に向かつてくる。

少年は間髪入れずに次の杖を取り出してモンスターに向ける。

「防関二重ノ型、張神!」

少年の目の前に二重の魔方陣が展開され、モンスターの巨体を受け止め切る。

完全に眠り、動かなくなつたのを確認してから、少年はモンスターの巨体と地面の間に手を突っ込んで持ち上げた。

「マスターの言われたことはこれで完了だな……今日もまた魔法を使わないで済んだ。」

少年は持ち上げたまま近くの平野にモンスターを起き、そのまま帰っていく。彼の唱えた魔法の一つ、睡下三重ノ型はモンスターを眠らせる魔法。しかし、眠らせるだけでなく闘争本能が激しい個体は人間以外ならその闘争心を解消させる力もあるのだ。

「……『近くの森で暴れてるモンスターの処理』か。ウエンディじゃ確かに出来ないとはいえ他に誰かいなかったのかな。下手したら傷つけるところだったんだけど。」

ギルドに帰りながら少年はベルトにつけてあるホルダーから水晶……ラクリマ魔法水晶を取り出す。

そしてそれを、食べ始める。

「……んぐ、ふう……魔力を注ぐだけで発動できる簡単な魔法杖……やっぱりマスターにどうにかしておかないとな……受注するくらい良いんじゃないかなって思うけど……」

ラクリマ魔法水晶を食べ終わってから、愚痴りつつも少年は自分の家族の元へと帰る。血は繋がっていないが、家族だと少年は認知していた。

そして、こうやって時折森の平穏を保ちながらも彼はこれから平和に暮らして行けると思っていた。

「……最近、森のあちこちの様子が変だ……前まで暴れるやつなんていなかったのに……一体どうしたのやら……マスターに聞いても『そのうちわかる』って言うだけだしな……」

そうして歩いていると、少年の家が……ギルドが見えてくる。少年の唯一の心の拠り所、『化猫ケットシエルターの宿』が。

そして、入るなり一人の少女と猫らしき生物の1匹が現れる。

「おかえりなさい！今日のクエストはどうだったの？」

「ばっちりさ。けどやっぱり異変がわからないことには根本的解決にはならないんだよな……」

少年の顔が少し曇る。少女もそれに釣られて顔を少し曇らせるが、

猫らしき生物が溜息をつく。

「あんた達ねえ……その辛気臭い顔をどうにかなさい。マスターが言わないってことはそういうことなんでしょ、私達じゃあ解決出来ないのよ。」

「そうはいうがシャルル——」

「反論しない！とりあえずあんたはマスターに報告しに行きなさい！！ウエンデイも！とりあえず褒めておけばいいのにつられて辛気臭い顔しない！！」

シャルルと呼ばれた猫らしき生物は、少年の言う事を遮って怒鳴る。そしてウエンデイと呼ばれた少女はシャルルに怒鳴られて顔を俯かせていた。

「お？帰ってたのか。マスターが呼んでたぜ。あとウエンデイも呼ばれてたな。」

多分、例の話じゃないか？」

帰ってきたことに気づいたのか、ギルドメンバーの一人が少年に話しかける。

例の話、と言われてすぐには思いつかなかったが思い当たりがあったのを一つだけ思い出していた。

「例の話……六魔將軍オラシオンセイズの話か……けど、それならウエンデイを呼ぶ必要なんてないと思うけどな。」

「さあな、俺にはなんともわからないよ。とりあえず、行ってきたらどうだ？『マルク』」

少年……マルクはまだ知らなかった。これから起こる出来事が彼らを取り巻く環境全てを激変させる物語であることを。

彼はまだ一切の知る由もないのであった。

連合軍にて

「……まったく、マスターも何考えてるんだ。六魔將軍オラシオンセイイスといえばバラム同盟の一角……それを討伐する為に連合軍が編成されるのはわかるが……ウエンディまで連れていこうとするなんて。」

「そんなこと言ってる暇があるならさっさと歩きなさい。怪我させたくないのは私も一緒よ。だから今こうやってあんたの服の中に隠れてるんじゃない。」

もうそろそろ出てもいいと思うけれどね。」

森の中を歩いていくシャルルとマルク。そしてその先を行くウエンディ。彼らは闇ギルド、六魔將軍の討伐というクエストを受けて各ギルドから集った連合軍の集合場所へと向かっていった。

「集合場所は、どこだったかしら？こんな森の中を指定するなんて大概連合軍のギルドとやらも化猫ケットシエルダーの宿と似たようなものかしら？」
「スパイが紛れるのを防ぐためだろう……実際のところはよくわからないけど……あれかな。」

「私、先行ってるよ！」

そう言ってウエンディは目の前に見えた趣味の悪い建物に向かって走っていく。

マルクとシャルルもウエンディがコケないか心配しながらその建物へと向かっていった。

「きゃあっ！」

「ウエンディー！」

そして、建物内に入ってから案の定コケるウエンディ。それを見た瞬間にマルクは走ってウエンディの側によって立たせようとする。

「立てるか？」

「ちよ、ちよつと痛いけど……立てるよ。ありがとうマルク。」

そしてウエンディは服を軽く叩きながら乱れがないかの確認をしつつ、その場にいた全員に顔を向ける。

マルクは、無事そうなのを確認するとホッと安堵のため息をついた。

「化猫の宿から来ましたウエンディです。よろしくお願いします!!」

「子供!？」

「しかも二人だと……?？」

「ウエンディ?？」

この場にいた各々がそれぞれ別の反応を示す。そんな中で、マルクはその場にいた桜色の髪をした自分よりも年上の青年に、何やら既視感を覚えたが……しかし今は気にしている場合ではないと頭を切り替えた。

「これですべてのギルドが揃った。」

「話進めるのかよ!!!」

「あれは……聖十大魔道、岩鉄のジュラ……あんなに若かったのか。」

ウエンディがキョロキョロしている中、連合軍の面々は思うところがあるのか一部は少し渋い顔をしていた。

「この大掛かりな討伐作戦にこんなお子様達を寄越すなんて……化猫の宿はどういうおつもりですか?？」

「——あら、一人じゃないわよケバいお姉さん。」

そう言っつて、隠れていたシャルルが勢いよくマルクの服の中から飛び出てくる。

「シャルル!? 付いてきてたの!？」

「当然よ、貴方のことが心配なのはマルク一人だけじゃないわよ。」

「ネコ!!!」

そう言えばネコは普通喋らないよな、とふと思いつながらマルクが見

渡すと……もう一匹、いや一人と言うべきか。シャルルと違って青い体のネコを発見した。

声こそかけていたもののシャルルに無視されていたが。

「あ、あの……私、戦闘は全然出来ませんけど……皆さんの役に立つサポートの魔法いっぱい使えます……だから、仲間はずれにしないでくださいー！」

「そんな弱気だから舐められるのよあんたは!!」

「すまんな、少々驚いたがそんなつもりは毛頭ない。よろしく頼む、ウエンディ。」

緋色の髪的女性、エルザ・スカーレットが微笑みながらウエンディと話す。

ウエンディは憧れの魔導士と会えたことで感激していた。

「すまんが……そちらの君は何が出来る？」

そしてエルザはマルクに視線を向け、同じように微笑みながら尋ねてくる。マルクは答える前に少し言い淀んだが、すぐに背中にある三本の杖をすべて取り外してそれを見せながら説明を始めた。

「俺は……この三本の杖でサポートです。魔力による障壁、そして睡眠魔法、それと拘束の魔法の三つが使える……ます。」

「なるほどな、サポートの面で確かにこの二人は適任とも言えるな。私達の中にサポート枠の魔導士も少なかったから助かる。」

頼むぞ……えっと……」

「マルク、マルク・スーリアです。」

自己紹介をしてから、エルザから視線を離して軽く辺りを見回すと、何故かスーツを着たホストのような3人組がウエンディを囲んで接待しているのを発見したマルク。

無言で、素早くウエンディのところまで行く。

「え、えっと、あの……」

「お引き取り、願えませんかね？」

片方の手でウエンディの腕を掴み、もう片方の手で杖に手を伸ばしているマルク。

ホスト……青い天馬からのメンバーに軽く睨まれていたが、それ以

上の睨みを見せながらマルクは引き下がろうとはしなかった。

「止めておかぬか……これで全員が揃ったのだ、作戦の説明をせねばなるまい。」

「——と、その前にトイレパルファムの香りを……」

「そこはパルファム付けるなよ……」

一夜がトイレに行き、しばらくして戻ってきてから青い天馬による今回の作戦の説明が始まった。

「ここから北に行くと、ワース樹海が広がっている。古代人達はその樹海に、ある強大な魔法を封印した……その名は、ニルヴァーナ。」

ニルヴァーナ、その名を聞いてこの場にいる青い天馬以外の魔導士達はざわついていた。何せ、殆ど知られていない魔法だったからだ。聖十大魔道であるジュラでさえもその名を知らないのだからある意味当然なのだが。

「マルク……知ってる?」

「……いや、教えられたことは無いな。マスターに聞けば何かわかるかもしれないけど……」

「古代人達が封印するほどの破壊魔法という事だけは分かっているが……」

「どんな魔法かは分かっていないんだ。」

「六魔将軍が樹海に集結したのはきつと、ニルヴァーナを手に入れるためなんだ。」

「我々はそれを阻止するために、六魔将軍を討つ!」

「こっちは13人、敵は6人……だけど侮っちゃいけない。この6人がとんでもなく強いんだ。」

そう言って青い天馬が一人、ヒビキ・レイティスが自身の魔法を使い六人の人物の写真を映し出す。

「毒蛇を使う魔導士コブラ、その名からしてスピード系の魔法を使うと思われるレーザー、天眼のホットアイ、心を覗けるといふ女エンジェル、情報が少ないがミッドナイトとよばれている男、そして奴らの司令塔ブレイン。」

それぞれがたった一人でギルドの一つくらいは潰せるほどの魔力を持つ。我々は数的有利を利用するんだ。」

「あ、あの……私は頭数に入れないで欲しいんだけど……」

「私も戦うのは苦手です……」

「ウエンデイ！弱音吐かないの!!」

ヒビキの説明により少し臆したのか、ギルド妖精の尻尾のメンバーの一人であるルーシィ・ハートフィリアとウエンデイが少し弱音を吐く。だが実際、戦闘力に自信がない者では恐ろしく強い者と戦うと言われれば基本的に臆してしまうのは必然とも取れる。

だが、そんな弱気になった二人を安心させるかのように、一夜は注釈を付け加えた。

「安心したまえ、我々の作戦は戦闘だけにあらず。奴らの拠点を見つけてくれればいい。」

「拠点?」

一夜の言葉に、ラミアスケイル蛇姫の鱗のリオン・バスティアが疑問を抱く。しかし、その疑問は青い天馬のレン・アカツキによって解消された。

「今はまだ奴らを捕捉していないが、樹海には奴らの仮設拠点があると推測される。」

「もし可能なら、ヤツら全員をその拠点に集めてほしい。」

レンの言葉に続けるように言った一夜の言葉で妖精の尻尾の面々がそれぞれの反応を示す。

「どうやって?」

「殴ってに決まってるんだろ!」

「結局戦うんじゃない……」

「集めてどうするのだ？」

その疑問に答えるように、少し自慢げに青い天馬の面々は対策を話す。

「我がギルドが大陸に誇る天馬、クリステイナーで拠点もろとも葬り去る!!」

「おお!？」

「魔導爆撃艇!？」

魔導爆撃艇を用いるということに驚きつつも、それを使わなければならぬほどの相手だという事を面々は同時に思い知らされていた。「普通ならたった六人を相手に使うもんでもないはずなのに……噂以上って事か、六魔將軍は……」

「本当に人間なのかしら、それ。」

シャルルの呟いた疑問にマルクは答えることは出来ない。たった6人で数多くの闇ギルドを従えている程だからだ。余程の馬鹿か大物でない限りはそれに畏怖し、恐怖を抱くことになるだろう。

「おしっ！燃えてきたぞ!!六人まとめて俺が相手してやるアー!!」

「ナツ!!」

「作戦聞いてねえだろ!!」

最初に飛び出したのは、滅竜魔導士のナツ・ドラグニル。それに続き妖精の尻尾の面々が飛び出し、蛇姫の鱗からはジュラを除いた二人が、青い天馬からは一夜を除いた面々が次々に飛び出していった。

「ウエンデイー！行くわよー!」

「わっ！わっ!!」

「あー！待ってよ〜」

そしてシャルルに引つ張られながらもウエンデイが続き、青色のシャルル……ではなく、妖精の尻尾のハッピーがそれを追い掛ける。

そしてこの場には一夜、ジュラ、マルクの3人が残っていた。

「はあー……じゃあ、俺も行きます。」

そう言っただけマルクは外に出ようと一歩踏み出すが、その肩に一夜は手を置いてマルクを静止させる。

「?どうしたんですか?肩に何か付いてましたか?」

「いや、ただ少しだけ確認したいことがあってね。何、すぐに済むからすまないが少し付き合ってくれないか?ジュラさんも。」

そう言いながら一夜はマルクとジュラを呼び止める。すぐに行けば間に合うので、『すぐに済む』というからマルクも付き合うことにしたのだった。

「む?どうしたのだ一夜殿。」

「いや、かの聖十大魔道と言われた貴方ですが……その実力はマスター・マカロフに匹敵するもので?」

「滅相もない。聖十の称号は評議会が決めるもの。ワシなどは末席、同じ称号を持つていてもマスター・マカロフと比べられたら天と地程の差があるよ。」

遠慮がちにジュラは一夜の言葉を訂正する。それを聞いて一夜は何故か微笑んでいたが、その真意をマルクはすぐに知ることになった。

「ほう、それを聞いて安心しました。マカロフと同じ強さだったらどうしようと思っただけです。」

直後、やけにつーんとする匂いが漂ってきた。そして、それを吸ったであろうジュラは口元を押えながら膝をつく。

「うっ……!?な、何だこの匂いは……!」

「相手の戦意を消失させる魔法のパルファム……だっけ。」

「一夜殿!これは一体!」

そして、その答えを言うまでもなく一夜はジュラをナイフで突き刺した。味方だと思っていた相手が、突如攻撃を仕掛ける。この状況でジュラもマルクも困惑し続けていた。

「あんだ、何を……!?!」

しかし、それは一夜では無かった。その体は泡立っていき、段々と一夜の姿を保てなくなっただけ……一気にその姿を変化させた。

「ふう。」

「戻ったー」

「一夜って奴エロい事しか考えてないよ。」

「考えてないね！ダメな大人だね。」

その姿は、小さな二人の人影……いや、それはもう人間ではなかった。そして、奥から新たな人影が現れる。

「はいはい！文句言わない。」

「これは……!?!」

現れたのは女。しかし、ただの女ではなかった。銀の髪、胸元をばだけさせた、羽根を集めて作ったような服装。そして気だるげな表情。マルクはその顔を今さっき確認していた。

「六魔將軍の……エンジェル?!」

「あー……あの汚い男ねー……コピーさせてもらったゾ。おかげで貴方達の作戦は全部わかったゾ。」

「僕達コピーした人の考えまで分かるんだー」

「無、無念……逃げるのだ……!」

ジユラはそう言って気絶した。一夜の姿をコピーしたということ、一夜もまたやられているということ。それを理解したマルクはすぐさま逃げようとするが……

「逃がさないゾ。ジエミニー!」

「ピーリピーリ」

ジエミニニと言われたそれは、また一つになりその姿を変える。今度は、マルクの姿に変わってマルクに襲いかかる。

「ジエミニニってことは……黄道十二門の星霊!!」

「そういう事。サポート役がここに残ってくれて……ん?」

マルクに変化して、マルクに馬乗りになったジエミニ。しかし、何かに気づいたのかナイフを握った手を止めていた。

「どうしたんだゾ?」

「……へえ、お前も滅竜魔導士……しかも魔力そのものを食らってしまうってまたとんでもないな。一夜のパルファムがあんまり効いてないのも、魔力を食べる……つまり、魔法そのものを食べたからか。けど……なるほど、昔その力を使って一般人に傷を負わせてしまっ

て――」

「っ!!言うなあ!!」

マルクは手に紫色の魔力を宿し、ジエミニを殴ろうとする。しかし、軽々とジエミニに躲されてしまった。

「へえー……いい情報ゲットしたゾ。とりあえず……撤収するゾ。ブレインのところ一旦戻らないといけないし……開け、彫刻具座の扉……カエルム！」

エンジェルは星霊を呼び出し、その星霊からビームが放たれる。咄嗟に避けて反撃しようとするが、既にエンジェルは退散していた。

マルクは、倒れるジュラを見て拳を握りしめ、やけくそ気味に床に叩きつけた。

天空の巫女、とは

「ジュラさん！ジュラさん大丈夫ですか!？」

マルクはジュラに呼びかける。しかし、聞こえるのはうめき声だけだった。マルクは、どうすればいいのかを冷静に考える。

敵が一夜に化けていた以上、その一夜も現状は分からないが戦闘不能になっている事は確かだとその結論にたどり着く。

「たとえ生きていたとしても……多分重症……なら、まずやれることは……!」

マルクは走り出す。少なくともここが別荘という名の建物である以上、救急箱の一つや二つはあるかもしれない、と考えたからだ。

そして、あまり頼りたくなかった自分の中の力。『滅竜魔導士』の鼻の良さをフルに使って救急箱を探し当てる。

「よし……まだ息があるな……ジュラさん、ちよつと痛むかもしれないけど……すいません!」

マルクは、すぐさまジュラの元に戻って応急手当を施していく。しかし、本当に簡易的なものである以上、傷口がすぐに開いてしまうこともありえない訳ではなかった。それに、刺された痛みというのはそう簡単に引くものでもないだろうとも。

「後は……一夜さんだけ。」

そう言つて、マルクは一夜が最後に一人になったであろう場所に向かう。そう、トイレである。

「メエーン……助かったよ……と言うか、君は無傷なのだね……」
「そんなことより……ジユラさんが傷を負っているんです。何か……せめて痛みが緩和するくらいのものであれば……」

「なるほど、その点では私も手伝えるだろう……私の魔法は香り……パルファムつまり、香りによる効果で色々行う魔法だ。」

「肉体強化や敵の戦意の喪失……痛みの緩和なども可能さ。」
「それだ!!」

一夜が何とか無事だったので、彼の持つ魔法を使いジユラの痛みを何とか緩和させることに成功した。

しばらくすれば、体から痛みが消えたジユラが起き上がる。

「凄まじいな……助かったぞ、一夜殿。マルク殿。」

「俺は応急手当しかしてませんよ……それよりも、早く先に言ったみんなど合流しないと。」

何が起ったかは道すがら……」

そのまま一夜とジユラと一緒に、先に行った者達のところへと向かうマルク。

その間に、起ったことなどの軽い情報交換を行っていた。

「……それにしても、ウエンディ殿が滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーだったとは……」

「ええ……ウエンディは回復魔法持ち、魔力を大量に消費してしましますが、二人の傷を回復させることは可能はずです。」

「……ふむ、となると君も滅竜魔導士なのかね？」

「……俺は……」

一夜からの質問に、答えを言い淀んでしまったマルク。しかし、その一瞬の間で何かに気づいたジユラが先行するように素早く駆け抜けていった。

「ジユラさん!? ってあれは……」

オラシオンセイス
「六魔將軍、まずいね……私達も急ぐぞ!!」

「岩鉄壁!!」
がんでつへき

六魔將軍からの攻撃を、ジユラが魔法で防ぐ。本気の攻撃ではなかったのか、はたまたジユラの魔法がすごいのかは兎も角としてその場にいた全員は無事だった。

「——今は一夜殿の『痛み止めのパルファム』で一時的に抑えられているが……」

「六魔將軍め、我々が到着した途端に逃げ出すとは……さては恐れをなしたな。」

「あんたボロボロじゃねえか!!」

攻撃はジユラが防いだ。しかし、それ以前に全員が満身創痍で傷ついていた。流石にこのままでは六魔將軍の討伐どころか、一人も倒せないままに全滅してしまう……ということにもなりかねなかった。

「皆さんにも私の痛み止めのパルファムを……」

それを察した一夜がまず魔法により全員の痛みを和らげていく。そして、ある程度痛みが引いたところで全員が冷静になり始める。

「あいつらく……ウエンディとハッピーを……どこだー!!ぐえっ!!」

ナツが走り去ろうとした瞬間、シャルルがナツのマフラーを引っ張って止める。

「羽!?!」

「猫が飛んでる……」

「これは翼エーラっていう魔法……ま、驚くのも無理はないですけど。」

「ハッピーと被ってる。」

「何ですって!!」

ナツの言葉で一瞬荒くなったシャルルだったが、それどころではないと冷静になりながら情報を把握していく。

「……ともかく、ウエンディとオスネコの事は心配ですけど……闇雲

に突っ込んでも勝てる相手じゃないってわかったでしょう。」

「シャルル殿の言う通りだ。敵は予想以上に強い。」

「それに……」

シャルルはそれ以上言わず、視線だけを変える。そこには一夜の痛み止めのパルファムが効かず、腕を抑えながら苦しむエルザの姿があった。

そして、エルザはルーシィのスカートのベルトを取り外してそれを腕に巻き付ける。そして自分の持っていた剣を地面に投げ捨て、痛む腕を突き出す。

「——斬り落とせ。」

「馬鹿な事言ってるんじゃないやねえ!!」

「分かった、俺がやろう。」

「っ！リオンてめえ!!」

剣を広い、リオンは即座に腕を切り落とすことに賛成する。エルザが戦えるためには仕方が無いこと……だが、エルザを除いた妖精の尻尾フェアリーテイルの面々はやはりそう片腕を斬り落とすことは嫌なのか、反対の意思を示す。

「今この女に死んでもらうわけにはいかん。」

「やるんだ！早く!!」

「やめろリオン!!」

反対派と賛成派による言い争いをしている中、リオンは淡々とその剣をエルザに向かって振り下ろす——

「……貴様はこの女の命より腕の方が大事か？」

だが、妖精の尻尾のそれはグレイ・フルバスターの氷の造形魔法によつて腕を斬る前に静止される。

「他に方法があるかもしれないねえだろ？短絡的に考えるなよ。」

そして毒の痛みで限界が来たのか、エルザは倒れる。周りにいた面々は焦るが、シャルルが一步前へと踏み出す。

「ウエンディなら助けられるわ。」

今更仲間同士で争っている場合じゃないでしょ？力を合わせてウエンディを救うの。

……ついでにオスネコも。」

「……ウエンデイは、解毒以外にも解熱や痛み止め……傷の治癒も出
来ます。それなら、みなさんの傷も治すことが出来るはずです。」

……あまり、使わせたくはありませんが。」

シャルルに続いてマルクが説明する。それに皆関心を寄せて、そし
て同様に少しだけ驚いていた。

「治癒って……失われた魔法じゃなくて？」

「まさか天空の巫女って言うのに関係あるの？」

マルクは言葉を詰まらせたが、ここで情報を渡さない事にはウエン
デイに対する信用を得られないと考えて渋々話す。

「……ウエンデイは、天空の滅竜魔導士……天竜のウエンデイ。」

「滅竜魔導士!？」

「詳しい話は後、今私たちに必要なのはウエンデイよ。そして目的は
分からないけれど、あいつらもウエンデイを必要としている。」

皆が驚いてる中でシャルルが冷静に目的を作り出す。倒れたエル
ザの為、そしてハッピーとウエンデイ自身を助けるために。

「行くぞオ!!」

「「オオツ!!」」

一致団結し、今ここにウエンデイ&ハッピーの奪還作戦が行われる
ことになったのであった。

「——天空の滅竜魔導士ってさあ……何食うの？」

「空気。」

「うめえのか?」

「さあ?」

「……それ、酸素と違うのか?」

ウエンデイとハッピーを助け出すため、今連合軍のメンバーをほぼギルドごとに分けて森の中を走っていた。

マルクは、ナツとグレイについて行くことと決めたシャルルを守るために三人について行くことにしたのだ。

「……ウエンデイは……ナツさん、同じ滅竜魔導士である貴方に会えるんじゃないか?」って思ってたんです。

もし、彼女が参加していなかったら多分参加してたのは俺だけだったと思います。」

「何で俺?」

「七年前に滅竜魔法を覚えてくれたドラゴン……天竜グランデイナー。七年前の七月七日にいなくなったドラゴンを探すために。もしかしたら居場所を知ってるんじゃないかと思っただらしくて。

……それに、俺も……」

「イグニールとガジルのドラゴン……それにウエンデイも七年前……んがっ!」

考え事をしていたせいで、ちょうど頭の位置ぴったりの木の枝がナツに直撃して、ナツは転ぶ。

そして、シャルルはマルクの肩に乗っていたが、耳元で呟く。

「……自分が滅竜魔導士ってことは教えないの?」

「……今言う事でもないだろ。俺はなくても戦える。今必要なのは天竜の滅竜魔導士のウエンデイであって……魔龍の滅竜魔導士じゃない、治療魔法を使えない魔龍の滅竜魔導士はお呼びじゃないんだ。」

「貴方がそう言うのなら、私は何も言わないけれど……って何これ!」

シャルルが向けた視線の先、そこには葉や幹までもが真っ黒になった木が存在していた。

「木が……黒い……」

「き、気持ち悪い……!」

四人がその異様な光景に驚いていると、横から葉が動く音が聞こえ

てくる。マルクとナツはそれに反応して横を見ると、見知らぬ誰かがそこにはいた。

「——ニルヴァーナの影響だつて言ってたよな、ザトー兄さん。」
「ぎやほー、あまりに凄まじい魔法なもんで大地が死んでいくつてなア……ガトー兄さん。」

「誰だ!？」

グレイが声を出した瞬間、四人の周りから大量の人間が出てくる。どう考えても味方の雰囲気ではなかった。

「ちよ……ちよつとお——」

「ニルヴァーナの影響だつて「ぎつき言つたぜガトー兄さん。」…そうかいザトー兄さん。」

「囲まれてるわよ!!」

「うほお!猿だ!猿が2匹いんぞおい!!」

明らかにどうでもいいことに驚いているナツ。マルクは背中の杖を2本取り外しつつ、静かに戦闘態勢に移る。

「こ、こいつら妖精の尻尾だ!!こいつらのせいだ……!」

「オオ!もう一匹増えたー!!」

「……誰だ?あんたら。少なくとも味方つて雰囲気じゃないけど。」

「六魔將軍傘下、裸ネイキツドマミーの包帯男……」

「ぎやほお!遊ぼうぜえ。」

嫌なにやけ面をしながら闇ギルドの一角は、全員が全員戦闘態勢に移行する。明らかかな時間稼ぎ目的なのは明白であった。

「敵は……6人だけじゃなかったつていうの……!?やられた……!!」

敵が6人じゃなかったことに、イラつくシャルル。ウエンディを助けたいのにはこうでは、ウエンディが明らかに危ないからだ。

しかし、妖精の尻尾の二人はそうではなかった。

「こいつア丁度いい。」

「ウホホッ、丁度いいウホー」

「何言つてんのあんた達!!」

「拠点とやらの場所を吐かせてやる……!」

「今行くぞ！ハッピー！ウエンディ!!」

そう言いながら戦う準備なのか、冷気を出すグレイと炎を出すナツ。そして二人の発言を自分達を軽視するかのように受け取ったのか、元々まともなやつが集まらない闇ギルドのリーダー核であろう二人はそれを挑発と受け取った。

「舐めやがってクソガキが……」

「六魔將軍傘下、裸の包帯「死んだぞテメーら。」

「何なのよ妖精の尻尾の魔導士は……！今の状況分かってるのかしらっ!!」

「……俺達だけ、って訳でもないだろう。こりゃあ傘下の闇ギルドありったけ投入しやがったな六魔將軍……!」

そして、戦闘は開始される。グレイが氷の造形魔法によって敵を凍らしたり氷そのものを作り出して隆起させ、それで敵を倒していく。

そしてナツがありったけの炎で敵を吹き飛ばしていく。

「……化物かよ、あの2人。っていうかシャルル！俺から離れるなよ!!」

「分かってるわよ!!」

そして、飛んでくる魔法をマルクは障壁で防いだり相手を眠らせるなどして何とか二人に食らいつくように敵を無力化していく。

「きひひっ！その猫戦闘出来ねえみたいだなア!!」

やはり、狙われるシャルル。しかしそんなことを分かりきっているマルクはシャルルに障壁を張って攻撃が当たらないようにしていた。

「……マルク……」

シャルルは自分が今足でまといになっていること、そして今頃ウエンディがどうなっているかが気になっているせいで、不安になっていた。

拠点の場所を探す……その為に、その情報をこいつらを倒すことで手に入れようとしている。

「すまんシャルル！羽！あった方が楽だ!!」

「しょうがないわね……私が傷つかないようになさいよ!!」

「分かってる!!」

そうして、4人はウエンデイとハッピーのいるであろう六魔将軍の拠点を探し出すために、闇ギルドの一つを叩き潰すために全力を尽くすのであった。

突撃

「だはーっ……!!」

「ぶはーっ……!!」

「げほっ、げほっ……」

森の中で息が切らしているナツ、グレイ、マルク。その周りには大量の人が倒れていた。

闇ギルド裸ネイキツドマミーの包帯男そのものを三人で相手して、それら全てを殴り倒していったからだ。

そして、中核であろう2人が思いのほか強く、ナツとグレイは既に若干ボロボロになっていた。マルクは二人が相手している間に残りすべてのメンバーを相手していたせいで体力と魔力をかなり消費していた。

「何だよ、コイツら雑魚じゃなかったのかよ……!!」

「意外とやるじゃねえか……!!」

「当たり前じゃない! 相手はギルド一つなのよ!?! 何考えてんのよあんな達!」

途中までマルクの移動役として翼エーラを使っていたシャルル。しかし途中で、流石に魔力を消費しすぎてしまうかもしれないと考えて、マルクが途中から翼を使わせないようにしていたのだ。

「オイ! ギゃほザル! お前らのアジトはどこだ!!」

「ぎゃんっ! 言うかバーカ! ギゃほほ!!」

答えない奴は必要ない、と言わんばかりにナツはアフロの男を殴って気絶させる。

そして、もう一人の方へと掴みかかっていた。

「オイ! デカザル!!」

「本当めちやくちやねあんな達……」

「西の廃村……？そんな所に構えてたのか。」

「よっし!!行くぞ皆!!」

「何であんたが仕切っているのよ!」

ウエンディとハッピーがいるであろう場所の情報を手に入れたナツ達。そのまま四人全員がその場所に向かって走っていく。

「……マルク、あんた何怖がってるのよ。」

「……怖がってるって、何がだよ？俺が闇ギルドと戦ってビビったって言いたいのか?」

途中、シャルルがマルクにこっそりと話しかける。マルクはウエンディが何かされてないかという心配に加えて、先ほどの戦いの疲労が蓄積していた。

「違うわ。今回の作戦……ニルヴァーナって魔法がどんなのが分からないけど、少なくとも地面や木々に何かしらの影響を与える物だっ
て言うことはわかったわ。」

あんたの滅竜魔導士としての力が変な反応示さないか気になってるんじゃないの?ウエンディが空気が悪いところでは魔法が使えないのと同じように。」

「……それは——」

「ここか!?ハッピー!!ウエンディー!!」

応えようとした矢先、西の廃村に到着したらしく声を出すナツ。それに焦ってシャルルが注意する。

「ちよつと!?!敵がいるかもしれないのよ!またあんなワラワラと出てきたらどうするのよ!!」

ナツの声でうやむやになってしまったが、マルクはシャルルの先程言った事に対しての答えは『Yes』であった。

だが、それを口に出すと余計に不安になりそうで、何かポロポロ

と崩れそうでしょうがなかったのだ。

だが、そうやって考えていると目の前から何かが高速で近づいてくる気配がした。

「っ！何か来ます!!」

しかしそれを注意した頃には既に4人は弾き飛ばされていた。視認することの出来ないほどの高速の何かが、攻撃してきたのだ。

「またアイツだ!!」

「アイツ!？」

「んなこと後でナツから聞いとけ!!ここは任せて早く下に行けナツ!!」

「おし!!」

「……行かせるかよ。おっ!?ぎゃっ!!」

目の前にいた男、六魔^{オラシオンセイブ}將軍の一角、レーサーが走り出そうと瞬間、いつの間にか凍っていた木に気づかず足に足を滑らせて地面へと落下する。その隙を見計らってナツはシャルルとマルクと一緒に行くこうとするが――

「シャルル！今だ!!羽！あっ!!」

しかしシャルルは先程のレーサーの一撃で伸びていた。

「しゃーねえ！これで行ってこい!!」

そう言っつてグレイが氷の滑り台を作り出す。ナツはシャルルを抱えて、マルクはそのまま飛び乗って勢いよく滑り落ちていく。

乗る直前で目が覚めたのか、シャルルの悲鳴がよく響いていた。

「ナアーツー……!!」

「ハッピー!」

「あの中よ!!」

村に降り立った三人。探し始めた矢先にハッピーのナツを呼ぶ声が響き、三人は廃村にあった洞窟の中へと入っていく。そしてその中には五人の姿があった。

「な、なんだ……これ……」

「そんな……」

一人はウエンデイ、一人は六魔將軍の一角ミッドナイト。

「ごめんなさい……私……!」

そして六魔將軍のブレイン……そして――

「ジェラール……!」

「ごめん、なさ……うえつ、うえつ……!この人は私の恩人、な、の……!」

泣き始めるウエンデイ。状況的に蘇らせてはいけない人物、ということが理解出来たマルク。

しかしマルクは簡単には動けない。ウエンデイの前にジェラールという人物と六魔將軍のブレインが立ち塞がっていたからだ。

「ん……?ウエンデイ、まさか治癒の魔法を使ったのか……!?!」

「何やってんのよ!その力を無闇に使ったら……!」

突如ウエンデイは、意識を失う。それは相手を回復させる治癒魔法の、代償とも言える事であった。

「な、なんでお前がこんなところに……!!」

歯を食いしばるナツ。拳を握りしめ、その拳に炎を宿して明らかに怨敵を見つけたとも取れる状態であった。

「――ジェラアアアアル!!」

そして、そのジェラールと呼ばれた男は突撃してくるナツに対して手のひらを向ける。

それに対して何か嫌なものを感じたマルクはナツより早く前に飛び出る。そして、マルクはナツを突き飛ばして自分との距離を開けさせる。

直後、ジェラールから大量の魔力が放たれてナツとマルクを飲み込む……かと思われたが――

「あぐ……んぐつ……ふはあ……!」

「……ほう?今ジェラルルの魔法を食べたのか?意外だな、もう一人滅竜魔導士がいるとは。」

にしてもあれだけの魔力を食べ切るとはな……」

「……隠してた、ただだ。」

「……お前も滅竜魔導士だったのか……」

ブレインとナツがすっすっだけ驚いている中、そのまま追撃するかと思われたジェラールがブレインの方を向いて……魔法を使う。

「何っ!?ぐおあああっ!!」

床が崩れ、ブレインは落下していった。それを見終える前に、ジェラールは再び視線を変えて出入り口を目指して歩き始める。

弱いものには手を出さない、と言わんばかりに気絶しているウェンデイ、ハッピー、シャルルを無視して出入り口へと歩いていった。

「……クソっ!!アイツ手当たり次第に攻撃しやがって!!何がしたいんだよ!!ぶっ飛ばして……!」

「止めてくださいよ……いきなり攻撃しかけてきているのは本当ですけど、流石に今は目的が別なんですから。」

今すぐにもジェラールに殴りかかると言わんばかりに暴れるナツ。気分が悪そうにしながらもナツが暴れ出さないように押さえつけていた。

「マルクの言う通りよ、今はウェンデイを連れて帰ることの方が重要でしょ……エルザを助けたいんでしょ!!」

「……っ!!分かってんよ!!あいつ……行くぞハッピー!!」

「あいさ!!」

「……シャルルは、ウェンデイを連れて行ってくれ。俺は自力で這い上がる……!」

「……そうさせてもらうわ。頑張つて戻ってきなさいよね。」

「うん、分かってるさ……!」

そしてシャルルはウェンデイを、ハッピーはナツを抱えて魔法で飛

び去っていく。

それのあとを追うかのように、マルクは洞窟を出る。

廃村はまるで円柱状にくり抜かれたかのような場所に作られていて、周りは崖しかない。しかし、グレイが作ってくれた氷の滑り台はある。

「……ブレスで、逆に登れないかな。」

滑るのを利用して、滅竜魔法の一つであるブレスの勢いを利用して、氷の足場を滑って登ろうとマルクは考えていた。

先程までいた洞窟を少しだけ見て、アレでブレインが倒せていれば……という考えが起きたが、正直あの攻撃でもブレインを倒すには足りないだろう……とも思っていた。

「考えててもしようがないか。んじや早速……『魔龍の……咆哮』!!」

飛び乗った瞬間に魔法を使い、氷の滑り台を逆に登っていくマルク。この付近で戦っていたレーサーとグレイは少しだけ移動していたのか、戦闘音は聞こえど姿は見えず……という状態だった。

「……グレイさんと一緒に戦うべき……だな。あの有名な妖精の尻尾フエアリーテイルと言っても、あの速度は中々キツイだろうし……足でまといにならないんだったら……やらないといけない。」

そう言っつてマルクは戦闘音のする方へと走っていくのだった。

「——デッドG P……開幕!!」

グレイのいる場所に追いついたマルク。しかし、レーサーが魔導二

輪を大量に呼び出している場面に出くわした。

「うわっ!？」

大量の魔導二輪はグレイを弾き飛ばし、レーザーがそれに乗ってどこかへと走り去っていく。

グレイも咄嗟に乗り込んでそのままレーザーとともに去ってしまった。

「……流石に、魔導二輪を動かすのは無理だ……くそっ……って、補助しかできない奴が何かを手伝うのも、難しいのか……?」

仕方ない、ナツさん達の所に行くか……飛んでいった方角は……あっちだな。」

魔導二輪に乗っていったグレイ達には追いつかないと判断して、ナツ達を追い始めるマルク。しかし、自分がなんの役にもたつてない事を少しだけ口惜しく感じながらもそのあとを追いはじめる。

「……あれは……」

途中、マルクは集団を見かけた。明らかに自分達の連合軍には居なかった面子。恐らくは闇ギルド、六魔將軍の傘下のギルドであろうと予測をつけた。

そして、その集団は何やら大急ぎでどこかへと向かって走っていた。その方向は自分と同じ方角、つまりウエンディ達がいる方向だという答えにマルクはすぐに辿り着く。

ならば……通すわけには行かない。そう考えたマルクはそのまま先回りして闇ギルドの進行方向に立ち、ほぼ不意打ちで魔法を唱え

る。

「人数が多いから……こうだ！すいかしじゅうのそう睡下四重ノ奏！」

その場にいた大半の闇ギルドの面々は、とっさの事で反応が追いつかず寝てしまった。

だが、その中の数人だけは魔法の効果範囲に入りながらも眠ることはなかった。

「……睡眠魔法、なるほどなるほど。なら俺らにやあ効くこたアねえぜ。ガキんちよ。」

「なっ……」

ブラックナイト・ブラックナイト

「闇ギルド闇夜の黒騎士……相手を眠らせる魔法が得意なヤツらばかりのギルドさ。」

んでもって、そのうちの1割は睡眠魔法の解除と無効化ができる……自分達の使う得意魔法の対処法は学んでおくべきだろ。

「じゃないと自分たちが眠らされた時に困るからなあ？」

マルクの戦闘スタイルは相手を眠らせることによる戦闘行為の無力化。しかしそれが使えないとなると、最早マルクには滅竜魔法しか残っていないのだ。

「どうやら相手を倒す魔法は持ち合わせちやあいねえみたいだな……やるぞてめえらア!!六魔將軍に褒美をもらうのは俺達だア!!」

そして眠らせた者達が軒並み起こされてしまい、窮地に立たされるマルク。

使える魔法が防御系統のそれしかないマルクは逃げ回るしかなかった。たとえ敵と言えども、滅竜魔法を使わない方を選んでしまったのだ。

そしてその内、体力が切れてきてマルクは逃げ回ることすらも出来なくなってきた。

「げへへ、追いついたぜ。」

さて、てめえ人質に取ってあいつらが手だしできないようにしねえといけねえなあ。」

「そういあやあよ、正規ギルド連合軍の中には女いるらしいぜ女。さつきちらつと見えた空飛んでたガキとかよ。」

「っ！」

闇ギルド達の言葉にマルクが反応する。空を飛べるのはシャルルとハッピーだけ、そしてその二人に関係するのはナツとウエンディである。

「あのガキとか妖精の尻尾の奴ら売ればいくらになるんだろなあ。」

「……おい、今なんて言った？」

「……あ？ぐぼっ!？」

マルクは、男の一人を殴り飛ばした。飛ばされた男は近くの木にぶつかり、気絶した。

「……ウエンディに手を出す奴らは、たとえ誰であろうと……潰す!!」

「何だこいつ……急にやる気出しやがって……」

構える闇ギルドの面々、怒るマルク。今この場で、恐らく初めてマルクの本気が垣間見れるだろう……

過去

「……魔龍の咆哮!!」

「ぐうぐう!!」

闇ギルドの者達を滅竜魔法で倒し、戦い続けるマルク。ウエンディに手を出す、と言った彼らに対してマルクは一切の情けをかけるつもりはなかった。

敵を薙ぎ倒しながらも、逆上している中で冷静な思考回路。その冷静な部分でマルクは思い出していた。

自分が滅竜魔法を恐れて使わなくなった理由を。

「魔龍の、逆鱗!!」

「ぎゃああああ!!」

敵を薙ぎ倒していきながら、マルクは一心不乱に戦い続ける。魔力を刃のようにしたものを腕にまとわせながら、敵を切り裂いていく。血を出す敵を見ながらあの日のことを思い出す。彼に取って力はトラウマだった。

「何かを破壊するしか!無いのなら!!」

しかし、守りたいと無意識に願ったもの。ウエンディを守るためならば彼は鬼にでも悪魔にでもなるつもりだった。

「な、なんだこいつ!? バカみてえにつええ!! なんだよ! 補助の魔法しか使わないんじゃないやなかったのかのこいつは!!」

ドラゴンスレイヤー
滅竜魔導士なんて話聞いてねえぞ!!」

「な、何でだ! なんて魔法も効かねえ!? 当たってんのに! 当たってんのに!!」

「……俺は、相手の魔法を食らう。食えない魔法こそあるが……無力化することくらいなら出来る。」

俺の魔力は独特でな……一定の魔力量の魔法なら……効かないんだよ。俺に攻撃通したいなら……もつと魔力が多いやつを連れてくるんだな……!」

「こ、攻撃魔法が通じねえんじや勝てるわけねえだろ!! こんな化け物に勝てるわけねえ!!」

そう言つてバラけるように散つていく闇ギルドのメンバー達。それを見ながら、マルクはその場に座りこんだ。

手には、まだ殴つた後の感触が残っていた。浴びた血の生々しさも残っていた。

「……はあ、はあ……くそ、まだ思い出したくねえのに……」

マルクは必死に、浮上しかかった記憶を頭の中から消そうとする。しかし、それを理性で抑えるのは少し難しいものがあつたのだつた。

約六年前。

七年前に育ててくれたドラゴンが居なくなつたマルクが行き着いたギルド、ケットンエルター化猫の宿。

そこにやってきて約一年が経過した頃の話。

「おじさん達なにしてんの？」

まだ8歳であつたマルクは森の中を散歩するのが日課だつた。それまで人の悪意に晒されたことがなく、その時も何故自分達のギルドの周りに見知らぬ人間がいるのか不思議でしようがなかつた。

「お……こんなところにガキがいやがるぜ……適当な動物捕まえて売りさばくつもりだつたが……こりゃあ人身売買の方でも収穫がありそうだな。」

「だな、俺達もツイているぜ……何でこんなところにガキがいるか分からねえが、こいつの親に見つからない内にズラかろうぜ。」

大人の男二人。その二人が話し合つている中で、マルクは二人の後ろにある大量の動物の死体を見つけた。

小さいながらも、それがいいことだとは思っていないかった。当時はそれが悪質な密売の為の動物達だった事は知らなかったが、いいことではない以上、未だ小さいながらの正義感を振りかざそうとしているマルクがそこにはいた。

「悪い事しちゃいけないんだぞ!!」

「ガキがなんか言ってるぜ。」

「関係ねえよ、眠らせて連れていくとしようぜ。」

そう言つて、男は杖を向けてマルクに魔法をかけようとする。しかし、一向に眠らない。

不思議に思つた男がさらに強めに魔法を使う。しかし眠らない。

「……な、なんで魔法が効かねえ!?これ特注で買った高級品だぞ!」

「へへ……俺に魔法は効かねえよ!!魔龍の碎牙!」

そう言つてマルクは男に向けて魔法を放つ。だが、小さいながらも理解していなかった。

男は魔導士ではなかったのだ。魔法こそ使うが、それはあくまでもマジックアイテムによる魔法。男本人の魔法ではないのだ。

故に、マルクはただの人間に魔法をぶつけたようなものだった。

「ごぼっ……!?!」

「ひ、ひいいいい!?!」

今まで魔法で動物を攻撃したことはあつた。しかし、森の動物達が人間より頑丈なのは当たり前である。

そのせいで、いつもの本気でマルクは魔法を放つていた。そして男の吐いた血をマルクは浴びていた。

「え……?」

攻撃を受けた男はそのまま倒れた。動かなくなったのだ。幼いマルクでも、自分が何をしたのかよく理解出来ていた。

魔導士であつても、直撃の魔法を食らつてしまったらただじゃあ済まない。それが魔導士ではなく、魔法に特に耐性のない、戦闘なれしていない人間に使つてしまつていたのだ。

「あ……あ……!」

その事が頭に残っていた。こびり付いていた。使う度に脳裏によ

ぎって傷痕を深くする。

それでも誰かを守るためなら、と。自分の大切なものに手を出す敵を倒す為なら、と。トラウマをかざし続ける。

「はあー……はあー……」

倒れる闇ギルド。全滅を確認した頃に、ようやくマルクの頭がスツキリし始める。

そして脳裏に、その日の全てが思い出される。血の匂い、血の味、血の生温かさ。相手を殺してしまったのだという恐怖心と罪悪感。

「……なんで、なんでこんなに……いつもならまだ、不鮮明なのに……何だ、あれ……」

記憶に困惑するマルクの目に映る巨大な黒い光。それが天に向かって伸びているのがしつかりと目に焼き付いていた。そして、それがとんでもない魔力だと言うのも同時に感じ取っていた。

誰かの魔法かあるいは――

「……ニル、ヴァーナ……!?!」

誰かの魔法にしても、今感じているとてつもない魔力を10秒以上出せる魔導士はいないとマルクは知っている。

そんなことは、聖十大魔道であるジュラでさえも不可能だろうと言う事だけは理解していた。

「ニルヴァーナがどんな魔法なのか……俺には分からないが……行くしかない、か……」

マルクはニルヴァーナとおぼしきものへと向かっていく。震える

体に鞭を打ち、未だ鮮明に蘇る記憶を思い出さないように一心不乱に走り出す。

しばらく走っている内に嗅いだことのある臭いがしてきていることに、マルクは気がついた。

「……ジュラさん!?!」

「おお、マルク殿か。無事で何よりだ。」

そう、ジュラである。そしてもう一人、ジュラ以外にもそこにはとある人物が立っていた。

マルクは最初、それが誰かはわからなかった。だがすぐに記憶の中にあつた一人の人相と一致した。

「つて何で六魔^{オラシオンセイブス}将軍のホットアイが此処に!!」

「やはり……こういう反応ですよネ。」

「ま、待てマルク殿。彼がここにいる理由も含めて……あの立ち上る光、ニルヴァーナの事について話そう。」

それが、今この現状を語るには一番いい説明となる。」

ニルヴァーナ、光と闇を入れ替える超魔法。

それを発現させるだけで周りにいる善と悪で揺れ動くものを強制的に反転させる魔法。

『本当は悪いことなんじゃないのか?』と考える善のものは悪となり、『誰かを守りたい』と考える悪のものは善となる。

負の感情によって悪になり、善の感情で善となる。ニルヴァーナはそれを制御することが出来る魔法。

六魔將軍のホットアイは弟の為に金を欲していたが、心のどこかで罪悪感を感じており、それがニルヴァーナの手によつて善へと引き戻された。

だが、ブレインはそれとは逆。善の者を悪に……正規ギルドを全て悪の道に落とす事で壊滅させようというのだ。

「……光と、闇に……」

「貴方は滅竜魔導士とジユラから聞きましたヨ、それもかなり特殊な。たとえ魔法が効かない体質だとしても……恐らく何かしらの影響が出るかも知れませんか……気をつけて下さいネ。」

「何かしらの、影響……」

いつもなら不鮮明で終わるはずのあの日の出来事。やたら鮮明に思い出せてしまったのはそういう事なのだろうか、とマルクは思った。

そして、ニルヴァーナを止めるためにマルクはジユラ達と一緒に光の柱へと向かっていった。

「……けど、既に発動したもんなんで一体全体どうやって止める気なんでしょうか？あれだけの超魔法……壊せば解決する、ということも無いでしょうし。」

「ここから見えるのは光の柱だけ……ならば根元になにかあつてもおかしく無いでしょうネ。」

もしブレインが発動しているならブレインを倒し、何かしらの装置であるなら、ありつたけの魔力を使って破壊してでも止めるべきなのですヨ。」

「装置か……光と闇を入れ替える魔法……誰がいったいそんなものを作ったのやら……」

「今話していてもしようがないだろう。」

一刻も早く、ニルヴァーナの元へと向かわなければな。」

ジユラのその言葉に二人は頷いてニルヴァーナの元へと走っていく。

そして、走り続ける中マルクはニルヴァーナのことも気になつていますが、それ以上に、ウエンデイが今どこにいて何をしているのか、無

事なのか……色々と気になって仕方がなかった。

しばらく走って。魔力の柱が黒色から白に変わってもなお走り続けて、だいぶ近づいてきたかと思っていたその時の事であった。

地面が揺れて、三人は何事かと足を止めた。

「な、なんだこれは!？」

「こ、この揺れ……ただの地震じゃないですネ……!」

「何か、来る!」

そして、光の柱から巨大な街のようなものが現れる。全員が目を疑った。そして現れたものに付属している『足』が地面の中から現れる。

ジユラ達3人の足元にもそれがあつたらしく、全員投げ出されないようにつかまるだけで必死だった。

「捕まっついて下さいデス!」

「うむ!」

「はい!」

超魔法ニルヴァーナ、その力の根源、装置の役割を果たしていたのは巨大な歩く装置であった。

三人は、足を伝ってニルヴァーナの中心……まるでどこかの街並みのような場所に向かっていった。

「……なんだ(こ)は?」

「街みたいね……」

「その通りデスネ。幻想都市ニルヴァーナ。」

「そなた達もここにいたとは心強い。」

そして、街に入った3人がしばらく歩いていると、フェアリーテイル妖精の尻尾のルーシイとグレイが居た。

だが、やはりホットアイの存在が悪目立ちしたらしく――

「リオンの所のオツサン！」

「それに化猫の宿のマルク！」

「……と六魔将軍!?ええ!?!」

「まあ、普通驚きますよね……この人には。」

「案ずるな、彼は味方になった。」

「世の中愛デスネ。」

「うっそお!?!」

「あのオツサン悟りの魔法でも使えんのか!?!」

確かに、『金が大事』と言っていた男がいきなり愛に目覚めて味方になっていく事なんてそうそうあるものでもないだろう。

ある意味では、逆にそれがニルヴァーナの凄まじさを物語っていたのかもしれないが。

そして、話の腰を戻すかのようにホットアイはこの街の話をし始める。

「ここはかつて古代人ニルビット族が住んでいた都市デス。今から400年前、世界中で沢山の戦争がありました。」

中立を守っていたニルビット族はそんな世界を嘆き、世界のバランスをとるための魔法を作り出したのデス。光と闇を入れ替える超魔法。その魔法には、平和の国ニルヴァーナの名が付けられました、デスネ。」

ホットアイが話したその内容に、各人各様の反応をする。だが、マルクだけは街並みの隙間から見える景色で、向いている太陽の方角で、何か嫌な予感がし始めていた。

「皮肉なもんだな……平和の名を持つニルヴァーナが今、邪悪な目的のために使われようとしているなんてよオ……」

「でも、最初から『光を闇に』する要素なんて付けなきゃいい魔法だっ

たのにな。」

「仕方あるまい……古代人達もそこまで計算していなかったのかもしれん。強い魔法には強い副作用があるものだしな。」

三人の話が頭に入ってこなかった。心臓が高鳴り、息が荒くなり始める。

気づけばマルクは走り出していた。

「つて!?!ちよつとどこ行くのよ!!」

四人が追いかけてしようとしたその瞬間、背後に現れる人影。それは六魔将軍が一人、ミッドナイトだった。

「ホットアイ……父上を裏切ったのかい？」

「違いマスネー！ブレインは間違っていると気が付いたのデス!!」

ミッドナイトは乗っていた建物から一旦降りて、ホットアイを睨みつける。

「父上が間違っている……だと？」

「人々の心は魔法でねじ曲げるものではないのデス。弱き心も、私達は強く育てられるのデスヨ。」

その言葉に対してミッドナイトが行った返答は、『魔法での攻撃』であった。

ミッドナイトが振るった腕の直線状にあったものが全て切れていた。

だが間一髪、ホットアイが地面を陥没させたことでグレイ達は助かっていた。

「ジュラー！早く行くデスネ！彼のことも心配ですが……恐らくニルヴァーナは中央の王の間にいるブレインが動かしているはずデスネ!!」

……そして、私の本当の名前はリチャード、デスネ。」

「敵に真の名を明かすとは……本当に堕ちたんだねホットアイ。」

そして六魔同士の戦いが、今ここに始まったのだった。

その頃、一人走っていったマルクは、景色が良く見えるところ……
即ち高い塔の上部などに登って確信していた。
「この、方向……化猫の宿がある方角……なんで、なんで化猫の宿が狙
われるんだ!!」

魔食

マルクは走っていた。ニルヴァーナの街の一番真ん中に位置する場所へと向かって。

そこで誰かが戦っている音が聞こえたからだ。正確には真ん中近くだが、それが空を飛んでいるのも確認できた。滅竜魔導士の聴覚で、誰が戦っているのかもすぐに分かった。

ナツである。ナツが、コブラと戦っているのだ。

ナツならば、コブラが相手でもなんとかなるかもしれない…とそう感じたマルクはコブラを任せて中央へと向かう。

「ニルヴァーナを操るとして…それが化猫の宿ケットシエルターに向かって…ああもう頭ん中ぐちゃぐちゃだ!!

けど、きつというはずだ…わざわざナツさんがあそこに行つたつて事は…多分、コブラだけじゃなくて誰か他にいたんだ…」

残っている六魔將軍オランオンセイヌはホットアイ、ミッドナイト、コブラにブレイン。

ホットアイはこちらの味方なので実質残り三人と言うことになる。そして恐らくはブレインが中央の塔にいるはずだ、とマルクは考えていた。

「!!」
突如聞こえる怒号。竜が叫んだかのような声、誰の声かはすぐに分かった。ナツだ。

コブラを倒したのか、はたまたまだ倒れていないのか…マルクには判別はつかなかったが、聞こえた向きはかなり中央の塔に近い場所だったので、ナツと合流するのをついでとしてマルクは走っていくのだった。

「……む？貴様は……」

「ナツさん!」

マルクが着いた時には、既にその場所にはブレインと何故かとても体調が悪そうなナツがいた。

ブレインが何かしたのかと考えたマルクだったが、考えるよりも早くナツの所へと向かっていつていた。

「ふん……滅竜魔導士か……自分に合った属性のものを喰らい、それを自らの力とする魔導士。
ダークロンド
常闇回旋曲。」

だが、ブレインは冷静に魔法をマルクに向ける。まるで何かを試すかのように。

「この男……ナツ・ドラグニルは炎やそれに準ずるものを喰らい自分の力とする炎の滅竜魔導士。」

そしてコブラは毒を喰らい自らの力とする第二世代の滅竜魔導士……」

対するマルクも魔法を避けて、時折少しだけ魔法を食らいつついて攻撃が当たらないようにしていきながら、ナツの元へと向かう。

「だが……貴様が食らうのはなんだ？」

「ナツさん！しっかりしてください!!」

即座にナツの襟を掴んでブレインから離れようとする。ブレインはそんな隙を見逃してなるものか、と言わんばかりに間髪入れずに魔法を唱えていく。

「ダークカブリチオ常闇奇想曲……特定の属性があるというのならば、この二つを食うということはそのれに準ずる属性の滅竜魔導士……だと普通は考える。これだけを見ればな。」

飛んでくる魔法、明らかに当たるのはまずい類いのものだと感じ取ったマルクは、ナツを地面に投げ捨ててなんとか回避行動を行う。

「だが、明らかに属性の違うものも食べている。そうだ、貴様はジェ
ラールの魔法を……食っていた。」

滅竜魔導士とは思えない異質さ。だが、少し考えた……そもそも滅
竜魔導士という魔導士そのものが規格外のものなのだ。」

「……何が、言いたい？」

「貴様は……魔法そのものを食らう。無論、全てを食らえるというの
なら未恐ろしいものだが……おそらくは食えない魔法もあるのだろ
う。」

何かしらの制約があると見た。」

「……」

マルクはそれに答えずに、ブレインを睨みながらナツを担ぐ。わざ
わざ敵に情報を与えるほど、馬鹿ではないということだ。

「まあ答えることはないだろうな……しかし……これからその答えを
試せばいいだけだ!!常闇回旋曲!!」

再びマルクに襲いかかるブレインの魔法。ナツを抱えたままでは
避けきれないと判断したのか、倒れているナツの目の前に立って、ブ
レインの魔法に齧り付いた。

「んがっ……あぐッ……もがっ、もご……!」

「ほう、大した食欲だ。しかし、これだけの魔力……果たして貴様の腹
に入りきるかな?」

「んがっ……うぐっ……!」

徐々に顔色を悪くしていくマルク。ブレインはそんなマルクの様
子を見てニヤリと笑みを浮かべていた。

自分の考えが、確信に変わったとも言わんばかりに。

「ふはははーやはりな!貴様は魔法を食うことだけは出来るが、器が
未だ出来上がっておらんのだ!!食いすぎれば、食あたりを起こしたか
のようにそうやって倒れるのだ!」

「んぐあ……!」

膝をついてしまうマルク。しかしそれでも尚ブレインの魔法を食
べ続ける。一瞬でも気を抜けばナツが巻き込まれてしまうからだ。

「しかし……先程から食べてばかりで滅竜魔法を一切使おうとしない

な。何故使わない？貴様の滅竜魔法は、こちらの魔法を吸収できる性質だろう。

「使えば有利に戦えるかもしれないぞ？」

マルクは一心不乱に食べ続ける。答えてしまえば終わり、気を抜いたら終わりというその状況はマルクにとつてかなり危険なものであり、何を言われても、答えるわけにはいかなかったからだ。

「ふん……大方、小さい頃にも魔法で人を殺めてしまったのだろうか？小さい頃から、そのレベルになるまでの魔法を使えるものはかなり少ないが……しかし、その少数の者達の中のさらに一部に、そういう者達はいる。」

死ぬとは思わなかった……殺すつもりじゃなかった……とな。」

「っ!!」

「そういう者達は魔法にトラウマを持つ。自殺を選ぶか、はたまた魔法の必要としない場所に住み、職業も魔法を使わなくともいいところに行くか……だが、ニルヴァーナはそんな者達の心のトラウマを抉り、闇へと落とす！正規ギルドの潰し合いこそが目的だが、そうやって魔法を忌避したものにも影響を与え、血で血を洗う凄惨なものへと変わる!!」

光が潰れ闇が支配する！ニルヴァーナは、光を飲み込む!!」

『そんなことはさせない』とでも言うかのように、マルクはブレインを睨みつける。

だが、それでも……やる気だけでは足りないものもある、とでも言うかのように段々とマルクの体調は悪くなっていく。

「潰れる！光の者よ!!」

マルクは腕を突きそうになる……が、それをする前にブレインの魔法が途切れた。

見れば、マルクの周りは岩で囲まれていた。

「……大丈夫か、マルク殿。」

「ジュラ、さん……」

「……ナツ殿も、ネコ殿も……それにマルク殿も……体調が悪そうだな。」

「ナツさんと、ハッピーは……コブラと戦って、あいつ毒使うらしいですから、毒を食らって……多分、別々の場所に落ちてたから……ハッピーは無事で……俺は、ちよつと魔法を食いすぎて……吐きそうです……」

幸いにもマルクから離れていたそのお陰でブレインの攻撃を免れたハッピーを横目で見ながら、口に手を当てて魔力を吐き出さないようにしていた。

「うぼ、うぼぼ……」

「……それ以外にも理由がありそうだが。」

「あいつは乗り物に極端に弱いんだ。」

「早く、こいつ倒して……これ、止めてくれ……うぶ……」

「お前のためじゃねーけど、止めてやんよ。」

その言葉を聞いて、ブレインが意味深な笑みを浮かべる。馬鹿なことを言っているものを、嘲笑うかのように。

「止める？ニルヴァーナを？出来るものか……この都市はまもなく第一の目的地、化猫の宿に到達する。」

明かされる目的、マルクを除く全員が驚きの表情を浮かべる一方でマルクの内では、やはり、と言ったような確信と、自分たちのギルドが狙われたことへの怒りが混ざりあっていた。

「シャルル達のギルドだ……何で……？」

「目的を言え、何故マルク殿達のギルドを狙う。」

「超反転魔法は一瞬にして光のギルドを闇に染める。楽しみだ……地獄が見られるぞ。」

ジュラの質問には答えず、笑いながら目的だけを語るブレイン。しかし、ジュラから突然、ブレイン以上の魔力を感じた。

「聞こえなかつたか？目的を言え。」

「うぬのような雑魚に語る言葉は無い！われは光と闇の審判なり、ひれ伏せえ!!」

「困った男だ……まともに会話もできんとはな。」

淡々と話し続けるジュラ。だが、ブレインを除いて、この場の全員がジュラに対して少しの恐怖を感じていた。

淡々と話し続けるからこそ、今のジユラからはある一つの感情だけをひしひしと感じることができからだ。

「消え失せろ蛆虫共が!!」

ジユラがブレインに手を向けると……瞬間、ブレインが吹き飛んでいた。周りの建物を破壊しながら、ブレインは吹っ飛んでいく。

それに、全員が驚いていた。

「……な、なんだこの魔力は……!?!」

「立て。化猫の宿を狙う理由を吐くまでは寝かさんぞ。」

「も、もしかしてこのオツサン……」

「滅茶苦茶強い……!?!」

「これが、聖十の魔導士の力……!?!」

「……なるほどな、少々驚いたが……聖十の称号は伊達ではないということか。」

自身も驚いていたが、すぐに冷静さを取り戻すブレイン。そのまま立ち上がってジユラを見据える。

「化猫の宿より近いギルドはいくらでもある。わざわざそこを狙うからには特別な目的があるのだろうか?」

「これから死ぬ者が知る必要はなからう……常闇回旋曲。」

「……岩鉄壁!」

闇の塊とでもいふべき魔力が、ジユラに襲いかかる。しかし、ジユラは冷静に、魔法を見据えて同じく自身の魔法をぶつける。

「かかったな!常闇奇想曲!」

目の前の魔法は囷。ブレインはすぐに後ろに回ってジユラに向けて魔法を放つ。

しかし、ジユラはそれさえも読んでいたかのように、目の前に出した壁を後ろにまで曲げて防ごうとする。

「岩が曲がった!?!」

「馬鹿め!常闇奇想曲は貫通性の魔法!その岩ごと粉碎してくれるわア!!」

「ふん!」

ジユラは貫通された岩を、瞬時にまた曲げて地面に常闇奇想曲の接

ないだろう、敵の頭目が傷だらけで倒れているなんて普通は驚くものだ。

「蛇使いも向こうで倒れてるしな。」

「じゃあ……」

「恐らくニルヴァーナを操っていたのはこのブレインよ、それが倒れたってことはこの都市も止まるってことでしょう？」

安心するウエンディ。しかし、シャルルの方は何か引つかかっているかのような、難しい顔をしていた。結局の所、いくつか謎が残ってしまっているからだ。

「……気に入らないわね、結局化猫の宿が狙われる理由は分からないの？」

「まあ深い意味はねえんじやねーの？」

「多少気になることはあるが……これで終わるのだ。」

ジユラが安心しきっているが、それどころではないとナツが態度で訴え始める。

「お、終わってねえよ……早く、これ止めてくれ……うぷ……！」

「ナツさん!?まさか毒に……それに、マルクも！」

「お、俺は……魔法の食べ過ぎだから……ナツさんとハッピーを治してやってくれ……」

「オスネコー!だらしないわよ!!」

「あい……」

ウエンディがナツとハッピーを治療している間、グレイ達は情報の整理をし直す。

「デカブツが言ってたな……制御しているのは王の間だとか。」

「あれか!？」

「あそこに行けばニルヴァーナを止められるかも……」

「は、早く行きましょう……！」

「あんたは……休んでなさいよ……」

魔力の食べすぎでふらついているマルク。ルーシイに軽く止められてたが、結局全員で王の間に向かうことになったのであった。

滅竜

「どうなってやがる…」

「何これ……」

王の間に辿り着いた面々。しかしそこは、床がぼろぼろになっていること以外に目立つものがなかった。

何も無かったのである。

「何一つそれらしきものがねえじゃねえか!!くそ、ブレインを倒せば止められるもんかと思っていたけど……」

「甘かった……止め方がわからないなんて……」

王の間に目立つものがない。それらしきものが無い以上、ニルヴァーナを止めることは不可能である。ブレインを倒して止まらないのならば……一体全体何で操縦しているのか、皆目見当がつかない状況になっていた。

「どうしよう……解毒の魔法をかけたのにナツさんが……」

そしてその傍らで、ウエンデイがナツの治療をしていたが、毒を抜いたにも関わらず未だに体調を悪くしているナツに困惑していた。

「ナツは乗り物に弱いんだよ。」

「情けないわね……」

「乗り物酔い? だったら……バランス感覚を養う魔法が効くかも……トロイア。」

ウエンデイがナツに魔法をかける。すると、見る見るうちにナツの顔色が良くなっていき――

「おお!!……う……!!……おおおおっ! 平気だっ! 平気だぞ!!」

トロイアをかけた直後はあまりにも実感がなかったのか、飛び起きたりその場で跳ねたりして自分が乗り物の上で動いている、ということを試し始めるナツ。

そこまでしてようやく、自分の乗り物酔いが治っていることに気付いたのだ。

「良かったです、効き目があつて。」

「すげえなウエンデイ! その魔法教えてくれ!!」

「天空魔法だし無理ですよ。」

「これ乗り物って実感ねーのがあれだな。よし！ルーシイ、船とか列車の星霊呼んでくれ!!」

「そんなの居ないわよ！てか今それどころじゃないの！空気読んでくれる!?!」

物凄くはしゃいでいるナツ。ウエンデイはそれを見て嬉しそうにしていたが、他の面々は苦笑していたりはしゃぐナツを諫めたりと、やはりそれどころではない、という反応だった。

「……乗り物酔いでほとんど話を聞いてなかったんですね……」

「あんたはウエンデイに魔法かけてもらわないの？食べすぎて言うけど……ないの？」

「いえ……そもそも俺、ウエンデイの回復魔法効かないんですよ……」
吐きそうになりながら柱に凭れるマルク。自分の体質に難儀している、というのが伝わったのか、ルーシイはマルクを見て苦笑していた。

「……止め方がわからねえんだ。見ての通りこの部屋には何もねえ。」
「でも制御するのはこの場所だってホット……リチャードが言ったし……」

「リチャード殿がウソをつくとも思えん。」

止まらないニルヴァーナに対してどうするべきか悩む面々。しかし、それを見て苛立っていたのか、シャルルが少し声を上げる。

「……止めるとかどうとか言う前に、もっと不自然なことに誰も気づかないわけ!?!」

操縦席はない、王の間には誰もいない、ブレインは倒れた……なの
に何でこいつはまだ動いているのかって事よ。」

「……まさか、自動操縦!?既にニルヴァーナまでセットされて……」
「つ……私達の、ギルドが……!」

「ウエンデイ……」

『化猫の宿がニルヴァーナによって潰されるかもしれない』という状況が段々と現実味を帯びてくる事に、ウエンデイは悲しさと悔しさの入り混じった涙を流す。

「大丈夫だ、ギルドはやらせねえ……この礼をさせてくれ。必ず止めてやる……！」

「でも……止めるって言っても、どうやって止めたらいいのかわかんないんだよ？」

「……壊すとか。」

「またそーゆー考え？」

「こんなでけえ物を、どうやってだよ。」

ナツは、少しだけ考えて提案をする。しかし、ニルヴァーナという一つの都市を載せた巨大な建造物をどうやって壊すのか、という疑問点が浮上し、結局ナツの案は却下されてしまった。

「やはり、ブレインに聞くのが早そうだな。」

「簡単に教えてくれるかしら……」

「……もしかして、ジェラールなら——」

ニルヴァーナの存在を知っていた『らしい』ジェラール。もしかしたら止め方も分かるのではないかとウエンディは提案しようと思っただが、ジェラールを復活させた直後のナツの反応などを思い出して、言葉を押しとどめた。

「……？何か言った？」

「ううん、何でもない……私、心当たりあるから探してきます!!」

「ウエンディ待ちなさい！」

「おい!？」

「ウエンディ……！」

ウエンディはジェラールを探しにその場から走って去る。シャルルもウエンディを追いかけられるようについて行き、マルクもそれに続いて走り去るのであった。

ウエンデイ達とはぐれたマルク。ウエンデイは、ジェラールを探すことに必死になっていったが故にシャルルに頼んで空から探し始めたのだ。故に、空を飛ぶ事が出来ないマルクだったが……

「……やばい、化猫の宿がもう目の前だ……くそ、どうしたら……」
巨大な魔法ニルヴァーナ。魔力の供給部分を潰すことが出来れば止まる、というのはマルクでも分かっていた。

だが、それがどこにあるかわからず、潰すことが出来ないでいた。それ以上に、ジェラールを探し始めたウエンデイを探すのにかなりの時間を取られてしまっていた。

空を見上げてても、ウエンデイ達らしき姿は見えない。シャルルの魔力が尽きたか何かで降りざるを得ない状況になったとマルクは考えていた。

「こんな目の前で……何も守れずに……役にも立たずに……！」
ふらつく自身の体に鞭を打ち、近くの建物を八つ当たり気味に殴るマルク。

戻ろうとした瞬間自身の背後……否、ほぼ真下からとんでもない魔力を感じていた。

「化猫の宿……目の前……ニルヴァーナ……魔力……発射する気か!?
クソ、クソ……！」

『ニルヴァーナが発射される』という状況が来てしまった。そんな状況を目の前にして自分は何も出来ないのかと思考するマルク。
ドラゴンスレイヤー
滅竜魔導士なのに何も出来ない。後悔や悔しきでグチャグチャになりかけていた、その時。

マルクは昔の事を……今まで忘れていたことを思い出していた。

「守る魔法？」

「そうじゃ。滅竜魔法は確かにドラゴンを倒す為のものだが……それ故に、ドラゴンの様に雄々しく華やかに振る舞わないといけねえ。」

七年前、まだマルクがドラゴンに育てられていた頃。その時の一部分の事を思いだしていた。

「それが守ることに繋がるの？よくわかんないんだけど。」

「いいか？お前さんはあつしの子だ。魔龍の滅竜魔導士は魔力を食らう。それは相手が魔法や魔力を使った攻撃をしてきた時、後ろにいるヤツらを守るための力だ。」

魔力さえ使えなければ後は殴り合いで解決させりゃあい、そういう腕力勝負に簡単に持つていける力だ。」

「守る……って具体的にどうすればいいのさ。俺はまだ弱いから誰も守れないかもしれないよ？」

「かーっ！お前さんは本当に消極的だなあ！いいか？よく聞いてけ。」

守りたいもんが見つかった時、それはお前さんが一人前の男になったって事だ。

俺が魔龍の滅竜魔導士に教えられることは、滅竜魔法以外では一つだけだ。

『潰そうと思うな、守りたい者を守るためだけに力を奮え』つつー事だ。」

目の前のドラゴンはマルクを指さしながらそう伝える。まだ幼かったマルクはそのことをよく理解していなかった。

「……あ、それともう一つあったわ。『黒い竜に会ったら潰せ』だな。」

「え!?今潰そうと思うなって言ったよね!?ていうか黒い竜って何!?色だけだといっぱいいるよねそれ!？」

「いやいや、『あ、こいつはやべえ』って言うのがいるんじゃないよ。目の前に来たら分かる。」

お前さんは、魔龍の滅竜魔導士として絶対にそいつを潰さにやあならん……キャラが被ってるから!!」

「相変わらずたまに何言ってるかわかんなくなるの止めて!!」

「……ふっ、そうだった。滅竜魔法はドラゴンを倒す力……けど、俺の滅竜魔法は誰かを守る力。」

どれだけ圧倒的な魔導士が相手でも……魔法そのものを吸収して無効化する力……そうだったよな、『イービラー』」

守る力。育ての親のドラゴンの名前を呟きながら、マルクは吸収した分を含めたほぼ全魔力を腕に集中させる。

「何がニルヴァーナだ、何が超反転魔法だ。そんなの俺の前では関係ない。俺の技は魔力そのものを食らう。」

どれだけ圧倒的な魔力を持つていようが関係ない、それが人間だろうがドラゴンだろうが……俺の前では全て同じ……なら、吸収してやるよ……食って食って喰らい尽くして……魔力をすっからかんにして相手を叩きのめす……それが俺の滅竜魔法……滅竜奥義だ……!」

時間がかかったかもしれない。体調が悪いことを理由に、何も出来ないで頭ごなしに否定していた自分をマルクは鼻で笑い飛ばす。

ウエンディは確かに大事な人だ。しかし化猫の宿のメンバーも皆マルクにとって大事な人だ。

ウエンディはやることをやろうとしていた、ならば自分もやるべき事をやるべきだと……そう考えた。

「全部吸収できるとは思ってないさ……だが、威力を削ぐことくらいは……俺でもできるよな!!」

そう言つてマルクはそこから身を投げる。丁度その瞬間、遠くにある飛行物体がマルクの目に止まる。

魔導爆撃艇『クリステイナー』ブルーベガサス青い天馬の所有する船。壊されたはずのその船が動いている……それは誰もまだ、諦めきれていないという事だった。

「皆が……頑張つてんだ、仕事の一つこなせないで……何がギルドメンバーだ!滅竜奥義——!!」

自分の魔力の全てをかける滅竜奥義。竜を滅す奥義。それを誰かを守るために奮う。守る為の力で守るための技を繰り出す。

溜め込んだ魔力を全て一つの巨大な塊にし、地面へと投げる。

魔力は地面で弾け、巨大な壁となつてニルヴァーナの発射口を遮るように現れる。

『紫電魔光壁』!!全魔力上乘せだア!!」

そして、発射されるニルヴァーナ。しかし屹立する魔力の壁は、ニルヴァーナを通さない。

マルクの魔力は魔法を食らう。属性関係なくそれを食らう。『紫電魔光壁』は相手の魔力全てをシャットダウンする滅竜奥義。

発車されたニルヴァーナは一切何も通すことなく、化猫の宿に傷を負わせることなく、その発射を終えた。

「へへ……ざまあみろ……!!」

その時、マルクの耳に声が聞こえてきた。この声は聞き覚えがあった。ブレインの声だ。

だが、喋り方やその声の荒らげ方から、別人だと判断出来た。何故同じ声の別人がいるのか、それはマルクにも分からない。

「……『ニルヴァーナを止めた奴は一体どこのどいつだ、俺の破壊を邪魔すんじゃないか……誰だけ知らねえけど……お前らのやることは止めてやったぜ……つてうおおお!!」

ニルヴァーナを止めるために、紫電魔光壁を発動させる為に、マルクは飛び降りていた。

空を飛ぶハッピーやシャルルのような相棒がマルクには居ない。つまり、今マルクは自由落下を始めていた。

「やばいやばい！流石にここから落ちたら死ぬ！冗談抜きで死ぬ！魔力がないからブレスも撃てない！後先考えてられない状況だったとはいえこれは流石に……あれ？」

自由落下しているはずなのに、よく良く考えたら落下している感覚がなくなっていたマルク。

一旦思考が落ち着いたせいか、マルクは誰かに抱えられていることに気づいた。

「全く……無茶と無謀を両方こなして……全部やり終えたか。良くやった。終わった後に撫でてやろう。」

「え、エルザさん……た、助かりました……」

助けてくれたのはエルザ・スカーレット。彼女の鎧の一つに滑空能力があるのか、高度を下げながら飛行して、ニルヴァーナの別の足に捕まっていた。

「本当によくやった……で、まだ動けそうか？」

「魔力は使い切りましたけど……まあ一応。」

何故かボロボロになりながら、そしてマルクを抱えながら高速で走っているエルザ。マルクが本当にエルザが人間なのかどうか疑ってしまいうくらいにはエルザは見た目だけなら満身創痍だった。

「そうか……動けるならいい。ヒビキからの念話、聞こえていたか？」
「……すみません俺念話届かないんです。魔力の性質が特異過ぎて……」

「む、そうなのか。ならば教えよう。」

まずニルヴァーナのそれぞれの足……それは大地から魔力を吸収しているパイプのような役割を果たしているらしい。

そして、その魔力供給を制御する魔水晶ラックリマがそれぞれの足の付け根にあるんだ。

それをすべて同時に破壊する……為に、今私は近くの足に向かって

いる。君を拾いに行けるのも、私だけだったからな。」

「そうだったんですか……」

「連れていってもいいが……ウエンデイがいる、彼女の近くにおいてやれ。君の方が彼女も安心するだろう。」

そう言つてマルクはゆっくりと下ろされた。マルクは黙つて手を掲げる。それにエルザはハイタッチして、そのまま走り去つていった。

そして、それを見届けたマルクはフラフラになりながらも、ウエンデイの微かな匂いをたどつて彼女の元へと向かうのであった。

終劇

「……このまま行くと、どうにも足の付け根部分に着いてしまう気がするんだけど、ウエンディは一体どこにいるのやら……」

ウエンディと合流するために彼女の足跡を追うマルク。しかし、匂いを辿っていく内に、段々とエルザの言っていた足の付け根部分に向かっていている事だけは理解出来た。

「ナツさん、グレイさん、ルーシイさん、エルザさん、一夜さん……そして、エルザさんが名前を覚えてくれなかった男が一人。

六本の足を同時に潰すために……それぞれが足に向かっていて、つてエルザさんは言ってたけど……その内の誰かの所にいるのか？それとも……自分で、壊しに……？」

ウエンディもまた、ドラゴンスレイヤー滅竜魔導士の一人である。だから何かしらの攻撃魔法を持っている事は当たり前といえれば当たり前だが、彼女が自主的に向かう事なんて滅多に無かったから内心驚いていた。

「……開けた場所に……ウエンディ!？」

「マルク！無事だったの!？」
魔水晶ラックリマのある部屋に辿り着いたマルク。そこにはウエンディとシャルルの二人しかいなかった。

やはり、マルクの予想通りウエンディが魔水晶を潰すために動いていた。

「エルザさんが助けしてくれたからな……にしても、さ。ウエンディ……大丈夫か？」

『大丈夫』という言葉が何を指しているのか、ウエンディも理解したように、言葉を詰まらせた。

だが、すぐに覚悟を決めた表情になり、無言で頷いた。

「……シャルル、何があつた？ウエンディがこんな……その、やる気を出すなんて……」

集中しているウエンディの邪魔にならないように、マルクはシャルルにウエンディのことを尋ねる。目を離していた短い間に一体何を決めたのか。

「……化猫ケットシエルターの宿を守る為、ってあの子は言ったわ。弱気なあの子が、随分頑張ってると思わない？」

「……ウエンデイも、やっぱり同じ気持ちだったんだよな。……滅竜魔法は誰かを守る力、か……」

「あら、その言葉は貴方の思いついた言葉かしら？ニルヴァーナをとめた滅竜魔導士さん。」

「……いいや、俺の親の受け売りさ。誰かを潰すためでなく、誰かを守る為に魔法を振るう。その為の滅竜魔法……やっぱりウエンデイは純粹だな。誰かを守るために力を発揮できるって……いいことだと思っうし。」

「それは貴方も同じじゃないかしら？誰かを倒すためには、滅竜魔法を使っっちゃいけなかつたんでしょ？」

今まで誰かに見せることすらしなかつたのに……随分目立ちたがり屋に変わったものね。」

お互いに笑いながらウエンデイを見守る。魔水晶を同時に壊す時間、それは刻一刻と迫っていた。

何かを守るために魔法を振るって、そして守りきる為に相手を無力化する。

「天を食らう竜……天空の滅竜魔導士か……」

「……天竜の咆哮……！」

そう言いながらウエンデイは空気を食べて魔力を充填する。強大な一撃を放つ為に。

そして貯めに貯めた魔力、その全てをウエンデイは一瞬で放つ。暴風、空気の渦は『竜』がとぐろを『巻』くかのように渦巻き、そして竜巻となってその規模を拡大させる。

そしていとも簡単に魔水晶は破壊され、その直後にニルヴァーナが轟音を鳴らし始めた。

「……私、やったの？」

「ああ……やったなウエンデイ。お前が止めたんだよ、ニルヴァーナを。そんでもって化猫の宿も守った……良くやった、なんて上から目線で言えたことじゃないけれど……それでも、ありがとう……！」

「きゃっ!?!」

嬉しさのあまりウエンディを抱きしめてしまうマルク。抱きしめられた本人は顔を少しだけ赤くしていたが、すぐにシャルルがマルクの頭を叩いて注意をする。

「イチヤイチヤしてないで、早く出るわよ!なんか崩壊しかけてるわ!!二人共こっちよ!!」

「あ、ああ!」

「ま、待ってよシャルル!!」

シャルルは走って出口まで先導し始める。その後をマルクとウエンディがついて行く。

魔水晶を失ったことで、その強大な建造物の重みに耐えられなくなったニルヴァーナ。つまりは自壊し始めて、瓦礫がそこら中に落ち始めていた。

「きゃっ!」

「ウエンディ!!」

しかし走っている最中で、ウエンディは瓦礫に躓き転んでしまう。咄嗟にマルクとシャルルが庇いに入るが……何かに支えられ、マルクは宙に浮かぶ感覚を覚えた。

「ジュラさん!」

ジュラが、ボロボロになりながらも三人を庇っていた。彼は3人に無言で笑みを向けた後、そのまま崩れゆくニルヴァーナ内を、時折降って来る瓦礫を魔法で防ぎながら駆け抜けていく。

「ニルヴァーナを壊したのは……ウエンディ殿か?」

「は、はい!」

「そうか……良くやってくれた二人共。マルク殿はニルヴァーナを防ぎ、ウエンディ殿はニルヴァーナを止めるために動いてくれた……せいでんだいまどう聖十大魔道などと呼ばれておきながら、恥ずかしいものだ。」

「そんな事ないですよ。ジュラさんがいてくれたおかげでブレインを倒すことができた。それに貴方の存在は、皆を安心させてくれる……つてくらい存在感があるんですから。」

「そうか……励みになるよ。」

走りながらウエンディ達に対して賞賛の声をかけるジユラ。喋りながら走り、そしてすぐに崩壊によって空いた横穴から脱出して、何とか外へと出ることが出来た。

「みんな無事か!？」

ほぼ同時のタイミングで出てきていた他のメンバー達。即座にグレイが今いる面子の確認を行う。

グレイとジユラ、そしてジユラに抱えられているウエンディ、シャルル、マルクに、一人脱出していたエルザ、そして何故かムキムキになっている一夜、ギリギリで脱出していたルーシイとハツピーの合計9人である。

しかしそうになると、足りないメンバーがいた。

「ナツさんは!? ジェラールもいない!」

「見当たらないな……」

ナツ、ジェラールの二人が居なかった。とは言ってもジェラールの存在を知っているのは一部だが。

そうして、いないナツ達を探そうと全員が動こうとした瞬間、ハツピーのいる地面が風船のように膨らみ、そして割れた。

「愛は仲間を救う……デスネ。」

「ナツさん!!」

砂の中から出てくるコードネーム：ホットアイことリチャード。彼はナツともう一人の人物を抱えて砂の中から現れた。

「六魔將軍オラシオンセイブスが何で!？」

「色々あつてな……大丈夫、味方だ。」

そして、二人がりチャードから下ろされて地面に立った瞬間に、ウエンディは嬉しさのあまり、ナツに飛びついていた。

「ナツさん! 本当に、約束を守ってくれた……ありがとう! ギルドを助けてくれて!」

「みんなの力があつたからだろ? ウエンディの力もな。今度は、元気にハイタッチだ。」

「はいー!」

そう言つてウエンディはナツとハイタッチを交わす。マルクはこ

の時知らなかったが、ナツは六魔將軍のマスターであるマスター・ゼロと戦い、そして勝つたのだと教えられた。

そのマスター・ゼロと言うのがブレインのもう一つの人格だったらしく、ニルヴァーナを発射させたのもゼロだったらしい。

つまり、マルクが聞いた声はブレインの物ではなく、マスターであるゼロの悔恨の声だった、ということになる。

「全員無事で何よりだね。」

「皆……本当によくやった。」

「これにて作戦終了ですな。」

改めて、全員の無事を確認した一行。どうやら他のメンバー達は、マルクが一瞬だけ見たクリステイーナの中にいたらしい。

「……で、あれは誰なんだ？」

グレイが少し離れた位置に立っているジェラルルを見てそう呟く。どうやらウエンディ以外でジェラルルの姿を知っていたのは、この場フェアリーテイルにいる妖精の尻尾のメンバーのエルザとナツ、ハッピーだけだったらしい。

「……ジェラルルだ。」

「何っ!？」

「あの人か!？」

しかし名前だけは知っていたらしく、エルザが名前を伝えると驚いていた。

「だが、私達の知っているジェラールでは無い。」

「記憶を失っているらしいの。」

「いや、そう言われてもよう……」

「大丈夫だよ、ジェラールは本当はいい人だから。」

その事を知っているのはウエンディだけだろう、と内心でマルクはツツコミを入れていた。ウエンディは純粹だから、あまり面と向かって言うことはできないが。

そして、ジェラルルの元にエルザが向かう。何やら話し合いを始めたのだが、こういう話は本当に聞いていいのだろうか……と、ジェラルルと話すエルザの雰囲気を感じ取りながらマルクはそう思っていた。

しかし、そんな時に唐突に一夜の音が響く。

「メエーン！」

「どうしたおっさん!？」

「トイレの香りパルファムを……と思ったら何かにぶつかったく……」

「何か地面に文字が……」

「こ、これは……術式!？」

この場にいる全員を囲うように術式が現れる。術式は、起動に時間こそかかるが、内側にいる者にルールを課す魔法だ。

「いつの間!？」

「閉じ込められたア!？」

「誰だこらア!!」

そして、術式が発動してすぐに、どこからとも無く大量の人が現れる。統一された服装、統一された武器……十字架のようなマークを服のど真ん中に描いて、杖を装備している者達。

「……手荒なことをするつもりはありません、しばらくの間そこを動かないで頂きたいのです。」

私は新生評議院第四強行検東部隊隊長、ラハールと申します。」

「新生評議院!？」

「もう発足してたの!？」

新生評議院、少し前に評議院が一時的に崩壊再構成された組織。崩

壊した理由は、評議院の魔法『エーテリオン』の悪用を目論んだものによつての本部の壊滅があつたからである。

「我々は法と正義を守るために生まれ変わった。如何なる悪も決して許さない。」

「おいら達何も悪いことしてないよ!!」

「お、おう!!」

「何でそこで強く否定出来ないんですかナツさん……」

「存じております。我々の目的は六魔將軍の捕縛……そこにいるコードネーム：ホットアイをこちらに渡してください。」

当たり前だと言えば、当たり前前の話である。どれだけの善行を積んだとしても、その前にとんでもない悪事を働いていれば、当然その人物は犯罪者として扱われる。

それと同じようにニルヴァーナ破壊の手助けをしたと言っても、ホットアイ……リチャードは六魔將軍である以上、犯罪者として扱われるのだ。

「ま、待ってくれ!!」

「いいのデスネ、ジユラ。」

「リチャード殿……」

微笑みながらジユラの肩に手を置くリチャード。それ諦めではなく、償いをしたいという彼の気持ちの表れだった。

「善意に目覚めても過去の悪行は消えませんデス。私は一からやり直したい。」

「……ならば、ワシが代わりに弟を探そう。」

「本当デスか!？」

「弟の名を教えてください。」

リチャードのその言葉に、ジユラは微笑み返す。やり直したいという彼の思いを酌んでのことだった。

「名前はウォーリー、ウォーリー・ブキヤナン。」

「ウォーリー!？」

その名前に聞き覚えがあるのか、エルザとナツ、ハッピーが驚いたような表情をしていた。

「その男なら知っている。」

「なんと!？」

「私の友だ…今は元気に大陸中を旅している。」

エルザのその言葉に、リチャードは涙ぐみ、嗚咽を漏らす。探していた弟が元気で暮らしている、その知らせだけで彼の心はとても救われていた。

「これが…光を信じるものだけに与えられた、奇跡という物デスか……!…ありがとう、ありがとう……!…ありがとう!!」

そして、リチャードは評議院に連行される。しかしまだ何か用件があるのか、術式の解除はされなかった。

「もう良いだろ!術式を解いてくれ!漏らすぞ!!」

「そうですよ、六魔將軍の捕縛……果たしたんなら俺たちを解放してください。」

「いえ、私達の本当の目的は六魔將軍如きではありません。」

「え?」

そう言いながらラハールは指を向ける。リチャードが六魔將軍として捕まった、なればもう一人も捕まらなければならぬ。

「評議院への潜入、破壊……エーテリオンの投下……もつとんでもない大悪党がそこにいるでしょう。貴様だジエラル!来い!抵抗する場合は、抹殺の許可も降りている!」

「そんな!？」

「ちよつと待てよ!!」

「その男は危険だ……二度とこの世界に放つてはいけない……絶対に!!」

ラハールが強く言い放ち、面々が文句を飛ばす中……エルザだけがくらい表情を浮かべて黙っていたのだった。

ジエラール

「ジエラール・フェルナンデス、連邦反逆罪で貴様を逮捕する。」

手枷を付けられるジエラール。彼はそれに一切抵抗をすることなく、ただただ受け入れるだけだった。

「待ってください！ジエラールは記憶を失っているんです！！何も覚えてないんですよ！！」

「刑法第13条により、それは認められません。」

もう術式を解いてもいいぞ。」

「……」

部下に術式の解除を命じるラハール。ただ職務を全うするラハールを見て、マルクは拳を握りしめていた。

「で、でもー」

「いいんだ、抵抗する気は無い……君のことは最後まで思い出せなかった。本当に済まない、ウエンデイ。」

「……この子は昔、あんたに助けられたんだって。」

「……そうか、俺は君たちにどれだけ迷惑をかけたのか知らないが、誰かを助けたことがあったのは嬉しい事だ。」

……エルザ、色々ありがとう。」

シャルルの言葉を聞き、満足そうにするジエラール。悲しそうな顔をするウエンデイを見て、マルクはある決意を固め始める。

そして、悲しそうな顔をしている者がもう一人。エルザである。悔しそうに歯を食いしばり、顔を俯かせ、拳を握り締める。

「他に言うことはないか？」

「ああ。」

「死刑か無期懲役はほぼ確定だ。二度と誰かと会う事は出来ないぞ。」
ラハールの説明で、ジエラールはそうなることを受け入れるかのよう
に、驚きすらもせしない。反対に、ルーシィやウエンデイは驚きや
悲しみでその表情を曇らせていた。

それが引き金となったのか、ジエラールを取り戻さんと――

「二行かせるかあっ！！」

ナツと、マルクが飛び出していった。ナツは評議院に殴りかかり、マルクは評議院の一人一人を押し分け掻き分けすすんでいこうとしていた。

「ナツ!？」

「相手は評議院よ!？」

「マルク……!？」

「どけえ!そいつは仲間だあ!!連れて帰るんだアア!!」

「と、取り押さえなさい!!」

ラハールは、スグに部下達にナツを取り押さえるように命令を下す。そうして大量の評議員に囲まれる瞬間、部下の一人をグレイが弾き飛ばした。

「グレイ!!」

「こうなったらナツは止まらねえからな!!気に入らねえんだよ……!ニルヴァーナの破壊を手伝ったやつに、一言も労いの言葉もねえのかよオ!!」

グレイの言葉に皆思うところがあつたのか、評議員相手に動き始める。

「それには一理ある……そのものを逮捕するのは不当だ!」

「悔しいけどその人がいなくなると、エルザさんが悲しむ!!」

『エルザの為に』『ジェラルルの為に』皆大義名分を掲げて評議院一人一人を殴ったりしてジェラルルへの道を作っていく。

「もう、どうなっても知らないわよ!!」

「あいつ!」

「ジェラルル……さんが居なかつたら六魔將軍オラシオンセイイスの全員討伐は難しかつただろう、そこら辺のことも関係なくあんたはただ悪いところだけを見るってのか!!」

何より……ウエンデイに涙を流させやがって……!」

思惑はあれどジェラルルを取り戻す、それが全員の願いであつた。悲しむ者を悲しませないよう、ニルヴァーナの功績も含めればそれを考慮してもいいはずなのに、一顧だにしない評議院に腹が立っていた。

「っ……！お願い、ジエラルルを連れていかないで！！」

「来い、ジエラルル！！お前はエルザから離れちゃいけねえ！！ずっとそばに居るんだ！エルザの為に！！だから来いっ！！」

「俺達がついてる！！仲間だろ！！」

「全員捕らえろおおおお！！公務執行妨害及び逃亡帮助だ！！」

全力を持って捕えに罹る評議院。数だけはいるため、ナツも揉みくちゃにされていく。

「ジエラアアアアル！！」

「もういい！！そこまでだ！！」

エルザの一喝。それで争っていた、ギルド連合軍側も評議院側も全員が動きを止めていた。

「騒がして済まない、責任は全て私がとる……ジエラルルを、連れて、行け……！！」

「エルザ！！」

恐らく、助けたいという思いはあったのだろう。しかしそれを飲み込んで押さえ込み、エルザはジエラルルに罪を償わせる選択をした。

この場の誰よりも、悲しそうで悔しそうな表情を浮かべながら。

「……そうだ、おまえの髪の色だった。さよなら、エルザ……」

「……ああ。」

そしてジエラルルは評議院に連れていかれた。最後の一言の意味は、恐らくエルザだけが分かったのだろうと、マルクは感じていた。

ウエンデイも、エルザの考えを受け入れた。マルクはウエンデイの為を思つてジエラールを取り戻そうとしたが、ウエンデイがエルザの考えを受け入れたのでしかたなくその拳を下ろしていた。

「……ウエンデイ、良かったの？ 貴方も、あの男と一緒にいたかったですよ？」

「……私より長い付き合いで、私よりジエラールの事を知ってるエルザさんが……多分、私よりも大事に思っていたエルザさんが我慢したんだもん……私も、我慢しないといけないんだと思う。」

「……あなたがそう言うなら、私は何も言わないわ。」

「ウエンデイ、その……」

「大丈夫だよ、マルク……私は、大丈夫。」

空を見上げると、空は怖いくらいに緋色に染まっていた。既に夕方、空を染める緋の色は太陽から離れるにつれて暗く染まって行く。

まるで悲しみを表すかのように、緋色の美しい空には、悲しみの黒が混在していたのであった。

「……そういやずっと思ってたことなんだけどよオ。化猫ケットシエルターの宿っていつからギルド連盟に入ってたんだ？」

「ああ……言われてみれば俺も全く存在を知らなかったな。今回の作戦で初めて名前を知ったくらいだ。ジユラさんは？」

「……考えてもみれば、聞き覚えが無かったな。」

ギルド化猫の宿、ギルド連合軍の全員が今はこの場を集っていた。

ギルドマスターの好意により、ボロボロになった服の代わりに新しいのを用意させてもらうのと同時に、お礼がしたいとの事だった。

「やっぱりウチは無名なんですね……いえ、なんとなく分かってはいましたけど……」

「あまり街に出てこようとしなかったのではないか？ 集落全体がギルド……考えてみればとんでもない事なのだが、しかし街へ通じる道があれば、一般人が来るにはいささか不都合も生じるだろう。森が多いからな。」

そのせいで無名だった可能性もある。」

「それあんまりフオローになってないだろ……だがまあ、ギルドとしての仕事をしていなくても織物でやっていけそうだと思うがな。いいデザインだと思っぜ、なありオン。」

「そうだな。俺も気に入ったよ。」

「そう思うなら服着てください二人共……兎も角、そろそろ出ましょう。マスターたちが待ってるでしょうし。」

そうして、全員が外へと出る。集落の中央で化猫の宿とギルド連合軍のメンバー全員が集まっていた。

「妖精の尻尾、青い天馬、蛇姫の鱗……そしてウエンデイにシャルルにマルク。」

よくぞ六魔將軍を倒し、ニルヴァーナを止めてくれた。地方ギルド連盟を代表して、このローバウルが礼を言う。ありがとう……なぶらありがとう……」

「どういたしましたして！ マスター・ローバウル！！ 六魔將軍との激闘に次ぐ激闘！！ 楽な戦いではありませんでした！！ 仲間との絆が我々を勝利に導いたのです！！」

「「さすが先生！！」」

「ちやつかり美味しいところ持っていきやがって。」

「あいつ誰かと戦ってたっけ？」

「まあ、言ってることは間違いじゃないと思いますよ。」

改めて六魔將軍との戦いを終えたのだと実感する面々。ようやく終わったことへの達成感などで皆気分が良くなってきていた。

「この流れは宴だろー!」

「あいさー!!」

テンションが見るからに高いナツとハッピー、そしてさらにテンションの高い青い天馬がそこにはいた。

「一夜が。」

「一夜が!」

「活躍。」

「活躍!!」

「それ——」

「二「ワツシヨイワツシヨイワツシヨイワツシヨイ!!」」

「さあ化猫の宿の皆さんも一緒にイ!」

「ワツシヨイワツシヨイ!」

「ワ——」

謎のダンスを踊っている青い天馬の面々、そしてそれに便乗して踊り出すエルザを除いた妖精の尻尾の面々。一夜と一緒に踊ることを提案したが、ウエンデイ、シャルル、マルクを除いた化猫の宿のメンバー全員が真剣な顔で黙っていた。

テンションの上がっていた面々は、その空気に面食らってすぐに大人しくなった。

「……皆さん、ニルビット族のことを隠していて、本当に申し訳ない。」

「そんなことで空気壊すの?」

「全然気にしてねーのに……な?」

「マスター、俺もウエンデイも……シャルルだって、この場にいる誰も気にしてないですよ?」

マルクの言葉を聞き、ローバウルは深呼吸をする。真剣な表情から、何か緊張するかのような雰囲気が出ていた。

「……皆さん、ワシがこれからする話をよく聞いて下され。」

まず初めに……ワシらはニルビット族の末裔などではない、ニルビット族そのもの……400年前ニルヴァーナを作ったのは……このワシじゃ。」

「400年前って……え……?」

ローバウルが語る真実。その言葉に誰もが驚きと動揺を隠しきれていなかった。ウエンディやマルク、シャルルの化猫の宿の面々が一番困惑していた。

「400年前……世界中に広がった戦争を止めようと、善悪反転の魔法『ニルヴァーナ』を作った。

ニルヴァーナはワシらの国となり、平和の象徴として一時代を築いた……しかし、強大な力には必ず相反する力が生まれる。闇を光に変えた分だけ、ニルヴァーナはその闇を纏っていった。

……バランスを取っていたのだ。人間の人格を無制限に光に変えることは出来なかった。闇に対し光が生まれ、光に対して必ず闇が生まれる……人々から失われた闇は、我々ニルビット族にまわりついた。」

「戦争で起こる闇を……一民族が全て受けるって……そんなことになれば……」

「マルク、お主の考えている通りじゃ……ワシらはそのまわりついた強大な闇に翻弄された。

地獄じゃ……ワシらは共に殺し合い、全滅した。生き残ったのは……ワシ一人だけじゃ。」

全員が驚愕していた。400年前から生きている人物、更に隠されていたニルヴァーナの真の闇。その全てに驚き、動揺し、困惑していた。

「……いや、今となってはその表現も少し違うな。我が肉体はとうの昔に滅び、今は思念体に近い存在。

わしはその罪を償う為……また、力無き亡霊^{ワシ}の代わりにニルヴァーナを破壊出来る者が現れるまで……400年、見守ってきた。今、ようやくその役目が終わった。」

「そ、そんな話……」

「役目が終わったって……何なんだよ……」

マルクとウエンディが、謎の不安に震え始める。しかし、ローバウル……否、化猫の宿の面々がその体を光り輝かせ、次々とその姿を消していく。

「マグナ!? ペペル!? 何これ……皆!?!」

「あんた達!?!」

「なんで、なんでみんなが消えて……!?!」

「……今まで騙っていて済まなかったな。ウエンデイ、マルク……ギルドのメンバーは皆、ワシの作り出した幻じゃ……」

「人格を持つ、幻……!?! そんな、そんなのって……」

涙を流し始めるウエンデイとマルク。仲間だと思っていたのが幻だった……そして、その幻が今解かれようとしていることに、涙していた。

「ワシはニルヴァーナを見守るためにこの廃村に一人で暮らしていた。七年前、ある少年がやってきた……一人の少女を抱えて『預かってほしい』と言われた。」

少年のその真つ直ぐな瞳にワシはつい、承諾してしまっていた。一人でいようと決めていたのにな……そして、ここがギルドだと嘘をついた。幻の仲間たちを生み出してな……」

「その後……ジェラルが、ウエンデイを連れてきて……ウエンデイの為に作られたギルドで……俺は、ギルドができた後にやってきた……?」

化猫の宿は……ウエンデイのために、作られた……ギルド……」

「ウエンデイと同年代の子供が来た時は何事かと思ったよ……その上ドラゴンスレイヤー滅竜魔導士……ウエンデイに本当の友が出来たと喜んだものじゃ……今思えば、孫みたいな感じじゃったのだろうか……」

「何昔話みたいに語ってるんだ! みんな、みんなまだ一緒にいたい……… いたいよ!!」

「バスコもナオキも消えないで! みんないなくならないで!!」

涙を流しながら、彼らが消えていくことを拒み、化猫の宿の面々とずっと一緒にいたいという願いを伝えるウエンデイとマルク。

その言葉に、ローバウルは微笑みしか返さない。消える覚悟は決めた、と言わんばかりに。

「ウエンデイ、シャルル、マルク……もうお前達に偽りの仲間はいらない……… 本当の仲間がいるではないか。」

ローバウルはそう言いながら、ウエンデイの後ろにいるギルド連合に指を指す。そして、満面の笑みでウエンデイ達を見る。その姿は、瞬きをしてしまえば消えてしまうのではないか、と思えるくらいに薄くなっていた。

「お前達の未来は始まったばかりだ……」

「マスター!!」

「皆さん本当にありがとう……ウエンデイ、シャルル、マルクを……頼みます。」

手を伸ばすウエンデイ達。しかし、その手は届くことなく……マスター・ローバウルは、完全に姿を消した。

その後すぐに、ウエンデイ達に刻まれたギルドの紋章も消えた。役目を終えたかのように。

「マスター……!!」

「マスター……マスター……!」

二人は膝をつき、涙を流す。その肩に、後ろからエルザが安心させるかのように手を置いた。

「愛する者との別れの辛さは……仲間が埋めてくれる。来い、妖精の尻尾へ。」

この日、ギルド『化猫の宿』は姿を消した。3人のメンバーを残して。ニルヴァーナが消えた当日に役目を終えて、姿を消したのであった。

そして、化猫の宿から……青い天馬天馬達、蛇姫の鱗蛇姫達、妖精の尻尾妖精達の3組が出ていった。妖精には、ローバウル化け猫から譲り受けた小さな新しい3人の妖精がついて行ったのであった。

妖精の尻尾へ

静かな波の音、それにアクセントをつけるかのようには鳴くカモメ達。そして、その海を渡っている船1隻。

その船には妖精の尻尾フエアリーテイルのメンバー達が乗船していた。

「ああ……船って潮風が気持ちいいんだな……乗り物っていいもんだなー！おいー！！」

そして、その船を堪能し尽くしているナツ・ドラグニル。本来彼は乗り物全般は乗っただけでとてつもなく酔う体質であり、こうやって乗り物を楽しむことは本来できないのだ。

しかし、天空魔法を使えるウエンディ・マーベルのトロイアという平衡感覚を養う魔法のおかげで、今こうして乗り物を満喫することが出来ていた。

「あ……そろそろトロイアが切れますよ。」

「おふう……も、もう一回かけて……」

「連続すると効果が薄れちゃうんですよ。」

少なくとも、魔法が効いている間だけ、なのだが。

今妖精の尻尾のメンバーはギルドに帰路についている。新メンバーとして迎え入れる新たな3人を乗せて。

「本当にウエンディもシャルルもマルクも妖精の尻尾に来るんだね。」

「私はウエンディがついていくって言うから付いていだけよ。」

「楽しみです！妖精の尻尾!!」

マルクはずつと黙って上を向いていた。それに気づいた 그레이 が、マルクの隣に座る。

「やっぱりまだ悲しいか？化猫ケットシエルターの宿が無くなったことが。」

「悲しくないといえは嘘になりますけど……でも、マスターがあんな笑顔で逝ってしまったら、俺達もあんまり泣いていられないかな……って思ってたんですよ。」

実際、俺も楽しみですよ妖精の尻尾。」

「そう言ってもらえると、存外嬉しいもんだな……てかこれで滅竜魔導士ドラゴンズスレイヤーが四人になるのか……」

「一応珍しい魔法の使い手のはずなんですけどね……ところで 그레이さん、一ついいですか?」

ずつと上を向いていたマルク。ここだけ視線を 그레이に戻して話しかける。

「何だ?」

「ウエンデイの為に服を着てください。」

とまあこんなこともあり、一向を乗せた船は妖精の尻尾に向けて進んでいくのであった。

「という訳で……ウエンデイ・マーベル、マルク・スーリア、シャルルの3人を妖精の尻尾へと招待した。」

「よろしくお願ひします。」

新たなメンバーの加入により、妖精の尻尾は沸き立った。シャルルを見てハッピーのメスだの、ウエンデイに年齢を聞くだの、ウエンデイに年齢を聞いた者をマルクが睨みつけたのだと一悶着あったが、ウエンデイとマルクにとって、皆楽しそうにしている事が印象的だった。

「シャルルは多分ハッピーと同じだろうけど、ウエンデイとマルクはどんな魔法を使うの?」

「ちよつと!? オスネコと同じ扱い!」

「私……天空魔法を使います。天空の滅竜魔導士です。」

「俺は……魔龍の滅竜魔導士……えつと、ナツさんが炎を食うみたい
に、大体の魔法や魔力を食べることができます。」

ウエンデイとマルクの紹介で、妖精の尻尾が驚いて静まり返る。流石に滅竜魔導士というのは信じてもらえないのだろうか……とマルク達は思っていたが……

「おお!? すごい!!」

「滅竜魔導士だー!!」

「ナツと同じか!!」

「ガジルもいるし一気に四人だぞ四人!!」

驚きこそしたものの、まるで自分のことのように嬉しさと珍しさによる興味が妖精の尻尾全体に沸き起こる。

本来珍しい魔法である滅竜魔法を覚えている、ということを感じてもらえたことにウエンデイは笑顔になっていた。

「……おい、お前にもネコいねえのか。」

「へ? あ……元幽鬼ファントムロードの支配者のガジルさんですか? グレイさんから聞いた話だと滅竜魔法使うとか。

……ってネコって何ですかネコって。ハッピーやシャルルの事ですか? まあ相棒みたいな猫は……俺にはいませんね。」

「……そうか。いねえのか。」

唐突にマルクに話しかけたガジルだったが、何かに安心感を覚えたのか、そのままマルクから離れてガジルは席につく。

マルクは、何の事だか全く分からなかったが気にしてはいけないのだろうと思ってガジルに追求することは無かった。

「今日は宴じゃあー!!」

そして、マスター・マカロフの一言により急遽宴が始まるのだった。ウエンデイ達は、飲めや食えやのどんちゃん騒ぎを目にして自然と自分達も楽しい気持ちになっていた。

「楽しいところだね、二人共。」

「私は別に……」

「俺は楽しいところだと思うけどな。」

こうして、ウエンデイ、マルク、シャルルの3人は無事妖精の尻尾のメンバーへと変わったのであった。

「……あ、妖精の尻尾って女子寮あるみたいだぞ二人共。」

その宴の最中、マルクは歓談しつつも妖精の尻尾についての情報をまとめていた。

ただそれはメンバーの情報などではなく、メンバーがどこに住んでいるかの情報だった。化猫の宿は村全体がギルドとなっていたため住み込みでやっていけたが、妖精の尻尾はそうもいかないのだ。

「家賃は……じゅ、10万Jジュエル……」

「高いわね。何とかおまけしてもらえないかしら。」

「流石にしてくれるとは思うけど……他の適当な宿に泊まり込んだり、二人でルーシーさんみたいに借家借りるのも危ないだろ、色んな意味で。」

「私達、魔導士だから大丈夫だよ！」

「いや、家の中で魔法使ったら全部吹っ飛ぶと思うんだけど？」

「あつ……」

マルクの言葉で、その考えに思い至るウエンデイ。どうやら早くも、妖精の尻尾の空気に馴染んできたようだった。

「そうね、ウエンデイならやりかねないわ。それ以前に襲ってきたり侵入してきた相手に対して、まず説得を試みようとするわね。それで痛い目を見てしまいそうよ。」

「うっ……」

「ほら、だからいろんな意味で危ない。女子寮とはいえ妖精の尻尾そのものを相手するなんて馬鹿な真似をする泥棒もそうそういないだ

ろうしね。

確かに家賃は高い、けどその分の安全性がある方がいいと思うよ。女子寮にはエルザさんいるし。」

「……最強の矛盾であると同時に圧倒的な盾ね、それは。」

貰ってきた女子寮の資料を2人分渡してから、マルクはウエンディ達の対面に座る。

しかし、家賃10万は流石にそうそう払える金額ではないのもまた事実である。

「一ヶ月だから……今からいっぱい仕事すれば間に合う……?」

「となると……明日から仕事潰けて事になるな。手伝うよ。」

「……そう言えば、あんたはどこに住むのよ。男子寮もあるの?」

「い、いや……その辺の情報は無いけど……家はどうかするよ……借家、借りないといけないかな……」

シャルルに言われて、マルクはウエンディ達から視線を逸らす。13歳という身の上で借家を借りるのも、少し大人になったというより、何故か老けた感じがして少しだけ抵抗感を覚えるマルクなのであった。

「女子寮に男の子も住めればいいのにね。」

「流石にそれはまずい。」わよ。」

シャルルとマルクの声がハモる。一瞬間を合わせたか、すぐにウエンディに向き直る。

「……まあしばらくはここで寝泊まりするのが一番かな。マスターに頼み込んで、そうさせてもらおうよ……」

「そうしなさい。このままだとウエンディが女子寮にあんたを入れようとしてくるわよ。」

「えっ!?!」

「……ぷっ、それは嫌な勧誘だ。ウエンディと一緒に住んで守りたいってのはあるけど、周り全員女の人だと肩身が狭そうだし。」

「マルクまで……」

楽しく談義する三人。それを少し遠目から見つめる影一つ。それは元幽鬼の支配者、現妖精の尻尾という経歴をもつもう一人のメン

バー、ジュビア・ロクサーである。

「……早速イチャイチャしてる……」

「いや子供なんだしそのくらいは大目に見てやれよ。あれイチャイチャっていうか保護者と子供の会話だろ。」

「グレイ様〜」

グレイのツツコミもなんのその、完全無視してジュビアはグレイに抱きつこうとしていた。

そんな短りやりとりがあったことは、宴の途中だったこともあって、ウエンディ達は気づくこともなかったのだが。

「でも、そうなたら私達の部屋にはマルクは入れないから遊ぶ時はマルクの家に私たちが行くことになるね!」

「ま、まあそうなる……のか?」

「あんた、ウエンディにとことん甘い性格どうにかなさい。さっきあんた自分で『いろんな意味で危ない』って話したじゃない。自分の部屋ならウエンディに潰されてもいいって訳?魔法で家具の強化がされてない部屋なんて、ウエンディがブレス使えば一瞬で塵になるわよ。」

「うぐっ……」

「全くもう……子供なのねほんと。」

シャルルは文句を言いながら紅茶を啜る。ウエンディもマルクもシャルルの指摘で少しだけ沈んでいた。実際、滅竜魔導士と言ってもウエンディはついこの間までサポート系の魔法しか使ってこなかったのだ、攻撃系のブレスの加減はお世辞にも上手いとは言えないだろう。

「ま……でもあんたが新居を見つけたら、その時は私達でお茶会を開くのも悪くないかもしれないわね。」

「っーそうだね!!」

「……だな。」

しかし、どれだけ文句を言われたり言ったりしても、余程のことがない限り、3人が仲を違えることはないだろう。

そんなこともありながら、妖精の尻尾の宴は終わりに近づいていく

のであった。

「どお？このギルドにも慣れてきた？」

「はい。」

「女子寮があるのは気に入ったわ。」

「クエストもそこそこ……ってところですかね。」

ウエンデイが女子寮に入って数日。ギルドで毎日を過ごしていた、そんなある日のことである。

「そう言えば、ルーシイさんはなんで寮じゃないんですか？」

「寮の存在最近知ったのよ……てか、寮の家賃って10万Jよね……もし入ってたら払えなかったわ今頃……」

「大変だー!!」

飛び込んで来る妖精の尻尾のメンバーの1人。そして、その直後に鳴り響くマグノリアの鐘の音。

「何!？」

「鐘の音……?」

「……なんか、みんな騒がしいような……?」

マルクが感じた通り、妖精の尻尾は鐘の音を聞いた面々がソワソワしていた。

主にルーシイが入る以前にいたメンバー……古参組、である。

「ギルダーツが帰ってきたア!!」

「あいさー!!」

そして、騒ぎだすナツとハッピー。『ギルダーツ』という名前にウエ

ンデイは首をかしげていた。

「ギルダーツ?」

「私もあつたことないんだけど……妖精の尻尾最強の魔導士何だつて。」

「うわあ……!」

最強と会える、その姿を拝めるらしいという情報は、ウエンデイとマルクの子供心をワクワクさせていた。

しかし、その楽しそうなのを除いたとしても有り余るほどの騒ぎようが今妖精の尻尾で起きていた。

「どうでもいいけどこの騒ぎよう何?」

「お祭りみたいだねシャルル、マルク。」

「ほんと騒がしいギルドね……」

「最強の魔導士が帰ってくるって言っても……確かに騒がしさが異常というか、なんと言うか……」

「無理も無いわよ。」

「ミラさん。」

ギルダーツの存在を知らないウエンデイ達の様子に気づいたのか、ミラジェーンが四人に近づく。

「だって三年ぶりだもん、帰ってくるの。」

「3年も!?何してたんですか!?!」

「勿論仕事よ……丁度いいからクエストの序列をウエンデイ達に教えるついでに、ギルダーツの言っていた仕事のことを話しましょうか。」

そう言つてミラは魔法のペンを取り出す。空中にも描ける、便利なアイテムである。

「まずウエンデイやルーシイたちが普段受けているクエストは、誰にでも受けられる普通のクエスト。」

その一つ上にあるのがS級クエスト、妖精の尻尾のS級魔導士だけが受けられるクエストね。」

「エルザさん、ミラさん……あと見たことないけどラクサスさんにミストガンさんでしたっけ。」

「ええ、そうよ。マスターに選ばれたものしか受けられないクエスト。」

それで、さらにそのもう一つ上……これがSS級クエストよ。S級魔導士でもちよつと厳しいわね。」

「じゃあ今回、そのギルダーツって魔導士はそのSS級クエストに行っていたのかしら？」

シャルルの言葉に、首を横に振って否定するミラジエーン。更に魔法のペンを走らせながら説明を続ける。

「まだ上があるのよ。SS級クエストよりも上……10年クエスト。10年間誰も達成した事がないから10年クエストなのよ。」

それで……ギルダーツのクエストはさらに上……100年クエストに行ってたの。」

ミラジエーンの言葉に、マルク達は驚き、困惑した。しかし同時にそれだけのすごいクエストを受けられるほどの実力者であるギルダーツに、興味が尽きないマルクなのであった。

ギルドダーツの帰還

妖精の尻尾フェアリーテイルに3年ぶりに帰ってくる男ギルドダーツ。彼は上級も上級、1000年クエストという1000年間誰もクリアしたことが無いクエストを受けていたのだ。

そして、今この時にギルドダーツが帰ってくる……それを知らせたのはマグノリアの鐘の音。つまり、ギルドのメンバーだけでなくマグノリアに住む者達もまたそれを知った、ということである。

『マグノリアをギルドダーツシフトへ変えます。町民の皆さん！速やかに所定の位置へ！繰り返しします——』

「1000年クエスト……1000年間、誰も達成出来なかったクエスト、ですか……」

「それにしても騒ぎすぎじゃないかしら。」

「マグノリアのギルドダーツシフトって何〜?」

「外に出て見ればわかるわよ。」

ギルドだけでなく、街全体が騒がしくなり始める。明らかに一人一人に対する態度ではないのは、見て明らかである。

しかし何故そこまでの反応を示すのか気になったルーシィとウェンデイとマルク。

ミラジエーンに言われるがままに妖精の尻尾の扉を開けて、マグノリアの様子を観察し始める。

「う、うそ!?!」

「こ、ここまでしますか……」

街は様変わりしていく。周りの家は全て地面ごと隆起し、そしてマグノリアから妖精の尻尾の1本道が凹んだかのようになる。ギルドダーツ一人の為に、マグノリアにある建造物全てが妖精の尻尾までの道避け、結果として小さな溪谷のようになっていた。

「街が、割れたー!!」

「ギルドダーツは触れたものを粉々にする魔法を持つてるんだけど……ボーツとしてると民家突き破って歩いてきちゃうの。」

「どんだけ馬鹿なの!?!その為に街を改造したってこと……?」

「凄いねシャルル！」

「ええ……凄いバカ。」

「シャルルと同意見だ……流石に今回は。」

そして、鉄が擦れるような音を鳴らしながら、妖精の尻尾の扉を開けて一人の男が入ってくる。

その男こそまさにギルダーツ・クライヴ本人である。

「ギルダーツ！オレと勝負しろオオオ!!」

「いきなりそれかよ。」

「おかえりなさい。」

「この人が、ギルダーツ……」

「む……お嬢さん、たしかこの辺に妖精の尻尾ってギルドがあつたはずなんだが……」

この言葉で、マルクは先程シャルルが言った『凄いバカ』というのを実感してしまっていた。外観に思いつきりマークが描いてあるにも関わらず、まったく気づいていなかったからだ。

そして、先程ミラジエーンが言ったボーツとしてみると民家を突き破って歩いてくる、という情報のこともあり、ギルダーツはマルクの中では『最強だけどこか抜けている人』という結論に至つたのであつた。

「ごこよ、それに私ミラジエーン。」

「ミラ？………変わったなあお前！つかギルド新しくなったのかよー!!」

「外観じゃ気づかないんだ……」

ミラジエーンに言われようやく気がついたのか、ミラジエーンの肩に手を置いて変わった事やらなんやらを色々喜んでいた。

「ギルダーツ!!」

「おおつ！ナツか！久しぶりだなあ……」

「俺と勝負しろって言っただろおー!!」

と言いながらギルダーツに殴りかかるナツ。しかし、そのままナツはギルダーツにいなされ、そして投げ飛ばされて天井にそのままの勢いで突っ込んで、めり込んでいた。

「また今度な。」

「や、やつぱ……超強えや……」

「いやあ、見ねえ顔もいるし……ほんとに変わったなあ……」

ギルドが新しくなったのはギルダーツが留守の間である。そして新メンバーも、殆どがギルダーツがいない間に入ったものだ。

昔の姿と今現在の姿を見比べて、ギルダーツは感慨に耽っていた。

「ギルダーツ。」

「おおマスター！久しぶりーっ!!」

「仕事の方は？」

「がっはっはっはっ!!」

ギルダーツが帰ってきたこと、つまりそれは100年クエストが何らかの形で終わったことを示す。

当然、ギルドのメンバー達はギルダーツがクエストクリアしてきたことを信じていた。だが――

「だめだ。俺じゃ無理だわ。」

「何っ!？」

「嘘だろ!？」

「あのギルダーツが、クエスト失敗!？」

妖精の尻尾最強の魔導士でも……クリア出来ない、クエストがあるんですね……」

全員が驚いていた。ギルダーツにクリア出来ないクエストがあった事に。いや、それが100年クエストの難易度の高さを改めて思い知ることになる。

「そうか……主でも無理か。」

「すまねえ、名を汚しちまったな。」

「いや……無事に帰ってきただけでも良いわ。わしが知る限りこのクエストから帰ってきたのは主が初めてじゃ。」

「俺は休みてえから帰るわ。ひー、疲れた疲れた……ナツウ、後で俺ん家来い。土産だぞーっ!がははっ!

んじゃ失礼。」

そう言っつてギルダーツは入ってきた扉とは別の場所……壁にぶつ

かり、壁を破壊しながら外へと出ていったのであった。

「ギルダーツ！扉から出ていけよ!!」

その様子を見ていたマルク達は唾然としていた。彼らにとっては、色々とギルダーツという男に関しての情報量が多すぎたのだ。

「……あんた、アレ吸収出来るの？魔龍の滅竜魔導士ドラゴンズレイヤーさん。」

「……いやあ、魔法の魔力を食うから俺は……魔法を食うのはその名残っただけで……そもそも触れただけで粉々にする魔法なんて、吸収しようと思っただ直後にバラバラにされてる気がする……」

「同感ね、恐ろしく強いじゃないあの男。伊達に最強を名乗ってるわけじゃないのね。」

「……そっぴやあよう……ずっと気になってたことがあるんだがいいか？」

話していた二人にかけられる声。その声の方向を見ると、 그레이が何か言いたそうにマルク達に近寄ってきていた。

「 그레이さん……とりあえず服を着てください。」

で、気になってた事ってなんですか。」

マルクに注意されて 그레이は服を着てから、再度マルクに質問をする。

「お前は自分のことを魔法を食べる竜つったな。どーにもいまいちピントこねえんだが……どういう事だ？」

「そのままの意味ですよ。魔法をぶつけられたら、俺はその魔法の魔力を食って自分の魔力に出来る……って事です。」

「うーん……けどさつき、ギルダーツ見て食える食えないの話してなかったか？ありやあいつたいどういいう事だ。」

「あー……説明長くなりますけど、聞きます？」

マルクの言葉に対して 그레이は無言で頷く。 그레이がどうしても話を聞きたいということを理解したマルクは、そのまま説明を始める。

「俺が魔法を食うためには、色々と制限があるんですよ。」

単純に、種類によって食えない魔法とがありますし。例えば、空間サ・ナイトに關係する魔法だったり……エルザさんの騎士とかルーシイさんの

星霊魔法とか……後はエルフマンさん達の吸テイクオーバー収とかその典型です。ていうか食えって言われてもどこ食えばいいんですかあれ。」

「まあエルザは兎も角ルーシイとかだと酷くグロテスクな絵面になっちゃまいそうだな……んで？まだ制限とやらはあるのか？」

「後は……魔法使用者との距離がとても近いものとか、そういうのは食えませんか。」

「ん？どういう事だ？」

「えーつと……例えば、ナツさんの火竜の鉄拳とか……まあ要するに魔法使った時に本人の近くにあるものは食べられない、ですね。」

「……ってーと——」

グレイは腕に軽く氷を纏わせてマルクにそれを見せつけるようにする。確認をするために、である。

「こういう感じに手足に纏うやつは無理ってことか。」

「そういう事ですね。」

あと俺は魔力を食ってるだけなので……魔法を使うことで発生、もしくは副次的に起きた事までは食えませんよ。」

「……えらく複雑だなほんと。で、それはどういう事だ？」

「簡単な話です。炎は熱いし氷は冷たい、鉄は硬いし毒は……そもそも体内に取り込むことすら危険、ってだけです。」

ナツさんとかは炎や鉄っていう属性の、熱いとか硬いとかの特性をガン無視してそれを食って魔力を回復させます。俺はその特性を無視できません。」

「……てことはあれか。例えば、ナツの魔法をお前が取り込もうとしたら無茶苦茶熱い思いするって訳か。」

「まあ大まかにいうとそんな感じですよ。あとはせいぜい食いすぎると吐きそうになります。正直滅茶苦茶キツイです、ガッツリ吐き気に襲われますし。」

「お、おう……で、だ。お前ある程度の魔法無効化できるんだっけか？ニルヴァーナの時もさらって言ってたしよ。」

吐き気的话题を出されて少し引いたグレイだったが、話を交えるように今度はマルクの体質についての話にしようとする。

「ああ、はいそうですよ。て言っても……本当に弱い相手じゃないと防げませんけどね。しかも、炎を飛ばすとか……そういう形のないものを飛ばす魔法とかじゃないと無効化できませんよ。」

氷とか岩とか……とりあえず質量のある奴を飛ばされたら、魔力は吸収出来ても勢いは収まらずにそのまま直撃しますけどね。」

「あー、つまりあれか。今俺が氷の塊作ってお前の方に投げても、氷だけは残ってお前にダメージを与えられると。」

「そういう事です。炎だったら熱い……みたいなものもありますけどね。一番楽なのは水ですよ水。濡れるだけですから。」

「……ん？でもよオ、ウエンデイが言うにはお前魔水晶^{ラクリマ}食えるらしいじゃねえか。口の中血だらけになるだろ、水晶だぞ水晶。」

「いやあ……ラクリマの場合、純粋な魔力の塊が入っているせいなのかがつりいけるんですね。鉄を食べれるガジルさん程じゃないにせよ、俺も口の中は常人よりも丈夫って事なんじゃないですかね。」

グレイに指摘されて苦笑いをするマルク。グレイも溜息をつきながら頭を掻いた。

「ま、大体どういうモンなのかは分かったぜ。要するに滅竜魔導士は大体化け物なんだな、口の中が。」

「ウエンデイは分からないですけどね。食べるの空気ですし。」

「それもそうだな。んじゃまた後でな。」

そう言っグレイはマルクから離れていく。それを見計らったかのようにウエンデイとシャルルが後ろから近づいてきた。

「ねえねえ、何の話をしたの？」

「俺という滅竜魔導士の話。言うほど化け物じゃないですよ、って話してたところだよ。」

「魔力を食べるって相当なものだと思っけどね……あ、ルーシイさんとクエスト行くことになったんだけど来る？」

「あの人家賃のためだからなのかクエスト積極的に行こうとするよな……まあウエンデイが行くってんなら行くよ。」

「どんなクエスト？」

「あのね、新作ケーキの試食！」

「え、っ……」

そんな話をしつつマルクはふとギルダーツの事を思い出していた。彼はナツだけを呼んだ。

それはただの直感だったが、ギルダーツがナツを呼んだ理由の一つに……自分が関係している気がしたからだった。

「……ナツ、仕事先で……ドラゴンにあった。」

ギルダーツの家、ナツは彼に呼ばれてその場所に来ていた。そして、ギルダーツはふと口にしたのだ。ドラゴンのことを。

「お前の探してる赤いヤツじゃねえと思うがな……黒いドラゴンだ。」
「ど、どこで……」

「霊峰ゾニア、おかげで仕事は失敗しちゃったよチクショウ。」

ナツは一目散に走っていかこうとするが、ギルダーツはそれを許さない。失敗した理由……彼が敗北した相手に、今のナツだけでは勝てるとは思っていなかったからだ。

「行ってどうする。」

「決まってるんだろ！イグニールの居場所を聞くんだ!!」

「もう居ねえよ、あの黒竜は大陸……あるいは世界中を飛び回ってる。」

「それでもなんか手がかりがあるかもしれない!!」

「ナツ、これを見る。」

そう言っただけでギルダーツは大きなマントで隠された自分の体を、ナツ

に見せる。その体は、明らかに完治することのない大怪我のそれだった。

「ほとんど一瞬の事だった。左腕と左足、内蔵もやられた。イグニールって奴はどうだか知らねえが、あの黒いのは間違いなく人類の敵だ。

そして……人間には勝てない。」

「そ、それを倒すのが……滅竜魔導士だろ!!俺の魔法があれば……黒いドラゴンなんて……」

「本気でそう思ってるなら、止めはしねえよ。」

「っ……くそー!!」

叫びながらナツは出ていった。そのあとをハッピーは追おうとしたが、その前にギルダーツに呼び止められる。

「ハッピー、お前がナツを支えてやれ。あれは人間じゃあ勝てないが……竜なら勝てるかもしれねえ。ナツなら……いつかきつと。」

そして、ギルダーツの家から走り出したナツは勢い余って躓き、そのまま川にダイブしていた。

「……元気かな……イグニール^{父ちゃん}。」

ドラゴンの事で、自身の親を思い出していたナツ。そしてそのすぐ後に、彼はまた別のことを思い出していた。

「黒いドラゴン……って、確か……マルクが言ってたな……自分の親が、絶対に潰せ……とか言ってたとかなんとか……」

黒いドラゴンは人類の敵、そして仲間であるマルクの親のドラゴンもそれに敵対している。

つまり、ドラゴンの敵でありまた人間の敵でもある……という事なのだろうか、とナツはボーッとしながら思っていたのだった。

エドラス編

妖精の尻尾が消えた日

「777年7月7日?」

「私やナツさん、マルクに滅竜魔法を教えたドラゴンはみんな同じ日にいなくなってるんです。」

「そう言えば前に、ナツがガジルの竜も同じ日に姿を消したって言ってたかも。」

「どういう事なの?」

「遠足の日だったのかしら。」

「ルーシイさんも偶に変なこと言いますよね?」

「火竜イグニール、鉄竜メタリカーナ、天竜グランディーネ、魔龍イービラー……みんな、今どこにいるんだろう。」

妖精の尻尾にて、ある日、ルーシイ、ウエンデイ、シャルルは三人でガールズトークをしていた。

4人の滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーに共通する事柄、それぞれの育ての親であるドラゴンが消えた日が777年7月7日だった、ということである。

朝起きれば唐突に消えていた親の姿。しかも同年同日に消えていた、と言うのはおかしな話である。だからこそ『何があったのか』が気になってしょうがないのだ。

「……黒いドラゴン、か。」

そして少し離れたところで、マルクが三人の話を聞きながらポツリと呟いた。

ナツは、ギルダーツが言った黒いドラゴンの事をマルクに話していた。マルクは、そのドラゴンの事も少しだけ気にしていた。

「——シャルル!ちよつと酷いんじゃないの!?!」

と、不意にウエンデイの声が響き渡る。何事かと思い、ウエンデイの近くに行くマルク。離れていくシャルルを少しだけ気にしながらも、ウエンデイに何があったのかを聞くことにした。

「ウエンデイ、どうした?」

「ああ、うん……シャルルがハッピーに冷たい態度取ってたから……」
「ああ……確かに、なんかハッピーには当たり強いよなシャルル。何
ていうか……見ててイラついてる、みたいな。

何でハッピー見ててイラつくかは、分からないけど……」

「……私、ちよつとシャルル追いかけてみる!! マルクはここにいて!!
シャルル戻ってきたら、私が戻るまでどこにも行かせちゃダメだよ
!!」

そう言つてウエンデイはシャルルを追うために飛び出していく。
マルクは、別に大丈夫だろうと思いうエンデイの言うことを聞くの
だった。

しばらくすると、雨が降り始める。それも小雨などではなく、大降
りも大降り……豪雨だった。

「……俺ウエンデイに傘渡してきますね。ルーシイさん、後はよろし
くお願いします。」

「はい、ガールフレンドに風邪引かせちゃダメよー」

ルーシイの軽口を聞き流しながら、マルクは傘2本を持って街を歩
いていく。マグノリアは広い街なので、雨で視界が悪くなってる分探
すのは困難になっていた。

「……にしても雨止まないな……ウエンデイが風邪ひくだろうしタオ
ルも持つて行ってやった方が良かったかな……いや、そこら辺の店で
大きいタオル買った方がいいな。

とりあえずまずはウエンデイ探さないと。」

そしてマルクは走り始める。しかし、どれだけ探しても見つからなかった。

匂いは雨で流されてしまった上に、闇雲に探しても見つからないと来ればもうお手上げ状態である。

だが、しばらく走り回っていると、見知った顔が見えた。それは本来この街にいるはずのない人物。

「……!?おいあんた!!ジェラールだろ!!」

「っ!」

目の前の人物は大慌てで顔を隠そうとする。しかし、既に顔を見られたというのを理解して、顔を隠すのをやめていた。

「なんで、何であんたがここに……」

「……信じてもらえないだろうが、俺はジェラールでは……いや、この世界のジェラールではない。俺は妖精の尻尾のミストガンだ。」

「この、世界……?あんた何を言ってるんだ。いや、でも……分かった、信じられないけど……信じるしかない。」

とりあえずあんたは俺の知ってる……いや、エルザさんの知ってるジェラールでは無いんだな。」

マルクのその言葉にジェラールは無言で頷く。変身魔法では無いことくらいは、マルクには分かっていた。

しかしならば目の前にいるジェラールは何者なのか……それだけが謎だった。

「……もう一ついえば、ウエンデイの知っているジェラールが私だ。七年前に会った時……俺は彼女にジェラールと名乗ってしまったからな。」

「……そうか、あのジェラールは『忘れた』んじゃないかって『知らなかった』のか……?何であんたがここに……いるんだ。クエスト報告か?」

「……もうすぐ、この街は消滅する。ウエンデイに逃げるように伝えに来たんだ。」

「……おい待て、そりゃあ一体どういう事だ……?」

困惑したマルクを見て、ジェラール……いやミストガンは時間が無いのを理解していながらも、少しだけ説明を始める。

「……私は、この世界とは別の世界『エドラス』からやって来た人間だ。そして、今そのエドラスは魔力が枯渇しかけている……エドラスから魔法が消えようとしているんだ。」

「魔力が……枯渇？回復しないってことか？」

「ああ……エドラスでは、魔力は有限なんだ。それに、人間は体内に魔力を有さない。」

その魔力がなくなりかけていて……エドラスは魔力を補充する魔法を作った。超亜空間魔法アニマ……この世界、アースランドの人間をエドラスに送る魔法……そして送り込まれた人間などを魔水晶ラクリマにすることで新たに魔力を得る……そんな方法でエドラスは魔力を得ようとしている。」

「……その魔法で、今妖精の尻尾が……いや、マグノリアが消えかかっているって言うのか……！」

マルクは傘を放り投げて、妖精の尻尾に向かって走り出す。消える前に、せめて妖精の尻尾のメンバーだけでも助けようと思ったからだ。

「待て！もう間に合わない!!ウエンデイも、もう……！」

「うるさい！あんたが何を言おうと俺はやることは変えねえ!!ウエンデイだって……俺と同じこと言っただろうよ。俺達はギルド妖精の尻尾のメンバーだ！仲間を……いや、家族が家族を助けにいかないでどうするんだよ!!」

そしてマルクは妖精の尻尾に向けて走り出す。だが、どう足掻いても間に合わないということ、ミストガンは知っていた。

「っ!?空が……！」

雨が降り止まない空。雨雲が渦をなしていく。そして段々と渦は大きくなり……大きな穴となる。

それでもマルクは走った。だが……やはり間に合うことは無かった。

「ぐっ!?街の、景色が……!?!」

景色が歪む、建物が消えていく。空の穴に、吸い込まれるように形をなくしていく。

まるで今までのことが夢だったかののように、街は消えて煙の様に天に昇っていく。そして、気づいた時には――

「……………え?」

眼前に広がる白い大地、見えるのは遠くにある山だけ。そして天からは白い雪のようなものが降っていた。

雪が積もったわけでもないのに白い大地。そこにポツンと…………マルクは一人立っていた。

「…………君は、吸い込まれなかったんだな。」

「…………ミストガン……………さん。」

「所詮偽名だ、さんは付けなくていい……………それにしてもなぜ君だけが吸い込まれなかったのか……………」

「…………滅竜魔導士の特殊な魔力で吸収を逃れることが出来たか、俺にはそもそもアニマが効かない体質だった……………いや、後者はないや。魔力は吸い取れても魔法が起こす現象は止まらないし。」

「……………そうか、滅竜魔導士……………となるとウエンディやナツ・ドラグニルも生きて……………」

そこからブツブツと何かを呟き始めるミストガン。マルクは今起こった出来事を整理するために、頭の中を整理しようとするが、そんな簡単に出来るほど彼も大人にはなれていない。

「……………予定変更だ、済まないが君もエドラスに向かってくれないか。」

「……………『も』?他に誰か行く手筈なのか?」

「いや……………元々これは私が解決しようとしていたことだ。だが、滅竜魔導士が生きているとなれば、きつとウエンディ達はエドラスに向かうだろう……………事情を知っているものさえいればな。」

「……………事情って、エドラスなんて誰も知ってるはずがないと思うが?それこそあんたみたいに向こうの世界から来てもしないと――」

「……………シャルル、ハッピー……………二人はエドラスの住人だ。いや、正確には、彼らの種族が住んでいる世界……………か。」

「……………は?」

未だ困惑しているマルクは、さらに困惑した。シャルルとハッピーはこの世界の住人では無かったということだ。

「あの猫のような見た目……エドラスではエクシードと呼ばれる種族だ。昔、彼らは自分達の子供をこっちの世界に送り込んだ。」

エドラスではエクシードは神のように扱われている……だから送り込まれた子供とはいえ、おそらくはエクシードを消そうとはしないだろう。

そして、恐らくシャルルならばエドラスの情報を知っている……シャルルが消えていないのならば、それをウエンディ達に伝えるだろう。」

「……そして、ウエンディ達がシャルルから情報を教えて貰って、エドラスに向かう……か。」

「恐らくは、そうなるだろうな……いや、そうだったようだな。空を見つめてみる。」

マルクはミストガンの指差す方向に目を向けた。そこには二つのなにかが、天へと向かって飛んでいき……空高く上がったところで、その姿を消した。

「今のは……」

「恐らくウエンディ達……エドラスの情報をどうやらシャルルから聞いたみたいだな。」

「……何で、シャルルだと思ってるんだ？」

「シャルルには、兆候……いや、そういう素振りがあつたように見えたからだ。そして先程ウエンディに会った時も、知っているような反応を見せていた。」

だからシャルルだと思っている……」

ミストガンの話を聞いてから、再び天を見上げるマルク。猫……否、エクシードの相棒を持たない彼には飛行手段はない。だからああやってエドラスへ向かうことも出来ないでいた。

「……そういやさつき、俺にエドラスへ向かえって言つてたけど……どうやって向かわせるつもりだ？俺には飛行手段はないんだぞ？」

「その辺は大丈夫だ……私の魔法を使えば問題ない。そもそもああやって飛行するのは、エクシードがいなきゃできないからな。」

苦笑するように天を仰ぐミストガン。その方法が知りたいのだが、

黙っていた方がいいのかと追求しないでいた。

ふと、ミストガンは何かを思い出したかのように懐から瓶を取り出して、その自身の球体の薬のようなものをマルクに投げる。

「……………これは？」

「エクスポール……………エドラスではたとえアースランドの住人といえど、魔法が使えなくなってしまう。その薬はエドラスへ向かったアースランドの住人に、エドラスで魔法を使わせるための薬さ。」

「なるほどな……………ん？もしかしてナツさんやウエンデイは、魔法を使えなくならないかこれ。」

「……………そう、なるな。済まないもう二つほど懐に入れておいてほしい。彼らに渡すための薬を……………」

「分かつてるよ……………ウエンデイが向かったのなら、俺はもう覚悟は決まってる。魔法を使えないとなると、肉弾戦のできないウエンデイはかなり危ない目に遭っちまう。」

それだけは避けたいからな……………俺は、エドラスへ向かう。」

マルクの答えを聞き、ミストガンは微笑んだ。そして、無言で軽くお辞儀をしてから背中に背負っている杖を、何本か取り出していく。

羽の生えたシャルル達とは違う方法で、どうやって送り込むのかと思っていたが……………下に人一人分くらいの大きさの穴が形成される。

「へ？」

「アニマだ……………とは言っても空の穴とは比べものにならないが……………エドラスへ転送する魔法だと思ってくれ。」

だが、注意してくれよ……………その魔法は……………細かい場所指定が——

ミストガンが言い切る前に、マルクは穴に吸い込まれてそのまま転送させられてしまう。

マルクはなにがなんだかわからないまま……………エドラスに転送されるのであった。

「細かい場所指定がなんだって!?おい、まさかできないとか言うんじゃないやねえだろうな!?出た瞬間に壁に埋まってるとか、敵に捕まるとかそういうのは勘弁だからな!?ミストガン!?ミストガアアアン!!」

言いたい文句をミストガンに伝えられず、それは独り言のように虚空へと消えていくのであった。

エドラス

「——っ……ここは……？ああ、ここがエドラスか……」

マルクは目を開けて周りの景色を確認する。まるで明かりが失われたかのような暗さ、そして自分の体は締め付けられるように柔らかいブヨブヨの何かに覆われていて、体には何かの粘液のようなものが纏わりついていて——

「……って!!んなわけあるかア!!明らかにここはエドラスじゃなくて別の何かだろ!魔龍の咆哮威力1/5バージョン!!」

マルクは威力を抑えてその場でブレスを放つ。肉壁はその瞬間マルクを上向きに移動させていく。まるで異物を排出するかのよう。

そして、マルクは直ぐにブヨブヨの何かの拘束を逃れる。放り出された先にはちゃんとした地面があり、液体まみれになっていたせいで、着地の際に砂などが纏わりついてきた。

「……何だあのでけえ蛙……」

マルクは自分を飲み込んだと思われる巨大なカエルの姿を見つける。先程までのブヨブヨの何かはカエルの胃袋だった、ということである。

しかしブレスで体内を刺激されたせい、マルクを吐き出した後、そのまま大急ぎでどこかへと逃げていった。

「うええ……ベツトベツトじゃねえか……しかも臭いし……どっかに湖……せめて粘液だけでも落としたい……」

ちよつと泣きそうになりながらも、マルクは粘液が落とせるような湖か池を探し始める。

そもそも何故自分がいきなりカエルの体内にいたか、マルクはミストガンに飛ばされたあとのことをよく思い出し始めた。

「つ………ここが、エドラっ!?!」

着いた瞬間の事である。マルクは砂漠に降り立ったのだが、運が悪く、巨大な流砂に巻き込まれようとしていた。

当然、流砂に巻き込まれたらどう考えてもただでは済まないのは分かっているため、マルクはブレスを流砂の内側の方に向けて放って、その勢いで脱出しようとする。

「魔龍の咆哮!!」

中途半端な威力ではダメだろうと考えて、マルクはほぼ全力でブレスを放った。

そのかいもあって、流砂からは無事に脱出出来たが……そのあとがダメだった。

「あがつ!?!」

勢いをつけすぎたのだ。マルクは勢いよく飛んで行って、そのまま近くにあった岩に頭をぶつけてしまった。

そしてそのまま気絶してしまった……と言うのがマルクが思い出せる範囲の記憶である。

つまり、気絶している間に巨大蛙に食べられていた、というのが事の顛末なのであった。

「……あー、道理で頭が痛いと思った。まさか新しい世界に来て、頭ぶつけるとは思わなかった。」

そう言っただけマルクは再度辺りを見回す。エドラスという世界がどういう世界なのかを改めて認識していく。

何個か浮遊している島があったりするので、やはりここは元いた世界とは別の世界だということを感じさせられていた。

「……ともかく、服が駄目にならなくて良かったんだろうが……何か、嫌な気分にはかならないな……湖湖……」

そう言っただけマルクは歩き続ける。

しかしどこまで行っても砂、砂、砂……オアシスでも見つけられない限り、水場にはありつけないだろう。

唯一の救いは、砂漠と言っても広大な砂地が広がっているだけで、暑さなどは一切感じないことくらいである。

「……エドラスに来て、流砂に飲み込まれて、プレスで自滅して蛙に食われて……何だよお……」

散々な目にあつたせいとか、感情がごちゃ混ぜになり始めるマルク。ウエンディより大人びていると言っただけ、13歳の少年には、何かに食べられるという経験は心にくるものがあつたみたいだ。

「……あ、川……」
いつの間にか砂漠を抜けて、現在マルクの目の前には川が流れている。

深さはそこまでないが、汚れを落とすには充分すぎる深さだ。

「……潜ろう。」

そう言っただけマルクは川に飛び込んで、粘液を洗い流しながら感情の整理をする。

その途中で、ミストガンに渡されたエクスポールの事を思い出す。

「ぶはっ……服は溶けてなかったけど……エクスポール溶けてないよな……」

そう思っただけマルクは服のポケットからエクスポールを取り出そうとして……固まった。

「……溶けてる、めっちゃ溶けてる……しかもご丁寧に服の内側で消

化されてる……」

カエルには何ら効果がある訳でもないだろうが、しかしそれでもエクスボールが溶けたせいでウエンディとナツが魔法を使えるようにするための唯一の手段が断たれてしまった。

「……服が消化されないのはなんとなく分かる、俺が消化されてないのは……まあ、運が良かったんだろ。けどエクスボールがこんなになってるんじゃない、ナツさん達に渡してもちゃんと効果が出るかわかったもんじゃないし……」

ある程度粘液を落としてから、マルクは川から出て川の上流に向かうか、下流に向かうかで悩み始める。

川があれば、近くに街がある可能性も高いからだ。しかし、いつまでもそんなことで悩んでるわけにもいかない、マルクは滅竜魔導士特有の聴覚で音を探り、街があると思しき方へ向かうことにした。

「……あっちから、なんか声が聞こえてくるな。丁度いい、服乾かすついでに向かってみよ。」

「……町か。」

暫く歩くと、無事街についた。エドラスに来て、初めての街。名前も知らない街。

「おや？どうしたんだい僕、そんなにびよぬれになって……どこかで水遊びでもしてきたのかい？」

そんな中、お婆さんがマルクに声をかける。びしょ濡れになった姿はやはり目立つのだろう。

「水遊びをしてきたというか……慣れない土地に入ったせいで、足を踏み外して落ちちゃったんです。」

苦笑しながらマルクはそう答える。カエルに食べられて、そこから脱出したあと粘液を落とすために川に入った。そう正直に答えたところで余計な事態を招きかねない。

「おやまあ……それは災難だったね。小さい子供がそんなところ歩いたらダメだよ。ここら辺の生物は何でも食べちゃうからね。気を付けな」と。

「あはは……気をつけます……」

ついさつきまで腹の中にいた、というのは絶対に言わない方がいいと思っただマルクであった。

「そうだ、街に当てがないなら私の家においで。服も着替えないといけないし、この街の事も教えてやらないとね。」

「は、はあ……いやでも、俺はちよつと急いでて……」

「婆の親切心は受け取るもんじゃよ。」

そう言つて、お婆さんはマルクを引っ張つて自分の家へと連れていく。そのすぐあとに、街の入口をウエンデイ達に通っていたのだが、お互いに気づくことはなかった。

「……えっと、つまりここはルーエンって名前の街なんですね。元は魔法も販売してて……けど今は王都が、魔法を所持することを禁止してしまつた、と。」

「ええ……そのおかげでこんなに廃れた街になつちやつたわ。」

エドラスの事情を聞きながら、マルクはエドラスの魔法について考えていた。

アースランド、マルク達の世界では魔法とは個々人の体内にある魔力で発動させるもの。

しかし、エドラスの魔法は道具みたいなもので、体内に魔力が存在しないエドラスの人達には、専用の道具が無ければ魔法を使うことが出来ない、いわば便利アイテムのようなものらしい。

「王都か……王都ってどっちの方向にあるんです?」

「……王都に行くつもりなのか?」

「……仲間が、いるかもしれないから。助けたいんです、みんなを。」

マルクのその言葉に、お婆さんは少し俯いたあとにニッコリと微笑む。しかしその微笑みが強がりのそれだと、マルクはなんとなく感じ取っていた。

「……ごめんなさい、でも俺行かないといけないから。」

「良いんだよ……久しぶりに孫の顔を見れた様なものだから、私も救われたような気持ちになってる。」

「お孫さんは……」

「……亡くなった、って王都の人は言ってたかねえ……僕くらいの年の時に王国の軍に入ってね?それで三年くらいして……知らされたんだよ。」

凶暴なモンスターに相打ち覚悟で挑んで、食われた……って。」

お婆さんの言葉には、悲しみと寂しさが感じ取れた。マルクは拳を握りしめたあと、お婆さんの肩に手を置いた。

「……お孫さんの、名前は?」

「……マルク、マルク・オーグライ。それが私の孫の名前だよ。」

「マルク……か。偶然ですね、俺もマルクって名前なんですよ。」

「……ふふ、そうかい。顔が似ていると思ったら……名前まで一緒とはね……本当に孫が帰ってきたみたいだよ。」

でも……行くんだね?」

「は。」

「……なら、行ってらっしゃいマルク。」

「行つてきます、お婆ちゃん。」

お婆さんは地図をマルクに渡して、行つてらっしゃいと声をかける。マルクは地図を受け取り、行つてきますと返す。

お婆さんは孫を、マルクは育ててくれたドラゴン『イービラー』の事を思い出しながら王都に向かうために外に出たのだった。

「妖精の尻尾だ！この街に妖精の尻尾のメンバーがいるぞ、捕まえろ」

！！

「……アレがさつき聞いた王都の……つていうかなんで妖精の尻尾が狙われてるんだよ。」

ナツさん達が何かしたのか……いやいや、そもそもここ別世界なんだから妖精の尻尾ってギルドを知ってる人がいないと思うんだけど……」

王都に行こうと外に出ようと思っていたら、外は王都の兵隊ばかりだった。

マルクは、彼らが妖精の尻尾を探していることを知ると、一旦路地裏に身を隠して、やり過ぎす事にした。

「……一応、紋章は見えない様にしてあるけどさ……」

マルクは、自分が妖精の尻尾の紋章を付けている右肘に包帯を巻いてるのを見ながら、やり過ぎすことにした。

「……ん？何だ今の竜巻。」

突然街中で発生する竜巻。明らかに自然のものではないそれは、ナツ達がこの街にいるのではないかという可能性をマルクに見出させ

ていた。

「……まあ、身を隠しながらでも迎えるかな……あっちか。」

王都の兵に見つからないよう、一旦ナツ達と合流する事に決めたマルク。少なくとも魔法を使えない彼らを守るのは、同じ世界から来た彼だけだろう……とマルクは思っているのであった。

「……あれ、魔法を使えないのなら今の竜巻は何だ……？」

「……あれ？いない……」

マルクは少し時間をかけて、竜巻が発生した場所にたどり着いた。弧を描くように移動したのだから位置に多少の誤差はあるだろうが、それでもそこまでの違いはないのでは？とマルクは思っていた。

「……よくよく考えれば途中から王都の兵もどっかに行ったような……姿見かけなかったもんな。」

竜巻が起きた場所、先程まで大量にいたのに消えた王都の兵。マルクは頭を捻って、何があつたのかを予想する。

この街に自分以外の妖精の尻尾の誰かがいたことは確実であり、そしてそれを追いかける兵がない。その事からマルクは一つの予想を立てた。

「……俺、おいてけぼりにされた……？」

マルクは急いで地図を広げて、王都までの道程を見る。一応、王都に行くための地図だが、それは直線的なものでなくどうすれば効率的に行けるかまでの事柄が書かれた地図なので……

「……とりあえず、シツカの街に行けばいいのかな。そこにナツさん

達がいるかは分からないけど、まあ向かうしかないよな。

多分まだ俺の存在は王都の兵にはバレてないから、比較的向かいやす
すい……答！」

そうと決まれば、と彼は大急ぎで地図に書かれているシツカの街へと向かう。

まだ彼にとっては何も分からない事だらけの異世界エドラス。しかし、それでも彼にとってはナツやウエンデイがいることが救いになっていた。

「……にしてもどうやって逃げ切ったのやら……もしかしてさっきのお婆さんみたいに、協力してくれる現地人がいるとか？」

色々な可能性を考えながら、マルクはナツ達の後を追うようにシツカの街へと向かうのであった。

王都へ

「……」

「いやあ、まさかこんな所で会えるとは思いませんでしたよオーグライ殿！」

「あ、ああ……偶然にも王都に行ける手段が見つかってよかったよ。それで、魔力抽出が……明後日なのだったな。」

「この速度だと……着くのはあと1時間くらいか？」

「いいえ、もう少しかかりそうですな。何せ、まだ魔力が少ないですから……慎重に使っていかないと中途半端な所で魔力切れを起こしかねませぬ！」

今マルクは王都の船に乗っていた。マルク自身もあれよあれよという間に連れ込まれていたのだが……何故こうなってしまうているのか、約一時間ほど前の話である。

マルクは、シツカの街へと着いた。ここにウエンディとナツがいるかもしれないと判断したからだ。

しかし、マルクが到着した時にはシツカの街には既に王都の船があった。王都まで歩いていくつもりのマルクだったが、どうにも魔水晶ラクリマにされた妖精フェアリーテイルの尻尾のメンバー達の魔力抽出が、二日後に迫っていると王都の兵達が言っていたのだ。もしそうなってしまうえば、恐らく元に戻すことは不可能だろうとマルクは考えた。

ならばどうするか？船の中に潜入すれば早い、と考えたマルクは誰

にも見つからないように船に近づいて行った。

「……ここまで来たのはいいけど……さて、どうやって入ったものか。」

建物の陰に隠れて船の様子を窺うマルク。だが、船の周りには多数の兵士がいて近づくのも困難な状況だった。

様子を伺ってじっとしているマルク。船の方に集中していたせいで……後ろにいた兵士の存在に気づくことが出来なかった。

「あの――」

「っ!？」

『妖精の尻尾のメンバーということがバレたのか』そう考えたが、後ろにいた兵士の様子はマルクの思うものとはどこか違っていた。

「マルク・オーグライ殿ですよね？」

「……は？」

「丁度よかった! 貴方も呼び戻せと言われていたのです! ささ、船にお乗り下さい!」

話もよくわからないまま、そんな感じでマルクはそのまま船に寄せられたのであった。

「……にしても、何やら若くなっていますませんか? それも、あなたの作り出した魔法の成果ですか?」

「あ、ああ……そうだ。まあ……少し弊害があるのか違和感を感じる所はあるかもしれないが、そこは見逃してくれ。記憶も少々曖昧になっただけだ。」

「ふうむ……なるほど、通りでお連れした時に見せた時に困惑していたわけですな。」

性格も……だいぶ変わっていますし。」

「……そんなに酷かったか？前の俺は。正直に答えろ。」

マルクの言葉で兵士は少し悩んでいた。一体自分そつくりなマルク・オーグライという人物は、どれだけ粗暴な男だったのかとマルクは妙に申し訳ない気分になってしまっていた。

「そうですねあ……ラクリマを使った実験と、それをほかの誰かに振るうという嗜虐心で満ち溢れた方……と私は聞いております。」

何せ、危険生物の体内に乗り込んで、その生物に取り憑く……そんな危険な行為も平気でしておりました。

その後、自分の体をまた作り出して移し替えたと聞いていましたが……自分の体すらも捨て駒にするその性格故に、使う魔法はすべて禁止がかかっていましたな。」

「そんな危険な魔法だったかねえ……」

「あれを危険と言わずして何が危険なものか……自分の魂を相手に取り憑かせて自分のものとする魔法、記憶から肉体を新たに創造する魔法……他には、相手を食らって全てを魔力へと変換する魔法。」

最後の魔法は例のラクリマに返還する技術に応用されたみたいですが。」

マッドサイエンティスト、という言葉が似合う人物なのは間違いがないだろう。

聞いた分では、どう見繕ってもこういう評価になってしまうのだ。だが同時に、天才でもあるというのがマルクの評価でもあった。

「……我ながら凄いものを生み出したものだ。」

「いやはや、全くですな。そう言えばマルク殿、どうしてまたそんな体に……と聞いても、今は記憶が混濁している可能性があり忘れているかも知れませんな。」

「……そうだな、どうして俺もこの体にしたのか謎だったよ。だが今は気にすることでもあるまい。魔力抽出に間に合うのならよかったよ。」

「ふむ、やはりエドラスに魔力が宿るのは見てみたいのですかな。」

兵士はそう言うが、マルクは皆を助けられる時間に間に合うという意味合いで言っていた。当たり前のことだが。

そして、先程から感じている違和感。オーグライという人物と間違われているのは理解している。しかし、そのオーグライという人物はマルクを助けてくれたお婆さんの孫の名前だった。つまり、魔法を作り出していたオーグライと、彼女の孫であるオーグライの二人がいる、ということになる。

「……さて、そろそろ着陸の準備をしておいた方がいいですよオーグライ殿。」

「分かった。」

少し、王都の城で調査する必要があるとマルクは考えたのであった。

「……俺はしばらく城を歩く。それでも構わないか?」

「ええ、ですが時間までには王の元へ向かってください。」

着陸した飛行船。マルクはそのままどこかでマルク・オーグライとラクリマの情報を得られないかと、城内を歩いて資料を探すことにした。

「……と、思っていたが……まさかあんな巨大なもんだったとは。」

城の窓から覗く風景。そこには巨大なラクリマが存在していた。明らかに異質で巨大なラクリマ。それが妖精の尻尾の、マグノリアにいた全員の命と魔力を変質させたものだということは、すぐに分かつ

た。

そして、少し目を離れた隙にマルクは後ろから剣が首に押し当てられていた。

「誰だ貴様は、どうして城内を歩いている。」

「……俺だよ、マルク・オーグライだ。姿形は変わってもそれは分かるだろう?」

後ろにいる人物を確認したかったが、今動いた瞬間にまず首と胴体がおさらばしてしまうのはマルクも理解していた、だから今は動かないことにした。

「ほう……ならば、質問に答えてもらおうか。お前ならば、答えられるだろう?オーグライ……俺の名前はなんだ。」

「つ……」

答えられない、そもそも聞いたこともない声なのに分かるはずもないのだ。

どう答えたものか、とマルクが焦っていると……前から誰かがやってくる音が聞こえてきた。

「あつれ?お前マルクじゃん!変人奇人で有名なマルクじゃん!!あれ、てか何してんだヨ!パンサー・リリー!」

「ヒューズ……俺の前では口を閉じることを覚えておいた方がいい。喋る事が、悪いことを引き起こすということも覚えておけ。」

「んだヨんだヨ!お前がいう事じゃねーっつの!!」

二人が言い争いをしている間に、マルクは剣から逃げようとするが、パンサー・リリーと呼ばれた後ろの人物は、マルクの動きに合わせて動かしてくるために、逃げられずにいた。

「……いい加減、止めてもらいたいもんだな?俺がマルク・オーグライって証明がそんなに必要か?」

「ふん、アイツが戻ってこいと言われて戻ってくる性格じゃないのは知っている。そもそも、お前のように落ち着いている人物でもなかった。」

「あ?パンサー・リリー、オーグライが人のことに関してはどこん物覚えが悪いっての忘れたのか?」

自分のことさえ名前と作った魔法以外の全部は忘れてるつてのに
ヨ！そいつが本物か偽物かなんて判断する術ねーつての!!」

ヒューズと呼ばれた少年は、マルクも少し鬱陶しいと感じる程に
ンションが高かった。

しかし、今のマルクにとっては救世主でもある。名前で判断するし
かないのならパンサー・リリーも、どうしようもないだろうから、だ。
「……ならば、自分の魔法のことについて語ってもらおうか？お前の
作った魔法の『名前』を答えろ。これならば答えられるだろう……」

しかしパンサー・リリーも諦めなかった。今度は魔法の名称と来
た、マルクは、オーグライと呼ばれる人物の殆どを知らない。答えら
れない質問にどう答えるか、マルクは頭をフル回転させていた。

「……答えられないか？お前自身が作った魔法だというのに。」

「……ああ、答えられないね。」

「何だと？」

敢えて忘れたフリをする。それがマルクの出した答えだった。どう
答えようとも、パンサー・リリーは首を切ろうとするだろう。即座に
切られるくらいなら、意表を突く為にあえて堂々としていればいいの
では……と、切られる前提の作戦になってしまっていた。

「だってそうだろう？いつまでも覚えていられるほど、俺は良い奴
じゃないんだ。」

人は忘れる、そうだろうか？そもそも体を乗り換えていけば、当然記
憶なんて常人よりもポロポロ零れていくんだぜ？覚えていられると
思うのか？」

「……」

パンサー・リリーは訝しげにマルクを見る。そしてマルクは、パン
サー・リリーがどういう行動に出るか……を確認する前に、すぐさま剣
から離れる。

「ふう……全く、人の首に剣を当てるもんじゃないぜ、パンサー・リ
リー。」

「……まあいい、侵入者だったとすればすぐに分かることだ。城の中
で事を起こせば……すぐさま処罰されるハメになるぞ。」

「へーへー、分かってるさ。」

そう言つてマルクは離れていく。内心、疑念だけで城で剣を振り回しかけたお前が言うことか、と思いつながら。

「……クソつ、全然見つかんねえ……」

マルクは城の書庫らしき場所にこもっていた。情報を調べるにしても、城の人間とあまり関わらないようにしなければ、バレる可能性があつたからだ。幸いに、オーグライが記憶能力に問題がある人物だつたおかげで難を逃れているが。

いつの間にか居なくなつていたヒューズはともかくとして、自分のことを警戒しているパンサーリリーが離れている今が、調査できるチャンスだからだ。

しかし、ラクリマにされた人々を元に戻す方法は一切存在していなかつた。オーグライという人物の私室を漁ろうとしたが、そもそもよく城からいなくなるために城に自分の部屋どころか、自分の家すらもまともに持つていないというのだ。

「……手掛かりはこの書庫だけだが……魔法の文献はあれど、その対処法が載つてゐるわけでもないのがな……」

かなり積み重ねられた本達。魔法関係の本を集めては軽く本を覗いて、求めている内容と違うなら本を戻してそれらしい内容なら手元に取っておく……という感じで本を集めていた。

「……そろそろ王との会議とやらか。まあせいぜい怪しまれないようにしておかないとな。」

……やっぱり、渡された服着ておかないといけないかなあ……」

軽く溜息をつきながら、マルクは渡された服を着る。重役が着る服だとされているが、正直ブカブカな上に、自分のことを警戒しているパンサー・リリーに睨まれるのが目に見えているからだ。

「まあ、いかないと駄目なんだろうけどさ。」

ブツブツ文句を言いながら羽織るマルク。しかし今のマルクはマルク・オーグライという人物になりきっているのです、仕方ないことでもある。

「……さて、行くか。」

そうしてマルクは、一旦部屋から出る。全く知らないオーグライという人物になりきって、王との話し合いに挑まなければならぬ訳だが……上手く何かしらの情報が聞ければいいが、それが上手くいくわけでもないのはマルクが一番理解していることだった。

「……あ？何でこんなところに本が無造作に置かれてんだよ……全部魔法関連、それも……ラクリマに変換する技術関係の本ばかり……今更見る奴らがいるとは思えねえが……」

そして、マルクが居なくなつたあとに仮面をつけた男が入ってくる。男は本を無造作に持ち上げてその内容を表紙だけで判断している。

その男は何を思ったのか、本を投げ捨てて面の上からでもわかるほど口角を上げる。

「……つまりアレかあ、誰かが個人的な恨みで誰かをラクリマにして消そうとしているか……逆のパターンで、戻す方法を探しているか……って事か。」

男は来ていた上着を脱いで腰に巻き付ける。その体には服の上からでもわかるほどの、いくつものラクリマが埋め込まれていた。

「……誰だか知らねえけどよオ……この俺様……マルク・オーグライのあずかり知らぬところで新しい魔法を作るなんてのはア……見過ごせねえぜ……！」

自身をマルク・オーグライと名乗った青年は、そのまま部屋を出ていく。その表情は、彼の被っている面のせいで見えることは無いが、

その纏うオーラは狂気そのものであった。

合流

マルクがエドラスの王都に入った日の夜。ここまでバレルことなく行動できていた。

自分の知るエルザと全く同じ姿の、エルザ・ナイトウオーカーがいた事などはやはり驚いたが、それも本命に比べれば些細なことである。

「……この本も、この本も違う。」

本命とは、マグノリアにいた人々が変質させられた魔水晶ラクリマを元の人々の姿に戻す事である。

しかし、その事についての記述がある本は書庫に存在していなかった。戻す方法を書いてある本が、簡単に見つかるような場所に置いてあるとも限らない。何時間探しても見つからないという事がよりその事実を明確なものへとしていた。

「……他に方法を知っているとしたら、王様か……マルク・オーグライのどちらか……だが、オーグライはどこにいるのか分からないし王様は安易に近づける隙もない。どうしたものか……」

本を片付けてから、マルクは書庫を出ようとする。だが、扉の向こうから強烈な匂いがした。滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーだからこそ分かる『血の匂い』である。

部屋に入る前まではこんな匂いは一切していなかった。つまり、匂いの元が部屋の前に置かれているか……血の匂いを感じさせるほどの人物が扉の向こう側にいるか、の二択である。

「……なあ、おい。気づいてんだろ？ 『扉の向こう側に誰がいる』『何が待ち伏せしてる』ってよ。」

そして、向こう側にいる人物も、マルクが扉を開ける事を躊躇しているのが分かったのか、声を出す。

「……何の用だ。」

「俺のフリをしている奴がいるらしいからなあ……どんな奴かと確認ついでに少し話し合おうと思つてな。」

「……残念だが、お前と喋る言葉を俺は持つてない。」

「お前になくても俺はある。何なら今ここで大声で喋ってもいいんだぜ？『俺の名を騙る偽物がいる』ってな。」

わざわざ一人になるだろう夜まで待つてやったんだ、少しくらいのおしゃべりはして欲しいもんだぜ。」

マルクは拳に魔力を集中させる。ドアを殴り吹っ飛ばして相手の視界を封じながら、その隙に窓を突き破って脱出する。

瞬時にマルクはこの作戦を実行しようとした。自分の素性がバレた以上、ここにいる意味が無いからだ。

「おっと、下手な真似はしない方がいいぜ？ドアをぶっ飛ばして窓から飛び出したとして、逃げ切れると思ってるのか？」

空を飛ばない限り……いや、仮に空を飛んだとしても無意味だな。お前の顔は知れ渡ってんだ、無駄な足掻きってやつだ。」

「……何がしたいんだよ。」

「言っただろ？お話がしたいってな……アースランドの人間……いや、アースランドの『俺』との話がしたくてな。」

いったいどんなもんかと思つたわけだ。だが見た感じ……ガキだった。そりやあもう腕も歳もガキそのまま……だから話し合いが大切だつて思つたわけよ。」

「……世間話でもするってのか？」

「世間話……世間で起きていることを話すっていうなら、ある意味世間話だな。」

妙な言い方をするオーグライに、マルクは苛立ちを募らせていた。だが、オーグライの言う通り、逃げきれない可能性も無いわけではなかった。

「何が言いたい。」

「……この城に、ナツ・ドラギオンとルーシイ・アシュレイ……ああ、勿論アースランドののだが……その二人が来るらしい。地下にある坑道を通つてな。」

「っ！」

情報の真偽はともかく、マルクはナツとルーシイがこの城に訪れると聞いて驚いた。ルーシイが無事だった、というのは安心できること

だ。しかし、この男が何故その情報を持っているのか……というのがマルクが最も驚いたことだった。

「何故知っているか……って思ったろ？」

「……」

「知っている……と言うよりかは、『そう教えられた』と言った方が近い。一応言っておくが、スパイとかそんなもんじゃねえ……そういう運命になる、って事だ。」

「そうか——」

それだけ聞ければ十分だと、マルクは手に魔力を貯め直して一気に突破しようとする。

だが、それは叶わなかった。

「っ!?!床が——」

突如床が陥没……否、床に穴が空いたのだ。まるで生き物が口を開くような、そんな開き方だった。

そしてそれはマルクを啞えるようにして拘束していく。

「ぐっ……こんなの、俺の、魔法……で……!?!」

「魔法で突破できない、なぜだ……?と思つたら?簡単さ、それが俺の使う魔法の一つ、魔力吸いしマジックドレイン・ザ・ドラキュリア吸血鬼の力だからだ。

全ての魔力を吸い尽くす……そういう魔法さ。因みに、床が陥没したのは、この魔法が相手の足元に展開される魔法だからだ。地面だろうが空中だろうが建造物の中いようが水中だろうが、一切関係なく相手は今のお前のようになる。」

「……さつきから俺の考えている事をよく当ててくるな。心を読む魔法でもあるのか?」

段々と、マルクの魔力が吸われ始める。それに加えて魔法も発動できななのだ。アースランドの人間向けすぎる魔法ということが、マルクにさらなる疑問を抱かせていた。

「ああ、魔法さ。体内に魔力を持つ者の波長を捉え、その考えをおぼろげにだが伝えてくれるんだ。」

これも俺の魔法……どっちもノーモーションで、しかも即座に発動できるから、使い勝手がいいんだわこれが。」

「……なるほど、確かに相手の魔力を吸う魔法なんてのがあったらそりゃあ強いな。

けどよ……それらの魔法はいったいこの世界の何に向けて使う代物なんだよ?」

「……魔力を持つ者達、とだけ言っておこう。あとは自分の頭で考えることだな!」

さて……いい実験材料が手に入ったもんだ。そろそろナイトウォーカーの方も仕事を終えたころだろうしな……」

「つ……ウエンディ……!」

「残念だったな? マルク・スーリア……子供のお前じゃあ俺には勝てない。誰かを殴る、って甘い考え前提で魔導士やるもんじゃねえぜ。」

「くっ……そおお……!!」

「かっかっかっ!」

そして、マルクはこのあと意識を失った。急激に魔力を吸われたため、貧血のような症状が出たのだ。

意識を失ったマルクは、オーグライの連れてきた王都の兵士達に連れていかれるのであった。

「うっ……」

「マルク!? ねえ大丈夫!」

気がつくくと、マルクは牢に入れられていた。何とか辺りを見回すと、ウエンディとナツも同じ部屋に入れられていた。

「……ああ、大丈夫……ここは……城の中か……」

「うん……それより、マルクも無事でよかった……やつぱり滅竜魔導士は生き残ってたみたいだね……」

「……そうだな、となるとガジルさんも生きてるだろうけど……兎も角、一回情報交換しよう……ナツさん、いいですよね。」

「……ああ、そうだな。」

妙に機嫌の悪いナツに首をかしげながらも、マルクは自身の身に起こった事を話す。

ジェラルルのこと、マルク・オーグライのこと……カエルに飲み込まれて川で体を洗った話以外は、全て話した。

そしてウエンディ達も自分達の身に起こったことを話した。この世界にはもう一つの妖精の尻尾があり、そこにはもう一人のみんながいて、自分達もいたということ。

そして、ルーシイが星霊ホログウムによってアニマの吸収から逃れられていたこと、そのルーシイもまた別の場所で捕まっていた処刑されるかもしれない、ということ。

そして、一番重要な情報――

「……ハッピー達が、女王から初めは滅竜魔導士の抹殺……そして後に遠隔で確保を命じられていたエクシードだったなんて……」

「うん……多分、ハッピーはともかくとしてシャルルもわかってなかったことみたい……」

そう、ハッピーとシャルルが滅竜魔導士の抹殺を命じられていたこと、後に魔力を確保するために連行に置き換えられたこと。それが重要な情報だった。

だが、よくよく考えるとおかしい所があるとマルクは疑問に思い始める。

「……でも、それちよつとおかしくないか？」

「……え？」

「本当にシャルルとハッピーが最初滅竜魔導士の抹殺を命じられていたんだったら……俺のところやガジルさんにもエクシードはついて行かないやならないはず。」

けど、実際には俺やガジルさんにはエクシードは付いていなかった

た。俺は……シャルルが近くにいたから、もしかしたら俺も標的になっていたのかもしれないけどさ……」

「そう言われてみれば……そうだね。」

しかし、その事に対しての答えは今では出ることには無い。一つの情報から考えられる事なんてたかが知れているからだ。

「ともかく、何とかここから脱出しないと……」

「ンー、それは叶わない願いだねえ。君達はこれから永遠の魔力の為の踏み台として使われるんだから。」

「……俺達が何かのパーツだとも言ったそうなお口振りですね？」

現れたのはピンクの鎧を纏っている男だった。名をシュガーボーイ。王国の騎士の一人である。

「ああ……簡単な事さ、君達の体から魔力を吸い上げるのさ。その魔力で永遠の魔力を掴むのさ。」

さ、無駄話は終わりだ……そこのお嬢さんと桜色の髪をした君だけなら出ていいぞ。」

「魔力が欲しいって言うには……俺は出さないんですね。」

「君はこの世界でも魔法が使えると聞いたのでな。一度魔力を全て吸ったが回復されていると困る……そういう事だよ。」

恨むなら、彼に出会った不幸を呪うんだね。この世界の君とやらに。」

「……素直にウエンデイとナツさんを出させるとでも？」

「出させるさ、魔法で抵抗できる部屋にわざわざ移動させると思うのかい？」

それに、抵抗した場合君のガールフレンドがどうなっても知らないぞ？」

「……が、ガールフレンド……!?!」

シュガーボーイの言葉で真つ赤になるウエンデイ。しかし、それが脅しだと分かっているマルクは本気でシュガーボーイを睨んでいた。

「おー、怖い。大丈夫さ、この部屋でじっとしていれば何もしないからね。」

「……マルク、俺達のことには心配するな。ぜってえ脱出してお前も助

けてやるからよ。」

マルクを安心させるかのように、ナツはマルクに優しい言葉をかける。そしてシユガーボーイは、ウエンデイとナツをそのまま連れ出したのであった。

「……クソっ!!」

マルクは忌々しいと言わんばかりに言葉を吐き捨てる。どれほど魔力を使おうとしても、うんともすんとも魔法が出る気配はなかった。

どうやってウエンデイ達の所に向かうか。それだけをマルクは考え始めるが、ふと誰かの足音が聞こえてきた。

巡回に来た兵士だろう、とマルクはすぐに足音のことは忘れて思索に集中し始める。

「よー、魔法が使えない気分はどうだー?」

「……マルク・オーグライか。なんだ、笑いに来たのか。」

「おー、その通りだ。めっちゃ笑いに来てやったぜ。」

マルク・オーグライ。エドラスにいるマルク。それが今何故か、マルクのいる独房の前にいた。

笑いに来た、本当にそれだけなわけがないとマルクは心の中で思っていた。

「……お前、なんなんだ?」

「ん?俺か?マルク・オーグライ、年齢はこの前30になったばかり、

ここ王都で俺は魔法を作る役職についている。

何度か死にかけたが、その度に何とか生還して――」

「そういう事じゃねえよ。お前は本当にマルク・オーグライなのかって話をしてんだよ。」

「……何故、俺がマルク・オーグライじゃないと思ったんだ？その理由を聞かせてもらおうか。」

笑みを保ったまま、オーグライはマルクに質問を返す。マルクはオーグライを睨みつけたまま、話し始める。

「……あんたの祖母に会ったんだよ。」

「ほう？」

「別に、孫が30歳はおかしいって話をする気はねえよ。だがな、色々食い違ってるんだよ情報が。」

俺はあの人からあんたは死んだと聞いた。化物に食われて死んだっていうのを兵士から知らされた、って話をな。

だが、ここに潜入する前に兵士と話していたが、あんたは自ら化物の腹に飛び込むようなやつだとも聞いた。

……何で魔法を作るようなやつが前線にいる？王都に入って五年も経ってないのにそんな融通の利く役職につけたっていうのか？

それに、そんなにポンポンと魔法を作らせてもらえるもんか？使用を禁じられるような魔法を作り続けて王都から追い出されなかったのか？」

マルクの追い立てるような質問攻めに、オーグライは黙った。そして、すぐに笑みを浮かべたかと思うと、ドアの鉄格子に顔を近づける。「なら……聞かせてやるよ。それらの情報が一致するように……俺の過去をな。」

そうして、オーグライは自身のことを話し始めた。

マルク・オーグライ

「そうだな……まずはこの体の事について話してやるか。」

そう言つてマルクの閉じ込められている独房へと入つてくるオーグライ。無論逃がさない為もあるだろう。

しかし、かなり無茶をしていることには間違いない。

「ほれ、見てみ。」

そう言つてオーグライは上の服を脱いで見せつける。体に埋め込まれている『それ』を見逃させないために。

オーグライの体には幾つもの魔水晶ラクリマが埋め込まれていた。大きさは一つ一つ異なつており、それが異質だということはアースランド、エドラスなんて関係なく誰でもわかることだった。

「なんだお前、その体……」

「今までの実験の成功例だ。で、この体になつた経緯から話すとしてよ。う。」

お前、マルク・オーグライは飲み込まれたと言つたな？あれは正解だ。俺は1度モンスターに飲み込まれたことがある。いやあ、あの時は死ぬかと思つたぜ。

で、だ……飲み込まれた時に不幸にも俺の使つていた武器のラクリマ部分が俺のハラに突き刺さつちまつたんだよ。しかも取れない。

で、消化されていく鎧とか見ていく内にこう思つた訳だ『死にたくない』『化け物の腹の中で一生なんて終えたくない』『強力な魔法が使いたい』みたいなにな。

すると不思議なことが起こつた。俺自身、それ以降の記憶が抜け落ちちまつているが、どうやら俺自身が自分の体から魔法を出して化け物の腹をぶち破つて出てきたらしい。ここまではいいか？

「……ラクリマがお前の生きる、という意志に反応してお前はエドラスで初めて、道具を使わず魔法を使った人間になつたわけか。」

「そういう事。さ、続きを話すか。」

指を鳴らして、のりのりで話すオーグライ。そして、適度にマルクに話を振つてわかりやすく理解できるように仕向けていた。

「それからだ、俺が魔法開発の部門に関わったっていうのは。今じゃあトップに君臨しているが、やはり俺も最初は一番下っ端……いや、それよりも酷いモルモット扱いだったな。」

『魔法を使え』『使わないと廃棄する』とか完全に人間に対して使う言葉ではないな。」

「……で、何がどうなって今の地位を手に入れたわけなんだよ。」

「新しく魔法を作ってやったのさ。適当なラクリマを体に埋め込んで元々入ってたやつと掛け合わせできることに気づいたからな。」

面白いぜ？ AとBを掛け合わせてA BとB Aの二パターンが出来上がり、単純に二つを足す事でCが出来上がる。AからB、BからAを引くことでDかEの魔法が出来上がる。

5パターンだ、たった二つのラクリマから5つ魔法が形成された。そしてそれを秘密裏に王に提出した。その中の一つに人間をラクリマに変える魔法の元祖もあったんだ。」

「ラクリマ二つで別の魔法ってのは分かる……だが、たった二つでそんなに強力な魔法が作れるのか？」

「作れちまうんだから驚きだよな、俺だって驚いたぜ。んで、王は俺の功績を認めて俺の役職を上げた。」

んで、俺は俺で気づいた時にはもうラクリマを漁りまくっていた。だが、何でもいってわけじゃなくなてな。どうしても俺と合わないラクリマもあった。そういうのは何故か同化されずに魔力だけ吸収されたな。」

「……で、俺の疑問を解消するってのは？」

「もう答えは出てるぜ？ 簡単さ、飲み込まれた後に復活した俺は生きる事への執着が、とんでもなくくらいに大きくなってたんだよ。」

俺ですら驚くくらいにな。あ、感情的な話じゃなくて本能的な話な？ で、それはラクリマの力を存分に発揮できる代物だった。

つまり、だ……ガキとはいえそこそこ頭の回るお前ならわかるだろ？」

「……生きる事への本能的な執着を無理やりあげるために、化け物の体内に潜り込んだり、みたいな命懸けの行動をとるようになったわけ

か。」

「その通り。俺は……いや、俺の体は生きようとした。それはもうとんでもなく、魔法の力を発揮してくれた。」

そして俺の体は魔力に順応していつていた。そのせいで余計に魔法も強力になっていった。」

もう見せる必要は無いと判断したのか、オーグライは脱いだ服をまた着直して、改めてマルクに向き直る。

「さあまとめの時間だ。答え合わせをするとともに、合否を決めるとしよう。」

俺の真実を……簡単にまとめてみな。」

「……お前は一度化物に食われた。その際にラクリマが体内に入り込み、お前の生存本能がラクリマの中にある魔力を動かした。」

その結果お前は……エドラスで初めての、道具なしで魔法の使える人間になった……って事でいいの？」

「んー、まあその通りだ。細かいのは置いておくとしても、その言葉だけで俺がマルク・オーグライって証拠になるだろう？」

オーグライのその言葉でマルクは黙る。それを見たあとにオーグライは立ち上がり、そのまま出ていこうとする。

「……どこに行くつもりだ？」

「お前の仲間の滅竜魔導士が、魔力を吸い取られてる場所さ。お前もせいぜいそこで待っているがいい。」

永遠の魔力はすぐに手に入る……滅竜魔導士はそういう存在だからな。」

「……ウエンディに手を上げてみる。ただでは済まさないからな。」

「おー怖い怖い。滅竜魔導士と言うだけあって、凶暴なのかね。まあ、そこから動けないだけのお前に、何が出来るのやら……」

そう言つてオーグライは出ていく。マルクは、彼が出た後に耳を澄まして彼が離れたことを確認してから、何とかドアを突破する方法がないかを考え始める。

しかしやはり、それは魔法無しでは難しいことだと再確認するだけになってしまった。

「くそっ……！部屋から出る事さえ出来れば………部屋から出る……？」

マルクは、改めてドアを見る。特殊なものは、一切なさそうなドア。そして、ドアは金属で出来ているものだった。

マルクは少しだけ躊躇したが……ウエンデイやナツを助けるためならば、と自分の体を勢いよくドアに叩きつけた。

「いっつでえ……！」

激痛に悶えるマルク。しかし、その痛みも引く前にもう1度自分の体をドアに叩きつける。いや、1度だけではなく何度も……たとえばぶつけた所から血をにじみ出たとしても、それを続けた。

「おい！何をしている!!」

「っ……！」

異変に気づいたのか、近くにいた兵士達がマルクの所まで駆け寄る。しかしドアは開けようとしな。恐らく、オーグライか誰かにマルクが魔法の使える状態だというのを聞いたのだろう。そう考えたマルクだったが、それでも体をぶつけるのを止めない。

「おい！いい加減にしろ!!」

「開けるなよ………この中じゃあ俺たちの魔法も使えないからな………こいつがやりたいのはここから出ることだ。つまり、こうやって俺達に開かせる事が目的なんだろうしな。」

「分かってはいるが………」

「ぐっ!?!」

ぶつけていた体、肩のあたりから嫌な音が響く。しかし、そのかきもあつてかドアがほんの少しだけ凹んでいた。

兵士達は、そのことに未だ気づいていない。その機会をマルクが逃す手はなく、マルクは更にぶつけていく。

「……お、おい………ドア凹んできてないか?」

「い、いや………そんな訳ないだろ?こんな子供だぞ?凹ませられるわけ………ないだろ?」

「い、いやそれにしては………ドアも軋み始めてきてるし………こいつ本当に子供かよ………アースランドの人間ってのは化物かよ………!?!」

「……へ、だからどうした。この部屋から出て魔法が使えるようになったとしても、ボロボロで弱りきってんだから俺達の魔法使えば瞬殺だろ。」

「……だ、だといいいけどよ……」

軋み始める扉、その音はドアをドアたらしめている壁との留め具が、段々と外れかかっている証拠だった。

「が、ぎ……い！」

マルクがぶつけていた肩が使い物にならなくなる。しかし、すぐさまマルクは体勢を変えてぶつかり始める。自分のことよりも大切なものを助けたいがために、動いていた。

「……ありやあダメだな。たとえここから出れたとしても満身創痍じゃねえか。まだガキなのによく頑張ってるもんだ。」

「……ドアが外れても、この調子なら確かに体はボロボロだな。俺達の魔法でも確かに何とかかなりそうだ。」

安心しきったかのように兵士達は話し始める。ドアが兵士達の手によつて開けられようが、開けられなろうがマルクにとっては大した違いはなかった。どちらにせよ出られるのだから。

「よし、んじやいっそのことドアの両側に立ってドアが外れた瞬間にありつたけぶち込んでやろうぜ。」

永遠の魔力が手に入る祝いだな。」

「そうだな、そうしてやるか。」

そう言つてマルクがドアにぶつかり続けている中、男達はまるでおもちゃで遊ぶかのようにマルクの事を話し合う。

ドアの両脇に立ち、持っている武器を構える。マルクが出てきた瞬間に魔法を放つ。そしたら気絶でもなんでもするだろうと、兵士達は楽観的に考えていた。

「これ……で……い！」

何度もぶつかっている内にドアは完全にガタつき始めて、残り数回強い衝撃をぶつければ、壊れるところまで来ていた。

しかし、何度も何度も……両肩を壊すほどぶつかり続けた結果。マルクは止めと言わんばかりにその扉に全力で蹴った。そして、マルク

の思い通りその扉は完全に留め具が外れ、壊れたのだった。

「ガキにしては相当な力があるんだろうが……」

「ここが運の尽きってやつだ。」

そして、兵士達はマルクに向かってありつたけ魔力を叩き込む。並の人間ならば、大怪我間違いなしと言えるほどの量だった。

だが――

「……魔力抽出のために連行した二人の滅竜魔導士はどこだ……」

「なっ……!?!お、おい魔力は!?!」

「も、もうねえよ!な、なんで効かねえんだよこの化け物!!」

「……どこだ、って聞いているんだけど……その耳は飾りか……?」

マルクは脅しと言わんばかりに口に魔力を溜める。それを見て兵士達は、恐怖した。口に魔力を貯めることが出来る人間なんて、まともに見たことがないからだ。

「わ、分かった!言う!言うから助けてくれえ!!俺を殺さないでくれえ!!」

「……俺を殺そうとしておいて、随分勝手だけど……まあ、今はそんなことどうでもいいな……」

そうして、マルクはウエンデイたちの場所を聞いた。

聞いたあとはずぐさま向かった。兵士達のことには気に止めなかった。気にしていてもしょうがない、今はどうでもいいことと言わんばかりに駆けだしたのだった。

匂いを辿って、マルクはどうかこうにかナツとウエンデイが捕

まっっているであろう部屋の近くまで来ることが出来ていた。

「……あの部屋、か……！ウエンディ！ナツさん！無事、です……か……？」

しかし、そこには予想だにいなかった人物が一人いた。グレイである。アースランド側のグレイかそうでないかの判断はともかくとして、グレイがそこに居たのである。

そして、マルクの声でその部屋にいた全員がマルクの方に振り向いた。

「マルク！無事だっただね!？」

「ちよつとあんたその怪我どうしたのよ……!？」

「お前も来ていたのか……にしてもその怪我大丈夫かよ。」

シャルル、ウエンディ、ルーシィ、グレイ。そこには、4人の妖精フェアリーテイルの尻尾のメンバーがいた。

しかし、ウエンディがいるというのが気がなかった。

「あの、ナツさんはどこに——」

マルクがナツのことを聞こうとすると、廊下の方から誰かが走ってくる音が聞こえてくる。ここで援軍が来るというのも考えづらい話ではあるので、全員が敵が来たものと判断する。

「誰かきやがった!」

「敵!」

だがしかし、そこに姿を現したのは——

「ああああああああ!!」

「ナツかよ!!」

まるでこの世の終わりのような顔をした、ナツだった。

「エルザが二人いたー!!何だよアレ！怪獣大決戦か!?この世が終わるのかー!？」

「……グレイじゃねーか!!」

「しまらねーし、落ち着きねーし、ホントウゼエな……お前。」

エルザが二人いた事に対する驚きと恐怖、そしてグレイがいた事の驚き。忙しい人だな、とマルクは苦笑していた。

「アースランドの……私たちが知っているグレイよ。」

「何!？」

「色々あってこっちにいるんだ。エルザとガジルもな……」

「ハッピーはラクリマを止めに行ったわ。」

そしてウエンデイは何かに気づいたかのように、グレイの方に視線を向けた。

「あれ……本当だ、グレイさんがいる……」

「おや……? 地下だから陽が当たanneーのかな……自分の影が薄く見えるぜ……」

軽く再会できたことへの喜びを味わうメンバー達。しかし、時間は刻一刻と過ぎていつている。

マルクはナツ達が得た新しい情報を聞いて、自分のやるべきことを見出す。

「……はい、回復終わったよマルク。けど無茶しないでね?」

「ん、ありがとうウエンデイ。全然腕上がないから、どうしたもんかと思つてたし助かった。」

「おし! 準備完了!! 王様見つけてラクリマぶつけんの止めるぞ!!」

ナツ、グレイ、ルーシイの三人は最初に部屋を飛び出す。次にマルク、ウエンデイ、シャルルが部屋から出てくる。

「……マルクはどうするの?」

「……王国は、ラクリマになったみんなをエクシード達の街、エクスタリアにぶつける……けどそれに関しては、ナツさん達が止めてくれるだろうし、あんまり心配はしてない。」

……ただ、一人だけ……倒しておかなきゃならない奴がいる。俺はそいつを倒しに行く。あいつだけ残しておくのは……心がもやもやする。ウエンデイは?」

「私達は……エクスタリアに向かう。」

「ウエンデイ!？」

「……そっか、気をつけてな。怪我したら……怪我させたやつぶつ飛ばしてやるから。」

「ふふ……ありがとう。けど、無茶だけはしないでね。」

マルクとウエンデイは、ここで分かれた。マルクはウエンデイの、決意を宿した目を見て、やりたいようにやらせようと感じたのだ。そして、マルクは一人向かう……マルク・オーグライの所へと。

決戦

「……オー、来たか。あの部屋から脱出してくるんだろうとは思っていたが……案外早かったな。」

「……かたやエクシード達を敵に回し、かたや俺達も敵に回してる。王国は、魔力の為だけに敵を増やしすぎだと思いがな。」

エドラスの王都、その城の庭に男はいた。マルク・オーグライ、エドラスに住むもう一人のマルク・スーリア。

今、二人のマルクが対峙していた。

「コード」エクシード・トータル・デストラクション「E T D」……通称天使全滅作戦。

エクシード達を魔水晶化するのもあったが……目的としては、お前さん達のお仲間から出来たありがたいラクリマを、エクシード達の首都、エクスタリアにぶつけてエドラスに永遠の魔力を降らせるのが目的。

生きるために必要な魔力を求めて何が悪い？」

「生きるために、何も知らない人を犠牲にしているって言うのか？」

「弱肉強食って言うのはそういうもんだ。何がいい、何が悪いなんてないに決まってるんだろ？あるとすれば、自分を狙う獲物に気づかない方だな。」

「そうか……もう、いい。理屈っぽい事言っただけ……要は、勝手に踏み荒らしたやつが気に食わないってだけだからな。」

マルクは冷静に敵を見据える。それを見たオーグライは実に楽しそうにその顔を楽しそうな表情に変える。

「いいねえ、その表情……冷静に獲物を狙う目だ。食うか食われるか……魔力の食い合いといこうじゃないか……『人間もどき』!!」

「お前には負けないよ……『元人間』!!」

どちらからと言わず、同時に相手に向かって飛び出し、同時に魔法を使う。しかし、お互いの一撃目はどちらも回避して当たることは無かった。

「魔龍の咆哮!」

イーターシールド

「喰らい盾!」

マルクがブレスを放ち、それをオーグライが魔法の盾で防ぐ。マルクの魔力は大抵の魔法を飲み込む。しかし、その性質はオーグライの魔法にも言える事だったのか、互いに同性質の魔法という事で互いの魔法が互いに食いあつてしまいすぐさま消滅を迎える。

「……なるほど、こうなるのか。こりやあ互いに魔法使つてもダメー
ジは通らなさそうだなあ……つと!!」
「つぶねえ!」

直感的に察知してマルクは横へと避ける。マルクが先程いた所からは、マルクが囚われた時と同じ、魔力を吸い上げる魔法が現れていた。

「よーく避けたな。」

「2度と捕まつてたまるかよ、あんな魔法に。」

「まあ、地面にしようが、空中にしようが、水中にしようが……変わらぬ相手の足元に出る仕様のこの魔法だが……実はとある魔法と組み合わせると面白い変化が起きる。」

そう言つてオーグライは掌から魔力で出来た鎖を生み出す。しかし、その鎖は段々と先の方が、何かの顎のような形に形成され始める。

「……魔力を持った獲物は絶対逃がさない。魔力食グラトニールいし狼つてんだ。」

こいつは……投げるところなる!」

そう言つて生み出した鎖をそのまま中に放り投げるオーグライ。空中に投げられた鎖は、先っぽがマルクの方へと向いた瞬間に……高速で接近してきていた。

「つ?!早っ!!」

鎖は地面に激突したかと思えば、そのままマルクの足元から地面を掘り抜きながら飛び出して、それをマルクが避けたらそのままUターンして再びマルクに襲いかかる、ということを繰り返して始めている。「くつ、こいつ狼つていうか蛇じゃねえか!!」

「あ?あ……多分どっちも似たようなもんだろうがよ!!ていうか……俺がいることを忘れてんじゃねえよ!!」

「がつ?!……うおっ!」

鎖に翻弄されているマルクに向かって、オーグライは殴りかかる。

不意打ちで頭への攻撃を許したマルク。だが、それでもやはり追い続けてくる鎖は何としてでもと、避け続けていた。

「二ヶブレス使うだけ魔力無駄遣いだろうし……かと言って近接技だと喰らいつかれるんだろうし……くそっ!!」

一か八かの魔龍の逆鱗!!」

腕に魔力の棘のようなものを生やし、それを向かってくる鎖に対してトンファーのようにぶつけるマルク。鎖は、その攻撃一撃で破壊され、消えていった。

「おー、良くやったな。じゃあ次は10本いつて——」

「その前にお前を殴り倒すんだよ!!魔龍の鉄拳!!」

魔力を込めた拳で、オーグライの体にあるラクリマを勢いよく殴るマルク。ラクリマさえ破壊できれば、オーグライの力の源を破壊できると考えたからだ。

「……っ!?!」

「破壊できるとでも思ったか?勢いよくパリーンって?いやいやそんなことさせる訳ねえだろうがよ。」

「というか、そんな簡単に出来るわけねえだろうがよ。」

「くっ……!?!」

殴りつけた時に鳴り響く鈍い音。マルクは少しだけ痛む手を抑えながらオーグライから離れる。オーグライの体は、まるで鉄のような硬さだったのだ。

「なんだそれ……魔法か?自分の体を硬くする魔法……」

「うーん……いや違う。俺の体は何度も変えたって言ったろ?自分の体を変えるたびに、以前の使っていた体の性質の殆どを受け継いでいる。」

前は機械に取り付いていたからなあ……その影響で少しばかり体が鉄のように硬くなっちゃってるんだよな。」

「ち……なら鉄すらもぶち抜けるくらい勢いよく——!」

「無駄だよ、体に出てるラクリマを破壊したところでな……俺の魔力は減らないんだからな!!」

そしてオーグライの体から大量に鎖が生えてくる。その鎖は先ほ

どの魔法と同じように、顎が付いている。

だが、鎖自体の数が10や20では利かないほどの数をオーグライは出していた。

「さあこいつら全員倒してみろよ！なあに、一撃で壊れるほど脆い奴らだからな！お前なら余裕で突破できるだろうな!!」

その鎖の大軍が、襲いかかってくる。噛みつかれば魔力を吸い取られてしまい、マルクは終わってしまう。

「魔龍の翼撃！」

翼のように広げた魔力で大量に破壊しつつ、再度オーグライに近づこうとするマルク。しかしオーグライは近づかれない余裕があるのか、そこから動かずに笑みを浮かべながらマルクを見据えるだけだった。

「さて……お前さん、さっき言ったよな？エクシードとお前さん達を相手したと……」

「魔龍の咆哮！」

ちっ……それがどうした……つてんだ!!今お前を殴りに行くんだから黙っとけ!!」

「逆だよ……お前さん達が俺たちに喧嘩を売ったのさ！エクシードに關してもよ！ただの喋れる猫風情に、何怯えてたんだよ家の王国はよ!!寧ろ格好の餌じゃねえか!!魔力を俺らに提供してくれる都合のいい餌さ!!」

お前さん達にしてもそうさ!!俺達にアニマという魔法を持って魔力となって、食われるだけの運命!!餌ごときが、俺達に勝てるなんて思わねえ事だな!!ひやはははははははははは!!」

天を仰ぐようにオーグライは高笑いする。マルクはそんなオーグライを見ながら少し、呆れていた。

「……哀れなもんだな。」

「……あ？」

「お前は狂ってるよ、本当にな。魔力に取り憑かれると言うべきか？」

オーグライが喋っているあいだに、マルクは少しずつ鎖の数を減ら

していった。

そして、今呼び出した最後の一本を破壊する。

「あー……そりゃあこの国全員だろ？何で俺だけにそんなこと言うんだ？筋違いとは言わねえがな。」

「いや……お前だけだよ。いや、正確にはこの王国……王様以上に魔法や魔力の事しか考えていない。」

「ずーっと、なんか頭に引つかかってたんだよ……生存本能だけで腹に刺さったラクリマの魔力を使えるのか、ましてや魔法を使えるのか……つてな。」

今気づいた、というより合点がいった。」

「……何が言いたい？」

「やっぱりお前、マルク・オーグライじゃないよ。」

「……は？」

マルクの言ったことに首を傾げるオーグライ。まるで子供のよう
な、理解ができないという顔をする。

「ラクリマに貯められた魔力は有限、無くなればまた一から貯め直さ
ないといけない。」

お前は知性の宿ったラクリマなんだよ。だからそれだけ魔力を求
める、魔力が貯められるように、体を何度も移し替える。」

「……はは、面白い冗談だな？知性の宿ったラクリマねー……やつぱ
り、冗談としては大して面白くないな。」

「じゃあなんだ、俺がマルク・オーグライを名乗ってるのはただ記憶
を読み取っただけだったっつうのか？」

「ああ、その通りだよ。有限とはいえ、何でエクシードやアースランド
の人間くらいにしか使えなさそうな魔法を、使ってるんだよお前は。」

「しかも攻撃力らしい攻撃力も全く備えていない。いや、戦えれば確
かに相手にダメージを入れる必要も無いけどよ。」

「それでも……なんでこの世界の人間やモンスターに対して、全く
もって効果の無いものを作ってたんだよ。」

「あー？あー……あー……？」

マルクの主張にオーグライは首をあちこちにつちに傾けながら、考え

も刈り取りかねない一撃だった。

「……今、解放してやるよ。お前を縛るラクリマからな。」

「が……おま、え……！」

そのまま倒れ込むオーグライ。マルクはオーグライの近くに座り込み、その顔を見下げていた。

「……お前のガールフレンドに、手を出したからか。」

「それで怒っているところもあったが、違う。」

「……なら、お前の仲間をラクリマにした事か。」

「その事でも確かに怒っていたが……それも違う。」

「なら、どうして俺を殺そうとした……いや、もう一度殺そうとした……」

息も絶え絶えになりながら、オーグライはマルクの目を見る。その目は悲しそうな表情をしているのが、特に印象的に映っていた。

「……あんたが、あんたで無くなっていったからさ。多分、あんたはいろんな罪を……いや、倫理的にやっちゃあいけないことをしている。本当に、あんたの体だけで人体実験は行われていたのか？」

「あー……そういや、引き取り手のなかった捨てられた動物……大罪人と言われた人間、はぐれたエクシード……いろんな奴らを実験台にしたなあ……俺みたいないな魔力持ちを作るために、エクシードから魔力を奪って……死刑確定の罪人に……それを無理やり注入しようとした事もあったなあ……頭ん中にかかったモヤが……晴れてきた……」

「……例え無実の人間を使わなかったんだとしても、あんたはやりすぎたんだろう。」

あんたの魔力を求める様は……怒りを通り越して哀れみすら浮かんだ。それほどまでに、魔力が無くちやあ生きていけなかったんだろう……」

「……今となつては、魔力なんてどーでもよくなってきた。なんか妙にスッキリした気分だ……」

そう言いながら目を閉じようとするオーグライ。それを、マルクは見届けるつもりだった。

だが――

「うぐあっ!?!」

「っ!?!」

オーグライの体が、段々と黒ずんでいく。否、黒い鱗が生えてきていた。

「こ、これは……!?!おい、どういふ事だこれは!!」

「お前さんの、滅竜魔導士の魔力だなこりゃあ……!ラクリマにして、いたから……!それを俺ア……体に埋め込まずに放置していた!」

「ドラゴンの魔力で……ドラゴンになるって……どう言う……」

「気をつけるマルク・スーリア……!お前の使う魔力、は……案外とんでもない——」

言い切る前に、オーグライは鱗に飲み込まれた。そして、その骨格は形を変え、背中からは羽が生え、顔の形はまさに竜ドラゴンとなっていた。「くっ……!とりあえず今は、こいつを止めないと……!」

そして、マルクオーグライは小型の黒いドラゴンへとなり果てていた。

妖精の尻尾のメンバーによる、エドラスとの戦いは……まだ、終わらない。

偽竜

「……ドラゴン……!?!」

マルク・オーグライが変質した姿。彼の体内に埋め込まれている魔力を消滅させて、彼を戦闘不能にするつもりだったマルクは、変質した彼の姿を見て、そう呟いた。

「喰らう……魔力、ヲーいつ、パイ、食ベテ……満タす……満タス……ミタ、すウウウウ……! GRU A A A A A A A A A A A A A A A A!!」

巨大な咆哮をあげて、目の前の小さなドラゴンはマルクに視線を向ける。魔力を持ってさえいれば、誰であろうと関係なく彼の前では捕食対象になりうるようだ。

「……滅竜魔法、効くといいなあ!!」

そしてマルクとドラゴンは同時に飛び出して、お互いの一撃をぶつけ合う。しかし――

「おつも……!?!がつ!?!」

マルクは、ぶつけあつたその一撃で大きく吹き飛ばされてしまう。一瞬で城の壁まで吹き飛ばされてしまったマルクは、壁を一枚貫通して二枚目でめり込んでいた。

「魔力……! まりヨクううウウ……!」

「ちっ……俺の魔力のせいか……? そりゃお腹いっぱい食いたいよなあ……魔力がないと、死んじまうもんな……死にたくないもんなあ……誰だって、どんな奴だって……絶対にそう思う。」

なんとか壁から抜け出しながら、目の前のドラゴんにマルクは喋りかける。だが、ドラゴンからの返答はない。

「……お前を殺そうとした俺を、軽蔑でも侮蔑でも罵倒でも……何でもすればいい。魔力がないと生きていけないお前から、俺は魔力を奪う。」

マルクは、構えを取りながらドラゴンに向かう。ドラゴンは明らかに会話が通じていなかったが、それでもマルクは語りかける。

「人殺しだと罵れ、自分が生き残るために他人の命を犠牲にした屑だと軽蔑しろ、そして……死んでも俺を恨みで糾弾するのを忘れるな。」

だろうか。

いや、聞こえてないだろうな……ていうかドラゴンって……正しく滅竜魔導士が倒すべき相手なのに……ボロ負けじゃねえか……」

「……」

大きく口を開けるドラゴン。相手が抵抗しないとわかったからか、恐らく肉ごとマルクの魔力を食らうつもりなのだろうと、予想していた。

「……黒い、ドラゴン……イービラーが言ってた……倒すべき、ドラゴン……ドラゴン……？これが……？」

小さなドラゴンを、気づけばマルクはよく見直していた。羽は生えているものとても肉感的で、羽というよりはただの肉の塊だった。前足も後ろ足も、急な体の変化に付いていけなかったのか、形がぼこぼこになっていた。

顔も、黒い鱗が生えているとはいえまるで人間の顔をそのまま引き伸ばしたかのような見た目だった。明らかでない、彼の中にあるドラゴンと目の前にいるドラゴン。

比べて、マルクは無意識にこう呟いていた。

「——なんだお前、ドラゴンもどきじゃねえか。こんなんに負けてたら……滅竜魔導士なんて名乗れたもんじゃねえな……！」

「ぐああ……？」

唸り声が、何か疑問を感じたように聞こえたマルク。明らかに意思がないのに、感じ取れたことに対して妙におかしくなってしまった。

「……こんなんじゃ、俺は倒せねえぞ……！」

「がっ……」

無理に体をひねって、マルクはドラゴンの顔に蹴りを打ち込む。たった一撃、しかしその一撃はドラゴンの目を直撃していた。

蹴りを入れた一瞬は特に反応をしなかったドラゴンだったが、自分の目を潰された痛みが遅れてきたのか、次第に大きく鳴き始める。

「ぐるるアああえ!!」

「目潰し……卑怯だが、これくらいしねえと今の俺じゃあ勝てる気がしないんでな……!はあ……ぐむっ!!」

たじろぎ後ろにさがるドラゴン。マルクは体を無理に動かしてドラゴンの首筋に噛み付く。

「ぎゅあ!?がああああ!!」

噛み付かれたことに気づいたドラゴンは、咄嗟にマルクを殴りつけていく。しかし、マルクはそれで離れることは無かった。

「ふー……ふー……があ!!」

噛み付いたところに、そのまま魔法を……ブレスを使うマルク。ゼロ距離での魔龍の咆哮。

「ぐが、G A A A A A A A A A A A A A A A!!」

勢いでマルクもドラゴンも吹っ飛ばされる。マルクは勢いよく吹っ飛んでいって壁に叩きつけられ、ドラゴンも反対側の壁へと叩きつけられる。

「なんだ!誰だここで暴れているやつは!!」

「やっべ……こつちにも来たか……いや、今までこなかっただけまし
か……」

城の兵士、マルクとドラゴンの戦いの音を聞いてやってくる。しかしその数は本来の兵士の数と比べれば圧倒的に少なかった。それでも、今のマルク一人には多い数だったが。

「……」

「っ!?ば、バケモノ!」

「……お前の相手は、俺だろう……があ!!」

兵士達の方に視線を向けるドラゴン、その一瞬の隙にマルクはかかと落としを頭に決める。

「……」

「……魔力込めたんだけどな。もしかして効いてない?」

全くダメージが入ってなさそうなドラゴン。なんとか距離をとるマルクに改めて視線を向ける。

両肩がイカれてしまっている今、腕を酷使できるわけでもないのだから必然的にブレスか足技主体になってしまう。

「……があっ!!」

「っ……」

一瞬で間を詰め、マルクに頭突きをするドラゴン。そのまま角度を変えて城の屋根を突き破る。つまり、空を飛んだ。マルクを頭に寄せたまま。

「が、は……！」

息を取り込もうとしてもかなりの速度で飛んでいるために、肺が押え込まれてしまつて空気が入り込まない。

このままだと窒息してしまう……そう考えたマルクは必死にドラゴンに蹴りを入れる。しかし、それはドラゴンに取っては全く意にも介していなかった。

流石にダメか……？と、マルクが諦めた時に勢いが無くなる。

「……は？」

そして、今度は落下する感覚があるのと、自分の上にドラゴンがいた事。つまり、ドラゴンがマルクを落下させたのだ。

そして、当のドラゴンは羽を飛ばたかせながら魔力を溜め込んでいた。……口に、ブレスの準備をしていた。

「————KYURAAAAA!!」

そして、マルクに向かってそのブレスは放たれる。そのブレスはマルクを貫………できなかった。

「————へへ、魔力ご馳走さん。」

「つ!!があ!!」

殺す気の一撃だったのだろう、死んでないことがわかったドラゴンはマルクに向かって高速で突撃してくる。その爪が生えた腕を伸ばしながら。

ブレスが効かなければ、腕で貫いて殺す。そういうつもりなのだろうとマルクは思っていた。

「あいにく両腕は使えないが……お前のおかげで魔力を貯め込めたよ。もう……眠れ……！」

地面に近づくマルク、その落ちる速度よりも早く迫ってくるドラゴン。マルクは、使えるだけのありったけの魔力を足に貯める。

そして、ドラゴンの腕がマルクに触れるのと、マルクが地面にたどり着くのはほとんど同タイミングになりかけたその時。

「魔龍の――」

マルクはドラゴンの攻撃の勢いを利用して、体を回転させる。そして、そのまま受け流したドラゴンの頭めがけて……足を振り下ろす。

「――尾激！」

「ゴガア……！」

まるで、ドラゴンがその尻尾を地面に叩きつけるように、その一撃はドラゴンの頭に与えられる。

強烈なかかと落とし。落下の勢いとドラゴンの勢いの二つを利用しての強力な一撃。ただのかかと落としに比べれば圧倒的に威力が高かったようで、その一撃を受けたドラゴンは昏倒する。

「ひっ……！」

「はあはあ……次は、お前らか……？」

「ば、化け物だ！勝てるわけねえ!!」

兵士達はその場から武器を捨てて逃げ出す。ブレスを食べる所を見られたのか、もしくはただドラゴンを倒した事なのかは分からないが、マルクに恐れをなして逃げ出したのだろうと、満身創痍になりながらそう考えた。

「……さて、どうやったら元に戻るのかね……吸い取った俺の魔力を逆に吸い取ったら、戻ったり……しないよな。」

気絶したドラゴンを見ながら、マルクは呟く。何せ、異常事態も異常事態なのだ。自分の魔力を入れたラクリマで、ただの人間がドラゴンになるなどということが、考えられないことなのだ。

「……ナツさん達は、どうなったかな。ラクリマにされたみんなの事も気になるけど、それ以上にこのドラゴンオーグライを放っておいたらダメな気もするしなあ……とりあえず、吸ってみるか。」

昏倒するドラゴンの頭に手を置いて、自分の魔力でドラゴン化した時に使われた魔力を吸い始めるマルク。これで治るかは不明だが、やらないよりはマシだと思っていた。

「……ん？今こいつ動いて……いや、それだったらもつとえげつない動きするよな。魔力吸われたくないだろうしな。」

「……」

依然として気絶し続けるドラゴン。ドラゴン化した時に使われた魔力は順調に吸収できていった。

といっても、いつものように魔法を食べるわけではなく、魔力を通して吸収しているため、魔力は回復するどころか減っていったるが。

「……震えてる……？」

突然、何かに怯えるように震え始めるドラゴン。しかし、震えているにも関わらずドラゴンの意識は戻っていなかった。

「一体何が……っ!?おいどこに行く!!」

そして、飛ばたくともせずつに引つ張られるかのように、ドラゴンは城の中心の上階に向かって飛んでいく。

「くそっ……あそこで何が……とりあえず向かうしかねえ!!」

ドラゴンの後を追いかけて、マルクは城の中心まで走っていくのだった。

「……ここまで、兵士が全くいなかった。シユガーボーイとか言われてた人はぶつ倒れていたけど……床が凍っていたけど、 그레이さん暴れてたのか……?っつと、この部屋か……?」

マルクは大きな扉のある部屋までたどり着く。しかし、その扉の前には二人ほど兵士がいた。

既に自分が偽物だとバレている以上、マルク・オーグライのフリをして行くのは難しい。

「……扉は、開いている。扉の前には二人の兵士……中には……ナツさんと 그레이さん……それと……ナイトウオーカーの方のエルザさ

んか……」

捕まっているナツとグレイ。そして部屋の中には巨大な砲台。この辺りにドラゴンが飛んできているのは確かだったが、どこにいいのかまでは予想がつかない状況だった。

どうすればいいのか分からないマルクだったが、中で突然ナイトウォーカーが王を人質に取り始める。

「っ！そうか、ナイトウォーカーじゃなくて……今突入すれば……！」
エルザはナイトウォーカーの方ではなく、スカーレット……つまり、アースランドのエルザだったのだ。それにすぐ気づいたマルクは、すぐさま部屋に向かって走り始める。

そこで、偶然見つけたのだ。砲台の前に、まるで繭のように丸まっているドラゴンを――

竜鎖砲

「発射中止だーっ!!」

「エルザ……貴様!何の真似だエルザ!」

エルザ・ナイトウオーカーの姿から一転、光り輝いたかと思えば、その姿は鎧に自身の大切なギルドマークを掲げる妖精女王、エルザ・スカーレットに変わる。

「私はエルザ・スカーレット、アースランドのエルザだ。」

「悪い、危なかった。機転を利かせてくれて助かった。」

「かっかっかっ!これぞ作戦D!騙し討ちのDだ!!」

エルザは、エドラスの王の首に剣を押し当てて兵士達を脅す。竜鎖砲、巨大ラクリマが置いてある浮遊島にぶつける事で、エクシードたちの街であるエクスタリアに浮遊島をぶつけてエドラスに永遠の魔力をもたらすという魔法。

しかし、これが成功してしまえば魔水晶ラクリマとなったマグノリアの街の住人……そして当然その中にいる妖精の尻尾フェアリーテイルのメンバーとエクシード達が犠牲になってしまう。

だが、この竜鎖砲を逆に巨大ラクリマそのものにぶつけたらどうなるのか、エドラスにおける滅竜魔法はラクリマになった者達を戻すことが可能であり、今ナツ達はそれを行うために王を人質に取ったのだ。

「照準をラクリマに合わせろ。」

「言うことを聞くな!今すぐ撃て!!」

「うう……ど、どうする?」

「卑怯だぞ teme エラ!!人質を取るなんてー!!」

兵士達はそこにいるアースランドの妖精の尻尾のナツ、グレイ、エルザに向かって言い放つ。

「それがどうした。」

「オレ達は仲間のためなら何だってするからよオ……」

「早くしないか。」

ぐっと押し当てられる剣。永遠の魔力よりも、兵士達は当然自分達

の王を選ぶ。

「くそお……！やれ！陛下が危ない!!」

「ワシなどよい!!撃て!!エクシードを滅ぼすために!!」

「照準変更！巨大ラクリマに変更だ!!」

「ほかものが！永遠の魔力を不意にする気かあー!!」

そして、今この瞬間に竜鎖砲が発射される……そのタイミングで、二人の乱入者が現れる。

「スカーレットオオオ!!」

「なっ……!」

「ナイトウォーカー!!」

一人はエドラスのエルザ、エルザ・ナイトウォーカー。エルザ・スカーレットに装備を剥ぎ取られたためか、その体には一枚の布だけを羽織っていた。

だが、武器である槍は携えたままだった。そして、ナイトウォーカーは壁から飛び降りて、エルザに向かってその槍を向ける。

だが、もう一人の乱入者がそれを阻止しようと横から現れる。

「させるかア!!」

「何っ!？」

「マルク!」

現れたマルクは、飛び降りるナイトウォーカーの槍を持っている腕目掛けて蹴りを入れる。

「ぐっ!」

「邪魔はさせない……!」

「邪魔……するなアア!!」

「なっ!？」

だが、蹴りを入れられて槍を手放したナイトウォーカーは、なんとかそのままエルザに向かって、足を伸ばす。要するに、槍で攻めるつもりだったのを、蹴りに変更したのだ。

しかも、蹴られた腕の痛みを抑えながらマルクを無理やり吹き飛ばした。

「くっ……!」

「陛下の拘束が解けた!!今だ、照準を戻せ!!」

「マズイ!!」

ナイトウォーカーの蹴りにより、エルザは一時的に王の拘束を解くことになってしまう。

それにより、竜鎖砲の照準は再び浮遊島へと向けられる。

「まだ終わってないぞオオ!スカーレットオオ!!」

「ナイトウォーカー……!こんな時に!!」

「——撃てええええええい!!」

そして、竜鎖砲の発射ボタンが押されてしまう。その直線上には浮遊島と……マルク・オーグライが変貌した小型のドラゴンがいた。

「待て!!そのドラゴンは——」

竜鎖砲のエネルギーは貯められ、巨大な鎖の様な魔法が浮遊島に向けて発射させられる。

それは、一瞬でドラゴンを貫き、浮遊島を接続する。貫かれたドラゴンは、悲鳴を出すこともせずそのまま鎖に吸収されるように、消えていった。

「カバースェット!そして接続も完了しました!!」

「エクスタリアにぶつけろお!!」

「——お前ええ!!」

「やめろおお!!」

悲痛な声を出すナツ。王に向かって蹴りを入れようとするマルク。しかしそれは、兵士達自らが盾となることで止められる。

「くそっ!!なんで、何であいつを見殺しにしたア!!分かっててやったんだろ!!」

「くくく……元より、オーグライにはその役目しか求めとらんわ……万が一、竜鎖砲の鎖が破壊される可能性もあるからの……破壊のために振るわれる、相手からの魔法を無効化するためにやつの命そのものを……鎖のカバーとして使わせてもらったのだ!!」

「っ!!あんたは……絶対に……」

「みんなー!!」

遠くから聞こえる声。空から、エドラスに住む空も飛べる大型獣レ

ギオンに乗ってきたルーシイの声。

「乗って!!」

「ルーシイ!」

「何故あの小娘がレギオンを!」

王の疑問に応えるかのように、ルーシイの他にもう一人の人物が現れる。エドラスに住む、ココという少女の姿であった。

「私のレギオンです。」

「こいつで止められんのか!」

「分かんない!でも行かなきゃ!!」

そして、レギオンは咆哮をあげ、浮遊島に向かって羽ばたき始める。

「……」

「人の命を、なんだと……!」

エドラスとアースランドのエルザ、そしてマルクとエドラス王。前者は互いに互いを敵視し合い、後者は下っ端にくれるものなどないと言わんばかりに、王はマルクの事を無視していた。

「急げえー!ー!ぶつける訳には、行かないんだアー!ー!!」

高速で飛行するレギオン、そのままの速度と勢いで浮遊島に頭突きを当てる。

「頑張つて!レギピョン!!」

ココの思いに応えるかのように、レギオンは雄叫びをあげる。しかしそれでも、竜鎖砲に繋がれた浮遊島を止めるにはまったく力が足りなかった。

「駄目だ!!全然止まる気配がねえ!!」

「私達も魔力を解放するんだ!!」

「お願い!!止まってえ!!」

グレイも、エルザも、ルーシイも、ナツも、ハッピーも……全員が浮遊島を止めるために、全力で対処する。

しかし、それでもまだ浮遊島を止めるには力が全く足りていなかった。

「駄目だ!!ぶつかるぞ!!」

「うあつ!」

「こらえろオー!!」

そして遂に、浮遊島はエクスタリアのある島へと激突し始めていた。それでも、まだ誰も諦めてなどいなかった。

「ガジル!!何故私達のようにみんなを元に戻さん!!」

「黒猫が邪魔するんだよ!!」

「どちらにせよ、今からじゃあ時間がかかりすぎる!!」

「ココ、なぜおまえが……」

「……パンサー・リリー!?!」

マルクは、こんな所にいるパンサー・リリーに驚いていた。『ラクリマのある島にいれば自身もただでは済まない』と、分かっているはずなのに。それだけ王国への忠誠心が厚いのか、それともエクスタリアのことが気に食わなかったのか。

しかし、今はそれを気にしている暇はなかった。

「気付いちやった!私……永遠の魔力なんていらぬ、永遠の笑顔がいいんだ。」

「なんて馬鹿な事を!!早く逃げろココ!!この島は何があっても止まらんぞ!!」

「止めてやる!!身体が砕けようが、魂だけで止めてやるアアア!!」

全員の、根気や魔力……もはや体の全てが壊れそうになるのも構わずに、ナツ達は浮遊島を止めようと押し続ける。

それでも、浮遊島はエクスタリアの土地を段々と削っていく。それでもまだ誰も諦めなかった。

どれだけ体が悲鳴をあげようとも、止めなければならなかったからだ。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお——!!」

「潰されそ……!」

「うギギ……!」

「ふんばれえ!!」

「なんとしても止めるんだ!!」

「ここで、ぶつかつたら……!全部水の泡だ……!」

「無駄な事を!!人間の力でどうにか出来るものではないというのに!!」

それぞれが死力を尽くす中、一つの影が浮遊島にぶつかる……否、止めるために押さえつける。

「シャルル!」

「私は諦めない!!妖精の尻尾もエクスタリアも両方守ってみせる!!」

現れたシャルルに続いて、更にもう一つの影が同じように浮遊島を抑えるために、その体を浮遊島に押さえつけていた。

マルクはその者の姿を見たことがなかったが、猫っぽい姿と羽を生やしているのを見てエクシードだとすぐに判断した。

「あんた……」

「ぼきゅも守りたいんだよ……きつと、みんなも。」

そして、エクスタリアから次々と……エクシードが現れていた。ラクリマを止めるために、自分達の故郷を守るために。

その翼をはためかせて、浮遊島を抑えていく。

「自分達の国は自分達で守るんだ!!」

「危険を冒してこの国と民を守り続けてきた、女王様の為にも!!」

「ウエンデイさん!シャルルさん!!さつきはごめんなさい!!」

「みんな!今はこれを何とかしよう!!」

そして、エクシードの一人に支えられてウエンデイも来る。マルクは、少し傷ついているウエンデイの姿を見て驚いていたが、それでも命は無事な姿を見て少しだけほっとしていた。

「ウエンデイ……よかった……」

「マルク……また無茶したの?」

一旦エクシードから下ろされて、ウエンデイはマルクの隣に立って浮遊島を抑え始める。

ウエンデイは、腕ではなく魔力を解放して体全体で浮遊島を押しているマルクの姿を見て、少しだけ心配していた。

「はは、無茶したのは多分……お互い様じゃないのか?傷だらけだぞ?」

「……そうだね、これが終わったら……ちゃんと治してあげるからね。」

「ああ……だから、今はこれをお……！」

マルクは更に魔力によるブーストをかけて押していく。腕が使えない分、他の者よりも倍以上張らないといけないのだ。

「止まれええええー……っ!!」

「みんな頑張れー!!」

「押せー!!」

「俺達なら出来るぞー!!」

全力で、全開で、魔力の全てを使い果たしていく覚悟で。

ナツ達も、エクシード達も、皆が皆浮遊島を押ししていく。その覚悟が伝わったのか、ラクリマを乗せた浮遊島は段々と押し返されていき始める。

「止ま、れえええええええ!!」

「お願い!!止まってえええ!!」

段々と押し返されてきている浮遊島。しかし、突如光ったかと思えばなにかの力で、押し返そうとしていた者達を全て軽く吹き飛ばしていた。

「何!」

「くっ……!?!」

空中に投げ出されてしまった、エクシード以外の面々はそれぞれ色んなエクシード達が翼^{エーラ}を使い、空中で支えて何とか地面に自由落下をすることだけは免れていた。

だが、気づいた時にはラクリマを乗せた浮遊島からラクリマが消えていた。

「ラクリマが消えた……!?!」

「ど、どうなったの……?」

不安と喜び、そして驚きが入り交じっている中でラクリマの行方を疑問に思う者達。

「アースランドに帰ったのだ。

……全てを元に戻すだけの巨大なアニマの残痕を探し、遅くなったことを詫びよう。そして、みんなの力がなければ間に合わなかった……感謝する。」

「ミストガン！」

「おお!!」

「元に戻したって……」

ハッピー、いやこの場にいる全ての者達の疑問に、ミストガンは答える。

「ラクリマはもう1度アニマを通り、アースランドで元の姿に戻る。全て、終わったのだ。」

その言葉に、全員が喜びを噛み締め始める。ラクリマにされた者達も、エクシード達の故郷も……全てを守れたのだから。

「やったのか!？」

「俺達……エクスタリアを守れたのか……!？」

そして、全員が喜びの喝采をあげる。全てを守れたその喜びを、全員で分かち合うかのように。

そして、ラクリマの事とエクスタリアの事以外でも喜ぶ者がいた。ココである。

「王子が帰ってきたよう……!」

「王子!？」

「え、ミストガン王子なの!？」

ココの眩いたことにルーシイとマルクがツツコミを入れる。

しかし、その喜びに水を差すかのように一つの悲劇が襲いかかる。

「……がっ……!？」

「リリー……!」

パンサー・リリーが、何者かによって撃たれたのだ。そして、その撃った者は――

「まだだ……まだ終わらんぞーっ!!」

「王国軍……まだ、諦めてなかったのか……!!」

大量のレギオンに乗った王国軍、そして区別するためか髪を切ったエルザ・ナイトウォーカーが、パンサー・リリーを撃ったのだ。

まだ、何も終わっていないのである。

ドロマ・アニメ

竜鎖砲により、妖精の尻尾やマグノリアにいた人々の魔力や命によって生み出された、魔水晶^{ラクリマ}。王国側の真の目的は、そのラクリマをエドラス唯一の魔力を持つ種族である『エクシード』の街、エクスタリアにぶつける事で、ラクリマとエクシードの両方を犠牲にして永遠の魔力を得ることだった。

アニメの影響を受けなかった滅竜魔導士^{ドラゴンスレイヤー}のナツ、ウエンデイは同じくアニメの影響を受けなかったエクシード、ハッピーとシャルルの力を借りてエドラスへ。

同じく滅竜魔導士であるマルクはその後に、ミストガン……エドラスにおけるジェラルルの力を借りて、異世界エドラスへと降り立つ。ガジルもまた、滅竜魔導士であったので、三人が送られたあとに遅れて送られることに。

紆余曲折あり、ウエンデイとシャルルはエクスタリアに向かいエクシード達に王国側の作戦を伝え、ナツとラクリマから開放されたグレイ、星霊ホロギウムの能力により無事だったルーシィと共に竜鎖砲のところまで行った。

その間、グレイと同じくラクリマから開放されたエルザは、エドラスのエルザ、エルザ・ナイトウオーカーと対峙することに。

マルクもまた、同じようにエドラスのマルクであるマルク・オーグライと戦った。

しかし、王はオーグライがマルクから吸い取った魔力と、オーグライが体に埋め込んでいたラクリマに溜め込んでいた魔力、そして彼の命を糧にして竜鎖砲に魔法で壊せないようにカバールを作った。

竜鎖砲を破壊することは無理だと判断したナツ達は、ラクリマが乗った浮遊島を止めるために、エドラスの王国側にいるココのレギオンの力を借りることに。

そして、エクシード達はエクスタリアを守るために奮起して、ナツ達と同じように浮遊島を止めようとする。

その気持ちだが、想いが実ったのか浮遊島は押し返され、ほぼ同時に

ミストガンがアニマの残痕を使ってラクリマを元の世界へと戻した。それに皆が喜んでいたのも束の間、王国側が大量のレギオンを率いて、そこにいる全員の魔力を得るために、始末しに来たのであった――

「まだだ、まだ終わらんぞー！ツツ!!」

「向こうのエルザ!!」

「てめえ良くも……!!」

「誰か……リリーを助けて!!」

「任せてください!!」

エクシード唯一の王国側、パンサー・リリーはナイトウォーカーの武器により体を魔法によって貫かれる。

「スカーレットオオオ!!」

「ナイトウォーカー……」

ナイトウォーカーに、戦闘を仕掛けようとするエルザだったが、ミストガンがこれを前に立ち、手で静止をかける。

「エドラス王国王子であるこの私に刃を向けるつもりか？エルザ・ナイトウォーカー。」

「くっ!!」

ナイトウォーカーが、ミストガンに攻撃するのを躊躇していたその時、どこからともなく声が聞こえ始める。

「ワシは貴様を息子などとは思っておらん。」

「王様の声!?!」

「どっ!?!」

「7年も行方をくらませておいて、よく戻ってこれたものだ……貴様が地^{アースランド}上でアニマを防いで回っていたのは知っておるぞ。この、売国奴め。」

どこからともなく聞こえてくるエドラス王の声。その声の出どころは耳や鼻が常人よりもいい滅竜魔導士でも、追えないものだった。

「この声どこから……」

「おい！姿を見せろ!!」

「まだ戦おうとするのか……!?!」

「貴方のアニマ計画は失敗したんだ。もう戦う意味など無いだろう？」

ここで、マルクや他の滅竜魔導士は森の方から聞こえてくる音を聞き逃さなかった。なにか巨大なものが歩いてくるような、そんな足音を。

「意味……？戦う意味だと？これは、戦いではない。王に仇なす者への報復……一方的な殲滅。」

「な、なにあれ!？」

「ワシの前に立ちはだかるつもりなら、たとえ貴様であろうとも消してくれる。跡形もなくなあ……!」

そして、その姿を他の面々も目にする。その姿、大きさに驚愕を隠しきれなかった。

「父上……!」

「父ではない。ワシは、エドラスの王である。そうだ……貴様をここで始末すればアースランドでアニマを塞げる者はいなくなる。

また巨大なラクリマを作り上げ、エクシードを融合させることなど何度でもできることではないか。

フハハハハッ!王の力に不可能はない!!王の力は絶対なのだ!!」

そして現れる大型の機械。何かの生き物のようなそのフォルムは、何処と無くドラゴンを彷彿とさせる姿でもあった。

「ドロマ・アニム……」

「ドロマ・アニム……こっちの言葉で、竜騎士の意味……ドラゴンの強化装甲だ!？」

「ドラゴン……」

「言われてみれば、そんな形……」

「強化装甲って何!？」

「ウイザードキャンセラー対魔専用魔水晶が、外部からの魔法を全部無効化させちゃう搭乗型の甲冑!王様があの途中でドロマ・アニムを操縦してるんだよう!!」

ドロマ・アニムは、空中で飛んでいるエクシード達を見ると、すぐに兵士達に命令を飛ばす。

「我が兵達よ!エクシードを捕らえよ!!」

「はっ!!」

そして、命令により兵士達はエクシード達を捕まえるためにレギオンを動かす。

当然、エクシード達にはレギオンどころか、兵士達を退けさせる手段を持ちはしない。

「マズイ!!逃げるんだ!!」

「わー!!」

エクシード達は散り散りになって逃げ始める。だが、それを王国側が逃すわけがなかった。

「逃がすなーっ!!」

何かの掃射装置を使い、それから発せられる光をエクシード達に向ける。すると、その光に当てられたエクシード達は、すぐさまラクリマに変換させられる。

「逃げろー!!」

「捕まったらラクリマにされちゃう!!」

「エライこっちゃ!!」

「うわー!!」

エクシードをラクリマに変換する装置。それを見たエクシード達は、恐怖で我先にと逃げ出す。

しかし王国側はそれを何の躊躇いもなく追い始める。

「王国軍からエクシードを守るんだ!!ナイトウォーカー達を追撃する!!」

「そうだね。」

「あのデカブツはどうする?」

「相手にするだけ無駄だよ、魔法が効かないんだから。」

「かわしながら行くしかない!!今のエクシード達は無防備だ!!俺達が守らないと!!よし、行くぞ!!」

エルザ達の乗るレギオンも、王国のレギオン部隊を追い始める。だが、ドロマ・アニメに乗る王は、エクシードをラクリマに変換する邪魔をする者達を逃がす、ということは無かった。

「人間は一人として逃がさん!!全員この場で死んでもらう!!」

消えろオオオオオオオオオオオオ!!」

「魔導砲!? くそ、んなもん装備してんのかよあのデカブツは!!」

マルクは、ドロマ・アニムから発せられる光線に少し悔しさを感じていた。今の腕を負傷している自分では、滅竜奥義である『紫電魔光壁』が使えないからだ。

だが、その光線を咄嗟にレギオンと光線の間に入ってきたミストガンが止める。

「ミストガン!!」

「ミストガン? それがアースランドでの貴様の名か!? ジェラール。」

「くうう……! エルザ! 今の内にいけ!!」

「しかし……!」

「行くんだ!! 3重魔法陣……! 鏡水!!」

ミストガンは、ドロマ・アニムから発せられた光線を、自分の魔法により跳ね返し、それをドロマ・アニムに向ける。

「跳ね返し……! ぬう……!」

派手な爆発音と、土煙が舞う。しかし、その中から現れたドロマ・アニムは傷一つついていなかった。

「ドロマ・アニムに、魔法は効かん!!」

そして、ドロマ・アニムの肩部から現れた砲台により、ジェラールは撃ち落とされる。

「ぐああ!!」

「ミストガン!!」

「ファーハッハッハー……!!」

「ミストガン!!」

ミストガンを撃ち落としたドロマ・アニム。今度はレギオンに乗っている者達だと言わんばかりに、その照準をエルザ達の乗るレギオンに向ける。

「貴様には地を這う姿が似合っておるぞ!! そのまま地上でのたれ死ぬが良いわ……!!」

次は、貴様らだア!!」

「くそっ!! アレをかわしながら戦うのは無理だ!!」

だが、口から再び光線を放とうとしたドロマ・アニムの首に誰かからの一撃が加えられる。それは、炎の一撃だった。

「何っ!?!ぬおっ!?!」

そして、次は下から胴体と足に一撃ずつ加えられる。それは鉄と魔との一撃だった。

「誰だ!?!魔法の効かん筈のドロマ・アニムに攻撃を加えているもの!!」

「天竜の……咆哮!!」

そして、止めと言わんばかりに天からの咆哮が加えられる。足を払われ、胴体を下から攻撃されて少しだけ宙に浮いていたドロマ・アニムは軽く吹き飛ばされてしまう。

「やるじゃねえかウエンデイ、マルク。」

「いいえ、攻撃としてはナツさん達の方がダメージとしては有効です。」

「俺も……足しか使えないから攻撃としてはダメージはそこまで見込めてないと思いますよ。」

「野郎……よくも俺のネコを。」

「ぬううう……!!」

ドロマ・アニムに対峙するのは4人の滅竜魔導士。王は、多少とはいえドロマ・アニムにダメージを入れられたことが、気に食わなかったようだ。

「ナツー!」

「ウエンデイ!マルク!」

「ガジル……」

残ってレギオンに乗っている者達が、滅竜魔導士達を心配する。だが、あれを相手取るには4人の力が必要だということも、少なからず理解していた。

「行け、ネコ達を守るんだ。」

ナツの言葉に、エルザは無言で頷く。時間が無いのだ、急がなければならぬ。

「そっちは4人で大丈夫なの!?!」

「問題ねえさ……相手はドラゴン、倒せるのはあいつらだけだ。ドラゴン狩りの魔導士……滅竜魔導士！」

そして、エルザ達の乗るレギオンはエクシード達のところへと向かうために、飛び始めた。

それを確認した4人は、ドロマ・アニムに本格的に攻撃を仕掛け始める。

「行くぞ火竜。」
サラマンダー

「またお前と共闘かよ!!」

「おのれ小僧共!!」

ドロマ・アニムは、口にある砲門を再び開く。しかし、それと同時にウエンデイも動いていた。

「援護します!!天を駆ける瞬足なる風を……!バーニア!!」

「ワシを誰だと思っておるかアー!!」

そして、砲門から魔導砲が放たれる。だが、ナツとガジルは速度強化魔法のバーニアをかけられているため、難なくそれをかわす事が出来た。

そして、ウエンデイとマルクは――

「んぐ、んぐつ……ぷはあっ!へへ、魔力ご馳走さんつと。」

「何っ!?!」

魔導砲から放たれた魔力マルクによって食べられてしまう。それに驚いた王は、左右から来るナツとガジルに隙を見せてしまった。

「火竜の鉄拳!!」

「鉄竜棍!!」
てつりゅうこん

魔法を通さぬはずのドロマ・アニムが、微量とはいえダメージを受けているのだと!?!

「ダメ押しだめおしの魔龍の咆哮!!」

「ぬううう!!」

二人の攻撃は、ドロマ・アニムの顔を捉え、マルクは二人のその攻撃の間にドロマ・アニムの上へと跳んでおり、追撃としてブレスを直接叩き込んでいた。そして4人の攻撃はどうやら少なからず、ドロ

マ・アニメにダメージを与えていたらしい。

「なんなんだこの硬さは!!」

「天を切り裂く剛腕なる力を……!アームズ!!」

「これは……!」

「攻撃力強化の魔法です!」

「おっしやあ!!」

ナツとガジルの二人に、新たな魔法がかけられる。ナツは、ウエンデイの説明の後にすぐさまドロマ・アニメの顔を攻撃していた。その一撃は、ドロマ・アニメに先程よりも大きなダメージを与えているように見えた。

「くっ!あの小娘か!!竜騎弾発射!!」

王は、ウエンデイが貴重な強化の魔法をかけられる人物だと認識し、まずウエンデイに照準を合わせる。

そして、ドロマ・アニメに背面装甲の一部が開いたかと思えば、そこから大量のミサイルがウエンデイめがけて発射されていた。

「しまった!!ウエンデイが!!」

「ウエンデイ!!」

「私なら大丈夫です!!」

ウエンデイはミサイルが地面に直撃するのを見計らって、その瞬間に自身にも速度強化をつけ、回避する。

しかし、一部のミサイルは確かに地面に直撃していたが、残りのミサイルは急に角度を変えてウエンデイに向かって飛んでいた。

「追尾型!?!」

「フハハハハハ!!」

「きゃっ!!」

ウエンデイは面食らって、転けてしまった。そして、ミサイルは無情にもウエンデイに向かってと飛んできて、ぶつかると思われたその瞬間。

「魔龍の咆哮!!」

「マルク!」

マルクが、ブレスによりウエンデイに向かって飛んできていたミサ

イルをすべて壊していた。

「まだまだア!!」

「出させるか!!」

再びミサイルを撃とうとしたドロマ・アニメだったが、ガジルの一撃により、開けないようにべこべこにされる。

「ぬうう小賢しい!!」

「ぐおっ!!」

ガジルはドロマ・アニメの尻尾の一撃を食らう。そしてミサイルが2発、ウエンディ達のところへ再び飛んでくる。

「まだ2発残ってた。」

「ならもう一回プレスで——」

「マルク駄目!さっきまでのとは違う!!」

「っ!?!」

マルクはウエンディに言われ、咄嗟にプレスを放つのをやめてウエンディを庇うようにウエンディの前に立つ。

そして、飛んできた2発のミサイルは爆発して、とんでもない爆炎を生み出す……が。

「うおああああああああ!!」

「なんだと……!?!爆炎を……」

咄嗟に入ってきていたナツが、その爆炎を食らっていた。炎となれば、ナツの好物だからだ。

「っ!!こいつは尻尾を食っている!?!」

そして、尻尾の一撃を受けていたガジルだったが、そのまま尻尾にしがみついて、鉄装甲であるドロマ・アニメそのものを食らっていた。

「ふう……強エな……ドラゴンというだけあって。」

「一国の王だというのに、護衛もつけないなんてよほどの自信があるんだ。」

「そりゃあ、わざわざ持ち出してくるくらいなものだからな。相当なもんなんだろう。」

「燃えてきた……!」

驚いていたのか、少しの間面食らっているようにも見つけられたド

ロマ・アニメ。しかし、その体色が突如として黒く染まり始める。

「なんだ!?!」

「色が変わっていく……!?!」

そして、それが真っ黒に染まった時、再びドロマ・アニメは咆哮を上げる。

「まずは貴様ら全員の戦意を無くしてやろう!!ドロマ・アニメ黒天の力を持つてなあ!!」

黒く染まったドロマ・アニメ。それは先程までとは明らかに違う重圧を放っていたのだった。

ドロマ・アニム黒天

「がはっ……!!」

「ぐあっ……!!」

「フハハハハ！ドロマ・アニム黒天は魔法の出力を数倍にも引き上げる特殊装甲！貴様らに勝ち目は無いぞオ!!」

ドロマ・アニム黒天の攻撃により吹き飛ばされる4人の滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーは翻弄されていた。

ナツには物理的な攻撃と魔導砲による炎を食べさせないための攻撃を。逆にガジルには装甲を食わせないために魔導砲や火器え類による攻撃。マルクには物理的な攻撃と火器類、つまり『魔力を回復させないための戦法』を取られていたのだ。

「みんな…魔力がねえって苦しんでるのに……王様ってのは随分大量に持つてるんだな？」

「王が民から国税を取るのは当然であろう。」

ドロマ・アニムは、常に世界中の魔力を吸収し続ける究極の魔導兵器！故に禁式！起動させたからには勝つ義務がある!!世界の為に!!」

「何が世界よ。」

「勝手に魔力を奪っておいて、よくそんなことが言えたもんだ。」

「勝手な理屈を並べるだけの、馬鹿な王様そのものだな……侵略者みたいだ。」

「俺達は生きるためにギルドに入ってるからな。世界のことなんか知ったことじゃねえけど……この世界で生きる者のために、お前を倒すんだ。」

ナツの言葉に、王は声を荒らげる。ドロマ・アニムという絶対的な勝ちを確信しているものがあるからだろうか、それともアースランドから来た滅竜魔導士達がエドラスを語ることに不満を抱いたのか。

「この世界で生きる者のために……だと？笑わせてくれるな滅竜魔導士！この世界で生きている民達は、皆魔力を求めている!!永遠の魔力だ！それを阻止しようとする貴様らは……この世界における敵に他ならない!!」

「……どれもこれも、侵略者みたいな台詞しか吐かないんだな。王様ってのは、確かにみんなの気持ち考えなきゃいけないんだらうけど……自分の国だけ助かればいい、って言うのはあんたの理論で言えば……あんたこそアースランド全体の敵だよ。善の王じゃない、あんたは悪の王だ。」

「笑わせてくれる！生きるためには魔力が必要だ！その魔力が無くなるらうというのだぞ！！永遠の魔力を体内に宿している貴様らには……一生分からんだらうなあ！！」

その言葉により、ドロマ・アニム黒天はとんでもない速度を出して攻撃を開始する。ドロマ・アニムの時よりも、格段に上がったスピード、攻撃力。それを防ぼうとしても、滅竜魔導士達の対応よりも早くドロマ・アニム黒天は行動していた。

「ぐああああ！！」

「ふははははは！！地に落ちよドラゴン！！絶対的な魔導兵器！！ドロマ・アニムがある限り！！我が軍は不滅なり！！ハア！！」

さらに追撃をかけるように、滅竜魔導士達に魔導砲を放つドロマ・アニム。もはや爆炎が出ていてもそれを食べる余裕がナツには無かった。

「もつと魔力を集めよ！！空よ！大地よ！！ドロマ・アニムに魔力を集めよ！！」

「くっ！！」

「サラマンダー！ブレスだ！！ガキ共！！お前らも手え貸せ！！」

「よ、四人同時に！！」

「何が起こるか分からねえから控えておきたかったが……やるしかねえ！！」

ガジルの提案により、即座に全員ブレスの体勢に入る。4人の滅竜魔導士による一斉のブレス。ドロマ・アニム黒天を破るにはそれほどの力が必要ということである。

「火竜の——」

「鉄竜の——」

「天竜の——」

「魔龍の——」

「——咆哮!!——」

4人のそれぞれのブレスは、重なり合いそして威力もとんでもないものとなりドロマ・アニメ黒天に向かって飛んでいく。

それは地面をえぐり、巨大なクレーターが出来上がるほどの威力となっていた。

「……やったか。」

「ふははははは!!」

「上だ!!」

「あんなに跳躍力があつたのか……!」

「四人同時の咆哮が、当たらない……」

空中に跳び上がったドロマ・アニメ。魔力を尽くした攻撃が当たらなかつたため、心が折れかかってしまった。

「もう一度だ!!」

「させんよ!!竜騎拡散砲!!フハハハハハ!!」

王は、ドロマ・アニメの口にある砲口から出される魔導砲を拡散させる。それはナツ達のいる場所一帯を焼き払うには充分な範囲と威力を持つていた。

「ぐあああああ!!」

「きやあああ!!」

「ウエンデイ……!」

高く跳んでいたドロマ・アニメは、重々しい音を立てながら地面に着陸する。

ナツ、ウエンデイ、ガジル、マルクの4人は満身創痍で地面に倒れていた。そして、傷だらけの彼らには既に魔力もほとんど残っていなかった。

「尽きたようだな。いくら無限の魔導士と言えど一度尽きた魔力は回復せんだろう……大人しく我が世界の魔力となれ。」

態度次第ではそれなりの待遇を考えてやっても良いぞ?」

滅竜魔導士の攻撃でも沈まないドロマ・アニメ。その脅威的なまでの固さと、攻撃力の前に諦めかけるのも致し方なし。

しかし、それでもまだ諦めない者もいた。

「諦めんな……！まだ、終わってねえ……！かかってこいやコノヤロウ……！！オレはここに立っているぞ！！」

そう言いながらナツは立ち上がる。その姿、言葉に支えられていく。

「ええい、どこまで強情な小僧じゃ！！」

「んがっ！！」

ドロマ・アニメに踏みつけられるナツ。しかし、そこで耐える。諦めない心のように、ナツもまた倒れるようなことはしなかった。

「ナツさん……」

「バカヤロウ……魔力がねえんじやどうしようもねえ……！」

「捻り出す！！明日の分もひねり出すんだ！！おらア！！」

そう言つて、ナツはドロマ・アニメを投げ飛ばす。投げ飛ばされたドロマ・アニメは、地面に叩きつけられるがすぐさま起き上がる。

「滅竜魔導士舐めんじやねーぞ！！アア！！」

「身分をわきまえよクソ共がア！！ワシを誰だと思つておるか……！！」

「ぐああああー！」

ナツは、ドロマ・アニメに吹き飛ばされる。だが、その瞬間にドロマ・アニメの懐に入り込むものが一人。

「ようやく見つけた……ここが中心点だろ！！」

マルクだった。マルクは、ドロマ・アニメの懐に潜り込んで自身の足を魔力の限りを込めて叩きつける。そして、動かせば痛む腕を無理矢理動かして、叩きつけた場所に拳をめり込まし、突っ込む。

「なっ!?そ、そこは……！」

「魔力を吸い取ってんだったら!!その魔力循環させてる場所あるはずだろぅ?!いくら吸い取ると言つても、魔水晶ラクリマ無しで動けるはずないだろうがあ!!」

更にありつただけの魔力を、相手の魔力を食らう自身の魔力を送り込むマルク。吸収する速度よりも、吸収される速度の方が勝つたのか、ドロマ・アニメ黒天はその黒色を失い、元のドロマ・アニメへと戻つ

ていく。

「ど、ドロマ・アニメが!!っ!?!」

そして、その隙を突いてガジルが鉄竜棍と化した自身の腕をドロマ・アニメへとめり込ませる。そして、杭のように抜けないようにする。

「足を……!!」

「ロックした!!これでもう空中に逃げられねえ!!」

「魔力も吸ってる!!もう黒色になるのは無理だと思いな!!」

「行けエ!!サラマンダー!!」

「行ってください!!ナツさん!!」

「お前しかいねえ!!お前がやれ!!」

吹っ飛ばされ、空中に投げ出されていたナツ。ガジルのその声で、自身に喝を入れる。

そして、ウエンデイに向かって叫ぶ。

「ウエンデイー!!俺に向かって咆哮だ!!立ち上がれ!!」

「……はい!!」

ナツの言葉で、ウエンデイも立ち上がる。そして、ブレスの準備を行う。

「小癪な!!離れんか……!!」

「離すかよクス野郎オオオ!!」

マルクとガジルは、ドロマ・アニメによる妨害を受け始めるが、むしろドロマ・アニメに対する拘束と吸収を強める。行動を制限され、行動のエネルギー不足の魔力を吸われてほとんど身動きが取れない状況になっていた。

「天竜の……咆哮!!」

ナツは、ウエンデイのブレスを受けてウエンデイのブレスの性質『回転』を利用することにより貫通力を上げる。更に、自身の炎も付け足すことでさらに攻撃力を上げる。

「なっ……!!」

「うわあああああ!!」

「火竜の——!!」

「うおおおおおお!!」

「ああああああああああ!!!」

全員が死力を尽くす。ナツの攻撃はドロマ・アニムの体を突き破る。その光景に、エドラス王は4体のドラゴンの姿を見た。ドロマ・アニムという機械仕掛けのドラゴンもどきが、ドラゴンに敗北したのだ。

そして、ナツはエドラス王をドロマ・アニムを貫通する一瞬で引っぱり出す。

「ふぎい!!」

しかし、ナツもそのままエドラス王を無傷で下ろすほどの余裕がなかったのか、それともわざとなのかは分からないが、エドラス王を投げ出させる。

「ひ、ひいいい……!!た、助けてくれ……!!」

王の目の前には、四体のドラゴンがいた。恐怖に取り憑かれてしまった王にとっては、ナツ達はそういうふうに見えるのだ。

絶対的な力の差、ドラゴンという生物の恐怖を身にしみて理解した王は、そのまま恐怖により、気絶してしまう。

「かーっはっはっはーっ!!王様やつつけたぞー!!こーゆーのなんてゆーんだっけ?チェックメイトか!!」

「それは王様をやっつける前の宣言ですよ。」

「ギヒツ……バカが。」

「ああでも、確かに……終わりなんです……よね……?」

四人が安堵に包まれる中、それに水を差すかのように地面が揺れ始める。まだ何も終わっていない、と言わんばかりに。

「………地震?」

「ま、まさか敵の増援!?冗談じゃねえぞ……流石にま、魔力が空っぽだぜ……」

「ち、違います…アレ……」

ウエンデイが向いている方向に、三人も視線を向ける。その地震の元凶が、目の前に起こっていた。

「浮いてる島が……落ちてきた……」

「な、何で……お、俺達周りの島に影響与えるくらい暴れましたっけ……ああいや、暴れてたかも……」

「……いや、俺達というより原因があるとしたらあのデカ物だろ。『あれ』は流石に関係があるかどうか疑わしいがな。」

一人で反省会を開きかねないマルクに、ガジルがツツコミを入れる。原因があるとすれば、ドロマ・アニメにあると言ったガジルの言葉でマルクはある事を思い出していた。

「……あつ……こ、この世界の浮遊島は……魔力で浮いてるって、城の本で読みました!!」

「ああ……じゃあ、やっぱりこドロマ・アニメいつが原因なのか？」

「い、いえ……魔力が尽きたら落ちてくる、という話なら確かにその通りなんですけど……既に止まっているこいつが今も魔力を吸ってないと今このタイミングで落ちてこないと思います……」

「……ああ？じゃあ何で浮いてる島が今こうして落ちてきてんだよ。」ガジルの最もな疑問に、マルクは答えを出すことが出来なかった。ドロマ・アニメが原因ではない、というのはあくまでもマルクの推測なので、明確な答えが用意出来なかった。

「……ん、あれ？」

「どうした？ウエンデイ。」

何かに気づいたウエンデイが、空を見上げる。ナツ達もそれに釣られて上を見上げるが、上には巨大なアニメがあるだけだった。

「……って、アニメ!？」

「おいおい……またどつかからラクリマが送られてくるんじゃないだろうな……」

「……あ、あれ？」

ウエンデイと共に、マルクもなにかに気づいた声を上げる。ナツとガジルはアニメが開いているということ以外、何もわからないでいた。

「んだよ、今度は何に気づいた？」

「……逆、なんです。」

「逆ウ？よくわかんねえから一から説明しやがれ。」

ガジルの言葉で、マルクは説明を始める。明らかに動揺している顔で。

「アニマの向きが逆なんです!! アニマがこの世界の魔力を吸っている!!」

「……あ? どういう事だ?」

「サラマンダーちよつと黙ってる……おいおい、なんだ? ここにいる王様以外の誰かが、アニマを開いて……いや、逆展開か? ともかく、それをしてこの世界から魔力をなくそうとしているってことか?」

「はい……! 私も空気の流れで分かりました!」

「この世界の魔力は土地やらラクリマなんかにはほとんど詰まってる……それが動いてるから、魔力を伴った空気が移動して……ウエンデイにも分かったんでしよう……多分。」

マルクの説明でナツはよく分からない、という顔になっていたが、ガジルは深刻な顔になっていた。

「おい! つまりどういう事だよ!!」

「……この世界から、魔力が消えるってことですよ。」

マルクの要約で、ナツはようやく理解して、同時に驚愕の表情になっていた。だが、その驚く時間も残されてなかった。

「つ!! 誰かきます!!」

ウエンデイの声ですぐに警戒態勢になる3人。しかし、飛んできたのは一匹の猫……いや、一人のエクシードであった。

「ぼ、ぼきゅだよ!」

「な、ナデイさん?」

顔が長く、何故かいつも片腕を振り続けているエクシード、ナデイ。彼は大急ぎで飛んできたかと思えば、とても真剣な表情でナツ達を見上げる。

「い、今起こってることを……ぼきゅが説明するよ。それで……協力してほしいことがあるんだ。」

このナデイの説明で、ナツ達は一つの決心と彼の協力を受け入れるのだった。

この世界を、去る前に行うラストの大仕事であった。

エドラスとの別れ

「我が名は大魔王ドラグニル!!この世界の魔力は俺様が頂いたア!!貴様らの王は俺様が仕留めたア!!特別、命だけは助けてやったがなあ!!」

黒いマントを取り付け、仮装用の角を取り付けたナツ。ハイテンションそのままに高笑いしながら、エドラスの城下町の一軒家の屋根の上で、丸太に括られた王を見せしめとして、住民に見せつけていた。「レッドフォックス!マーベル!!スーリア!!我が下僕達よ!!街を破壊せよ!!」

その声とともに、ガジルは鉄竜剣で建造物を切り裂いていき、ウエインディは頑張つて驚かそうとする。マルクもなるべく人に当たらないように、尚且つスレスレの所にブレスを吐いていた。

「……わざわざ、街破壊する必要あるんですかね……ま、英雄と悪役という点なら間違つてないんでしょうけど。」

マルクはナツを見てぼそつと呟く。何故ナツ達がエドラスの街を破壊しているのか。その理由は十数分ほど前に遡る。

「……なるほど、王子……ミストガンがアニメを逆展開して魔力を逃がしてるわけか。相当無茶する人だったんだな……」

「そうだよ。でも、それだけじゃあ足りないんだ……『この世界から魔力を消し去った悪役』と『魔力が無くても生きていけるといふことを証明する英雄』が必要なんだよ。」

ドロマ・アニメを倒して、浮遊島の落下を目撃したナツ達。その原因が、ドロマ・アニメにある起動している間の永久的な魔力吸収ではなく、誰かが開いたアニメに魔力が吸い込まれているため、ということに気づいた。

そんな時、エクシードの一人でありエクスタリア国務大臣であるナデイがナツ達の前に現れたのだ。彼は、ミストガンとパンサー・リーの会話を盗み聞きしており、それをナツ達に伝えに来ているのだ。

「んで……その役目を俺達にしろって事か……」

「う、うん……悪いんだけど……多分、この世界で悪役を貫ける人はいないと思うんだ。だから——」

「いいぜ、思いつきり暴れていいんだな？」

「えっ」

「ギヒツ……適当に建物の一つや二つぶち壊しやあ悪役としては充分だからな。」

なんなら建物は積極的に壊していくのもありかもしれないな。」

思いの外ノリノリのナツとガジル。そして、それを見て呆れているウエンデイとマルク。

ナデイもナデイでこんな簡単に承諾してもらえとは思っておらず、逆に会話の内容で心配するハメになっていた。

「……ま、建物壊す云々はともかく。たしかにこの世界に悪役を貫ける人はいないだろうな……だったら、俺達がやるしかないか。」

「それと……もう一つだけ言っておいた方がいいことがあるんだ。」

「ん？何だ？」

「……ぎゃ、逆展開されたアニメは『この世界にあるすべての魔力をアースランドに送り返す』んだ。」

つ、つまり……体内に魔力を持っている者達も——」

「全員送り返される、って訳か。なら丁度いいじゃねえか……そんな時までに決着付けられれば、あとは適当に苦しんでるだけで悪役が消えていく構図になるんだからよ……ギヒツ。」

ガジルは悪役の笑みを浮かべながらそれを協力を承諾し、ナツもま

たガジルと似た理由で承諾、ウエンデイとマルクもやる事自体は理解しているので承諾するのだった。

「もつと街を破壊するんだー!!下僕共ー!!」

「下僕下僕うるせえぞコノヤロウ!!」

「いいからやるのじゃ。」

「口調変わってんじやねえか!!」

街を破壊し、高笑いをあげ、いかにもな格好をしているナツ達を見て、逃げ惑っていた街の人達も、少しづつ夏に注目し始める。

「あいつらが……!あいつらがエドラスの魔力を奪ったのか!!」

「大魔王ドラグニル!!」

「許さねえ!!魔力を返せー!!」

「やだね……俺様に逆らうものは全員——」

ナツが威力弱めのブレスを吐こうとした時、城の方から一人の男が声を上げる。

「よせー!ー!!ナツー!ー!!」

「……俺様は大魔王ドラグニルだ。」

「馬鹿な真似はよせ……王は倒れた、これ以上王都に攻撃など——」

「ファイアー!!」

ナツは弱めのブレスで建造物の壁の一部を破壊する。それだけでも、街の人の恐怖を煽るには十分だからだ。

「俺様を止められるかな?エドラスの王子さんよオ……」

ナツの言葉で街の人達に動揺が走る。この世界の王子は、七年前に

行方不明になっていたからだ。

「来いよ！来ねえとこの街を跡形もなく消してやる……！」

「っ……!!ナツ!!そこを動くな!!」

「ナツではない、大魔王ドラグニルだ。」

ミストガンは、地面に降り立ってナツに迫る。自分の魔法を構えながら走り迫る。

「王子……?この人が……?」

「あの魔王とか言うやつと戦うつもりなのか？」

「相手は火を吹くような怪物だぞ……」

ミストガンの姿を見ても街の人々は不安に煽られる。ミストガン自身も、ナツの行動に呆れていた。

「バカ者め。お前のやろうとしていることは分かっている。だが、この状況を収集できるわけがない……眠れ……！」

様々な思いが渦巻く中、ミストガンは得意の魔法を使おうとする。しかし、発動する前に魔力はアニマに吸われ使うことが出来なかった。

「どうした!?魔力がねえと怖えか！」

「くっ!!」

「そうだよなあ!!魔法は力だ!!!」

ナツは力の限りを込めて足場にしていた建造物を殴る。多少回復した魔力を使ったため、その建造物は完全に壊れて崩れ落ちた。

「きゃー!!」

「なんだこの破壊力は?!」

「魔法……!?!」

街の人々はそれでさらに逃げ惑う。力を見せつけるにしても、やりすぎな感じが否めなかったが、しかしこれぐらいしてこそ……ともマルクは思っていた。怪我しないように細心の注意を払いながら、だが。

「ナツさんやりすぎですよ!!」

「いいんだよ。これで強大な魔力を持つ『悪』に、魔力を持たない『英雄』が立ち向かう構図になるんだ。」

「それに……怪我しないように敵度に魔法打っておけば、威嚇しながら人の安全も守れるだろうさ。」

そう言いながら3人はナツを見守る。崩れた瓦礫をバックに、ナツとミストガンは睨み合っていた。

「もうよせナツ。私は英雄にはなれないし、お前も倒れたフリなどこの群衆には通じんぞ……」

「……勝負だア!!」

「ぐ!!」

そうして二人での殴り合いが始まる。ナツが殴れば罵倒が飛び、ミストガンが殴れば歓声が飛ぶ。

しかし、それを手伝うことは許されない。この茶番のもう一つの目的、ナツが考え出した妖精の尻尾流壮行会。アニメによる魔力の喪失によって発生した民衆の混乱、それを収めるために作られる『魔力を奪った悪役』と『魔力がなくても生きていける証明をする英雄』の二つ。

英雄が悪役を倒して、混乱を沈めると同時に、ここから離れれば二度とエドラスに行けないことを察してのミストガンの壮行会。

「……殴り合いで壮行会なんて、いかにもナツさんらしいと言うか……」

「ギヒツ、ありやあいい意味での馬鹿だからな。ま、俺ならもつと緊張感溢れるものに出来ただろうがな。」

「……ミストガンのことをよく知らない俺達がするんじゃないやなくて、眠らされていたとはいえ、顔馴染みのナツさんがやるからこそ意味がある……って言って辞退しましたもんね、大魔王役。」

「けっ、そんなんじゃないよ。」

ガジルが素直じゃないことに苦笑しながらも、マルクはナツを見る。街の人々には聞こえないナツとミストガンの会話。

そして、それに終止符を打つかのように……ミストガンとナツはクロスカウンターを決める。

最後に立っていたのは……ミストガンだった。

「王子が勝ったぞー!!」

「やったー!!」

「スゲー!!」

「王子ー!!」

「ステキー!!」

そしてナツが倒れると同時に、ナツ……否、体内に魔力を持っている滅竜魔導士達とエクシードの体が光り始める。

「始まった……」

「さーて……派手に苦しんでやるか。」

「何だ何だ!?魔王達の体が……!?!」

そして、そのあとに体が光り始めた者達の体がアニマへと吸い寄せられて浮かび始める。

「ぐわあああああ!!!」

「きやあああああ!!」

「うあああああ!」

「ぐおおおおお!!」

それっぽい反応をしながら、ナツ達は天へと登っていく。その様を見た街の人々は魔王が倒されたから空に流れていくものだと、勘違いをしていたが、それを訂正することは真実を知る者は誰もしなかった。

消える一瞬の直前、4人の滅竜魔導士はミストガンに向かって自分達なりの笑顔でミストガンを見送ったのであった。

「んがつ!」

「きゃっ！」

「ぐおっ！」

「ひー！」

地面よりも少し高い位置から投げ出されたナツ達。全員が積み重なるように落ちてきて、そして全員が落ちて少し呆ける。帰ってくる時は、一瞬なので嬉しさよりも若干の戸惑いがあったからなのかもしれない。

「……帰ってきたぞーっ!!」

「そうだ妖精の尻尾!!」

グレイの一言で全員がマグノリアの街を確認する。グレイとエルザは確認していなかったが、飲み込まれたあとのあの真っ白な空間だった場所がちゃんと戻っているのか、その確認が一番大事だったからだ。

「元通りだ!!」

「マグノリアの街も!!」

「やったあ!!」

元通りになったマグノリアの街。それを見て喜ぶ面々だったが、エルザはまだ安心しきっていないかった。

「まだ喜ぶのは早い。人々の安全を確認してから——」

「大丈夫だよ。」

「一足先にアースランドに着いたからね。」

「色々飛び回ってきたんだ。」

「ギルドも街の人もみんな無事だったよ。」

エルザの言葉を遮り、現れたのはエクシードの面々。しかし、いきなり現れたエクシード達に全員が言葉を失っていた。

「みんな魔水晶ラックリマにされてたことすら知らないみたい。」

「アースランドってすげえな！魔力に満ちてる!!」

「——なんで、なんでエクシードがアースランドに!!」

事情を知らない滅竜魔導士達が、と言っても主にウエンディとマルクがシャルルに事情を説明する。

「冗談じゃないわよ。こいつらは危険!!エドラスに返すべきよ。」

だが、説明してもシャルルは頑なにこうだった。そしてシャルルの言葉でエクシード全体が落ち込んでいた。

「まあまあ……」

「エクスタリアも無くなっちゃったんだし許してあげようよ。」

「イヤよ。」

そんなそっぽを向き続けるシャルルに、エクシード達が謝罪をし始める。

「石を投げつけたのは謝るよ。」

「ごめんなさい。」

「でも俺達帰るところがないんだ。」

「これから改心するよ。」

「もう許して。」

「……石を投げつけた？」

エクシード達の言葉の一部にマルクが反応したが、ウエンデイが軽くなだめてそのまま話を続ける。

「そんな事はどうでもいいの!! 貴方達は私に滅竜魔導士を抹殺する使命を与えて、アースランドに送り込んだ!!」

「そうさ!! 女王はおいら達の卵を奪った!! 忘れたとは言わせねえ!」

「あ、おじさん。」

とあるエクシードの言葉により、ざわつき始めるエクシード達。エクスタリアの女王であるシャゴットが軽く沈む中、恐らくシャゴットよりも歳上であろうエクシード達が出た。

「まだきちんと説明していませんでしたな……」

「これは6年前の話になります。」

「シャゴットには未来を見る力があるのはもう、お話しましたね？」

ある日、シャゴットは地に堕ちるエクスタリアを見たのです。今思えばエドラスの魔力枯渇による自然落下だったのじゃが……: 当時は原因を人間の仕業と思っていた。

人間と戦争をしても勝てないことはわかっておった。ワシらは会議の末、100人の子供をエドラスから逃がす計画を立てたのです。「逃がすだ?!」

「その計画はエクスタリアの民にも内密に行われました。表向きは、異世界の怪物滅竜魔導士を倒す為の作戦だということにしました。」

勿論、滅竜魔導士に恨みがあった訳ではありません。」

「分かっています。そういう設定が必要だったって事ですよね。」

「それに、本当の事を言ったらきつとパニックになっていたと思うわ。」

女王に文句を言い立てた白いエクシードは、ものすごく複雑そうな顔をする。今まで怒りの対象だったものが、実は自分の子供を逃がす為にしてくれた事だと知ってどうしたらいいのかわからなかったからだ。

「人間達のアニメを借り、私達の作戦は成功しました。しかし、たった一つだけ計算外のこと起きたのです。」

「それはシャルル……貴方の力。」

「っ!？」

「貴方には私と同じ様な予言の力があったのです。」

「え……?」

「しかし、それは無意識に発動しているようで、あなたの記憶を混乱させたのです。避難させた100人のエクシードのうち……貴方一人だけが。」

恐らく、エドラスの断片的な未来を予言してしまった。そして、それを指名だと勘違いしてしまったのです。」

「そんな……」

シャゴツトの言葉でシャルルは驚きを隠せないでいた。自分の使命が、不幸が積み重なった結果の勘違いだったということが。

「じゃあオイラは……」

「元々そんな使命はなかったのですよ。本当に不運に不運が重なり、あなたは自分の『ありもしない使命』を作り出してしまった。」

「ぼきゅは君が自分の力を知らないことをいいことに、さもぼきゅたちが操っているように言ってみただ……ごめんね……」

「全て女王様の威厳を演出するための猿芝居……本当に申し訳ない。」
表情が驚愕の色に染まったシャルル。自分の今までが覆されるよ

うな気分になっていた。

「たくさんの不運と民や人間に対する私の虚勢があなたを苦しめてしまった。いいえ……6年前、卵を取り上げた全ての家族を不孝にしました。」

だから私は貴方に剣を渡したのです。悪いのはエクシード全てじゃない……私一人です。」

しかし、そのシャゴツトの言葉に他のエクシード達は反論を始める。

「それは違いますよ女王様！」

「女王様の行動は全部私達を思つてのこと。」

「俺達だって自分達の存在を過信してた訳だし……」

「折角アースランドに来たんだ！六年前に避難させた子供たちを探しましょう!!」

「おお！僕達にも新しい目標が出来たぞ!!」

「今度は人間と仲良くしよう!!」

「新しい始まりなんだー」

「はは……前向きな奴らだな。」

エクシード達の発言により、シャゴツトは感動していた。その前向きさは、エクシード全体のそれだと考えると、とても前向きな種族という事だが、それを見てマルクは自然と微笑んでいた。

「みんな……」

「いいわ……認めて上げる。」

「シャルル……」

「でも何で私にあんたと同じ力があるわけ？」

「ゴホツゴホツ!!」

「ど、どうしてかしらね……」

「なーんか怪しいわね……」

シャルルの疑惑の目。シャゴツトと同じ白い毛色、そしてシャゴツトと同じ未来予知の能力。

これらだけでも既に結果は見えているのだが、シャルルにはまだ分からないようだった。

「わ、私達はとりあえずこの近くに住もうと思います。」

「いつでも会えますね。」

「何嬉しそうにしてんのよ。」

「そう……いつでも会えるわ、シャルル。」

シャゴツトはシャルルを抱きしめる。それに対してシャルルは抵抗することなく、それを受け入れていた。

「みなさん本当にありがとう。」

「また会いましょうー」

「元気でねー」

「おーう！またなー!!」

「またねー」

「とりあえずバイバーイ。」

そう言つて、エクシード達は飛んでいく。この近くに住むのであれば、いつでもと会える。

前向きで自由気ままな猫のような種族、エクシード。彼らの本当の歴史はある意味、これからなのかもしれない。

リサーナ・ストラウス

「俺達もギルドに戻ろうぜ。」

「皆にどうやって報告しよう。」

「いや……みんな気づいてねえんだろ？今回の件。」

「しかしミストガンのことだけは黙っておけんぞ。」

話し合いをするナツ達。表面上真面目な話をしているが、光景的には随分奇妙なことになっていた。

ナデイのが移ったのか、ナツ、エルザ、グレイ、ルーシイの4人は高速で腕を上下に振っていた。

「みんな……手……」

「ちよ、ちよつと待て……」

「どうしたガジル……お前も真似してーのか。」

「それに価値があるならな!!」

「あ、やっぱり真似してたんですねそれ……」

ガジルは辺りをキョロキョロ見渡し、誰かを探しているようだった。

「リリーはどこだ!?パンサー・リリーの姿がどこにも見えねえ!!」

「——俺ならここにいる。」

そう言いながら、草むらから姿を現したのか……何故か等身が他のエクシード達とほとんど同じになってしまったようだ。

「ちっちゃ!!」

「随分可愛くなったね……」

「どうやらアースランドと俺の体格は合わなかったらしいな。」

「あんた……体、何ともないの?」

「今のところはな……俺は王子が世話になったギルドに入りてえ、約束通り入れてくれるんだろうな……ガジル。」

「もちろんだぜ!!相棒!!」俺のネコ

「ガジルさん……泣く程ですか……」

マルクが泣いて抱きついているガジルに苦笑いしながら、ふとりリリーが先程から持っている縄の先に気づく。

「パンサー・リリー、その縄……何だ？」

「ああそうだ……それとは別に、怪しいヤツを捕まえたんだ。来い。」
リリーはそう言つて縄を引つ張る。引つ張られた人物はバランスを多少崩しながら、草むらから出てくる。

「ちよ……私、別に……！怪しくなんか……！きやつ!!私も
フェアリーテイル妖精の尻尾の一員なんだけど……！」

「リサーナ……」

それは、二年ほど前に死んだという事になっていたエルフマンや、ミラジェーンの妹であるリサーナの姿だった。

「なんなのこのネコ!!てかエクシード？」

「パンサー・リリーだ。」

「何だてめえ、俺のネコにケチつけようつてのか？ア？」

「リサーナつて……ミラさんの妹、でしたよね……でも、もう居ないつて……」

「そんなまさか……」

「リサーナ!？」

困惑する面々。既に死去しているはずの人物が、蘇ったのだから無理もなかった。しかし、マグノリアでおつても死者蘇生の術なんてのは、マルクは聞いたことがなかった。

「なんで……」

「もしかして……エドラスのリサーナが……」

「こつちに来ちやつた訳く!？」

「ど、どうしよう……」

どうするべきか考える一同。しかし、そんな中でリサーナはなにかに気づいたかのように、ナツに視線を向ける。そして、一瞬の間とともにも――

「ナツ!!」

「どわー!!」

抱きついた。何の躊躇いもなく、一切の躊躇も無く、まるで懐かしの恋人にあつたかのような、強烈に飛び込んで抱きついた。

「また会えた……『本物』のナツに……！ハッピー！私よ！リサーナよ

!!エルザとグレイも久しぶりだね!!うわあ懐かしいなあ……その子達は新しいギルドのメンバーかしら?もしかしてルーシィ……と『小さい』ウエンディ?そっちの男の子はエドラスでは見かけなかったけど……はじめまして!だよね?」

正にマシンガントーク。矢次早に喋って周りを置いてけぼりにしていくリサーナ。しかし、このリサーナの反応でグレイが何かに思い至ったのか、驚きを隠せない、というような表情を浮かべながらリサーナに指を向ける。

「ちよつと待て……お前、まさか……アースランドこっのリサーナ!」

「……うん。」

「っ!!」

「なっ……!」

「うそお!」

「えええーっ!」

「生き返ったのかー!!」

「うわーい!!」

リサーナのことと驚いたり、喜んだり……そしてナツとハッピーが喜びで抱きつこうとした時、一旦冷静になったエルザが二人の首根っこを掴んで阻止する。

「ま……待て!お前は二年前に死んだはずだ。」

「……私、死んでなんかなかったの。」

二年前……ミラ姉とエルフ兄ちゃんと3人で行った仕事の最中、私は意識を失った。多分、その時アニマに吸い込まれたんだと思う。

当時、アースランドには小さなアニマが沢山あったんじゃないかな。」

「ミストガンが潰して回っていると言ってたあれか……」

「エドラスで目が覚めた私は妖精の尻尾を見つけて驚いた。皆、少し雰囲気は違ってたけど……私の知ってる人達がそこにはいた。しかも、みんなが私をエドラスのリサーナだと思っ込んでいたの。多分、本物のエドラスのリサーナは……」

『恐らく』の事実には少しだけ顔を俯かしたりリサーナ。しかし、すぐに話

を続け始める。

「……既に、死んでいるんだと思った。ギルドの雰囲気かね……そんな感じだった。」

私は本当のことが言えなかった。エドラスのリサーナのフリをしたの。最初は戸惑ったけど……みんなに合わせて、自分の魔法を隠し……エドラスの生活にも慣れてきて……2年が経ったの。今年の事なんだけど……六日前に、エドラスの妖精の尻尾にアースランドのナツとハッピーがやってきたの。」

「なんであの時言わなかった!!」

「……言えなかったの。エドラスの、とはいえ……ミラ姉とエルフ兄ちゃんを二度と悲しませたくなかったから……もう、エドラスで生きていこう、って思ってた……だけど、エドラスの全魔力がアニマに吸われて……元々アースランドの人間だった私も……」

「例外じゃなかった……って訳か？」

「……うん。」

グレイの続けた言葉にリサーナは苦笑しながら頷く。しばらく沈黙していた一同だったが、不意にナツが立ち上がってリサーナに手を伸ばす。

「行こう、リサーナ。」

「い、行くって……どこに？」

「お前の家族……ミラと、エルフマンのいるところに決まってるだろ？折角生きていたんだ……早く会いに行ってやらねえと。」

「っ!!う、うん!!」

リサーナはナツの手を握る。それに少しだけ安堵した一同はリサーナを連れて、リサーナの墓がある場所……カルデア大聖堂にある墓地に向かうのであった。

「姉ちゃん、そろそろ行こう。」

「もう少し……」

リサーナの墓に佇む二人の人物。エルフマン、ミラジエーン。リサーナの兄、並びに姉である二人はリサーナの墓参りに来ていた。

リサーナの命日、その日には必ず花を置くために出向く。そして、今日がその日だった。

「ミラ姉く!!エルフ兄ちゃん!!」

そして雨の中、駆け抜けるリサーナの姿。最愛の妹二人は驚き、少しだけ固まったが、すぐにその顔から涙がこぼれ落ち始める。

リサーナはミラジエーンに抱きつき、二人をエルフマンが泣きながら抱きしめる。死んだと思っていた者が、生きていた。嬉し涙を流しながら二人はリサーナを暖かく迎え入れるのであった。

「ただいま……!」

「おかえりなさい……!」

この日、リサーナ命日だったこの日はリサーナが帰還した祝いの日となった。中身のない空っぽなお墓に、兄と姉は行く必要がなくなったのであった。

「——で、この騒ぎ。」

翌日、妖精の尻尾はお祭り状態だった。何せ、死んでいたはずのリサーナが帰ってきたのだ。仕事をする気も起きずに、飲み食いのどんちゃん騒ぎだけをしていた。

「マルク、あーん。」

「あー」

因みに、マルクは両腕を負傷していたのであの後思い出したかのように病院に行った。しばらく両腕を使うもんじゃない、とやたらと怖い医者に激昂されたのが、マルクは軽いトラウマになっていた。

「……いやほんと、エルザさんが一緒に病院いってくれて助かった……家までくる必要があったのが疑問だけど。」

「……エルザさんって、あんまりそういうこと気にしないのかな……」
顔を真つ赤にしながらウエンデイとマルクは顔を俯かせていた。
一人で病院に行くくらいならなんとでもなったが、両腕が壊れているので着替えすらままならないのだ。

「……結局、どうするの?」

「なんか、マスターが来ることになった。流石に両腕が使えないんじゃないでしょうもないだろうって。」

「家に来たら良かったのに。」

「いや……女子寮って男子禁制だろ?」

「女の子の格好すればいけるんじゃない?」

「本気じゃないよな……?」

二人が会話していると、突然にガジルがものすごく嬉しそうな声を出しながら叫んでくる。

「コラア!! 火^{サラマンダー}竜! 小娘エ!! オレのリリーと青猫白猫勝負させろやあ

!!」

「……あんたもえらいやつに目え付けられたわね。」

「あう……」

「望むところだア!!」

「望まないですよ……」

二人がお互いの相棒の自慢話を繰り広げる中、エクシード組は大人しくしていた。

そして、いつの間にやら本人達の方が喧嘩していた。何故か関係のないエルフマンとグレイが混ざっていたが。

「……なんか、随分と久しぶりなんだよな。こういう騒がしい感じ。」
「マルクずっとエドラスで一人だったもんね。」

「……それは、言われると寂しさを思い出しそうだ。」

騒がしく喧嘩する周りを見ながら、静かにマルクとウエンディは談笑していた。

それを、じつと見つめるハッピー。

「……どううえくいてるうう……」

「巻舌風に言うんじゃない……そういや、結局これ泊まりなのかな。」

「さあ……?」

「……リアクション薄いと、オイラちよつと寂しいなあ。」

宴がなし崩し的に終わり、皆がギルドで寝静まった頃。マルクは一人ギルドの外へと出ていた。

じつと、夜空を見上げながら星を眺めていた。

「……よう、そんなところで何してんだ?」

「あ……ギルダーツさん。」

「子供はもう寝る時間だぞ……って言っても全員家に帰らないでこれだからな。」

全員素行不良だな、こりゃあ。」

「寝てなかったんですね。」

「そりゃあ騒ぎ倒してねえからな。俺とマスターはまだ起きてるよ

「……で、話ってなんだ？」

微笑んだ顔のまま、ギルダーツはマルクの目を見る。マルクは真剣な表情で、少し聞くのを躊躇ったが……ギルダーツの目を見返して話を始める。

「……黒いドラゴン、のことを教えてください。」

「……ナツが言ってたな、確か……お前の育ての親のドラゴンが、目の敵にしている……って奴か？」

「はい……わかる事が、あるかもしれないから。」

ギルダーツは、少し頬を掻く。話しづらい、のではなくあまりにも話すことが少ないゆえの行為だった。

「……俺は一瞬でやられた。それだけだぞ？ただ一つわかることといえば……あれは人間が勝てる相手じゃない、って事だけだ。」

「……人間が、勝てる相手じゃない。」

「……だが、ドラゴンなら勝てる。ドラゴンを滅する魔導士、って言いたいならそいつを倒さなきゃならんからな。」

俺から言えることはそれだけだ。」

「……そうですか。いや、確かにその通りだ。ドラゴンなら……ドラゴンスレイヤー滅竜魔導士ならドラゴンを倒せる……あ、ありがとうございました、話をしてくれて。」

「よせやい、俺は何も話せてねえよ……怪我、早めに治せよな。」

「……はいー」

ギルダーツは手を振ってギルドの中へと戻っていく。マルクは再び空を見上げる。

ナツを育てた火竜イグニール、ウエンディを育てた天竜グランディーネ、ガジルを育てた鉄竜メタリカーナ。

あつたことの無い3体のドラゴン。しかし、それはとても優しく育ててくれたのだろうと、マルクは予測する。

だからこそ不思議なのだ。自分の親、イービラーを含めた4体のドラゴン。それらは全員優しいはずなのに、何故黒いドラゴンだけは人類を攻撃するのか、を。

「……けど、もし妖精の尻尾を襲うのなら……ウエンディに、危害を加

えるのなら……そのドラゴンは、俺が倒さないといけない。」
一つの覚悟を胸に、マルクはもっともつと強くなろうと、誓うの
だった。

S級魔導士昇格試験編 S級魔導士昇格試験

「……なんか、最近やけにギルドが騒がしいですよ。ミラさんは何か知ってますか？」

ずっと慌ただしい中のギルド。マルクはしつちやかめつちやかになっている中をどうにかこうにか移動して、ミラの元までたどり着いていた。

「あら、その質問はさつきも聞いたわ。ルーシイから。」

「ルーシイさんも同じ事聞いてたんですか……で、何なんですかこの騒がしさ。」

いつも通りの人もいるにはいますが……基本、みんな騒いでばかりです。」

「そうね……じゃあ、ひとつだけヒントをあげます。騒いでいる人の共通点、騒いでない人の共通点、騒いでいる人と騒いでない人の違うところ……この三つを考えれば、少し答えに近づくとと思うわ。」

「共通点と、違うところ……？」

依頼書を渡され、それを承認してまた別の依頼書を渡されてそれを承認して……ミラは仕事をしながらマルクと話していた。

そして、マルクはじーつと風景に目をやっていた。ミラのヒントがなんなのかを探るために。

「……騒いでないのは、リリーとシャルルとウエンディと……エルザさんにミラさん。それとルーシイさん……今いるのは俺を含めた7人。」

全員に共通することって……？」

「ふふ……」

悩むマルクを見て微笑みながら、ミラは仕事をこなししていく。結局、マルクはこの日答えがわからないままに帰路に着いたのであった。

翌日、マルクがギルドに来た時には既に妖精の尻尾には沢山の人が集まっていた。

「ウエンデイ！シャルル！！」

「あ！マルク！」

「この騒ぎ何かわかるか？」

「マスターから何か重大発表があるんだって。」

「興味無いわ。」

見つけたウエンデイに声をかけるが、やはり何故ここまで人数が集まっているのか分からなかった。

すると、奥にかかっていた垂れ幕が広がる。そこに居たのは、マスターとエルザとギルダーツとミラの四人が立っていた。

「マスター！」

「待ってましたー！！」

「早く発表してくれー！！」

「今年は『誰』なんだー!？」

口々に声を出す妖精の尻尾のメンバー達。どうやら、殆どの人物がこの騒ぎの正体を知っているようだった。

「コホン……妖精の尻尾古くからのしきたりにより、これより……S級魔導士昇格試験出場者を発表する。」

マスターのこの発言により、妖精の尻尾中が声を荒らげる。そして、マルクも前日のミラのヒントに、ようやく合点がいていた。

「だからルーシイさんより前に入ってた人達は知ってたわけだ……」

「今年の試験会場は、天狼島……我がギルドの聖地じゃ。」

「S級試験……何をするんだろうね？」

気になったウエンデイが、シャルルとマルクに視線を向けて尋ねる。しかし、二人も知らなかったのだから望む答えが出るわけがない。

「さあ？多分、こういう直前までバレないようになってるんじゃないかしら？」

「ただ……どっちにしろハードなことには変わりなさそうだな。」

「各々の力、心、魂……わしはこの1年見極めてきた。参加者は八名。『ナツ・ドラグニル』『グレイ・フルバスター』『ジュビア・ロクサー』『エルフマン』『カナ・アルベローナ』『フリード・ジャステイーン』『レヴィ・マクガーデン』『メスト・グライダー』」

「……メスト・グライダー……？」

聞きなれない名前が心に引つかかるマルク。しかし、自分が聞いたことないだけだろうと、気にしないでいくことにした。

「今回はこの中から合格者を一名だけとする。試験は1週間後、各自、体調を整えておけい。」

「っ!!」

突然、何か驚くようなものでも見たような表情になるシャルル。マルクとウエンデイはすぐさまそれに気づく。

「どうかした？シャルル。」

「べ、別に……」

だが、はぐらかされてしまったため、気のせいだと思って再びマスターの方へと視線を戻す。

「初めてのものもおるからのう。ルールを説明しておく。」

「選ばれた八人の皆は、準備期間の1週間以内にパートナーを一人決めてください。」

「パートナー選択のルールは二つ。一つ『妖精の尻尾のメンバーであること』二つ『S級の魔導士はパートナーに出来ない』」

エルザとミラの説明で、理解と納得をするマルク。S級の試験なのに、確かにS級をパートナーに出来てしまえば怖いものがなくなるからだ。

「……けど、それでも一人だけなんだな。厳しいな、意外と。」

「試験内容の詳細は天狼島に付いてから発表するが、今回もエルザが貴様らの道を塞ぐ。」

「今回は私もみんなの邪魔をする係になりまーす。」

マスターの発表と、ミラの申告でざわつき出すメンバー。妖精女王テイターニアと呼ばれたエルザと魔人ミラジエーンと恐れられたミラの二人が邪魔をするのだ、不平不満は出てもおかしくはなかった。だが、まだもう一つだけあった。

「ブーブー言うな。S級魔導士になる奴ア皆通ってきた道だ。」

「……もしかしなくても、ギルダーツさんも参加するんだなこれ。難易度が高すぎるな。」

「選出された8名と、そのパートナーは一週間後にハルジオン港に集合じゃ。以上!!」

「皆さん初挑戦だったんですね。」

「そうよね、なんか意外だったわ。あんた達みんなが……って言うのが余計に。」

「そういえば、みんなもうパートナーって決まってるの?」

マスターの発表のあと、ナツ達は皆一か所に集まっていた。エルフマン、ジュビア、グレイ、ナツの4人は楽しみにしていたり、焦っていたりと、それぞれの反応をしていた。

「俺はもちろん、ハッピーだ。」

「あい。」

「ハッピーはズリイだろ！もし試験内容がレースだったら、空飛べるなんて勝負にならねえ。」

「別にいいんじゃない？」

「俺も別に構わねえよ、戦闘になったら困るだけだしな。」

「酷いこと言うねグレイ……オイラは絶対ナツをS級魔導士にするんだ！」

「こればかりは仲間といえど、絶対譲れねえ！こうしちやいられねえ！修行だー!!」

「あいさー!!」

ハッピーはナツの前に立ち、キリツとした顔でみんなに宣言する。そして、ナツも皆に宣言する。

そして、修行するために走ってギルドから出ていく。

「……S級魔導士、かあ。まあ魔法的に、というか……魔力的にパートナーに出来る人が限られてくるから、参加しない方が良かったのかもな。」

マルクはボソツとつぶやく。自嘲でも自虐ネタでも何でもない、本当にそう思ったからこそその独り言だった。

「あの、ジュビアはこの試験を辞退したい……」

「ええ?!何で?!」

そして、何故か突然にジュビアはこの試験を辞退する気を見せていた。やけにモジモジしているのが、マルクは少し気になったが、すぐにその答えは出た。

「だって……様の……パートナーに……なり……たい……」

「何だって?」

「だから、あの……ジュビアは……」

頬を赤らめて、言い淀んでるジュビアを見て親切心が湧いたのか、それとも野次馬魂か。ルーシイがニヤニヤしながらグレイに話す。

「あんたのパートナーになりたいんだって。」

「ア?」

「ほら!!やっぱりルーシイが狙ってる!!」

「狙って無いわよ……」

だが、ジュビアのそんな淡い願いはS級魔導士試験の資格を得てしまったことで、崩れてしまっていた。

「悪いが、俺のパートナーは決まっている。」

「久しぶりだね、皆……そう言えば君とは初対面だったかな？ マルク。」

「は、はい……初めまして……獅子座の星霊のレオ……いえ、ロキさんでしたっけ。」

「ああ……これから宜しくね……つと軽く自己紹介も済んだから話を戻そうか。」

「……昨年からの約束でな。」

「ルーシイ、悪いけど試験期間中は契約を解除させてもらうよ。心配はいらない、僕は自分の魔力で門を潜^{ゲイト}ってきた。だから君の魔法は使えなくなったりしないよ。」

「なんて勝手な星霊なの……？」

ロキの行為で、ルーシイが困惑の表情を浮かべていた。それを見て少しだけ、同情したくなってしまったマルクであった。

「でもおめエ、ギルドの一員ってことでいいのかよ。」

「僕は今でも妖精の尻尾の魔導士だよ。ギルドの誇りをかけて、グレイをS級魔導士にする。」

「頼りにしてるぜ？」

「任せて。」

「……この二人ってこんなに仲良かったっけ？」

グレイとロキの様子を見て、少しだけルーシイが頬を膨らませていた。ここまで仲が良かった印象が無かったからこそ、何故か自分より優先されていることになのかはマルクには分からなかったが、嫉妬していることだけは目に見えて理解出来た。

「つーわけで、お前も本気で来いよ。久しぶりに熱い闘いをしようぜ。」

「っ!!」

グレイのセリフの後に、ジュビアは顔を真っ赤に染めて俯き始め

る。いつものグレイに対する愛による妄想だろうと苦笑するメンバーもちらほら。

「私がジユビアと組むわ!」

「本気かりサーナ!」

「私、エドラスじやあジユビアと仲良かったのよ。それにこっちのジユビア…何か可愛いんだもん。」

「リサーナさん……」

「決定ね!」

リサーナは満面の笑みでジユビアの手を握る。だがジユビアは『もしかしてリサーナもグレイを狙っているのでは?』なんてことをブツブツと呟いていた。

「ちよつと待てよりサーナ!それじゃあ、俺のパートナーが居ねえじやねえか!!」

「そう?…さつきから熱い視線を送ってる人がいるわよ。」

「へ——」

そう言つてリサーナが向けた視線の先に、確かにエルフマンを見ている者はいた。エバーグリーンである。

「ああ……エバーグリーンさん、フリードさんのパートナーに選ばれなかったから……」

「そ、むくれてるみたいなのよ。」

「エバーグリーン……熱い、って言うより石にされそうな視線じゃねえか!!」

「……まあ、エルフマンさんがどうするかは置いといて、今決まってるのはナツさんがハッピー、グレイさんがロキさん、フリードさんがビッグスローさん、ジユビアさんがグレイさん、になったんですね……」

「残りのメンバーは誰を選ぶんだろ……」

わいわいとはしゃぐ中、そういうパートナー選びの予想が、選ばれていないメンバーの中で予想されていくのであった。

夜、雪降るマグノリアの中をウエンディとマルクとシャルルは歩いていった。

「どうしたのシャルル、朝からずつとおとなしいね。」

「ちよつとね……何か嫌な予感がするのよ。この試験とかいう奴……あんたは参加しちや絶対にダメだからね。」

「私なんかパートナーにする人いないし、大丈夫だよ。」

「それはどうか……天空の巫女。」

「あ……えーつと、貴方は……」

突然後ろから声をかけてきた男。それはS級魔導士昇格試験に選ばれた一人、メスト・グライダー本人だった。

「俺はメスト。ミストガンの弟子だった。」

「ミストガンの弟子!？」

「……?。」

メストの喋る事に、少しだけ違和感を覚えるマルク。しかし、違和感の正体がまるで掴めず、少しだけでもどかしい気分になった。だが、その当の本人であるメストは、何やら顔を上に向けながら口を大きく開けていた。

「君の事はミストガンからよく聞いている。」

「……あ、あの……何をしていますか。」

「雪の味を知りたいのだ。気にしないでくれ。」

「なんなのこいつ……」

「雪の味……?。」

「マルク!? あんたも目の前の男みたいなことしないでしようね!？」

シャルルに突っ込まれて少しだけ驚いたマルク。確かに今みたい

な言動だとメストと同じように取られてしまうと、思い直したのだ。気になったのは全く別のことである。

「力を貸してくれないか。」

「それが人に物を頼む態度なの!？」

「すまん……どうも俺は知りたいたいことがあると夢中になってしまふ癖があるのだ。ウエンデイ、君の力があれば俺はS級の世界を知ることが出来る。頼む、力を貸してくれ。」

「え、でも……私なんか……」

「ダメに決まってるじゃない!!」

「……知りたい。冬の川の中というものを俺は知りたい。」

そして、唐突にメストは川の中に飛び込んでいた。

「こんな変態に付き合っちゃダメよ!!」

「流石にシャルルの意見に賛成だぞ今回は!!」

「でも……悪い人じゃなさそうだよ?それに私、恩人だったミストガ
ンに何一つ恩返しとか出来なかったし。」

「エドラスを救ったじゃない!それで十分よ!!」

「でもそれは結果論でしょ?私の気持ち的には……」

「ダメったらダメ!!」

「……で、結局喧嘩して、お互いに口聞かなくなったと。」

「そういう事……」

翌日、妖精の尻尾に来ていたマルクだったが、メストのことで喧嘩したウエンデイとシャルルを見て一人でため息をついていた。

様子を見かねたりリーも、呆れていた。

「にしても……お前も反対してた、ということはやはりウエンデイが心配か？」

「ああ……心配だな。」

マルクは真剣な表情になって、ギルドにいるメストに視線を向ける。確かに、試験に行くウエンデイのことが心配なのは確かだが、それ以上にメストに感じる猛烈な違和感にマルクは少しだけ顔をしかめるのであった。

悪魔の心臓

「……助かったよりリリー、俺も運んでもらえてな。」

「いいのよ、私たちは見学するだけなんだから。」

「そうは言っても、二人ともウエンデイが心配だからついてきているんだろうに。」

海の上を飛ぶリリーとシャルル。そして、リリーに持ち運ばれているマルク。

3人は、今天狼島に向かって飛んでいた。リリーはマルクが頼んだから運んでもらっているのだが、シャルルは天狼島までの航路の地図を見て飛んでいっていた。

「……しかし、先程から浮かない顔をしているな。」

「……あのメストって人が……気がかりだな。」

砂浜に降り立った3人は、とりあえず歩きながら話し合いをしていた。

「気がかり、と言うと?」

「色々と辻褄が合わないことが多すぎるんだよ。リリー、お前も違和感の一つくらいはあるんじゃないのか?」

「……まあ、一つだけな。王子はこちらの世界で人と接触するのを避けていた。」

「ギルドに寄る時もわざわざ全員を眠らせて、顔がバレないようにしていたらしいわね。」

「その王子が弟子を持つとは考えにくい……」

「何が言いたいのよ。」

「うーむ……これはものすごく突拍子もない推測なのだが、メストという男は本当にギルドの一員なのか?」

リリーの推測にシャルルは驚いていた。突拍子もない事なのは本当だったが、しかし確かに人と接触することを避けていたミストガンが弟子をとる、というのもおかしな話だからだ。

「……マルクも同じこと考えていたわけ?」

「確証が無かったから……けど、調べれば調べるほど疑いが強く

なってきたているのも確かだ。」

「……聞かせてもらってもいいかしら?」

「……メスト、さんがウエンディを誘った時。『雪の味が知りたい』『冬の川の温度が知りたい』つってたけど……おかしくないか? 去年もS級魔導士昇格試験に参加しているはずなのにその二つを知らないなんて。」

リリーの表情がさらに強がる。リリーはマルクを掴み、シャルルと同じように浮いて空からウエンディを探し始める。

「匂いは追えそうか?」

「あんまり高く飛ばれるときついがな……で、だ。少しだけ気になったから軽く聞き込みしてたんだよ。去年は惜しかった、って言われてたから他の人も見ていたのかと考えてな。」

「結果は?」

「誰も覚えていなかったよ。参加していた、ってことは覚えてるのに、去年のパートナーとかどういう魔法を使うかとか……誰も知らなかったんだよ。」

「……確定じゃないか?」

「世の中には人の記憶を操作できる魔法があるみたいだからな。もしかしたらバレたらやばい魔法でも使ってるのか……みたいなどころはあるが、今にして考えてみたら……まあ、ほぼ黒だな。」

マルクの言葉に、シャルルが憤慨する。分かっているながらウエンディを行かせたことが、である。

「あんた! 分かかって何も言わなかったの!?!」

「ウエンディは人を信じやすすぎる……が、一人でも出来るくらいにはあの子の心は強い。」

まあ、正直に言えば頑固になったから口で聞かせるよりメストさんを泳がせていた方がいいって話しさ。」

「ボクを出すまで待つつもりだった……という事か。なるほどな。」

「そういう事だ……見つけた!」

マルクはウエンディを目視で確認する。それを聞いたシャルルとリリーは速度を上げてウエンディのいる所へと飛んでいくのであつ

た。

だが、突っ込むのと同時に信号弾が打ち上げられるのをマルク達は確認した。色は赤、敵が襲撃した時に出されるものであった。

「ウエンデイー!!」

「今すぐそいつから離れなさい!!」

「シャルル!? リリー!? マルク!」

降り立った3人は、ウエンデイーとメストの間に入る。ウエンデイーを守るような立ち方で。

「メスト! あんた一体何者なの!」

「え? な、何者って……俺はミストガンの弟子で……」

言葉が続けようとしたメストに、リリーが本来のエクシードとは思えない筋肉質な体格に戻したパンチを顔横スレスレでする。

「ウエンデイー、俺から離れんなよ……!」

「王子がこの世界で弟子をとるはずがない。この世界にいない人物を使ったまではよかったが、『設定』を誤ったなメストとやら。」

「ちよつと! なんなの三人とも急に!」

「あんたは黙ってなさい。」

メストの後ろには岩リリーはその岩にメストを追い詰めて、自身の拳の当たる距離に追い詰めていた。そしてウエンデイーは突然のことで、困惑していた。

「お前は何者だ。」

「な、何のことだ……」

「恐らくお前は人の記憶を操作する魔法の使い手だ。ギルドのメンバーに魔法をかけ、自分がギルドの一員であることを装った。

王子のことも含め、考えれば不自然な点だらけだ。お前と接点を持つ者の名も上がらない。

その上、ギルドの信号弾の意味も知らないようでは言い逃れはできんぞ。」

「赤色は敵の襲撃の合図……まだ入りたての俺やウエンデイが覚えてないってんならともかく、少なくとも1年以上いる『設定』のあんたが知らない……なんてことあるはずがねえからな。」

メストはリリー達の言葉に反論をしなかった。だが、少しだけ俯かせていた顔を上げると、その姿は一瞬で消える。

「なっ!!」

「消えた!?!」

「っ!!」

消えたと思われた刹那、その姿はウエンデイの目の前に現れる。瞬間移動の魔法も、メストは覚えていたのだ。

そしてメストはウエンデイを抱きしめる。だが、目の前に現れる寸前にマルクは既にブレスの準備をしていた。

「ウエンデイー!!」

「——危ない!」

「——魔龍の咆哮!」

だが、ウエンデイを抱きしめたメストは、そのまま身を横に引く。すると直前までいた場所が爆発したのだ。

そして、マルクのブレスはメストに向けられたものではなく、爆発の直線上に向かったものだった。

「攻撃!?何事!?!」

「誰だ!出てこい!!」

メストは声を荒らげる。マルクのブレスによりなぎ倒された木々だったが、一本だけ全く傷ついていない木があった。

その木から、人の顔が浮き出てくる。

「よくぞ見破ったものだ……」

「ひっ!?!」

「木から人が!?!」

「な、何者だ!?!」

木から浮き出た顔はそのまま更にゆっくりと出てくる。本来ならば、この隙を狙った方がいいのだろうが、ブレスの一撃でびくともしないのを見てマルクは無闇に攻撃を仕掛けられないでいた。

「俺の名はアズマ……悪魔グリモアハートの心臓煉獄の七眷属の一人。」

「グリモアハート!?!」

「闇ギルドよ……」

「しかもバラム同盟の三大闇ギルドの一つ……それが何でこの島に。」

「一体……何がどうなっているんだ!?!」

リリーの疑問に応えるかのように、メストが本性を表し始める。

「妖精フェアリーテイルの尻尾の聖地に侵入すればわきな臭い話の一つや二つ出ると思ってたんだがな……黒魔導士ゼレフに悪魔の心臓……こんなでけえヤマにありつけるとアついてるぜ……」

「あんた一体……」

「まだ気づかぬえのか? 俺は評議員の人間だ。妖精の尻尾を潰せるネタをつかむために潜入していたのさ。」

「評議員!?!」

「そんな……」

「これはこれは……」

それと同時に、何らかの連絡手段を取ったのか遠目の海から船が一隻近づいてくる。その帆には、評議員のマークが施されていた。

「だがそれもここまでだ……あの所在地不明のグリモアハートがこの島にやってくるとはな。ふはははは……これを潰せば出世の道も夢じゃない。」

万が一にも備え、評議員強行検束部隊の本体……戦闘艦をすぐそこに配備しておいて正解だった。一斉検挙だ、悪魔の心臓を握り潰してやる。」

「戦闘艦……あれの事かね。」

メストが語っている間に、自身の体をほとんど出し終えていたアズ

マ。そして、その後ろでは評議員の戦闘艦が、見るも無残に爆発していた。

「なっ!!」

「え………?」

「な、何をしたの……」

「船が、馬鹿な……!?!」

「ふむ……では改めて。そろそろ仕事を始めてもいいかね? 役員さん。」

「全員下がつてろ……!」

「リリー、俺も……」

リリーとマルクが前線へと出る。アズマは何も語らない。船を爆破したことは、彼にとつては語らなくとも良いほどに小さなことだったらしい。

「オオオオオオオオオ!!」

「うおおおおお!」

リリーとマルクは正面からアズマへと攻撃を仕掛ける。先手必勝、先手をとって一気に勝負を決めるつもりだった。

「ブレビー……」

しかし突然、二人の目の前から爆炎が襲いかかる。だが、傷だらけになつてもまだリリーとマルクは動いていた。

「らア!!」

「ダルア!!」

二人の一撃は、アズマの顔面を捉える。二人の全力の拳。『意地でも倒さなければ危ない』と二人の本能が捉えていた。

しかし、二人の本気の拳はアズマにダメージを与えきれていなかった。

「……フム。」

ノーモーション。殴り終えた二人の周りが光り出す。瞬間、巨大な爆破が起きる。

「ぐああああ!」

あまりの爆発の威力で、周りにいたウエンディ達も吹き飛ばされて

いた。

「リリー！剛腕！瞬足！！」

ウエンディも、アズマに対して魔力の出し惜しみはしなかった。リリーに攻撃力と速度上昇の魔法をかける。

「おおっ……！！」

マルクと共に、リリーがアズマに飛び込んでいく。真正面から飛び込んでくる二人に対して、アズマは再び爆発を起こす。

しかし、リリーは即座に空を飛んで回避を行い、マルクはそのまま爆破に使われた魔力を吸収しながら突っ込んでいく。

「ほう……」

「リリー……」

「おう……」

即席のコンビネーション。リリーがアズマに攻撃を仕掛け、たとえばかわされてもヒットアンドアウェイの要領で再び上空に。リリーが上昇した瞬間にマルクが近接を仕掛け、時折ブレスを吐きながら後ろに下がる。そしてまたその隙にリリーが近接を仕掛ける……と言った戦法を取る。

「くうっ……！！」

「殆ど動かずに爆破出来るなんてな……！！」

しかし、アズマの魔法に二人は逆に翻弄され始めていく。だが、二人が戦っている間に話し合っていたウエンディとメストの話し合いが終わったのか、シャルルが叫ぶ。

「リリー！空へ！！」

「っ！ウムツ！！」

シャルルの言われたとおりに上に飛びリリー。マルクも作戦がわかったようで、そのままアズマに向かって拳を向ける。

そして、アズマの後ろにメストの瞬間移動の魔法により、ブレスの準備を終えていたウエンディが現れる。

ゼロ距離からの天竜の咆哮、例え巻き込まれてもマルクならばダメージを軽減できるだろうという信頼感……話し合ってなくとも、信頼感だけで構成された作戦である。

「……つもらんね。タワーバースト!!」

——だが、アズマはそんな作戦も読んでいた。先程までの爆発の比じゃない強大な爆発が、その場にいる全員に襲いかかったのであった。

「……このギルドは、ネコや子供ばかりなのかね?」

時間切れにより、小さいサイズに戻るリリー。倒れているメスト。だが、そんな中でも一人だけ怪我が軽微の者がいた。

「——だから、手加減したと?」

「ふむ、先程から気になっていたが……俺の魔法によってダメージが通らない。君がもしかして火竜の滅竜魔導士かね?」

「生憎と……火竜じゃないな。俺はまた別の……滅竜魔導士だ。」

マルクはアズマに背中を向けていた。ウエンディを抱き抱えていたからだ。

マルクは、優しくウエンディを下ろしたあとにアズマに向き直す。

「……耐久力は高そうだ。お前は……俺を楽しませてくれるか? 魔人ミラジェーンや妖精女王程ではないと思うが……中々、面白い力を持っているようだしな。」

「……その余裕、粉々に砕いてやるよ。魔龍の滅竜魔導士……魔を喰らい、相手を滅ぼす……仲間を守るために、お前を倒す……相打ち覚悟でもいい……!」

「子供ながらにその覚悟……なるほど、その少女と言ってお前といい……力以上の覚悟があるようだ。」

だが、気持ちだけでこのアズマ……倒せると思わないことだね。」

「……今の俺のこの気持ち、あんたに分かるか？」

「……む？」

魔力を両手両足に宿すマルク。その声のトーンは低くなり、魔力も体から吹き出るようにマルクの体を包んでいく。

「色々不甲斐なすぎたよ……メストの正体が初めから分かってたらよかった。そしたらウエンデイをここに連れてこなくて済んだ。怪我をさせなくて済んだ……ああ、守らなきゃいけないものを守れなかったわけだ。」

「ほう？大切な存在だったのかね。」

「ああ……守れなかった俺が悪い、それは俺が一番わかっている……けど、だけど……今から俺はあんたに対して、どうしようもないほどの怒りをぶつける。」

俺の怒りが収まる時には……あんたの体がどうなってるかは知らねえぞ……！」

「面白い……力の差を分かっているながら……いや、ならかかってくるがいい……俺を、倒してみるといい……！」

アズマがかかってこい、と言わんばかりにジェスチャーでマルクを煽る。マルクはその挑発に乗り、アズマに向かって飛び込んでいくのだった。

妖精の尻尾対悪魔の心臓

「魔龍の……翼撃ッ!!」

「ムウ……ッ!!」

激しい戦闘を行うマルクとアズマ。二人は移動しながら、時折ぶつかるという戦い方をしながら森の中へと入っていった。

「子供と侮っていたが……覚悟だけしかない無謀さが取り柄だと勘違いしていたが……人は見かけによらない、とはこの事だね。」

「余裕ぶってんじや——」

「余裕など見せない。手加減はするがね。」

アズマの魔法により、何度も爆破させられるマルク。だが、魔法そのものが彼にとつてあまりダメージを与えられない。マルクは自分の体のことを度外視しながら、アズマに攻撃を叩き込んでいく。

「なるほど……魔法ではダメージは少ししか与えられないとききた。となれば肉弾戦……だが、怒ってる中でも冷静なのだね、君は。私の拳よりも遠い範囲からの攻撃。尚且つ、木を使ってまるで猿のように飛び跳ねている。これでは私の拳はなかなか当たらないだろう。」

「滅竜奥義——」

本気の一撃をぶつけようと、魔力を放出するマルク。だが、その攻撃は——

「ならば、これでどうだろう。」

「っ!?木が、体にまとわりついて……!?」

滅竜奥義を発動させようとしたマルクだったが、その体は周りの木々がマルクの体を縛ることで、不発に終わった。

「俺の魔法は失われた魔法大樹のアーキ。本来はこうして木を操る魔法なのだよ。先程までの爆発は、大地の魔力を木の実に詰めて起こしていたものなのだよ。」

「——だから、どうしたア!!」

「なんと……」

マルクは魔力を体中から噴き出させて、体を拘束していた木々を全て吹き飛ばす。当然、こんな無理をすれば魔力はすぐに空になる。だ

が、それでもマルクは魔力の出し惜しみをしなかった。

「面白い……！覚悟、いや信念……『俺を倒す』という明確な目標、信念の元、俺に向かって来るか！」

「滅竜奥義!!紫電魔光殺！」

マルクの上から刃状の魔力が形成される。それは段々と伸びていき、巨大な刃状の魔力となる。

「オラア!!」

「まとめて……このあたりの木々を切り裂くつもりか！俺ごと!!」

楽しそうに声をだしながらアズマはその攻撃をかわす。周りの木々は殆どが切断されていき、地面になぎ倒されていく。

「ちっ……」

「それほどまでに、あの少女を傷つけられたことが琴線に触れたようだね……だが、まだ足りない。真の強者である者達を、まだ俺は見つけていないからね。」

「いるだろう？このギルドにもそういう者が。」

「ラアつ!!」

一方的に語りかけるアズマを無視して、マルクはまだ攻撃を仕掛けていく。魔力が枯渇しようとも関係ない、と言わんばかりの激しい攻めをしていた。

「ふんっ!!」

「魔龍の咆哮!!」

例えばアズマが木を操作してマルクの攻撃を防ごうとしても、その魔力を完全に吸い取りながら、木々を破壊していく。

「ふむ……こうなってくると俺の方がジリ貧になりそうだ……無論、このままの状態が続けば、という意味でだがね。」

「ぐっ……！また木が……！こんなすぐに吹き飛ばして……！」

そしてまたマルクは木々を吹き飛ばしてアズマに飛び込んでいく。だが、まるで力を失ったかのようにその拳はアズマに届くことは無かった。

「魔力の使いすぎだね。その魔法、そして魔法そのものが通じないというのには確かに脅威だ。」

しかし、ダメージは蓄積する上に魔力の出し惜しみなしで全てを全力でこなしていればそうもなるだろう。未だ、戦いなれていないのが良くわかる。」

「はあー……はあー……！」

「吸収するよりも、使う量が多ければそうなってしまうのは分かりきっていたことだ……もう少し、戦いに対しての知識をつけておくべきだったのかもしれないね。」

「知る……かアツ!!」

「おつと……まだこんなことが出来る魔力が残っていたか。」

マルクの渾身の一撃も、アズマには届かなかった。だが、それでもまだマルクは立ち上がっていた。

「魔力が残っていいようにも、一度に使う魔力の量を減らさなければ、先程のように、一瞬でも意識が飛びかねないぞ?」

「はあ……はあ……魔力が無くても……殴り飛ばす……」

「呆れた根性と褒めるべきか、戦いの優劣もわからない阿呆と罵るべきか……だが、その真つ直ぐな思いだけは……褒められるべきことなのだろう。」

「はあはあ……魔龍の逆鱗!!」

「おつと……そんなフリでは——」

「だらア!」

「うぐつ!」

かわされた直後に、マルクは渾身の力を込めてアズマの腹に拳を入れる。鳩尾にでも入ったのか、アズマは軽くよろめいていた。

「なるほど……拳を叩き込む……魔法ばかり使うものだから、ただのパンチでこうなるとはな……面白い……!」

「まだ、まだア!!」

「ならばもつと打ち込んでこい!力尽き果てるまで!体朽ち果てるまで!俺を倒したいのなら、全身全霊の力を持って殺しにかかるほどの勢いで来い!!」

アズマは更に楽しそうに叫ぶ。明らかにダメージは通っているはずなのに、そのダメージをものともしていないアズマ。それを見て、

再度目の前の男の恐ろしさを、マルクは痛感していた。

「——だからって、負けるわけにやあいかねえんだよ……！」

再び飛び込むマルク。それに対し、アズマも本気になったのか、マルクに対してまだ見せていない魔法を使う事にした。

フォリウムシカ
「葉の剣!!」

「これは、葉が……!?!」

周りの木々の葉たちが一斉にマルクに襲い掛かる。一方向からではなく、四方八方から一斉に、である。

しかもかなりの速度を出しているため、マルクでは防ぎきれなかった。そして、マルク自身もその葉を防ぎ切ることが出来ないと感じ取っていた。

「なら突っ込む!!」

「面白い!!」

葉の刃によって体中を切られていくマルク。しかしどれだけ血が出ても、全てを無視して突っ込んでいく。

そして、すぐにアズマの目の前まで駆け抜ける。

「魔龍の——」

「タワー——」

そしてマルクは口の中に魔力を貯める。同時にアズマは別の魔法を使う。二人が魔法を放つ瞬間は、同じだった。

「咆哮!」

「バースト!!」

燃え盛る火柱、紫の魔力の渦。二人は渾身の魔力で互いを攻撃し続ける。アズマから逃がさないために、マルクはアズマの体を掴んでゼロ距離でブレスを当て続ける。

アズマもマルクから離れるためにタワーバーストを使い続ける。

「うおおおおおお!!」

「おおおおおお!!」

二人は声を上げる。相手を魔力切れまで追い込むか、相手を爆発で倒し切るかの勝負。

そして、長いようで短い……時間にして10秒にも満たない時間

で、勝敗が決した。

「がっ……………」

先にマルクが膝をついた。ブレスは消えたが、タワーバーストは続いていった。

アズマは、それを見てニヤリとほくそ笑む。

「俺じゃあ……………だめだったのか……………！だが、なら……………！これでも、食らえ……………」

ボロボロになりながら、マルクはアズマに拳を入れる。アズマも、これは回避しないで受けた。腰の入ってないパンチなど、避ける必要性がないと判断したからだ。

事実、マルクのパンチはアズマにダメージを与えていなかった。

「あとは……………頼ん、だ……………」

マルクはそのまま倒れる。そこでようやく、アズマは魔法を止める。血まみれ、更にタワーバーストの影響で体のところどころが焼けているマルク。

最後に倒れたその姿を見てから、何事も無かったかのようにアズマはその場を後にする。

「子供でも……………ここまで俺を楽しませてくれるとはな。油断していたら……………負けるかもしれないな。」

そう呟いて歩き始めるアズマの背中には、小さな紫の紋様が浮かんでいた。だが、アズマ自身もそれに気づかないで自分の任務を遂行していくのであった。

「子供や女ばかりではまるで力が出せんね。」

次にアズマが出会ったのはミラジェーンとリサーナ。しかし、ミラジェーンは試験の時に既に魔力を消耗していたため、サタンソウルを使えないでいた。

「ミラ姉！サタンソウルを!!」

「そう何度も使える魔法じゃないのよ。」

「姉妹？まさか……お前はあの魔人ミラジェーンか!？」

「昔の話よ。」

「ミラジェーンが本気になれば滅茶苦茶強いんだから!!」

「そうか……一度、本気になった魔人と手合わせ願いたいものだがね。」

ミラの二つ名を知り、興味が湧いたアズマ。既に、リサーナことは眼中に無いようだった。

「どうした？本気になれんのかね。」

「あんななんか私の魔法で十分よ!!」

「ダメよりサーナ！逃げた方がいいわ……この人、ものすごく強い……!」

「こんなことは、したくないのだがね。」

アズマが手を向けると、地面から木が生えてきてそれがリサーナを拘束する。リサーナを拘束した木には、三桁の数が表示されていてそれが段々と減っていった。

「3分後、大爆発を起こす。おっと……外から余計な力は加えんほう

がいい。解きたければこの俺を倒すことだ。」

「卑怯者!!」

「あの魔人と戦えるのなら、俺は何でもするがね。」

即座にミラはサタンソウルを使用する。だが、魔力がほとんど無いのですぐに決めるつもりで速攻に出た。

「ぐほお……これだ……この感覚……最高だね!!」

ミラの蹴りによって、軽くダメージを負うアズマ。だが、すぐさま反撃に転じる。

「ミラ姉！私のことはいいから集中して！」

無情にも減っていく数。タダでさえ、マトモに残っていない魔力を振り絞って戦っているためにミラは最小限の力で速攻で決める必要があった。

だが、魔人となつたミラの肉弾戦にも追いつき、そのうえ魔法で木を使って拘束する事さえもしてくる。

肉弾戦ではほぼ互角、しかもアズマは木を操作してミラに追いつくほどの速度を出せている。

そしてトドメにミラの魔力を使つての攻撃は、ほとんど防がれてしまふのであつた。

そしね、そうこうしている内にリサーナのカウントは20秒を切つていた。

「ミラ姉！」

「何をするつもりかね!?!」

ミラは、アズマから離れてリサーナの近くにくる。そして拘束している木を掴んで、サタンソウルを解いた。

「悔しいけど、あいつを倒すだけの魔力が残ってない。今の私には無理だわ……でも、私は信じる。あいつを倒せる人がギルドに必ずいるって信じてる。」

だから……お姉ちゃんは降参しちゃうけど……心配しなくていいわ、リサーナ。貴方だけは二度と死なせない。」

アズマが呆然と見続ける中、木のカウントは0となつて爆発した。大きな爆発の中からは、リサーナを抱き抱えるミラとミラによって爆

発から逃れられたりサーナがいた。

アズマは、その光景を少し眺めたあとにその場を立ち去っていったのであった。

「涙が俺の欲望デザイアを忘れさせる。邪な瞳は闇にもがいて。」

「何の詩うただね、ラストイ。」

「っ！いや……ただの心カケラの叫びだ。アズマ、君にしてはボロボロだなあ……」

その後、アズマは同じ悪魔グリモアの心臓ハートのラストイと合流する。服は既にボロボロになっていたのか、上半身の服は脱ぎ捨てていた。

「ふむ……強者と戦った証だね。」

「強者？ダメダメ♪このギルドにはいないよ。俺の心は震えない……」

「侮フエってはいかんね……妖精アリーテイルの尻尾……ヤツらの武器は魔力にあら
ず。信念を刃に変える力を持つ。」

「信念を刃に……か。まるでウチのメルデイの様だな。」

そこまで喋ってから、ラストイはアズマの異変に気づく。明らかに異常な黒い痣あざが出来ていたのだ。

「アズマ、君には刺青を入れる趣味があったのかい？それも、そんなまるで竜の様な……」

「何？」

そう言ってアズマは自分の体を見る。確かに存在しているのだ、腹部に横一線に通る黒い線が。

そして、アズマには見えていないが背中には竜の顔があった。

「……しかしラスティ、何故竜だと思った？俺にはただの線にしか見えなないが。」

「東洋の竜……いや、『龍』は俺達が知っているドラゴンの様に胴体がないような見た目らしい。正確には、蛇のような見た目をして羽もないのに飛ぶのだとか。」

「博識だね……それにしても、竜……あの少年か……」

「おや、心当たりでもあるのかい？」

ラスティの問いかけに、少し高め崖にいたアズマは飛び降りて歩き始める。

「少しだけだね。今となっては関係がないことだろう……俺は、まだこのギルドの強者と戦ってくることにするよ。」

「無駄だろうけど、頑張る事だ。」

そうして二人は別れる。歩き続けるアズマの体には、刻まれた竜の刻印が静かにアズマの体でとぐろを巻いているのであった。

刻印

「——おい、あれはマルクじゃ無いのか!？」

「っ！マルクー！」

マルクがアズマにやられてからしばらく経つてのこと。地面で一人、倒れ込んでいる彼を見つけたのはウエンディ達だった。

「酷い傷だ……俺達が戦ったあの男にやられたのか？」

「気がついたらマルクとあの人だけいなくなってたし……多分、そうだと思う。」

とりあえず、応急手当しないと……リリー、運ぶの手伝ってくれる？」

そう言つてウエンディはリリーに頼み込む。時間切れで魔力切れでもあるリリーに頼むのも、ウエンディは心苦しかったが、ウエンディとマルクの身長はウエンディより低く、さらに大怪我を負っているとなると、でかくなつたりリリーに運んでもらう方がいいと判断したからだ。

「少しばかりは魔力の回復も出来ているが……どこまでいけるかわからないぞ？」

「うん……出来れば、ちゃんとキャンプまで運んでから治してあげたいけど……出来る限り安全な場所じゃないと。」

「止めておきなさい……あんたの回復魔法とマルクの体質は合わないわ、徹底的にね。するくらいなら包帯でも巻いた方が幾分かマシよ。」

「何度か聞いていたが……そこまでなのか？」

「魔力を吸っちゃうから、回復魔法の魔力をガンガン吸っちゃうのよ。幾ら吸うのが魔力だけと言っても、その魔力を初めから吸ってしまつてるんじゃないか……」

魔法が起すことまで吸収できないって言うけど、そもそもこういう支援魔法が魔力の塊だつてこと忘れてるんじゃないかしら。」

「……ともかく、運ぶぞ。」

リリーは戦闘モードに入って、マルクをお姫様抱っこで運んでいく。マルクは気絶しているので黙ったままだが、その表情が見つけた

時からにやけている事に、疑問を覚えるウエンデイであった。

そして、マルクがウエンデイ達に発見されてからさらにしばらく経って。

エルザは森の中を歩いていた。

姿が見えないウエンデイを、探しているのだ。

「ウエンデイー!!どこだー!!」

「エルザ・スカーレットだね。」

「何者だ!!」

エルザに声をかける人物。エルザが声のした方向に向き直ると、後ろの木の幹から、ゆっくりと男が生えてくる。

「やっと会えたね。心の強者、妖精女王……その少女なら、俺が始末した。」

「なんだと……?」

アズマ。マルクを倒し、ミラとも戦い、そして勝った人物……今度の彼の標的は、エルザだった。

エルザとアズマは戦い続けていた。周りの木を土台にして跳び、エルザはアズマを切りさこうとする。

対するアズマも、エルザの剣技を見切つてかわしながらエルザを木で拘束していきながら、追撃を加えていく。

「明星・光粒子の剣!!」
フォトンスライサー

「っ!!ぐほおおお!!」

対するエルザも、アズマの攻撃を読んでアズマに避けられない一撃を入れていく。

だが、そんな一進一退の攻防の中でアズマは楽しそうに笑つていた。

「何がおかしい。」

「お前のような強者を待っていた。楽しいね……お前の武勇はよく聞くね。恐らくは俺と同じ人種、戦いが全て……ただ強者を求めてきた証。」

「……悪いが賛同はできんな。私は強者を求めてなどいない。」

「いいや、求めなければその強さは手に入らんね。」

「……私は、仲間を守る力があればそれだけでいい。その力と引き換えならば、私は誰よりも弱くていい。」

エルザの言葉に、アズマは驚いていた。だが、決して否定はしなかった。そんな考え方を、全く知らなかったと言わんばかりだった。

「矛盾……しているな。」

「面白いやつだ。お前とは正々堂々やりたかったね。」

「どういう意味だ。」

「時間切れ、という事さ。俺の魔法は樹の魔法……失われた魔法大樹ロストマジックのアーク。」

爆発は大地の魔力を木の実に凝縮して起こしていた……だが、この魔法の真の力は、大地に根を張り、その土地に蓄積された魔力を支配すること。」

「土地の魔力を支配するだ?!」

アズマの魔法に驚くエルザ。アズマの表情は、先ほどの楽しそうな顔から一転、まるで仕事をこなすような真顔であった。

「俺が真つ先にこの島に送られた理由はただ一つ。島の魔力を支配下に置くこと。俺の本意ではないのだがね……命令とあらば仕方がない。」

「な、何をした!! 貴様……私達の聖地に、何をしたのだ!!」

鳴り響く轟音、それが聞こえてきたエルザ。だが、彼女にはそれが何かを確認出来ない。

彼女にわかることはただ一つ、アズマがした事が限りなく最悪の事態を招いている、という事である。

「マスターハデスはこの島の力をよく知っている……島の中央にそびえ立つ巨木、天狼樹。妖精の尻尾フェアリーテイルの紋章を刻んだ者に加護を与え、この島で命を落とすことを防ぎ、魔力を増強させる特別な力があつた。」

「……! お前はその天狼樹を倒したのか!」

「そうだ。それにより、妖精の尻尾の命の加護が無効化するのと同時に、妖精の尻尾全魔導士の魔力を奪い続ける。」

「そんな馬鹿なこと……出来るわけが……!」

「もう完了しているね。妖精の尻尾は全滅するだろう……だがね、島の魔力をコントロールし、あんたの力はそのままにした。さあ妖精女王……島中で仲間が瀕死だ。救えるのはあんただけね。」

仲間を守る力がいかなるものか……俺に見せてみる。」

エルザはアズマを睨む。悪魔グリモアの心臓ハートとみんなが戦っている中、早めに決着をつけねば悪魔の心臓が皆を殺してしまう可能性があるからだ。

「……何故、こんな事をする。」

「マスターハデスの命令だ。妖精の尻尾の魔導士を一人残らず消せとの事だね。」

「違う……なぜ私だけが動ける状況を作ったのだ。」

「言っただろう……俺は本気になったお前と戦ってみたい。それだけだね。」

「その言葉に嘘偽りがなければなら、貴様が敗北した暁には皆の力を元

に戻してもらおうぞ。」

「約束しよう……俺も本来、こんなやり方は好きではない。勝てたら……の話だがね。」

「仲間の命がかかっている……必ず、勝つ!!」

エルザは剣を構えて、アズマに飛び込む。鎧の換装を行い、アズマに一撃を与えに行く。狙うは連撃、一つでも攻撃を当てる。

「天輪・繚乱の剣!!」

ブルーメンブラット

剣を何本も出して行う攻撃。しかし、出した剣の全てが木によってアズマに届く前に止まっていた。

「葉の剣!」

フオリウムシーカ

マルクにも見せた攻撃。葉を飛ばして、相手を切り刻む魔法。エルザはそれを全て剣技で弾き落としていく。

「枝の剣!」

ラームスジーカ

効かないと分かったのか、アズマは今度は枝で攻撃をしていく。まるで槍のような、素早い突きを繰り出していく枝。葉の剣に続いての枝の剣だったので、エルザはそれをまともに浴びてしまう。

そして、トドメと言わんばかりに枝が巨大な拳の形を取って、エルザを殴る。1度元の鎧に戻したエルザは追撃をかわしていく。

そして、今度は速度重視の鎧に換装して、アズマに向かって飛び込む。

「ぐほお……!」

これはかわせなかったらしく、二撃がアズマの体に浴びせられる。その瞬間に、二人は気づくことは無かったが、アズマの体に刻まれて龍がまた少し大きくなっていた。

だが、エルザが近くの枝に乗って、更に追撃をしようとした時は、枝を自分の体を覆うようにして攻撃を防ぐ。

「なっ!」

すぐに距離を取ろうとしたエルザだったが、足首を誰かに掴まれていた。言わずもがな、身を隠したと思わせておいて、枝の中を移動していたアズマであった。

「タワーバースト!!」

そしてスグにエルザに強力な一撃を与える。エルザは近くの枝に落下するが、まだどうにか動いていた。

アズマは、次にエルザがどうするのか静観していた。

「……きや、却下する！ルーシイじやあるまいし！」

「独り言かね。」

突然何かを却下したエルザ。だが、即座にその鎧を換装させて新たな鎧へと変貌させる……だが、その体には鎧らしい鎧がなかった。

胸に包帯を巻き付け、サラシとして扱っていて、防御能力の一切がなさそうな布地のズボン。

だが、手に持っている刀はアズマの直感に危険信号を鳴らしていた。

「いでよ……妖刀紅桜!!おおおおおおおお!!」

「来い！妖精女王!!」

防御を捨てて攻撃に特化した形。アズマもその一撃を全力を持って防ごうとする。

「何っ!？」

木の枝が伸びて、エルザの体を拘束していく。アズマは拘束していきながらも、攻撃の手は緩めなかった。

「大地に眠りし天狼の魔力を解放する!!テラ・クラマーレ大地の叫び!!!」

「うあああああああ!!」

島一つ分の魔力を使った広範囲かつ高威力の爆発。エルザを拘束していた周りの木々と爆発させてまで放ったそれは、エルザを傷だらけにし、そして爆発させた。

「妖精女王……敗れたり。」

倒れるエルザ。ピクリとも動かなくなった彼女を見て、アズマは満身創痍でありながらも、心底楽しそうな顔をしていた。勝ちを確信した、そんな表情だった。だが――

「――ぐはっ!げほっ、げほっ!!ゲホッ、ガフツ!!う、く……!」

「ば、馬鹿な……!?!天狼島の膨大な魔力をぶつけたんだぞ……!?!」

「はあ……!はあ……!」

立ち上がるエルザ。刀を支えにして立ち上がる。その表情は、未だ

敵を見据えて、倒すべきものとして認識している……まだ諦めていない者の表情だった。

エルザが刀を構えて飛び出す。その一振りをアズマは木を使って防ぐ。だが瞬時に振る向きを変えてアズマの腕に小さく切り傷をつける。エルザが攻めてアズマがその攻めを打ち破らんが如く攻めていく。

「ぐっ！はあっ……い！」

「お前の名は生涯……忘れることはないだろう……！」

木によつて再び拘束されていくエルザ。再び天狼島の膨大な魔力をぶつけようとアズマは魔力を貯める。

その行為によつて、彼に刻まれた痣がだんだんと着実に大きくなつていく。

「くそっ!!動けっ!!動けえええええ!!」

「これで終わりだア!!もう1度天狼島の魔力を食らうがいい!!
テラ・クラマーレ
大地の叫び!!」

「うああああ!!」

再び膨大な魔力によつて多大なダメージを受けるエルザ。彼女が諦めかけたその時、声が聞こえた。

『諦めんのか?エルザ。』

現れたのはナツの姿だった。その他にも、天狼島に來ている妖精の尻尾の全ての魔導士の姿が目映っていた。

それがエルザに力をもたらした。折られた天狼樹は、妖精の尻尾の魔導士から魔力を吸い続ける。それが、エルザにとつての力となつていく。

「——うおおおおおおおおお!!」

「なっ……!!?」

制御下に置いたはずの魔力が、エルザに加護を与えたことに驚くアズマ。しかし、彼はとっさにその攻撃を防ごうと動く。だが、動けなかった。

「ばか、な……!!?」

まるでアズマを拘束するかのよう、龍の刻印は動いていた。それは

アズマを拘束するばかりか、アズマから魔力も食らっていた。

「ぐはあっ……!?!天狼島と、直接繋がってしまった……せいか……!?!」

アズマはこれまでのことを思い出す。そして、今更気づいた。攻撃を受ける度に、その魔力を食らってこの痣は成長していたことを。

そして、天狼島と繋がってからはその成長が止まることを知らないかのように大きくなり続けていたことを。

「だが、それでも……!?!」

「くっ……!?!」

しかし、魔力を絞り出したアズマはエルザの攻撃を防ぐ。エルザもこの行動には悔しそうな表情をアズマに見せる。そのエルザの攻撃を防ぐために使った魔法が、彼の敗因だった。

「ぐはっ……!?!」

痣が彼の体から離れた。ありつたけの魔力を奪い取って、その痣はエルザの刀に取り憑いて、彼女の攻撃に魔力の追加を与えた。

『魔龍刻印、魔力を伴った攻撃ならばなんにでも反応して成長する痣みたいな物です。』

ある程度成長したら……つけられた人の魔力を死なない程度にごっそり持つていっていく魔法です。ただ、それだけの魔法です。俺の魔力に反応しないのが欠点なんですけどね。』

「うおおおおおおおおお!!」

痣だったそれは、魔力の塊となってエルザに更に力を与える。ふと思いつ出したマルクとの会話。

本来、このように魔力を誰かに与える魔法ではないというのに、今回に限りその魔力がエルザに与えられる。

それはエルザにとって心強い仲間からの手助けであった。それはアズマにとって、妖精の尻尾の強さは個ではなく和を、仲間がいるからこそその強さなのだとして認識させる。

「——見事。」

エルザのその一撃は、木の盾どころかアズマが足場に使っていた大樹ごと、アズマを切り裂く。

マルクの刻印は、ミラの攻撃を通して成長して、エルザの力となっ

た。この戦い、エルザが勝利したのであった。

攻めと守り

「う、ぐ……」

「あ、マルク……ダメだよまだ寝てないと……」

「……ここは……?」

「キャンプ地……いいから寝てて?」

目を覚ましたマルクが最初に見たのは、傷だらけで倒れるミラ達の姿だった。

そして、少し離れた場所にはマルクの知らない人物が倒れていた。

「……今は、どんな状況なんだ……?」

「今ここに倒れている四人と、マスターとカナが負傷……今はここでチームを二つに分けて、悪魔の心臓を攻めに行くチームと守るチームの二つに分ける、という話をしていた。」

「フリードさん……」

つーそ、そう言えば……メスト……彼はどうしたんです……!?!」

「あ? あー、多分評議員止めてくれてんじやねーのかな。」

マルクは一通り話を聞いてから、立ち上がろうと体を動かす。しかし、未だその体には痛みが残っていた。

「ぐっ……!?!」

「ま、マルク! 無茶しちゃダメだよ!!」

ウエンデイが支えるが、その表情は苦悶に染まっていた。それでも、マルクは攻めのチームの方に行きたかったのだ。

「お前は休んどけ、俺達の方が動けるんだから無茶するもんじやねえよ。」

「……すみません。」

「いいんだよ、ウエンデイ守ったそうじゃねえか? それで十分だと思っせ。なー?」

「オモウゼオモウゼ」

マルクの頭を軽く叩きながら、後ろからビツクスローがマルクを慰める。いざという時に力を出せないのが、マルクは悔しくてしょうがなかった。

「……空、荒れてきたわね。」

「雷……やだね。」

荒れる天候、まるでこれから起こる事への前兆のようなものをマルクは感じ取っていた。

「……さてと、ハデスを倒しに行くぞ。ルーシイ、ハッピー。」

「あいさー！」

「あ、あたし？」

「同じチームでしょ！」

「分かってるけどフリードとかの方が……」

「俺はここで術式を書かねばならん。守りは俺たちに任せとけ。」

「私もナツさん達と行きます。」

「ちよつとウエンデイ……」

「ナツさんのサポートくらい出来ると思うし……」

そして、攻めのチームと守りのチームのメンバーが決まる。

攻めのチーム：ナツ・ドラグニル、ルーシイ・ハートファイリア、ウエンデイ・マーベル、そして三人のエクシードのハッピー、シャルル、リリー

守りのチーム：フリード・ジャステイン、ビックスロー、レビイ・マクガーデン、リサーナ・ストラウス

である。

「行くぞ！」

「「おう!!」」

ナツの号令により、攻めのチームは悪魔の心臓の戦艦目掛けて走っていく。それを見届けたあと、マルクは再び立ち上がる。

「……行くのか？」

「……ナツさん達なら、ハデスを倒せるって信じてますよ。けど、なんていうか……」

「目覚めているのに、何も出来ないのは嫌か？」

「……はい。なら、守りのチームにいろつて話にはなるんですけどね……」

「いや、お前の力はナツ達を守る力になれるだろう。だが、こういう時

には俺は痛み止めの術式でも体に書くが……」

「俺の体に術式は書けませんもんね……なら、そこら辺の薬草でも適当に塗りつけておきますよ……ない、つてことは無いでしょうし……」

「……既になっているものに、かける言葉ではないが……『無茶をするなよ』マルク。」

「……はい、ありがとうございますフリードさん。」

最後に礼だけを言っただけでマルクは歩き始める。一人で、段々と歩き続けるのだった。

キャンプ地も見えなくなり、森の中を歩き続けるマルク。そこに一つの人影を見つける。その人物は、マルクの目の前で止まる。偶然鉢合わせたかのように、その顔には驚愕の色を浮かべていた。

「……まさか、アクノロギア……いや、違う……少しだけ……」

「なんだ、何言ってるんだあんた……いや、この島にいるのは俺達と……悪魔の心臓だけのはず……」

「……僕は、そのどちらでもない。」

「なんだと……？じゃあ、あんたいったい誰だ……妖精の尻尾の聖地フェアリーテイルで、何をしている。」

目の前の青年は、マルクを見据える。黒い髪に、黒い瞳……触れば折れてしまいそうなその弱々しさの中に、膨大な闇があるかのような。そんな不思議なものをマルクは感じ取り、同時に最大に警戒していた。

「……この島じゃなくても、人がいなければ良かった。僕は、命を奪ってしまおうから……」

「命を……？あんたは、あんたはいったい誰だ……」

「……名前は明かさない。君が僕を望まないというのなら、僕は何も干渉しない。マスターハデスの様に、僕を一切望まないのなら……僕は君に一切の手出しはしない。」

この島からもすぐに去ろう……」

「おい！質問に——」

「但し……この島から去るといふのなら、早くした方がいい。アクノロギアがすぐにそこまでに迫っている。」

そう言つて目の前の青年はマルクの目の前から去る。追いつくことは叶わないが、けれどマルクは嫌な予感のようなものが更に膨れ上がった……そんな直感めいたものを感じていた。

「……早く、行った方がいいな。ナツさん達の手助けをしてやらないと……」

そう言つてマルクは歩き出す。何もしない、と言つた青年の言葉を信じるならば、今はマスターハデスの所に向かう方が賢明だと判断したからだ。

「はあ、はあ……」

悪魔の心臓の戦艦にまで辿り着いたマルク。グレイが作ったであろう氷の階段を登って行って、船へと向かう。

歩くだけでかなりの時間を労してしまつていたマルク。しかし、傷

の痛みにも慣れてきて、体も痛みを無視すればかなり動けるまでになっていた。

「待ってて……ください……!」

一段、一段階段を上っていく。登る動きが段々と早くなり、駆け足で登っていく。魔力も十分だとは言えないまでも、かなり回復はしてきているので、少しくらいの手伝いなら……とマルクは考えていた。

「着い、た——」

そして、登りきった直後にマルクが見た光景。ウエンデイの着ていた服が宙に舞っている光景だった。

一瞬が膨大に感じるほどに、マルクの感情はその一瞬で昂った。マルク以外の全員が、ウエンデイの服を見る。それだけでそこには元々ウエンデイがいたのだろうと判断が出来る。

目の前にはナツ達の他に年老いた男が一人。マスターハデスその人だろうと、予測はついた。ならば、ウエンデイはどこに行き、マスターハデスはいったい何をしたのか。

マルクはそれを考える前に、既に行動していた。回復していた魔力を全て足に回す。

「——」

まるで爆弾が爆発するかのように、加速するその一瞬だけに魔力を全て使う。

「むっ!?!」

弾丸のごときその速度をもって、マルクは一番離れていたにも関わらず、マスターハデスの目の前に一瞬で現れる。

「——ああああああアアアアアアアアアアA A A A A A A A A A A A A A!!」

「ぐうっ!?!」

渾身の1発。マルクの攻撃はマスターハデスを殴り飛ばす。だが、不意を突かれたマスターハデスも、咄嗟に自身の魔力で作られた鎖を使ってマルクを繋ぐ。

投げ飛ばそうとした瞬間に、マルクはその魔力の鎖を噛みちぎり、自身の糧とする。

「魔力の鎖が……!?!」

「!!」

吼えるマルク。次第に、顔のところにもまるでドラゴンの鱗のような模様が浮かび始めてくる。ドラゴンフォース、滅竜魔導士だけが使える技。ある意味では、切り札的なものだが……マルクは意識してこれを使えるほどに、未だ強くはなっていないかった。

「この殺気……怒り、憎しみ……そして何よりも殺意……正しくドラゴン、いや……人を食らうべくして現れた、化け物といったところか……」

最早言語らしい言語を喋らなくなったマルク。しかしマスターハデスの放つ魔法を尽く喰らい尽くしていき、その度に補充した魔力を十全に使って攻撃だけに回していく。

「マルク!マルク!!」

聞こえるウエンディの声、しかしマルクの耳には届かない。マスターハデスを殺すために不必要な感覚を全てシャットダウン、つまりは無視していた。

そもそも、聞こえたところで怒りに我を忘れたマルクに思考するほどの余裕は残っていなかった。

「ふん……お仲間が呼んでいるぞ……!」

「っ!!」

顔を強く蹴られるマルク。しかし、空中で一回転をして着地をして落下を防ぐ。

そう、その一回転した時に、唯一マスターハデスを見るためだけに残していた視覚だけが『ウエンディを捉えた』

「……ウエンディ?」

「なんで、なんでここに……ううん、そんな事より……私、無事だから……ね?」

先程までの怒りはどこへやら、マルクは急激に理性を取り戻す。ウエンディが無事だと分かり、怒りの元が消えたのだ。

「無事って……」

「ホロロギウムよ、自動危険察知モード?ってのが発動してウエン

「デイを助けてくれたのよ。」

事情を説明するルーシィ。その説明で、マルクもほつとして胸を撫で下ろす。

「これがマカロフの子らか。やはり面白い。」

「お前じつちゃんと同じ合いなのか!？」

「何だ、知らされていないのか?今のギルドの書庫にすら私の記録は存在せんのかね……私はかつて2代目妖精の尻尾のマスター、プレヒトと名乗っていた。」

マスターハデスから告げられる事実には、この場にいる全員が驚いた。なぜ2代目が3代目を襲うのか、なぜ未だ存命しているのか。

「うそつけ!!」

「私がマカロフを三代目ギルドマスターに指名したのだ。」

「そんなのありえるか!!ふざけたこと言ってんじゃねえ!!」

ナツがマスターハデスに飛び込んでいく。しかし、マスターハデスは即座に魔法を発動させて、ナツの周りを囲む。

そして、それは即座に爆発する。

「ぐおわっ!!」

マスターハデスは指を滑らすように動かして、そのままグレイ、ウエンデイ、マルクのいるところを爆破させる。

「うああ!!」

「きやああ!」

「ぐううう!」

そしてそのまま、エルザの腕とルーシィの腕を鎖で繋いで、二人をぶつけて拘束。そのままその鎖を爆発させる。

だが、未だ健在だったナツがその隙を突いてマスターハデスへと突っ込んでいく。

「パン」

「がはっ!」

だが、マスターハデスはまるで子供が手で銃の形を取るかのようには手を銃のような形にする。そしてその指先から、魔力で出来た弾丸をナツの足に撃ち込む。

そのまま滑りこけたナツを視線から外して、グレイとウエンデイに照準を向ける。

「パン、パン」

「がはっ!？」

「ウエンデイー!ぐっ!？」

ウエンデイのは、マルクが盾となって防ぐ。しかし、それだけでは足りない。圧倒的な力を持つマスターハデス、その力に皆が翻弄されてしまっていた。

「フハハハハ！私は魔法と踊る!!」

魔力で出来た弾丸を連続で当ててくるマスターハデス。全員が吹き飛ばされ、撃ち抜かれ、そして傷を負っていった。

「妖精に尻尾はあるのかないのか？永遠の謎、故に永遠の冒険……ギルドの名の由来は、そんな感じであったかな。

しかし……うぬらの旅はもうすぐ終わる。メイビスの意志が私に託され、私の意志がマカロフに託された。しかし、それこそが間違いであった。マカロフはギルドを変えた。」

ナツを踏みつけながら、マスターハデスは淡々と語る。後悔も、期待も……何も感じていないかのような淡々さで。

「変えて何が悪い!」

「魔法に陽の光を当てすぎた。」

「それが俺たちの妖精の尻尾だ!!てめえみてえに死んだまま生きてんじやねえんだ!!命かけて生きてんだコノヤロウ!!変わる勇気がねえ

ならそこで止まってやがれ!!」

「……やかましい小鬼よ。」

再び手で銃の形を取り、ナツに魔力の弾丸を打ち込む。しかし、一度では終わらなかつた。何度も何度も何度も……連続して撃ち込んでいく。殺そうと思えば、一瞬で事足りるはずなのにまるで苦痛を味わせるかのように連続で打ち込んでいく。

「恨むなら、マカロフを恨め……マカロフのせいであぬは苦しみがから死ぬのだ。」

「よせえ!!」

「はあ……はあ……じつちゃんの、仇……だ……」

「もうよい。消えよ。」

「やめてえー!!!!」

弾丸所ではない強力な魔力の塊を当てようとしたマスターハデス。しかし、それは戦艦に落ちてきた落雷により、阻止される。

「——こいつがじじいの仇か、ナツ。」

落雷から、一人の男が現れる。雷を纏った魔導士、ラクサス……妖精の尻尾を破門にされた、マスターマカロフの孫である男。

「……小僧?」

そして、間髪入れずにラクサスはマスターハデスに向かって頭突きを入れる。強力な助っ人が現れた事で、マスターハデスとの戦いは未だ行方がしれないものとなったのであった。

雷炎竜

「こやつ……マカロフの血族か。」

「……情ねえな。揃いも揃ってボロ雑巾みたいな格好しやがって。」
「だな。」

突如として現れたラクサス。ウエンディやマルクはその姿を始めてみたが、不思議と他の人から聞いていた印象とは微妙に異なっていた。正確に言うならば『丸くなつた様に感じる』

「なぜお前がここに……」

「先代の墓参りだよ。これでも『元』フェアリーテイル妖精の尻尾だからな。

俺は先代メイビスの墓参りに来たつもりだったのになあ……こいつア驚いた……2代目さんが居られるとは。折角だから墓を作つて……拝んでやるとするか。」

明らかな激昂。祖父であるマカロフをやられた怒りなのか、それとも妖精の尻尾に喧嘩を売られたという事での怒りなのか。理由は定かではないが、ラクサスは見事に『怒っていた』

「やれやれ……小僧にこんな思い上がった親族がいたとは。」

そして、二人は睨み合う。時間にして数秒だったが、先に動いたのは……ラクサスだった。

マスターハデスの顎を蹴り上げ、そしてすかさず殴り飛ばす。

雷の魔法によりラクサスは殴り飛ばしたマスターハデスにすぐを追いつき、殴つて地面に叩きつけてから、トドメにもう一発殴りつける。

だが、マスターハデスはそれをジャンプしてかわす。

それを見逃す気はなかったラクサスは、口から雷を吐きながら、それを動かしてマスターハデスに向かって追撃を入れていく。

「は、早っ……!?!」

今の一瞬の攻防だけで、そうだったのだ。マルクはその二人のтонでもないやりとりを眺めて、感嘆の声を出していた。

そしてラクサスの追撃は当たる直前に、マスターハデスが魔力の鎖を伸ばす。ラクサスはそれを紙一重でかわすが、マスターハデスの狙

いはそれではなく、後ろにあった巨大な地球儀だった。

マスターハデスはそれを動かして物理的にラクサスを潰そうとする。咄嗟に狙いに気づいたラクサスはそれを回避。

勢い余った地球儀はルーシイの直上を通る。

「ひいひいっ！」

「フン…」

「くっ!!」

マスターハデスは、その場で掌底を繰り出す。それは魔力の伴った攻撃であり、それで魔力を飛ばしてラクサスを一瞬怯ませる。

ダメージを入れることなく、怯ませることが目的の攻撃。

即座に指で陣を描き、ラクサスの周りに魔力の帯を出現させる。先程、ナツが受けた魔法である。マスターハデスはそれを爆発させるが、爆破の規模はナツが受けたものよりも巨大なものであり、爆風によって何人が吹き飛ばされていた。

モロに受けたと思われる攻撃、しかしラクサスは自身の体を雷として、それを即座に回避していた。

雷は天井を走り、マスターハデスの後頭部にラクサスは膝蹴りを入れて吹き飛ばしたのであった。

「すげえ……」

「ら、ラクサスさんは強いつて話を聞いてましたけど……ここまでなんですか!?!」

「ああ……正直、私も驚いている。」

蹴り飛ばされたあと、すぐに起き上がるマスターハデス。ラクサスもマスターハデスを睨んでいたが、突然ラクサスは膝をついてしま

う。

「ぐふっ……!」

「ラクサス!!」

「さっきの魔法をくらってたんだけ……」

「しっかりしろよラクサス!!」

「世界つてのは本当に広い……こんなバケモンみてーな奴がいるとは……俺もまだまだ……」

苦笑するラクサス。しかし、その苦笑は諦めからくるものではないと皆が感じ取れていた。だから叱咤激励を飛ばす。

「やってくれたのう……ラクサスとやら。うぬはもう消えよ!!」

魔力を伴った攻撃。誰もがそれを受けたらマズいと認識できるほどに濃密な魔力。

「立て!!ラクサス!!」

「俺はよう……もう妖精の尻尾の人間じゃねえけどよ……じじいをやられたら、怒ってもいいんだよな……」

「当たり前だアアア!!」

直前、ラクサスが魔力を何かに使ったようにマルクは見えだが、爆風によって吹き飛ばされた為に、確認が出来なかった。

だが、爆発が晴れたあとに出てきたラクサスは、マスターハデスの攻撃をモロに受けてしまっていた。

「俺の……奢りだ……ナツ。」

「え……?」

「ナツさん……?」

「——ご馳走、様……」

立ち上がったナツ。その体には電気が走りついていた。感電しているだとか、そういう類のものではなく……ナツが帯電していた。

「俺の全魔力だ……」

「自分の魔力をナツに!」

「雷……食べちゃったの?」

ラクサスが全魔力をナツに与える。それはつまり、魔力がほとんどない状態でマスターハデスの攻撃を受けた、ということになる。

「何で、俺に……俺はラクサスより弱え……」

「強えか弱えかじゃねえだろ。傷つけられたのは誰だ?ギルドの紋章刻んだやつがやらねえでどうする?」

ギルドの受けた痛みは、ギルドが返せ……100倍でな。」

「ああ——」

ナツの、雷と炎をまとったその様子に、ウエンデイがボソリと呟く。恐怖に似た何かを感じる、圧倒的な力を今のナツからは感じ取って

た。

「炎と雷の融合……雷炎竜……!」

「——100倍返しだ……うおおおおお!!」

ナツは声を荒らげながら全魔力を解放する。その力の前に、マスターハデスも驚きを隠せていなかった。

だが、それ以上にその圧倒的な力が今のナツを後押ししていた。叫びながら、マスターハデスに飛び込むナツ。雷の魔力による影響か、ナツの速度は恐ろしい早さに達していた。

「がああああ!!」

マスターハデスは殴り飛ばされ、壁へと叩きつけられる。更にその直後に、マスターハデスの頭にナツのかかと落としが決まる。

炎による攻撃、それが当たったその次には、雷による追加攻撃が入る。

「俺たちのギルドを傷つけやがって!!」

ナツの怒りが膨れ上がる。壁に叩きつけられ、床を勢い良く転がりながら、マスターハデスは吹き飛ばされていく。

「お前は……消えろお!!」

炎と雷の融合攻撃。その破壊力たるや、戦艦の床がさらに凹んでいた。

「ねあつ!!はっはー!!両手を塞いだぞオ!!」

マスターハデスの攻撃。魔力で出来た鎖で両手を一纏めで拘束されるナツ。しかし、一纏めにしたのが悪かったのか、はたまたどちらにしても意味がなかったのか、ナツはすぐさま拘束具である鎖を破壊して、そのままドメに移行する。

「な!?!」

「雷炎竜の……咆哮!!」

「ぬ、がああああああ!」

雷と炎が合わさったブレス。破壊力は見せた攻撃のどれよりも凄まじく、戦艦の壁を容易く破壊してそのまま天狼島の地面も軽く削っ
ていきながら空へと消えていく。

「はあ……はあ……」

倒れているマスターハデス。完全に気絶しているのが、全員に伝わるのが、少しだけ遅れるほどにその勝利はいいものがあった。

「やった、ぞ……」

フラついて、床に空いた穴に落ちそうになるナツ。それをルーシイがギリギリで受け止めて事なきを得る。

「た、助かった……もう完全に魔力がねえや……」

「これで、終わったな……」

「はい！」

皆が嬉しそうになる中、マルクも吊られて笑が浮かびかけるが、船の中に現れた……いや、今までマスターハデスの陰に隠れていて気づかなかったのか、マルクだけが船のどこかにあるとてつもない魔力を持った者を感じ取っていた。

「なんだ、この魔力……マスターハデスと全く同じ……!?!」

だが、感じ取ったその魔力はすぐに消えてしまう。代わりに、近くにまたとてつもない魔力を感じ取る。

「——大した若造共だ。」

その突如として聞こえてくる言葉に、全員が耳を疑った。今この声が聞こえてくるはずがないのだから。

「マカロフめ……全く恐ろしいガキどもを育てたものだ。私がここまでやられたのは何十年ぶりかのう……このまま片付けてやるのは容易いことだが、楽しませてもらった礼をせねばな。」

「ウソだろ……!?!」

「あの攻撃が効かなかっただと……!?!」

「いや、あの攻撃は確実に入ってました!!あいつ自身も、さつきまで気絶していたはずなのに……なんで……」

マスターハデスは、今までつけていた眼帯を外す。それが、『楽しませてもらった礼』という奴なのだろう。

「悪魔の眼……開眼!うぬらには特別に見せてしんぜよう……魔道の深淵、ここからはうぬらの想像を遥かに超える領域……!終わりだ、妖精の尻尾。」

先程よりも、多くの魔力。圧倒的に増えた……否、増え続ける魔力

に全員が萎縮してしまっていた。

相手が増え、こちらはほぼ空だということが、さらに拍車をかける。しかし、マルクだけが別のことを気にしていた。

今まで本気を出さなかったのは、何故なのかという事である。

「こんな、魔力……なんで初めから……」

「くそっ……動く力……さえ、残ってねえ……!」

「魔の道を進むとは……深き闇のそこへと沈むこと。その先に見つかるや、深淵に輝く一なる魔法。」

あと少し……あとすこしで一なる魔法に辿り着く。だが、その『あと少し』が深い。その深さを埋めるものこそ大魔法世界、ゼレフの世界……今宵、ゼレフの覚醒とともに世界は変わる。

そして私はいよいよ手に入れるのだ、一なる魔法を。」

「一なる魔法……」

腕を上げ、独特のポーズを取り出すマスターハデス。しかしそのポーズがろくなものでないくらいは、誰もが即座に理解した。

「うぬらはいけぬ……大魔法世界には。うぬらは足りぬ、深淵へと進む覚悟が。」

「なんだあの構えは……!」

「ゼレフ書、第4章12節より……裏魔法『天罰』ネメシス」

マスターハデスのその宣言とともに、周りの瓦礫に変化が起こる。手のひらに収まるような小さな瓦礫から、黒ずんだ膿のようなものが出てきたかと思えば、それは明らかに瓦礫のサイズを超えて何かの形を成していく。

手が生え、足が生え……マスターハデスの身長を超えるような大きな黒い生物のような何かに、瓦礫は変化していく。

「が、瓦礫から……化け物を作ってるのか……」

「こんな、生き物を作り出す魔法なんて……そんな魔力、どこから……」

「深淵の魔力をもってすれば、土塊から悪魔をも生成することが出来る。悪魔の踊り子にして天の裁判官、それが裏魔法。」

一体一体が強力で絶望的なまでの魔力の塊。それが複数体ではき

かない数を、マスターハデスは量産していた。

その光景に、生み出された化物達に皆が怯み、怯えていた。ただ一人を除いては。

「……なんだ、こんな近くに仲間がいるじゃねーか。『恐怖は悪ではない。それは己の弱さを知るという事だ』」

弱さを知れば……人は強くも優しくもなれる。俺達は自分の弱さを知ったんだ……だったら次はどうする？強くなれ!!立ち向かうんだ!!

一人じゃ怖くてどうしようもないかもしれないけど……俺たちはこんなに近くにいる。すぐ近くに仲間がいるんだ!!

今は恐れることはねえ!!俺たちは一人じゃねえんだ!!」

ナツの激励に、仲間達が励まされる。先程まで怯えていたのが馬鹿らしく感じるほどに、背中を押されていた。

仲間といれば、恐怖はない。魔力が無かろうと絶対に諦めない。そんな思いを持って、全員が立ち上がった。

「見上げた虚栄心だ……だが、それもここまで。」

「行くぞお!!」

ナツの言葉と共に全員が走り出す。ただ一つ、マスターハデスを倒すという目的のためだけに。

「残らぬ魔力で何が出来るものか……踊れ、土塊の悪魔。」

その声とともにマスターハデスの激しい攻撃が始まる。しかし、無理やり体を動かして、かわしていく。

力を一番消費していたナツは、途中でよろける。その腕をウエンデイとルーシイが掴み、ナツを前に投げる。

勢いで二人はこけてしまうが、ナツを前に押し出すことは出来た。しかし、まだ足りない。

足りないなら補え、と言わんばかりにグレイとエルザが、ナツの足と自分の足を合わせて、まっすぐ蹴り飛ばす。

そして、トドメと言わんばかりにマルクがナツの腰を下から持って、全力で投げる。さらに速度が増す。

「全てを闇の底へ……日が沈む時だ、妖精の尻尾。」

ナツの攻撃と、マスターハデスの魔力がぶつかり合い、戦艦が大きく爆発する。それを、その光景を見て：戦いの終りが近いのを誰もが心のどこかで確信していたのであった。

破滅

爆発する戦艦。屋根が吹き飛び、パーツが吹き飛び、まだギリギリ戦艦の形を保っているだけの別の何かへと変貌するほどに、その爆発は強大だった。

そして、爆発が晴れると共にマフラーが宙を舞う。そこで皆が見たのは、マスターハデスを殴りつけるナツだった。

「ナツ!!」

「ば、馬鹿な!! 裏魔法が効かぬのか!?! ありえん! 私の魔法は……!」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

パンチがさらにマスターハデスの顔面に叩きつけられる。先程までに感じていた膨大な魔力の質。

マスターハデスののもそうだが、マスターハデスの魔力が消えた時に感じ取れた魔力さえも感じ取れなくなっていることに、マルクは気づいた。

「……そうか、被ってたんじゃなかったのか!!」

「な、なんだよ急に……」

「詳しいことは後で説明しますけど……要するに——」

「……あれ?」

マルクが軽く興奮しながら軽く説明しようとした瞬間、ウエンデイが何かに気づいたかのように、視線を別方向に向けていた。その視線を追って皆が同じ方向を向いて、その答えがわかった。

「なっ、そんな……天狼樹が元通りになっている!」

倒れていた島の巨木天狼樹、巨大なそれは一度アズマによって倒されていたが、何故か元通りになっていた。

そして、天狼樹が元に戻るということは即ちその加護が復活するという事であり——

「魔力が元に……」

「戻っていく!」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!! 勝

つのは俺達だ——!!」

「否——!!」

ナツの言葉を否定するかのようになり、そしてまだ諦めずにマスターハデスはナツを殴り飛ばす。

「魔道を進む者の頂きに、辿り着くまでは……悪魔は眠らない!!——
——いがっ!!」

更にマスターハデスを否定するかのようになり、ラクサスがマスターハデスを殴り飛ばす。

「いけえ!!フェアリーテイル妖精の尻尾!!」

ラクサスのその言葉に全員が動き出す。本当に、真の決着をつけるための戦いである。

「契約まだだけど……開け!磨羯宮の扉!カプリコーン!!」

「うぬは——」

「ゾルディオではありませんぞ……私はルーシイ様の星霊、カプリコーン!!」

ルーシイの新たな星霊。磨羯宮、つまりは山羊座なのだが、見た目は山羊の形をした人間みたいな姿であった。

カプリコーンの一撃はマスターハデスを怯ませて、二撃目を叩き込んだ。

「見様見真似!天竜の翼撃!!」

そしてウエンディの攻撃で、上に吹き飛ばされるマスターハデス。さらにその上を行くかのように、 그레이がマスターハデスの上に飛ぶ。

「氷魔剣!!」

그레이の一撃でマスターハデスが身動きできないように凍らされる。氷の刃の一撃は、それほどまでに重かったのだ。

「——天輪・五芒星の剣!!」

さらにエルザの一撃で氷が剥がされるとともに、氷の上からでも受けるほどのダメージが与えられる。

「魔龍の……尾撃!」

そして、膨大な魔力を足に貯めた一撃をマルクはマスターハデスに

叩きつける。その一撃はマスターハデスの中にわずかに残っていた魔力すらも、奪い取っていく。

「ナツさん!!」

そして、マルクの一撃により床に叩きつけられんばかりの速度で落下していくマスターハデス。

その直線上には、右手に炎左手に雷を携えたナツがいた。

「うおおお!!滅竜奥義…改!!紅蓮爆雷刃!!」

ほとんど魔力が残っていない状態で受ける滅竜奥義。マスターハデスは綺麗に吹き飛ばされ、完全に伸びていた。

魔力が回復する様子も無く、その一撃は全員に勝利をもたらした。

「——これが俺達のギルドだア!!」

ナツの叫びは、全員に勝利を確信させるには丁度いいものとなった。この瞬間、マスターハデスは……グリモアハート悪魔の心臓は負けたのであった。

「終わったな……」

「ああ……」

「私達勝ったんですね。」

勝利を噛み締め合う皆。しかし、それも束の間の出来事であった。

「みんなー!!」

「うわあああ!!助けてナツー!!!」

走ってくるハッピーとシャルル。その後から、悪魔の心臓のメンバーと思わしき者達が大量に走ってきていた。

「待ちやがれー!!ネコーー!!」

「よくもマスターの心臓を!!」

「マズイぞ……」

「くそ、流石にもう魔力が0だ……」

走ってくる者達に、こちら側は対処法が無くなってしまっていた。だが、走ってくる者達の反対側から、影が現れる。

「そこまでじゃ!!」

現れたのは防衛チームと怪我をした妖精の尻尾のメンバー達だった。

「うおお！増えたア!!」

「あ、あれはマカロフか!？」

「てか……あそこ見ろ！マスターハデスが、倒れてる!!」

マカロフが現れたこと、そしてマスターハデスが倒れてることのふたつで悪魔の心臓の残党は完全に怯えきっていた。

「今すぐこの島から出ていけ。」

「ひいひい!!わ、わかりましたー!!」

「信号弾だ!!」

そうしてマスターハデスを連れて、悪魔の心臓はボロボロになった戦艦ごとこの島を去っていく。

それを見届けてようやく、全員に安堵が訪れていた。

「そう言えば……戦ってる時、マルク何か言いたかったみたいだったけど……」

「ああ……マスターハデスがどうしてあそこまでの魔力を持っていたか、って話だ。最後に魔力が消えたことも……説明がつけられる。」

「どういう事?」

ウエンディに質問されて、マルクは少しだけ考えてから話し始める。

「多分……マスターハデスはあの船のどこかに、自分の魔力をずっと生産できるような装置を作っていたんだ。」

ナツさんが一回マスターハデスを倒した時に、船にとんでもない魔力を感じたから……きつとそうだと思う。」

「別に強い人がいた……って思わなかったの?」

「最初は思っただけだな?マスターハデスの魔力がいきなり消えた瞬間に、それも消えてたんだ……だから、多分きつとそうだと思う。」

それを……ハッピー達が壊してくれた。」

「そう言えば……マスターハデスの心臓を、って言っただもんねあの人達。」

「ああ……まさに、ギルド名がそのままマスターハデスの強さに繋がっていたわけだ。」

やられた時には、魔力を急いで生産させたんだと思うし。」

そう言つてマルクは視線を向ける。そこには騒いでいる妖精の尻尾のメンバー達がいた。全員ボロボロで、満身創痍という言葉が全員に似合っているくらいには。

「……とりあえず、キャンプまで戻りませんか？」

「少しは休まないと体がもたないわよ。」

ウエンデイとシャルルが声をかけて、皆が一斉にキャンプ跡地へと目指す。

マスターハデスも倒し、悪魔の心臓も撤退……それまでして尚、マルクは心配事があつた。

頭に引つかかること、何かとてつもないことが起きるような不安感。マルクは一体自分が何に怯えているのかわからないまま、戻っていくのだった。

皆が戻つてきて、いつの間にやらいなくなつていたジュピアも戻つてきて……マルクはただ一人、キャンプ地から少し離れた場所で木にもたれかかっていた。

「……この、言いしれない不安感は……」

誰もが、安心したような顔で今を楽しんでいる。マルクだけが何かに怯えていた。

ウエンデイが全員の怪我を治すところを遠目で見つめながら、時折空を眺める。

「マルク。」

ウエンデイの声、そして聞こえてきた声とともにマルクの顔を覗き込むように、ウエンデイの顔がマルクの視線に入る。

「ウエンデイ……みんなの治療、終わったのか？」

「うん。あ、無理はしてないから大丈夫だよ？」

「そうか……」

「……マルクの傷も、治してあげたいんだけど……」

「止めとけ、無駄に魔力を消耗するだけで終わるからな……そうやって心配してくれるだけでも、結構安心できるしな。」

その言葉に笑顔で返すウエンデイ。マルクの隣に座って、マルクの肩に頭を軽く乗せる。

「……何か、不安でもある？」

「……あるっちゃあ、ある。けどそれが何かまでは分からない。もしかしたら、ただ俺が考えすぎなだけかもしれない。」

「……なら、その不安を紛らわすためにみんなと話そう？今からラクサスさんのところに挨拶に行くから……マルクも一緒にどう？」

「……そうだな、なら一緒に行こうか、ウエンデイ。」

ウエンデイの手を握り、マルクは歩き出す。握った小さな手を話してはいけない気がして、優しく……しかし絶対に離さないという意思で強く握る。

不安は隠す。今みんなに余計なことは教えない方がいいと判断したからだ。

だからこそ、今この時間だけでもマルクは安心感で満たそうと思っただけであった。

——曰く、破滅とは唐突であり理不尽である。天災による破滅だろうと人災による破滅だろうと、それは変わらず唐突に現れては理不尽にすべてを破壊していく。

起こった原因が不明であろうとも明確であろうとも、それは関係なく全てのものを平等に破壊していく。男だろうと女だろうと、子供であろうとも老人であろうとも、病体であろうとも健康体であろうとも、奴隷であろうとも貴族であろうとも平民であろうとも。

破滅の前にはすべては無価値、自然が起こせば理不尽に感じるものもいれば仕方ないと思う者もいる。しかし、それが人災や何らかの生物による破滅ならば……人はそれをただひたすらに理不尽に感じるだろう。

しかし、どれだけ唐突で理不尽であっても、破滅というものは大抵その警鐘を自ら鳴らして存在を証明していく。

天災ならば空模様などで、人災ならば大声を張り上げて。それがただの現象に見えるのか、はたまた警鐘に見えるのか。

だが、少なくとも——

「!!」

破滅である以上、避けることは不可能だと誰もが本能的にそれを理解していた。

「ドラゴンの鳴き声……」

「え!?!」

「ドラゴン!?!」

響き渡る何かの音、否……ドラゴンの咆哮。その鳴き声の特徴に、聞き覚えのあるものはいた。

「みんなー!大丈夫ー!」

「おまえらー!」

突然の事で、妖精の尻尾のメンバー達は1箇所に集まっていた。この声1つで不安が出たのだ。

「あそこだ!!」

リリーの指差す先、天狼島上空に黒いドラゴンの姿あり。その姿に

全員が驚きを隠せなかった。

「黒い、ドラゴン……!? イービラーが言ってた……」

「マジかよ……!?」

「本物のドラゴン……」

「やつぱり……ドラゴンはまだ生きていたんだ……」

「黙示録にある黒き龍……『アクノロギア』」

「アクノ、ロギア……?」

その名前に聞き覚えのあったマルク。彼が悪魔の心臓の戦艦へと乗り込む際に出会った、黒髪の青年がポツリと零していた名前だった。

「お前！ イグニールがどこにいるか知ってるか!? 後グランディーネとメタリカーナとイービラーもだ!!」

「よせナツ!!」

「降りてくるぞ!!」

「あいつは、あいつは——!」

降りてくるアクノロギア。そして、降りてきたとともに雄叫びをあげる。敵意あり、殺意あり。捕食者が餌を食べるために獲物を殺す、などといったものではなかった。

人間が餌にするでもなんでもなく、ただ殺すためだけに殺す……そういうったものをアクノロギアからマルクは感じ取っていた。そしてそれは、他のメンバーでもあった。

着地して、少し皆を観察したアクノロギアは高く飛び上がる。

「——逃げろおおおおお!!」

ギルダーツの悲痛な声。その声に反応するよりも早く、アクノロギアは地面に再び着地する。しかし、それは安全のための着地ではない……すべてを破滅に導くための、『攻撃』だった。

地面が凹み、風圧で周りのものが全て吹き飛ばされていく。

「ウソだろ!」

「なんて破壊力なの!」

「何なのよこれ……なんなのよこいつ……!」

「船まで急げえ!!」

アクノロギアの攻撃から、全員は逃げ始める。アクノロギアはそれを追い始める。

「走れ！みんなで帰るんだ妖精の尻尾に!!」

「ウエンデイ！あんた竜と話せるんじゃない!?何とかならないの!?」

「私が話せるんじゃないよ！竜は皆高い知性を持つてる！あの竜だって言葉を知ってるはず!!」

「例え知ってるとしても……あいつは言葉を話さない!!滅ぼす奴らにかける言葉なんて……持ち合わせちゃあいないだろう!!あいつは、破壊の竜だ!」

マルクが吐き捨てるように言う。そして皆は走り続ける、ひたすら走り続ける。だが、凶体が大きいあちらの方がやはり早く、だんだんと距離を詰められていった。

「――船まで走れ。」

「じっちゃん!」

「マスター!」

マカロフは、自らの魔法で体を大きくしてアクノロギアを抑える。しかし、ウエンデイの魔法で傷は治っているとはいえ完治とまではいえなかった。

「無茶だ！かなうわけねえ!!」

「マスター！やめてください!!」

グレイとエルザが、声を荒らげる。しかしそれでもマカロフはアクノロギアを押さえ込んだままだった。

「走れ……!」

「かくなる上は俺達も!!」

「あたってくださいやるわー!」

「最後までいいマスターの言うことが聞けんのかあ！クソガキが!!」

「俺は滅竜魔導士だあー!!そいつが敵って言うなら俺が……うがつ!!」

ラクサスが、ナツの服を掴んで走り出す。その心に悲しみを押さえ込みながら。

「マスター……」

「う、うう……！」

そして、マカロフを残して全員が退却する。マカロフの意志のために、全員が下がったのであった。

アクノロギア

黒き竜アクノロギア。突如とした現れたそのドラゴンは、グリモアハート悪魔の心臓との戦いで疲弊していた妖精の尻尾を襲った。フェアリーテイル

すべての行いが、破滅をもたらすそのドラゴンに皆は逃げるしかなかった。だが、アクノロギアは逃がすまいと彼らを追いかける。

追いつかれてしまうのを防ぐために、マスターであるマカロフが残った。死を覚悟するほど、アクノロギアの力は凄まじく同時に恐ろしいものであった。

「ラクサス！離せ！」

マカロフを残して逃げる妖精の尻尾。しかし、ナツだけは逃げたくないとラクサスに抱えられながら、暴れていた。

「行つて……行つてどうなる……」

「じっちゃんを助ける！じっちゃんが俺らを守るんなら、俺らがじっちゃんを守つてもいいだろうが!!」

「……勝つか？あのドラゴンに。」

「勝つか負けるかじゃねえんだよ……じっちゃんを助けるんだ！じっちゃんを助ければ、問題ねえ！それであのドラゴンが邪魔してくるならぶつ飛ばしてやる!!」

みんなで、みんなで帰らねえと意味がねえんだ!!」

ナツの言葉を聞いて、全員が立ち止まる。全員、考えていることが同じなのだ。このまま黙って引き下がって入られない、マカロフがいなければなんの意味もない、誰一人欠けてはならない。

皆が、心の中でそう思い続けていたのだ。

「俺は……じっちゃんを助けに行くからな!!」

そう言つてナツはラクサスが掴んでる腕を無理やり振りほどいて、船とは逆方向に走り出す。

それを見て、すぐに他の者達もナツを追って走り始める。皆が考えを改めた。マスターの思いを無駄にしない、のではなくマスターも一緒に連れて帰る、という考えに。

ナツはアクノロギアの所まで走っていき、体をよじ登っていく。振りほどかれようとしても、決して離すことはなく。

「じっちゃんを返せ……！」

「ナツ……」

「かかれー!!」

エルザの声に続いて、皆がいつせいにアクノロギアに攻撃を仕掛ける。しかし、どれだけ攻撃し続けても攻撃が通じている様子はなかった。

逆に、アクノロギアが腕を一振するだけで全員が吹き飛ばされた。

「みんな無事か!？」

「くそっ!!」

「攻撃が全く効いてねえ!!」

「遊んでるんだ……俺達なんか、攻撃する対象でもないって言うのか!! 舐めやがって!!」

皆が悔しがってる中で、アクノロギアが一際高く、空高く羽ばたく。雲を突き抜け、空高くへと。

「飛んだ!!」

「帰ってくれるのかなあ……」

「油断しちやダメよ。」

空高く飛んだアクノロギアは、静止してその首を天狼島に向けて口に魔力を貯め始める。

「ブレスだーッ!!」

「島ごと消すつもりじゃないでしょうね!？」

「防御魔法を使えるものは全力展開!!」

「はい!!」

フリード、レイイが文字の魔法で防御を展開、その他の防御魔法を使える者達も加勢する。

マルクも、防御魔法こそ使える訳では無いものの、自身の魔法であれば魔力を吸収して威力を弱めてくれると思えば、ある分のありったけの魔力で防御を貼るつもりだった。

「俺たちはこんなところで終わらねえ!」

「うん!絶対諦めない!」

「皆の力を一つにするんだ!ギルドの絆を見せてやろうじゃねえか!!」

全員が手を繋いでいく。魔力を受け渡すために。妖精の尻尾に帰るために、みんなで帰るために……手を繋ぎ、魔力を送る。

「みんなで帰ろう……」

手を繋ぎ防御魔法を張る妖精の尻尾。その上から、アクノロギアはブレスを放つ。とてつもない威力のそれは、天狼島を飲み込むほどの大爆発を起こした。

それは、海面すらも抉り大きな穴を開けた。爆発が晴れた場所に、天狼島は存在せず……海は空いた穴を埋めるかのようにそれを水で覆い隠す。

覆い隠した後は、まるで何事も無かったかのように海は平穏を取り戻す。

X784年12月16日天狼島、アクノロギアにより消滅。これが、評議院の出した結果だった。

「う、ぐ……いって……なんか、体が軽いような……?」

マルクは目を覚ます。近くにはウエンデイとシャルルがいたが、他のみんなの姿が見えない。

起き上がったからマルクは周りを探索するように歩き始める。

「ウエンデイとシャルルは無事みたいだったからよかつたけど……あの攻撃で、無事つたのに皆とはぐれてるって事は……吹き飛ばされたのかな。まあ、すごい威力だったし。」

独り言をブツブツと呟きながら、マルクは島全体を回っていく。回っている内にナツ、グレイ、エルザなど……他の妖精の尻尾のメンバーも全員見つかった。

しかし、誰一人として起こそうとしてもまったく起きる気配がなく、仕方ないので一旦ウエンデイ達の所へと戻ってくるマルク。

「ふう……俺だけがこうやって起きてるのも変な話だよな……ナツさんやグレイさんまで気絶してるのは……声掛けただけとはいえ起きる気配がないんだもんな。」

そう言いながらマルクはふと周りを見渡す。ウエンデイ、シャルル、そしてマルクの体が横たわっていた。

「……うん!? 何で俺の体が!？」

マルクはそのことを最初幻覚だと思っていたが、それにしてもはやくに現実感のようなものがあって、本当の肉体のようだと思っていた。

「——その体は、ちゃんと貴方のものですよ。少しだけ魔法の不備があつて……今は魂と体が離れちゃってる状態です。」

「ああなるほど所謂幽体離脱……誰だ!？」

「こんにちわ、3代目妖精の尻尾のマルクさん。」

「ああどうもご丁寧……ってそうじゃなくて。」

急に現れた謎の少女。自身の身長ほどに長そうな金の髪、そして全体的にふわふわしているかのようなその見た目に、マルクはついつい流されてしまっていた。

「私ですか？私は初代妖精の尻尾マスター、メイビス・ヴァーミリオンです。」

「……はい!?初代!?!」

「はい、初代です。」

必然的に、2代目妖精の尻尾マスターで、現悪魔グリモアの心臓ハートマスターであるマスターハデスですら、延命装置である魔力供給装置が必要なのに、目の前にいる少女はそれよりも歳上なのである。

マルクは、そのことに驚いていた。そうなる場所で動いている貴方は一体誰なんですか、と内心に疑問不安が入り交じっていた。

「もうひとつ言うと、私も貴方と同じ……のようなものです。つまり、幽霊です。」

「幽霊見えた理由が自分も幽霊になったからって嫌な理由だ……って違う違う!そのことも少しくらいは大切かもしれないが!色々なこと……教えてくれないか!?なんで俺がこんなことになっているのかもそうだが——」

「皆さんが起きない理由、それとあなたがそうなっている事への理由……そのふたつは違うようでいて、実際は同じものが原因で起きています。」

先程までのにこやかな顔はどこへやら、真面目な顔でメイビスは語り始める。

「貴方達がアクノロギアに攻撃される瞬間、貴方達の思いと魔力を借りてとある魔法を発動させました。」

あらゆる攻撃から外敵を守る魔法、フェアリースワイア妖精の球という魔法です。」

「……つまり、その魔法で俺達は無事だったということか……でも初代、それなら何故このようなことに……」

「……凍結封印、よほど強固でいけなかった妖精の球は天狼島そのものを封印してしまいました。」

よって、中にいる者達の時間を完全に止めてしまっています。」

「……ナツさんたちが起きない理由が、それなんです。そもそも起きようがなかった……と。」

「じゃあ俺が幽体離脱した原因は?」

「あなたの体の性質です。貴方は魔法を吸収すると聞きました、しかしその魔法を吸収したとしても、その魔法が起こした事象までは防げない……そうですね？」

「は、はい。」

戸惑いながらも、マルクはメイビスの質問に答えていく。

「その性質、そして妖精の球という魔法が合わさって、あなたの体『だけ』を凍結封印してしまったのです。」

それによって、魂と体の別離は起こってしまった……申し訳ありません、私が至らないばかりに……」

「いえ……初代が守ってくれなかったら、俺達は今頃天狼島と一緒に死んでいました。初代が助けてくれたんです……俺達は、礼を言う方の立場です。」

「……ありがとうございます。」

「……そう言えば、その凍結封印って……どのくらい封印されるんですか？」

「っーえ、えーつとそれは……」

マルクの質問で急に歯切れが悪くなるメイビス。マルクは首を傾げたが、メイビスですらいうことが難しいのだろうと自己解釈していた。

「そ、それは、ですね……？」

「それは？」

「…その、ものすごく強固に作ってしまったので、解除するように動かなければ……どれだけ頑張っても、年単位としか……」

「えっ」

メイビスの答えに、マルクは困惑していた。年単位、と来たからだ。1年でも恐らく残された妖精の尻尾のメンバーは、全員が死んだと思うだろう。しかも、年単位なので何十年と経過する場合もあるわけだ。

「……まあ、経ってしまうのはしょうがないです。俺達がこうやって守られているのは、初代のおかげなんですから。」

「時間を早める方法が……もう一つだけあります。それを行ったとし

てもどれくらい減るかわかりませんが……」

「それは？」

「マルク……あなたの体の性質を利用させてもらいます。いえ、正確にはあなたの魔力でしょうか。」

そう言われて、マルクは自分の体のことを思い出してすぐに合点が行く。

「魔力を吸収する性質……それを使うんですね？」

「はい、しかし妖精の球の魔力を吸収するので……あなたの魔力や体に何らかの不備が生じる可能性が——」

「やりますよ。俺の力、どんと使ってください。」

「……ありがとうございます。貴方は、特に何もしなくていいと思います。あなたがとうございませす。貴方は、特に何もしなくていいと思われませす。あなたの中の魔力も、凍結封印の影響を受けていないので働いてくれるでしょう。」

そう言われて、やることが決まったあとに、ふとマルクは思った。『年単位であるならば、自分はこれからどうすればいいのか』ということである。

「少し寝づらいでしょうが……基本的に動いて寝て、の繰り返しでいいと思いますよ。」

貴方の体はまだ生きています、精神的な疲れであっても休んで回復させるべきかと。」

「あ、なるほど……にしても魔力が使えるのに魔法が使えないってかなり不便になりそうだなあ……魔法の特訓も出来ない、ってことだし……」

ぼそつと呟くマルク。それを気にしたのか、メイビスはニツコリと微笑みながらマルクの手を握る。まるで大人を引っ張る子供のよう

に。「何なら私が天狼島を案内してあげます。それだけでもかなり暇を潰せると思いますよ?。」

「……なら、よろしくお願いします初代。」

こうして、初代妖精の尻尾マスターと未だ入って1年も経っていない新人というコンビが生まれる。

妖精の尻尾へ帰るために、マルクもこの凍結封印の中でやる事しなければと考えるのであった。

はじめの1年は、精神体に慣れるのに苦勞をした。まず飯が食べられない。そもそも体の時間が中途半端とはいえ、止まっているのだから栄養摂取の必要性はまったくないが、それでも『何かを食べたい』という欲求は出てくる。味というのは、心を豊かにすると書庫で読んだ本に書いてあったとマルクはその時思い出していた。そして、精神体の睡眠時間が肉体との睡眠時間より長いことを知った、この頃は1日である。

次の1年でマルクは魔力の質が変わっている事で、その魔力が何なのかを調べるが多くなった。とは言っても魔法は使えないので精神を研ぎ澄ましてほんのちよつとだけそれを確認する、というものだったが。睡眠時間が伸びていた、五日ほど眠るようになった。

さらに次の1年で妖精の球から出ることに成功した、と言っても精神体だけの話だが。海の上を歩くことができるようになったというのは、新鮮な気分だとマルクは感じていた。この頃には半月程寝るようになっていた。

四年目でようやくマグノリアに到着するまでに精神体の扱いに慣れていた。しかしこの頃には精神体における睡眠時間が飛躍的に増え始めていた。2ヶ月程である。

5年目で妖精の尻尾が弱体化しているのを知った。皆を探すのにリソースを割きすぎたのだろう、どうやら借金もしているようだった

が、マルクにはどうすることも出来なかった。睡眠時間、半年。

六年目は、寝ていた。1年間ずっと眠っていた。故にマルクは五年目以降の歴史を知らない。

そして、結局七年が経過したのであった。

七年後編

再開

「……ク、……て……お……て、マ……」

マルクの頭に響く声。マルクはその声を知っている。マルクは、段々と微睡みから覚め始めてくる。

その覚める過程で、マルクは今までの事を思い出し始める。アクノロギアの襲来のことから始まり、初代が天狼島にいたメンバーの魔力を形にして発動させた魔法、フェアリースフィア妖精の球。

その魔法の発動により、一時的な凍結封印に晒されて自分だけが意識を保っていたこと、魔力を喰らいながら初代マスターメイビスが魔法を解除する手伝いをした。

つまり、声が聞こえるということは、封印が解除されたということである。

「……きて、マルク……起きてマルク!!」

「……ウエンデイ?」

「マルク!!」

目を開けたマルクにウエンデイは抱きつく。ウエンデイの頭を撫でながら、ウエンデイ以外にもいるメンバーの方に視線を移す。

「……何年、ですか?ドロイさん、ジェットさん……」

「……7年だよ、この野郎!」

見る影もなく太ったドロイが、泣きながら笑っている。その他にいたのはジェットは勿論、銃の魔法を使うビスカとアルザック。そしてマックスとウオーレンだった。

「7年ですか……皆さん、初代に会ったんですよね?だからここに来れた。」

いえ……探してたのは青い天馬と、ラミアアスケイル蛇姫の鱗だったのは知ってますけど。」

「お、お前なんでそんなこと知ってんだよ……!?!」

「話は後にしましょう?まずは……寝てる他の人たちを起こさない

と。」

「そうだった！レビイ！！」

「あ、待てよジェット！！」

そう言って、自身の魔法を使ってジェットはものすごい速度で走っていく。

それを追うかのように、ドロイも追っていく。

「……というか、ナツさん怪我大丈夫ですか？」

「んー、なんか治ってた。痛くねえし多分大丈夫だろ。俺達も行くぞー」

「はい！……ってわけで、ウエンディそろそろ離れてくれると助かるんだけど……動けない……」

「ご、ごめん……」

少し照れながら、ウエンディは離れる。そして、立ち上がって手を繋いで先に行ったメンバー達を追うのであった。

「……全員、無事でしたよ。初代。」

「良かった……7年による凍結封印の影響……それが彼ら自身に及んでいなかったのは。」

全員が揃ってから、改めて初代メイビスに会う妖精の尻尾のメンバー達。マカロフが一步出て、メイビスと話し合う。

「凍結封印……と、言いますと？」

「アクノロギアが現れた……あの時、私は皆の絆と信じ合う心、そのすべてを魔力へと変換させました。皆の思いが妖精三大魔法のひとつ、

妖精の球を発動させたのです。

この魔法はあらゆる悪からギルドを守る、絶対防御魔法……しかし皆を封印させたまま、解除するのに七年の歳月がかかってしまいました。

それでも……彼が、マルクが手伝ってくれたおかげでここまで短くなったとも言えます。」

「なんと……初代が我々を守って……それに、マルクも手伝ってくれたと……」

「……なんか、改めて言われるとこそばゆいですね。俺はただ、魔力食べてただけですし。」

「彼はともかく……私は皆の力を魔法に変換させるので精一杯でした。」

揺るぎない信念と強い絆は奇跡さえも味方につける……良いギルドになりましたね、3代目。」

そう言ってほほ笑みかけるメイビス。その言葉に感動して、マカロフは大泣きをし始めていた。もちろん、嬉し涙の方だが。

「……てか、結局マルクだけなんで七年の間の記憶持つてるんだ？」

「ああ……俺初代と同じようになってたんですよ。なんか、凍結封印の影響が変に体に出て幽体離脱しちゃってたみたいで。」

メイビスがその場から消え、ゆつくりと妖精の尻尾のメンバー達は船に向かう。

その過程で、マルクは事情を説明していた。

「それって……幽霊になってたってこと？」

「んー、そうなるのかなあ……マグノリアにもちよつとだけ行っただけ、新しいギルドが立っていたかと思えば妖精の尻尾が元々あった場所もなんか廃墟になってたし……」

「あー……そこまで見てたのか……」

「天馬とラミアにはお世話になったみたいですし……久しぶりにジユラさんや一夜さんに会ってみたいなあ……」

「わ、私はあいつに会うのは遠慮しておく。」

他愛も無い話も交えていきながら、船へと向かう。その中で、少し

だけウエンデイはマルクのことを心配になっていた。

「……マルク、本当に大丈夫……？」

「ウエンデイ……いやいや、大丈夫だって。お前が心配してるようなことは、何も無いからさ。」

「本人がこう言ってるんだし、本当に大丈夫なんじゃないの？それに、この事で初代に怒ったりするのも筋違いになっちゃうし……どこかへ矛先向けるのだけは止めなさいよ？」

「そういうつもりじゃないけど……」

「まあ、幽霊なつてたつて言われて心配することもあるよなあ……ま、なんかあつたら、何かあつたらということで。」

ウエンデイの頭を撫でながら、安心させるようにほほ笑むマルク。少しだけその顔に不安を取り除かれたウエンデイは、同じく微笑み返すのであつた。

「……どうえくいてるううう……？」

「巻き舌風に言うのやめろ、あと出来て……ない、から……」

「ギルドはこつちに移転させたんだ、行こうみんな。」

アルザツクの案内の元、天狼島から帰還したメンバーはギルドへと向かう。その途中で、マグノリアに建てられた新たなギルドを見かける。

「あれがマグノリアに建てられた新しいギルドねー……名前は、トワイライトオカ黄昏の鬼……か。」

「……俺達はあのギルドに金を借りてるくらいには、財政難だからな

……」

「まったく……嘆かわしいわい。」

髭を撫でながら、マカロフは黄昏の鬼のギルドを歩きながら見る。しかし、今はギルドに帰ることが目的なので仕方なく戻って行くのだった。

そして、今のギルドのある場所に……山を登って向かう。そこには小さな建造物が一つあるだけであった。

「……何か騒がしくないか？」

「そうですね……ん、これは……」

「……多分、黄昏の鬼だろう。」

「よーし、んじやあ入るぞー」

軽い調子で、ナツが歩き始める。他の者達もそれに習って歩いていく。唯一驚いていたのは、迎えに来た者達だけであった。

「よっ」

ナツの軽い言葉で、黄昏の鬼の一人が蹴り飛ばされる。他の者をグレイが凍らせて、そのまた他の者をエルザが峰打ちして、更にまた他の者をガジルが殴り飛ばし、まだ残っている者をマカロフが魔法で巨大化させた拳でげんこつを入れる。

「ただいま。」

「今戻った。」

「みんなー」

「さっきまで暴れられたせいでぼろぼろですね……」

皆が一人一人帰りの挨拶をしながら、笑顔を向ける。そして、帰ってきた者達の見えた目が全く老けていないことに対して、泣きながらも驚いていた。

「お、おお……おまえら……」

「若いっ!!」

「七年前と変わってねえじゃねえかー!」

「どうなってんだー!!」

「えーと……」

起きたことを説明し始める帰還組。しかし話を聞いても出るこ

は喜びの感情だけだった。

「大きくなつたな、ロメオ。」

「……おかえり……！ ナツ兄！ みんな！！」

この言葉だけで、残されていた者達はさらに涙を流す。無論、こんな嬉しいことがあつたのなら……妖精の尻尾は宴を始めるのだ、とても盛大に。

天狼島からの帰還、そして七年の月日が経つたとはいえ無事に帰還してくれたこと……名目をいっばい立てて、しかしそれでも宴が楽しいということだけは、全員の共通であつた。

天狼島帰還組からの報告の後は、残された者達との楽しい話……

「あの……リーダスさんこれ……」

「ウイ……俺なりにウエンデイの7年間の成長を予測して書いてみたんだ。」

「お胸が……」

「ん？なんか言つた？」

ではあるのだが、一部の者は少しだけダメージを負っていた。そして話題が話題なだけに、マルクは混ざれないでいた。

女のことに関しての話題に、特にリーダスの書いたウエンデイの7年後の予想図が、ルーシィやエルザと違って一部の大きさが平たいものだったという話題に対して、どうやって慰めてあげればいいのか……マルクは何もわからなかった。

「私……大きくなつても大きくならないんでしょうか……」

「ウイ？なんか変なところある？この絵。」

「すごいデリケートな話題な分、察してあげた方がいいのでは……て
いうか誰ですかこれ。」

「ん？マルクだけど。」

「やたらムキムキになってる……なんでこんな……いえ、気に入らな
いとかじゃなくて……」

そして、ウエンデイとは違いリーダーダスの描いたマルクの絵は、もは
や別人レベルで筋肉が盛り付けられていた。

なぜそうなったのかが、マルクにとつては不思議でしよがなかつ
た。

「みなさんのご帰還……愛をこめておめでとうですわ！」

「ん？」

入口から聞きなれぬ声を聞いたマルクは、ギルドの入口に意識を向
ける。そこには、七年の時間を表すかの如く成長していた蛇姫の鱗が
いた。

「蛇姫の鱗の人達……みんなやつぱり7年も経つと姿が変わるもんな
んだなあ……」

「あれ？幽霊になってみてたんじゃないの？」

「いや、見てたけどそんな意識してなかったから……」

そんな他愛もない話を続けていく。しかし、七年の歳月を埋めるか
のように始まったその宴会だけは長く、ずっと長く続いたのであつ
た。

「うあー……肩凝った……」

「3日間ずつとお祭りだったもんねえ……」

「騒ぎすぎよ、ほんと。」

「まあまあ……」

ウエンデイ、シャルル、マルクの3人は帰路につく。三日間の宴会を経て、今ようやく家に帰ろうとしていたところだった。

「……そう言えば、ヒルズどうなってるのかなあ……」

「うーん……ラキさんが言うにはまだ潰れてないらしいが……まあ、行けばわかるだろ。」

「ヒルズが潰れてるかどうかじゃないと思うわ。」

シャルルは頭を抑えて、軽く溜息をつきながらそう呟く。ヒルズの存在の事よりも大事なことにらしい。

「どういうこと？シャルル。」

「……ウエンデイ、家賃の支払い……7年分溜まつてるわよ。」

「……っ!!」

しまった、という顔でウエンデイは驚愕の表情になる。これにはマルクも苦笑いしか浮かべられなかった。

「確かヒルズの家賃って……」

「10万よ、それでもなんとか仕事してへそくりを貯められる分とかは稼げていたんだけど……」

「7年だと……凄い金額になるな……へそくり、そんな溜まつてるか……？」

「マルク……しばらくマルクのいえにとまらせてえ……」

「住む場所変えても家賃は発生するわよ、ウエンデイ。」

「ううー!」

「……ま、まあ……確認してくれば……いいんじゃないか？稼げそうなお仕事も……探さないといけないし……」

優しく宥めながら、マルクは半泣きのウエンデイをヒルズへと連れ帰っていく。

しかし、マルクも内心こう思っていた。『七年の間に俺の家どうなったんだろう』と。

「……お金、無くなったら一緒に仕事行こうな……」

「うん……」

そう言っつて、マルクはウエンディをヒルズまで送ってから、自宅へと帰る。

その日、マルクの家とヒルズのウエンディとシャルルの部屋から二人の悲鳴が響いたという……

仕事

「……という訳で、仕事に行こうと思います。と言っても……それなりの仕事を回してもらってないので……簡単な奴しかないけど。」

「どういうわけだよ、おい。」

「お金……ないもんね……」

「ガジル……お前も、仕事で報酬を貰ってきた方がいいと思うぞ。鉄が食えなくなっても知らんからな。」

「うぐつ……そこら辺のもん食つときやあいだろうが！」

「そこら辺に鉄が落ちてるならな。」

妖精の尻尾のギルドで騒ぐナツを除いた滅竜魔導士達とハッピーを除いたリリーとシャルルのエクシード組。

アクノロギアに襲撃され、皆無事に帰ってきたら七年の月日が経ってしまっていたという事実。

それは、金銭的な問題が強く出てしまっていた。そう、家賃や食費などである。

「けど、多分どの仕事も大して報酬もらえないわよ？今このギルド……弱小ギルドだし。」

「……そればかりは、どうにもならないから……」

「つかよ。火竜サラマンダーはどうしたんだよ。」

「何でも、食費入れてた金庫が無くなったので、ルーシイさんのお父さんにいい仕事紹介しに行ってもらおうのだとか。」

「は？じゃあなんでついて行かなかったんだよ、そっちの方がいい仕事貰えるってこつたる？」

「まあ……あんまり大勢で行くのも迷惑かかりますし。それに、こつちにも探せば実りのいい仕事が……お、これなんかどうですか。」

上手く行けば家賃くらいまでならなんとか稼げそうですよ。」

そう言っただけマルクは一つの依頼書を取る。そして、その紙をウェンデイ達に見せる。

「えーつと……『凶暴な暴れ猪の退治、1匹につき1000J』……つてこれ、すつごく危ない依頼なんじゃ……」

「ウエンデイに危険な真似はさせねえよ。下、確認してみ。」

「へ？……『治療の心得がある方がいる場合、別途で報酬追加』……」

「……話がうま過ぎやしねえか？」

「だが、弱小ギルド扱いとはいえ正規ギルドに詐欺まがいの以来は出さんだろ……やるしかないだろうな。」

「んじや、これに決定という事で！」

マルクは、ミラに依頼書を見せてクエストに向かう。依頼した者は、山奥にある静かな村の一つ……家賃やその他もろもろを稼ぐ為に、多少危険な真似に手を出さねばならない状況を治すため、マルク達はそこに向かうのであった。

「おお……あんたらが依頼を受けてくれるのかね……まさかかの有名な妖精の尻尾に来てもらえるとはもう……」

依頼者は1人の老人だった。だが、既に弱小ギルドとなっているのかの有名など付けるこの老人に、少しでも心配が入る。

「……おい、この爺さんボケてねえか？」

「こんな山奥ですし……もしかしたら致命的なレベルで情報が伝達されてないだけでは……」

「それはそれで……」

ボソボソと小さい声で話し合う中、老人はそれに気づかずそのまま依頼内容を話し始める。

「実はもう……ココ最近、謎の猪の群れが現れての……その駆除に

当たって欲しいんじゃない……どこからともなく現れた猪に、村の者達も傷だらけで最早蹂躪されるほかなくのう……既に食料も食い荒らされて

ココ最近の水場も取られてしもうた……」

「……分かりました、ならその猪達を退治すればいいんですね？」

「……つってもよ、具体的に何頭くらいいるんだよその群れは。10匹程度じゃあすぐに終わっちまうぜ？」

ガジルの質問に、老人は視線を上に向ける。目を細めておおよその数を把握しているのだ。

「……奴らは、山の頂上付近にある遺跡に群れを構えておるのじゃ。未だすべてを見た訳じゃないが……恐らく、50はくだらんじやろう。」

「それはまた随分な数だな。」

「とりあえず、俺とガジルさんで行きましょう……」

「おい、何勝手に……」

「リリー、ウエンディとシャルルを頼むな？」

「分かった。気をつけていけよ二人とも。」

「けっ……リリーに免じて何も言わねえでおいてやる。」

こうして、ガジルとマルクは山の頂上まで登ることにした。猪を借り尽くすために。

「……つか、なんで俺たち二人にした？リリーもこっちに連れてきてたら楽だったろうよ。」

俺一人でも十分だがな。」

「もし入れ違いになった時困るでしょ、ウエンディだけだと押されかねないから……」

「……ほんと、過保護だなお前。」

「そう、ですかね……あ、見えてきましたよ。お爺さんが言ってた遺跡。パツと見は何もいなさそうですけど……」

見えてきた遺跡。そして、ほぼ同時に二人の滅竜魔導士としての嗅覚は、この辺り一帯の獣臭さを捉えていた。

「……血の匂い……こりゃあ、村の人間のもんか？」

「ですが……濃い匂いでも無いので人喰い猪とかではなさそうですけど……」

「……ま、確かめてみりゃあ済む話だな。」

ガジルのその言葉に納得して、二人は遺跡へと向かう。しかし、言われていた猪達の姿はその場には影も形も存在していなかった。

「……どういう事だ？ 獣臭さはここが一番強え……の割に、ガキの猪すら見当たらねえ。」

「……あれ？」

「あ？ どうした。」

何かを感じ取ったマルク。遺跡の真ん中まで歩いていき、そこで突然地面に耳を当て始める。

「なんだ？ そこになんかあんのか？」

「変な音っていうか……いえ、音自体はこうやって地面に耳をつけてないと、分からないくらいなんですけど……変な魔力を感じます。」

「……ちよつとどいてろ、鉄竜棍！」

ガジルが、マルクの指定した部分を破壊する。すると、いとも簡単にその部分だけ床は崩れ、中から水晶……否、魔水晶ラクリマが現れる。

「んだこれ？」

「さあ……？ でも、なんかすごく嫌な予感と言いますか……とりあえず良くないものだったのはわかります。」

「そうだな……」

「とりあえずこれだけ回収して魔力の吸収しておきますね。破壊する

より安全でしょうし。」

「おう。」

マルクは手を伸ばして、そのラクリマを回収する。そして、軽く自分の魔力を通してそのラクリマから魔力を無くす。

「なんか変わったこと起きたか？」

「……うーん、別段変わったことは起きてなさそうですね。とりあえず一旦村に戻りましょうか。」

少し腑に落ちないながらも、それっぽいものを破壊した二人は一旦村に戻っていくのであった。

「マルクー!!ガジルさーん!!」

「ウエンデイ!?どうした!?!」

「……んだあの猪の群れ?」

シャルルに運んでもらいながら、道中でマルクとガジルに合流するウエンデイ。

シャルルとリリーも付いているが、何故かリリーは戦闘モードである人並みの大ききさになっていた。

「知らん!気づいたら囲まれていた!!」

「ウエンデイを追ってきてるってことは……ま、とりあえず一旦あの猪の群れを退治しますか。」

「ギヒ……上手く行けば晩飯の材料だな。」

「かなりの数確かにいますが……なんとか、行きましようか!!」

そうして、マルクとガジルはウエンデイとリリーと共に猪の群れに

対して魔法を使っていく。

確かに血気盛んで、猪突猛進を体現したかのような攻撃性を猪達は秘めていたが、マルク達によってすぐに追い返されてしまう。

「よし、とりあえず追いましょうか。もしかしたら巣を移動させた可能性だってありますし。」

「そうだな、追うとしよう……どうしたガジル、怪訝な顔をして。」

「……いや、何でもねえ。」

ウエンデイとガジルはシャルルとリリーに掴んでもらい空を飛び、マルクはそれを追いかけるように地面を走っていく。

猪達の群れは村の方に走っていったおり、面々はそれを追いかける……が、村についた時点で見失ってしまう。

「……あれ？確かに村の方に来ましたよね？」

「ああ……おい小娘、お前が囲まれたのは村での話だよな？」

「は、はい……あの時はなんとか3人で村人を探してから二人に合流したんですが……何事も、無かったかのように……」

「……どういう事だ？」

「……考えるのは後におこう。先程のことを把握している村人もいるはずだ。その村人を探して、情報をみんな得手分けして集めるのが良さそうだ。」

リリーの出した提案に、マルク達は頷く。とりあえずその場は一旦解散して、全員で情報を集めることにしたのであった。

「……さて、全員の情報を照らし合わせると……」

『村人しか知らない避難場所に逃げていた』……ということになるけど……』

「どう考えてもありえねえな。小娘が俺達と合流する時ならともかく、俺達があのイノシシを追いかけて村に入ったところまで確認している。」

の癖に、村の奴らは外に出てた……嘘くせえな。」

「嘘くさい、というと？」

「俺達が向かった先に、猪共はいなかった。しかも村の方から襲ってきた……となりやあ村の奴らがなんか隠してるのは明白だろ。」

猪を討伐してほしい……つつーのも、嘘かも知んねえしよ。」

ガジルの言葉で、一同に沈黙が訪れる。しかし、ガジルの言っていることを是とするならば、同時に疑問も出てくる。所謂、隠している理由と嘘をつく理由だ。

「……で、実際なんの目的があつてそんなことするのか……って話になりますよね。」

「村人が、流れ者を騙して流れ者を生贄に捧げるといふのは、ありえない話ではないが……」

「ふえ!?!い、生贄!?!」

「例えばの話に決まってるでしょう?」

リリーの話にウエンディは軽く驚いてしまったが、それをシャルルが制す。それを見てから、リリーは話を続ける。

「……この村には、それらしきものはなかった。勿論、すべてをちゃんとした訳では無いが……そういう伝統があるならば、どこかしらに作っているはずなのだ。」

「作ってる……と言えば、山の上の遺跡……あれはそれっぽさこそあったな……なんの遺跡か、少しだけ気になってたんだよあれ……変なラクリマもあつたし。」

「……変なラクリマ?…どんなものだ?」

「ん、ああ……遺跡の床に隠されててさ、床をガジルさんが壊してそれを見つけたんだよ。」

随分と嫌な魔力を感じたから、一旦魔力を抜いておいたけど……」

「……今考えてても埒があかねえなあ…一旦、この客人用の家とやらで休ませてもらおうぜ。」

大きな欠伸をしながら、ガジルがそう提案する。これ以上思いつくこともやることも無いため、それに関しては一同は同意する。

しかし、心に残る不安感があった。村に入った猪達はどこに消えたのか？何故村に入ってきた猪達を村人が認知していないのか。

「……考えててもしょうがないし、俺も少し休むか。」

そう言っつて、マルクはゴロンと床に寝転がって休み始める。他の者も似たように寝転がるのであった。

そして、数時間が経過した頃にマルクは目を覚ます。特に何かを感じたわけもなく、ただ目が覚めただけである。

「……変な時間に目が覚めたな…」

そして、何となく全員の顔を見回してから立ち上がって体を伸ばす。寝転んでいたつもりだったが、どうにも眠ってしまったようだった。

「……猪達は、俺達のところに向かったきり……さて、村にはいつ来るのか……」

「マルク……？起きてるの……？」

目を擦りながら、欠伸をしつつウエンデイがマルクに声をかける。マルクもウエンデイの方に向き直ってから、微笑んでその頭を撫でる。

「んん……ほら、もう少し寝よ……？」

「そうだな……探索はまた明日にでもしよう……」

そう言つてマルクはウエンディに寄り添いながら、またまぶたを閉じる。今疑問に思っていることや、不安に感じているすべてが微睡みに消えるかのように、甘く眠気の彼方へと溶け込んでいく。

まるで怠け者の様に、その思考はまた明日でいいやとなりながら……マルクは眠りにつくのであった。

真相

マルク達が生活費を稼ぐために、仕事に来た場所。受けた依頼は村を荒らしている猪達の退治だった。

しかし、巢だと言われた場所にはマルクはガジルと共に向かったが、猪がおらず、代わりに床の下に謎の魔水晶ラクリマが埋め込まれているだけだった。

そして、突然村に現れた猪達から逃げてきたウエンデイ、シャルル、リリーと合流してこの猪たちを撃退、逃げた猪達を追って再び村に入った一同だったが、村人達は猪達のことを認識しておらず、猪達も姿を消すという不思議な出来事となった。

仕方なく、マルク達はその日は一旦泊まって休むことにしたのであった。

「……」

「どう、しようか……」

そして、翌日。借り受けた家にて一同は円を組んで話し合いをしていた。しかし、どうにもこうにも進展がなかった。

情報は多いとは言えないものの、決して少ないというものではない。しかし、それが一つの事柄に関係していることなのか、はたまた全く別の問題なのか……そういうのを全く判断出来ないでいた。

「……マルク達が見つけたっていうラクリマ、その魔力は吸ったんだよね？」

「ああ。吸った後に一旦村に戻ろうとしたらウエンデイ達が猪に追われていた。」

「リリー達の方は特に進展はあったのか？」

「お前達とほぼ似たようなものさ、ガジル。怪我人の治療を手伝っていたら、知らず知らずのうちに猪に囲まれていた。」

ウエンデイ達が味わった疑問『村人はいつ声もなく避難したのか』初めにウエンデイが囲まれていた時、怪我の治療に専念していたウエンデイが集中していたせいで聞こえなかった、というのなら話は早い、それをシャルルやリリーが見逃すはずがない、というもので

あつた。

そして、囲まれた時と同じように村に猪が逃げた時も特に悲鳴らしきものを聞き取っていなかった。

「……ガジル、お前はなにか引つかかっているようだな。何か分かっているのか?」

「……あくまで推測だ。」

けどよ、俺ア思うんだよ。村人達が猪なんじゃねえのかってな。」

「……流石にそれは突拍子も無さすぎじゃありませんか? 喋れる動物もいるから知能とかの話はしませんけど……流石に人間に化けられる様な種族がいるとは……」

「種族じゃなくてもよ、それっぽいものがあるじゃねえか。あの遺跡のラクリマだ。」

「……あれが、どうかしたんですか?」

「ありやあ隠してあつた床の脆さからも考えて、かなり長い間眠つた代物だ。つい最近……少なくともここ一、二年の代物じゃねえ。」

だが、それ以上の年月が経っているくせに魔力が衰えてる様子はねえ。ありやあ、多分何かしらの魔法の『基盤』だ。」

ガジルの推理に、マルクとウエンディが首を傾げる。しかし、エクシード組の二人はなんとなく理解をしていた。

「要するに、そのラクリマとやらが何かしらの魔法の発動に必要な魔力を補っていて、それが猪達を人間に変えているというのか?」

「そういうことだ。」

「でも、それなら……この人達は皆猪に戻るんじゃないんですか?」
「だからよ……わざわざ散り散りにならずに村に一直線に戻つたんだからここに何かあるに決まつてるじゃねえか。」

「っ!」

ガジルが思いの外考えられていることに、マルクは失礼ながら驚いていた。ガジルはナツとおなじで、考えるよりも先に殴るタイプの人間だと思っていたからだ。

「おい、お前今ものすげえ失礼な事考えてたろ。」

「いや、全くそんなことはありませんよ?」

ガジルの言ったことにマルクは目を背ける。しかし、すぐに真面目な顔に戻ってガジルの話を改めて理解する。

「……ということはやっぱり、この村の人が猪？」

「かも知んねえな。なんで俺達を遺跡に向かわせたのかは謎だが……ま、その辺は面白させりやあ済むだろうよ。」

殴ってわからせりやあそれで十分だ……ギヒツ……」

「そんな事しなくてもいいですよ……俺にいい考えがあります。」

「あ……？」

マルクが親指を立てて、外に出る。何をするか分からない一同だったが、自信満々な以上、一旦マルクに任せてみよう……ということになったのだった。

「……今からこの村一帯に魔力の壁を張ります。ちよつと四人にはきついかも知れないので……少しの間だけ村の外にいてください。人間になったイノシシというなら……魔力を吸い取ってその魔法を解いてやれば済む話ですからね。」

「魔力の壁？」

「正確にはおれの魔力が詰まった部屋みたいなものですけどね。これやると、俺の魔力がガンガン減るわ範囲にいる人達の魔力もガンガン減るわで……」

「分かった、しばらく出ていよう。何かあったなら、この信号弾を打ち上げてくれ。」

「ああ……」

マルクはリリーから信号弾を受け取る。そして、4人が村の外に出たのを確認してから目を瞑り、魔力をゆっくりと放出していく。

魔法、と言うにはあまりにもおざなりなものだが、放出するだけでなくそれを村全体を囲うように作っていかなければならないので、集中していかなければならない。

リリーから渡された信号弾だが、使う暇があるのかどうかだけが彼の不安の種であった。

「……む？信号弾が打ち上がったな……色は…緑か。」

「赤が敵襲……要するにイノシシ共が現れた時のやつだったが…色から察するに、現れなかつたって事か？」

「そうらしい…一旦マルクの所へ戻ろう。」

しばらくしてから、信号弾が打ち上げられる。色は緑、警戒することとはあれど、イノシシが人に化けている事は無い、ということへの決定打でもあった。

そして、その信号弾を見てからガジル達はマルクと合流するのであった。

「……駄目ね、リリーと一緒に少し見回したけどマルクの言った通り、イノシシなんて村には湧いてないわ。」

「ちっ……じゃああの時逃げた猪共はなんだってんだ？」

「イライラするなガジル。もどかしいのは分かるが、焦っても何も始まらない。」

「わーってるよ。」

しかし、手詰まりなのも事実。猪達はいったいどこに消えたのか？その疑問だけが頭の中をぐるぐるしていた。

「……そう言えば、ずっと気になってたことがあるんです。」

思い出したかのように、声を上げるウエンディ。その言葉に、マルクは聞き返す。

「気になってたこと？」

「この村の人達って、あまり村から出ようとしなくて……いえ、村から出ないのはわからなくもないんだけど、その……本当に誰も出ようとしてないのが気になって。」

「……言われてみれば、確かにそうだな。」

「あ？どういふことだ？」

ウエンディとリリーの言っていることがいまいち理解できないガジルに、リリーが少し悩んだ後に説明を始める。

「ウエンディは、俺達以外この村から出入りしているものを見ていない……という事だろう。」

「んだよ、その何が変なんだ？」

「ガジル、村の外に生えている木……あれがなにか分かるか？」

リリーの指差す先には、美味しそうな樹の実がなっている木が生えていた。

「ただの果物だろ？それが一体——」

ここで、ガジルもリリーの言わんとしていることが理解できたのか、口を噤む。

「……この村、どうやって生きてる？」

「そうだ……この村……畑がダメになってるのはわかるが、外の果実に一切手を出していない。」

猪に襲われる前ならば別に違和感はなかっただろうが……畑がダメになっているのに、外の果実に手を出さないというのは、少しおかしいのだ。」

村の外に生えている果実。数自体も決して少なくなく、生えている分だけでも村全員を補える程にはその実はなっていた。

毒があるからたべないのか、となるがいくつか虫食いになっていた

り齧られたあとがあるものもあるので、毒の線も薄かった。

「……少し、話を聞いてみた方が良さそうですね、これ。」

「ああ……村長に話を聞きに行くか。」

「村の人達から話は聞かないんですか？」

「余計につついて変な誤解を招きたくないからな……いや、誤解というより村人が暴走して、俺らに襲いかからないとも言えなくなってきたし……それに、村の歴史を一番知っている村長に聞くのが容易いだろう。」

ウエンデイの疑問を軽く説明して解消させて、改めてマルク達は村長の家へと向かう。お世辞にも広い村とは言えないので、村長の家という村で一番大きなものを見逃すこともなかった。

「……お話聞いてくれてありがとうございます。早速ですが……質問をしても宜しいでしょうか？」

「構わんよ。この村に関しての出来事なら……大体は答えられる。ボケて忘れてたりしなければの話じゃがな！はっはっはっ！」

村長の言葉に少しだけ呆れるものの、それどころではないのでさっさと話を進めよう……マルク達はそう頭を切り替えることにした。

「単刀直入に聞かぜ……この村はなんだ。」

「……なんだ、と申しますと？」

「畑がダメになったつてのに、毒がある訳でもないのに村の外の果実に手を出さない。俺達が最初に猪の姿を見たのは村の中……そんなもって遺跡に住処を作っている猪共はどこにもいない。」

俺達の以来は猪共の退治だ。だが、その肝心の猪が……この村の村人って可能性が出てきてる。

それを抜きにしたとしても……少なくとも、ここがただの古びた田舎の村だっただけは通じねえぜ。」

「……ふむ、なるほど。」

ガジルの言葉に、村長は髭を撫でるだけ。否定もしなければ肯定もしない。その様子をマルク達はじっと見据えていた。

「……そうですね。バレてしまったのならしょうがない……」

「やっぱりこの村は……!」

「ええ……貴方達の予想通りと言うべきなのでしょう。しかし……2日、そう……昨日と今日……これだけいれば間違いない……糧になれる!我が養分に!!」

そう言いながら、村長は両手を掲げる。何かをすると睨んだマルクとガジルが先制攻撃で攻撃するが、攻撃したものは先程まで村長が来ていた服だけだった。

「消えた!」

「いや……まだだ!!」

「——その通り。」

再び姿を現す村長。しかし、その体は人間のものとは違い黒い靄のような不定形なものへと変貌していた。

「てめえ……何もんだ!!」

「はて……わしは何じゃったか……この村にいる人間に、恨みを抱いていたことだけしか覚えておらんんだ……しかし、そうだ……思い出した……醜く、ただ突進するだけしか脳がない猪という生物に姿を変えさせて、その肉を食らうことが使命……それが我が使命……」

「ちっ……ありやあ何だ!?魔法か!」

「確かに魔法です!なら俺の魔法で……!」

魔力を込めて長老だったものを殴るマルク。それはすぐに姿を消したが、すぐさま蘇る。

「ふはは……無駄よ、無駄無駄……我が怨念は消え去らん……」

「怨念だと……!」

「ああ……そうだ思い出した……この村は一度滅んだ……馬鹿な国だったか、それともギルドだったか……何かに滅ぼされ、そして住んでいた者達は呪いを受けた。

醜い猪の姿に変えられる呪い……定期的に訪れるそれに、一人また一人と耐えきれずに死を選んだ……残った者は儂だけ……しかし、わしは気づいた……村人にかけられた呪い……それが、村人達の死体によつて土地に根付いた癒されることのない怨念になっていた事を……」

「……畑はダメになつてたんじゃねえ、元々駄目になつてたつてことか。」

「怨念に気づいてからは、わしは死んだ……しかし、肉体は滅べど村の怨念は消えなかった。

山に入る者を無意識的に山へ誘い、そこに入ったものを皆呪いの餌食にしていった……数を増やせたところで、ギルドや国に依頼を出した……馬鹿な者達が、次々と我が村の一人となつていった……」

そして、霧はマルク達に視線を向ける。表情は分からないはずなのに、マルクはその視線には笑みが含まれている様な気がした。

「そして……貴様らにも既に準備は整っているはず……呪いは時間が経つ事に重くなつていく……その呪いを、噛み締める……！」

「くっ!?!」

光り輝き出す霧。それに目がくらんで、その場にいる全員が目を瞑った。無意識的に、それがイノシシに変える呪いなのだという事を全員が感づきながらも、それを止めることが出来ないのであった。

結末

とある田舎の依頼を受けたマルク、ウエンディ、シャルル、リリー、ガジル。

そこまで向かった先に受けた依頼は『猪の討伐』だった。しかし、その村は実はまともな村ではなく、依頼と偽って村に来たものを猪へと変える呪いを持った村だった。

それを知ったマルク達は、自分達を猪へと変えようとする村長を止めようと戦闘を開始するが、どれだけ攻撃を仕掛けても村長には傷一つつけることが出来なかった。

靄のような姿を取った村長は、マルクが魔力をどれだけ吸収してもそのたびに復活するために決定打にかけてしまっていた。

そして、その先頭の折に村長は光を発して――

「……あ、あれ?」

「……何とも、ねえみてえだが……」

「な、なんだったんですか今の……」

「なん……だと……!?何故だ!なぜ猪の姿にならない!その猫2匹は兎も角としても!貴様らは確実に猪の姿になるはずなのに!!」

激昂する村長。理由は分からなかったが、兎も角この地の呪いを受けることはないという事だけを、三人は理解した。

「なら……この村長を相手取る必要もなくなったってことだな!!」

「けどどうするんです!?土地の呪いなんて、俺もさすがに吸収するなんて無理ですよ!」

「簡単な話じゃねえか……この村、ぶっ飛ばすぞ。」

「……はあ!」

ガジルの素っ頓狂な作戦に、村長の事も忘れて驚いた声を上げるマルク。しかし、どうやらガジルは本気のようにだった。

「ふはは……土地の呪いが村全体だけに広がっていると思っっているのか?笑死!この山には数々の魔水晶ラックリマが眠っている!それを中継することによって範囲はかなり広がっている!!

貴様らが猪にならないのはきつとまだ呪いが体に浸透していない

せいだ！もつと！もつと時間をかけさせねばならない！いでよ我が眷属達よ!!」

村長が声を上げると、村中から猪の鳴き声が聞こえてくる。どうやら村長の意思ひとつで村人を猪と人間に切り替えられるようだった。

だが、そんなことよりもマルクは気づいたことがあった。

「……ガジルさん！此処吹っ飛ばすの任せましたよ!!」

「おう！リリー、そいつに翼貸してやれ!!」

「お前が言うのならば、何か策があるのだろう……ならば行くぞ！」

「シャルル！私達も!!」

「ええ!!」

シャルルはウエンディを、リリーはマルクを掴んで村長の家から一気に村の外へと出る。

「ふん……子供二人と猫二匹に何が出来る……」

「へ……知ってるか？世の中にはよオ……普通のやつよりも魔力に敏感な奴だっているんだぜ。」

「……なんだと？」

「やっぱりここか！山の頂上の遺跡!!」

マルク達は、一度訪れていた山の頂上の遺跡に訪れていた。そこに放置してあったラクリマを再び見て、マルクは確信した。

また、魔力が宿っていたのだ。

「多分、壊さないといけないやつだったんだろうな……よつと。」

マルクはラクリマを破壊して、ウエンディに向き直る。まだ、仕事

は終わっていないといわんばかりに。

「ラクリマは元々空っぽだったんだ。それが呪いを帯びた魔力に犯されることよってだんだんと魔力を帯びていった。

そんなでもって、中継地点は多分いくつもあるはず……それをどうにかして見つけて破壊しないといけない。」

「……壊すのはいいんだけど、どうやって見つけるの？村でやったように魔力を広げて探すの？」

「流石に時間が無い今にやることじゃない。けど……ここが魔力の中継地点なら……多分反対側とか、一定距離感覚で置かれてる可能性が高い。」

「なるほど……そこを風潰しに探すわけか……」

「そうだったら、後はガジルさんが村を呪いごとぶっ飛ばして、あとは評議院にでも任せてはい終了……って訳さ。」

ガジルの意思を説明していくマルク。その説明に納得したウエンデイ達はすぐさま他の中継地点がある場所を探し始めるのであった。

「ギヒ……鉄竜の咆哮!!」

「ぬううう！まさか、本気で村を吹き飛ばす気か!？」

「当たり前だろ？それがお前を消す一番手っ取り早い方法なんだからよ。」

で、お前が逃げないように今ほかの中継地点を壊させてるってわけだ。

お前、複数に分かれても戦闘能力が元々皆無なんじゃあ……これを

止める術はねえよなあ！」

魔法によつて村の家屋や猪や地面などを、まとめて吹き飛ばしていくガジル。

彼を止めようと猪達が一心不乱に攻撃をしていくが、彼の鋼鉄の体にはそんな攻撃は一切通用しない。

「所詮は猪！身の丈が俺の倍くれえの奴なら話は変わるだろうけどな！！さあ！いつまで持つかな！！」

「ぐうう！なれば……！」

村長は姿を消す。その瞬間、猪達がガジルから離れる様に散り散りになっていく。

それを見たガジルは、すぐに村長がラクリマのある中継地点に向かうつもりなのだど理解したが、関係なく村を吹き飛ばすためにひたすらにブレスで周りを荒らしていく。

「ギヒッ……逃げたとしても無駄だぜ……もうこれを止められなかった時点でお前は詰んでるんだからよオ……！」

悪役のような笑い声と笑みとともに、ガジルはこの村にあるであろうラクリマを探すのであった。

「マルク！何かくる！」

「どうせ俺たちを止められないと悟った村長の悪足掻き！猪たちは無視してラクリマを破壊していく！！」

「うん！」

イノシシたちの足音と怒号。激しく響き渡るその音に、マルク達は

怯むことがなかった。

しかし、正確なラクリマの個数が今まで彼らはわからなかった。しかし、こうして村長が焦った事で、少しだけその配置がわかるようになるだろうと、マルクは考えていた。

「……にしても、猪達が全員こつちに来てる訳じゃあなさそうだしな！ だったら……」

「手分けができる！ って事!？」

「そういう事！ 猪達がいるところに、それぞれ向かうとしよう！」

「確実性はないが……だが、守るべき場所は一番警備が厳重にせざるを得ないからな……おそらく、その通りだろう……！ なら、三手に別れる方が都合がいいな。」

「じゃありりー！ ウエンデイ！ シャルル！ みんな頼んだ！」

マルクのその掛け声とともにリリィはマルクを離して、ウエンデイとシャルルと共にそれぞれ山を探索し始める。

「……にしても、討伐報酬で金が貰えると思っていたのに……ちくしよー!!」

さけびながら、マルクは猪達を吹き飛ばしながらラクリマを破壊していくのであった。

「ぐう！ ぐううう！」

「いたいた……猪達一匹に乗り移るので精一杯みたいだな。」

「何故だ！ 何故だなぜだなぜだ！」

猪に乗り移った村長が、発狂したかのように荒れ狂う。その様子をマルク達はただ見ていた。

「あんたの境遇は同情されるものだ。確かに、理不尽で不可解で……そこまで恨みを募らせるのもわかる。」

「だがな、それでもあんたのやったことは許されることじゃないんだ。」

「だから消えろと!?呪いをかけられたこの恨み!この怨念!この執着!例え人の世が終わろうとも尽きることが許されないこの呪い!」

「知らねえよ、俺らをためえの都合に巻き込むんじゃない。」

「貴様らの都合なぞ知らぬ!我が恨み!晴らすためには他者を巻き込まねばやってられぬ!」

「そういうのを……八つ当たりというんですよ。可哀想だとは思いますが、けどそれと同時に……貴方もまた、貴方に呪いを与えた人達と同じになってるんですよ。」

「そんなこと、認めぬ、認めぬううう!」

マルク、ガジル、ウエンデイの言葉でさらに発狂する村長。もはや、言葉らしい言葉も届いていないのがはつきりと見て取れた。

「……ま、幽霊だってんならそんなもんだろう。」

「……呪いをかけられた人が死んで、自分と土地の魔力で術式みたいなのを形成していた……ってことでいいんですかね。」

「そうだろうよ、どっちにしても……こいつに負けたアねえって事だな。猪の殆どは俺らが倒した、ラクリマもなくなった……後は自然に消えるだけだが……」

「……一応、倒しておくべきでしょうね。いつ消えるかわからない以上、新しいラクリマを取りに行きかねない。」

マルクが手に魔力を込める。発狂した村長はそのまま突っ込んでいく。声にならない叫びをあげながら、もはや自分が何をしているのかわかっていないのだろうと感じながら、マルクは突っ込んできた村長に拳をぶつける。

「魔龍の鉄拳!」

吹き飛ばされた猪から、何か黒いものが消える。そして、村長の声

はそれっきり聞こえなくなった。

「……はあ、終わりましたね。」

「……で、どうするよこれ。」

「……ま、評議院に連絡を入れて……帰ったらマスターに報告ですかね……」

「……で、結局依頼書そのものは破棄。しかもボロボロだった村を吹き飛ばしたこともあって、事情聴取で絞られて……って事？」

「はい……お金、稼げるかなと思ったのに……」

「ルーシイみたいな事言ってるわね。」

後日、妖精フェアリーテイルの尻尾のギルドにてミラとマルクは例の依頼のことで話し合っていた。

「でも、評議院からお金は貰えたんでしょう？止めてくれたことと教えてくれたことで。」

「……依頼の分には足りませんよ。元々大きく稼ごうと思ってしたことですし……」

「ならそのお金はどうしたの？」

「ウエンデイに上げましたよ……ヘソクリすらも無くなってたんだからせめてもの足しにと思って……」

「優しいのね。」

「危険な目に晒したことへの、自分勝手なお返しですよ……」

悲しい顔になりながら、マルクは項垂れる。そんなマルクを見かね

たのか、ミラが一枚依頼書を取ってきてマルクの目の前に置く。

「なら、こんな仕事なんかどうかしら？」

「へ？えーつと……やる気がある方だけ募集、近くの権力だけで威張り散らしている闇ギルドが集う集会を潰してください。お一人につき30万J』……あれ、これすごい既視感があるんですけど……主ジユエルについて最近猪関係でこんなクエストをやりましたよね俺。」

「ええ、でもお金を稼ぐには自由分でしょう？」

「……じゃあ、他の誰かたちを連れていって、この仕事してきます。」「はい。」

『ああ、これはきつとまたまともな依頼ではないのだろう。猪達の時のようにどうせ闇ギルドが貼った正規ギルドへの嫌がらせのクエストなのだろう。』とマルクは内心でずっと思っていた。

しかし、30万という数字は彼にとつてはととても魅力的な数字だった。

ウエンディとシャルルが誰を誘うか悩んでるマルクに声をかけ、参加を決める。ルーシイがその金額に目を見張って参加を決める。ルーシイが参加するなら、とグレイとナツとエルザにハッピーも参加する。そしてグレイが参加することジユビアも参加する。

「かなり大所帯になりましたねほんと……」

「……家賃が、ね。」

「ルーシイさんつい最近溜まってた家賃払い終えたって話でしたけど。」

「……これからの分を払えたわけじゃないわ。」

「……じゃあ、行きますか。」

「「おー！」」

尚、依頼主の屋敷に行ってみるとまず男女を分けられて男衆に闇ギルドの下っ端が襲いかかってくる。同時に女衆にも下っ端が襲いかかってきていたが、これを一瞬で撃沈させる。

屋敷の主も戦闘に参加しようとするが、瞬殺される。すると諦めが悪い屋敷の主が大量に下っ端を呼んで大乱戦になり、屋敷が倒壊する。

という、『またこの展開か』というオチが待っているのだが……それはまた別の話なのである。

ポーリュシカ

ナツ達が帰還してはや2週間が過ぎていた。その間に、雑誌や新聞にそのことが乗ってフィオーレ中がその情報で溢れていた。

そんな中、ナツ達はロメオからとあるギルドのことを聞かされていた。

「セイバートゥース？」

「剣咬の虎、セイバートゥースさ。それが、天馬やラミアを差し置いて現在フィオーレ最強の魔導士ギルドさ。」

「聞いたことねえな。七年前はそんなに目立ってなかったんだ。」

「って事はこの7年で急成長したのか。」

「ギルドのマスターが変わったのと、ものすごい魔導士が5人加入したのが強くなったきっかけだね。」

たった5人、片手で足りるような人数が加入しただけで変わるようなものなのか？と疑問に持つ者もいれば、それを楽しみに待つ者もいた。

「たった5人でそんなに変わるものなの？」

「俺達が天狼島ごと消えてた時のことの逆が起きてる、といえれば話は簡単でしょうけどね……マスター変更でギルドの方針が変わったのもありそうだ。」

「ほおう、いい度胸じゃねえか。」

「因みに私達のギルドは何番目くらいなんですか？」

「それ聞いちやうの？」

「ウエンデイ、聞くまでもないでしょ……」

「え？」

ウエンデイのその質問で、一部が苦い顔をする。ウエンデイとしては何気ない質問のつもりだったのだが――

「最下位さ。」

「超弱小ギルド。」

「フィオーレ1弱いギルド。」

「ああああ……ごめんなさい……」

その言葉で落ち込むウエンディ。マルクが慰めていると、ナツが楽しそうに笑いながらテーブルに登る。

「カーはっはっはっ！そいつはいいっ!!面白え!!」
「は？」

「だってそうだろう!?上に登る楽しみがあと何回味わえるんだよ!!燃えてきたアー!!」

ナツのその言葉で、グレイは呆れていたが内心は同意していた。そして、周りのみんなもナツの言葉に呆れつつも笑顔で同意していたり、そのまま同意していたり……ともかく、ナツの言葉を否定する者はいなかった。

「ねえ、あんたらギルダーツ見なかった？」

「なんだよ、いつもパパが近くにいな〜と寂しいのか？」

「バカっ!!」

カナがギルダーツの行方を聞くが、それをグレイが茶化す。しかし、父親との話題は今あまり挙げないのが暗黙の了解になっていた。

「あ!悪い……」

「ううん、いいよ気にしなくて。」

ルーシイの父親は、七年の間に死去。その事をついこの間知ったルーシイ。周りもその話題に触れることはしなかったが、今回グレイはつい口を滑らせてしまっていた。

ルーシイ本人は、何とか立ち直ったようで気にしていなかったが。

「ギルダーツならマスター……いや、マカロフさんと呼ぶべきか……」

「マスターでいいんじゃない？」

「マスターと旧妖精フェアリーテイルの尻尾に向かったぞ。」

「じゃ、今の内に仕事行っちゃおうか!」

そう言つて、カナは酒樽を担いでそのまま仕事へと向かう。旧妖精の尻尾、今は山奥の小さな小屋にギルドを移しているが、七年前まで使っていた大きな建物に二人はいると聞いて、少しでもマルクは疑問を感じていた。

「旧妖精の尻尾かあ……」

「マルク？なにか気になることでもあるの？」

「いや……何でわざわざあそこに向かったのかなって。」

「忘れ物でもあったとか？」

「……………うーん、マスターに帰ったら聞いてみようかなあ。」

と、少し考えようとしていた矢先に、突然大声が響き渡る。どうやらナツとマックスが口喧嘩のようなものを広げていたらしい。

「マックス！やるかあ!？」

「だからその手合わせするって今から言ってるじゃねえか……」

「どうしたんですか？」

気になったマルクは、二人の間に入ってわけを聞き始める。

「いやな、上に登る楽しみを味わうためにはまず強くないといけないぞって俺が言ったんだよ。」

「俺達なら余裕でいけるって言い返してやったんだ！」

「だったら今から俺と手合わせするか？って話になって……」

「今この状況と……でも何で急に手合わせを？」

マルクが質問すると、マックスはニヒルに微笑みながら少しキメ顔で伝える。

「簡単だ……七年って歳月がただ俺たちを弱くしただけだと思うなよ……って事だ。」

「それ前から考えてました？」

「バレた？」

「とりあえずマックス外でろやあ!!」

ナツに引つ張られて、マックスも外に出る。ほかの面子は、少し顔を見合わせたあとにそれぞれ二人の後を追うように外に出るのであった。

ありえない可能性ではなかった。しかし、七年前から取り残されていた天狼島帰還組はその可能性を考えられなかった。

七年という月日、それがあまり現実味のない事として認識していたのか、それともただ単純にありえないと自負していたのか。

だが、現実はずべて目の前に起こっていることで完結しているのだ。

「マ、マジ……で?」

「俺らだって7年間何もしてなかった訳じゃねえ。それなりに鍛えてたんだ。」

地面に尻餅をついているナツ、そして立っているマックス。七年前まではありえなかったその光景が、目の前で起きていたのだ。

「ナツさんが……」

「マックスに勝てないの?」

「もう一度だオラア!!うおおおお!!」

激しくラツシュを決めに行くナツ。しかしその全てをマックスは避けていく。掠りもせず、まぐれでもなく。淡々とかわしていく。

その合間に、周囲の砂を使うマックスの魔法が使われる。

サンドリベリオン

「砂の反乱!!」

「うああ!!」

砂の一撃が、ナツを吹き飛ばす。確かにナツはマックスに押され気味ではあったが、ただ負けるだけで終わる気がなかった。

「燃え尽きろお!!」

炎を出して、ナツはマックスの砂を吹き飛ばし返す。その砂達は周囲に散って軽い砂煙が上がっていた。

「うわあ!」

「ちよつとお!!」

「ケホケホ!」

「ナツー!頑張れー!!」

ギャラリーが砂煙に困惑している中、そのナツはそのままの勢いでマックスに向かう。

「火竜の……鉄拳!!」

「砂サンドウォールの防壁!!」

しかし、ナツの攻撃はマックスに封じられてしまう。後一歩足らず……という状況が生まれてしまっていた。

「ぬうう……!!」

「七年前とは違うぜ……!!」

「信じらんねえ!あのマックスが!!」

「ナツを押ししてんのか!」

「ひよつとして俺達もナツに……」

ギャラリーが沸き立つ中、ナツは魔力をどんどん使っていく。そのままの勢いで――

「おおおおおおおおおおおおお!!モード雷炎竜!!」

「っ!」

「まさか!」

「ハデスとの戦いに見せた……!」

雷と炎を纏う雷炎竜。その攻撃力、速さは火と雷が一つになった故に生まれたもの。単純計算で言えば滅竜ドラゴンスレイヤー魔導士二人分の力なのだから、当然その強さは折り紙付きである。

「雷炎竜の――」

「ちよ、なんだよそれ……!!」

「咆哮オオ!!」

口から出されるブレス。ハデス戦の時のような超火力は望めないが、それでも山の地表を少し削りかなり遠くまでそれが続いていた。

「……何処まで山削った?」

「あい……見えないよ。」

「クソオ!あのときほどのパワーは出ねえな!!」

「いつの間に自分のモノにしたの!」

「今。」

「ま、参った……降参だ……あんなの食らったら死ぬって……」

雷炎竜の力を見せつけられ、ナツに降参を申し出るマックス。それを見た他の取り残された組も、ナツに対して七年前と同じような力の差を感じていた。

「次はどいつだ。」

「ヒィー!!」

「やっぱつええ!!」

「バケモンだア!!」

「かーっかつかつっ!」

笑い声をあげた瞬間に倒れるナツ。元々雷炎竜自体が、とてつもなく魔力を消耗する為に、すぐ倒れてしまうようだった。

「やっぱり魔力の消費量がハンパないんだ。」

「ナツ、それ実践じゃ使わない方がいいよ。」

ルーシイとハッピーがナツを労る中、ウエンデイとマルクはマックスに称賛の声を上げていた。

「でもマックスさんも凄いです。」

「確かに……滅茶苦茶強くなりましたもんね。」

「世辞なんかいらねえよ二人とも。」

しかし、ナツと一応は互角にやりあったマックスの力を見て、シャルルが疑問の声をあげる。

「だけど、そのくらい力があつたらオウガに好き勝手やられることもなかったんじゃないの?」

「そうかもしれないねえが……」

「金が絡んでたからなあ。」

「力で解決する訳にもいかんでしょ。」

「マスター達はやっちゃったけどね。」

「……だな。」

トウライトオウガ
黄昏の鬼からの借金……無論、不当な利子やそもそも明確にされていない金の流れなど。

それらとギルドによる損害賠償や暴力などが積み重なった結果、マカロフ、エルザ、ミラの3人でオウガを潰したという話。ギルドとしては未だ残っているが、もはや逆らうこともないだろう。

「しかし、こいつア思ったより深刻な問題だぞ。」

「グレイ！」

「元々バケモンみてーなギルダーツやラクサスはともかく、俺達のはこの時代についていけないえ……」

「確かに……ナツでさえあのマックスに苦戦するんだもんね。」

「あのマックスさんに。」

「さっきのは本当に世辞だったのか!？」

「なんか一気に魔力を上げられる方法ないかなあ……」

「つーわけで。」

「帰れ。」

とある森の中、巨大な木の幹を家としている者がいる。妖精の尻尾の顧問薬剤師のポーリュシカという女性である。

しかし、いざ訪ねてみるとその扉は話を聞く前に閉じられてしまった。

「ポーリュシカさん、なんかいい薬とかないんですか？」

「一気に力が100倍になるのとかー!」

「流石に都合よすぎかあ……」

ルーシイ、ナツ、グレイの3人がそれぞれの反応を示す中、ウエンデイは何かが気になっているような反応をしていた。

「どうしたのウエンデイ?」

「ううん……」

「気分悪かったらおぶってやるからな?」

「うん、ありがとう——」

マルクに礼を告げようとした瞬間、ポーリュシカの閉じた扉が再び開く。

「お!？」

「人間は嫌いなんだよ!!帰れっ!!帰れーっ!!しーっしーっ!!」

出てきたかと思えば箒を振り回して追い返そうとするポーリュシカ。その剣幕に押されて全員が一旦元来た道に戻っていく。

「失礼しましたー!!」

「なんだよあの婆ちゃん!!」

「じーさんの昔の恋人——」

「違うわボケ!!」

追い返される中、ウエンデイはポーリュシカの方に視線を向ける。その様子が、マルクには気になったのであった。

た。心配になったマルクは近づいて慰めようとするが――

「ウエンデイ、大丈夫……ウエンデイ!？」

「ちよ、どうしたの!？」

近づいて確認すれば、ウエンデイは涙を流していた。ポーリユシカが原因だとすぐさま理解したマルクは、殴り飛ばそうと心に決めてしまふ。

「あんのぼっちゃん!ウエンデイを泣かしたなあ!!」

「違うんです…懐かしくて……」

「なつ、かしい……?」

ウエンデイの言葉で、殺気立っていたマルクも少し落ち着く。シャルルやマルク、ウエンデイはポーリユシカと会うのは一応初めてではあるのだ。しかし、ウエンデイは懐かしいと言った。それが疑問となったのだ。

「ウエンデイは会ったことあるの?」

「ううん……今さつき、初めてあったはずなのに……懐かしいの……」

あの人、声が……匂いが、グランデイーネ天 竜と同じなんです……」

ウエンデイから発せられる衝撃の言葉。この自体は一体どういう事なのか……衝撃と、その疑問だけが一同にはあった。

ブランクの埋め立て

「あのばーさんがグランディーネ!？」

「ウエンデイの探してるドラゴン……って事か？」

「ウエンデイ、本当か？」

「分かりません……でも、あの匂い……あの声……私のお母さん、天竜グランディーネと同じなんです。」

七年という合間のブランクを埋めるために、妖精の尻尾フェアリーテイルの顧問薬剤師のポーリユシカに会いに行つたナツ達。結局は追い返されてしまったが、なんとウエンデイが言うにはポーリユシカの声と匂いが、ウエンデイの親であるドラゴンのグランディーネであると話し始めた。

「こいつはちよつと確かめに戻る必要があるな。」

「待てよ……もし本当にグランディーネか化けてるとしても、少しおかしくねえか？」

「そうよ。ナツやウエンデイ……ガジルにマルク。滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーのドラゴンが姿を消したのは七年前……正確には14年前の777年。

ポーリユシカさんはそれよりも前からマスターと知り合いなのよ？

つまり、ドラゴンがいた時代とポーリユシカさんのいた時代が被るのね……これじゃ辻褄が合わないわ。同一人物のはずが無い。」

ルーシイの言葉に少し落ち込むウエンデイ。しかし、それよりも納得の気持ちの方が大きいようだった。

「生まれ変わりとか化けてるって線は無さそうだな。」

「確かに、落ち着いて考えてみればそうなんです。おかしいんです。声や匂いと同じでも口調や雰囲気が全然違う……」

「あんた前に言ってたもんね、グランディーネは人間が好きって。」

「どーしよう、猫は嫌いだったら……」

「グランディーネは優しいドラゴンなんです……」

「優しいドラゴンってのも想像出来ねーな。」

「アクノロギアを見ちゃったからね……」

「イグニールも優しいぞ。」

それぞれが推論を立てていく中、マルクは一人でウエンデイの言っていることを考えていた。何か、覚えがあるような気がしたからだ。「……グランディーネは人間好きで、ポーリュシカさんは人間嫌い……口調や雰囲気も違って、種族も人間とドラゴンって違いもある……けど、声や匂いは同じ……同じなのに、どこかが違う同一人物……？」

「優しくなくて悪かったね。」
突如として現れるポーリュシカ。いきなり声を出したので、グレイとルーシイは驚いていた。

「ポーリュシカさん……」

「びっくりしたあ……」

「……隠しておくこともないね、あんたらだけに話しておくよ。」

ウエンデイと目を合わせるポーリュシカ。その瞳には、人間嫌いは混じっていないように思えた。

「私にあんたの探してるグランディーネじゃない。正真正銘人間だよ。」

「でも人間嫌いって……」

「人間が人間嫌いで文句あるのかい!？」

「いえ……」

ナツを萎縮させてから、ポーリュシカは話を戻す。「あんたの探してるグランディーネじゃない」という言葉が、マルクには妙に気になったが、詮索をしないでおいた。

「悪いけど、ドラゴンの場所は知らない。私とドラゴンとは直接には何の関係もないんだ。」

「じゃあ、あなたは一体……」

「ごことは違うもうひとつの世界、エドラスのことは知ってるね？ア
ンタらもエドラスでの自分に会ったと聞いているよ。」

「エドラスって……」

「まさか……」

「え、何？」

「……やっぱり……」

「この世界の人間から見た言い方をすれば、私はエドラスのグランディーネという事になる。何十年も前にこっちの世界に迷い込んだ。」

この言葉に、マルク以外の全員が驚いた。マルクもマルクで、予想はしていたようだが、やはり信じられない、という表情をしていた。

「あんたは、驚かないんだね。」

「全く違う同一人物……って言うのは早々忘れられるものでもないでしょう。」

「それもそうだね……話を戻すよ。私は、ひよんなことからマカロフに助けられてね。私もすっかりアースランドが気に入っちゃったもんだから、エドラスに帰れる機会は何度かあったんだけど私はここに残ることにした。」

アースランドでドラゴンだった者が、エドラスでは人間。その事実でナツは気になったのかとあることを聞きだす。

「もしかしてイグニールやメタリカーナやイービラーも、向こうじゃ人間なのか!? つーかこっちにいるのか!?」

「知らないよ、会ったこともない……けど、天竜とは話したことがある。」

「え!?!」

「会ったわけじゃない、魔法こなんかで私の心に語りかけてきたんだよ。」

そう言いながら、ポーリユシカは懐を探して、一束にまとめられた書類を取り出してウエンディに渡す。

「あんたら、強くなりた言ってたね。そのウエンディって子だけなら何とかなるかもしれないよ。」

天竜に言われた通りに書きあげた魔法書だ。二つの天空魔法『ミルキーウェイ』『照破・天空穿』てんくうせん

アンタに教えそびれた滅竜奥義だそうだ。」

「グランディーネが私に……」

「会いに来たら渡してほしいとき。その魔法はかなりの高難度だ。無理して体を壊すんじゃないよ。ありがとうございませすポーリユシカ

さん！グランディーンネ！！」

ポーリュシカに対して、頭を下げるウエンディ。そして、グランディーンネにも礼を言う。

誰も気づくことは無かったが、この時のポーリュシカの顔には笑顔が浮かんでいたのであった。

「絶対出るんだー！！出る出る出る出る！！」

「出ねえ出ねえ出ねえ出ねえ！！絶対、認めねえ！！あれにはもう二度と参加しねえ！！」

ギルドに帰ってきたナツ達。しかし、帰ってきた矢先に4代目マスターであるマカオとその息子であるロメオが何やら言い争いをしていた。

「ただいま。」

「お！帰ったのか。いい薬はもらえたのか？」

「ウエンディだけね。」

「えへへ……」

マックスが反応してくれるが、気づいていないのかはたまたそれ以上のことを話し合っているのか、ロメオ達は言い争いを続けていた。「父ちゃんにはもう決める権限ねーだろ！マスターじゃねえんだから！！」

「俺はギルドの一員として言ってるの！！」

「え、4代目辞めたんですか……じゃあ5代目はまた？」

「わしは六代目、5代目はギルダーツじゃ……5代目は一時間も持た

ずに六代目を指定してきよったがの。」

マカロフの言葉で苦笑するマルク。元鞘なので、あまり深く突っ込むことはしなかったが。

「……で、何の騒ぎだ？」

「親子喧嘩にしか見えないわよ？」

「出たくない人！はーい!!」

「はーい!!」

「あれだけはもう勘弁してくれ……」

「生き恥晒すようなものよ……」

マカオが拳手を募ると、残された者達の殆どが手を上げる。アルザックとビスカの子供であるアスカも手を挙げているが、特に意味の無い拳手みたいなものだろう。

「だけど今回は天狼組がいる！ナツ兄やエルザ姉がいるんだぜ！妖精の尻尾が負けるもんか!!」

「けど天狼組には7年のブランクがなあ……」

先程から会話に残されている天狼組。何の話かさっぱり分からないので困惑しきっていた。

「さつきから出るとか出ねえとか何の話だよ!?!ルーシィのお通じじやあるまいし。」

「そんな話皆ですか!!」

「ナツ兄達のいない間にフィオーレを決める祭りができたんだ。」

「おー!」

「そりや面白そうだな。」

「フィオーレ中のギルドが集まって魔力を競い合うんだ。その名も……大魔闘演武!」

ロメオの説明で、驚きや期待などが入り交じる天狼組。フィオーレ一を決める祭りに参加できる、つまりはこれに優勝すれば妖精の尻尾が一番に返り咲く、という事である。

「しかし……お前らの実力で優勝なんざ狙えるかのう……」

「そうだよ!そうなんだよ!!」

「優勝したら3000万^{ジュエル}J 入るんだぜ!」

「出る!!」

「マスター!!」

賞金に釣られて、マカロフも参加を決意する。だが、どうしても残された者達の方は参加をしたくないのか物凄く否定的になっていた。

「無理だよ!天馬やラミア、セイバートウリス剣咬の虎だつて出るんだぞ!」

「因みに、過去の祭りじゃ俺達ずっと最下位だぜ。」

「えばるなよ……」

「そんなの全部蹴散らしてくれるわい……!」

シャドーボクシングをするマカロフ。『多分あなたは戦えませんよ』とマルクは言いたくなかったが、何も突っ込まないことにした。

「燃えてきたぞー!!」

「やかましい!!」

「その大会いつやるんだよ!」

「三ヶ月後だよ。」

「十分だ!それまでに鍛え直して……妖精の尻尾をもう1度ファイオーレ一のギルドにしてやる!!」

ナツの言葉で全員がやる気と勢いを出し始める。無論、それらを出しているのは天狼組だけなのだが。

「マジかよ……」

「本気で出るのか?」

「や、やめといった方が……」

「ナツが考えてるようなバトル祭とはちよつと違うわよ。」

「え?ちがうの!?!」

「地獄さ。」

「出ると決めたからにはとやかく言っても仕方あるまい!目指せ3千……コホン、目指せファイオーレ一!チームフェアリーテイル!大魔闘演武に参戦じゃああ!!」

マカロフの号令と共に、妖精の尻尾は大魔闘演武に参加することに決めたのであった。

大魔闘演武。それは七年に一度ファイオーレ王国で行われるギルド同士での大会。

優勝すれば、その年の最強と賞金が手に入る。しかし、行われるのは何もバトル一辺倒という訳では無い。

例えば徒競走などの戦いを行わない競技も存在する。しかし、共通するのはどの競技においても魔法を使用可能だと言うこと。

但し、どの競技かはその競技が始まる直前まで分からないというもあり、ただ強い魔法を覚えているから……という簡単な理由ではなくに負けてしまう大会でもある。

だが、魔力を持っていても損は無い。寧ろ、多ければ多いほど有利になる可能性が高くなる。

しかし主に参加を表明した天狼組は、空白の7年のブランクが存在している。

そのためには特訓特訓、ひたすら特訓あるのみだった。三ヶ月間の猶予をうまく活かすために――

「海合宿……ですか。全員が水着着て、海で特訓……いいですね、うん。」

「女子達と真反対の方向向いて無ければその言葉を素直に受け入れたんだろうけどな。」

「はしゃいでません。別にウエンデイの水着が可愛いから直視できないとかそんなんじゃないやありません。」

「まあお前には刺激が強すぎるな。色々。」

女子達ははしゃぎ、水着をろくに見ることが無かったマルクは恥ずかしさで視線を逸らし、それを何かを食べながらドロイが少し呆れな

がら見ていた。

「海だアー!!」

「よっしゃあー!!」

ナツとグレイもはしゃいでいた。泳ぎ勝負、砂の城作り勝負、大食い勝負、日焼け勝負。そこまでしてから宿に戻り始めていた。

女子陣の水着を見れているので、初日くらいはと大目に見るドロイトジェット。

しかし流石に初日からこれでは、というのもあり午後からきちんと特訓を始める妖精の尻尾。

「……はあー……ふうー……」

「何してんだ?」

「燃費の悪さの解消……ですかね。相手から魔力を奪えるとはいえ、俺の技はどれも魔力の消費が多いんですよ。

だから……もつと少ない魔力消費でいつも以上の威力を……つて。」

「ふーん……」

特に驚くこともなく、返事を返すジェット。じーつと見つめていたが、しばらくしたらどこかへと去っていく。ちゃんとみんなが修行しているか……という確認のために見回っているのだろうとマルクは思ったが、特に気にすることもなくそのまま修行を続けるのであった。

そのまま、その日は午後から特訓三昧を過ごす一同なのであった。

束の間の三ヶ月

大魔闘演武に参加を決めた妖精の尻尾^{フェアリーテイル}。しかし、主力メンバーとなる天狼組は、7年のブランクが存在していた。

そのブランクを埋めるために、海で合宿をする事にして魔力を開催までの三ヶ月間を特訓に当てる事にしたのであった。

そして、一日目が終了して二日目の特訓が始まって少し経ってから

「うーん！充実してるなアー!!」

「俺達が本気で体を鍛えりや——」

「二日間といえどかなりの魔力が上がりましたね。」

「この調子で三ヶ月間鍛えれば、この時代に追いつくことも夢ではなさそうだ。」

「うんー!」

二日目間の特訓でも、成果を感じ取れている一同。三ヶ月もあれば、追いつくことなら可能というところまで来ていた。

「かーっかつかつかつ!見てろよ!他のギルドの奴ら!妖精の3ヶ月、炎のトレーニングの成果をなアー!!」

「最初はたった三ヶ月?って思ってたけれど効率的に修行すればまだ三ヶ月もあるの?って感じね。」

「確かに……この調子で頑張れば……」

「——姫!大変です!」

突然、ルーシイの足元から現れた人物。メイドの格好が特徴的な、処女宮の星霊バルゴである。

「どこから出てきてんのよー!!」

「お仕置きですね。」

「……そういや、ルーシイが7年間妖精の球の中^{フェアリースフィア}にいたってことは……契約してる星霊もずっと星霊界とやらいったって事になるのか。」

「可哀想!ルーシイのせいで……ルーシイのせいで……」

「いえ、それは大した問題ではないのですが……」

顔を俯かせるバルゴ。その様子にただならぬものを感じ取った一同は、途端に静かになる。

「星霊界が滅亡の危機なのです。皆さん、どうか助けてください。星霊界にて王がお待ちです。皆さんを連れてきてほしいと。」

「おし！任せとけ！友達の頼みとあっちゃあ……」

「待つて！星霊界に人間は入れないはずじゃあ……」

「星霊の服を着用すれば、星霊界にて活動できます。行きます。」

「ちよ、まだ心の準備が——」

途端に地面に展開された魔法陣から、光が溢れてその場にいた一同は星霊界へと送られる……残ったのは、ジェットとドロイ。そしてマルクだけであった。

「なんで俺達だけ……」

「おいてけぼり……？」

「……ん、あれ……？俺も……？」

取り残された3人は、とりあえずその日は帰りを待つことにした。しかし、結局1週間経つても帰ってくる気配はなかった。

1週間ほど経つと……というか、一日経過した頃からマルクの心配が極限にまで昂っていた。

「星霊界……それにみんなはどうなったんだ……」

「それに関してですが。」

1週間ほど経過した頃に、マルク達の後からバルゴが話しかけていた。1週間経つても、まだ星霊界は無事だということはわかって少しだけ安心していた。

「すいません、あれは嘘です。」

「……へ、嘘？」

「実は——」

そこから、本当の事情を話し出すバルゴ。実は星霊界の滅亡というのは嘘であり、本当はルーシイ達を招いてパーティをしているという話だった。

「え、あれ、何で俺達参加してもらってないの？」

「定員オーバーしてました……マルク様は、何故か駄目でした。」

「……まあ、魔法を介するんだったら魔力は俺の分だけ吸い取ってしまつてそのままスルーされたつてのが考えられる理由なんでしょうけど……」

「ですから……安心しておいってください。三ヶ月経てば皆さん戻ってきますので。それでは。」

そう言つてバルゴは星霊界へと戻つていく。事情を説明された3人は、安心して、皆が帰ってくる三ヶ月後……大魔闘演武開催直前まで待つことにしたのであった。

そして、三ヶ月後。星霊界へと赴いた面子は全員帰ってきた。何故か、狐につままれたような顔をしているのが、妙に印象に残つていたが。

「……え？」

「みんなく待ちくたびれたぜ〜」

「大魔闘演武はもう五日後だぜ！すげ〜修行してしたんだろうなあ！！」

「星霊界での特訓なんてレアものでしょうしね！」

ジエット、ドロイ、マルクの期待が星霊界に行った面子の心に刺さる。

「「おわつた……」」

「ヒゲー!!時間返せー!!」

後から聞いた話だと、星霊界の1日は人間界の三ヶ月に匹敵するらしい。

つまり、おあつらえ向きに三ヶ月という特訓期間は、一日で潰れたのであった。

「なんとという事だ……」

「大事な修行期間が……」

「三ヶ月があつという間に過ぎた……」

「どうしよう……」

建物の壁にもたれながら、星霊界にいった面子はとても呆けていた。七年というブランクが空いた直後に、三ヶ月というブランクが空いたも同義なのだから。

「姫、提案があります。私にもっとキツめのお仕置きを。」

「帰れば。」

「大魔闘演武であと五日だつてのに！」

「全然魔力が上がってねーじゃねーか!!」

「こればかりは……最早タイミングが悪かったとしか。」

星霊達の、ルーシイ達の帰還を喜ぶパーティ。それを行ったが故に起きた悲劇。ただただタイミングが悪かったことこの上ないのだ。

「今回は他のみんなに期待するしか無さそうだね……」

「はあ……」

「またリリーとの差が開いちゃうよ……」

「え!？」

「あんた気にしてたの……?」

全員が落ち込む中、エルザがやる気を出して立ち上がっている。こ

のまま『何も出来ませんでした』というのは彼女の琴線に触れたのだろう。

「むうう！今からでも遅くない！五日間で地獄の特訓だ!!お前ら全員覚悟を決めろ！寝る暇はないぞ!!」

「ひええ〜……」

ルーシイが、エルザの鬼気迫るやる気に少し怯えている中で、空から一話の鳩が降りてくる。

「ん？」

「ハト？」

「足になんかついてるぞ。」

「メモだ……」

「なぜ鳩に……」

「何々……?」

『妖精の尻尾へ、西の丘にある壊れた吊り橋まで来い』……と、メモには書いてありましたが……」

「誰もいねーじゃねーか。」

「なんで喧嘩腰何ですか……」

「イタズラかよ……」

「だからやめとこつて言ったじゃない。」

鳩に付けられていたメモ。そのメモに書かれている場所までナツ達はやってきたが、そこには誰もいなかった。ここ以外に指定した場所はなさそうだったので、イタズラかと思った一同は帰ろうとしたが

「あれ、橋が光って……!?!」

「これは……」

「橋が、直った!?!」

「向こう岸に繋がったぞ!!」

壊れていた橋。唐突に治り始めたそれに、一同は警戒を一気に強めた。イタズラから、誰かの罠……ということも考えられたからだ。

「渡ってこいということか……」

「やっぱり罠かもしれないよ?」

「なんか、怖いです……」

「敵なら倒すだけだから、安心してくれ。」

エルザ以外少し怯える女子陣。マルクはウエンデイの手を握って言葉無しで励ましていた。

そして、そのまま一同とともに森の奥へと進んでいく。しばらく歩くと……目の前に、黒いローブを羽織った三人組がいた。

「誰がいる!」

「皆さん気をつけて!」

と、声をかけたところで黒いローブを羽織った3人組は一同に近づく。チラリと見えた顔は、隠す気がなかったようで、その顔に一同は皆一様に驚いていた。

「来てくれてありがとう……妖精の尻尾。」

「ジエラル……」

「変わっていないエルザ……もう、俺が脱獄した話は聞いたか?」

「……ああ。」

「そんなつもりはなかったんだけどな……」

「私とメルデイで牢を破ったの。」

「私は何もしてない、殆どウルティア一人でやったんじゃない。」

三人組、その正体はかつて聖十大魔道だった男ジエラル、元悪魔の心臓グリモアハートの七眷属であるウルティアとメルデイだった。

「メルデイ……」

「ジユビア、久しぶりね。」

メルデイと親しげに話すジュビア、ジェラールと話すエルザ……しかし、その光景を見ても警戒するものはいた。

「ジェラールが脱獄!？」

「こいつらグリモアの……」

「まあ待て、今は敵じゃねえ……そうだろう?」

「ええ……と言ったところで、その坊やは信じてくれないんでしようけど。」

「ま、マルク……」

ウエンディを庇いながら、マルクはメルデイとウルティアを睨みつける。初対面ではあったが、同じ悪魔の心臓であるアズマと戦ったことのあるマルクは、関係なくとも二人を目の敵にしていた。

「…… 그레이さんが、敵じゃないって言うなら……今はそれを信じる。」

「ええ……きつと、貴方は私の……悪魔の心臓が起こした事で怒っているのかしら。けど、今は貴方達と敵対する意思はないわ。」

それに、そんなことを抜きにしても……私の人生で犯してきた罪の数はとてじやないけど一生では償いきれない。

だから、今はせめて私が人生を狂わせてしまった人々を救いたい……そう思ったの。」

「……」

「例えば、ジェラール——」

「いいんだ……俺もお前も闇に取り憑かれていた。過去の話だ。」

「ジェラール……お前、記憶が……」

エルザの問に、少し答えづらそうにしながらも、ジェラールは口を開く。

「……ハッキリしている、何もかもな。六年前……まだ牢にいる時に記憶が戻った。エルザ、本当になんといえればいいのか……」

「楽園の塔でのことは、私に責任がある。ジェラールは私が操っていたの。だから余り責めないであげて。」

「俺は牢で一生を終えるか死刑、それを受け入れていたんだ。ウルティア達が俺を脱獄させるまではな。」

「それって、なにか生きる目的ができた、ってことですか？」

ジェラールのが気になったウエンデイは、ジェラールに問いかける。ジェラールはウエンデイを見て、とあることを思い出したようだった。

「ウエンデイ、そう言えば君が知っているジェラールと俺は……どうやら別人のようだ。」

「あ、はい！そのことはもう解決しました。」

「生きる目的……そんな高尚なものでもないけどな。」

「私達はギルドを作ったの。正規でもない、闇ギルドでもない独立ギルドクリムソルシエール魔女の罪。」

ウルティアが、自分達のことを『独立ギルド』と言ったことに対して一同が疑問を寄せる。

「独立ギルド？」

「どういう事？」

「連盟に加入してない？」

レビイ、ハッピー、シャルルが疑問を寄せる中、一同の中で唯一天狼組ではないジェットとドロイが知っていたのか、声を上げる。

「魔女の罪？聞いたことあるぞ。」

「ここ数年で数々の闇ギルドを壊滅させてるギルドがあるとか。」

「なるほど……闇ギルドを壊滅させてはいるけど、正規でもない……だから独立ギルド。」

「私達の目的はただ一つ。」

「ゼレフ……闇ギルド、この世すべての暗黒を払うために結成したギルドだ。二度と俺達のような闇に取り憑かれた魔導士を生まないために。」

ジェラールが言い放った、魔女の罪の目的。その目的に感服する者もいる。事実、正規ではなし得ないことでもあるからだ。

「評議会で正規ギルドに認めてもらえばいいのに。」

「脱獄犯だぞ？」

「私達元悪魔の心臓だし……」

「それに、正規ギルドでは表向きには闇ギルド相手とはいえ、ギルド間

抗争禁止条約がある。俺達のギルドの形はこれでいいんだ。」

ここまで話してから、本題に入ろうとウルティアが一步前に出て、話し始める。

「……で、貴方達を呼んだのは別に自己紹介の為じゃないのよ。大魔闘演武に出場するんだってね。」

「お、おう。」

「会場に私達は近づけない。だから、貴方達に一つ頼みたいことがあるの。」

「誰かのサインが欲しいのか？」

「それは遠慮しておくわ。」

「毎年、開催中に妙な魔力を感じるんだ。の正体を突き止めて欲しい。」

ジェラルルが言ったことに、皆は首を傾げる。その曖昧さもそうだったが、『妙な魔力』と言うのも気になるからだ。

「なんじゃそりゃ？」

「フィオーレ中のギルドが集まるんでしょ？怪しい魔力の一つや二つ……」

「俺達も初めはそう思っていた。しかし、その魔力は邪悪でゼレフに似た何かなんだ。それはゼレフに近づきすぎた俺達だから感知できたのかもしれない。」

「ゼレフ……」

ゼレフという単語に、複雑な思いを寄せるナツ。天狼島で出会っていたというのをマルクはあとから聞いていたため、心中は察していた。

「雲を掴むような話だが、請け合おう。」

「助かるわ。」

「妙な魔力の元にフィオーレ中のギルドがし集結するとあつては、私達も不安だしな。」

「報酬は前払いよ。」

「食費！」

「家賃！」

「いいえお金じゃないの。私の進化した時のアークが、貴方達的能力を底上げするわ。」

「え?」

ウルティアの言ったことがイマイチ理解出来なかったナツ達。ウルティアはそのまま説明を続ける。

「パワーアップ……と言えば聞こえはいいけど、実際はそうじゃない。魔導士にはその人の魔力の限界値を決める器のようなものがあるの。例え、その器が空っぽになってしまっても大気中のエーテルナノを体が自動的に摂取して、しばらくすればまた器の中は元通りになる。」

ただ……最近の研究で魔導士の持つその器には、普段使われてない部分があることが判明した。誰にでもある潜在能力、セカンドオリジン第二魔法源。

時のアークがその器を成長させ、第二魔法源を使える状態にする。つまり、今まで以上に活動時間を増やし、強大な魔力を使えるようになる。」

「おおーっ!!」

「……全然意味わかんねえけど。」

「ただし……想像を絶する激痛と戦うことになるわよ。」

「ああああ……」

「目が怖い……」

「構わねえ! ありがとう! ありがとう!! どうしよう!?! 段々本物の女に見えてきた!」

「だから女だって。」

「まだ引きずてやがったか。」

皆が強くなれると喜びに歓喜する中、ただ一人エルザだけはそれに混ざらずにジェラルルを見ていた。

強くなれる以上に、なにか大切なことがあると言わんばかりに。

大魔闘演武編 第二魔法源

「か、は……！がつ！ああ……！」

ナツの体に書き込まれた魔法陣。それがナツの体に恐ろしい激痛を与え、苦しませていた。

そして、ルーシー達はその状況を見守るしかなかった。

「ぎいいいいいい！」

「服……脱がなきゃ、魔法陣描けねーのかなあ……」

「あんたはそれ、心配しなくていいんじゃない……？」

「ぎゃああああ!!」

痛みで叫びながら、悶苦しみ続けるナツ。しかし、どうしてもそれはナツ達にとって必要なことであつたからだ。

「頑張つて。潜在能力を引き出すことは簡単じゃないのよ。」

誰にでもある潜在能力、第二魔法源^{セカンドオリジン}。7年という月日で天狼島に行かなかつた者達と差をつけられ、3ヶ月という期間で星霊界に行つてない者達との差をつけられた。

それを埋めるために、ナツ達は自分達を呼び出したウルティアの魔法、時のアークにより第二魔法源を無理矢理引き出そうと考えていたのだ。

「うがああああああ!!」

「ちよつと……あれ大丈夫なの？」

「どんだけの痛みなんだよ……」

「感覚連結^{リンク}してみる？」

「ふざけんな!!」

ナツの絶叫で不安がる一同。これを行う前にウルティアが『想像を絶する激痛』と言つていたが、それが真実だということを改めて思い知らされていた。

「私達も……あれ、やるの？」

「泣きそうです……」

「お、俺らには関係ねえし帰ろうかな……」

そして、サラツとジエツトとドロイはその場から去っていく。しかし、それを気にしてる余裕は一同にはすでになかった。

「そう言えばエルザは？」

「ジエラールと二人でどこか行つたよ。」

「いつの間に……」

「そーゆー事ならジユビア達も二人で！」

「どーゆー事だよ。」

二人のやりとりに苦笑しながらも、マルクは不安がるウエンデイの肩を抱いて安心させていた。

一応マルク自身も、魔法陣を体を書いて痛みを共有するつもりなのだが、体質的な問題で無理なのは、と不安もあった。

「……さて、そろそろ残りのメンバーにもこれ書いていきましようか。」

「ひいー！」

「うう……不安だなあ……」

『まずは女性陣から』とウルティアはナツ以外の男性陣に反対方向に向いて貰って、女性陣に体に魔方陣を描いていく。

その後から男性陣の体にも描いていく……のだが――

「……はあ、やつぱり。」

「体質的な問題ね。貴方の体は魔力を送り込んだら無意識で吸い取ってしまうみたい。」

そうなつたらそれはもうただの落書きね。起動そのものができないんだから。」

「一応特訓はしたけれど……俺は第二魔法源無しでやらないと、かあ……」

マルクがため息をついている中、流星に全員が苦しんでいると目立つ、ということと近くの人気のないコテージに移動してから、魔法陣を起動させたのだが、案の定全員が苦しみ悶えていた。

「……」

痛みも共有できないとなると、最早手を握るなどしてウエンデイを

安心させたいと思っていたマルクだったが、触れたら痛みが悪化するだけだとウルティアに言われて、見守るしかなくなった。

「……あ、エルザさん。おかえりなさい。」

「あ、ああただいま。」

「戻ってきたわね。それじゃあエルザにも書くわよ。」

そう言って、ササツと魔法陣を描いてウルティアは起動させる……だが。

「……ふむ、お陰様でみんな動けそうにない。」

「……なんであんたは平気なの？」

エルザは、起動したあとにコテージの中を覗いてからウルティアに礼を言えるほどに余裕を保っていた。痩せ我慢すらも見えなかった。

それを見て、ウルティアも逆に不安になっていた。ちゃんと起動しているのか、と。

「……ギルドの性質上、1箇所に長居はできない。俺たちはもう行くよ。」

「大魔闘演武の謎の魔力の件、何かわかったらハトで報告して。」

「了解した。」

エルザが快く了承した事で、メルディやウルティアが本音を零す。

「競技の方も陰ながら応援してるから、頑張つてちょうだい。」

「本当は観に行きたいんだけどね。」

「変装していく？」

「やめておけ。」

ジェラール達はフードを被り直してエルザから離れていく。何故かメルディだけがフードをかぶり直さずにそのままだったが。

「それじゃあ、また会おうエルザ。」

「バイバーイ！」

「みんなに宜しくね。グレイのことも……お願いね。」

そう言って、三人の姿は離れて行って段々と遠くなり、最終的に姿が見えなくなる。

見えなくなつてから、エルザは苦笑しながら溜息をつく。マルクは何かあったのだろうかと思ひ声をかけようとしたが、どことなく嬉し

そんなエルザの表情を見て声をかけない方がいいと判断してそのまま黙っておくことにした……のだが――

「見て見てエルザー」

どこにいたのか、ハッピーが杖で地面に落書きを描いていく。ハートマークがひび割れたかのような絵を描いて、ハッピーは笑いをこらえながらそれをエルザに見せていた。

当然、ハッピーはエルザに天高く蹴り挙げられてしまったのであった。

それから五日後。フィオーレ王国首都、花咲く都みやこクロツカス。街の中央にはフィオーレ王の居城である華灯宮メルクリアスがあるこの街は今や年に一度開催される魔導士達の祭り、大魔闘演武を楽しむにする観光客や、大魔闘演武に参加する魔導士で溢れていた。

会場であるドムス・フラウは、この街の西の山に存在している。そして、この街の中でナツ達は、伸びていた。

「お、おい……まだ調子悪いぞ……本当に大丈夫だったのかあの魔法……」

「でも魔力は上がってる気がするし……まだ少し体の節々が痛むけど……」

「全く情けないぞお前達。」

「なんでエルザは平気なの……」

「きつと元から第二魔法源があつたんだよ。」

「それは納得できる……」

第二魔法源を無理矢理開花させた、時のアーク。しかしその過程は想像を絶する激痛としばらくの間戦うことであったため、未だエルザとマルクを除く全員がその場で倒れていた。

「それにしてもこんなでけー街始めてきたな。」

「あい。」

「私もです。」

「マグノリアも相当大きいと思ってたんですけどね……この街はもつとでかいなんて……」

「エドラスの城下町よりも大きいわね。」

クロツカスの街の大きさ、そしてその人の多さに全員が舌を巻いていた。大魔闘演武の時であっても、下手をすれば会場までの道で迷いそうな程に大きな街であった。

「やっときたかお前達。」

「マスター」

「参加の手続きは済ませてきたぞ。かはははっ！妖精の尻尾フエアリーテイルの力、見せてくれるわい。」

アスカを肩車しながら、ご機嫌に笑うマカロフ。しかし、妖精の尻尾の名前を聞いて、周りの一部が反応をする。

「おい！妖精の尻尾だって。」

「あいつらが？」

「万年最下位の弱小ギルド。」

「ぶくく……！」

「誰だ今笑ったの!!」

「よせ……」

『弱小ギルド妖精の尻尾』というのが既に浸透してしまっているこの状況、一部の者達は妖精の尻尾の名前を聞いて過去の最強の名よりもそちらを思い出す人がやはり多かったようだ。

「どーせ今年も最下位だろー?」

「優勝は剣咬セイバートゥースの虎で決まりさー」

「ぬうう……！」

嘲笑される声に憤りを覚えるナツ。しかし、他のメンバーはその煽りに乗るようなことはしなかった。

「笑いたいやつには笑わせておけ。」

「じゃ遠慮なく。」

「ぶくく。」

「俺らを見て笑うなよ!!」

「最下位って何?」

「アスカちゃん、今の言葉忘れなさい。」

「?うん!」

ハッピーはジェットとドロイを笑い、マルクは最下位という言葉に対して疑問を抱いたアスカに飴玉を与えて大人しく忘れさせている中で、マカロフは片腕をあげ、天を指さす。

「よいか?三千万円ジュ……コホン、ファイオーレーのギルドを目指すため全力を出すんじゃない。このままではワシらの命を救ってくれた初代に顔向けできん!」

マカロフの言葉で、やる気を出す一同。合宿から戻った後、妖精の尻尾はナツ、グレイ、エルザ、ルーシィとウエンディの5人を大魔闘演武に出場させることに決めた。

ラクサスやガジルの方がいいとルーシィたちは言ったが、未だ帰ってきていないものを当てにするわけには行かないということであった。

それでも、ウエンディやルーシィよりはマルクの方が本人の戦闘能力的には高めなので、マカロフは選びたかった節もあったのだが、その時マルクは姿を消していた。

「さて……競技は明日からだ、いかんせん内容がわからんいう。」

「競技は毎年変わるんだよ。」

「私達が出なかった年に射的があったりとかね。」

「俺の出なかった年に競走だぜ?」

「いくつかの競技の総得点で優勝が決まるんだけどよ。」

「私も一応過去の記録を読んだんだけど、競技に一貫性がないのよね。」

レビイや、残された組から言われた事。競技の一貫性のなさや、ジェラルド達に言われていた謎の魔力。

それらがどこか繋がりがそうで繋がらない、そんな奇妙な感覚を覚えていた。

「エルザ、明日までに公式ルールブックを読んでおけい。」

「こ、これを読めど？」

マカロフから渡された分厚いルールブック。どう考えても夜通ししても時間が足りなくなりそうなその分厚さに、エルザは圧倒されていた。

「任せて！風詠みの眼鏡持つてるから！」

だが、エルザの手助けとしてレビイが風詠みの眼鏡を取り出す。要約すればこの眼鏡は、流し読みでも本の内容を把握することが出来るという優れたものである。読み終わったあとに、レビイはルールを掻い摘んで説明していく。

「大事なことは3つかな？まずは各ギルドのマスターは参加出来ないこと。」

「ま、そうじゃろうな。」

「マスターが参加できたら、それだけでいいですもんね。」

「ギルドの紋章を付けてないものを客人として参加させないこと。」

「ま、それも当然だな。」

「ギルドの意味無くなりますもんね。」

「各競技は競技開始直前まで秘匿とし、各競技のルールもそこで説明される。」

「要するに運が悪かったら、選手と競技の相性が悪かった場合不利になつて……逆の場合は有利になると。」

レビイの説明で各々が納得していく……が、見落としがあつたのか最後の方にあつたものを見てレビイが声を上げる。

「あ！最後に注意書きがある。『参加者は指定された宿に12時まで帰ること』」

「12時？いつの？」

「今日の夜中つてことですよ。」

「ガラスの靴を履いたお姫様みてーだな。」

「まだたつぷり時間があるじゃねえか!!折角こんなにでけー街に来たんだ!探検するぞー!!」

「あいさー!!」

まだ時間があるとわかったナツ、ルーシイ、ハッピーは街の様子を見るために街の中を走り出す。

「おい!やどのぼしよはわかってるのか!」

「ハニーボーンでしょ!」

「必ず12時まで帰ってこい、いいな!」

「あい!」

ナツ達の姿が見えなくなってから、マルク達もそれぞれグループにわかれるなり一人になるなりして行動を取り始める。

ウエンデイ、マルク、シャルルの3人もまた、クロツカスの街を観光しようと歩き始めていた。

「見て!二人とも!」

「凄い!」

「華灯宮メルクリアスって言うんだって!」

「王様が住んでるだけあってやっぱりでかいな……」

「王様ってどんな人なのかしらね。」

「おヒゲじゃないかなあ……」

「おヒゲかもね。」

「ヒゲ何だろうなあ……」

メルクリアスまで観光に来たマルク、ウエンデイ、シャルル。その大きさに圧倒され、そして住んでいる王がどんな人物なのかを想像しながらメルクリアスを後にしようとする。

しかし、そんな三人を見ている謎の小さな影がひとつ……

「キヒヒ……」

手のひらほどのサイズしかなさそうなそれは、ウエンデイに奇異の目を向ける。その瞳の内側に隠されたものは一体なんなのか、誰も知る由はなかった。

不意打ち

「……………っ!? ウエンディ下がれ!!」

「え……………きやつ!?」

マルクに押し飛ばされるウエンディ、地面に倒れ込むが倒れ込む瞬間に見えた小さな黒い影が、マルクに襲いかかっているのが見えた。

「な……………魔力、が……………!?!」

「マルク!? マルク!!」

黒い影とぶつかって意識を失うマルク。マルクの顔色が倒れる直前と比べて明らかに悪くなっている。原因は明確だった。

突然襲いかかってきた黒い小さな生物。あれに触れただけで終わりなのだと、ウエンディは感じ取っていた。

「シャルル! ギルドの皆を——」

マルクを放つてはおけない、しかし助けを呼ばないことにはどうにもならない。

ウエンディはシャルルに咄嗟に頼み込んで、ギルドの方に飛んでもらおうとしていたが——

「——え?」

目の前には既に謎の生物が、そして視界の端には倒れるシャルルが。予想以上の速さと機動力。マルクの魔力を吸ったその直後には既にシャルルの魔力も吸っていたのだ。

「そん、な——」

そして、ウエンディもその場で意識を失った。あの生物は一体何なのか、それを考える時間すらもウエンディには用意されてなかったのであった。

「……う……」

「起きたかい。」

マルクが目を覚ますと、そこは見慣れない部屋だった。そばにはベットがもう1つ。ウエンディが寝ていた。

そして、ベットの間にはポーリユシカが椅子に座ってマルクを見ていた。

「……ここは？」

「大魔闘演武……会場の医務室さ。」

そう聞いてマルクは勢いよく起き上がる。大魔闘演武の医務室という事は、つまり会場が既に使える状態にあるということである。

「だ、大魔闘演武は!？」

「落ち着きな……一日目が終わったところだよ。と言っても……妖精フェアリーテイルの尻尾は二チームとも最下位とその1つ上と言うだけだね。」

「妖精の尻尾が……2つ?！」

「……魔水晶ラクリマに残された映像があるから、それを見せるよ。そのほかにも答えられる範囲でなら答えてやる。」

映像を見てマルクは全てを知った。ラクサス、ミラジェーン、ミストガンに扮したジェラルル、ガジルにジユビア。それらのメンバーが

Bチームとして参加していること。

そして、マカロフの息子であるイワンが作り上げた闇ギルド、レイヴンテイル大鴉の尻尾が正規ギルドとして参加していたことと、そのメンバーのひとりがウエンディ達の魔力を吸ったこと。

そして、グレイやルーシイに恥をかかせたこと。場外からの参加は本来認められていない。しかし、目を掻い潜って試合の中でその妨害を実行していたこと。

「……今から、参加って出来ますか？」

「……リザーブ枠というのがあるね。前までは1つだったらしいが……今回は2つ。」

AチームとBチーム、どっちかに着くかはあんた自身で考えな。」

「……ルールとか、今から把握しておきます。」

大魔闘演武、プログラム表。

一日に競技パートとバトルパートの二つがある。競技パートは、チーム内からチーム自体が1人を選んで参加し、競技を発表し、競技を行って1位〜8位までの順位をつけて、その順位によってポイントが割り当てられる。

バトルパートは主催者側がチーム内から自由に選び、選手を決める。A〜Hまでの八チームがそれぞれ2チーム1組、例えばAとBの対戦、CとDの対戦、EとFの対戦、GとHの対戦といった風に1日に四戦行い、勝てば10ポイント、負ければ0ポイント、引き分けの場合は両方に5ポイントずつ割り振られるというものである。

「……そうそう、二日目から競技パートの前にエキシビジョンマッチが行われることになったらしいよ。競技パートのように各チームから選手が自由に選べて、バトルパートのようにランダムで対戦が組まれるらしいね。」

「……つまり？」

「あんたの運が良ければ、あんたの魔力の大半を持っていったやつと戦うことが出来るってわけさ。ま、本当に運が良かったらだけだね。」

「大鴉の尻尾……！」

ウエンディに視線を向け、マルクは拳を握る。側においてあった服

を持って医務室から出ようとする。

「あんた、もう回復したのかい？」

「あいにく、魔力切れを起こしていてもすぐに回復できる体なんですよ。他の人と比べてね。」

「……あんたは、ほぼまる一日寝ていた。それは魔力を補充させていたからかい？」

「多分、そうじゃないですかね……ウエンデイをお願いします。それと……ありがとうございます。」

そして、マルクはポーリユシカに礼を言った後に、部屋を出るのであった。

大魔闘演武二日目。

エキシビジョンマッチに出たのは青い天馬《ブルーペガサス》のイヴと蛇姫の鱗《ラミアスケイル》のトビー。トビーの爪は一度でも当たれば大抵の者ならばピンチに陥ってしまうのだが、如何せん爪なので当てづらいという欠点がある。

「というか20超えて弟キャラってなんだよ!!」

「そこにキレられるとは思わなかったよ……僕もちよつとそろそろどうかな、とは思ってるけどね。」

そして、イヴの魔法は雪の魔法。その魔法で、初日はかなりの大金星を上げかけていた。

だが、そもそもの魔法の相性が悪かったのか……

「アオオーン……」

「ふう、危なかった。」

1度目のエキシビジョンマッチはイヴの勝利。得点は入らないが、イヴに対しての黄色い声援は入っていた。

そして本番の競技パート『チャリオット戦車』

「この競技は連結された戦車の上から落ちないようにゴールを目指すというものです。」

実況、チャパティ・ローラのルール説明の元、競技が始まる。解説には元評議院ヤジマ、日替わりゲストに週間ソーサラー記者のジエイソンが入った実況席は戦車の映像を見る。

「ただス、普通のレースじゃないんだよなあ……」

「COOL! COOL!! COOL!!!」

「足元の戦車は常に動いているため、一瞬の気の緩みがミスへと繋がります。クロツカスの観光名所を巡り、ゴールであるここ、ドムス・フラウに一番に到着するのはどのチームか!?

会場の皆さんには魔水晶映像ラクリマレジョンにてレースの様子をお届けします。」

「COOL!!」

しかし、妖精の尻尾のメンバーたちはその光景を見て啞然としていた。観客席も似たようなことになってるが、実況席はそのまま実況を続ける。

「それにしてもヤジマさん、こんな展開誰が予想できたでしょうか?」

「うーむ……」

その反応も、選手席にはいない妖精の尻尾達が同様の反応を示していた。

「……ナツさんの事だし、予想しなかったってことじゃないと思うけど——」

「なんと!先頭より遙か後方、妖精の尻尾Aナツがグロツキー状態です!それだけではありません。そのすぐ近くで妖精の尻尾Bガジルと剣咬セイバートゥースの虎ステイングまでがグロツキー!」

「——あの二人に対抗したかったのかそうでないのか、どっちにしろこういう結果になるのはわかってたと思うんですけどね……」

乗り物に弱いナツ。その近くでガジルとステイングがナツと同じ

ように、乗り物酔いを起こしていた。

「どうなってる？ 何でガジルが……」

「ナツのキャラ取らないでよね……」

「セイバーの人まで……」

「……滅竜魔導士だから、とか……？」

「え、じゃあマルクも？」

「……そう言えば、修行の帰りの時気分が悪かったような気がします。」

「さあ、先頭集団の方を見てみましょう。こちらは激しいデッドヒートが繰り広げられています！」

映像が打って代わり、先頭集団の残りの五人の方に代わる。

先頭から順に、大鴉の尻尾からは服も髪も目も真っ黒で、文字通り名で体を表しているクロヘビ。

— 青い天馬からは旧知の仲である一夜。

— 蛇姫の鱗からは波動使いのユウカ。

人魚の踵からはぽつちやり系のリズリー。

四つ首の番犬からは酔いの鷹こと酔・劈掛掌のバツカス。

それと加えて先程の3人で合わせて8人である。

「波動……あの中だと魔法が打ち消されるってグレイさん達から聞きました。」

「先頭パートでぶつかる場合、波動に気をつけなければいけないということか。」

マルクとリリーがその場で解説する中、一気に先頭集団に動き始める。

「出たー！ リズリーの重力変化！ 波動をかわして戦車の側面を走るー！！」

ユウカの波動ブースト。戦車のルール上、一応は競走なので自身の速度を上げられるこの技はとても相性がいいと言える。

だが、その波動をかわすために、リズリーは自身の魔法である『重力変化』を使って戦車の側面を走る。あくまでも戦車の上部表面しか、波動は広げられてないのでかき消されることもないということ

だ。

「重力変化か……そう言えば悪魔の心臓グリモアハートにも同じような魔法を使うやつが……」

「ブルーノート……だったっけ？ギルダーツさんが倒したっていう、あの。」

悪魔の心臓の1人ブルーノート、ナツ達を苦しめた相手だとマルクは聞いていた。そのブルーノートと似たような魔法を使うリズリーを見て、少しだけリリーは考え込んでいた。

「——俊足の香りバルファム！零距离吸引!!」

「うわあ……」

魔法をかき消されなかったためには、それ相応の対策が必要……そんなことはマルクも分かっていた。だが、一夜のお世辞にも整っているとはいづらい顔で、瓶を2つ鼻の穴に入れて魔法によるバフをかけるのは、言いようのない嫌な気持ちになっていた。

「ほおう……頑張ってるなあ……魂が震えてくらア……俺も少しだけ、頑張っちゃおうかなあ……よいしょオオオオオオオオ!!」

映像ラクリマから聞こえてくるバツカスの声。その直後に轟音が響き渡る。バツカスがやったことは、足を振り上げて勢いよく振り下ろしただけ。だが、その動作だけで——

「こ、これは!!バツカスのパワーで戦車が!!崩壊!!」

会場にいる者達は、全員がバツカスのパワーに驚いていた。蹴りでもなんでもない、四股踏みのようなその一撃だけで大きな戦車が破壊されたのだから。

「おっ先いー!!落ちたら負けだぜ!!」

「あんなパワー……しかも、あれだけのパワーを持っていて、技術と器用さが必要な戦闘技術も持っている……」

「ガジルの鋼鉄の鱗と言えど……あの一撃はかなり堪えるかもしれない……」

リザーブ枠として出るかもしれないと考えてるマルク。しかし、魔力だけを食らうマルクとは勿論、相性の悪い相手なことは、確実にあった。

「わはははははは!!震えてくらア!!」

そして、そのまま勢いよく走り抜けてバツカスはクロヘビを追い越して一位を獲得。

「そのまま一着でゴール!四つ首の番犬10P獲得!続いて2着!大鴉の尻尾クロヘビ!三着リズリー!四着ユウカ!五着一夜!」

「さて、残るは……」

「滅竜魔導士達か……」

映像はまたうつてかわり未だゴールをしていない……滅竜魔導士達にシフトする。

「残るは情けない最下位争いの3人ですが……」

映し出された映像からは、仲良く三人全員乗り物酔いを起こしている滅竜魔導士達がいた。

魔法は使えない、ずっと乗り物酔いを起こしている……それが面白いのか、それを見て観客達は笑っていた。

「うおおおお……!前へ、進む……!」

「カッコ悪い……力も出せねえのにマジになっちゃってさ……」

「進むううう……!!」

何がなんでも進もうとするナツとガジル。そんな様子を見てステイングは呆れの眼差しを向けていた。

「……一っだけ聞かせてくんねーかな。何で大会に参加したの?あんたら……昔の妖精の尻尾からは想像できねーんだわ。ギルドの強さとか、世間体的な物気にするとか……」

俺の知ってる妖精の尻尾はさ、もっとうこう……マイペースっつか、他からどう思われようがきにしねーっか……」

「——仲間の為だ。7年も……ずっと、俺たちを待っていた……どんなに苦しくても、悲しくても……バカにされても耐えて耐えて……ギルドを守ってきた……仲間の為に、俺達は見せてやるんだ。」

妖精の尻尾の生きた証を!だから前に進むんだ!!」

ナツから絞り出される言葉。その言葉に、観客席にいる妖精の尻尾のメンバー達のほとんどは、涙していた。

マルクとリリーは泣きこそはしなかったが、その言葉に嬉しさを感

じていた。そして――

「ゴール!!妖精の尻尾Aナツ!6位!2P!妖精の尻尾Bガジル!7位!1P!剣咬の虎ステイングは、リタイアにより0Pです!」

一般の観客席から沸き起こる拍手、ナツとガジルに向けられたその拍手にマカロフは涙し……その隣にいた初代も嬉しそうな顔を浮かべていた。

「そう言えば初代いつから……」

「昨日からだな。暇だから天狼島を抜け出てきたと。」

「初代……」

競技が終わったあとに出される疑問。マルクはリリーの言った答えに、初代に対して苦笑いを浮かべていたのであった。

二日目バトルパート

大魔闘演武二日目、競技パートが終わった大魔闘演武の医務室には、ナツとウエンデイが横になっていた。

「ナツ……大丈夫ですか？」

「何の心配もいらないよ、ただの乗り物酔いじゃないか。」

「あの、ウエンデイは……」

「もうだいぶ回復してきたよ。」

「シャルルはもう回復したのか？」

「ええ。」

そして、ナツとウエンデイの様子を見にルーシイとマルクがいた。乗り物酔いで済んでいると聞いて、安心するルーシイ。そして、回復してきたと言われて安心するマルク。

「みんな待ってるから、あたし行くね？」

「はい、二人の様子は俺が見ておきます。」

「お願い！」

そして、もうすぐ試合開始のためにルーシイは医務室から出ていく。しかし、ルーシイが出ていったあとのシャルルの何か不安があるような顔を見て、少し席を立つ。

「飲み物、なにか貰ってきますね。二人は何か注文ある？」

「頼むよ、私は水で構わないけどね。」

「私は……あつたら紅茶でいいわ。」

「温かいの貰ってくるよ。」

「……ええ、ありがとう。」

そう言ってマルクは部屋から出ていく。大魔闘演武観戦の為の、売り子のところにも行ってもらうてこようと思い、そっちの方面に歩き出したのであった。

「さて、冷める前に……ん？」

医務室の前まで戻ってきて、違和感を感じるマルク。気になって部屋の扉を無理やり開く。

そこには、寝ているナツ以外誰もいなかった。

「……何だこの匂い。知らない人の……！」

貰ってきた飲み物を乱雑において、マルクはすぐさま部屋を出る。その直後にナツが目覚めます。

そして、マルクと同じように嗅いだ記憶のない人物の匂いがあることに気づく。

「マルク！」

「ナツさん!?寝てなくていいんですか!？」

「問題ねえ!それより誰の匂いだ!」

「分かりません!けど、ウエンデイやポーリユシカさん、シャルルの匂いまで一緒に外で臭うつてのは……！」

「誰かが連れ去った……！」

知らない人物の匂い、そしてそれと同じような道筋をたどってるウエンデイたちの匂い。

特に、ウエンデイは未だ寝ているはずなので、外に無理やり連れ出された可能性がある。

「っ!!いました!」

「お前らウエンデイ達をどこに連れていくつもりだ!!」

目の前にいる4人の謎の男。起きていたはずのポーリユシカやシャルルまで寝ているのに運んでいるということは、一度眠らせた可能性があるということだ。

「うわー!!滅茶苦茶速えっ!!」

「あのピンク髪、さつき競技でトロトロ走ってたやつじゃねえのか

よオ……」

「マルク！」

「はい!!」

並行しながら、少しだけ間を空けて走り始める二人。男の内の一人が、振り向いて拳銃を構える。

「俺に任せろ！魔導士相手にはコイツが一番——」

「どけっ!!」

通りすがりざまに、殴り付けるナツ。それと同時に、マルクは足に魔力を貯めて一気に放出して軽く空を飛ぶ。

「逃がさねえぞ!!ウエンデイを離しやがれ!!」

「げっ!?コイツ飛ぶのかよ!?!」

「ど、どうするよ!」

「仕方ねえ!二人捨ててその間に逃げる!!依頼は『医務室にいた少女』だ!」

男の一人が口走ったことに反応するマルクとナツ。反応した瞬間にマルクはウエンデイを担いでいる男を殴り飛ばしていた。

「よっ……と…」

「ひっ!!」

投げ出されたウエンデイを優しくキャッチするマルク。ついでに、と言わんばかりにそのままシャルルを担いでいる男を殴り飛ばして、同じようにナツもポーリユシカを担いでいる男を殴り飛ばしていた。

「……こいつらどうする?」

「……とりあえず縛り上げて王国に引き渡しましょう。ウエンデイ達の様子を見てもらったいいですか?」

「おう。」

気絶した男達を全員縛り上げていくマルク。しばらくして、縛り上げられた男達を引っ張りながら王国兵のいる所へと向かう。

「ん、んん……?」

「私達は……」

「……下ろしな。」

「お、ばっちゃんもう平気か?」

「自分の体のことは、自分がよくわかってるよ。」

ナツに担がれていたポーリュシカ、そしてマルクにお姫様抱っこをされていたウエンデイと、そのウエンデイの上にあったシャルル。三人はほぼ同時に目を覚ましていた。

「マルク……マルク!？」

「ちよ、暴れるなってウエンデイ……」

お姫様抱っこが恥ずかしかったのか、すぐさまマルクから降りるウエンデイ。

「こ、これ……何がどうなって……」

「3人とも連れ去られてたんだ……とりあえず今から王国に突き出すだけだ。一応、ウエンデイ達も一緒にいた方がいい。」

「そうね……また医務室に戻って襲われるのは勘弁よ。」

そう言って王国兵達の元に一緒に来る3人。少し歩いたら、すぐに王国兵の姿を見つけた。

「ん？妖精の尻尾の魔導士か……その男達はなんだ？」

「この4人、ウエンデイ達を連れ去ろうとしていたんです。」

簡潔にマルクがそう伝えると、その王国兵は少し考えこんでからマルク達の方に振り向く。

それと同時に、気絶した4人も目を覚ます。

「う、うう……ううわっ!？」

「おい答えろ、誰に言われてこんなことをした。」

ナツが拳に炎を纏わせながら、睨みつける。男達はさっきの瞬殺劇を思い出したのか、一気に怯え始める。

「俺達は頼まれただけなんだよ大鴉の尻尾の奴に!!レイザンテイル医務室にいた少女を連れて来いって!!」

「……お手柄だったな、コイツらは我々が引き取る。早く戻るべきだ、今は妖精の尻尾Aのエルフマンという男と、クワトロケルベロス四つ首の番犬のバツカスが戦っている。」

「え!?!エルフマンさんが!？」

「早く見に行こうぜ!ほら、ばっちゃんも!!」

「年寄りを急かすもんじゃないよ……」

先程までの事は一転……するのは難しかった。エルフマンが闘っているのは、『早く見に行かないと』という気持ちは嘘ではない。しかし、やはり大鴉の尻尾のやったことは全員の頭の隅に引っ掛かりを残していたのであった。

「――どうしたア!!?」

「へへっ！面白え奴だ!!魂が震えてくらア!!」

激突するバツカスとエルフマン。しかし、今エルフマンは一切攻めようとせずにバツカスの攻撃を受けるだけだった。

「何してんだエルフマン!？」

「……あれ、リザードマン?」

「マルク、知ってるの?」

「うん……素手を使う相手にはほぼ無類の強さを誇るって聞いた。体にある無数の鱗が、素手できた相手にダメージを与えるらしいけど……」

見れば、受けに回ってるエルフマンは血を流し、さらには鱗も一撃ずつ食らう度に剥がされ、壊されていた。

「……なんでエルフマンさんはあれを選んだんだろう……」

「……他じゃああいつに攻撃が当たんねえんだ。見えねえくらいに、あいつは早えんだ。」

ナツが真面目な顔でそう告げる。確かに、バツカスの攻撃はどれも一撃一撃がとても重いのに対して、それが高速で、さらに連続で打ち出されていた。

「相手の人の魔法って……」

「ただ掌に魔力を集めてるだけ……けど、それと組み合わせた酔拳が上手く合ってあれだけの攻撃を生み出せてる。」

「受けるが果てるか攻めるが果てるか……ってところか。」

少し見守った中、エルフマンのビーストソウルが解ける。しかし、バツカスの方も攻撃が止む。

二人共、息が上がって膝をついていた。

「——わははは……わはははははっ!!」

「立ち上がったのはバツカスー!!」

実況の声と、バツカスの笑い声が響く。大健闘した……よく頑張ったと、見ている者達はエルフマンに同情を向けていた。

「お前さア……」

だが、笑い声が止んだかと思えば……バツカスの体はそのまま傾いていき——

「——『漢』だぜー!」

そのまま、地面に倒れた。ダウンである。そして、エルフマンは膝立ちであっても尚、未だその背を立てていた。

「ダウン!!バツカスダウン!!勝者エルフマン!妖精の尻尾A10p獲得!!これで12pとなりました!!」

「オオオオオオオオ!!」

「この雄叫びが妖精の尻尾復活の狼煙かーっ!!エルフマン!強敵相手に大金星ー!!」

「COOL!COOL!COOL!!」

両腕を上げ、咆哮するエルフマン。その雄叫びは大魔闘演武の全てのものに響きたるほどに大きなものだった。

「うおっ!すっげえ歓声!」

「やりましたねエルフマンさん!!」

「受けてだけで勝つなんて……」

三人が興奮する中、シャルルとポーリユシカは少しだけ真面目な顔に戻っていた。

「ウェンデイ、もう大丈夫なの?」

「うん！もう平気、グランディーネもありがとう。」

「だからその呼び方は止めな……それよりも、さつきの連中……」

「大鴉の尻尾……！」

先程のことを思い出し、大鴉の尻尾に対して怒りを向けるナツ。だが、ここで一同にあった引つかりが、ようやく判明し始める。

「医務室に『いた』……少女……過去形？」

「一人いたじゃないか……ナツを運んできた……」

「ルーシィ……!？」

「確かに、医務室にいたのはルーシィさんだけど……なんでルーシィさんが……？」

「さあね……戦力低下がわかりやすいんだろうが……」

「……兎も角、この事もみんなに話しておきましょう。妖精の尻尾全員で対策するべきだわ。」

「そうだね……」

シャルルの提案により、一同は一旦医務室へと向かうことにした。エルフマンが怪我をしているので、ウエンディが治癒させる必要があるからである。

そして、医務室。流石に全員は入れないので全員に話をしたあとに一部のメンバーだけが医務室を訪れていた。

「私はエルフマンという漢を、少々見くびっていた様だな。その打たれ強さと強靱な精神力は我がギルド一かもしれん。」

エルフマンの掴み取った勝利は必ず私達が次に繋ごう。」

「エルザにそこまで認めてもらえるなんてね。」

「それだけの事をしたってことだ。」

「いや……マジで震えたぞエルフマン！」

ベットで体の殆どを包帯で巻いているエルフマンに、賛辞を送るナツ達。

しかし、当のエルフマンはあまり嬉しそうではなかった。

「よせよ……死者を惜しむようなセリフ並べんのは……いてて……」

「まあ、昔から頑丈なだけが取り柄みたいなものだからね。」

「なんか寂しい取得だな。」

「おめーも似たようなもんだろ!!」

リサーナが茶化すように言うが、ナツがその取得を笑う。しかし、ナツは本当にエルフマンの勝利に感動していた。

「でも、本当に凄かったですよ。」

「情けねえが俺はこのザマだ……後は任せたぞウエンディ。」

「はい！」

「さ……次の試合がもう始まっている。さっさと行きな。敵の視察も勝利への鍵だよ。」

「ばっちゃん、気をつけてな。」

「安心しな、ここは俺達雷神衆が守る。」

「術式にて、部外者の出入りを禁じよう。」

「もう二度とここは襲わせないわ。」

ウエンディ達が先に向かったあとに、マルクが連れてきた雷神衆。妖精の尻尾の中でも術式の使えるフリードは、とても守りに適していた。

それに安心した一同は、部屋から出て試合会場へと向かう。

「……にしても、大鴉の尻尾の奴ら……やることが露骨に汚えな。」

「1人1人戦力を潰していくつもりか。」

「……その件なんだけど、ちよつと疑問が残るわね。」

「俺も、違和感がある。」

「どうしたの？二人して。」

『大鴉の尻尾がルーシイを攫おうとした』という件に対して、シャルル

とマルクが疑問の声をあげる。

「事件の概要は既に聞いたが……大鴉の尻尾が、山賊ギルドを使って恐らくルーシイの捕獲を試みた。」

だがそれは、目標の誤認とナツの追撃により、二重の意味で失敗に終わった。」

「筋は通ってるんじゃない？」

「捕まっていたら何されてたか分からんがな。」

「やめてよ……」

「私が気になるのは、その捕獲方法よ。」

大鴉の尻尾には私達を襲ったやつ……相手の魔力を一瞬で0にする魔導士がいる。」

「確かにな……マスターの推測では、1日目にルーシイの魔法が掻き消されたのもそいつの仕業と見ている。」

歩きながらも、シャルルは自身の疑問を並べていく。

「そんなに捕獲に適している魔導士がいながら、なぜそいつが実行犯に加わらなかつたのかしら。」

「それはバトルパートのルール上参加者は闘技場の近くにいる必要があるからだろう。」

「誰がバトルに選出されるか直前までわからない、ってルールね。」

「考えすぎだよシャルル。」

「うん……あいつらにとって方法より結果の方が大事ってよく分かったもん。」

「まあ……いずれにせよ、私達を場外でも狙うつもりなら、警戒を怠ることなくなるべく1人にならないように心がけよう……マルクの疑問というのは？」

シャルルの事が一応答えが出たので、マルクに話を振るエルザ。マルクは頷いて、話し始める。

「……なんでルーシイさんが、って事です。医務室で寝ている妖精の尻尾の魔導士全員を狙えばよかつたはず……実際、ナツさんが体調崩して寝てましたし。」

「それは……途中で目を覚ましたら厄介なことになるからじゃないの

？」

「それは、そうなんですけど……わざわざルーシイさんを一人狙う、つて言うのがよく分からなくて……」

「マルクも考えすぎだよ。」

「そうだな、ルーシイは星霊魔導士……星霊が強くても、本人は弱いという認識が向こうにあったかもしれない。」

「それはそれでちよつと……」

複雑そうな顔をするルーシイ。しかし、一応理屈自体は通っているために、話はここで終わった。

だが、シャルルもマルクも未だ本当の疑問があった。

シャルルは『ルーシイが狙われた』ということ。マルクは『大鴉の尻尾が他ギルドに依頼をした』ということであった。

バトルパート

「そう言えば……第一試合見てないけど誰と誰が対戦したんですか？」

「大鴉の尻尾レイヴンテイルの少女と、蛇姫の鱗ラミアスケイルのリオンだ……恐らくレイヴンの方はリザーブ枠だろう。」

試合は魔水晶映像ラクリマビジョンに録画されてある。」

「分かりました、見直してみます。」

そう言って、一旦観客席にリサーナと戻るマルク。次の試合はフェアリーテイル妖精の尻尾BミラジエンVS青い天馬のジェニー・リアライト……リザーブ枠である。

「おかえりー、二人とも。」

「そう言えばリザーブ枠の選手は選手席にいらなくてもいいんですね。」

一日目は実況席にいたジェニーを見てマルクがそう呟く。カナは酒瓶を飲みながらマルクに指さす。

「そりゃあねえ、正式な参加者じゃないんだから。けどまあ、2つ枠があるんだからあんたあっちBチームに行きなさいよ。」

「考えときますよ……今は試合に……っ!？」

苦笑いをしながらマルクは試合に目を向ける。しかし、向けた瞬間に顔を真っ赤にしてしまっていた。

「こんな感じ?。」

「っう?。」

何故か二人はビキニを着て、見せ付けるような体勢になっていた。真っ赤に赤面してしまい、言葉が出なくなってしまうマルクに変わって、リサーナが声をかける。

「ふ、二人ともグラビアアイドルだから……こんな勝負になっちゃってるの?。」

「そうそう、魔法が変身系でグラビアアイドル。だから特別な形の試合になってるってわけよ。」

「元グラビアモデル同士!そして共に変身系の魔法を使うからこそ実現した夢のバトル!」

ジャッジは我々実況席の三人が行います。」

「責任重大だねえ…」

「どっちもCOOL&ビューティ!!」

実況席が盛り上がりを見せる中、試合は進んでいく。お題がスク水になり、ビキニニーソになり、眼鏡っ娘になったり、猫耳をつけたり、ボンテージになったりと……段々とマニアックになっていく。

「両者一步も引かず!このままではラチがあかないので次を最後の1回とさせていただきます!」

「ミラ!これが最後よ!!」

「うん!負けないわよ!」

「今までの流れに沿って、私達も賭けをしない?」

「いいわね、何を賭けるの?」

ミラの言葉で、ジェニーがニヤリと微笑む。まるで勝ちを確信したかのような笑みであった。

「負けた方は週間ソーサリーで、ヌード掲載するのはどうかしら?」

観客席の男達の一部を除いて喜んでいた。尚、それもマルクにはほとんど聞こえないほどには意識が飛んでいた。

「いいわよ。」

「な、なななんと!!とんでもない賭けが成立してしまったー!!」

そして、ミラも即答で引き受ける。リサーナは心配しているが、他の女子達はあまり心配はしていなかった。

「まあミラが負けるって早々ないと思うけどねえ……おーい、少年生きているかー?」

「……………」

「こりやダメだ、あんだけウエンディ好き好きオーラ出してる癖に、思いのほか純情だ。」

「つーか海合宿とかどうしてたんだらうね、この子。」

マルクの様子を見てカナが溜息をつく。しかし、そんなの関係なしに試合は進んでいく。

「最後のお題は、戦闘形態です!!」

「これが私の戦闘形態!!」

ジェニーが、自身の戦闘形態のお披露目をする。そして、ミラも同様なのだが――

「じゃあ私も行くわね？今までの流れに沿って賭けが成立してたんだから……今までの流れに沿って、最後は力のぶつかり合いってことでいいのかしら。」

「え？」

「お、あれは……」

「魔人……ミラジェーン・シュトリ。多分ミラ姉の中で一番強いサタンソウルだと思う。」

表したミラの戦闘形態。カナが真面目な顔になり、リサーナが解説をする。禍々しくも圧倒的なオーラを放つそれは、伊達にS級魔導士ではないということである。

「私は賭けを承諾した。今度はあなたが力を承諾してほしいかな……ねえ？」

その瞬間、ジェニーがミラに一撃で倒される。それは一瞬の出来事であった。

「グラビア勝負から一転……最後は力の勝負に！」

「まあこれが本来のルールだスね。」

「COOLCOOLCOOL!!」

「勝者！ミラジェーン!!」

「ごめんね？生まれたままのジェニー、楽しみにしてるわね。」

「いやあー!!」

観客席も勝利と勝利とはまた別の喜びで包まれていた。その別の喜びをしているのは、一部を除いた男性陣だけだが。

「……はっ!?!」

「意識の彼方からおかえり、勝負はミラが一撃で終わらせたよ。」

「そ、そうですか……」

「あんだ海合宿とかホントどうしてたんだい……と、今日の最終試合だ。」

気を取り直して、マルク達は試合へと意識を移す。組み合わせは人魚の踵カグラ・ミカヅチと、セイバートゥース剣咬の虎ユキノ・アグリアであった。

「……あのユキノって人、どっかで見覚えがあるような……」

「リサーナじゃない？髪の色とかそっくり。」

「そんなに似てないと思うよ、うん。」

リサーナが食い気味に否定するが、マルクは言われればリサーナに似ている気がしていたが、少なくともリサーナとはまた別の既視感を覚えていた。

「これはまたしても美女対決となったー!!」

「まあさつきみたいな特別試合は行われないうねえ……あのカグラって奴の武器は明らかあの刀だし。」

「ですね……けど相手は剣咬の虎……どっちが勝つのやら。」

「カグラの強さは皆さんもうご存知の通り！人魚の踵最強の魔導士であり、現在週ソライチオシ女性魔導士です。」

対するユキノは今回初参戦、しかし最強ギルド剣咬の虎に所属しているというだけでその強さに拍車がかかります。

実況席の解説を聞いて、考え込むマルク。しかし、その考えがまるとる前に試合開始の合図が出される。

「あの……始まる前に私達も賭けというものをしませんか。」

「申し訳ないが、興味ない。」

「敗北が恐ろしいからですか？」

「そのような感情は持ち合わせていない。しかし、賭けとは成立した以上必ず行使する主義である故、軽はずみな余興は遠慮したいのだ。」

「……では、重く致しましょう。命を……賭けましょう。」

ユキノのこの一言で、会場全体がどよめく。この賭けになんの意味があるのか、理解できるものは少ないだろう。

「随分と自信があるんだねえ……あの子。」

「けど、それだけ強いっていう自覚があるんだと思う。」

「けど……多分、あのユキノって人は自分が負けることを知らない……もしくは負けること自体がありえないと思っっているんでしよう。」

「つまり？」

「……はつきり言えば、ものすごく油断していると思います。『剣咬の

虎は最強だ』って先入観みたいなのが、多分剣咬の虎全体に思
います。」

「戦車チャリオットの時も、わざわざ参加しておいてリタイヤを狙うくらいだから
ねえ……。」

真面目な顔で話し合う3人。先程までの空気はどこへやら、会場全
体の空気が一気に引き締められた。

「その覚悟が誠のものなれば、受けて立つのが礼というもの。よかろ
う、参られよ。」

「剣咬の虎の前に立ったのがあなたの不運……開け、双魚宮の扉。」

「星霊魔導士!？」

「ルーシイさんの持つてない黄道十二門……。」

「——ピスケス!」

現れたのは二匹の巨大な魚。凄まじい速度で迫ってくるそれらを、
カグラはジャンプして回避する。

だが、その瞬間をユキノは見逃さなかった。

「開け、天秤宮の扉! ライブラ!!」

「二体同時開門!?! しかも、また黄道十二門……。」

「これ……。」

「ああ、この会場に黄道十二門の全部が揃ってるんだねえ……。」

ピスケスの攻撃を避け続けるカグラに対して出したもう一体の星
霊。ユキノはそれに指示を出す。

「ライブラ、標的の重力を変化。」

「了解。」

「くっ……!」

「あの星霊……重力操作ができるんだ。」

「けどありやダメだね、愚策だ。」

「え?」

カナが発した一言にマルクが反応するよりも早く、ユキノはピスケ
スに指示を出して、体を重くしたカグラを攻めようとする。

だが、カグラは重くなった重力帯からいとも簡単に抜け出した。

「ほらね、重力操作は人魚の踵には少なくとも愚策さ。」

「あ……同じ魔法を使う人がいるから！」

「正解、仮にも大魔闘演武まで出場したギルドの最強格だ。強力な魔法なら、その魔法や魔導士の弱点を突こうと何かしら学ぶはずさ。」

「……確かに、重力操作はかなり強力ですもんね。悪魔の心臓グリモアハートにもいきましたもんね。」

「ブルーノート……あいつのは、規格外すぎるけどね。」

試合の行く末を見守る3人。ピスケスとライブラだけでは足りないかと確信したのか、ユキノはある決断をする。

「……私に開かせますか、十三番目の門を。」

「……ん？あいつ今なんて言った？」

「聞き間違いじゃなかったら、十三番目の門って言ったような……」

「黄道十二門の鍵に……十三番目が……？」

十三番目の門というキーワードが引つかかるが、その答えはすぐに明かされた。

ユキノは懐から1本の鍵を取り出す。銀でもなく金でもなく、禍々しい色の鍵であった。

「それはとても不運なことです……」

「運など生まれた瞬間よりアテにしておらん。全ては己が選択した事象——」

「開け、蛇遺座の扉——」

「——それが私という存在を未来へと導いている。」

「——オフィウクス!!」

現れたのは巨大な蛇の星霊。機械仕掛けのような見た目の星霊は、カグラに突っ込んでいく。

そしてカグラもまた一切の恐れなく入り込む。

「怨刀、不倶戴天……抜かぬ太刀の型……!」

カグラは抜かずにそのまま刀を振るい、オフィウクスを切り刻んでいく。

体をバラバラにされたオフィウクスは、そのまま姿を消す。

「うそ……?」

「安い賭けをしたな……人魚は時に虎を食う。」

そして、そのままカグラはユキノを倒した。剣咬の虎が圧倒されたという事実が、観客全員を驚かせていた。

「し、しし……試合、終了……勝ったのは人魚の踵カグラ・ミカツチ!!
剣咬の虎……まさかまさかの二日目0ポイントー!!」

「……不倶戴天。」

ポツリと、カグラの持つ刀の名を呟くマルク。ユキノが弱いわけはなかった。星霊の二体同時開門、そしてそれがライブラの重力操作と宙を自在に舞えるピスケスの組み合わせというだけで、勝てる者はかなり限られてくる。

「……まさか、エルザ以外にもあそこまでの剣士がいたとはねえ。」

「エルザ、勝てるかな……」

「エルザさんなら大丈夫と思いますが……抜いてないのにあの切れ味、あれを防げる鎧があるようには思えませんよ、ほんと。」

「だね、ありやあ危険すぎる。けど……そんな刀で、一体何を切るつもりなのかねえ……」

不倶戴天の恐ろしさを身にしみながらも、大魔闘演武二日目は終了したのであった。

妖精の尻尾が止まる宿で、一人になってからマルクは試合の映像を見てない者達とともに振り返っていた。

蛇姫の鱗のリオンと、大鴉の尻尾の見慣れない少女。リザーブ枠だというのはエルザが言っていた通りであった。

「さあ、今回のエキシビジョンマッチですが……ヤジマさん、勝負はど

うなると思われますか?」

「そうだねえ……レイヴンの方は見慣れない子だから、なんとも言えないね。」

「確かに、実力は如何程のものか?では、蛇姫の鱗リオン・バステイアと大鴉の尻尾マホーグ・オロシのエキシビジョンマッチを始めます!!」

ゴングが鳴り響き、エキシビジョンマッチが始まる。しかし、お互いに動こうとしない。

否、正確にはマホーグと言われた少女はうずくまっているのだ。

「……どうした?体調が悪いのか?」

「……あ、貴方も……私に危害を加えるんでしょ……」

「……エキシビジョンマッチだからな、戦わなければ始まらないさ。」

「だ、だったら……倒さないと……!」

瞬間、マホーグの姿は消えてリオンの後に回り込む。そして、背中に背負っていた大剣を振り下ろす。

「つと……いきなりやる気になるか……アイスメイク、イーグル!!」

リオンが、氷の造形魔法でマホーグに攻撃を仕掛ける。氷の鷹は羽ばたいて四方八方から襲いかかるが――

「こない、でえ!!」

「なっ?!魔法が……」

マホーグが剣を振り回すと、その剣先に触れるだけで次々と碎けていく。その上、死角からの攻撃すらもマホーグは防ぎきっていた。

「危害を加える人は、潰して潰して……潰さないと……」

「……なら、これならどうだ!!」

リオンは数々の造形魔法を作り出して、下を除いた全方向に攻撃を仕掛ける。

だが、それでも足りなかった。

「怖い怖い怖い怖い!!」

半狂乱、そして涙目でマホーグはほとんどの攻撃を見ずに潰していた。

「あなたは……消えて。」

「しまっ——」

そして、またもや一瞬でリオンの側まで移動したマホーグ。いつの間にか持っていた大剣は大槌のような形になっていた。

そして、リオンをそれで殴りつけて一気に壁まで吹き飛ばしていた。

「しよ、勝者大鴉の尻尾マホーグ・オロシ!!」

その試合結果を見て、ナツとウエンディ、シャルルにマルクの4人は溜息を付いていた。

「なんだ、ありや。」

「……多分、リオンさんの近くまで移動できたのは魔法だと思います。どういう魔法かまでは分かりませんが……」

「速度、というよりは……」

「あれは転移ね。けどとんでもない魔力消費の上、移動できる範囲は限られてると思うのだけど……それこそ、1〜2mとかね。」

「それに、あの剣……氷を砕いてる、ってよりは魔法を砕いてるって感じだった。」

話し合いは、続かない。意外な結末とよく分からない魔法の存在が皆を惑わせていた。

「ま、ぶつかった時にわかんだろ。」

「そうですね……けど、なんて言うか……」

「どうしたの？マルク。」

「……大鴉の尻尾に、合わない子のような気がして。あんな危険なギルドにいるのに、危害を加える人が怖いだなんて……」

マルクの疑問に答えられる者はいない。マホーグ・オロシ、その名はぶつかった時に注意するべき名としてだけ、覚えておくしかなかったのであった。

三日目エキシビジョンマッチ

「大魔闘演武もいよいよ中盤戦、三日目に突入です。」

「今日は一体どんな熱いバトルを見せてくれるかね。」

「本日のゲストは、魔法評議院よりラハールさんに起こしいただいています。」

「よろしくお願いします。」

「ラハールさんは強行検束部隊大隊長ということですが……」

「ええ、大会中の不正は許しませんよ。」

大魔闘演武三日目、盛り上がってきている中で恒例のエキシビジョンマッチが始まろうとしていた。

「さて、今回のエキシビジョンマッチですが……なんと！妖精の尻尾フェアリーテイル B対剣咬の虎です!!」

実況の声で、会場には歓声が広がる。そして、その歓声の中で選手が二人入場してきていた。

「まずは剣咬の虎から！リザーブ枠を使った登場！クオーリ・クローイ！」

若干青みがかかった白髪の男、片手を天に突き上げながら登場してきていた。

「そして妖精の尻尾Bからは！マルク・スーリア!!」

「……よしー！」

これまた会場は歓声に包まれる。意識を戦闘一色に染めて、今二人の男がぶつかる。

「……お前、滅竜魔導士？」ドラゴンスレイヤー

「ん？そうだけ……ですけど？」

自分より年上、一応敬語を使うマルク。だが、男はそんなことはどうでもいいのか、マルクに顔を近づけて言い放つ。

「俺も、滅竜魔導士。けど……お前ら旧世代とは格が違う第三世代の滅竜魔導士。」

「……第三世代？」

「後でお仲間にも教えて貰った方がいい、例えばナツ・ドラグニル。」

「……」

鳴り響く試合のゴング。マルクは一応出場予定だったミストガン……ジエラルルのことをふと思い出していた。

今回はラハール、評議院がゲストとしている以上参加出来ないのもしょうがないことだというのは、マルクも理解しているが……

「まったく……!」

「まずは挨拶替わり! 氷竜の領域!!」

クオーリが両手を一気に広げると、冷気のようなものが広がって大魔闘演武の会場……観客席にまで及ぶことはないが、少なくともバトルフィールドはすべて凍りついた。

「こ、これは……うおっ!」

「すかさず氷竜の咆哮!!」

全て凍りついてしまったせいで、動きづらくなってしまっているマルク。しかも、ただ凍りついているだけでなく何本か巨大な氷の棘のようなものが、何本も生えていた。

「う、動きづらい……」

「滑って回避たア幸運!!けどそんなのはいつまでも続かない、一気に凍結!!」

動きづらいマルクが変わって、クオーリはまるでその氷の上を自由自在に滑るように移動していた。

「氷竜の牽制!!」

「っ! 足が……!」

クオーリが地面を叩くと、マルクの足元にある氷が一気にマルクの膝下全て凍らせる。

身動きの取れなくなったマルクに対して、クオーリは高くジャンプして巨大な魔力の塊を生み出し、それを氷に変える。

「これが俺の必勝パターン!! 滅竜奥義、冰山一殺投《ひょうざんいつさつとう》!!」

「でかっ!」

まるで冰山のごとき巨大な氷の山。それをクオーリは反対に向け、先端をマルク目掛けて落としていく。

「はっはー！これでジ・エンド!!」

「……な訳ねえだろうが!」

自分の足の氷を、すべて魔力で粉碎してマルクは一気に滑る。魔力をブーストさせれば、滑って移動できることに気づいたのだ。

「何っ!?」

標的を見失った氷山は、そのまま地面に激突して膨大な冷気を撒き散らす。そのせいで会場の温度は、少し下がっていた。

「……俺の氷は、特殊な氷。ステイングやローグも砕くのに、分単位で時間を浪費するはずなのに、いとも簡単に割れる男がいるとは……信じられない。」

「生憎、俺の魔力も特殊な魔力だ。氷にあつた魔力を食ってしまえば、全部タダの氷だ……」

「……魔力を、食らう?」

そのワードがスイッチだったのか、クオーリの顔が一気に憤怒の色に染まる。

少し驚いたマルクだったが、それに臆することなく逆に警戒を一気に強めていった。

「最強ギルド剣咬の虎……そのギルド以外に、まるで王の如きその力を持つギルトなどありえない!信じられない!」

「……最強、ねえ。」

「そんな力は認めない……!絶対に、絶対に!!」

一気にマルクは、クオーリに詰め寄られる。その手はマルクの体に伸びようとするが、同じ要領で魔力を足に貯めて飛ぶことで、距離を稼ぐ。

「そんな方法でいつまでも逃げられると!!氷竜の――」

「思っちゃあいないさ、魔龍の――」

「咆哮!!」

ぶつかり合う二人のブレス。通った地面を即座に凍らすほどの強力なクオーリのものと、魔力を吸収するマルクのブレス。

「ぐっ!!」

「このまま……!」

そんな二人のブレス、マルクの方が段々と押し始めてくる。それを悟ったのか、クオーリは即座にブレスの方向を変更してマルクのブレスの直線上から避けるように動く。

「があッ!!」

「ブレスの方向転換とか、無茶するな……!」

「お前を凍らせて剣咬の虎を勝利!!」

「それしか頭にねーのな!! 魔龍の尾激!」

逃げたクオーリを追うように、マルクはその足に貯められた魔力でクオーリに攻撃を行う。

「甘い! 氷のフィールドは俺の庭!!」

「あっ! しまっ……!!」

勢いよく飛び出してしまったせいで、マルクの足は大魔闘演武のフィールドの地面に突き刺さってしまう。

しかし、一応砂だけなのですぐに抜け出すことは可能である。

「その抜け出す一瞬さえあれば攻撃が出来る!!」

「ぐっ……!」

冷気をまとった拳で殴りつけるクオーリ。魔力を吸収するマルクにとつて、その一撃は大したダメージにはならない。

しかし、殴られた部分が少しだけ凍ってしまって、少しだけ焦る必要があるとマルクは即座に思った。

「だらア!」

「おっとおっと……どうしたどうしたー? 全くもつてのろい攻撃!!」

「くっ……」

マルクはクオーリに拳を振るうが、それは避けられてしまう。マルク自身、クオーリに言われるまでもなく自分の体が鈍くなっていくのを、感じていた。

「ヤジマさん、これは一体……」

「うん……多分、今あそこのフィールドは極寒になってると思うよ。凍ってるんだから当たり前の話なんだけど。」

実況席がそう解説する。実際問題、今のマルクは寒さで動きが鈍っていたのだ。

「ははは……！さーて、そろそろトドメ！」
「……」

自ら出る白い息に、マルクは呆れる。と同時に目の前にいる滅竜魔導士が攻撃力を武器にしている者ではないと、ようやく理解する。

「……寒いなら、動けないなりの戦い方を……！」

「滅竜奥義……！」

拳に先程までの比ではない程の冷気が集まっていくのを、マルクは感じ取っていた。

「凍突冰山激!!」
とうとつひようざんげき

この一撃は、受けるべきではない。マルクは、逃げられない攻撃を防ぐために動く。

「滅竜奥義、紫電魔光壁!!」

ニルヴァーナすらも封じるこの一撃。マルクは自分の目の前にそれを展開して、相手の攻撃が通らないようにする。

「何っ!？」

「今回は、タイムアップまで付き合ってもらおうぞ？氷の滅竜魔導士！」
「抜かせトカゲ!!」

防がれたその一撃。だが、ニルヴァーナをも防ぐこの壁は、本来は叩きつけられた魔力を完全にシャットアウトする技なのである。

つまり――

「っ……!？」

膝を着くクオーリ。いきなりごっさり魔力が減ったことに対して驚きを隠せないでいた。

「俺の、この技は……叩きつけられた魔力を『全部』吸収する……」

「……使ってもいない俺の魔力を吸収……！」

「そういうこと……！け、けど……」

自身の体を抑え始めるマルク。あまりにも、あまりにも寒いのだ。何せ、フィールドそのものが凍っている上に、クオーリの使う技はどれも冷気を伴う。その冷気はフィールドに溜まってしまっていたのだ。

「お前も、寒さで動けなくなっている……！」

「ちっ……まさか、こんな戦い方をするなんて……」

「それ自体はおまけ……魔力こそ持っていかれたが……それでも貴様を倒せる。」

お互いに膝を着く。特にマルクは、寒さでどうにかなりそうになっていた。

「……氷竜の……!」

「っ!!やば魔龍の……!」

再びブレス体勢に入るクオーリ。いきなりだったが、マルクもそれを対処するようにブレスの準備に入ろうとする。

「……なんて、な!!」

「っ!」

しかし、クオーリはブレスを放つことは無かった。代わりに、マルクに魔力ブレストで無理やり距離を詰める。

だが、寒さで鈍っているマルクにはその戦法は対処できなかった。

「魔力を奪う魔龍?ただのトカゲが龍ごっこをしてるんじゃない?……ねえ!!氷竜の凍拳!」

「がっ!!」

一撃、重たいのがマルクに打ち込まれる。しかしそれだけでは終わらせず何発も何発も殴り続けた。

「お前がっ!!」

顔面、頬、腹、胸……あらゆる所をクオーリは殴りつけていく。

「滅竜魔導士なんて!!」

吐き捨てるように言いながら殴り続ける。マルクが殴られたところは徐々に、氷がまとわりついていく。

「お前は……ただの化物ツ!!」

そして、最後に強力な蹴りをマルクに打ち込んで吹き飛ばす。マルクは壁まで吹き飛ばされてめり込んでいた。

「……魔力なんてもん、食える滅竜魔導士がいてたまるか。そりやあもうただの化け物。」

「こ、これは……勝負あったかー!」

観客席が、それで決着がついたと思っ騒ぐ。『やはり剣咬の虎は

最強だ』と言わんばかりに。

実際、マルクは少ししか動けてなかった。

「へ……当然だ、俺達はセイバー——」

「いや、ハマって動けねえだけだ。あと寒いから体が上手く動かない。」

「……は？」

体をなんとか動かそうとするマルク。打撃を与えられて、氷がまわりついているところは、『これが証拠だ』と言わんばかりにマルクにすぐに剥がされる。

「……こんなチンケな氷で、俺は倒されねえよ。もっと冷たくて、綺麗な氷を俺は知ってるしな。」

「……そうか、なら……！これを受けてもそんな口聞けるか!？」

クオーリは完全にブチ切れて、マルクの元へと突っ込んで行く。だが、マルクは一切動こうとはしない。

「氷竜の……吹雪!!」

先程のブレスと似たような構えをとるクオーリ。だが、何かが違うていた。

「があッ!!」

マルクとクオーリの間の頭上にうち放たれる魔力。それは雲のように広がっていき、マルクに猛烈な『雪』を当てる。

「俺のもう一つのブレス！この雪はそれぞれ一つ一つが小さな氷の槍！お前の体をこれで穴だらけ!!」

雲のように広がった魔力がだんだんと小さくなってくる。だが、それとは逆にマルクのところには大量の雪が積もっていた。

そして、雲が完全に消える頃にはマルクは完全に見えなくなっていた。

「マルク!!」

「ん……？ああ、天竜。そういや、同じギルド……ま、今は聞こえてない。」

「しよ、勝者クオーリ・クォーライ！」

実況席からの勝利者宣言、妖精の尻尾Aが来ようとしていたが、そ

の前にラクサスが先にやってきていた。

「おい、出られそうか？」

「んむーんむむー」

「まあこんだけ雪が積もってちやあ、無理だろうな。今回だけだぞ。」

そう言つてラクサスは雪の塊に向かつて、雷の一撃を打ち放つ。雪は簡単に消し飛び、マルクを動けなくしていた瓦礫もすべて吹き飛ばしていた。

「いやあ、助かりました。えっと、あとその……すみませんでした。」

「いい、点数は入らねえしな。」

「おっと、どうやらマルク選手、本当にまだ動けるみたいです。」

実況からの声、その言葉でクオーリは自身の心に何か怒りめいたものを感じていたのだが……それがわかるやつは今この場に誰一人としていないかった。

「つーか、最後のやつどうやって回避した？」

「身体中から魔力をドバーって……まあおかげで、魔力すっからかんですけど……」

マルクはそう呟いてクオーリの背中を見る。ダメージはほとんど無かったとはいえ、惨敗も惨敗である。

次戦える時が来るなら……まずあの寒さをどうにかしなければならぬと思つたマルクなのであった。

三日目競技パート

「さあ、エキシビジョンマッチで場が温まってきたところで！三日目の競技は伏魔殿パンデモニウム！参加人数は各チーム1人です！」

「あー……まだ体冷えきってるよ……」

「あ、マルクおかえりー」

マルクが観客席に戻ると、リサーナが手を振ってマルクの帰りを歓迎する。

マルクはリサーナの隣に座って、試合の行く末を見守り始める。

「誰が出るんですか？」

「Aチームはエルザ、Bチームはカナガリザーブ枠で出るみたい。」

「へー……」

他のギルドからは、人魚マイメイドヒールの踵ミリアーナ。

大鴉レイウンテイルの尻尾からはマルクとウエンディとシャルルの魔力を奪った張

本人、オーブラ。

青い天馬ブルーベガサスからは、情報戦が得意な魔導士のヒビキ。

剣咬セイバートウリスの虎からは黒雷の使い手、オルガ。

蛇姫ラミアスケイルの鱗からは聖十大魔道の1人のジユラ。

四つ首クワトロケルベロスの番犬からはノバーリ。

計8人が出場することになった。

「昨日は休暇の為、失礼しました。それではこれより、パンデモニウムのルールを説明いたしますカボ。」

マスコットキャラ兼審判係のマトー君がそういつた途端、フィールドに大きな建造物がものすごい勢いで展開されていく。

「邪悪なるモンスターが巢食う神殿、パンデモニウム。」

「でかー!？」

「モンスターが巢食うだと？」

「そういう設定ですカボ、ただの。」

この神殿には、100体のモンスターがいます……と言っても我々が作り出した魔法具現体、皆さんを襲うようなことは無いのでご安心を。」

マトー君の説明でざわついた観客だったが、すぐに安心し始める。「モンスターはD・C・B・A・Sの五段階の戦闘力が設定されています。」

内訳はDクラスから順に50体、30体、15体、4体、1体となっています。

因みにDクラスのモンスターがどのくらいの強さを持っているかといえますと……」

魔水晶映像ラクリマビジョンにDクラスの一体が表示される。目はなく、全身が刺々しい見た目の四足モンスター。それは近くの石像に走って駆け寄ると、爪の一撃で粉々に粉砕するほどだった。

「こんなのやらこんなのより強いのが100体渦巻いているのがパンデモニウムです。カボ。」

クラスが上がる事に、倍々に戦闘力が上がると思ってください。Sクラスのモンスターは聖十大魔道と言えど倒せる保証はないですカボ。」

「む……」

「皆さんには順番に戦うモンスターの数を選択してもらいます。これを挑戦権と言います。」

例えば3体選択すると、神殿内に3体のモンスターが出現します。三体のモンスターの撃破に成功した場合、その選手のポイントに3点が入り、次の選手は残り97体の中から挑戦権を選ぶことになりました。

これを繰り返して、モンスターの数が0または皆さんの魔力が0になった時点で競技終了です。」

「数取りゲームみたいだね。」

マトー君の説明を聞いて、ミリアーナがそう呟く。数取りゲームと言う割には自身のことも考えなくてはいけない、というのがネットではあるが。

「そうですね、一巡した時の状況判断も大切になってきます。」

しかし、先程も申し上げた通りモンスターにはランクがあります。これは挑戦権で一体を選んで五体を選んでランダムで出現する

仕様になっていきます。」

「……こつちの方に出てたらよかったかな。」

「え？…なんで？」

説明を聞いて、マルクがそう呟く。リサーナはそれを疑問に思っ
て聞き返していた。

「だって、『魔法具現体』なんですよ？」

「……多分、倒した扱いにならなくてルール違反扱いされるんじゃないかな。」

「……ですよね。」

リサーナの言葉でマルクは再びフィールドに目を向ける。

「モンスターのクラスに関係なく、撃破したモンスターの数でポイン
トが入ります。」

一度神殿に入ると、挑戦を成功させるまで退出は出来ません。」

「神殿内でダウンしたらどうなるんだい？」

「今までの自分の番で獲得した点数はそのままに、その順番での撃破
数は0としてリタイアとなります。それでは皆さんくじを引いてく
ださい。」

協議の説明を聞いて、全員が難しい顔をしている。ルールこそ分か
りやすかったが、勝つには相当考えなければいけないからだ。

「……結構頭使いますねこの競技。」

「うん……欲張りすぎても、かと言って一体ずつ選んでもダメ。魔力
を使いすぎないようにしつつ、回復も視野に入れておかないといけな
い。」

「ある意味、エルザさんが出てくれて助かったかもしれないですね……」

そして、全員がくじを引き終わる。エルザが一番、カナが8番とい
う並びになっていた。

「この競技……くじ運ですべての勝敗がつくと思っていたが……」

「くじ運で？…いいいやそれはどうでしょう？戦う順番より、ペース配分
と状況判断力の方が大切なゲームですよ。」

「いや……これは最早ゲームにならない。」

エルザは軽く微笑んだ後に、すぐに顔つきを凜々しいそれに戻す。

くじ運で勝敗が決まる……その言葉を、実行するとは運営委員ですら思いつかないだろう。

「100体全て私が相手をする。挑戦権は100だ。」

エルザのセリフで、会場は息を呑む。マトー君が必死に止めようとするが、エルザはそれを無視してパンデモニウムの中に入っていく。

「――換装。」

その姿は圧巻だった。大剣を振るい、槍で薙ぎ払い、剣で切り刻む。斧で断ち、刀で裂く。

鎧を次々に変えて、緋色の髪を持つ女騎士は城で舞う。妖精女王はここにあり、と見せつけるために剣舞を舞う。

傷だらけになっているにも関わらず、その姿に皆見惚れていた。そして――

「し、しし……信じられません！なんと、たった1人で100体のモンスターを全滅させてしまったアーっ!!これが七年前最強と言われていたギルドの真の力なのか!?

フェアリーテイル妖精の尻尾Aエルザ・スカーレット圧勝!!文句無しの大勝利!!」

『妖精の尻尾最強女魔導師、エルザ・スカーレット』この名前をこの競技で思い出した者は少なくはなかった。

鳴り響く歓声に、熱が冷めることがないのが伺える。

「……よく戦えましたよねあれ。」

「そうだね……あれ?というか100体戦う必要って……」

「本当なら51体倒せば確実な勝利は決まってきました。けど……100体倒しに行つてこそそのエルザさんだと思いますよ。」

「……そうだね、エルザならそれくらいしちゃうもんね。」

苦笑しながら、マルクもリサーナも傷だらけのエルザと、それに駆け寄るAチームを見る。

観客席にいる妖精の尻尾のメンバーも、エルザに対して惜しみない拍手を送っていた。

「パンデモニウム完全制圧!妖精の尻尾A100p獲得!!」

それからしばらくしてから。

パンデモニウムはエルザの一人勝ちとなってしまうため、残り七チームについての処遇が、協議されていた。

因みにエルザは勿論医務室行きである。

「えー、協議の結果。残り七チームにも順位をつけなければならぬということになりましたので……いささか味気ないのですが、簡単なゲームを用意しました。」

「魔力測定器、略してMPF。」

この装置に魔力をぶつけることで、魔力が数値として表示されます。その数値が高い順に、順位をつけようと思います。」

マトー君が説明する中、青い天馬のヒビキとカナが何やら喋っていた……のだが、この時点で既にカナは何十個の樽の酒を飲み干していた。

まだ足りないのか、酒瓶を直飲みしていた。

「カナさんもう呑んでる……って言うかあの酒樽どこから……」

「うーん……大丈夫かなあ……」

妖精の尻尾が心配する中、魔力測定が始まるのであった。

「挑戦する順番は先程の順番を引継ぎますカボ。」

「じゃあ私からだね！行くくよー……キトゥンブラスト!!」

ミリアーナから放たれたロープ。それから繰り出される一撃により表示された数値は365。

「比べる基準がないと、この数値が高いかわかりませんね。」

「この装置は我々ローンナイトの訓練にも導入されています。この数値は高いですよ、部隊長を任せられるレベルです。」

ミリアーナの番が終わり、次は四つ首の番犬のノバーリ。その数値は124と少し低めだった。

「――僕の番だね。」

そして、黄色い歓声と共にヒビキが現れる。だが、彼の魔法は古文書^{アーカイブ}。情報戦を主とする彼の場合、荷が重く95という数値になっていた。

「ああ……なんてことだ……」

「続いては大鴉の尻尾、オーブラ。」

「……魔力を奪った奴か。」

M P Fの前まで歩くオーブラ。その姿を見てマルクは悔しそうな顔をする。何も抵抗できなかった、ウエンディ達を守れなかった屈辱が胸に溢れてきていたからだ。

「……」

オーブラから黒い使い魔のようなものがM P Fに突っ込んでいく。そして、体当たりをするがそれに表示される数字は、4であった。

「なっ!？」

「手加減してる……?」

「これはちよつと残念ですが……やり直しは出来ませんカボ。」

えー、現在の順位はこのようになっていきます。」

映像に映し出される文字。1位ミリアーナ、2位ノバーリ、3位ヒビキ、4位オーブラ。暫定一位でミリアーナがトップに躍り出た。

「やったー!私が一番だ!みやー!」

「――そいつはどうかな。」

「ここでオルガ登場ー!!すごい歓声です!!」

剣咬の虎オルガ。片腕をあげ、観客の声に答えているかのような仕草。もはや自分が一番であることに確信を得ているかのようなだった。

「120mm黒雷砲!!」

今までの4人と比べても破壊力が違う魔法。強烈な炸裂音を鳴らしながらM P Fにその数値が表示される。

その数字、3825。ミリアーナの約10倍であった。

「さ、三千……!?!」

「私の10倍―!?!」

「最強最強ナンバー1!!」

自作の歌を歌うオルガ。そのオルガの次は聖十大魔道の1人であるジユラであった。

「さあ……それに対する聖十のジユラはこの数値を越せるかどうか注目されます。」

「本気でやっても良いのかな?」

「勿論ですカボ。」

ジユラは両手を合わせ、目を瞑る。その瞬間に膨大な魔力が膨らんだのを、マルクは感じ取って、無意識に体を震わせた。

「鳴動富嶽―!」

表示された数値は8544。ミリアーナの10倍あったオルガの記録を、さらに倍以上膨らませたのだ。

「……あれに勝てるのって、エルザさんくらいですかね……」

「……どう、だろう。」

啞然としながら、マルクとリサーナはジユラを見る。今現在の最強は、彼なのではないかと疑うほどに。

「こ、これはMPF最高記録更新!!やはり聖十の称号は伊達じやない!!」

「……あ、ギルダーツならいい勝負かも。」

「ああ……」

「最後の挑戦者は妖精の尻尾B、カナ・アルベローナ。ジユラの後とはなんともやりづらいでしょうが……頑張ってもらいましょう。」

そして、ジユラの後にカナが前に躍り出る。既にベロンベロンに酔っていた。しかし、カナの魔法は攻撃性の低いカードを使う魔法。

直前のジユラやオルガのような攻撃に特化した魔法で無い以上、4桁は厳しい……そう、全員が思っていた。

「――さ、ぶちかますよ。」

カナが来ていた上着を脱ぎ捨て、上半身が水着のような格好になる。しかし、その腕には見覚えのない紋章が彫られていた。

「……あれって——」

マルクがその正体を探ろうとした瞬間、カナは腕を上げて大きくその詠唱を刻み始める。

「集え!!妖精に導かれし光の川よ!照らせ!!邪なる牙を滅するためフェアリーゲリッター!!妖精の輝き!!」

とんでもない魔力量、ジュラやオルガとは比べ物にならないそれをカナは叩きつける。

表示された数値は9999……つまり、MPFが表示される限界を超えて、カンストしてしまっただのである。

「な、なんとということでしょう……MPFが破壊、カンストしていません。な、なんなんだこのギルドは……競技パート1・2フィニッシュ!もう誰も妖精の尻尾は止められないのか!!」

「止められないよ!!何たって私達は妖精の尻尾だからね!!」

カナがそう言うと、観客が興奮でさらに湧き上がる。三日目競技パートの結果は、妖精の尻尾の二チームがトップに躍り出たという結果で、終わったのであった。

三日目バトルパート、その裏で

三日目競技パート、バンデモニウム伏魔殿が終わりそのままバトルパートへと移行。

第一試合、クワトロケルベロス四つ首の番犬はエルフマン対バツカスの時の賭けに負けたので改名。

マイメイドヒール人魚の踵ミリアーナ対クワトロパビー四つ首の仔犬セムスの対決。

「ワ、ワイルド……」

「元氣最強？」

得意のロープを扱う魔法により、相手を雁字搦めにして戦闘不能にしたミリアーナの勝利。

続けて第二試合。セイバートウリス剣咬の虎ルーファス対ブルーベガサス青い天馬イヴの対決。

メモリーメイク「記憶造形『燃ユル大地ノ業』」

「うわあああ!!」

ルーファスの魔法、エンシエントスベル古代魔法『記憶の造形魔法』によりイヴの得意な雪の魔法は炎で溶かされて敗北。

記憶したものをそのまま映し出す、または複数を組み合わせ合わせて合わせ技として放つ記憶造形は、やはり強力な事が証明された。

「試合終了ー！イヴ、あのルーファスに大健闘でしたが届かない！勝者、剣咬の虎ルーファス！」

そして、試合は第三試合へと移る。

「……しかしまた随分と思いつたな、マルク。」

「十分囹になるだろうと思つてき、俺の力は。エキシビジョンマッチで俺の力見せておいた甲斐があった。」

「奴らからしてみれば、魔力を食らうなんて力は放っておかないだろうな。」

バトルパートが始まる前にマルクはリリーと共に大魔闘演武の会場を歩き回っていた。

リリーがいるのはいざと言う時の保険と、通信役であるウォーレンの声を聞くためである。

「……多分、あいつらはまた卑怯な手を使う。けど同じ方法を使えば、確実に怪しまれる。」

フェアリーテイル妖精の尻尾が勝ち進んで、観客から関心を寄せている今、特に。」

「さて、引つかかってくれるかどうか……む？」

その時、リリーとマルクが目の前から歩いてくる人物に気づく。見覚えはあった、レイヴンにいたリザーブ枠の1人であるマホーグ・オロシであった。

「や、やっぱり……来てた……こ、来ないで!!」

「さて、なんで来て欲しくないんだ？」

「あ、あ、貴方が私を食べるからに決まってる!!」

「……食べる？」

「い、イワン様が……言つてたもん……貴方が私達の邪魔をして……みんな殺して食べちゃうって!!」

マルクは溜息をつきながら、マスター・イワンに少し腹を立てていた。『人肉なんて食うわけないだろ』と。

「だ、だから……先に殺されないように……殺せつて!!」

「っ！リリー!!」

「分かつている!」

一瞬でマルクの目の前までくるマホーグ。勢いよくマルクの体を切り裂こうとした大剣を、リリーが咄嗟に自分の剣で防ぐ。

「ひっ！筋肉猫おぼけ!!」

「筋肉猫おぼけ……!?!」

「来ないで来ないで来ないで!!」

振り回される大剣、何故かその力にリリーは押されていた。リリーよりも素早く振り抜き、リリーよりも力強い一撃が連続で叩き込まれていく。

「くっ……オオツ!!」

「っー」

反撃でリリーは剣を振り抜く。しかし、マホーグはそれを予測していたかのように、その一撃をかわす。

「ぬう……!」

「リリー下がれ!多分こいつ攻撃が当たらねえ!!」

「そ、そそ……そう……よく、分かったね……私に……危害は加えられない……そういう『眼』を持ってから……」

「眼……危害を予知する、未来予知のようなものか。」

リリーが軽く推理するが、それは余計に相手の強さを確認できるだけだった。

「……けど、それだけでは体が動きについてくるはずがないと思うがな。」

「か、簡単な話……動けるように、体に筋肉を増強する魔法をかけてるだけ……移動は、ショートワープでいい……」

そ、それに……この武器は相手の魔法を無条件で、そ、相殺できる……から、私には……危害を加えられない……」

ペラペラと自分の魔法を喋るマホーグ。余裕ぶっているのか、はたまたそうでないかは分からないが、相手は四つの魔法を同時にこなす逸材ということだけは、判明した。

「……相手の攻撃を眼で予知し、筋肉に無理やり動けるようにさせて、強力な一撃を当てる。」

確かに、これは厄介だ。」

「そ、そそ……そうでしょ……だから……死んで!!」

「……死んでたまるか。それに、危害を加える相手に危害を加えようとすんなら……その『眼』で俺のことを見てみる。」

マルクの体を上下に真つ二つにせんと、マホーグの剣が振られる。マルクはそれを見切つて、肘と膝で挟んで剣を受け止めた。

「え……な、なんで……」

「……悪いが、あんたは剣を振ることに慣れなさすぎだ。振っても振っても、その太刀一つ一つがリリーやエルザさんにまるで及ばない。」

「け、剣なんて覚えたならそれこそ本気で殺しにかかれる！私は自分の身を守るならそれでいい!!」

「……なら、満足するまで俺とやればいいさ。」

「こ、殺されたりなんか……しない……」

マルクから何とか剣を抜いて、マホーグは再び切りかかる。だが、剣が振られる度にマルクはそれを受け止めていく。

「……な、なんで……なんでなんでなんで!!」

「……何をそんなに怖がってる？その怯えは……俺やリリーに大してじゃないだろ？」

「あ、当たり前!!世の中全部……みんな怖い!!」

マホーグは涙を流し始める。少しだけそれに驚いたマルクだったが、振られる剣を受け止め続けるためにすぐに切り替える。

「イワン様も、研究所の人間も、親も……みんなみんな怖い!!」

「……研究所……?」

「フレアお姉様がボコボコにされてて！私をいっぱい痛くして！私を捨てた！人は簡単に人を傷つける!!」

「……」

マホーグの慟哭。剣は激しさを一層増していくが、振っているというよりは振らされている、と言っても過言ではない形になっていく。

「見えない、何も見えない見えない！あんたが攻撃するのが分からないのが怖い！あんたの中が怖い！あんたそのものが怖い！」

「マルク!!」

「手を出すなよりリリー、絶対にな。」

剣は変形し、大槌となる。斬るよりも殴る事を優先させたその変形に、マルクは内心焦り始めていた。

「こ、これなら受け止めても問題ない……そのまま魔力で吹き飛ばせる……反撃なんてさせない……」

「……イワンのことを怖がるなら、なんでレイヴンにいる？なんで抜けようとしらない？」

「さ、最初は……優しいフリをされた……けど、けどけど!!あの人も他と一緒にだった!!」

受け止めるではなく、かわす方に集中し始めるマルク。一撃一撃が、床を抉り、壁をひび割れさせ、天井に穴を開ける。

「フレアお姉様は何も悪くない!何も悪くないのに殴ろうとした!!あの人は優しいのに!!」

「……そうだな。」

「でも逃げたら……逃げたら殺されちゃう……そんなの嫌だ、嫌嫌嫌嫌!!」

再び形を変えて、今度は細長い形になる。まるで槍のような形だった。マホーグははそのままマルクに向かって、突進していく。

「……っ!!」

「え——」

「なっ……!?!」

マルクは隙を見て、最低限の動きだけで避ける。服は少し穴が空いてしまったが、ダメージは無かった。

しかし、マホーグやリリーが驚いているのは、そこじゃなかった。マルクは、マホーグを抱きしめていた。

「痛くされるのは怖いだろう、暴力を振るわれるのは怖いだろう、捨てられたのはさぞかし怖かっただろう。」

「え、あ……」

頭をポンポンと撫でながら、まるで赤ん坊をあやすかのようにマルクはマホーグを抱きしめていた。

マホーグは困惑しきっていたが、剣を手放してくれた。

「……俺はお前を食べないよ。人間が人間を物理的に食うわけないじゃん。」

「……痛く、しない？」

「しないよ。大鴉の尻尾は悪いところで……まあ、正直に言えば気に入らないけど。」

「っ……」

「でも、流石にこんな怯えてる相手に振るうものは何も無い。」

「あ……」

少しだけ離して、マルクはマホーグに笑いかける。マホーグはそれだけで安心したのか、そのまま倒れる。

「……い、今お前何をした？」

「え？いや……怖い怖いって言うし……子供っぽいと思ったから、抱きしめて人肌の温度であやしてやればいいかなって。」

「いや、なぜそいつが気絶したのかということだが。」

「……緊張の糸が切れたんじゃないかな。あんなだけ暴力を振るわれることと、他人に対しての警戒が強いんだ。」

その警戒が解けたら、そりゃあ相手が目の前にも眠っちゃうもんじゃないのか？」

リリーは複雑そうな顔をしていたが、ともかくマホーグの襲来はこれで回避できたと言うのが、よく分かった。

「ともかく、こいつを憲兵に引き渡せば任務は終了だな。」

「……まだ引き渡すのはやめないか？」

「何故だ？場外乱闘を仕掛けてきたんだぞ？」

「いや、『魔法を潰せる』ってやつを場外乱闘に選んだんだ。これはレイヴンが何かしらの行動をするだろうさ。」

「妨害かルール違反か……それは分からないが、そのせんが確実になったということだな。」

マホーグをおんぶして、マルクは来た道に戻っていた。リリーもそれに付いていく。

「どこに行く気だ？」

「医務室。ちよつと気になる事がある。」

「気になること……四つの魔法をほぼ同時に使いこなせる、その魔力量か。」

「ああ……最悪、体をいじくっている可能性もあるしな。」

異世界エドラスにいた、もう一人の自分のことを思い出しながらマルクは返事をしていった。

「……だから、ポーリュシカさんに見てもらおうと思っている。」
「なるほど、了解した。ならば俺は、マスターにそのことを伝えに行こう。」

「頼むよ。試合見れるように頑張らないとな。」

リリーと一旦別れてから、マルクはマホーグを医務室にいるポーリュシカの元に連れていくのであった。

「……いや、この子は体をどこも改造されてないよ。綺麗な体のままさ。」

「……となると、純粋な魔力量だけで魔法を4つも……」

「だが、これに関してはこの子の苦しみもわかるねえ……あんたの言う通り純粋な魔力量だけだが……とんでもない大きさだ。」
「というところ？」

「魔力量だけでいうなら、マカロフ以上だ。けど、それを使う体に魔力量の大きさが毒となって襲い続けている。」

マホーグを見て、ポーリュシカはマルクにそう伝える。体が成長すると、その成長に合わせて魔力も大きくなっていく。

しかし、希に生まれた時から体に負担がかかるほど大きな魔力を背負っている子供が生まれることがある。それが、マホーグだった。

「でも、魔力量で苦しんでるようには……」

「そうだろうね、あんたがさつき言ってた『眼』が、ほぼ常時発動しているとしたら……そのとんでもない魔力も、常に消費されるから幸いにも魔力が毒にならずに済んでいる……と言ったところかね。」

「……じゃあ、研究所って言うのは……」

「魔力が生まれつき多い子供、特殊な魔力や魔法を生まれつき持っているもの……そんな子供たちを集めた実験施設のことだろう。」

今は安らかに寝てるマホーグの顔を見て、マルクは同情を向ける。いけないことだとは分かっているけど、悲しみを向けてしまっていた。

「……とりあえず、試合を見に行きな。第二試合が今さつき終わったところだ。」

「えつと……妖精の尻尾は？」

「まだどちらにも出てないよ。ほら、行った行った。」

ポーリュシカに催促され、マルクは渋々部屋から出る。マホーグのことが頭に引つかかったが、武器を取り上げた今は大丈夫だと思い、そのまま観客席に向かうのであった。

3 回戦バトルパートBチーム

「今試合どうなってます!?!」

大急ぎで観客席に到着するマルク。だが、その答えを聞く前に観客席にいる妖精の尻尾の様子を見て、なんとなく察しはついていた。

困惑していたのだ、誰も彼もが。

「マルク、こつちこつち。」

「カナさん……一体誰が……」

「ラクサスと、レイヴンの仮面の男……確か、アレクセイ。」

そう言っただけでカナはフィールドに目を向ける。マルクも釣られて見ると、そこではラクサスがアレクセイに、一方的に殴られ続けている光景だった。

「なんで、こんな……」

「わかんない……レイヴンの方になにか動きがあったとしか思えないけど、そんな動きしてないって答えが返ってきてる。」

「そんなことって……ん?」

「どうしたんだいマルク。」

何かに気づいたかのような声を上げるマルク。カナは問うが、マルクは答えづらそうに複雑な表情をしていた。

「いえ……なんか、魔力がおかしい気がする……二人とも魔力が全然動いてない、というか……」

「……えつと?」

「すいません、俺にも今一言葉が見つからなくて……でも、なら少しだけあれを試してみますか……」

「ほう……あのガキ、マホーグを打ち破ったか。」

「なんだ？ウエンデイ達のように、誰かをまた試合外で狙ってたってのか？」

3 回戦バトルパート。ラクサス対アレクセイの対決だが、二人は未だ一歩も動いていなかった。

当たり前だ、今戦っているのは幻なのだから。

「……マルクか。どうしてまた、アイツを狙う。」

『魔力を食らう魔導士』っただけでハクが付いている。つまりは金だ。あいつを売れば相当な資金が手に入る。」

「……腐りきってんな。オマケに意味がわからねえ、お前らがこの幻とやらで勝って、何になるってんだ？」

「その通り、我々の目的は勝利ではない。この幻影は周囲への目くらまし。」

「……ア？」

「幻影は幻影、結果は如何様にも変更できる。我々との交渉次第では、お前を勝たせてやることも出来る。」

「……話にならねえな。」

ラクサスは来ていた上着を脱ぎ捨て、雷を纏う。アレクセイのいう交渉が、既にラクサスにとってはクソ喰らえと言わんばかりであった。

「幻なんか関係ねえんだよ。今ここで、現実のお前を片付けて終わらだ。」

「——それは無理。」

「現実は厳しいでサー」

「……いかにお前といえど、大鴉の尻尾レイヴァンテイルの精鋭を同時には倒せんよ。」

「ククッ……」

突如現れるレイヴンのメンバー達。幻によって偽りのラクサス対アレクセイを観客は見せられているため、五人が出ていることなんて誰も気づいていなかった。

「そしてもうひとつ……俺の強さは知ってんだろバカ息子オ。」

「そんなことだろうと思っただぜ……クソ親父。」

アレクセイが仮面を外す。その中身は、レイヴンのマスター、イワンであった。

「マカロフは死んでも口を割らん。だが、お前は違う……教えてもらおうか、ルーメン・イストワールの在処を。」

「何の話だ……」

「とぼけなくていい、マカロフはお前に教えているはずだ。」

「本当に知らねえんだけどな……」

呆れるラクサス。最早、手がつけられないほどにイワンはラクサスの知る頃より強欲となっていた。

「いいや、お前は知っているはずだ。」

「まあ、例え知っててもあんたには教えねーよ。」

「オイオイ……この絶望的な状況で、価値を譲るって言うてんだぜ？条件が呑めねえってんならお前……幻で負けるだけじゃ済まねえぞ。」

「一々めんどくせえことしやがって……ジジイが見切りをつけたのもよくわかる。」

……それとな、一つだけ言っておいてやる。マルクがここにきた時点でお前らは負けてんだよ。」

「……何だど？」

瞬間、アレクセイ……否、イワンとラクサスの幻は消える。まるで何かにかき消されたかのように。

「やっぱり……!」

「ど、どういうことだ!」

「おーつと!?!これはどういうことだ!?!突然今まで戦っていたアレクセイとラクサスが消え、中からマスターイワン……い、いやレイヴンのメンバー全員とラクサスが出てきたぞー!?!」

「あのガキ!何しやがった!」

「知らなかったようだな、あいつは自分の魔力を周りに広げて魔法を発動させないエリアを作れるんだよ。」

ま、無理やりな方法で魔力と体力を相当消耗するらしいからよ……
本人はあまりやりたがらねえがな。」

「っ……………」

「だが……今回はこのまま戦ってやるよ。バカ親父にお灸を据えねえ
といけねえみてえだからな。」

指で、こちらに來いと挑発するラクサス。その挑発にイワンは青筋
を立てていた。つまり、ブチ切れていた。

「どうやら教えてやる必要があるみてえだな……対妖精の尻尾特化型
ギルドの力をよオ……………」

「対妖精の尻尾特化型ギルドだア？」

「その通り……………」

「我々は妖精の尻尾のメンバーそれぞれの苦手とする魔法の使い手の
みで構成されている。」

「ボク達はその中の精鋭4人だ。」

「その俺達と……戦争するつもりか？弱点は知り尽くしている。我が
ギルドの7年間貯めた力を解放しちゃうぜ？」

イワンの言葉で、ラクサスは更に呆れる。ここまで固執するのは、
最早異常なレベルだからだ。

「…………ジジイはあんたの事なんぞとつくに調査済みだ。」

構成人数、ギルドの場所、活動資金……この七年間の動向……すべ
て掴んでいる。

ジジイはそこまで掴んでいながら動かなかった。多分ジジイは心
のどこかであんたのことを信じてたんだろうな……親子だから。」

「…………黙れえ!!」

イワンがラクサスに向かって魔法を放つ。ラクサスはそれを片腕
でガードするが、勢いで少し押されていた。

「俺は、この日のために日陰で暮らしてきたんだよオ!!全てはルーメ
ン・イストワールを手に入れるため！」

7年間危害を加えなかっただア!?当たり前だろ！残ったカス共が
ルーメン・イストワールの情報を持つてるハズねえからな!!」

イワンの猛攻が続く。しかし、激昂しているためにイワンは気づい

ていなかった。自分の魔法を防いでいるラクサスは、未だ自身の魔法を解放していないことに。

「ギルドの中も！^{マグノリア}街も天狼島も!!ギルドゆかりの場所は全部探した!!それでも見つからねえ!!」

ルーメン・イストワールはどこだ!どこにある!!言ええええっ!!ラクサスウウ!!俺の息子だろおがアアアア!!」

激しくなってくる攻撃、イワンはオーブラに視線を移し合図をする。

「オーブラ!やれ!!魔力を消せ!!今こそ対妖精の尻尾特化型ギルドの力を解放せよ!!」

合図でオーブラは仕掛けようとする。だが、それを見逃すラクサスではなかった。

「こいつあウエンデイ達をやった奴か……!」

ここでラクサスは自身の魔力を解放し、稲妻のごとき速攻でオーブラに迫り殴り飛ばす。

この一撃でオーブラは終わっていた。

「赤髪!」

「ニードルブラスト!!」

そして一日目の試合でルーシイを倒したフレアと、グレイを倒したナルプディングがラクサスに迫る。

地面から襲いかかるフレアの髪を避け、その合間合間に攻撃を仕掛けてくるナルプディングの攻撃も避ける。

「こいつはグレイの分だ……!」

そして、また一撃。だが、ナルプディングを沈めたその瞬間にラクサスの腕にフレアの髪が巻き付く。

「捕まえたぞっ!!」

「こいつはルーシイの分!」

だが、即座にブレスを放ち、フレアもまた一撃で沈められる。

「バカな……」

「お前は……よくわからん。」

擬態魔法ミミックを使って、後ろから不意打ちを仕掛けようとした

クロヘビ。だが、すぐにバレてまたも一撃で終わらせられた。

「わ、我が精鋭部隊が……！」

「あんたの目的がなんだか知らねえが……やられた仲間のケジメは取らせてもらうぜ。」

「ま、まて！俺はお前の父親だぞ！！家族だ！父を殴るといふのか！！」

「俺の家族は妖精の尻尾だ……！家族の敵は俺が潰す！！」

そして、イワンにも一撃入れるラクサス。そのまま吹き飛ばされたイワンはフィールドの壁にぶつかり、めり込んでいた。

「……し、試合終了ー！！立っているのはラクサス！」

「……幻で隠し、見えないところで五人がかりの攻撃を行おうとしたこと、更にマスターの大会参戦……これはどう見ても反則じゃの。」

実況のこえにより、会場は盛り上がりつついく。ルール違反をおかしたレイヴンとの対決だったとはいえ、全員を倒したということでBチームに100pが入る。

試合は、妖精の尻尾の勝利で幕を閉じたのであった。

「……」

「大丈夫かい？」

「……ここまで膨大に広げたのは初めてでしたよほんと。」

「ま、あんたのおかげで不正も暴けたんだから良かったじゃないか。」

「……ラクサスさんなら、俺の力借りなくてもよかったですね。思いますけどね。」

観客席で倒れながら喋っているマルク。ラクサスが説明した通り、

マルクは魔法を無効化するエリアを一瞬だけ広げていた。

しかし、魔力よりもやはり体力と集中力を酷使しすぎたせいで、観客席で倒れていていた。

「一瞬でもいいさ。ラクサスなら普通に勝ってたかもしれないけどさ……あれ倒してラクサスが幻を潰していたかは微妙だし。」

「……俺、役に立ちましたかね。」

「少なくとも、役に立ってないなんて口が滑っても言えないさ。」

倒れているマルクの背中を叩きながら、カナは笑いかける。フィールドに視線を戻してみると、レイヴンのメンバーが全員国の兵士に連れられていかれていた。

「……仕掛けてきますかね、レイヴンは。」

「あくまでも、大会のルールを破っただけだからね……よほどのことがない限り仕掛けてくると思うよ。」

「……ま、不意打ちで仕掛けてこようものなら、反撃するだけです。」
「かつこいいこと言ってる時に悪いけど、その倒れた姿で言うのはかなりかつこ悪いよ。」

「言わないでくださいよその事は……」

ラクサスもフィールドから離れる。マルクも一旦頭からレイヴンの事を切り離して次の試合について思考を切り替える。

「次の試合は……あ、Aチームが残ってましたね。」

「ああ、んで他に残ってるのは蛇姫ラミアスケイルの鱗だ。誰が出てくるのか、どっちも楽しみだねえ。」

そう言っつて新たな酒樽を担ぎ上げて、中の酒を飲んでいくカナ。既に本日だけで何本飲んでいるのかわからないが、ギルドメンバーの殆どが苦笑を浮かべていた。

「……つて、何か次の試合のコール遅くないですか？」

「言われてみればそうだねえ……どうしたんだ？」

「えー、ただいま大鴉の尻尾のことについて運営委員会が協議を重ねております。もうしばらくお待ちください。」

と、実況席から声が聞こえてくる。それで一部のメンバーは納得していたが、マカロフは観客席の先の方で何やら激昂していた。

「次の試合……ウエンディはそろそろですかね。」

「だね、出すとしたらそろそろのはずだ。対戦相手がジユラとかじゃ無かったら、勝機はあると思うよ。」

「バトルパートは、どのギルドの誰とぶつかるかがわからないですもんね。」

「だから……ジユラがウエンディとぶつかる可能性もある。私は初代に三大魔法借りたから、数値上でなんとか勝てたけど……」

「ただのぶつかり合いで、ジユラさんに勝てる魔導士は……居るんでしょうか。少なくとも、この会場内で。」

その質問に明確な答えを返す者はいない。大前提として、ジユラとぶつかるかと立てていた戦略や、得意の戦法が全て無駄になるのだ。

その上で、あのジユラに勝てるのか……最早この大魔闘演武において、ジユラとぶつかることは、完全に終わりを意味する。

「ウエンディ……」

次の試合。余っている組み合わせで妖精の尻尾Aチーム対蛇姫の鱗となってしまうが、マルクはウエンディが怪我をしないことだけを祈っているのだった。

バトルパート最終戦、Aチーム

バトルパート3回戦、妖精の尻尾Bフェアリーテイルラクサス対大鴉の尻尾Aレイヴンテイルアレクセイの対決。

幻を使い見えないところでの五人がかりでの攻撃をかいくぐり、ラクサスはレイヴンを圧倒。

そしてレイヴンは五人がかりで攻撃したこと、アレクセイの正体がギルドマスターイワンだったこともあり、ルール違反で退場となった。

「協議の結果、大鴉の尻尾は失格となりました。大鴉の尻尾の大会出場権を三年間剥奪します。」

「当然じゃ。」

実況も少し困惑している様子だったが、気を取り直して次の試合へと望む。

「さて、なんとも後味の悪い結果となりましたが……続いて第四試合。本日最後の試合です。」

妖精の尻尾Aウエンデイ・マーベル対蛇姫ラミアスケイルの鱗シエリア・ブレンデイー！」

「ウエンデイイイイイイイイイ!!」

「煩い!!」

「おい誰かマルク止めろー!フィールドに乗り込みかねないぞ!!」

やたらテンションの高いマルク。それもそうだ、彼にとっては待ちに待ったウエンデイの試合なのだから。

しかし、内心は傷ついて欲しくないと思ってもいるのだが。

「きやうー!」

「あ、あの大丈夫ですか?あう!」

二人とも、どこか同じ部分があるのかフィールドに出た途端にコケてしまっていた。

会場も、先程の困惑した雰囲気はどこへやら和やかな空気に変わっていた。

「これはなんとも可愛らしい対決となったぞー!!オジサンどっちも応

援しちやうピョーン！」

「あんたキャラ変わったとるよ。」

「ん……？」

マルクは一瞬止まる。大魔闘演武のこの会場で、何か気になる魔力を感じ取ったからだ。

だが、それがどこにあるのか全く判別できてないので、心に引っかかりながらもウエンディの試合を見守ることにしたのであった。

「大魔闘演武三日目最終試合、妖精の尻尾Aウエンディ対蛇姫の鱗シエリア！試合開始です!!」

これは可愛らしい組み合わせになりましたー!!オジサンもううっれしー!!」

「……あの実況さういう……」

「マルク、実況×に行くのだけは止めておきな。」

マカオに止められ、マルクは一旦収まりウエンディ達の方に視線を向ける。

「行きますー！攻撃力強化速度上昇付加……天竜の翼撃!!」

ウエンディお得意のエンチャント。それにより、攻撃力と速度を増した天竜の翼撃は、乱気流と言わんばかりの豪風が吹き荒れる。

「よっ……」

「かわした!?!」

しかし、シエリアは見事にそのすべてをかわしきり、自身も構える。

「天『神』の……北風!」

「うわっ……!」

ウエンディに襲いかかる黒い風。ウエンディと同じような風の使い方に、黒色の風。

それが何を意味するかは、自ずと答えが出てくる。

「すごいー！これ避けるんだね!!だったら……天神の舞!」

「うわああああ!!」

避けたのも束の間、ウエンディはシエリアの風によって持ち上げられ、上空に吹き飛ばされる。

「まだまだ!!」

シエリアが追撃しようと跳び上がったウエンディに迫ろうとした瞬間、ウエンディはその場でなんとか吹き飛ばされるのを止めてから、カウンターを行う。

「天竜の鉤爪！」

「うっ……！」

そして、二人は同時に地面に着地し、そして同時にブレスを構えた。

「天竜の——」

「天神の——」

「ウエンディと同じ……いや、同じであつた全く異質のこの魔法……まさか!!」

失われた魔法ロストマジック天空の滅神魔法……それが、シエリアの使う魔法の正体だつた。

「——咆哮！」

「——怒号!!」

ぶつかり合う風と風。2つのぶつかり合いが、会場全体にとんでもない暴風を巻き起こす。

「——天空の、滅神ゴッドスレイヤー魔導士……!？」

「ウエンディ!!」

立っていたのはシエリア。最早違和感さえ覚えるほど無傷で、シエリアはボロボロになっていた。

「な、なんと！可愛らしい見た目に反し二人ともすごい！凄い魔導士だーっ!!」

「今のぶつかり合いでも無傷とか、どんだけ力の差があるっていうんだよ!!」

「いや、おかしい……ウエンディと同じ魔法なのに……ウエンディと同じ、魔法?」

違和感を持つマルク。滅神魔法は、一概に滅竜魔法の上位互換という訳では無いが、概ねそのような魔法である。

つまり、ウエンディと同じ風ということは使える魔法の種類も当然似通ってくるのだ。

「リオンから聞いてたんだ、妖精の尻尾にあたしと同じ魔法使うコイ

るって。

ちよつとやりすぎちゃったかな?ごめんね、痛くなかった?」

「……平気です、戦いですから。」

「折角だからもつと楽しもつ!ね。」

しかし、答えに行き着く前に二人の戦いは過ぎていく。神殺しと竜殺しの戦いが。

「私、戦いを楽しむって……よく分からないですけど……ギルドのために、頑張ります。」

「うん!それでいいと思うよ。あたしも『愛』とギルドの為に頑張る!」

そして、シエリアの魔法がウエンディを吹き飛ばす。既に傷だらけで満身創痍のウエンディ。しかし、彼女はギブアップをするほど精神はヤワではなかった。

「同じ風の魔法を使う者同士!シエリアたんが一枚上手か!?!」

「正しくは『天空魔法』な。」

「う、うう……!スウウウウ……!」

吹き飛ばされたウエンディ。尻餅はつくことなく、踏みとどまった。そして、魔力を溜めるために空気を食べ始める。

「あ!やっぱり空気を食べるんだね!じゃああたしも……いただきまふう……!」

「こ、これは……ウエンディたんシエリアたん何をしているのでしょう?気のせいかな、酸素が少し薄くなった気がします。」

「――滅竜奥義!」

「出た!ウエンディの滅竜奥義!」

ウエンディとシエリアを中心として風が吹き荒れ始める。それは竜巻となり、二人を閉じ込める暴風の牢獄となる。

「照破……」

「風の結界!?閉じ込められた!?!」

その風の牢獄も、時期に消える。天を穿つ一撃のために必要なだけだったのだから。

「――天空穿!」

シエリアを吹き飛ばし、風の牢獄は無くなる。だが、その強大な一撃によってシエリアの体はボロボロになってしまっていた。

「やった……!」

マルクは自分のことのように喜び始める。明らかに誰が見ても完璧な決着。この結果に、誰もが納得しかけた。

「シエリアダウン!勝者——」

「あうぐごめんね!ちよつと待って……まだまだこれからだから!!ふうー、やっぱすごいねウエンディ!」

だが、立ち上がったシエリアの体には傷一つついていなかった。服こそ数力所敗れてしまっているものの、それは服だけの話でありシエリア自身にはなんの傷もついていなかった。

「……天空魔法の、回復……自己回復できるんだ……!」

「はあ!?つまりウエンディがどれだけダメージを与えても、向こうは回復してくるってのか!」

『自己回復』はウエンディができない事だった。あくまでも他人を治療し、その体力を回復させるのがウエンディの魔法なのだから。

「はあ、はあ……はあ……」

「降参しないの……かな?あたし、戦うのは嫌いじゃないけど……勝敗の見えてる一方的な暴力は『愛』がないと思うの。」

「うくつ……うう……!」

「ウエンディ……!」

『今すぐ飛び出したい』『代わりに戦ってやりたい』と思うマルク。だが、我慢して止まっていた。

あれは彼女が望んだこと、Aチーム一つ目のリザーブ枠として彼女が出ることを望んだのなら、それは止めてはいけないとマルクは考えていた。

「降参してもいいよ……ね。」

「……出来ません。私がここに立っているということは、私にもギルドの為に戦う覚悟があるということです。」

情けはいりません……私が倒れて動けなくなるまで、全力で来てください!!お願いします!!」

「……うん！それが礼儀だよね！」

「はい！」

「じゃあ……今度はあたしが大技出すよ！この一撃で楽にしてあげるからね!! 『滅神奥義』!!」

瞬間、シエリアの魔力が膨大に膨れ上がる。異常な程に膨大で、暴風など生易しいと感じるほどの。

『これが直撃すれば今のウエンディは死ぬ』と、直感的にマルクが感じるほどに。

「全力の気持ちには全力で答える!!それが『愛』!!」

「おいおいおい！あれやべーぞ!!あんなの受けたらウエンディが死ぬじまう!!」

「天ノ叢雲!!」

放たれる神をも屠る一撃。そのうねりは神の一撃の体現である、と錯覚するほどに強力な一撃。

「——ウエンディイイイイイイイイ!!」

マルクが叫ぶ、滅神奥義はうねりをウエンディに伸ばし……外していた。

「よけた!？」

「いや……外れた。」

「ほっ……」

「ああそうか、あのシエリアって子の自己回復は自分の体力まで回復できないんだ。」

カナが、真面目な顔でそう告げる。ウエンディの回復は、相手の傷も体力もまとめて回復が可能である。自己回復は、不可能になっているが。

「あっ……シエリアの体力を回復させた!!」

「そういう事、相手の魔法に勢いをつけさせて無理やり外させた……やるねえ、ウエンディ。」

「なんて戦法！凄いい!!」

「天竜の碎牙！」

ぶつかり合うシエリアとウエンディ。互いが互いの天空魔法をひ

たすらぶつけ合う。その確固たる意思がなせる理由は信念か、意地なのか、それともまた別のものなのか。

「ぶつかり合う小さな拳！その執念はギルドの為か!？」

「っ……………」

見入る観客達、少女達の思いはその拳に、その背中に乗るにはあまりにも大きい。

ウエンデイが攻撃し、シエリアが回復する。傷の回復ができないウエンデイは傷ついていく。

「……頑張れ……」

『止められない』『止めちゃあならない』

ウエンデイの思いを邪魔してはいけないと、マルクは必死に耐える。ずっと見守ってきたつもりだったが、マルクすらも知らない間にウエンデイは強くなっていった。

そして、誰にも止めることが許されない状況は――

「――時間切れ！試合終了、この勝負引き分け!!両チームに5pずつ入ります!!この試合おじさんのにベストバウト決定ー!!」

「ウエンデイ……………ウエンデイ……………」

「なんだいマルク、ボロ泣きじゃないのさ……………でも、気持ちはわかるよ。」

その涙は、悲しみではないとマルクは分かっていた。だが、その涙が流れたのは一体どんな理由か……………少なくとも、それは嫌なものではなかった。

「痛かった？ごめんね？」

「いえ……………そればかりですね。」

笑い合うウエンデイとシエリア。先程までぶつかりあっていた者達とは思えないほど、微笑ましいものだった。

「楽しかったよ、ウエンデイ。」

「わ、私も少しだけ楽しかったです。」

「ね！友達になろうウエンデイ。」

「は、はい……………私なんかで良ければ……………」

「違うよ！友達同士の返事……………友達になろう、ウエンデイ。」

シエリアの言葉で、一瞬だけキョトンとするウエンデイ。しかし、伸ばされた手を見てすぐにウエンデイも同じように手を伸ばす。

「うん！シエリア！」

「なんと感動的なラストー！オジサン的にはこれで大会終了ー！！」

「これこれ……『三日目』終了じや。」

「皆さんありがとうございました。」

その日の夜、酒場で妖精の尻尾は騒いでいた。飲めや食えや、そして試合のことでの大騒ぎ。

「ウゝェンヅディー！」

「ま、マルク……恥ずかしいよ……」

ウエンデイに抱きついているマルク。わんわん泣きながら笑顔になっていた。そしてウエンデイは抱きつかれることに赤面して顔を真っ赤にしていた。

「いやあ、確かに凄かったなあウエンデイ。」

「マルクがいつ試合妨害に入らないかとひやひやしたぜ……特に、相手の子の技が使われた時とかよ。」

「おゝおゝおん！」

「ラミアの犬っぽい人みたいな声を出すなよ。」

「滅多に見ないわねこんなマルク……」

グレイとルーシィが苦笑いでツツコムが、マルクは全く気にするごとくなくずつと抱きついていた。

「ていうかあんた、いつまで抱きついてるつもり？」

「……ずっと?」

「殴り飛ばすわよ?! あんたお風呂の時とかも入ってくるつもり!」

「ひゃう……! そ、それは恥ずかしいよ……」

「……っ!」

『それもそうだ』という顔になるマルク。やっと理性が戻ったのか、ようやくウエンデイから離れる。

ウエンデイの顔は未だに真っ赤になっていたが。

「まったく……」

「……どうえくいとうえるうううう……?」

「巻舌風に言わないで欲しい……」

と、一悶着あったものの……試合結果に喜ぶこの騒ぎはまだ続いていくのであった。

リユウゼツランド

大魔闘演武三日目、結果としてAチームBチームが競技パート1、2フィンニツシユで決めてその日は終了した。

そして、大魔闘演武も折り返し地点に来ているということなので、その日の夜の酒場で、レヴィイからみんなに提案があった。

「プールだど？」

「わあ！」

「近くにあるの？」

「フィオーレ有数のサマーレンジャースポット『リユウゼツランド』ってところがね。」

「行くしかねーだろー！」

「あちいもんな。」

「プール……」

各々が反応を示すなか、妖精フェアリーテイルの尻尾総出で夜のプールに赴くことになったのであった。

「着いたー！」

「広いですね。」

「んー、気持ちいいな。」

ただのプールではなく、サマーレンジャースポットというだけあって、リユウゼツランドはかなり大きいプール施設であった。

人工的に波を作り出すプールや、ウォータースライダー、さらに

プールから直接繋がっている水族館まで兼ね備えている。

そして何より、とんでもない広さを持つていた。

「……確かに広いみたいですね、ええ。いえちゃんと見てますし見えてますよ。」

「あんた目隠ししてるのに、見えてるわけないでしょう……」

マルクは目に布を巻き付けて視界を完全に閉ざしていた。一応、水着は着ているものの、プールに来てまで目隠しする必要性はあるのか、という話である。

「そんなに恥ずかしいのなら、お前は残っていた方が良かったんじゃないか？」

「……ウエンデイに危険が迫らないように、です。プールにも事故はありませんから。」

「ぞっこんね〜」

「……」

ウエンデイはマルクに黙って近づいて、彼がつけている目隠しの結び目を解く。

当然、目隠しは外れてマルクの視界は明るいプールのライトと、水着を着ている人々で埋め尽くされる。

「なっ!? う、ウエンデイ!?!」

「……ちゃんと着てるんだし、見てくれないとちよつと寂しいかも。」

「は、はい……」

お互い顔を真っ赤にさせながら、一緒に歩き出す二人。そんな二人を見てルーシイとエルザは、密かにニヤニヤと笑っていた。

「ウエンデイー!」

「あー! シェリア達も来てたの!」

シェリア・ブレンデイ。蛇姫ラミアスケイルの鱗の魔導士であり、天空の滅神魔法

の使い手でもある。

ウエンデイとバトルパートで戦い、引き分けの後に友達となった。

「今日はいい戦いだっただね、怪我大丈夫?」

「はい! おかげさまで!」

「また敬語になってる。」

「あ……癖で、つい……」

友人らしく、和やかに会話する二人。するとシエリアはマルクの存在に気づいたのか、マルクの方にも視線を向ける。

「……ウエンデイの『愛』してる人？」

「ぶはっ!？」

「ち、ちちち違うよ!?! え、えっと、違わないけどそうじゃなくて……!」

シエリアの言葉で、真っ赤になるウエンデイとマルク。シエリアはニコニコしながら二人を見ていた。

「愛情は色々あるから、そこまで焦らなくていいんだよ? ほら、ウエンデイとあなたも一緒に向こうで遊ぼ?」

「う、うん!」

「あ、ああ……ん?」

赤面していたマルクだったが、一瞬冷静な顔になったかと思えば、小さく魔力の塊を生み出して、よくわからない方向へと投げた。

「マルク? どうしたの?」

「ん? いや、下心ありで見ていた人をちよつと狙っただけだ。」

「……?」

シエリアとウエンデイは顔を見合わせて、疑問符を浮かべていた。ウエンデイの頭の中に、ウオーレンの通信の魔法で聞こえてくるウオーレンの悲鳴が何か関係しているのかと、ウエンデイは気になったのであった。

「改めて自己紹介、俺の名前はマルク・スーリアって言うんだ。マルク

「とでもなんとも呼んでくれ、よろしくな。」

「よろしくマルク、私の事もシエリアでいいよ。でもなんで天井向いてるの?」

「ん、いや気にしないでくれ。天を仰ぎたくなる性格なんだ。」
「……」

シエリアの体を見て、自分の胸に手を当てるウエンディ。水着としては柄を除いて、ほとんど同じビキニのような水着を着ている二人だが、スタイルの違いが如実に現れていた。

簡単に言えば、スタイルの格差社会である。

「やっぱりお胸なんですか。」

「う、ウエンディ?なんか戦った時より迫力があるんだけど?」

ジト目でシエリアの胸を凝視するウエンディ。流石に恥ずかしいのか、シエリアは自分の胸を隠していた。

「そ、そう言えば!マルクはどんな魔法使うの!」

「え、ああ…俺も滅竜ドラゴンスレイヤー魔導士だよ。魔龍…魔法の魔力とかを食べるんだ。」

「……魔力、を……?」

少し気まづくなり、マルクに話を振るシエリア。だが、マルクの言ったことに疑問を抱いたのか、首を傾げていた。

「どうしたの?」

「……ううん、随分珍しい魔法もあるんだなあって。属性が分からないのって、珍しいね。」

「属性…確かに、深く考えたことなかった。」

「でも私は神様を殺せる魔法だし…珍しさで言えば変わらないのかな。」

シエリアはそれで解決していたが、改めて気付かされた自分の魔法の異質さに、マルクは首を傾げていた。

しかし、今は楽しい時間なのである。難しいことは後で考えようとして、一旦頭の隅に追いやったのであった。

「あ、ボート借りてこようよ。レンタルできるんだってさ。」

「じゃあ俺が行ってくるから、二人はここで遊んどいてくれ。どんな

「ボートがいい？」

「バナナのとか楽しそうだし、それお願いできる？」

「ん、バナナね。」

そう言っただけマルクは一旦上がって、店にまで歩いていく。二人が乗れるくらい大きなのを見つけて、それを借りようと決めてから店員に話しかける。

「すいませーん、このバナナボート貸して……」

「い、いいいいいらっしやい……ませ……」

「……大鴉の尻尾レイザンテイルの奴が、なんでこんなところ？」

そこにいた店員は、大鴉の尻尾のメンバーであり、マルクを誰も見えないところで襲ってきた本人。マホーグ・オロシであった。

「バ、バイト……お、お城の人が……お、教えてくれた……から……」

「……まあいいや、今ここで暴れない限りは手を出すつもりないし。えっと、バナナボート。」

「……ひ、一つだけ……聞かせて？」

「何だよ。」

マホーグは、怯えながらもマルクの目を見る。マルクも、それに唯ならぬ雰囲気を感じて見返す。

「な、なんで……あの時私を攻撃しようとしなかったの……？」

「あの時……ああ、襲ってきた時か。いや、だって……あんな怯えてたら攻撃する気失せるし。」

「で、でもあの筋肉猫おぼけは……ずっと私を攻撃しようとした……」

「ん？あの時のリリーは防御一辺倒だったような……」

「こ、攻撃しようとする直前に……な、何度もぶつけて、攻撃させなかった……」

技術いらず。相手の攻撃を読める『眼』と、相手のパワーを簡単に超える魔法さえあれば、技術が無くとも攻撃の対処は出来るのだ。少なくとも、このマホーグには。

「通りで……」

「で、でも……相手が攻撃してこないと、『眼』は……つ、使えない、か

ら……何を、どうしたらいいのか、全く……何もわからなかった……」
「そりゃあな……あんな怯えられてて攻撃しようとするなんて、さすがの俺もそこまで畜生じゃあないよ……」

「……そ、それで……なんで、攻撃しなかったの……？」

「いや、だから怯えてるやつに攻撃できないよ。それに……つらそうにしてたから余計に。」

「……そ、そう……」

赤面するマホーグ。急に真っ赤になった理由がわからないマルクは、首を傾げていた。

「……マホーグはあ……優しくされたら誰彼構わず惚れるう……チヨロい子お……」

「っ!？」

唐突に後ろから聞こえてきた声に対して、驚いて咄嗟に振り向くマルク。しかし、その場には誰もいなかった。

代わりに、足元に赤い髪が落ちていたが……マルクはそれに気づくことは無かった。

「げ、幻聴……？オレまだ疲れてるのかな……」

「ど、どうした……の？」

「い、いや……」

「……はい、バナナボート……」

「あ、ありがとう……」

バナナボートを手渡すマホーグ。マルクも恐る恐る受け取ってから、金を払ってその場を後にする。

「……逃がさない、から……」

「ひっ!？」

後ろから聞こえてきた言葉に、何故か猛烈に寒気を感じてしまったマルク。冬でも入れるようにできているリュウゼツランドが、温水プールで良かったと思ったのであった。

「……どうしたのマルク!? 顔真っ青だよ!？」

「わ、わかんない……何か、嫌な予感がすごい立ってる……」

「冷えたのかなあ……」

「そんなに寒くないと思うけど……」

「と、とりあえず……バナナボート借りてきた。」

プールの水面にバナナボートを置き、水中に潜ってボートを支えるマルク。その間にシエリアとウエンデイはボートの両端にそれぞれ乗る。

「ふはっ……にしても、プールに来るって言うのも多少はいいもんだなあ……」

ボートの上で水をかけあつて遊んでいる二人を視界に入れながら、どこか遠くを見つめるマルク。

大魔闘演武では色々あったが、こういう休憩もありだろう……そう思いながら、羽を休めるのであった。

「……何だか、寒くない?」

「言われてみればそんな気が……」

「どうしたー?冷えたかー?」

しばらく遊んでいる内に、寒さを感じてきていたウエンデイとシエリア。マルクは肩まで水に浸かりっぱなしなので、同じように体温が下がっているためか余り感じていなかった。

「……う、ううん。ただちよつと肌寒いような……」

「そう言えばなんか寒いようなくふお!」

「きやつ!」

「えっ!」

近くに固まっていた3人。突然、横から何かが当たってきて持ち上

げられて、運ばれてしまう。

「いてて……ここは……」

「う、ウォーターズライダー……？何でこんなところに……」

気づけばマルクを挟む形で、3人一緒にウォーターズライダーに流されていた。

本来二人用であるライダー『ラブラブウォーターズライダー』という名前のそれは、カップルが抱き合う形で滑るものである。

「さ、三人だと狭い……」

「は、離れるなよ!?落ちたらやばい!!」

「ま、マルク近い、近いよ……」

しかし、3人一緒に滑るとなると……必要以上に抱き合う必要性があった。無論、三人は赤面するしかなかった。

マルクは、女子二人よりも遥かに真っ赤になっていたが。

「ってあれ……ナツさん!」

「うわほんとだ……アトラクション壊してる……」

「あーリオンもここ滑ってる!」

「一緒にいるのは 그레이さんか……てかあの二人ウォーターズライダー凍らせてないか!」

ウォーターズライダーの滑り出しには、ハートマークのゲートが用意されていたのだが、ナツはそれに引っかかってそのままウォーターズライダーを滑走中。

グレイとリオンは、何故か二人一緒に滑っていて……喧嘩をしながらウォーターズライダーを凍らせていた。

「っ！二人とももつと俺のそばによれ!」

「へ!」

「な、何を……きやつ!」

マルクは二人をより強く抱き締めて、自分の魔力を三人を覆うように溢れさせる。

その直後、マルク達が滑っていたところは見事に凍りついた。

「……ふう、なんとか成功した……」

「せ、狭いけどね……」

マルクは、ウエンデイ達が凍らない様に凍結させる魔力を防いだのだ。おかげでマルク達のいるスペースだけ、凍らないですんでいた。寒いことに変わりはないが。

「――プールを凍らせるやつが、あるかアアア!!」

「えっ……」

凍ることは、グレイ達の様子を見ていたのですぐに理解できた。だが、その直後にナツが魔法で氷を砕くことだけは……予想していなかった。そして、その破壊力も。

「……ウエンデイー、シエリアー、大丈夫かー……」

「なんとかー」

全壊したプール。ナツとグレイは、いつの間にか来ていたラクサスにお仕置きを受けてボコボコにされており、そのラクサスと一緒に来ていたマカロフとメイビスは、修繕費の問題で大泣きしていた。

「……服、消し飛んでないといいなあ……」

「……そうだねえ……」

「いきなり明日から殆どのギルドが水着着用……どんな光景だよ……」

なんとか瓦礫から着替えを発掘するマルク達。着替えた後、苦笑いしながらも三人別れてそれぞれのギルドへと帰って行くのであった。

四日目競技パート

「さあ始まりました。四日目競技パート。」

「水中相撲といったトコかね。」

「楽しみですね、ありがとうございます。」

大魔闘演武四日目。ゲストには、シエラザード劇団の座長ラビアンを迎えて始まった。

ナバルバトル海戦、それが今回の競技である。

ルールは単純明快、フィールドの中心に作られた巨大な水の球、そこから出たら失格であり、最後まで残った者が勝者というルールである。

但し、最後に二人だけ残った場合特殊ルールが追加される。

『5分間ルール』最後の二人になってからは、二人になった直後の5分間に場外に出してしまった者は最下位となるルールである。

「Bチームからはジュビアさん、Aチームからはルーシイさんですか……」

「水をそのまま操れるジュビアと、アクエリアスのいるルーシイ……さて、これは面白い勝負になりそうだ。」

「けど……」

カナとマルクは、巨大水球を見る。各チームから1人ずつの為、当然剣咬セイバートウリスの虎も参戦する。しかも、今回はリザーブ枠で入っている……最強の5人と言われている一人が参加していた。

「出ました！ミネルバー!!この大歓声ーっ！」

「剣咬の虎の最強の5人が揃った訳だね。」

「ありがとうございます!!」

剣咬の虎最強の5人が一人、ミネルバ。どんな魔法を使うかはまだわからないが、警戒しておいて損は無い相手だった。

「……にしても、この絵面はなんとかならなかったのか……!」

「あんたには刺激が強すぎるねえ。一人除いてみんな女子だ。」

ミネルバ、ルーシイ、ジュビアを除いた3人の参加者。

重力魔法の使い手、マイメイドヒール人魚の踵リズリー。

天空の滅神魔法の使い手、蛇姫の鱗ラミアスケイルシエリア。
ミラと同じような変身魔法を使う、青い天馬ブルーベガサスジェニー、イヴと交代
である。

そして場合によっては、今回嫉妬されかねない四つ首の仔犬クワトロパピーロッ
カー……唯一の男である。

以上7人が今回の参加者である。

「ルールは簡単！水中から出たら負け!!ナバルバトル開始です!!」

「早速だけど……みんなごめんね！開け！宝瓶宮の扉!!アクエリアス
!!」

「オオオオオ!!水中は私の庭よオ!!」

バトル開始の合図と共に、ルーシィはアクエリアス呼び出す。ア
クエリアスは水を操れる星霊なので、今回に適しているのである。

「させない!!水流台風!!」
ウォーターサイクロン

しかし、アクエリアスが水を操れるように、ジュビアもまた水を操
れるのだ。

二つの水流がぶつかり合い、周りの者達は混乱する。流れが不規則
になっているからだ。

「ジュビア!!」

「恋敵!!」

「なんだいこれは……!」

「互角!」

「だったら今の内に……まず1人!!」

「ワイルドオ!!」

水流が不規則になっているに便乗して、ジェニーはロッカーを水中
から蹴り出す。よってここで四つ首の仔犬は失格。

「そのあいだに貴方も!!」

「ぽつちりなめちやいけなよ!!」

シエリアも、リズリーを出そうとしたが、重力を操るリズリーはそ
れを難なくかわす。

「あれ、アクエリアスさん消えましたよ。」

「デートだろ?あれ、スコーピオンと出来てるし。」

「スキあり!!」

カナの言う通り、デートの為にアクエリアスは勝手に帰っていったのである。

その隙を突かれて、ルーシイはジュビアによって吹き飛ばされる。

「バルゴ！アリエス!!」

「セクシーガードです！姫！」

「モコモコですみませーん……」

アリエスのモコモコと、バルゴの支えでなんとか水球から出ずに済んだルーシイ。

その間も他のところで乱戦が行われていた。

「水中の激戦が続いています!!頑張れっ！シエリアたん！妖精の尻尾フェアリーテイル

Aよ！何故ウエンディたんを出さなかったのか!!」

「うるさい!!」

「あ？？」

「マルク、気持ちはわからなくてもないけど、とりあえず試合を見ような。ウエンディは誰が見ても可愛いつて事だから。」

カナに窘められつつ、試合に視線を戻すマルク。そこで、試合が一気に動いた。

「全員纏めて倒します！水中でジュビアに勝てるものなどいない!!
セカンドオリジン第二魔法源の解放により身につけた新必殺技！」

届け！愛の翼!!グレイ様ラブ!!」

ジュビアはハートマークを撒き散らしながら、強大な水流を起こす。どこからかグレイの叫び声が聞こえてきたが、これは流石に恥ずかしいだろうと、この場にいる全員が思っていた。

「姫！しっかり!!」

「モコモコガード全開です!!」

ルーシイはなんとかその水流に流されないうで済んでいたが、ジェニー、リズリー、シエリアの3人は流れを止めることが出来ずに、そのまま水球の外へと弾き出された。

「なんと！ジュビアがまとめて3人も倒してしまっただけ!!水中戦では無敵の強さだジュビアー!!」

「やるじゃんジュビア！」

「流石に水中戦ではかなり——」

「え？」

しかし、直後にジュビアは何故か水球の外に出てしまっていた。自分で作った水流に流される……というへマは犯していない筈なのに。「大活躍でしたが残念！場外!!しかしそれでも3位!6pです!残るはミネルバとルーシイの二人のみ!さあ……勝つのはどっちだ!」

剣咬の虎か、妖精の尻尾か。ここで5分間ルールの適用です。今から5分間の間に場外となった者は最下位となってしまいます。」

「何のためのルールかね？」

「最後まで緊張感を持って見るためですよ!ありがとうございます!」

ミネルバ、今の今までほとんど動くことのなかった魔導士。しかし、ジュビアを一瞬で外に追いやったであろう彼女の魔法は、やはり侮れないものだろう。

「妾の魔法なら、一瞬で場外にすることも出来るが……それでは興が削がれるというもの。」

「耐えてみよ、妖精の尻尾……!」

ミネルバが手を動かすと、ルーシイの隣に空気の塊ができる。それが熱の塊だと理解するのに、さほどの時間はいらなかった。

それは、ルーシイの隣で爆せてルーシイにダメージを与える。

「きやあつ!」

「今のは……熱の塊……けど、温度を操る魔法って分けてもなさそうだ。」

「うああつ!!」

次にルーシイを襲ったのは、熱とはまた別の魔法。思い一撃を受けたルーシイは頭から血が出てくる。

「ルーシイ!!」

「熱かと思えば今度はまた別の一撃……あの魔法、一体……」

「今度は重い……鉛のような……やられてばかりじゃられない!!あれっ!?私の鍵が……!?!」

ルーシイは星霊を呼び出そうと、鍵に手を伸ばす。しかし、その鍵はいつの間にかミネルバが手に持っていた。

「きゃあああ!!」

「ルーシイ……このまま場外に出ると最下位だー!!」

吹き飛ばされたルーシイ、水球ギリギリでなんとか止まり、出るこ
とだけは回避した。

だが、耐えてもその直後にまたミネルバの攻撃が襲いかかる。

「あたしは……どんな攻撃も耐えてみせる……!」

ミネルバの魔法によつて、一方的に傷ついていくルーシイ。鍵を取
られてしまえば、彼女は一切の魔法を使うことは出来ない。

得意のムチも、支えない水中では重荷になるだけだ。よつて、耐
えることしか出来なかった。

「そろそろ場外に出してやろうか……」

「こんな所で止めたら……ここまで繋いでくれたみんなに、合わせる
顔がない……!あたしは、みんなの気持ちを裏切れない。だから絶対に
諦めないんだ。」

ルーシイを場外に出そうとしたミネルバ、ここで攻撃の手を止め
る。そして、そのまま時間だけが過ぎていく。

「……ど、どうしたのでしょうか?ミネルバの攻撃が止まった……その
まま時計は5分経過!後は順位をつけるだけとなったー!!」
「っ!」

「マルク、いきなり顔を引きつらせてどうし——」

ミネルバが、5分間ルールが終了した直後に攻撃を仕掛け始めた。
しかし、先程の比にはならないほどの激しい攻撃。

「ああああ!!」

マシンガンのような激しい攻撃。ルーシイの体は、先程以上の速度
で傷ついていく。

「頭が高いぞ妖精の尻尾!我々をなんと心得るか!!我らこそ天下一の
ギルド!!剣咬の虎ぞ!!」

「きゃあああ!!」

吹き飛ばされるルーシイ。誰もが、そのまま場外に行くこと確信した

だろう。

だが――

「これは流石に場外……消えた!？」

ルーシイは姿を消したかと思えば、ミネルバのすぐ側まで移動していた。無論、ルーシイの意思ではない。

「場外へ吹っ飛ばされたルーシイ!何故かミネルバの前にー!!」

「あいつの魔法かい!?何だつてあんなことを……」

「……痛めつける為ですよ。ルーシイさんの言葉を聞いて、勝つのではなく痛めつけることを優先した……」

何が彼女の琴線に触れたのか、それは分からない。だが、彼女に取ってルーシイの言葉それほど面白くないものだったのだろう。

「ぐがっ!!」

「ははははっ!」

ミネルバの笑い声、そして痛々しい音が響く。それがひたすら続いていく。

ルーシイはただ傷ついていくだけ。だが、それでも……彼女は耐えようとしていた。既に、意識のほとんどが無くなっているとしても。

「こ、ここでレフリーストップ!競技終了!!勝者ミネルバ!!剣咬の虎やはり強し!!」

ルーシイ……さつきから動いていませんが、大丈夫でしょうか!？」

首を掴み、水球の外へ出すミネルバ。そこにはルーシイをいたぶったことに対する感情の一切を持ち合わせていない笑顔を、観客に向けていた。

「ルーシイ!!」

「ルーシイさん!!」

Aチームが飛び出し、それに続くかのように観客席から何人かが飛び出そうとする。

最早、競技どころではなく剣咬の虎に対する怒りだけで頭がいっぱいになっていた。

「行くなっ……!」

「けどマスター!!あいつら――」

「……今は、行くな。」

皆を止めるマカロフ。しかし、その顔は完全にキレていた。その上で皆を止めていた。

「何て事するんだコノヤロウ!!」

「大丈夫か!?!しつかりしろ!!」

ミネルバ以外が、ルーシィに駆け寄る。シエリアとウエンデイが治療に回るが……

「その目は何か? 妾はルールに則り、協議を行なったまでよ。むしろ感謝して欲しいものだ。2位にしてやったのだ……そんな使えぬクズの娘を。」

ナツが殴りかかろうとする……が、それをエルザが止める。それと同時に他の剣咬の虎のメンバーが止めに入る。

「おーっとこれは……両チーム一触即発かー!?!」

「……最強だか、フィオーレ一だか知らんが……一つだけ言っておく。

お前達は一番怒らせてはいけないギルドを敵に回した……!」

医務室。そこではベッドでルーシィが眠っていた。そして、AチームBチームの両方がそこにはいた。

「ウエンデイのおかげで命に別状はないよ。」

「いいえ、シエリアの応急処置が良かったんです。」

「あいつら……!」

「言いてえことはわかっている……」

目に見えて怒りを見せるナツ。しかし、その気持ちは皆同じもの

だった。

「う……」

「ルーシー！」

「ルーシーさん!？」

「みんな……ごめん……」

謝るルーシー、それはまた負けたことに対する謝罪なのだろう。だが、それを咎めるものは誰もいない。

「何言ってるんだ2位だぞ? 8pだ。」

「ああ、よくやった。」

「か、鍵……」

「ここにあるよ。」

「良かった……ありがとう……」

ハッピーから星霊の鍵を受け取り、それで安心したのか眠りにつくルーシー。

だが、他のメンバーは未だ気持ちが晴れなかった。

「眠っちゃったみたいね……」

「なんか、こう……モヤツとするねあいつら!!」

「……AチームBチーム全員集まっとったか。丁度よかった。」

医務室にやってくるマカロフ。どうにもルーシーの様子を見に來ただけではなさそうなのでその雰囲気、皆息を飲んだ。

「これが吉と出るか凶と出るか……たった今AB両チームの統合命令が運営側から言い渡された。」

「何!？」

「ABチーム統合だと?」

「あ……そっか、大鴉レイザンテイルの尻尾がいなくなったから。」

「そういう事じゃ……奴らがおらんくなつたから、バトルパートが奇数になる……それは困るというので、二チームいる妖精の尻尾を統合してくれとな。」

マカロフからの説明により納得する一同。しかし、そうなると色々問題が起こる。

「点数はどうなるの?」

「低い方……つまりAチームの35pじゃな。」

「リザーブ枠はどうなるんです？Aチームはウエンデイ、Bチームは俺とカナさんでしたけど……」

「それはこちらでまた新たに決めて良いそうじゃ……まあ、あくまでもリザーブとして参加したメンバーと、ABのメンバーの内の誰かに絞られるらしいが。」

シャルルとマルクからの質問で、ある程度の疑問は解消されたのか、これ以上質問する者はいなかった。

「けどよ、今から五人決めても残る種目はこれからやるトリプルバトルだけなんだろう？」

「いいや、明日の休みを挟んで最終日、五人全員参加の戦いがあるはず。慎重に選んだ方がいいよ。」

「俺は絶対にルーシイの敵を取る！仲間を笑われた!!俺は奴らを許さねえ!!」

「……それはみんな同じ気持ちです。奴らには……一発殴らないと気が済まない。」

こうして、AB両チームが統合されて四日目のバトルパート……三人が戦うトリプルバトルが始まるのであった。

四日目バトルパート

「妖精の尻尾チーム再編成も終了し、いよいよ四日目バトルパートに突入します。」

「四日目のバトルパートはトリプルバトル何じやる?」

「3対3ですか!楽しみですね!!ありがとうございます!!!」

「今回は既に対戦カードも公表されています。」

そう言っつて映し出される組み合わせ。

ブルーベガサス

青い天馬対四つ首の仔犬《クワトロパピー》。

マーマイドヒール

人魚の踵対蛇姫の鱗。

セイバートゥース

そして剣咬の虎対妖精の尻尾。

この三つの組み合わせとなっていた。

「やはり注目は一触即発の妖精の尻尾対剣咬の虎でしょうか?」

「さつきはどうなるかと思っただよ。」

「熱かったです!ありがとうございます!!」

「さあ、その新・妖精の尻尾が姿を現したぞー!!」

扉から出てくる妖精の尻尾。出てない皆の思いと、傷つけられたものの思い。

それらを背負った最強のメンバー。

「会場が震えるー!!今ここに……妖精の尻尾参上ーっ!!」

一日目のブーイングが嘘のような大歓声!たった四日であつての人気を取り戻してきたー!!」

ナツ・ドラグニル、グレイ・フルバスター、エルザ・スカーレット、ラクサス・ドレアー、ガジル・レッドフォックス……この5人が、妖精の尻尾の新しいチームである。

「――燃えてきたぞ。」

大魔闘演武四日目、トリプルバトル第一試合。

一夜&ギリギリで怪我が治ったイヴ&ウサギの着ぐるみ対バツカス&ロツカー&ノバーリの対決である。

「さて、ついに君を解放する時が来たよ。」

「あ、ウサギちゃんと中に人いたんだ……」

「ずっと出なかったもんねえ……」

青い天馬にいた謎のウサギの着ぐるみ。ルール上、青い天馬のギルドに所属していないものだった場合失格になってしまう。

だが、競技にもバトルにも特に参加していなかったため、招待は謎に包まれていた。

「見せてやるがいい……そのイケメンフェイスを。」

そして中から現れたのは……一夜と全く同じ顔をした猫だった。

「えーっ!?!」

「あ、あれって……エクシード!? 一夜さんがエクシードにいたの!?!」

「……よく思い出してみろ、魔水晶^{ラクリマ}押し返そうとした時に、いただろ?」

「あっ!!」

リリーに言われて思い出すマルク。『そういえばいた』と今思い出したのだが。

「ダボルイケメンアタック。」

「危険な香り^{バルファム}だぜ。」

会場が悲鳴をあげた。エルザが、一夜フェイスが二つあることに倒れかけているのを尻目に、泣いたり吐いたりする人もちらほらいた。

かく言うパピーチームも引いていた。

「私と私の出会い……それはまさに運命だった。」

「ウム……あれはある晴れた昼下がり——」

「だつはあー!!」

「メエーン!!」

話そうとした、その隙を突いてバツカスがエクシードの一夜……ニ
チヤを殴り飛ばす。

話させるわけ無かった、あるわけがないのだ。

「何をするか!？」

「一夜さん！そいつ戦えるの!？」

「当たり前だ！私と同じ顔をしている!!つまり私と同じ戦闘力!」

しかし、一夜の期待も虚しくニチヤはバツカスの一撃で沈んでし
まっていた。

「……くたばってるじゃねえか!!」

「ウソーン!？」

「俺らにはもうあとがねえからよ!!」

「勝たせてもらうぜワイルドに!!」

イヴにノバリー、一夜にロッカーが襲いかかる。既に負け続きのパ
ピーは、これ以上負けるわけにはいかないのだ。

「ウサギの正体いきなりダウン!!」

「これで3対2……」

「ドリルンロックフオーユー!!」

「酔・劈掛掌『月下』!!」

「オラア!!」

パピーチームの攻撃がペガサスチームを追い詰めていく。雪の魔
法を使うイヴも、近接メインであるパピーの猛攻に、手も足も出てい

なかった。

「一夜……」

「二、チ、ヤ……」

ボコられる一夜。しかし、倒れない。バツカスの一撃を何度も何度も受けているにも関わらず、倒れる気配を見せなかった。

「……君に、捧げよう……勝利という名のパルファムを……!」

「一夜さん……!?!」

膝をつき、肩で息をするイヴ。それ以上にボロボロになっている一夜は、懐から何かを取り出す。

その直後に、一夜の体は急激に大きくなり、筋肉質になっていく。当たり前前というべきか、そのせいで上半身の服が全て破けていった。

「な、なんでえ!?急にワイルドに……」

「こいつあ力のパルファムだ!!」

「食らうがいい!!これが私のビューティフルドリーマー微笑み……スマーツシュ!!」

一夜の一撃で、吹き飛ばされる3人。しかし一夜の微笑みを見た瞬間、青い天馬のメンバー以外の者達は、一様に引いていた。

パピーの3人よりも、何故か観客の方が精神的なダメージを与えられていたのだ。

「ダウン!四つ首の仔犬ダウン!!勝者青い天馬!!」

「大丈夫かねニチャ。」

「メエーンぼくない……」

絵面が強烈過ぎたために、他に印象を受けている者はいなかったが、バツカスはエルザと互角を張れるほどの強者である。

そのバツカスと、他2名をほぼ一撃でねじ伏せている事実には、やはり脅威を感じる者達はいた。

「いやー、いい試合でしたね。」

「そ、そうかね?」

「とってもキモかったです!ありがとうございます!」

そのまま続けて第二試合。

リオン&ユウカ&シエリア対カグラ&ミリアーナ&リズリーの対

決。

「重力舐めちやあいけないよ!!」

「そっちこそ!! 天空は重力なんかには縛られないんだから!!」

「こっちの波動も、忘れてもらっちゃあ困るぜ。」

ユウカが魔法を無効化する波動を放ち、リオンが造形魔法で攻め立てる。シエリアは回復支援をしつつ、攻撃も当てていく。

「その縛る縄も俺とシエリアには通じねえみたいだな。」

「むーっ!!」

「――ならば、斬るのみ。」

しかし、どのようなコンビネーションをしようとも、カグラがそれらをすべて切り伏せていく。

波動をギリギリで避け、風を切り裂き、氷を刻んでいく。

「チイツ!! アイスメイク――」

「遅い!!」

「リオン!!」

「下がれ!!」

リオンの懐に入ったカグラ。その一刀をリオンに向けるその瞬間に、シエリアが天空魔法で無理矢理吹き飛ばす。

援護をされないように、ユウカが波動でリズリーとミリアーナの魔法を無理やり封じる。

「……あのカグラって人、私の魔法が当たる直前に……」

「下がったな……なるべく立て直しを早くできるように。」

どれだけ策を弄しても、カグラにはすべてが無意味。そう思えるほどにカグラは圧倒的に強かった。

「……本気、出すしかないよね。」

「ああ……それくらいやらねば、届くかどうかもわからん。」

「分かった!! 滅神奥義――」

シエリアが魔法を発動させる直前にユウカ、リオン、カグラがそれぞれ飛び出す。

「邪魔はさせせん!! アイスメイクドラゴン!!」

「波動ブースト!!」

ドラゴンの形を模した氷が、カグラの道を阻む。その間にユウカが波動ブーストを他二人に当てようとする。

だが、やはり二人同時に波動の中に入れるというのは至難の技であり、ミリアーナが猫のように軽やかに波動から抜け出した。

「縛られちゃえ!!」

「しまっ——」

「ユウカ!!」

縛られるユウカ。声こそかけたものの、リオンの視線は常にカグラに向けられていた。

「このような氷で……」

「ちっ……渾身の造形だったんだがな……!!」

やはり、カグラは抜刀することなく氷を切り裂いた。この一瞬の間でユウカが戦闘不能になってしまったが、それでも一瞬の時間は稼げていた。

「天ノ叢雲!!」

ウエンディとの戦いの時に見せた奥義。とんでもない魔力の塊が振り抜いた直後のカグラに襲いかかる。

リズリーの重力魔法も、ミリアーナの縄も届かない。『カグラに攻撃が届いた』とラミアチームは確信した。

「……ふっ!!」

「嘘……!?!」

だが、シエリアの渾身の攻撃もカグラには届かなかった。天ノ叢雲は、無理矢理体を捻って回転させて、刀を魔法に当てたカグラの一撃により切り裂かれていた。

「終わりだ——」

「っ!!」

迫り来るカグラの一撃が、シエリアにあたるかと思われたその瞬間、試合終了の合図が鳴り響く。

「30分経過！お互いに決着がつかず!!この試合はドローとなります!!」

——シエリアの額ギリギリで止まっている刀。鞘に入れてある

とはいえ、その一撃は恐怖させるには十分なものだった。

「やつぱつええな……カグラ。」

「ああ……だが、まだ本気を出してるとは思えん。」

「あの刀……抜かないであれだけ強いのなら、抜いたらどうなっちゃうんだろ……」

悔しがるラミアチーム。カグラが本気を出してない上でのドローは、完全な敗北と言っても過言ではなかった。

「毎年そうさ……あの刀を抜かない時点で本気じゃねえ……カグラが本気になったとこなんて誰も見たことねーんだ。」

ユウカの悔しげな声が、ラミア達によりカグラの強さを確信させるのであった。

「興奮冷めやらぬ会場ですが、次のバトルも目が離せないぞー!!」

実況の声とともにフィールドにある入口に、これから戦う二つのギルドの紋章が掲げられる。

「七年前最強と言われていたギルドと！現最強ギルドの因縁の対決!!妖精の尻尾ナツ&ガジル&マルク！

対剣咬の虎ステイング&ローグ&クオーリ!!」

フィールドに並び立つ6人の魔導士。

火の滅竜魔導士、ナツ・ドラグニル。

鉄の滅竜魔導士、ガジル・レッドフォックス。

魔を喰らう滅竜魔導士マルク・スーリア。

白の滅竜魔導士ステイング・ユークリフ。

影の滅竜魔導士ローグ・チエーニ。

氷の滅竜魔導士クオーリ・クーライ。

「この6人は全員が滅竜魔導士!!全員が竜迎撃用の魔法を持っているー!!」

「待つていたぜこの瞬間を……」

「ついに激突の時ー!!勝つのは妖精か!?虎か!?戦場に6頭のドラゴンが放たれたー!!夢の滅竜魔導士対決!!ついに実現!!間もなく試合開始です!!」

最高潮とも言えるべき盛り上がり、それに反してフィールドにいる滅竜魔導士達は皆静かに佇んでいた。

「試合——」

ただ相手を見据えて、滅竜魔導士達は睨み合う。そして、その長い一瞬を終えるかのように——

「開始イ!!」

「行くぜえ!!」

「おう!!」

試合開始の合図とともに身構えるセイバーの滅竜魔導士達。しかし、身構えた時点でもう既に遅かった。

「がつ!?!」

一瞬で詰め寄った、妖精達がそれぞれ殴り飛ばしたのだ。ナツはスティングを、ガジルはローグを、マルクはクオーリをそれぞれ相手取って。

驚く観客達、だがこれでは終わらない。

「ふん!」

ナツは更にそこからスティングを蹴り飛ばし、ガジルは殴り落とすから、蹴り上げて吹き飛ばす。

マルクはそのまま詰め寄って追加で拳を叩き込む。

「ダララララララア!!」

「ぐっ……!?!」

声を荒らげながら、ガードしている腕に、空いている腹に、ガードの隙間から顔面に、魔力を込めてひたすら殴り込んでいく。

「白竜の咆哮!!ヤツハア!!」

「レーザー!?!」

白竜の咆哮は白いレーザー、自在に曲げられるその技で、ナツ諸々他二人を焼き払う算段だった。

「うおつと!!」

「こんなレーザー如き!!」

ガジルは避け、マルクはそのまま防ごうとした。だが、その隙をついてローグとクオーリが行動を起こす。

「影竜の斬撃!!」

「氷竜の領域!!」

ローグはガジルの後ろから攻撃を当てようとし、クオーリは氷を作り出してレーザーを屈折、反射を行ってマルクの背中にレーザーを当てる。

「鉄竜剣!!」

「っ!」

「おらあ!!」

だが、ガジルはローグの攻撃を自慢の硬度で防ぎ、ナツの方へ投げ飛ばした。

そして、マルクの方も――

「……だから、効かねえよ!!」

「なっ!?!」

「魔竜の翼撃!!」

レーザーに対してビクともしないマルクに、完全に虚を突かれてクオーリはスティングの方へと吹き飛ばされる。

「ローグ!!クオーリ!!」

「おおおおおおおお!!」

ローグの顔面に拳を入れて、そのままスティングの所まで走っているナツ。ほぼ同時に、クオーリの方もスティングに迫っていた。

「火竜の翼撃!!」

トドメにナツの一撃が入る。何とか体勢を立て直して、フィールドに立ち上がる3人だったが、誰がどう見ても圧倒的だった。

「こ、これはどういうことでしょうか!?あのステイングとローグが!!
ファイオーレ最強ギルドの滅竜魔導士達が押されているー!!」

「やっぱつええなあ……こうじゃなきゃ……」

「ガジル……」

「もどき如きが……」

三人を見据えて、いまいち納得のいつてない表情をするナツ。それはガジルもマルクも同じだった。

「お前らその程度の力で本当にドラゴンを倒したのか?」

「倒したんじゃない……殺したのさ、この手で。」

「自分の親じゃなかったのか?」

「アンタには関係ねえ事だ……今から竜殺しの力を見せてやるよ。」

3人に魔力が溜まり始める。ステイングは光り輝く魔力、ローグは影の如き黒く揺らめく魔力、クオーリは冷氣のように冷たい魔力。

「ホワイトドライブ……」

「……シャドウドライブ。」

「アイス、ドライブ……!!」

「……行くぜえ……!」

白く輝くステイング、影のオーラをまとったローグ、魔力によりそれだけで足元が凍りついていくクオーリ。

ただならない力を発し始める三人。トリプルバトル最終戦は、まだ始まったばかりである。

白影氷

「はあっ!!」

ホワイトドライブ、シャドウドライブ、アイスドライブ。3人がそれぞれそう呼んだその形態は、今までと何かが違っていた。

真っ先に飛び出してきた、ステイングの攻撃。ナツはそれを両腕でガードするが……

「聖なる白き裁きを!!くらいなあ!!」

「ぐっ!!」

即座に打ち込まれた2打目にナツは、ガードを崩されてしまう。

サラマンダー
「火竜!!」

「ナツさん!!」

「人の心配してる余裕があんのかア!」

ガジルにはローグが、マルクにはクオーリが立ちはだかる。

「ぐお!?!」

「影は捉えることが出来ない——」

「こいつ……ッ!」

ガジルが捕まえようと腕を伸ばすも、影となったローグにはそれはすり抜けて空振りに終わってしてしまう。

「氷は糧さえあればどれだけでも作れる——」

「その前に壊せば!!」

マルクが攻撃するも、攻撃したのは精巧に作られた氷の人形だった。壊した氷人形の後ろから、クオーリはマルクに一撃を与え体を凍らせていく。

「ぐっ……!ーがアっ!!」

「残念そいつも人形だ……はっはー!!」

パワーアップした3人に、苦戦を強いられるナツ達。そのままの勢いを、ステイング達は増やしていく。

「俺はずっとあんたに憧れてたんだ!そしてあんたを超えることを目標にしてきた……今がその時!!」

ステイングがナツに何かを打ち込む。攻撃用、と言うにはあまりに

も小さなものだったが……

「白き竜の爪は聖なる一撃！聖痕を刻まれた体は自由を奪われる!!」

「影なる竜はその姿を見せず……確実に獲物を狩る……」

「氷の竜は、いるだけで相手を凍えさせる。冷えきった体、凍りついた獲物を確実に仕留める……!」

ステイングによって体を動けなくされたナツ。ローグにフェイントを織り交ぜられ、背後から攻撃をされかけているガジル。クオーリによって、体そのものを凍りつかされているマルク。

「これで俺は!!あんたを超える!!」

ステイングの、ローグの、クオーリの一撃がそれぞれ迫ってくる。だが――

「……確実に獲物を……何だって?」

「っ!」

攻撃される瞬間、実態化する隙を突いてローグの腕を捕まえるガジル。

「凍りついた獲物……そんなのがどこにいるんだ?」

「ごがっ!?!なぜ、だ……!?!」

「体から魔力を噴出させれば、こんな薄い氷なんてすぐに碎けるに決まってるだろうが。魔力がこもってることで強度を保ってるなら尚更だ。」

体の表面の氷を、体から魔力を噴出させて無理矢理砕けさせたマルク。そのまま飛び込んできたクオーリを殴り飛ばした。

「ばがっ!?!な、なぜ動ける!?!っ……聖痕が、焼き消されて……」

体を拘束させる力を持った聖痕、ナツはそれを自身の炎で焼き消していた。

「中々やるじゃねえか。だけどまだまだだ。」

「あんまり調子に乗んなヨ、コゾーども。」

「つい最近最強と呼ばれてた?それは結構。だが、あんまり――」

「フェアリーテイル妖精の尻尾を舐めんな!!」

ガジルはローグの顎に肘を叩き込み、ナツは更にステイングを殴り飛ばし、マルクはそのままクオーリの腹に蹴りを叩き込んだ。

「っ……やっぱり最高だぜあんたら!!こつちも全力でやらなきゃな…
白き竜の拳は炎さえも灰燼に還す。

滅竜奥義!!ホーリーノヴァ!!」

魔力の塊とも言うべき、圧倒的な魔力の拳がナツに襲いかかる。それはナツに当たった瞬間に盛大な爆発を起こした。

「……」

「な、あ……!?!」

だが、それだけだった。拳はナツに片手で受け止められ、魔力によるダメージもナツには一切入っていなかった。

「ガジルウ!!」

「もどきがア!!」

完全に戦い方を見切られたローグは、ガジルに一撃入れられる。そしてクオーリもまた、動きを見切られてかわされては魔力を喰らう一撃を叩き込まれ始める。

「ヤジマさん!!これは一体……!」

「ウム……」

3ヶ月の修行と、第二魔法源が三人をここまで強くしていた。スティングの動きも、ローグの動きも、クオーリの動きも……全てが、ナツ達に負けていた。

「……格が違いすぎる。」

「こ、こんな展開!!誰が予想できたでしょうか!?!セイバートゥース剣咬の虎の三竜!妖精の尻尾の前に手も足も出さず!!」

「このまま試合は終わってしまうのか!?!」

「終われるものか……」

「……負けねえよ、負けられねえんだよ。レクターの為に……!」
「負けるわけ、ねえだろうが……こちとら最強の……ギルドだ!!」

3人の魔力がさらに上がる。顔に紋様が浮かび、オーラも桁違いのものとなる。

『ドラゴンフォース』滅竜魔導士が持つ力。だが、ナツはこれを過去2回発動させていたが、どちらも他から魔力を供給された結果である。

しかし、目の前にいる3人は、自力で発動することができるのだっ

た。

「なんだこの魔力は……!」

「これが、第三世代って奴ですか……」

「……ローグ、クオーリ、手を出すな。俺一人で十分だ。」

ステイングの自信がありそうなその表情に、ナツ達はステイングに対する認識を改める。

事実、改めなければならぬほどにその魔力の上がり方は凄まじかった。

「な、なんと!!先程まで劣勢だった剣咬の虎!!まさかの1対3宣言!!」

「余程自信があるんだろうね。」

「凄いです!ありがとうございます!」

観客席と、実況席の盛り上がりが更にヒートアップしていく。その分、フィールドの緊張感も高まっていった。

「……舐めやがって。」

「けど、この感じ……」

「ああ…強えぞ。」

「——はあっ!!」

飛び出してくるステイング。ナツがなんとかガードをしようと試みるが、それよりも前にステイングの一撃がナツの顔を捉える。

「ナツさん!!」

「ゼアっ!!」

ガジルが薙ぎ払うように足を振るうが、それもかわされて逆に魔力の塊を飛ばされて、一撃をもらう。

「クソっ!!」

ナツが飛びだして、ステイングに一撃を入れようとするが、片手で防がれる。

その一瞬の隙を突いて、マルクが上からかかと落としを決めようとするが、これもまた片手で防がれる。

「オラア!!どうしたどうした!!」

「うぶっ!!」

ステイングは、マルクをそのまま地面に叩きつけ、ナツの腹に膝を

叩き込む。

そのままナツをガジルの方に投げ、マルクを蹴り上げてガジルの方に蹴り飛ばす。

「白竜の……ホーリーブレス!!」

飛び上がり、ステイングはブレスを打ち込む。その威力と範囲はとんでもなく、闘技場フィールドの床が崩壊するほどであった。

「試合は続行されます!!皆様は魔水晶映像ラクリマビジョンでお楽しみください!!」

「まだまだこれからだぜ!!」

落ちながら、迫ってくるステイング。ナツは身を翻して、瓦礫に乗る。

「火竜の、劍角!」

「鉄竜の咆哮!!」

ナツの一撃がステイングを穿つ。その隙に、ステイングの上まで登っていたガジルがブレスを撃ち込んで地面へと叩きつける。

「魔龍の翼撃!!」

そして、ダメ押しと言わんばかりにマルクが更に追撃を入れる。

だが、土煙から現れたステイングには、まともにダメージが入っていないように見えなかった。

「白き竜の輝きは万物を浄化せし……ホーリーレイ!!」

「ぐあああああ!」

何本も放たれたレーザーの雨は、3人を穿った。

なんとか3人地面に降り立つことは出来たが、その隙を狙ってステイングがナツに向かって拳を振るおうとしていた。

「……飛べよ。」

その拳を、なんとかガードしたナツだったが、ガードなんて関係ないと言わんばかりに、そのまま吹き飛ばされる。

地下にある古い建物に飛ばされて、建物が崩壊していた。

「ぐはっ!!」

「がっ!!」

蹴られ、殴られ、吹き飛ばされ……ナツ達はステイングに手も足も出ないまま、防戦すらも許されることなくタコ殴りにされるのであつ

た。

そして、しばらくして。

3人はステイングの前で倒れていた。対してステイングは、ほとんど言っていないほど、ダメージを受けてなかった。

「時代は移りゆく……七年の月日が、俺達を真の滅竜魔導士へと成長させた。」

「……終わってんだよ、旧世代。」

ローグとクオーリが降りてくる。最早、確定的。勝敗は決したものだ。誰もそう思っていた。

「でも……やっぱり強かったよ、3人とも……」

「褒めるなよ、もどきを。」

「3者ダウンかー!?!」

「——ちよつと待ってって。」

その声とともに、ナツ達は何事も無かったかのように立ち上がる。その姿に、ステイングは驚いていた。

「いってえー……」

「思ったよりやるな。」

「そもそも、二人とも様子見しすぎですよ……」

「いいだろ、別に……けど、おかげでお前の癖は全部見えた。」

「何!?!」

ナツはニヤリと笑みを浮かべる。ナツの言葉に、ステイング達の表情がさらに驚愕の色に染まる。

「攻撃のタイミング、防御の時の姿勢、呼吸のリズムもな。」

「ばか、な……こっちはドラゴンフォースを使ってんだぞ!!」

「おう! 大した力だ。体中痛えよこんちくしょう。」

例えば、攻撃の時軸足が11時の方を向く。」

「いや、10時だな。」

「11時だよ。」

ナツの言葉に、突然反応するガジル。マルクは頭を抱え『また喧嘩してる』と、溜息をつく。

「半歩譲って10時30分! 11時じゃねえ!」

「11時だ! 23時でもいい!!」

「それ一回転してるじゃねえか!!」

「うるさい。」

「おわっ!」

ナツは、ガジルを突き飛ばしそばにあったトロッコに、無理やり乗せる。そして、そのままさらに近くのレバーを引いて、トロッコを動かす。

「オイ!! てめ……こ、これは……うぶ、うお……!」

「ギヒッ。」

「が、ガジルさーん!」

トロッコは乗り物なので、滅竜魔導士の弱点とも言える乗り物酔いが、ガジルを襲った。

そのまま運搬されていくガジルを、マルクは試合中ということもあつて見守ることしか出来なかった。

「舐められた分はきつちり返さねえとなあ……」

「……ナツさん、俺もいるのに一人でやる気ですか?」

「ん? なんだ横取りか?」

「いや、俺いいとこなしだし……そろそろ挽回したいんですけど。」

「どーせ最後に五人対戦あるんだ、そっちで……いや待てよ……」

考え込むナツ。マルクも、ステイング達も呆然と見ていた。やがて一つの考えに至ったのか、マルクの肩を叩く。

「よし、頑張れマルク。」

「……一応、何考えたか聞かせてもらっても?」

「最終日の方が、いろんな奴ら倒せて俺の方が強えつてことを証明できるだろ?」

「……存外、分からなくもない理由ですね。」

苦笑いをするマルク。軽くため息をつけてから、マルクはナツの前に出て、剣咬の虎の三竜を見る。

「なら……来いよ剣咬の虎。俺一人に勝てないようじゃ……ナツさんの雷炎竜どころか、普通のナツさんにも勝てないぞ?」

「一人で、俺達三人と戦うだと……? ふざけやがって……! ナツさんとやらせろ!!」

「お前に用はない……ガジルとやらせろ。」

「だったら、俺を倒してみろよ。じゃないとナツさんには勝てないぞ。」

マルクの挑発に、再びドラゴンフォースを発動させるステイング達。そして、先程と同じようにステイングから仕掛ける。

「ドラゴンフォースは竜と同じ力!!この世に、これ以上の力なんてあるはずねえんだ!!」

魔力を込めて殴り掛かるステイング。先程のと同レベルの魔力の質、量。だが、それ止まりなのである。

「……」

「なっ……おれは、この力でバイスロギア白竜を……殺したんだア!!」

「力だけに固執してるから負けるんだ。確かに、お前らのその力は強いよ……けどさ——」

ローグがマルクの背後に周り、攻撃を仕掛けようとしていた。ほぼそれと同時に、マルクはステイングを殴り飛ばしていた。

「力に頼り切りすぎなんだよ。だから最初、あれだけボコボコにされた。」

「影竜の咆哮!!」

「……すうーっ!!」

息を大きく吸い込み、マルクはローグのブレスを吸収しきる。マルクの後ろから、クオーリが仕掛ける。

「魔龍の咆哮!!」

「な、にいい……!?!」

クオーリはそのまま、マルクのブレスで吹き飛ばされる。

だが、即座に空中で身を翻して、別の魔法を使う。

「氷竜の領域!!ステイング!ローグ!!」

「おう!!」

空間が凍りつき、氷の柱などが無造作に並んでいく。ステイングは光となり、ローグは影となってその氷の空間を自由自在に動き回る。

「氷は光を屈折、時に反射させる!そして、氷の柱の影は無造作に存在している!受ける!!俺たちの必勝パターン!!」

「……なるほど、普通ならこれはかなり不味いな。」

「舐めたこと後悔させてやる!!もどき!!」

「けど、俺は言ったよな——」

ローグが背後から、ステイングが自身の魔法も反射と屈折を利用して、背面以外の全面から攻撃を仕掛ける。

『力に頼り切りすぎ』ってさ。」

「な……にいい?」

途端に、ステイング達のドラゴンフォースと、魔法がかき消されるようになくなる。

「お前らの攻撃のおかげで随分と……魔力が確保できた。」

「確保、だと……?」

「おう……さつきまで殴っていたのと、ブレスやらなんやらを食っていたおかげでな。」

魔法が使えない空間、作れるんだよ俺。かなり消耗が激しいから、あんまり使わないがな。それに使ってもほぼ一瞬……もう使えない。」

「つ……そんなに俺達の素の力を見てえって言うんだったら、素の力だけでめえを倒してやる!!ローグ、クオーリ!!」

ステイングの声が響く。ドラゴンフォースも何も使わない対決。ステイングはマルクに殴り掛かる。

だが、マルクは問題なくガードし逆に殴り飛ばす。

ブレスを飛ばされてもその魔力を喰らい、逆にブレスで返す。凍らされても、影からの一撃を加えられかけても、その度に反撃をして吹き飛ばしていく。

「……まだまだ!!まだ終わらねえ!!ローグ、クオーリ!!」

ボロボロになった3人は、三角形のように並ぶ。何かをするつもりなのは、分かっていた。

何が来てもいいようにと、滅竜奥義の準備だけを行う。

「俺たちは最強だ!!最強の滅竜魔導士なんだ!!だから、負けるわけがねえ!!氷面鏡!!」

クオーリの前に丸い氷が現れる。等間隔で何枚も。

「そうだ、負けられねえ……レクターの為に!!」

「こんなところで、負けられん……!」

ステイングとローグの魔力が混ざり始める合体魔法^{ユニゾンレイト}。二つ以上の異なる魔法が合わさることである。

「『聖竜閃氷牙!!』」

ステイングとローグの魔力が、クオーリの氷にあたる。途端に氷の幅に魔法が巨大になり再びそれよりも大きな氷にぶつかり通過する頃には巨大になる。

それらを繰り返して、二人の魔法はとんでもない大ききさになった。

「……強かったら笑っていいのか。勝った奴が、負けた奴を笑っているのか。」

見せしめで、痛めつけるのが強者だつて言うんなら……俺は一生弱者のままでもいい!!」

二人の魔法に対して、マルクもまた自身の滅竜奥義を行う。

「滅竜奥義!!紫電魔皇殺!!」

マルクの腕から伸びた、ムチのようにしなる魔法。しかしこれはモノを切り裂けるムチ。

合体魔法を、いとも簡単に切り裂いて、その奥にいる三人を切り裂く。

「が……」

「そん、な……」

「ぐ、が……」

三人は倒れる、マルクの前に。今ここに妖精の尻尾対剣咬の虎の対決は幕を閉じたのであった。

滅竜魔導士対決の行く末

「こ、こ、こ、ここれは……妖精の尻尾だー!!三竜敗れたりー!!」
フェアリーテイル

勝者、妖精の尻尾ー!!ここに来て一位に躍り出たー!!」

実況の興奮と、観客の興奮が最高潮に達した。肩で息をするマルクと、それを隅から見守るナツ。

終わった後マルクは、尻餅をついた。

「疲れた……」

「これにて大魔闘演武四日目終了ー!!一日休日を挟んで、明後日最終戦が行われます!!」

最終日はなんと全員参加のサバイバル戦!果たして優勝はどのギルドか!?皆さんお楽しみにー!!」

「ありがとうございます!!」

実況の声が遠い声に聞こえてくる。そんな会場の地下で戦っていたマルクは、倒れている三竜を見る。

「……聞こえているかわかんないけど、言つとく。

正直なところ、これが試合じゃなかったら俺はお前らをもっとボコボコにしている。

「そうやって倒れてるのなんて、絶好の機会だからな。」

「……」

一切反応しない三人を見るが、マルクは続ける。

「けど、それをしないのはこれが試合なのもあるが……ナツさん本人が気にしていないから、やらないだけだ。

俺個人としては……しばらくはお前らを許さない。ルーシイさんを笑ったお前らをな。」

マルクはそう言ってナツと共に上へと登っていく。残された三竜の内、クオーリだけが動き始めていた。

「……んだよ、そんな顔して。」

「うるせえ……今生まれてから一番機嫌が悪いんだよ。」

「いつもの喋り方……今日に限っては、全然無かつたな……」

「それっぽい喋り方なだけだ……んなことはどうでもいい……」

「……俺達は完敗したんだぞ？しかも、ナツさんやガジルさんはもつと強い。」

クオーリは何か座り込み、地面を殴る。その表情は、誰が見ても憤怒と取れるものだった。

「……やけに執着するな。」

「当たり前だろ……魔法を食らう滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーって存在がありえねえのに、あいつは自分の事を滅竜魔導士だと言い張る……その上であいつに負けたことが腹が立つ。」

「……そもそも、滅竜魔導士自体が異常なのに何言ってるんだ。」

「それでもだ。そもそも滅竜魔導士は、自分の属性に関しては耐性がかなり高い。」

だが、あいつは魔法を食らうと言っておきながら魔法に対する耐性が皆無だ。少し存在する程度……」

「……何が言いたい？」

「滅竜魔導士とは、違うんだよあいつは。自分で気づいてねえのか、やけに自信満々に否定してくるがな。」

滅竜魔導士は自分の属性のものなら、食えるし耐性もある。あいつは食えるのに耐性がない……それでどうやって滅竜魔導士だと思えと？」

「……半分言いがかりじゃねえか。」

「俺がそう思ったんだ……少なくとも、あいつは滅竜魔導士なんか、じゃ……ねえ……」

体をふらつかせ、再び倒れるクオーリ。ステイングは、そんなクオーリの様子を見て、溜息を付いていた。

「無理するからそうなるんだっての……」

空を見上げながら、ステイングは思う。このあと自分がどうなるのかを。

剣咬セイバートゥースの虎マスタージエンマ、彼は最強たる剣咬の虎を保とうとするために、厳格な体制を敷いていた。

それこそ、『負ければ紋章を消せ』というものである。カグラに負けたユキノも、ジエンマの命令によって服を脱がされ紋章を消されると

いう恥ずかし目を受けた。

恐らく自分たちも、何かしらの罰はあるだろうと考えていた。

「……どーすつかねー」

「……」

「……ローグ？さつきから何黙ってんだ？」

「……いや、俺はどれだけ思い上がっていたのだろう……と思つてな。」

ローグの反応にため息をつくステイング。しかし、どちらにせよ彼らが負けたという事実は、彼らの心に何かしらの変化を訪れさせていたのであつた。

その日の夜、ナツ、ウエンデイ、マルクはガジルに呼ばれて地下に案内されていた。

「一体何があるんですか？ガジルさん。」

「黙つてついてこい。」

「何で俺たちだけ……」

「滅竜魔導士に関する何か、つて事ですか？」

マルクの言葉に、各相棒であるエクシード達も反応を示していた。

「そうだろうな。」

「なんだろう……」

「……と言っても、野次馬もいるけどね。」

シャルルが、視線を動かすと、その先にはグレイとルーシイがいた。ルーシイはまだ傷だらけではあつたが、ちゃんと動けるくらいまでに

は回復しきっていた。

「馬つてやつがあるか。」

「だって気になるじゃない。」

仕方なく、グレイ達も一緒に連れていく。しばらくして目的の場所についたのか、ガジルが止まる。

「……ここだ。」

「これは……!？」

「なんだこりや……」

「動物の、骨……」

「いえ……これは動物というより……」

ガジルが案内した場所。そこは、ある生物の骨が大量に存在していた。ルーシイが言ったように、動物ではあるが……

「——ドラゴンの……骨、ドラゴンの……墓場……」

「これ、全部ドラゴンの骨!？」

「凄い数……」

「ドラゴンの存在を確定づける場所か……」

大量にあるドラゴンの骨。何故大魔闘演武の会場の下に、こんなものがあるのか……何故ここまで一箇所に集中しているのか、そのすべてが謎に包まれていた。

「なんなんだここ。」

「知るか。」

「どうなつてんだこりや……こんなに大勢のドラゴンが……」

「ここで何かあったのかしら……」

ここまである大量の骨を見て、滅竜魔導士達は不安に駆られることは無かった。

自分の親はここにいない、という確信ともうひとつ……

「俺達のドラゴンが姿を消して14年だ……ここに眠ってるのはそれよりも遥かに古い遺骨だろうな。」

「苔まで生えちやってますもんね……しかも、幾らか風化しかけてるのだからある。」

14年経つたとしてもここまではならない……」

「そもそも、14年前でも普通にこの街はあったはずだ。流石にドラゴンみたいなでけーのが、死ぬ為にここに移動したら、見つかって大騒ぎだろ。」

「そ、そっか……」

滅竜魔導士達の言葉で、理解するハッピー。すると、今まで考え込んでいたウエンデイがハツとして顔を上げる。

「ミルクィウエイ……」

「どうしたのウエンデイ?」

「ミルクィウエイです。ポーリユシカさんから教えて貰った滅竜奥義の1つ……『ミルクィウエイ』」

天ノ川へと続くドラゴンの魂の声を聞け……私、てっきり攻撃系の魔法かと思っていたんですが……もしかしたらこの事なのかも……」

「……その、ミルクィウエイで何が出来るんだ?」

「ミルクィウエイ……多分、魂となったドラゴンの声を聞く魔法かも。」

「何!?!」

「それって……」

ウエンデイのミルクィウエイの説明を聞き、いよいよ高まってくる緊張感。その結末はどこへ向かうのか。

「ここに眠るドラゴンの声が聞こえれば……ここで何があったか分かるかも知れません。」

そして、いなくなった私達のドラゴンのことも……」

しばらくして、ウエンデイはその場に魔法陣を書き始めていた。他の滅竜魔導士達には割と無縁のものなので、存外みんな新鮮に感じ取っていた。

「魔法陣？」

「やっぱり！攻撃用の魔法だと思ってたからこの文字が違ってたんだ……」

「何やっつてんだウエンデイ？」

「あんた話聞いてなかったの？」

「ミルキーウエイだつて。」

しばらくすると、ウエンデイを中心として魔法陣が書き上がっていた。

「これでよし！皆さん少し下がっててください……さまよえるドラゴンの魂よ、そなたの声を私が受け止めよう……ミルキーウエイ……」
ウエンデイが、言葉をつむぎ、ウエンデイを中心とした魔法陣が光り輝いて洞窟の天井に、まるで星空のような輝きがきらめく。

魔力が渦を巻き、一箇所に集まり始めたかと思うと……一斉に骨達
が震え始めた。

「ひゃあ!?骨が……」

「大丈夫なのかウエンデイ？」

「ドラゴンの魂を探しています……この場にさまよう残留思念はとても古くて……小さくて……っ!!見つけた!!」

ウエンデイが祈るようなポーズをとる。すると、洞窟内の広いところ
ろに何かが集まっていくのが他の一同にも視認できた。

「うおおっ?!」

「あれが魂なのか!？」

「……なんか世紀の大発明見てる気分だ……」

「ウエンデイ？」

「集中しているみたいね。」

次第に、固まった何かから姿が見え始める。いくつもある鱗、鋭い
爪に牙を持ち、それらがすべて巨大な生物……ドラゴンである。

「……グオオオオオオオオオ!!」

「ああああああ!!」

ドラゴンが吠え、ナツ達が驚く……が、途端に目の前に居るドラゴンは堪えきれないかのように笑い始めた。

「あーっはっはっはっ！人間の驚いた顔はいつ見ても滑稽じゃのう。」
その反応にぼかんとする一同、しかし目の前のドラゴンはそんな事を気にせず話を続けていく。

「我が名はジルコニス、翡翠の竜とも呼ばれておった。ワシの魂を呼び起こすとは……天グランディネの術じゃな？どこにおるか……」

しばらくキョロキョロしていたジルコニスだったが、じつと黙って集中しているウエンディを見つけると、顔を近づける。

「かーわええのうー！こんなにちんまい滅竜魔導士が、ワシを起こしたのかー！」

「てめえウエンディに近づいてんじゃねえ!!」

マルクがブチギれるが、ジルコニスは一切気にしない様子だった。

「嫌じゃ、この娘はワシが食う。」

「……!」

「なんて冗談に決まっておろうがっ!!バカな種族よ！ホレ!!幽体に何が出来ようか!?あはははっ!!」

「消し飛ばしていいですかいいですよね。」

「落ち着け、んなことするために呼び出したんじゃねー」

わざわざ見せつけるように、爪がウエンディをすり抜けるのを行うジルコニス。挑発されたかのようなこの態度に、マルクは滅竜奥義も発動させかねないほどだった。

「我が名はジルコニス、翡翠の竜とも——」

「さっき聞いたわーっ!!」

「ここで何があったの？」

「ここにはドラゴンの亡骸がいっぱいあって……」

「その真相を知るためにお前の魂を呼び起こしたのだ。」

話を進めようと、エクシード隊がジルコニスに質問を投げかける。

しかし、ジルコニスの態度は変わることは無かった。

「人間に語る言葉ない、立ち去れ。」

「オイラ猫だよ。」

「……そうだな、あれは400年以上昔の事だ。」

ふざけた態度、という点で変わることがない……と言う話ではあるが。

「かつて竜族はこの世界の王であった。自由に空を舞い、大地を駆け、海を渡り繁栄していった。この世の全ては竜族のものであった。人間等は、我々の食物に過ぎなかつたのだよ……ぐふふ。」

だが……その竜族の支配に異論を唱える、愚かなドラゴンがおつた。人間と共存できる世界を作りたい、と抜かしおつたのじゃ。

それに賛同するドラゴンと、反対するドラゴンとの間で戦争が始まった。ワシは、反対派として戦つた。」

「反対派……つまり、人間と共存する道じゃなくて、支配する側がいいと思つたドラゴン達か。」

「ワシは人間が好きじゃない……食物としてなら、好物であるがな。」
「食いもんと会話してんのかおめー……」

ナツが、ジルコニスの事を笑いながら見る目を変える。ジルコニスは どうにも、それが嫌だったのか嫌そうな表情をしていた。

「コホン……戦況は拮抗しておつた……ドラゴンとドラゴンの戦いはいくつもの大地を裂くものだった。」

やがて共存派のドラゴンは、愚かな戦略を打ち立てた。人間にドラゴンを滅する魔法を与え、戦争に参加させたのだ。」

「それってつまり……」

「滅竜魔法……う？」

「滅竜魔導士の原点つてこと……う？」

ここで知れた、意外な情報。この情報は意外であったが、ナツ達は
まだ……このドラゴンの墓場の真実、そしてドラゴンの戦争の結末を
……これから聞くことになるのであった。

ドラゴン

ガジルが滅竜魔導士達ドラゴンスレイヤーを呼んで、とある場所に連れていった。

そこはドラゴンの骨が大量にあるドラゴンの墓場のような場所であつた。

そこで何があつたのか……それを知るために、ウエンデイは自身の滅竜奥義、ミルキーウェイによつてその場にある骨から魂の残滓を感じ取り、声を聞こうと試みる。

試みは成功し、ウエンデイの滅竜奥義によつて呼び出されたのは、翡翠の竜ジルコニス。

彼はここで起きたことを語り始めるが、その際に話された『人間との共存を歩む派のドラゴン』と『それに反対するドラゴン』との派閥争いがあつたことを話す。

そして、その戦争に初めて滅竜魔導士が生まれた……と語つたのであつた。

「滅竜魔導士達の力は絶大であつた……人間との共存を選んだドラゴン達の勝利は目前と迫っていた。」

反対派も、色々策は打つたが……ドラゴンである以上、滅竜魔導士達には太刀打ちできんかつた。」

「……その、策つていうのは？」

「他の生物を喰らい、自分の力とすること……あくまでも無理矢理に、じゃがな。」

そうすることで自分の使う属性を増やした。」

反対派のドラゴン達が生じたことに、その場にいた一同の視線がナツに移る。まさしくそれは、ナツの雷炎竜のことを表していたからだ。

「……そう言えば、悪魔を食らつた奴がいたのう。」

「悪魔？」

ふと、思い出したかのようにジルコニスは指を顎に当てて考える仕事をとる。

悪魔、と聞くとマルクは悪魔グリモアの心臓アハートのマスター、ハデスが作り出した土塊の悪魔を思い出す。

しかし、恐らくはあのような生み出されたものではなく純粋種のよ
うなものだと、認識を改めた。

「ああ……当時は、ドラゴン同士の戦争であったが故に、全く気にして
おらんかったが……その悪魔の力を取り込み、共存派を薙ぎ払うつも
りだったようだ。」

「そのドラゴンって……」

「紫電竜ヴァレルト……確か、そんな名前だったような気がするの
う。」

「紫電竜……ヴァレルト……」

電気系の魔法を使うドラゴンなのだろうか、とマルクはふと思う。
『紫電』と名のついている滅竜奥義を持つマルク。そのせいか、ヴァレ
ルトの事が無性に気になっていた。

「……とまあ、少しズレたが……滅竜魔導士達は反対派のドラゴンを
次々と倒していった。」

しかし、ここで一つの誤算が生じる。

「誤算？」

「力を付けすぎた滅竜魔導士達は、人間との共存を望むドラゴン達さ
えも殺していった。」

そして、人間の中の1人に……ドラゴンの血を浴びすぎた男がおつ
た。」

段々と、余裕の笑みを浮かべていたジルコニスの顔が、陰り始める。
まるで、それ以上語りたくないかのよう。

「その名を口にするのも恐ろしい……男は、数多のドラゴンを滅ぼし
その血を浴び続けた。」

やがて男の皮膚は鱗に変わり……歯は牙に変わり……その姿はド
ラゴンそのものへと変化していった。」

「人間がドラゴンになったの……!?!」

「それが滅竜魔法の先にあるものだ……ここに眠るドラゴン達も、そ
の男により滅ぼされた。男は人間でありながら、竜の王となった。竜
の王が誕生した戦争……それが『竜王祭』」

少し答えづらそうに、しかし覚悟を決めたのかジルコニスは口を開

く。

「王の名は……アクノロギア。ドラゴンであり、ドラゴンならざる暗黒の翼。」

「アクノロギア……!?」

「あれが……」

「元は人間だった!？」

「ばかな……!」

ジルコニスの口から出た意外な名。かつてナツ達に襲いかかり、滅ぼそうとした存在。

それが元は人間だったというのだ。それだけで、驚きに値する。

「奴により、ほとんどのドラゴンは滅んでいった……それが今から400年前の話だ。」

ワシは、貴様らに——」

突然、ジルコニスは言葉を終えぬまま姿を消す。まだ聞きたいことなどがあるのにも関わらず、ジルコニスは完全に姿を消した。

「オイ！」

「消えた!!」

「まだ聞いてねえことあるだろ!!」

「ウエンデイ!!」

催促されるが、ウエンデイは首を横に振った。それはもうジルコニスは完全に姿を消したということである。

「ダメです……この場から完全に思念が消失しました。東洋の言葉で言う、成仏というものでしょうか。」

「……なんだか、エライ話になってきたな。」

「スケール大きすぎよ……」

話の大きさに、頭の処理が追いつかないグレイとルーシィ。しかし、当人である滅竜魔導師達は別の問題に、驚いていた。

ジルコニスの言った『滅竜魔法の先にあるもの』が滅竜魔導師の竜化だと言うのだ。

「滅竜魔法使いすぎると本物のドラゴンになっちゃうのか!？」

「それは困る！」

「どうしよう……」

「流石にドラゴンのままだと妖精の尻尾フェアリーテイルにいらなくなるよなあ……」

「——それはありえんよ。」

「誰!!」

後から聞こえてくる声。そして、金属が軽く擦れ合うような音とともに、男の声が近づいてきていた。

「話は聞かせてもらった。やはり我々の研究と史実は一致していた……」

「研究だと?」

「君達はゼレフ書の悪魔を知っているかね?」

男のその声により、グレイの顔が少し曇る。過去に、デリオラというゼレフ書の悪魔に因縁があったのだ。

「アキノログアはそれに近い。1人の滅竜魔導士をゼレフがアキノログアにしたと推測される。」

「ゼレフが!」

「つまり……全ての元凶であるゼレフを打つことが、アキノログア攻略の第一歩となるのだ。」

「ゼレフを倒す!」

「誰だ teme!!」

「ユキノ!」

目の前には白い鎧を身にまとった騎士、そして元剣咬セイバートウリスの虎のユキノがいた。

「私はフィオーレ王国軍、クロツカス駐屯部隊『桜花聖騎士団』団長アルカディオス。」

「同じく臨時軍曹のユキノ・アグリアでございます。」

突然現れた二人、ユキノも臨時的に王国軍になったということ、一同には困惑と警戒があった。

「軍のお偉いさんがなんでこんなところに……」

「ユキノ……あんた剣咬の虎の一員じゃなかったの?」

「辞めさせられたって言ってたよね?」

「はい、その通りです。」

「私から説明しよう。極秘に進めていたある作戦に、星霊魔導士が必要だった。そこでユキノ軍曹に力を借りているという訳だ。」

「星霊魔導士……?」

アルカディオスの言い分に、ナツが憤慨し始める。

「ちよつと待て!!何の話かわからねー!!ややこしい話はパスだ!!用件をいえ!!」

「ですね……少し唐突すぎます。用件しだいによっては……」

軽く構えるマルク。だが、憤慨しているナツも警戒を目に見えて表しているマルクも、アルカディオスは他人事のように無視していた。

「マルク・スーリア君だね?その若きであるの三竜を破るとは、素晴らしい実力……ナツ・ドラグニル君にも匹敵するのでは——」

アルカディオスの顔の横に、魔力の塊が通り過ぎる。そして、ナツがアルカディオスに近寄る。

「んな事アどーでもいい。わざわざ、お膳立てしねえといけないようなことを今からしようっていうの?」

「こつちは星霊魔導士が必要とかどうとかつてのに引つかかってんだ。」

「言いてえ事があるならはつきり言いやがれ。」

「二人とも……わかってると思うけど偉い人だよそれ……」

「そう思うなら、『それ』というのはどうかと……」

二人の行動を止める者はいない。ルーシイが狙われた、という事実は既にあるのだ。

もし同じような手を使われるのなら……と考えていた。

「ついてきたまえ。」

「おい!てめえ!!」

「ルーシイ様……私からもお願いします。」

アルカディオスは背を向けて歩き始める。その直後に、ユキノが頭を下げる。

「この作戦が成功すれば……ゼレフ、そしてアクノロギアを倒せませす。」

「……アクノロギアを……?」

あの暴虐の塊とも言えるアクノロギア、そして不死であるゼレフ。二人を倒すというが、それを可能とする方法ならば話だけは聞く価値があると、この場にいる全員が渋々納得したのであった。

「んだー!? コリヤー!!」

「華灯宮メルクリアスですね。」

華灯宮メルクリアス、フィオーレの王が住んでいる城である。現在地下にいたメンバー全員がこの場に揃っていた。

「まず初めに……数日前、ルーシィ殿を狙い……誤って攫おうとしたことを謝罪したい。」

「何!?!」

「あれ、あんたの仕業だったの!?!」

レイヴンテイル
大鴉の尻尾の仕業と思っていた、ウエンデイ達の拉致。

誤って、というにしては些か無理やりにウエンデイ、シャルル、ポーリュシカを攫ったと思っていたが、ここでそれを言う者はいない。

話が進まない故に、今は飲み込んでいた。

「勿論危害を加えるつもりは無かったが……些か強引な策に走ってしまった。」

あの時は早急に星霊魔導士が必要だと思いこみ、判断を謝った……申し訳ない。」

「……大魔闘演武は、カモフラージュか。お前らが裏でやってる事
の。」

「存外、頭の回転は早いようだね。ガジル君。」

「ケツ……」

「その通り、大魔闘演武は魔導士達の魔力を大量に接收する為のカモフラージュだった。」

『なんでわかったんだ』という風な視線を向けるマルク。しかしガジルは、今はそれに応えようとはしない。

「毎年魔導士達から魔力を奪ってたのかよ。」

「……きたねえな。」

「なんと言ってもらっても構わんよ。全ては計画の為にやったこと。」

アルカディオスを先頭に、一同は城の中を進んでいく。そうすると、目の前に巨大な扉が見えてくる。

「世界を変える扉、エクリプス……これの建造の為、大量の魔力が必要だった。」

「……毎年、って事はジェラルルが感じてた妙な魔力って……」

「なるほど、エクリプスとやらの魔力だったという事か。」

「太陽と月が交差する時……十二の鍵を用いてその扉を開け。扉を開けば時の中。400年の時を渡り、不死となる前のゼレフを討つ。」

「それこそがエクリプス計画。」

巨大な扉を見上げながら、アルカディオスは語る。その計画の、現実味の無さに一同は驚きしかなかった。

「と、時を渡る……?」

「ルーシイ様、星霊界はこの世界と時間の流れが違っていると聞きます。」

「そう言えば、そうだったけど……」

「その星霊界独自の次元境界線を利用し、星霊魔導士の力でこの扉を開くのです。」

「当初の計画では、星霊魔導士は擬似的な魔力で代用できる予定であった。」

だが、本物の星霊魔導士と十二の鍵があれば、計画がより完璧になる。もはや必要不可欠と言って良い。

太陽と月が交差する時……即ち、三日後の7月7日……君の力を貸してほしい、ルーシイ殿。」

指定された日付。その日付に、滅竜魔導士達は全員親代わりのドラ

ゴンがいなくなっている。

それが偶然か必然か、このような大魔法が起動する時も同じ日付だったのだ。

「太陽と月が交差する……日蝕……」
エクリップス

「——そこまでだ!!」

大声とともに、大量の足音。気づけば一瞬で、一同は囲まれてしまっていた。

「王国兵!?!」

「なんでこんな!?!」

驚きも束の間、兵士達が道を開けてそこを歩いて一同に近づいてくる人物がいた。

「大人しくして頂こう……アルカディオス大佐。」

「国防大臣殿!?!これはなんの真似ですか!?!」

突如現れた、国防大臣。同じ城の人間であるアルカディオスすらも、纏めて包囲させた人物。

なぜ今このタイミングで現れたのか。エクリップス計画という物に對しては、城の中も一枚岩ではないと……そして、嫌な予感をひしひしと一同は感じるのであった。

最終日前日

「国防大臣殿！これはなんの真似ですか!？」

突如、エクリプスの扉の前で王国兵に囲まれたナツ達。王国側であるアルカディオスとユキノすらも囲ってる兵士達の中から、明らかに地位が高そうな人物が現れる。

「それはこちらの台詞だ。極秘計画……超国家機密を部外者に漏らすなど言語道断。」

「部外者ではない！知っているでしょう、この作戦において重要な役割を持つ者達です。」

「それは貴様の独断で決められるほど……簡単なものではない。」

「あなたは単にこの計画に反対だけでしよう!!今すぐこんなふざけたマネはやめていただきたい!!」

「反対に決まっておるわ!!歴史を変えるなど!!その危険性を少しでも想像出来んのか小僧がア!!」

不意に、大声を出す国防大臣。しかし、過去を変えろという事は、未来が丸々変わるといふ危険性も伴う。

例え足跡ひとつ残すにしても、未来は大きく変わってしまうだろう。

「アルカディオス大佐を、国家反逆罪の容疑で拘束する!!並びにユキノ・アグリア、ルーシイ・ハートフィリアも拘束!!それ以外の者は追いついでいせ!!」

「何!？」

「ちよつとあたしまで……」

何故か拘束対象に選ばれたルーシイ。流石に仲間には捕えられてたまるものかと、全員が抵抗をしようとする……が。

「てめえら……ルーシイを巻き込むんじゃ……!」

「よせっ!!ここで魔法を使つてはならん!!」

「ぐあ……!？」

魔法を発動させようとしたナツ。しかし、突如エクリプスが起動してナツの魔力を全て吸い取ってしまう。

「言つてなかったかね？大魔闘演武は魔導士の魔力を微量に奪い、エクリプスへ送るためのシステム。」

「こんなにエクリプスの近くで魔法を発動すれば、全ての魔力が奪われてしまうぞ。」

「それを狙つてわざわざここで……！」

「騒ぎは起こさんでくれ、魔法の使えん魔導士など、我が王国兵の敵ではないのだから。」

魔法で抵抗できない、そして相手が武器を持っているとなると一同に抵抗する術はなかった。

「ちよつと!!離してよ!!」

「貴方達！アルカディオス様の部下ではないのですか!？」

「ルーシィー！」

「ユキノさん!!」

王国兵に捕えられるルーシィとユキノ。そして、アルカディオスも捕えられてその他の者達は皆城の外へと追い出された。

「私とて本意ではないことを、理解していただきたい。全ては国家のため……だが、一つだけ助言することもできよう。」

陛下が妖精フェアリーテイルの尻尾をたいそう気に入っておられる。大魔闘演武にて優勝出来たなら、陛下に謁見する機会を与えよう。

心優しき陛下ならば、仲間の処遇についても配慮してくれるやもしれん。」

そうして、一同はルーシィを人質に取られたまま帰らざるを得なかったのであった。

「ルーシイが王国兵に捕まった?」

「よくわからん計画の関係者にされちまったのか?」

翌日、大魔闘演武は休日というわけで試合は一切無いが……AB両チームとマカロフで集まって話し合いをしていた。

「つまりなんだ? 大魔闘演武で優勝しなきゃルーシイを取り返せねえのか?」

「その話も信用していいのか分からねえがな。」

「だからんな事アどうでもいいんだよ!!俺は今すぐ助けに行くぞ!!」

「落ち着いてよナツ、相手は王国なんだよ?」

暴れているため、柱にロープで括りつけられてるナツ。今すぐ助けに行くことも可能ではあるが、それは無策で飛び込むのと同じことである。

「王国相手故に迂闊なことは出来んが……向こうもまた国民をぞんざいに扱うことも出来んじやろう……エクリプス計画とやらが中止されるまでの人質と考えるべきか。」

「……だが、腑に落ちねえな。それほどの国家機密を知っちゃまった俺達を解放する意味がわからん。」

「これ以上隠し通せんと判断したか。」

「グレイ達は大魔闘演武の出場者……仮に全員捕まえていたら、明日の試合に出られなくなって、足がつくわね。」

「王国としても魔導士ギルドは敵に回したくないと思います。」

冷静に話し合う一同。しかし、やはりナツだけがヒートアップしていた。

「だーっ!!ごちゃごちゃ言っただけで助けに行くぞー!!」

「落ち着け。」

拳を巨大化させて、ナツの体にげんこつを入れるマカロフ。その表情は、真剣な時の彼そのものだった。

「家族取られちゃ祭りどころじゃねえわい……皆、同じ気持ちじゃ。」

マカロフの言葉で、ようやく黙るナツ。すると、ミラが何かに気づいたかのように周りを見渡す。

「ねえ……マルクとウエンデイはどこ？」
「二人なら上にいるわ。と言つても……どうにもマルクが苦しそうに寝てたから、起こしてから来るって言つてただけ……来ないわね。」

マルクは夢を見ていた。周りには誰もいないクロツカスの街で、目の前にクオーリが血まみれになって倒れていた。

自分の手が血まみれになっているが、それに対して夢の中の自分は何も思うところがなかったようだった。

「……なんだこの夢。」

暗転し、次は城の前だった。空を覆い尽くす何かが出てそれと懸命にみんなは戦っていた。

だが、次々と殺されていった。ルーシイと、レビイが生きてるのが確認できた。夢の中の自分はどこかと、視線を巡らせて気づいた。

『黒い巨大な何か』がいた。それは空を覆い尽くしている何かと戦っていたが……同時にその場にいた人々を殺して食らっていた。

「っ……」

また暗転、今度は先程と似たような場面だった。クオーリが目の前にいて、自分がその前に立っている。

但し、今度はクオーリは血まみれになっていなかった……が、何か怯えたような表情をしてマルクを見ていた。

それと、周りの建物が根こそぎ崩壊していた。

「なんでさっきと……」

マルクの意志に関係なく、再び暗転。今度もまた空を覆い尽くす何かがいた。

だが、違う部分は……その場にアクノロギアがいた事だった。

「っ!!」

アクノロギアは、空を覆い尽くす何かを次々と殺していった。同時に魔導士達も殺されていった。

そしてまた、黒い巨大な何かがいた。今度はアクノロギアと戦っていた。

『——んだ。』

「え……?」

突如聞こえてくる声、夢の中ではなく、頭の中に聞こえてくる声。

『——が死んだ。』

「誰の……俺の、声……?」

『ウエンデイが——』

『——死んだ。』

瞬間、マルクの心臓が一際大きく脈打つ。しかし、それが気にならないほどに、マルクは今の一言で心を揺れ動かされていた。

『——に殺された。』

『瓦礫に押しつぶされた。』

『——に食われた。』

『アクノロギアに殺られた。』

「はあ、はあ……!」

どす黒い何かがマルクの体を侵食していく。心か、それともまた別のなにかか。

『——ニクイ、ナラ……カラダ……ヲ、ヨコセ。』

声が変わる。その声がどこから聞こえてくるのか、催した吐き気と頭痛で気にもすることも出来ない。

『オマエノ、チハ……オマエ、ノジヤナイ……』

「俺の、血……?」

その言葉と共に、体にあった不快感はすべて消えた。しかし、同時に視界が真っ赤に染まった。

口と鼻から何かが流れ出ていた。眼球の奥から何かが溢れてきていた。手足の指に、違和感があったので手を見てみた。

「っ……血……?!」

口から溢れてきているものも、眼球の奥から溢れてきているものも、鼻や手足の指……正確には指と爪の間から、血が溢れ出ていた。

『ソノ、体……を、貰うぞ……！憎きドラゴンの子よ……！』

喋り方が流暢になってくる。溢れ出た血は何かの形状を成しはじめて、手足が確認できるようになる。

そして、『それ』は引きずるような歩き方から段々と小走りに走ってきて、飛び込んでくる。

「っ!!魔龍の——」

『グゲッ!』

不意に、それを弾き飛ばすように何かがやってくる。

黒い体、4本の細い手足。そして蛇のように長い体に、生えている立派な角。その姿をマルクは知っていた。

「……イー、ビラー?」

「……」

マルクを育ててくれたドラゴン、イービラー。イービラーはマルクに近づいて、顔を……視線をマルクと同じところまで下げる。

「……マルク、理性を忘れちゃあならんぜ。」

「へ?な、なんだよ急に……というかここどこだよ!!」

「あっしが言えるのは……ここまででな……マルク、怒るのはいいが……絶対に理性を忘れるな。」

止めてくれる者を、一緒に連れていけ……絶対だぜ……」

そう言っつて、イービラーは吹き飛んだ血の塊を手で持ってどこかへと運んでいく。

「待てよイービラー!!おい、聞いてんのか!おい——」

「——ルク、マルク！起きてってば!!」

「ん、んん……ウエンディ……?」

マルクは目を覚ます。そして、すぐさま体の異変に気づいて飛び上がる。

体中が汗だくになっていたのだ。

来ていた服に汗が染み込んでいて、とても満足に着れるような代物ではなくなっていた。

「ああ、もう……気持ち悪い……」

「ねえ、大丈夫?」

「ん?あ、ああ……ちよつと汗まみれだけど着替えればなんとか——」

ウエンディは、マルクが言葉を言い終える前に回り込んで、マルクの前に立つ。その目は、不安に満ちているとわかりやすいものだった。

「服じゃないよ……あれだけ苦しんでるマルクを見るの初めてだもん……」

「……そうか?」

「だって、マルクって私に戦うところ見せようとしなないよ?いつつも一人で戦ってる。」

「そんなこと無かったと思うが……」

六魔將軍との戦い、エドラスの戦い、グリモアハート悪魔の心臓との戦い……この三つを思い出してみるマルク。

確かに、ウエンディと離れ離れになることが多かった、と今更ながら思えてきた。

「そんなことあったでしょ?」

「はい……」

「……何か、不安になつてることとかあつたら話してね？」

「……うん、ありがとうウエンデイ。」

ニツコリと微笑むマルク。そしてその後、ウエンデイは一旦部屋から出る。兎にも角にも、着替えなければいけないからだ。

「……でも、なんでイービラーが……」

マルクの見た夢。夢というには、余りにも鮮明で本能を刺激されるような危機感もあつた。

クオーリを半殺しにして、空を覆い尽くす大量の何かと戦う黒い何か。

「……考えても、仕方ない。今は、皆ルーシイさんを助けに行く話をしてるはずだし……俺も行かないと。」

そう言つて、マルクは着替えて部屋を出る。頭の隅に置いておけない程強烈なものを、しこりとして残しながら……

「それと……先程運営からとある通達が来た。」

「んだよ、まだ俺たちに何か言いたいことでもあんのか？」

マルクが起きてから、マカロフは便箋を見せる。大魔闘演武主催から送られてきた通知の様だつた。

「それで、それには何が書いてあるんですか？」

「うむ……最終戦の5人全員参加、その競技の仕様を今変更する、とな。」

「競技の変更？んで今更……」

ラクサスが、不満そうに愚痴る。あまりにも突発的で、理解不能なことであった。

「仕様と言いたが、強制はせんそうでな……5人に可能ならば十一人の追加をして欲しい、らしい。」

「メンバーの追加って……それルール変わってきませんか？」

「どうにも……その追加する一人というのは、倒した相手の選手のポイント分、自身のポイントが上がっていく……というルールを追加したらしい。」

持ち点そのものは、その役割を果たすプレイヤーは0点……だとか
なんとか……」

マルクの疑問に、エルザがしどろもどろ答える。どうにも、他のメンバーにもうまく伝わっていないようだった。

「次の試合のルール自体はもう出てんだっけか？」

「いや、にも関わらずこれだけが送られてきた。」

「ルール説明は、いつも通り直前に行く感じか……」

「まあよい……元から救出メンバーと、大魔闘演武のメンバーは決まっておったわ。」

そして、マカロフはルーシイ救出メンバーと大魔闘演武に出場するメンバーを、発表したのであった。

最終日

「いよいよよーいよいよやって参りました！魔導士達の熱き祭典！大魔闘演武最終日！泣いても笑っても今日！優勝するギルドが決まります!!」

その声と共に観客が沸き上がる。大魔闘演武最終日として、まだ始まったばかりで既に観客の熱はヒートアップし続けていた。

「実況はおなじみ私、チャパティと……解説には元評議院のヤジマさん。」

「よろしく。」

「スペシャルゲストにはなんと！大魔闘演武公式マスコットキャラクターのマトーくんにお越しいただけます！」

「よろしくカポー」

「今日は審判のお仕事はよろしいのですか？マトーくん。」

「今日は大丈夫カポー！みんな頑張るカポー！」

「さあ、そろそろ出場チームが入場してくる頃です。」

実況の声とともに、フィールドの門が開いてそれぞれのチームが入場してくる。

「現在6位、大逆転なるか？クワトロバヒー 狛犬改め仔犬、四つ首の仔犬。

ブルーベガサス 続けて青い天馬、ラミアスケイル 蛇姫の鱗、マーメイドヒール 人魚の踵!!」

6位、5位、4位、3位、の順でそれぞれのチームが入場してくる。未だその場にいる全員が、諦めたような表情はしていなかった。

「そして現在2位、このまま王座陥落となってしまうのか？再び最強の名を手にするのか!?!セイバートウース 剣咬の虎!!」

その声とともに入場してくるセイバーの5人、しかし全員の格好が今までとどこか違っており、表情や雰囲気もまるで違っていた。

「おや？何か雰囲気が変わりましたね？」

「気合を入れ直したのかね？」

「かっこいいカポー！」

そして、観客席には、クオーリがいた。今フィールドにいるメンバーを見下ろすような視線で、実につまらなそうな表情でフィールド

を見ていた。

「…………ふざけんなよ、ステイング…………！」

それは、四日目の試合に遡る。ステイング、ローグ、クオーリが妖精の尻尾のナツ、ガジル、マルクに負けたその日の夜の話。

「ステイング、ローグ、クオーリ…………あのザマはなんだ。」

クロツカスガーデン、剣咬の虎が止まっているホテルにてギルドメンバー全員がその場に集まっていた。

「…………言葉ありません、完敗です。あの滅竜魔導士…………マルク・スーリアに俺たちは敗北した。」

魔力を吸うだけだと侮って、逆にやり返された。」

「それが最強ギルドに所属する者の言葉か？ア？」

セイバーのマスターが立ち上がる。最強ギルドが敗北する、その事だけがセイバーのマスターを怒らせていた。

「誰があんなみつともねえ姿晒せと言ったよ。誰が敗北してこいと
言ったよ…………最強ギルドの名を汚しおつてからに!!」

マスターが起こした風圧で、三人が吹き飛ばされる。他のメンバーは、ただ傍観しているだけだった。

「貴様らに剣咬の虎を名乗る資格はないわ!!消せ!!ギルドの紋章を消せ!!我がギルドに弱者はいらぬ!!負け犬はいらぬ!!」

殴る蹴る、三人にひたすら暴力を振りかざしていく。しかし、それを止めようとする小さな影がひとつ。

「まあまあマスター…………ステイング君もローグ君も、クオーリ君だつ

て頑張りましたよ……」

エクシード、レクター。ステイングの相棒である彼は、ステイング達に対する暴力を止めようと、震えながら声をかける。

「今回は負けちゃったけど……僕はステイング君を誇りに思います。」

「レクター……」

「僕は思うのです、人は敗北を知って強くもなれるって……ステイング君は今回の戦いで、多くの事を学びました。」

しかし、セイバーのマスターはレクターを見て怪訝な表情を浮かべるだけであった。

「……誰だうぬは。」

「い、嫌だなあマスター。僕だってここにセイバーの紋章を入れたれっきとした……」

服をまくり、背中にある紋章を見せるレクター。だが、それを見た瞬間にマスターの表情が怒りに変わっていく。

「なぜに犬猫風情が、我が誇り高き剣咬の虎の紋章を入れておるか……！きえええええい!!」

レクターに向けて、魔法が放たれる。全く考えてもいなかったことに、誰も助けに行くことは不可能であり、またレクター自身も避けることは不可能であった。

「レクター!!」

「ステイング、く……ん——」

そして、その一撃でレクターの姿はその場から消えていた。流石の行動に、他のメンバーも動揺を隠せなかった。

「あ、ああ……レクターが、消えちゃった……」

「フロッシュ!!」

「ローグう……」

ローグが、セイバーのもう1人のエクシードであるフロッシュを庇う。しし、その行動は眼中に入っていないのかマスターは気にしていなかった。

「目障り目障り……猫が我がギルドの紋章など入れてからに……」

「あああああああああ!!」

「やかましいぞステイング!!」

涙を流しながら、声を荒らげるステイング。しかしマスターにはそれは一切、理解ができなかったのか一蹴するだけであった。

「なんてことを!! あんたはなんて事を……!」

「黙れい!! たかが猫一匹——」

瞬間、その体にステイングの悲しみの一撃が放たれ、貫かれていた。それは一人を除いてメンバー全員にさらなる驚愕を与えていた。

「ぐはあ!! あがが……!」

「よくも、よくもレクターを……!」

倒れ込むマスター、

ざわつくメンバーだったが、一人ステイングに近づく者がいた。ミネルバである。

「それで良い。父上の恐怖統制は今ここで終わりを告げよう。父上の力をも超えるステイングこそ、新たなマスター候補に相応しい。」

「ミネルバァー! 貴様何を言つて——」

立ち上がるマスター……否、元マスター・ジエンマ。しかし、立ち上がったその瞬間に両手足が、貫かれていた……クオーリの作った氷の柱に。

「立つんじゃねえよ負け犬……つくづく思っていたが……あんたは、ナツ・ドラグニルより弱い。」

そこで一生そうしてろ、負け犬。」

「そうだな、負け犬などいらんのだろう? 持論に従うならば。」

「むぐ……!」

両手足を貫かれ、身動きの取れなくなったジエンマを、クオーリはさらに上から凍らせて、完全に動けなくする。

そこからミネルバが、ジエンマをどこかへと飛ばしたのであった。

「ステイング……そなたになく、ナツというものにあるもの。そここそが思いの力だ。」

「思いの、力……」

「知らず知らずのうちに父上に感化されていたようだな。『仲間などいらぬ』『力こそすべて』」

だがそなたの本質は違う、レクターを思う気持ち力が力になる。そなたはその力を手に入れたのだ、そなたはナツをも超える。」

『仲間の力を手に入れた』と言うミネルバ。しかし、ステイングにとってそれは今更なものでもあった。

「お嬢……俺は、もう……」

「案ずるな、レクターは生きておる。妾の魔法で別の場所へと飛ばした。」

「ほ、本当か……お嬢……」

「レクターが、生きてる……」

嬉しそうに頬を緩めるフロツシュ。ステイングも、その事実嬉しそうに喜んでいた。

「ありがとう！ありがとうお嬢!!早くレクターを元に戻して……本当に、うぐ……ありがとう、とう！」

「——甘えるな。」

しかし、ミネルバから与えられたのは絶望の言葉だけであった。

「大魔闘演武にて優勝するまでは、レクターは渡さん。」

「何言ってるんだよお嬢！頼むよ……今すぐレクターを返して……!」

「妾は父上とは違う。しかし、剣咬の虎のあるべき姿が天下第一のギルドであることに変わりはない。」

そなたは、手にいれた力を証明せねばならん。勝つことで、民に力を誇示せねばならん。

愚かな考えは、起こすでないぞ？レクターの命は妾が握っていると思え。」

「……」

一連の流れを見ていたクオーリ。その表情は、他のメンバーと同じような驚愕の表情ではなく、ステイングの様な絶望の表情でもなく、ましてやミネルバの様な黒い笑みを浮かべているでもなかった。

「……仲間の、力。」

それは、仲間という言葉に対しての呆れた表情だけであった。

「剣咬の虎は最強のギルド……ジエンマは、それについていけなかっただけだ。」

だが……仲間の力？そんなもん……とうの昔に捨てたんだよ。」

最終日最終種目の為に、クオーリは専用のバトルフィールドへと向かう。後ろから、妖精の尻尾フェアリーテイルの入場の歓声が聞こえてきたが……恐らく出るであろう人物にしか、彼の興味はいつてなかったのであった。

そして、時同じくして妖精の尻尾の入場。

「そして現在一位！七年前最強と言われていたギルドの完全復活の日となるか!?妖精の尻尾入場ー!!」

入場してくる妖精の尻尾。しかし、そのメンバーに観客は呆然としていた。なぜなら――

「おや!?こちらはなんとメンバーを入れ替えてきたあー!!」

ナツがおらず、代わりにジュビアが入っていた。その事で他のチームにも動揺が走っていた。

「タッグバトルであれだけ活躍したナツがいない……とは一体!?」

「ウム……何かあったのかねえ?」

だが、観客席にいる他の妖精の尻尾のメンバーは変わらず、皆を応援していた。

そして、その一番前にはマカロフとメイビスが立っていたを

「考えましたね、6代目。」

「結局こうするしかなかった……大魔闘演武で優勝すれば、ルーシィを合法的に返してもらえるかもしれん。」

だが、全てを信じることはできぬゆえ……それだけの策では、足りないのです。

皆が大会に夢中になってる、今が好機。我々も普段通り、チームを応援するのです。」

「その裏で、別働隊がルーシィの救出に向かう。二正面作戦という訳ですね。」

「頼んだぞ、ガキども……!」

メイビスの視線が、後ろにいるマルクに向かう。その表情は、ただ『出来るのか?』という、メイビスの思いがあった。

「ナツさん、ウエンデイ、ミラさん……そんなでもってエクシード隊の皆が頑張ってるんだ。俺も、出来ることをこなしますよ。」

「では、お願いします。」

そして、マルクは最終種目の為に一度席を外す。その表情には、全てを背負った様な……そんな表情だった。

「己が武を……魔を……そして仲間との絆を示せ。最終日、全員参加のサバイバルゲーム。」

『大魔闘演武』を開始します!」

実況の声と共に、最終日に相応しい盛り上がりを見せる会場。そのまま、実況は種目の説明に移る。

「バトルフィールドは、なんとクロツカスの街全域。各ギルドのメンバーは、既に分散してもらってます。」

街中を駆け巡り、敵ギルドのメンバーと出会ったら戦闘となります。相手を気絶、戦闘不能にするとそのギルドに直接1pが加算されます。

又、各ギルドにはそれぞれリーダーと、可能ならばゲッターを設定してもらいます。これはどちらも他ギルドにはどれが誰なのか分かりません。」

「スかし……ゲッターは『6人目』のメンバー。五人になつとるとこは、ゲッターがいらないもんだと考えるべきなのかね。」

「はい、その考えでいいです。しかし、今回はどのギルドも六人目を持ってきてますね。」

つと、リーダーとゲッターについての説明を行います。

リーダーは、倒されると倒した相手に5p……つまり、簡単に言えば五人分の点数が入ることになります。

そしてゲッターですが、こちらはすぐに倒してもポイントは入りません。しかし、ゲッターがゲッター以外の誰かを倒した場合、その点数はチームに加算されず、ゲッターの持ち点として加算されます。「持ち点を持ったゲッターが、他のゲッターに倒されるとどうなるんだい?」

「そのまま持ち点の移動になりますね。その時点でどちらも持ち点があつた場合は、加算式で増えていきます。」

「これ、ゲッターの要素いるかい?」

「最後まで緊張感を持ってほしいからだカボー」

そこでルール説明は一旦区切られる。そして、再び実況が流れる。

「えー、これで最多Pの理論値は、ゲッターが自分以外のメンバーを倒していた時の場合は54p、それを抜きで考えると45pですね。」

「どちらにしても一発逆転出来る可能性があるカボー」

「チーム一丸となつて動くか、分散するか……戦略が分かれるところだね。」

そして、妖精の尻尾のメンバーが集まっている場所。

「よいか、私達は優勝するしかないんだ。」

「ルーシイさんを取り戻すために、ですね。」

「ナツさん達が無事救出してくれれば……」

「それに越したことはねえがな……」

ルーシイを取り戻すために優勝する。しかし、それだけのために優

勝するわけでないことは、全員承知の上である。

「だとしても、優勝にはもうひとつの目的もある。」

「7年間、苦い想いをしたギルドのヤツらのためにもな……」

そして、円陣を組む妖精の尻尾。どちらにせよ、優勝しなければならぬのだ。ギルドの為にも。

「行くぞ!!」

「オオツ!!」

「栄光なる魔の頂きは誰の手に!!大魔闘演武!!開始です!!」

ただひたすらに

大魔闘演武最終日、最終種目『大魔闘演武』の開始を告げる鐘の音が鳴る。始まりは騒々しかったが、いざ始まれば選手達には静かな移動だけが行われている。

「始まりましたね、最終戦。」

「やはり分散し、各個撃破の作戦を取るチームが多いね。」

「みんな頑張るカボー！」

実況の説明とともに、映像には各選手の様子が映し出される。

「一人一人が高い戦闘力を持つ剣咬セイバートウースの虎はやはり分散しています。

他にも二人一組バディで行動する者や、3人1組スリーマンセンもあります。

ん……？あーつとこれは……!？」

実況と共に観客席にも動揺が走る。何故なら、映し出された映像には全く動かない妖精の尻尾の『5人』が映し出されていたからだ。

「ど、どうしたのでしょうか!?妖精の尻尾!!5人とも目を閉じたまま動いてないぞー!!」

「5人……という事は、一人だけ動いとる、ちゅうことだね。」

魔力を足に貯め、跳ぶ。足が着地する前に魔力をすぐに練り直し、足が何かについた瞬間すぐさま跳ぶ。

それを繰り返しながらひたすらに、マルクは跳んでいた。

「んっ…おいトビー…またやってきたぜー!」

「おおーん!!」

「悪いですが……急いでるんで突破させてもらいます!!」

マルクは拳と足に魔力を溜めて、目の前にいた蛇姫ラミアスケイルの鱗のユウカとトビーに向かつて飛び込む。

「早っ……」

「そいつ!!」

マルクは二人の体に魔力を打ち込む。だが、二人は倒れることは無かった……と言うよりも、倒れるのを確認しないまま再度跳んだ。

「……な、なんだ今の?」

「おっおん……?」

あまりの一瞬のことで、ユウカ達はマルクの行動に疑問を持ったが、すぐさま他の敵の探索に行くのだった。

「あれ?君はウエンデイちゃんの――」

「通ります!!」

今度は青い天馬ブルーベガサスのレン、イブ、ヒビキのイケメン三人組。しかし、先程の二人と同じように魔力だけを打ち込んで更に跳んだ。

「あー、くそ……魔力の消耗が……!」

「そんなにぴよんぴよん飛び回って、どこに行くというのだ?」

「っ……ジュラさん……」

マルクの着地してきた目の前に居るジュラ。マルクは冷や汗をかいたが、そのままマルクはジュラに飛び込む。

その最中、マルクはこの作戦の事を考えていた。

「先程から、君は誰彼構わず魔力を打ち込み続けている。それがどんな作戦かはわからないが……勝つために必要なことだろうか?」

「当たり前ですよ……勝つためにやらないんじや、やる必要性もない!!」

参加者全員に魔力を打ち込むかつ、ゲッター全員の戦闘不能を約五分以内でこなす。それがマルクがメイビスから与えられた作戦だった。

「だから……一撃でも入れればいい!!」

「ふ……よほど信頼できる策士がいるらしい……だが、簡単には通さぬぞー!」

ジュラの魔法は強力。素早い上に機動力もあり、そして簡単には打

ち消せない硬さと攻撃力も兼ね備えている。

どれだけ近づけても、後一步というところで届かせられない。

「しかし、誰かはわからないゲッターをどう探す？まさか、それすら最早看破されていると？」

「ウチの策士さんは……とんでもない人ですよ。なにせ、俺が貴方とこのタイミングで鉢合わせる事自体予測していたんだから。」

「なんと……！」

「その岩!!邪魔だから全部『喰らいます』!!滅竜奥義まこつぜつあんげき魔光絶闇激!!」

腕から魔力を放ち、回転しながらまるでドリルのように、足で岩を貫いていくマルク。

そして、ほぼゼロ距離になるまでにジュラの接近ができた。

「はあ!!」

「筋はいい……がつ!!」

マルクは空高く打ち上げられる。しかし、吹き飛ばされたにも関わらずその表情は微笑みに満ちていた。

「む?」

「これが、本当の戦いだつたら……俺は貴方に勝てない。けど、今回俺は……まともに戦わない。」

地面に綺麗に着地するマルク。ジュラへの魔力の打ち込みは、吹き飛ばされる前に終わっていたのだ。

「ってわけで……さよなら!!」

そしてまた、忙しくなくマルクは跳んだ。魔力はほんの少しだけジュラから奪っていた。

だが、それもジャンプするだけで使い切ってしまう。

「無駄に時間かけすぎた……ゲッターは見つけ次第、倒す。」

そう眩きを残して、マルクは更にブーストをかける。まともな戦闘は行わず、ひたすらに飛び回るのが作戦なのだから。

「ぜ、全員に俺の魔力を打ち込め？」

「はい、妖精の尻尾が絶対に勝つ為に必要な作戦です。それと、新ルールで増える六人目の打倒、これも含めてください。」

「……それって、具代的にどのくらいの時間で？」

「5分、それが限界です。」

前日の話。マルクはメイビスに、そう作戦を伝えられていた。あまりにも確実性が薄く、不可能に近い作戦。

しかし、メイビスにはそんな無謀はさせる気は無いと、そんな目をしているようにも受け取れた。

「……魔力で無理矢理跳び回れば……」

「それ前提で行ってください。」

「……何故俺なんですか？『倒さない』という前提が、あるのは分かりますが……魔力を打ち込めって言うのは、流星によく分からないんですけど……」

「えっと……」

急にしどろもどろになるメイビス。『答えたくない』のかとマルクは最初思ったが、どうにも『答えられない』という印象の方が強くなってきていた。

「あの、アズマと戦った時に見せた……竜がぶわー！となるあの技を……」

「竜が、ぶわー……？あ、魔龍刻印ですか？」

「っ!!」

それだ！と言わんばかりにビシツと指を指すメイビス。そして、マルクはそれで合点がいった。

要するに、参加者全員に魔龍刻印を打ち込めとメイビスは言っているのだ。

「でも、俺たちを除いても6人目を入れるとなると30人も人がいますよ？流石に5分となると……」

「いいえ、24人です。四つ首の仔犬クワトロバビーのメンバーには打たなくて結構です。」

「へ？でも……」

「100%の確率で、パピーは少なくとも5人全滅します。そして、6人目は50%以上の確率でカグラと当たり、残りの50%でもジュラ、剣咬の虎のメンバーの誰かと鉢合わせします。」

これは5分以内に起こるので無問題です。」

突然、ペラペラと喋るメイビス。マルクは、あまりの勢いに頭に疑問符を浮かべてしまっていた。

「……けど、6人目がバツカスより強かったら？」

「それはないでしょう。忘れましたか？バツカスはリザーブ枠です。わざわざバツカスより強い選手を、今更入れるのもおかしな話でしょう。」

「……あ、そう言えば途中参戦なんでしたっけ。」

「そういう事です。」

だから無視していいと、その意見には納得したマルク。しかし、どうして魔龍刻印なのか、という疑問は残る。

「あの技、とてもじゃありませんが、使いやすい技でもありませんよ？俺の魔力だと、どれだけ打ち込んでも刻印は発動しない上に、他の人の魔力をかなりの量打ち込まないと。」

「それでいいのです。発動するかしないかは、二の次……必要な事は、それを打ち込んだ、という事実ですから。」

「事実？」

「簡単な話です。1人が動き回り、誰ともまともに戦わずひたすら一撃だけを入れて飛び回る……残りの5人は動かずにじっとしている。」

もし、そんなことをしているチームがいたら、どう思いますか？」

「まあ、おかしいと思うし怪しいって思いますよね。」

「ええ、だから『そう思わせる』という事です。発動すれば相手は魔力の大部分を持っていかれ……」

「発動しなくても、無駄に警戒させて相手を困惑させたり焦らせたりできる……って事ですか。」

「はい。」

『ほかのメンバーが動かない』というのは初耳だったが、今はそこを気にしている場合ではない、と思いマルクは言及しなかった。

「……分かりました、じゃあできるだけ頑張ってみます。」

「では、ルートを教えます。敵のいそうな地点に○を付けますんで、当日はそこに着地して下さいね。」

「はい。」

「それと、6人目の打倒……1人は倒さなくて構いません。クオーリ・クーライ、彼もおそらく参戦するでしょうが……」

「なぜ？」

「やられる可能性の方が高いからです。1%未満の確率で倒されずにすんでいるでしょうが……そして、最後に打ち込む相手もこちらが指定させてください。」

「それは、誰ですか？」

「それは——」

「まったく……凄くしんどいな、つと!!」

「くっ……」

「じゃあまた!!」

今度はカグラに不意打ちで魔力を撃ち込んで、跳んでいくマルク。カグラは追いかけてようとはせずに、そのまままた他の参加者を探しに行くのであった。

「ほう……妖精の尻尾の小僧か。お主もこんな戦いに――」

「……今はあんたに構ってる余裕はない。でも、妖精の尻尾の誰かがあんたを倒す。」

「あんたは……俺達を怒らせたんだから。」

そして、ミネルバと鉢合わせる。感情に任せて、今は動くべきときではないと思つたマルクは、顔を伏せて手に魔力を込める。

「怖い怖い……それで？妾にも無謀に挑むのか？」

「ジユラさんならともかく……流石にあんたになら負ける気はしないよ。」

「ほう……まあよい、小賢しい手一つで潰れるほど妾は甘くはない。」

両手を広げて、余裕ぶるミネルバ。何をされても、負けない自信があるからだろう……とはマルクは思わなかった。

負けない自信よりも、負けることそのものを想定していない目。自分以外の全てを下に見ているかのような、そんな目をミネルバはしていた。

「舐めてると、痛い目を見るぞ？」

「ハンデから勝つのが真の勝者とも言える、ならば妾はハンデを背負つて勝つべきだ。」

いや、妾だけじゃない……剣咬の虎全体が、だな。」

「そうか……なら、舐めた結果にせいぜい後悔しないようにな。」

マルクは、ミネルバに魔龍刻印を打ち込む。そして、再び飛んでいく。その後をミネルバは追おうとはしない。

マルクがゲッターであつても、そうでなかつても……狩る意味がないと思つたからだ。

「さて、どうなるか……」

その後も、マルクはひたすら回り続けた。ゲッターを倒しつつ、刻印をひたすら打ち込み続けた。

ゲッターは残り1人、クオーリだけが残っている。しかし、今の今まで倒されていないことを考えると、1%未満の確率が当たったようだった。

「……そして、最後に私を狙うか。」

「ああ、ルーファス……お前を最後にしろとウチのお偉いさんが言っただね。」

剣咬の虎、ルーファス。まるで舞踏会にでも出るかのような、鮮やかな格好をした男性。

使う魔法は記憶造形^{メモリーメイク}……自信が記憶した魔法を、オリジナルの魔法に変えるものである。

「ふふ、しかしあれだけ急いでも……もう君達の場所はわかっている。君がどうしようとも……関係ない。」

不敵に笑うルーファス。どうやら、全員の間所がわかっているにも関わらず、今の今まで狙ってこなかったようだ。

「俺だけでも狙えばよかっただろ？」

「残念、君の居場所は分からなかったんだよ。まあ、たとえば分かっていても、私は狙わなかっただろうからね。」

「妖精の尻尾が動いたア!!」

実況の声と共に、頭に指を乗せるルーファス。それは、彼が魔法を使う合図である。

「私の索敵能力を侮ってもらっては困るね。まとめて片付けて差し上げよう……記憶造形『星降ル夜二』」

ルーファスを中心として、5つの光が飛んでいく。それらは全て、マルクを除いた妖精の尻尾メンバーに、飛んでいったのだ。

「らア!!」

そして、マルクは一瞬遅れてルーファスに魔力を打ち込む。ダメー

ジはない、だからこそ『マルクの攻撃が一瞬遅れた』と判断した。

「——上空に光を目視してから、2秒以内に緊急回避で回避可能。」

「……？何っ!?受け止めた!？」

マルクが何を言ってるのか、分からなかったルーファスだが、飛んでいった一つがどうやら受け止められたらしい。

「この魔法の属性は雷……同属性持ちのラクサスさんなら、ガードができる。」

「くっ……まさか、君は知っていたのか!？」

「いいや？俺はこれを伝えろと言われてただけだ。どうだ？顔の仮面はともかく……その余裕ぶってる、態度の仮面は外れたか？」

まあどちらにせよ……あんたは手のひらの上さ……じゃあな。」

「ぐうっ……!？」

動き始めた妖精の尻尾。メイビスの指示にて動く彼らは……優勝出来るのか。

『優勝すること』と『ルーシイを取り戻すこと』を達成する為に、彼らは動き続けるのであった。

快激

「妖精の尻尾エルザー！動いてすぐに青い天馬のジェニーを撃破！」
フェアリーテイル ブルーベガサス

おっとお!?同じくガジルもレンとイブを撃破!!そして残ったヒビキが逃げた先で、グレイが回り込んでヒビキを撃破!!

「またもやトツプに並んだー!!妖精の尻尾ー!!」

「すげえー!どうなってやがる!!」

妖精の尻尾メンバー、試合開始後は全くと言っていいほど動かなかったが、それは初代マスターメイビスの指示によるものだった。

そして、メイビスは適宜指令を下しながら妖精達を動かしていく。それは、先程までポイントを一切溜め込んでいなかったチームを1瞬で1位まで帰り坂せるほどのものであった。

「聖十のジユラ！天馬のリーダー一夜を破って5p獲得ー!!そしてシエリアがリズリーを破り49pに!!1位に並んだーっ!!」

妖精の尻尾、剣咬セイバートウリスの虎、蛇姫ラミアスケイルの鱗共に1位。

四つ首の仔犬クワトロパピー、青い天馬共に全滅。残り人数もかなり絞られてきていた。

「息詰まる攻防戦の続く大魔闘演武!!ここから更なる熱戦が予想されます!!」

そして今！図書館エリアで妖精の尻尾グレイと剣咬の虎ルーファスが激突ー!!」

「……グレイさんがルーファスとぶつかったか。」

実況の声を聞きながら、物陰で休むマルク。彼が受けた指令は既に叶っている。

ゲッターの撃破、並びに全員に刻印の打ち込み。一人を除いて、その命令は完全にこなせていた。

「……小賢しいもんだ、お前。」

「隠れてたか?……いや、単純にジユラさんとかとぶつからなかっただけか。」

マルクの背中から話しかけてくる人物、クオーリ・クーライ。メイビスが唯一『倒さなくていい』と言った人物。

「俺が六人目……というのは、予想か？策士の。」

「そんなところだ。」

「……魔力を相当消耗している。いくら休んでいたとはいえ、勝てると思ってるのか？俺に。」

「俺を狙うのか？作戦があるならともかく……無いのに、ポイントを一切持っていない俺を狙うのなら、おかしいぞお前。」

マルクは、クオーリを睨みつける。どこまで執着する気なのか、それだけがただマルクの闘志に火をつけていた。

「……ルーファスは、負ける。グレイに。」

いや……ステイングもローグも、お嬢もオルガも全員負ける、多分。」

「……お前の仲間だろ？なぜ信用してやらない。」

「いらぬ、仲間なんてな。」

「いらぬ、だど？」

クオーリの言葉に眉を寄せるマルク。そもそも仲間なんて言うものがいらぬ、と言わんばかり。

「だったら一人で武者修行の旅でもしてろ。何故ギルドに入ってる？」

「……力を見せたかっただけだ。」

「分からないな……お前のやっていることも、言っていることも……滅茶苦茶だ。」

クオーリは構える。マルクの言った言葉に対して激昂した……というわけでもなく、ただ目の前にいるから相手にする……というものでない。

マルクに、殺気をぶつけていたのだ。

「俺は倒す。お前を……なんとでも言うがいいさ……最後に勝つのは、俺だ……！」

「……まあいい、誰が相手するわけでもねえんだ……相手してやるよ。」

「おーつと!?グレイとルーファスがぶつかっている今!!別のエリアでは、剣咬の虎クオーリと妖精の尻尾マルクが一触即発の気配だーっ

!!

実況のの声で、盛り上がる会場。しかし、ピリピリと二人の間には闘志がぶつかり合っていた。

「氷竜の――」

「魔龍の――」

「咆哮!!」

2人のぶつかり合いで、そばにあった建物に穴が開く。だが、ブレスはマルクに取っては餌でしかなかった。

マルクのブレスは、クオーリのブレスの魔力を吸収していき、段々とクオーリを押ししていく。

「ぐっ……うおおおー!」

「っ!」

だが、負けじとクオーリはブレスの途中で地面を凍らせる。ブレス途中で使われると思っていなかったため、マルクは地面が凍っていくのを黙って見ていくしかなかった。

「ふっ!!」

「ちっ……!」

「さて……凍らされた地面で、どうやって戦うつもりだ?今は大して魔力も残ってないだろ?」

「……ふん、相変わらず地面を凍らせるしかできねえのか。」

「その負け犬の遠吠えが、耳に心地いいぜ……何としてでも勝たなきゃいけないんだわ。」

仲間の力、とやらは必要ねえって事を……!」

「ナツ、天井も全部塞がってるよ。」

「くそっ!!折角ここまで来たのに!!」

「ミイラ取りがミイラになる……ね。」

「情けないです……」

ルーシイを救出するために動いていたナツ達。王宮に忍び込めたのはよかったものの、それは既に王妃が気づいていたことだった。

閉じ込められていた牢から、目の前の通路へ出ていたナツ達だったが、通路が開き、王宮地下へと……死の都、奈落宮へと落とされていた。

「こんな事なら、体に地図でも描いてくるんだっただな……」

空を飛べるエクシード達が、率先して辺りを探す。落とされたとはいえ、道がないということもないだろう。

何せ、この街は地下空洞が広がっているのがわかっているのだから。

「……」

「ウエンディ様?どうかなさいましたか?」

ルーシイと同じ牢に閉じ込められていたユキノ。ルーシイ達と同じく、彼女も一緒に落とされていた。

「いえ……ちよつと、心配事が。」

「マルクの事?怪我でもしたの?」

「そうじゃなくて……昨日、凄く真剣そうな顔をして悩んでたんです。でも何に悩んでるのか聞いても、一向に答えてくれなくて……」

「男の子にも色々あるのよ、きつと。」

「うーん……」

頭を傾げるウエンディ。心配なことは変わらないが、性別関係の悩みなのだろうかと思っただからだ。

「みんな……こつちに通路があったわ!!」

「おっ!」

シャルルが道を見つけて、その道を通っていく一同。但し、とんで

もなく狭い通路の為に、通るのは一苦勞だったが。

「狭いわね……！」

「ここを抜ければ……」

「っ！誰かいますよ……？」

一同の先を行っていたウエンディ。警戒するように呼びかけるが、そこに居たのは傷だらけで倒れているアルカディオスだった。

「アルカディオス様!!」

「おい大丈夫か!!しつかりしろ!!」

「何でこんなところに……」

「う……」

苦しそうに目を開けるアルカディオス。一旦ほっとしたが、苦しもうなその声にやはり警戒を持たざるを得なかった。

「逃げ、ろ……」

「――パーン。ジュワー」

唐突に、一同後ろから殴りかかってくる人物。その拳から放たれた液体は、時面にかかると跡を残しながら地面を溶かしていく。

つまりは、酸である。

「タイタイタイ!!タイ?大漁オ〜!!」

その直後に、ナツ達は吹き飛ばされる。酸を撒く人物と吹き飛ばした人物。

だが、まだ終わりではなかった。地面から植物が急激に生え、咲いた巨大な鼻からもう1人、更にどこからともなく飛んできた紙が人のような形に纏まり、また新たな人物の姿に。

「影から王国を支える独立部隊……王国最強の処刑人……餓狼騎士団……」

「餓狼騎士団、一五〇〇任務開始。」

現れた人物達の間には、リーダーらしき男が現れる。全員、見た目も性別も別れているが……全員が、ナツ達を敵認定していた。

「フィオーレ独立部隊、餓狼騎士団特別権限により……これより罪人の死刑を執行する。」

「……ぶはっ!!ぶはははははっ!!あははははははっ!!」

餓狼騎士団を目の前にして笑い始めるナツ。流石に水を刺されてしまったからなのか、ルーシイが窘める。

「ちよつとナツ、こんな時に……」

「だってどう見ても騎士団ってナリじゃねえだろ!!」

「……たしかに。」

「特にお前。」

「タイ」

所謂あほ面、というのに近い顔をした男が答える。髪はモヒカン、頭に捻った布を巻き付けている……パツと見たイメージでは、漁師と
いうのがふと思いつく見た目であった。

「見た目に惑わされるな……奴らの使う魔法は——」

「……人を、殺す魔法。」

後ろから聞こえてくる声。ナツ達が振り返るとそこには一人の少女……マホーグ・オロシがいた。

「あなた、レイヴンの……なんでここに。」

「み、道に迷って……気がついたら、こんなところに……しかも、あいつら私を返してくれない……」

「……お前いつからここにいんだよ。」

「……さあ?し、しばらく外に出てないから……」

マホーグの登場で、少し緩む空気。しかし切り替えるように、ナツは再び餓狼騎士団に目を向ける。

「まあでも……人を殺す魔法?上等!!なんだ?出口が向こうから歩いてきたぞ!!」

「そうね、出口を教えてくださいに丁度いいわ。」

「ルーシイさんとユキノさんは鍵ないんですよね!?下がっててくださいい!!」

餓狼騎士団から、出口を教えてくださいのナツ達。それに対してアルカディオスは驚き、目の前の男はその目を変わずナツ達に向けていた。

「餓狼騎士団を前に臆さぬとは……無知なる罪人め!ファイオーレ王国の土と帰れ……!」

「お、王国でも……あんた達知ってる人は……少ない。」

「行くよ？ コスモス。」

「私とカミカの美しい舞……ね。」

マホーグのことを無視して、カミカと呼ばれた女性は一枚の紙を取り出して息を吹き付ける。

途端に紙は増え、塊は捻れながらナツ達に襲いかかる。

「紙吹雪、赤の舞!!」

「んなもんは燃やして……やらア!!」

紙に対して、ナツは炎を当てて燃やそうとする。しかし、炎に当てられても紙は勢いを弱めないどころか、燃えてすらいなかった。

「あ……!?!」

「燃えてない!?!」

「赤い紙は炎の神……舞い散るが良い!!」

そのままナツの炎も巻き込んで、カミカの紙は進んでいく。ナツに当たる、その瞬間にウエンデイが咄嗟にブレスを放った。

「天竜の咆哮!!」

ウエンデイのブレスは、カミカの放った紙を尽く消していく。だが、そのウエンデイの隙について、彼女を喰らおうと下から植物が現れる。

「美しいわ……美しく踊る人形、それは血の咲く骸の花。」

「ウエンデイー!!」

ウエンデイが食べられかける、と思われた瞬間に魔人化したミラが殴ってその植物を爆散させていた。

「タイタイターイ!」

「ひ、人を殺す魔法……け、けど……敵意なら……『見る事が出来る』」

ナツ達の足元が、途端にマグマへと変化する。先程まで地面のあった場所からマグマになったことで、ナツ達は空中へと身を投げ出されていた……マホーグ以外は。

「タイ!?!」

「土地変化の魔法……敵意があればすぐ分かる。」

マホーグは持っている大剣を変形させて、タイタイ言っている男を

吹き飛ばす。

「さ、流石に……魔法は壊せないけど……土地変化だ。」

「ぱーんっ！」

「っ!!」

咄嗟にかわすマホーグ。後ろには酸を撒く男が既に立っており、マホーグの立っていた場所に酸を撒き散らしていた。

「紙吹雪……紫の舞！」

「なんだ!？」

「体が動かない!!」

カミカが、紫の紙をナツ達に飛ばして貼り付ける。張り付かれた先から、ナツたちの体は動かなくなっていくていた。

「紫の紙は縛りの神。」

「これぞ美しき連携……グロウ・クロウ！」

そして、ナツ達の頭上に巨大な花が咲く。その花の中心は奥が見えず、そして何より……ナツ達を吸い込もうとしていた。

「……」

「あ、あんた魔法相手なら強いんじゃないの!？」

「……か、紙は……殴っても殴っても止まらない……1枚しか、壊せないから……動けたとしても……あの花、殴る前に食べられちゃう。」

「よく今まで生きてこれたわね!!」

吸い込まれながら、シャルルはマホーグに文句を言う。しかし、その文句が褒め言葉と捕えられたのか、マホーグは照れていた。

「そ、それほどでも……」

「褒めてなーい!!」

「体の不自由を解除!状態異常回復魔法レーゼ!!」

ウエンデイの治療魔法により、体が動かないというのは解除される。しかし吸い込まれることには変わらないので……

「壊す!!」

「OK!!」

「うおおおおお!!」

ナツ、ミラ、リリーの3人で花に懇親の攻撃を仕掛ける。そのパ

ワー故か、盛大な爆発が起こり皆散り散りに吹き飛ばされるのであった。

「みなさーん！どこですかー!?!」

「…………お腹減った……」

ウエンデイは、マホーグといた。出口と吹き飛ばされたメンバーを探す為に、とりあえず歩いていた……だが。

「美しい…………いえ、美しいと言うより可憐…………でも、処刑よ。」

「あ…………花使い。」

吹き飛ばされた先で、コスモスと呼ばれた女性を相手取るウエンデイとマホーグ。

脱出と皆を探すために、戦いは始まるのであった。

一時の勝利

「アイスメイク……シールド!!」

最終種目『大魔闘演武』で、ルーファスとぶつかったグレイ。1日目の雪辱を晴らす為に、本気でルーファスを倒そうとしていた。

「シールド……記憶、そして忘却。」

「っ！盾が消え……ぐああああああ!!」

しかし、ルーファスの攻撃を盾で防ごうとしたグレイだったが、その盾を消されてしまい、攻撃が直撃してしまう。

ルーファスの魔法、記憶造形メモリーメイクは自分の記憶にあるものを組み合わせるだけでなく、記憶した相手の魔法も消すことが出来るのだ。

「この戦いは、私が君に詩う鎮魂歌レクイエム……記憶しておきたまえ、君は私に勝てない。」

「そいつア……どうかな。」

「脱いだー!!脱いだ!!脱いだー!!」

服を脱ぎ捨て、上半身裸になるグレイ。まさかの行動に観客も驚きを隠せないでいたが、しかしそのまま試合は見続ける。

「妖精の尻尾の紋章を刻んでるからには……同じ相手に2度はやられねえ……」

「ほう、何か策でもあるのかね？」

「……アイスメイク——」

「記憶。」

「アンリミテッド
限界突破!!」

グレイは即座に作り出した氷の武器を、2本手に取る。その間にもうさらに2本作り出される。

それだけでは終わらず、4本……8本……16本……その数はとんでもない速度で増えていく。

「なんという造形の速さだ……！記憶が、追いつかない……!!」

「覚えたかい……！一斉乱舞!!」

「ぬああああ!!」

そして、作られた氷の武器達は一斉にルーファスのところへと飛ん

でいく。

それは、確かにルーファスにダメージを与えていた。だが、ルーファスはそれではまだ足りなかった。

「しかし!!氷属性だけなのが惜しい!!私はその氷を滅する炎を憶えている!メモリーメイク『燃ユル大地ノ業』!!」

完全に凍りきる前に、ルーファスは記憶から炎を作り出す。その炎は氷を溶かして、グレイの元に伸びていた。

「……俺はもつと熱い炎を、覚えている……!」

だが、その炎を突っ切って……グレイが現れる。炎を超えてきたので、最早ルーファスの目の先鼻の先であり、ルーファスがどのような造形をしようとしても……追いつくことは無い。

「氷魔劍!!」
アイスブリンガー

「ぐああああ!!」

二刀の氷の刃がルーファスを切り裂く。ルーファスは倒れ、被っていた帽子は宙を舞い……グレイの手に。

「グレイだー!!妖精の尻尾が勝利ーっ!!ルーファス敗れるー!!」

「胞子爆弾リンカ・レンカ。」

「きやああああ!!」

「……煩い。」

場所変わって、王宮地下。そこではウエンデイとマホーグが、餓狼騎士団の1人であるコスモスと戦っていた。

「貴方……その子を、助けようとしなのね?」

「…そ、そもそも…仲間でもなんでもない…し、それ以前に…自分の事くらい、出来ないのなら…魔導士、失格。」

「あら、怯えてばかりの貴方が言えるのかしら？」

「わ、私が怯えるのは…危害を加える大人が、いるから…だ、だから…消えて…！」

「本当に…可憐。」

コスモスが起こす爆発の胞子を、ひたすら避け続けるクオーリ。ウエンデイに対して辛辣な意見を言うが、事実大したダメージをウエンデイは負っていないかった。

「け、けど…貴方は、そこまでの危害…加え、られない。」

「…なんですって？先程から、殺そうとしているのにも関わらず？」
「…そ、その程度じゃ…怖くもなんともない。き…消えてほしい、とは思ってるけど…あの、大人達に比べれ、ば…まだ、マシ。」

「可憐…」と思っていたけれど、思いの外強いよね。儂い花びらを持っていると思っていたら、強靱な棘を持つ薔薇のような子…可憐。」

コスモスが言っていることは完全に無視して、マホーグはじつとコスモスを見る。

彼女の使う花の魔法は、マホーグが尽く大剣で壊しに行ってるのだが…決定的な一撃が入れづらかった。

「…め、めんどくさい…！」

ショートワープを繰り返して、フェイントで前と見せかけて後ろから攻撃を仕掛けに行くマホーグ。

しかし、当たったと思われた攻撃は彼女自身が花びらと消えて手応えがなかった。

「貴方のその目…魔眼の類かしら？私の攻撃が全く当たらないわ。」

「危険、予知…けど、あ…当たらないのは…そつちも同じ…」

「私は花…どこにでもいるもの。」

「だ、大丈夫ですか!？」

「わ、私の事は…心配、しないで…自分の、事だけ…か、考えてて。」

「は、はい!!」

ウエンデイに視線を向けずに、言葉だけを投げかけるマホーグ。お互いに一撃が決まらない、というのが2人にとってネックである……とマホーグは思っていた。

「けど……もうおしまい。眠る時間よ『マクラ・カムラ』」

「こ、これは……」

「けほっけほっ!」

だが、コスモスにとってはその一撃はいらないのだ。既に、ウエンデイ達の足元には大量の花が咲き乱れていた。

その花から大量の胞子が溢れていた。

「この胞子の睡眠効果により眠ってしまったら、貴方達は二度と目を覚まさない……そういう死の魔法。」

さあ眠れ、永遠に……」

辺り一面に睡眠効果のある胞子が放たれ、土煙のようにウエンデイ達を隠していく。

コスモスはそれをずっと観察するだけ。

「ふふ……これだけの量、10秒もあれば眠ってしまうこと。」

さあさ……そろそろ可憐に眠りに落ちてしまったかし……らあっ!?」

コスモスの頭に、重い一撃が入る。そして、地面に強烈に叩きつけられたことで、余計に顔にダメージが入る。

「あ、貴方って……ば……馬鹿なの?」

「な、何で……貴方はさつき眠りに……」

「しよ、ショートワープ……目の前で使ってたのに……」

「そ、それでも!!マクラ・カムラの胞子を少しでも吸い込んでしまえば……」

マホーグは、胞子が未だ漂う空間に目を向ける。コスモスもつられて、その空間に目を向ける。

「……状態異常耐性付エンチャント加リレーゼ。」

「え?何で!?!」

胞子が晴れたところに、目を開けているウエンデイの姿があった。

彼女もまた、眠りに落ちていなかった。

「私に、状態異常系の魔法は効きません。みんなのサポートが、お仕事だから。」

「だ、だから私も起きてる……いい、いなかったら……本当に、眠ってた。あ、あと……もう逃げられない、よ。」

「……けど、私はサポートだけじゃない。戦わなきゃいけない時、誰かを守るためには……私は天竜になります。」

滅竜奥義!!」

「な、何これ!? 風が、私の花が散っていく!!」

ウエンデイとその隣のマホーグ、そしてコスモスを中心として風が吹き荒れる。

これが、ウエンデイの覚えた滅竜奥義。

「照破・天空穿!!」

「ぎゃああああ!!」

ウエンデイの滅竜奥義が、直撃してコスモスは吹き飛ばされる。しかし、まだ足りないのか手足をじたばたさせながら、コスモスは何とか体勢を立て直そうとする。

「——ぎ、残念。」

「えっ……」

コスモスの腹に、ショートワープしてコスモスに追いついたマホーグの武器がヒットする。大剣ではなく、変形させた後の大槌で殴り飛ばしたただけだが。

「がはっ……!?」

「こ、殺しはしない……けど……む、むしゃくしゃしたから……ね。」

吹き飛ばした直後に、再びショートワープして追いつき二撃目。また追いついて三撃目……四撃目……そして。

「五、撃目エエエエエエエエ!!」

コスモスは、最後のマホーグの一撃で、壁を貫通して吹き飛んでいく。その追撃の多さにウエンデイはドン引きしていたが……何も突っ込まないでおいだ。

「……あ。」

「……ま、またすごい偶然……」

開けた壁の穴を通つてみると、同じように倒されたと予測できる餓狼騎士団を中心に、ほかのメンバーも集まってきていた。

全員が全員、壁に穴を開けるほどの勢いで敵を倒していったのだ。

「さて、と……出口を教えなきや処刑だぞ。」

「悪……」

ナツが指の関節を鳴らしながら、餓狼騎士団に尋問……もとい拷問をしかけていた。

主に、答えなければ頭に拳を叩きこむという単純明快なものだが。

「くはっ、くはっ……はは、はははははは!!」

「なーにがそんなにおかしいんだよ。今負けてるのはお前の方だぞ。」

「確かに勝負としては負けてる……俺はな。」

だが……ここから勝てれば、まだ……!」

「魔法を片っ端から食われて、氷も俺にはろくに効いてない……その上でまだ俺に勝てる気にいるのか?」

大魔闘演武の試合で、戦い続けるクオーリとマルク。その試合は一方的とは言わないまでも、クオーリはマルクにダメージを与えられずにいた。

「当たり前前当たり前……仲間の力を信じてる……って嘘ついてるような奴に負けるはずがない。」

「……あ? 何言ってるんだお前。」

クオーリが突然発した言葉に、マルクは困惑するしかなかった。頭

が狂ったんじゃないか、とさええ。

「……何で、お嬢に怒りを向ける？」

「それは、ルーシィさんを傷つけられたからで……」

「嘘だ。お前はこれっぽっちもそんなことを考えちゃあいない。」

マルクのことばを遮って、クオーリはマルクに指をさす。遮られた事で、マルクは少しイラツときていた。

「お前は、ルーシィ・ハートフィリアに天竜を写してんだヨ。」

『もしあの時の試合に出てたのが天竜だったら』ってな。」

クオーリがそう宣言する。その言葉を聞いて、マルクはつい思い浮かべてしまったのだ。ミネルバに一方的に攻撃されるウエンディを。

「あ……」

「なんてー傲慢！勝手に写し取って勝手にキレル！憤怒する相手を間違えている！」

何が仲間！何が絆！！そう唱えるやつが1番の自己中！」

「だ、黙れ!!」

マルクが慌ててクオーリの言葉を遮る。だが、それに対してクオーリは口角を上げる。

「お前には、滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーって称号は似合わねえよ。

どちらかと言えば……そう、悪魔だ。」

「悪魔、だと？」

「ところ構わず他者の魔力を喰らい続ける！魔力の暴飲暴食を続ける！勝手に写し取って勝手にキレル！傲慢の憤怒！」

悪魔のような身勝手さ!!何が妖精の尻尾、何が妖精！お前に似合うのは悪魔の尻尾……悪魔の尻尾イービルテイルだよ！」

高笑いをするクオーリ。それに対してマルクは黙ったままだった。そして、高笑いをし続けるクオーリに一步步近づいていく。

「……それで、終わりか？」

「何だ？またキレたのか？悪魔と呼ばれたことか？本質を言われたことか？本音をばらされたことか？」

お前が何にキレようと、事実が変わらなぐっ!!」

マルクは腕を伸ばし、クオーリの首を掴む。しかし、首を掴まれて

もクオーリは気味の悪い笑顔を浮かべていた。

「……黙ってるよ、お前。」

「ハッ！ようやく触れてくれたな！これなら直接、お前の体内を凍らせてやれるぜ!!」

そう言つて、クオーリはマルクの腕を掴んで、一気に魔力を注ぎ込む。

すると、マルクの腕から何本もの氷の棘が生えてくる。腕を突き破ってきた、というわけではなかったが……文字通り芯から凍らされているので、それだけでマルクの腕は機能しなくなり、クオーリの首から離れてだらんと垂れ下がってしまう。

「……」

「もう二度とその腕は使えねえ!!この試合の中だけじゃねえ、二度とだ！もう片腕しか残ってねえが……それでもまだやるってか!？」

「……」

日差しが傾いてきたのか、マルクの後ろから光が差し込む。逆光かつ、マルクの顔が影で見えづらいいこともあり、クオーリは今のマルクの表情が判別出来ないでいた。

特に彼にとつては、問題は無かったが。

「へっ……何も言い返さねえつもり……っ!!」

クオーリは、後ろからとんでもない殺気を感じ取り、咄嗟に横に避ける。誰の殺気、なんてことは全て後回しだった。

その直後、その場を何かの衝撃波が襲っていた……それは、マルクを飲み込んでいた。

「一直線の綺麗な傷跡……カグラの奴か。あの不倶戴天つっー剣を抜いた様だな……危ねえな……あんなものに当たったら、どれだけ頑丈な鎧でも真つ二つだ。」

通つた先を見ながら、クオーリはそう呟く。今の今まで相手していたマルクがいた場所を見つめる。

マルク本人は斬撃に吹き飛ばされて、衝撃波とともに建造物の壁に突っ込んでいた。

「……今のを食らつてりやあ死んだな。ま、死んだらこの程度のや

つって事になるし……別に構うこたア……」

建物から流れる血。その量は明らかな致死量を超えていると、クオーリは判断した。

踵を返して、帰ろうとすると……瓦礫の音が鳴った。崩れる音ではなかった。壊れるような音が聞こえてきたのだ。

「……なんだ、この音。」

バリツ、ゴリツ……その瓦礫の音は、段々と大きくなっていく。クオーリは恐る恐る、マルクの吹き飛ばされた先を見る。

パツと見た感じでは、何も判断が付かなかった。だが、何かが起きていると……クオーリは判断した。

「……ガアッ!!」

そして、しばらくその音が続いたかと思えば、瓦礫から腕が出てくる。瓦礫を押し出すように、そしてそのまま吹き飛ばすようにほかの瓦礫をまとめて吹き飛んだ。

「……おいおいおい、建物一個分の瓦礫だぞ？何で吹き飛んだのがほんのちよつとなんだよ……!?!」

「……」

瓦礫から出てきたのはマルクだった。彼は、一切傷のついてない無傷の体で、クオーリを見た。睨むではなく、眺めると言った方が正しいと言わんばかりに。

「んだよ……何で傷がついてねえ!?!あの量の瓦礫に乗られて、なんで無傷だなんて瓦礫が減ってんだ!!」

「……」

クオーリは叫ぶ。マルクは、大声で叫ぶクオーリを眺めながら、腕に魔力を貯める。

その魔力の質は、今動いている全魔導士が感じ取っていた。『嫌な魔力』だと。

今の悪夢と未来の絶望

「ちっ…何だっってえんだ!!」

ブレスを放つクオーリ。瓦礫から出てきたマルクは、それを避けようともせずに眺めるように立っていた。

「……」

ブレスの中にいながら、それでもマルクは動かない。ブレスそのものの存在が認知できていないかのような、それほどまでにじつとしていた。

「……ウ……」

「っ!？」

そのまま、マルクは歩き始める。1歩また1歩…ブレスを放つクオーリの元へと歩き始める。

その姿に、クオーリ……否、その光景を見ていた観客達もまた異様さを感じ取っていた。

ブレスの中を、悠々と歩くマルクの姿には、立ち向かうような強さを感じなければ、強者の如き強さも微塵も感じられないからだ。

「くっ……てめえ……何だ、なんだ……」

「……」

頭を掻き毟るクオーリ。それが見えていて無視しているのか、視界に入っていないのか……マルクは歩みを止めなかった。

「そうやって気取ってるやつが苦手なんだよ……俺はア!!」

「……」

錯乱したかのように飛びかかるクオーリ。しかし、クオーリの拳が届く前に……その顔をマルクが掴んでいた。

「うぐっ!？」

「……?」

クオーリを地面に叩きつけてから、マルクは首を傾げる。何を思ったのか、そこからクオーリの顔を掴んでいる手に、異様な魔力を溜め込んでいく。

「うがア!？」

「……！」

そのまま、溜め込んだ魔力を爆発させる。当然、掴んだままなのでクオーリの顔にダメージが入る。

何かに納得したのか、大きく頷きながら再び魔力を貯めて爆発。またもう一度同じように爆発。ひたすらそれを繰り返し始めていた。

「……」

「うぐ、あ……」

しかしすぐ飽きたのか、マルクはクオーリをその場で投げ捨てる。クオーリはそのまま地面を転がっていった。

「……っ！」

「っ!!」

マルクは口を大きく開けて、その口に魔力を溜め込む。恐怖を感じるほどに濃く、鉄球かと思うほどに真っ黒な魔力の塊。

質量もあるのか、それを構えているだけでマルクの体が少し地面にめり込んでいた。石タイルの地面を割りながら。

「……」

「くっ……!?!」

塊は段々と小さくなる。小さくなるにつれて、感じる重圧も重くなっていく。

マルクの……例え大魔闘演武に出ている魔導士全員の魔力を合わせても、届くかどうか分からないとも言えそうな魔力。

「んな魔力……何処で手に入れたア!!」

「……」

答えない、マルクにはクオーリのその疑問は耳にすら届かない。マルクの顔がクオーリに向けられる。

溜め込んだ魔力がクオーリに向かって放たれば、クオーリは消し飛ぶだろう。

溜め込んだ魔力がこの場で爆発すれば、クロツカスが消えるだろう。それほどまでの魔力なのだ。

「くそっ、くそっ!!」

魔法を使つて、殴つたりブレスを放つクオーリ。だが、それらの攻

撃がマルクに届く前に全てマルクが生み出している魔力の球に魔力が吸われてしまっていた。

「滅竜魔導士^{ドラゴンスレイヤー}なんて目じやないほどの魔力……んなの、本当に人間じゃ……!?!」

「……なんだ?この状況。」

マルクの後ろから、1人の男がやってくる。ボロボロの体を引きずってくる妖精^{フェアリーテイル}の尻尾の1人。ラクサスである。

「ラクサス……!?!お前はジュラと殴りあつた筈だ!!」

「あ?あのバケモンのおっさんは……何とか倒してきた。おかげで体のあちこちが痛てえがな……」

「んだと……!?!」

ラクサスは、つい先程までジュラと戦っていた。そして先程遂に聖十大魔道であるジュラに、膝をつかせたのであった。

「……?」

「何してんだお前……そりやあ滅竜魔法か?とんでもない魔力なのは認めるが……ここではやめとけ……!」

ラクサスが、マルクの顎にアッパーを入れる。それだけでマルクが作っていた魔力の塊は、上の方に飛んでいき、花火のように爆発した。

「……え、あれ?ラクサスさん?」

「なっ……!?!」

殴られたあと、地面に倒れたかと思えば今まで何も起こらなかつた、と言わんばかりにいつもの反応をするマルク。

その反応の違いに、クオーリは困惑していくだけだった。

「あれ、俺何してたんでしたっけ……って競技は!?!」

「安心しろ……終わってすらいねえからよ。ほれ、とりあえず行くぞ。」

「え、どこに……」

「お前らは集中しすぎてて、みえてなかったのかもしれないが……残ってるのはこいつとステイングだけだ。」

んで、今から……全員あいつのところに向かうって話だ。」

「なっ……!?!お嬢が負けたって言うのか!?!」

ラクサスの言ったことに、驚くクオーリ。既に残っているのが、妖精の尻尾のメンバーを除いて、二人しかいないということに驚いていた。

「当たり前だ……ウチのエルザと戦って、勝てるやつなんざ限られている。」

「クソが……！なら、今ここでお前達2人を倒して——」

「ふん！」

顔面に、1発入れるマルク。既に限界が近かったのか、それだけでクオーリは沈んでしまった。

「……あれ、思いの外あっさり……」

「……」

マルクの事を見るラクサス。先程までのマルクは一体なんだったのかと思いつながら、今のマルクとの違いの差に、内心疑問を抱いていた。

「ん……？あれ……」

「おい、どうした。」

「いや、なんか……体が、ふらついて……」

尻餅をつくマルク。そしてさらに、そのまま体を倒してしまう。マルク本人も予想外であり、そして指の1本さえもまともに動かせなくなっていた。

「……動けそうか？」

「ごめんなさい、無理です……ステイング、任せてもいいですか？」

「はなから行くつもりだ……後で拾ってやるから待ってろ。」

「はい……」

大の字で寝転びながら、マルクは空を眺める。いつの間やら時間は経っていて、既に空は暗くなっていた。

「……ウエンデイ達は大丈夫かな。」

そして、ルーシイ奪還の為に動いたウエンデイ達のことを、静かに考えるのであった。

「本当にこつちであつてるのか？」

「も、もし嘘なら……もう1回殴ればいい……」

「それもそうか。」

マルクとクオーリの決着があつさり着く数刻前、ウエンディ達は城の地下を歩いていた。王国直属の部隊、餓狼騎士団を倒して、地下から出るための出入口を教えて貰ったのだ。

そして、その道にしたがつて進んでいる……のだが。

「アルカディオス様は大丈夫でしょうか？」

「大丈夫と言えば大丈夫だけど……」

「むしろ溶岩の中で生きてた方が不思議だよ。」

「……って、ていうか……誰？」

一緒について来ていたマホーグ。そのマホーグが、いつの間にか増えていた同行者の男……獅子宮の星霊レオ、またの名をロキ。

彼に対して指をさしていた。

「やお嬢さん、初めまして。僕の名前はロキ、どうだい？外に出たらいい喫茶店にでも——」

ロキの頭に鈍い音が響く。ルーシイが、ロキに拳骨を入れたのだ。対して、喫茶店に誘われたマホーグはウエンディの後ろに隠れて怯えてしまっていた。

「怯えさすんじゃないわよ……で、なんでこの人生きてたのよ。」

「あ、ああ……彼……アルカディオスの身につけている翡翠の宝石が、護符の役割を果たしたんだろうね。」

それも、かなり強力な……ね。」

「翡翠……あのドラゴン！翡翠竜ジルコニス！」

「確か姫の名前も……ヒスイ姫……」

翡翠という色が、ここまで関係しているのも、何かあるのではないかと思ったが……今考えていても、しょうがないので一行は話をそのヒスイ姫に絞る。

「アルカディオスは、ここを出たら姫に会って言ってたわね。」

「エクリップスが正しいかどうかは、自分たちで決めろ……だったわね。」

「その姫様にこんなところに落とされたんだけどな!!」

「……えく、りぷす?」

首を傾げるマホーグ。この中で唯一、状況を全く把握してない彼女がいることを忘れていた一同は、どう説明したものか……と考えながら、結局彼女にも話してしまうのだった。

「オイーあれを見ろ!!」

リリーが叫ぶ。気づけば、目の前に一つの扉があった。地下にある扉……餓狼騎士団の言うことを信じるならば、確実に出口だろう。

「俺に任せろ!!火竜の——」

鍵が閉まっているかもしれない……と考える一同。それを『壊せば早い』の理論で、ナツが飛び込んでいく。

そのまま吹き飛ばす予定だったが——

「開いたーっ!?!」

「なんで!?!」

「ま、まさか待ち伏せ……!?!」

勢いそのままに、転んでしまつて転がつていくナツ。扉の前まで転がつて、ようやく止まる。

そして、扉から現れたのはローブを着た人物だった。

「だ、誰……?」

「……誰だ? お前……」

「……ごめん。力を、貸して……!」

すすり泣くような声とともに、突然謝る人物。そして、その声は皆に聞き覚えのある人物だった。

その人物は、深く被っているフードを取つて、その奥に隠れている顔を皆に晒す。

「——ルーシイ!」

「ええええええええ!」

フードを被つた人物はルーシイだった。しかし、既にルーシイは皆と一緒に行動を共にしている。

フードを被っていたルーシイは、また別のルーシイだった。

「ルーシイがもう1人……!」

「ど、どういうことですか……?」

「ジェミニ……じゃないですよね。」

「ま、魔法で姿と声を真似してる……? で、でもやる必要性は感じないし……」

「エドラスとかそういうのじゃ……」

ルーシイがもう1人、その事実是一同に衝撃が走つた。推測も立てるが、どれも肯定出来るほどの情報が今現在なかった。

「…時空を超える扉、エクリプスの事はもう知ってるよね。」

「エクリプス……まさか!」

「あんたはエクリプスを使って——」

「未来から来たの。」

「なーっ!」

更に驚く一同。エクリプスを使い、未来から来たと言うもう1人のルーシイの言うことに、驚愕しか感じなかった。

「この国は……もうすぐ……」

そう言いながら倒れるもう1人のルーシイ。別段、死んだという訳では無いが、意識は既に失われていた。

「……わ、訳が分からない……あ、あんたってそんなにポンポン増えるの……？」

「そんな訳ないじゃない……何か、気味が悪いよ。何であたしが……」
「とりあえず、このルーシイも連れて行くぞ。放つてはおけねえしな。」

未来の自分、何故それが過去である今の時代に来たのか。言いようもない不安が、気持ち悪さとなってルーシイの心に残る。

兎も角、城の地下を抜けた。それはルーシイの救出もほぼ確定で終わったことになる。

だが、予想外の自体が起きる。

「まいったな。」

「まさか迷子になるなんてね……」

「ち、地下から脱出するにしても……城からってなると……迷う。」

「めんどくせえから兵士の中突っ切ろうぜ。」

「ダメよ、怪我人もいるのよ？」

城の食堂で話し合う一同。城に出たまではよかったが、その城が思いの外広がったため、中庭に出ることすら叶わないでいた。

「うう……！」

「お、目が覚めたか。」

「大丈夫？ 未来ルーシイ。」

目を覚ます未来ルーシイ。頭を抑えながら、自身の身に起こったこと……つまり、これから一同に起こることを話し始める。

「あたしの記憶だとね……奈落宮を脱出したあと、みんな王国軍にまた捕まっちゃうの。」

「だから、その前に知らせようと……」

「さ、流石に一般兵士に負ける気はしない……けど、私達は負けた……？」

「うん……あたし達は、逃走中エクリップスに接近しちゃうの。そのせいで、魔法が使えなくて全員捕まっちゃう。」

「そりゃドジだな。」

「運が悪かったとしか……………」

未来ルーシイは、下唇を噛みながら、体を抑える。彼女の身に起こったこと…これから起こることが彼女の身にとって、恐怖そのものだと言わんばかりに。

『あの時』が来るまで…………あたし達は牢の中にいた。」

「…………あの、ルーシイさんはどうして未来からやってきたんですか？」

「最悪の未来を変えるため……………」

「さ、最悪の未来…………？」

怯えていた未来ルーシイだったが、意を決して話し始める。これから起こる、絶望を。

「…この先に待つのには絶望。1万を超えるドラゴンの群れがこの国を襲ってくる。」

街は焼かれて、城は崩壊…………多くの命が失われる。」

未来

1万のドラゴン、そしてそのドラゴンの群れにこの国は滅ぶ。その滅びの未来から来た未来のルーシイは、そう語った。

「な、ん、じゃ……そりゃー?!」

「声大きいぞ。」

あまりのことの大きさ、そして異質さにナツは叫んだ。そして、その動揺はここにいる他のメンバーにも広がっていた。

「そ、そんなに大量のドラゴン……どこ、から?」

「でも、来ることには違いありませんよ……」

「とにかくこうしちやあいられねえ!! 戦闘準備だ!!」

「戦うの!?!」

未来ルーシイからの情報で、困惑する一同。しかし、その一同を見て未来のルーシイも困惑していた。

「みんな……信じてくれるの?」

「ウソなのか!?!」

「違う!! けど、こんな話……誰も信じないんじゃないかって……」

未来ルーシイの言葉に、ナツは首を傾げる。今の未来ルーシイの言葉は、ナツにとっては……否、マホーグを除いた全員にとって首を傾げるような言葉だったのだ。

「何でルーシイの言葉を疑うんだよ……?」

「……ひ、ひとついい?」

「え? な、何?」

マホーグが、未来ルーシイに視線を合わせる。喋り方こそ、たどたどしいものの、マホーグの目は真剣そのものだった。

「……わ、私達は捕まったって言った……し、城も崩壊したって言った……つ、つまり……それって……」

「っ……」

未来ルーシイは顔を伏せる。城の牢屋に幽閉されていて、その城そのものが崩れる。

それはつまり、必然的に城の崩壊に巻き込まれたということであり

「死んじまうのか!？」

「オイラ達死んじやうの……?？」

「……何日たったか覚えてない。目を覚ましたあたしは……エクリプスの事を思い出した。」

起動方法なんて分からなかったけど……無我夢中で扉を開けた。過去に戻るかもしれないって信じて。

そしたらね……本当に過去に戻っちゃったんだX791年7月4日に。」

「4日ってつい最近じゃない……エクリプスってそんなちよつとしか過去に行けないの?？」

「分からない……一部壊れていたから、そのせいかもしれないし……」
一同が会話する中、マホーグは考える。どうしても、彼女の頭の中で1万のドラゴンというのが、違和感しかなかったからだ。

しかし、未来ルーシイの言っていることが嘘だとしても、嘘をつくメリットが無い。思いつかないのだ。

「……ね、ねえ……」

「ど、どうしたのまた……」

「い、1万のドラゴン……滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーが足りない……って言うのはわかるけど……す、数日で困窮するほど……強かつたの?？」

「……うん。ステイングも、ローグも……ガジルも……みんなやられちゃった……」

「なんだよ、ルーシイの言葉を疑ってるのか?？」

ナツが、マホーグを軽く睨む。それでウエンデイの後ろに隠れるマホーグだったが、ナツの質問に対してはなんとか答えていく。

「そ、その言葉を……疑ってるんじゃないかって……い、一万も……ドラゴンを揃えた、って言うことが……疑問……」

「どういう事ですか?？」

「ど、ドラゴンって言うのは物凄く強い……って言うのはわかる。」

「け、けど……仮に今この世界にいるとして……な、なんで一万も揃える必要があったのか……って。」

マホーグの言葉に、納得とさらなる疑問が出てくる一同。未来ルーシイも、それに関しては何からならしく、申し訳なさそうに顔を伏せていた。

「確かに……1000もいれば……いいえ、1000入れば世界なんて簡単に潰せるでしょうに。」

シャルルも、マホーグの言葉に同意する。しかし、ならば1万のドラゴンという数そのものに何かしらの理由があるのか、と考え始める。

「……ドラゴン以外の、強い怪物はいた。ただ……ドラゴンしか相手にしてなかった。」

「強い……怪物？」

ウエンデイが聞き返す。怪物、という曖昧な表現が気になったからだ。しかし、未来ルーシイは首を横に振る。

「本当に、それくらいしか言葉がなかった……アキノロギアでも無い、真っ黒な何か……1万のドラゴンが現れた日からいた。それでも、みんな死んでいくことには変わりなかった……」

泣きそうな声を上げながら、未来ルーシイは声を絞り出す。怪物は、希望たりえないのだと声を殺していた。

「……今、色んなこと考えててもしようがねえな。」

で、ルーシイ……えーつと未来ルーシイ！」

「は、はいー！」

「……俺達は、これからどうしたらいい？」

城の中、突っ着れば早いだろうが怪我人であるアルカディオスがいる以上無理はできない。

となれば、これからのことを知っている未来ルーシイに話を聞いて、危険を上手く回避出来るのではないか？とナツは思っただけで、そう聞いた。

「……街は、大魔闘演武を撮影している魔水晶ラクリマが至る所に配置されている。」

地下を通ってジェラルル達と合流して欲しいの……今、対策を練ってもらってるはずだから……」

「練ってもらってるって……」

「ごめんね……私は未来から対策を持ってきたわけじゃないの。あの事態をどうすれば回避出来るのか分からないの。」

未来ルーシイは、顔を伏せる。『役に立てない』『何も出来ない』と言った類の、自分に対する失望に溢れているかのような顔。

「本当……ごめん、これじゃああたし……なんのために、来たのか。今日までどうしていいかもわからずに街をウロウロしてた……」

「いや……俺達がなんとかする。ありがたいな、俺達の未来のために……必ず未来を変えてやる。」

未来ルーシイの額に、自分の額を合わせるナツ。それだけで、未来ルーシイは少し安心したかのような顔になる。

「い、行くなら……早く行こう。」

「そうだな、行くとするか。」

そして、マホーグの催促で未来ルーシイの言う通りに地下を通ることにしたナツ達なのであった。

「……ど、どこに行く気？」

ナツ達と一緒に向かうはずだったマホーグ。しかし、一人の男の後ろに、今は立っていた。

「……流石にごまかせないか。しかし、ユキノ軍曹は止めなかったようだが。」

「な、何でもかんでも……責任感じる人、なんか……無視しても……いい。」

アルカディオスだった。ボロボロの体も、翡翠の宝石の加護によって少しはマシになっているのか、今は立って歩いていた。

「……ま、まだ話してないこと……ある、よね？」

「ほう……なぜ、そう思ったのか聞かせてもらえないか？」

「あ、貴方の目は……覚悟が、決まってる目……い、今の状況でする目にしては……ちよ、ちよつと違和感がある。」

貴方は、今戦う訳でもない……のに。」

「ふむ……それが、君になんの関係があるんだ？」

アルカディオスは、表情にも一切隙を見せない。アルカディオスの戦士の目に、マホーグは少し怯えたが……自分の大剣に身を隠しながら話を続ける。

「い、1万のドラゴンの大軍……その話を聞いてから、貴方の様子が……変、だった。」

未来の、ルーシィ・ハートフィリア……の話を、彼女自身を……疑っていた。」

「よく見ているものだな……」

「顔色を、伺ってないと……死ぬ、生活してた、から……」

アルカディオスは黙る。考え込むような仕草をする。今この場で、マホーグを始末しよう……というのはまず無謀なのでしないだろう。

ならば、語る事が重要な機密だった場合のパターンかもしれない。そう考えたマホーグは、すぐさま付け足す。

「重要な事……き、機密は喋らないで……けど、それ以外で……重要な事は、言ってほしい。」

「……詳しくは言えないが、私は……少なくとも姫様の方が知っておられるが……1万のドラゴンの事は、私達は既に知っていた。」

その対策も……既に準備は終えている。姫様が言うには、使い方を教えてもらったようなものらしいが。」

「……対策を、教えてもらった？」

マホーグは首を傾げる。未来ルーシィは、対策を持ってきたわけではない、と聞いている。

しかし、対策は持ってきていた……持ってきてもらっていたのだ。

「……それと、その方法を姫が教えて貰ったのは4日より前だ。」

「未来の彼女は……よ、4日に来たって……」

「そう、ズレているのだ。色々と。だから私は……聞かねばならないのだ、姫様に。」

「………な、なら……いい。」

「さあ、早く行くがいい。君も脱出した方がいいだろう。」

「……」

無言で頷いて、マホーグはその場を後にする。しかし、疑問は残ったままだった。

対策を持ってきていないと言った未来ルーシイと、対策を持ってきてもらった姫様。4日に来たと言っていた未来ルーシイと、4日以前に来ていた未来の人物。

「あ……は、初めから……1人じゃ、なかった……?」

マホーグが行き着いた答え。未来ルーシイが嘘をついていないのだとすれば、どちらも真実という答えならば……

「……じゃ、じゃあ……もう1人は何のため、に……?」

仮に、もう1人未来から来た人物がいるのだとすれば、何のために来たのか。未来ルーシイが、一切話さなかったことを考えて……マホーグはさらに混乱する。

「る、ルーシイ・ハートフィリアが……知らない、人物?それとも……話したくない、人物……?」

どれだけ考えても、答えが定まらない。未来の人物がもう一人いるのは、彼女の中で既に確定している。

しかし、未来ルーシイがその人物の事を話さなかったことが分からなかった。

「ジェラール……ジェラール・フェルナンデス……」

未来ルーシイが、協力を仰いだ人物。過去、評議院にエーテリオンを投下するなどして、投獄。その後脱獄して消息不明になっていた人物。

「……怖い、けど……話し、聞かないと……」

『協力しているのなら、この街の近くにいるはずだ』と考えたマホー

グ。とりあえず、彼を探そうと思いついてそのままナツ達が向かった方向へと走っていくのだった。

「……あれ、そう言えば……どこに、向かえば地下に……？」

「何、これ……!？」

「私の植物よ！可愛いでしょ。」

「ウエンデー!!」

その頃、先に地下道へと潜っていたナツ達。未来ルーシイの助言により、王国兵たちに捕まらない道を進んでいた筈なのだが、何故かこの場に王国兵が集っており、正面突破しかできなくなっていた。

そしてさらに、時間が経って回復したのか……餓狼騎士団まで参戦し始めていた。

「このままじゃ持たないぞ!!」

「諦める罪人よ!!」

「もー怒った!!処刑だ!!全員まとめて処刑だ!!」

ナツが、ブチ切れてそのまま特攻をかけようとしたその時、『異常』が起こった。

「うわあ!?!なんだこれ!?!」

「何事!?!」

「影が人を飲み込んで……!?!」

突如発生した謎の影に、王国兵も餓狼騎士団も飲み込まれていく。ナツ達は飲み込まれずに済んでいたが、その異常さに呆気に取られていた。

「王国兵がみんな、影の中に……」

「誰かいるぞ！気をつけて！」

「お前、誰だ。」

影の中から現れた人物。半分は白、半分は黒の髪を持っており、右目は黒髪によって隠れていた。

長く、白い髪は1つに束ねられてこそいたが……その人物は、男だった。

「――影が伸びる先は、過去か……未来か、人の心か……懐かしいな、ナツ・ドラグニル。俺はここより先の時間から来た……ローグだ。」

「……ローグ？」

「あの剣咬セイバートゥースの虎の!？」

男の正体はローグだった。未来ルーシイ以外にも未来から来た人物。その事実には、皆驚いていた。例外なく、未来ルーシイでもある。

「王国兵を一掃して……助けてくれたのかい。」

「なんか雰囲気変わったなおまえ。」

「何しに来たの？未来から……」

「……扉を、開くため。」

「エクリプスのこと!？」

シャルルの間に、ローグは素直に答える。警戒こそしていたが、見知った顔であることと、一応王国兵を倒してくれたこと……それがナツ達に少しの安心を与えていた。

「エクリプスには2つの使い方ががある。ひとつは、過去や未来への移動……もう1つは攻撃用兵器エクリプス E・キャノン。1万のドラゴンを倒せる唯一の手段。」

「じゃあ話をはええな！味方ってことじゃねえか！」

「やったー！ドラゴンを倒せるんだね!!」

「未来は救われるんですね！」

喜ぶナツ達。しかし、未来ローグの顔は曇っていた。『それだけでは救われない』と言うかのように。

「いいや、話はそれほど簡単ではない……俺は、今から7年後の未来から来た。」

その未来では、世界はドラゴンによって支配されている。生き残っている人類は1割にも満たず、エクリプスも今ほどの力を持つちゃあいない。

今、この時代で扉を開かねば意味が無いのだ。」

「だから扉を開けてぶっばなすんだろ!? ドーンって！」

単純じゃねえか。」

「しかし、7年前……現代で扉を開くのを邪魔するものがいた。そいつのせいで、扉開かなかった。1万のドラゴンに対して、E・キャノンを発射できなかった。」

この世界を、破滅へと導く者がいた……」

言葉を切って、ローグは俯く。が、再び顔を上げてナツ達に顔を向ける。

「俺はそいつを抹殺するために、ここにいます。」

「物騒ね……その人にも事情を話せば分かってくれるんじゃないかしら?」

「何も殺す必要は無いだろう。」

シャルルとリリーの言葉に、未来ローグはそんなことは不可能だと首を横に振る。

「大きな時の接合点では……言葉で行動を制御することが出来ない。たとえ今説得できたとしても、そいつは必ず扉を閉める。そう決まっているのだ。」

「決まっている?」

「運命からは逃げられない。生きる者は生き、死ぬ者は死ぬ。扉を閉める者は扉を閉めるのだ。」

何があっても、生きている限り絶対に。」

「よくわかんねえ言い回しだな。で? その扉を閉めたやつってのは誰なんだよ。」

ナツの言葉で、未来ローグはとある方向へと視線を集中させる。その言葉がトリガーとなったのか、はたまた初めから狙っていたのか。

その視線の先に――

「お前だ! ルーシィ・ハートファイリア!!」

「えっ？」

向けられた魔力。刃のように鋭いそれを、未来ローグはなんの遠慮もなしに向ける。

そして、その直後に……血飛沫が上がったのであった。

優勝

「……だーめだ、全く動く気がしない。」

クオーリを倒したマルク。顔に一撃、拳を叩き込んだだけで倒れた彼を、少し疑問に感じていた。

しかし、倒したことには変わりはない。ポイントが入らなかったということは、クオーリもまた1人も倒していなかったことになる。

故に、やったことは真正正銘の掃除。1番消費していたのか、終わったあとは体が全く動かなくなっていた。

「ウエンデイ達は……大丈夫かな。」

ルーシイを助けに行ったウエンデイ達を心配するマルク。全員、心も体も強いことはわかっているのに、捕まっていたりすることは無い……と思っている。

「……ウエンデイ達は、多分大丈夫だと信じて……問題は、俺だな。体全く動かないけど、どうしたらいいだろうこれ。」

傷はない、特に疲労は感じている訳では無いが、何故か体は動かなくなっていた。脱力して、持ち上げるのすら一苦勞なレベルである。

「うーん……てか、俺途中の記憶抜けてるよな……何してたんだろ。」

途中、クオーリに煽られていた事までは覚えているマルク。今となっては、何も思い出せないが……きつと、覚えていない間に何かがあったんだろうと考えていた。

「——決着!!」

「おっ？」

「大魔闘演武優勝は……妖精の尻尾!!」
フェアリーテイル

実況と、遠くから聞こえてくる花火の音。妖精の尻尾が、優勝したことを知らせるものだった。

「……みんな、勝ったんですね……ああ畜生! 行きたい!! 体動けええ!!」

みんなのいる方に向かおうとするマルク。しかし、指の1本さえ全く動かせないほどに、弱っているのでは無理な話だった。

「あー畜生！なんか、俺だけ仲間はずれみたいになってるじゃないかあ!!」

吠えるマルク。しかし、その声は虚空に響くのみで、返事をする者は誰一人としていないのであった。

王宮地下。未来からやってきたルーシイが、ジエラールと合流するために、王国兵と鉢合わせないようにした道をナツ達は進んでいた。

しかし、そこには王国兵が待ち伏せをしていた。仕方なく、正面突破で挑むナツ達。

だが、圧倒的な数の王国兵に、段々と圧倒されていく。その時、王国兵達は全て謎の影に飲まれていった。

その影を発生させたのは、未来ルーシイと同じく未来からやってきたローグであった。

未来のローグは、1万のドラゴンを倒す為に、時間を超える扉であるエクリプスの魔力を使って、倒す作戦を立てていた。

だが、未来のローグはこの現代において、扉を開くのを邪魔する者がいると語った。

そして、未来からやってきたのはその人物を殺すためでもあると語る。

ナツが、それが誰なのかを聞いた瞬間に、未来ローグは現代のルーシイに攻撃を仕掛けたのであった。

「がはっ……」

「ちよ、ちよつとあんた……!?!」

ルーシイは倒れた。しかし、倒れたのは未来からやってきたルーシイの方だった。

「ルーシイが2人だと!？」

驚くローグ。しかし、間髪入れずにその驚きの隙を突く者がいた。

「ふっ……………」

「ぐっ!?マホーグ・オロシか!!」

「あ、あんた……………誰…?」

大剣の一撃を浴びせようとするマホーグ。しかし、何とか未来ローグはそれを防ぐ。

「ふん……………所詮、知らなくても関係の無いことだ。貴様もここで殺す!!」

「こ、殺しにくるなら……………わ、私が……………殺さ、ないと。と、というか……………何でルーシイ・ハートフィリアを……………」

「そいつが扉を閉めるからだ。閉められては、未来は終わる。」

「扉……………?」

状況をイマイチ飲み込めないマホーグ。だが、彼女の頭の中で分かったことがある。

もう1人の、未来ルーシイの他にやってきた未来の人物が、目の前の男である。

「……………あ、貴方と……………そこに倒れてる、ルーシイ・ハートフィリアは……………別の未来から来た、人物……………?」

「さあな……………少なくとも、俺はルーシイ・ハートフィリアが未来から来たことなぞ、知らなかった。」

「で、でしよう……………ね!!」

切りかかるマホーグ。未来ローグは余裕でその攻撃を避けながら、マホーグにその攻撃を当てようとする。

だが、マホーグも魔眼の効果で攻撃を先読みして避け続ける。
「……………」

「余所見をしている余裕があるのか!？」

未来ルーシイの方に視線を向けるマホーグ。未来ローグは、その隙を突いて、攻撃を加えていく。

「ルーシイやだよオ……死なないですよ……」

「あたし、は……この時代の……ううん、この世界の人間じゃ……ない。この世界の『あたし』は……仲間と一緒に生きていく。

だから、悲しまないで……」

「悲しいよ……どこの世界から来ようと、誰がなんと言おうとルーシイはルーシイだよ!!仲間なんだよオ!!悲しいに決まってるじゃないか!!」

泣き叫ぶハッピー、未来から来たルーシイだとしても、それはルーシイなのだ。仲間である彼らは、当然のごとく悲しんでいた。

「あ、あなた、は……本気で……ルーシイ・ハートフィリアを殺そうと……?」

「当たり前だ……だが、あの死にかけのルーシイ・ハートフィリアには……いや、俺とは別の未来のルーシイ・ハートフィリアは閉めた自覚がなかったようだが。」

罅迫り合いながら、舌打ちをする未来ローグ。それを見ても、マホーグはそのまま罅迫り合いを続ける。

妖精の尻尾に協力するのは、偶然出会ったから……その程度でしかない。しかし――

「目、目の前で人が殺されるのを見て……そのまま立ち去れる、ほど……私は、心が強く、無い……!」

「はっ……大鴉の尻尾レイヴンテイルにいたものの言葉とも思えんな。」

「私は……フレア姉様以外は、嫌い!!」

「ふん……どうでもいい。俺はルーシイ・ハートフィリアを殺す。扉を閉められてはかなわないからな。」

「……何が、扉よ。あたしは絶対そんな事をしない!!なのに……!」

ルーシイが、叫びながら未来ローグを睨む。今のやりとりの間に事切れたのか、未来ルーシイはピクリとも動かなくなっていた。

マホーグは、偶然見えたルーシイの右手に入っている妖精の尻尾の紋章が、未来ルーシイには無いのが妙に印象強く残っていた。

「今は……な。だが、数時間後にはお前は扉を閉める。」

「あたしは扉なんか閉めない!!滅茶苦茶な事言つて……あんだ、何が

目的なの!？」

「扉は閉まる……そう決まっている。お前が生きている限り……!」

苛立っているのか、歯ぎしりをし始める未来ローグ。この決定的な二人の食い違い。未来がどう分岐したのか……扉は、閉めるべきなのかどうなのか。

「未来のあたしが閉めないって言ったんだ!あたしは自分を信じる!!」

「お前の言葉に真実などない!全ては運命によって決まっていることだ!!」

だが、その分岐は冷静に考えられるほどの時間はない。そして、何より……今の目の前にいるローグを、信用することは一同はできなかった。

「運命なんか焼き消してやる!!ルーシイの未来は誰にも奪わせねえぞ!!」

ナツが、ついに我慢の限界を迎えたのか、未来ローグに殴りかかる。防がれたものの、吹き飛ばすこと自体には成功していた。

「ルーシイ!!ここから離れろ!」

「でも……!」

「ここはナツに任せよう!!」

ロキが、ルーシイの手を掴んで引っ張っていく。ナツ以外の全員がそれに着いていく。

未来ローグはそれを追おうとしたが、ナツが防いでいくのであった。

「……ね、ねえ……」

「え、何？」

逃げながら、マホーグはルーシイに話しかける。話しかけるとは思っただけだったため、走りながらルーシイは返事をする。

「た、多分……貴方は扉を閉める……と思う。」

「っ!! あ、貴方もそんなことを……!」

「ち、違うー! べ、別に悪い意味じゃなくて……食堂、で……み、未来の貴方が言っただけのこと……覚えてる……?」

「食堂で……? 1万のドラゴンの話?」

少し膨れながら、ルーシイは答える。だが、その答えにマホーグは首を振る。

「そ、そっちじゃなくて……私達が捕まっただけの話。」

「あ……確か、城が崩壊するまで捕まっただけだっけ……」

「そ、そう……で、でももう1人の未来の……ローグが言っただけのは、あなたが扉を開けたって……」

「……何が言いたいのか?」

「……あの男は、未来の貴方が……み、未来の貴方『だけ』が来た世界の……未来なんじゃ、ないかって……」

マホーグの言葉にイマイチ理解ができないルーシイ。それを察してか、マホーグもなんとか説明しようとするが、言葉に出来ないでいた。

「ああ……ルーシイ、多分彼女はこう言いたいんだ。」

未来の君が来た未来では、1万のドラゴンがやってきた。その時ルーシイ達は城の牢にいたから扉を閉めることが出来なかった。

けどもし……未来のキミだけが来た世界があったとしたら……多分、僕達はそのまま外に出ることが出来たんだと思う。

そして、君が扉を閉めるような何かがある時起こった……って事なんじゃないかな。」

ロキの説明に、ブンブンと首を縦に振るマホーグ。しかし、そうなること分らないことが出てきてしまう。

「……何で、扉を閉めようと思ったんだろう？」

「そ、それは……分からない。け、けど……エクリプスは……凄い、魔法も、もしかしたら……何か、デメリットみたい、なのが……」

「……クル爺に、調べさせた方がいいのかしら。」

「その方がいいだろうね。エクリプス……あれがどんな魔法なのか、僕達はもう少し知っておいた方がいいと思う。」

クル爺……南十字座の星霊であり、情報を調べる時は彼に限るのだ。眠っているような状態で、ありとあらゆる事を調べることが出来る星霊。

「そう言えば……大魔闘演武どうなったんだろ。」

「……け、結果が気になる？それとも……男？」

「お、おと!？」

咄嗟に言われたことで顔を赤くするウエンデイ。マホーグは、少し怯えながらも、からかうのが面白いのか小さく笑っていた。

「……」

「ナツなら大丈夫だよ。何だかんだ、いつも勝ってきたじゃないか。」

「……うん、ありがとうロキ。」

慰められて、小さく微笑みながらルーシイ達は、そのまま外へと向かうのであった。

「な、何で人があんなに……?」

「扉が開きそう……だからでしょうか。」

外に出れたルーシイ達。しかし、目の前で行われているのは扉を開

いている場面だった。

ルーシイ達は、その光景につい茂みに身を隠してしまう。

「し、しかも……あの騎士……」

「……隠れている必要は無い、出てきなさい。」

遠くにいる甲冑を身にまとった男、アルカディオスに気配を悟られてしまうルーシイ達。

恐る恐る、茂みの中から出てくる。

「わ、私達……変なことはしない、から……と、というかなんであんたが、そつちに……」

「色々と事情が変わったんです。」

マホーグの疑問に、大臣が答える。アルカディオス、大臣、姫の3人が揃っているということは、つまり計画において協力することになった、という事だろう。

「妖精の尻尾……この度は申し訳ありませんでした。今は緊急事態の為、正式な謝罪は後日改めて。」

「わ、私は妖精の尻尾じゃないけど……」

ぼそつと呟かれる言葉。しかし、姫の言う通り今は緊急事態なのでそれに対するツツコミは無かった。

「それと、大魔闘演武優勝おめでとうございます。」

「優勝！」

「皆さん……やったんですね！」

妖精の尻尾の優勝を知らなかった一同。その報せは、正しく吉報というものなのだろう。

「何で扉を開いてるの？まだドラゴンは来てないのに。」

「ドラゴンの事を……」

「ええ、彼女らも事情は知っています……そう言えば、未来からやってきた君は？」

未来ルーシイの結末。その事を言うには、ルーシイもウエンデイもまた悲しみが溢れてきそうで、語れそうにもなかった。

「こ、殺された……未来から来た、もう1人の男に……」

代わりに、マホーグが答える。その事に姫もアルカディオスも驚い

ていたが、マホーグはそのまま疑念を抱いた目で2人を……姫を見る。

「ほ、本当にこの魔法は……大丈夫、なの？」

「………どういう、ことでしょうか？」

「も、もう1人の……未来の人物は……ルーシイ・ハートファイアが……扉を閉める……から、み……未来のルーシイ・ハートファイアを、殺した。」

げ、現代のルーシイ・ハートファイアと……間違えて。」

「……それが、エクリプスの事とどう関係が？」

姫も、マホーグを見る。体を更に震わせるか、マホーグはそのまま語っていく。

「み………未来の、ルーシイ・ハートファイアは……扉を閉めなかった。そ、その時の彼女は……牢に、閉じ込められていたから。」

け、けど………もう1人の方は、扉を閉じたって………言ってる。つ、つまり………ルーシイ・ハートファイアが、『この扉に異常がある』と思っただから………閉めたんじゃないかって………私は、思う。」

「………なるほど。」

「………でも、開くしかない………？」

「そう、ですね………たとえこの扉に異常があつたとしても、1万のドラゴンを相手にできるほど、魔導士達も丈夫ではないでしょう。」

「………本当に倒せるんですか？1万のドラゴンを。」

姫に対して、ルーシイはその疑問を投げかける。姫は、それに縦にも横にも首を振ることは無かった。

「确实、とは言いきれないでしょう。しかし、陛下もそれに対する策を講じているはずです。」

段々と外れていく扉の錠。それが、今完全に取り払われ………扉が開く――

月蝕

日付が変わる鐘の音。それが告げられたと同時に、7月7日へと日付は変更される。

7月7日、滅竜魔導士達ドラゴンスレイヤーに魔法を教えたドラゴンが消えた日。そんな日に、1万のドラゴンがやってくる。

過去や未来を行き来することが出来る扉、エクリップス。その魔力を放出することによって、1万のドラゴンを焼き払うという作戦。

その日を祝うためか、はたまた呪うためか……月は真つ赤に染まっていた。

「……1万のドラゴン。」

「回復したばかりだけど、大丈夫なの？」

「大丈夫ですリサーナさん、一応……動けません。」

近くの木にもたれながら、マルクは空を見上げる。妖精フェアリーテイルの尻尾は中央広場を死守するために、今この場にはルーシィを救出に向かったナツ達以外の妖精の尻尾メンバーが揃っていた。

「……ウエンディ達は、無事でしょうか。」

「無事だよ、ナツもいるし……ミラ姉だつて!!」

励ますリサーナ。それに少しが元気が出たのか、マルクは微笑んでから立つ。

と、その時だった。突如、妖精の尻尾が陣取っていた中央広場を横切るように来た謎の衝撃波によって、建造物が粉碎されていった。

「え!?!」

「い、今のは……城の方!? ……ウエンディ!!」

マルクは、城の方角から来たそれに、城の方にウエンディがいるような気がした。

ただの勘ではなく、嫌な予感と共に。

「ま、マルク!?!」

リサーナが止めようとするが、その静止を聞かずマルクは進んでいく。そのままマルクを止めようとするが、ラクサスがリサーナの肩を掴んで止めるのを防ぐ。

「ら、ラクサス？」

「城の方にドラゴンがいるなら、1人くらい向かっても問題ねえだろ。何せ、妖精の尻尾に滅竜魔導士は4人もいるんだ。1人くらい貸し出してやろうや。」

「た、確かに滅竜魔導士ウチには多いけど……」

しかし、マルクの向かった方に視線を戻せば、既にマルクの姿は見当たらなくなっていたのであった。

「あれ、は……？」

少し歩いていたところで、マルクは空を飛んでいる何かを見つめる。すぐにそれが何かを理解した。ドラゴンである。

そして、その数は8頭いた。

「8頭……の、ドラゴン……！」

そして、ドラゴン達は一斉にバラけて飛び始める。恐らく、この国にいる魔導士達を殺すつもりなのだろう。

そして、そのうちの1匹がマルクの元へと飛んでくる。

「ほう……人間が一人にいるとは珍しい。群れることしか脳が無い連中だと思っていたのだがな。」

「…そうかよ。ただ、はぐれているだけだ。そういうあんたは……ドラゴン、か。」

「ああ……あつしはドラゴン、名を『紫電竜ヴァレルト』…見て分かる通りだが、ドラゴンだ。」

「……」

「あつしを随分熱烈に見てるようだが……どうした？ドラゴンを始めてみた恐怖でチビったか？小童め。」

「そんなんじゃないやねえ……それと、ドラゴンを見るのはこれで3体目だ……！」

手に魔力を込めるマルク。しかし、紫電竜ヴァレルトと名乗ったこのドラゴン……その姿形、そして口調がとあるドラゴンと一致していた。

「おい、一つだけ聞かせろ。」

「人間なんぞの質問に……答える義理はない!!」

蛇のように長い体、羽が無くとも飛ぶその姿。匂いこそ違えど、その姿は正しく彼の育ての親であるドラゴン、イービラーに酷似していた。

「そうか、よ!!」

「ぬぐっ……!!」

体をうねらせて、ヴァレルトはマルクを食らおうと口を開けながら突っ込んでいく。

だが、マルクは軽くジャンプして、魔力を込めた拳をヴァレルトの上顎に叩き込む。

「……くははっ！人間にしてはやりおる!!しかし惜しい！惜しいかな！仮に滅竜魔法を十分に使えていたとしても、貴様の力では殺すことは愚か怯ませることも難しいだろう!!」

「ドラゴンからのありがたい助言……受け取っとくよ。だったら、俺の滅竜——」

「あつしの力を徐々に出してやろう！全力を出すまでに生きておれよ!!」

「つていきなりかよ……！」

そのまま1人と1体は、戦いを始める。しかし、マルクがどれだけヴァレルトを殴ろうとも、当の本人にはダメージは一切通っていなかった。

硬い鱗、鋭い爪と牙、そして何より長い体とそれを生かせる戦い方。強さも、経験も、その全てがマルクを上回っていた。

「がはっ……!?」

マルクの体は吹き飛ばされ、地面を転がる。完全に力を発揮できていない上に、ヴァレルトの硬さが彼の想像を遥かに上回っていたのだ。

「ふむ……まだ、2割も出てないのだがな。まさか、ここまで貧弱だとは……む？」

唐突に、ヴァレルトは空を仰ぐ。空には、一体のドラゴンが飛んでいた……が、何かの爆発音とともに苦しそうな声を上げる。

「——聞こえるかア!!滅竜魔法ならドラゴンを倒せる!!」

「ナツ、さん……?」

「滅竜魔導士は8人いる!!ドラゴンも8人いる!!今日、この日のために俺達の魔法があるんだ!!今、戦うために滅竜魔導士がいるんだ!!行くぞ!!ドラゴン狩りだ!!」

「……ほう、あの炎……相当な手練と見た。余程良いドラゴンに滅竜魔法を教わったのだろう。」

マザーグレアに、苦悶の声を上げさせるとは。」

ヴァレルトはゆっくりとマルクに視線を戻す。上を向いている間に、立ち上がったマルクが、ヴァレルトを見上げていた。

「貴様はどうかな?あつしを傷つけることは出来るか?」

「さてね……やってみなきゃ、わかんね!!」

「くははは!!楽しませてくれよ人間!!」

ヴァレルトは、戦いを楽しんでいるのか、高笑いをしながらその魔力を放出する。

紫色の電光、夜だと言うのに昼だと勘違いするほどの明るさ。ヴァレルトの属性は雷だというのが、すぐに分かる。

「我が雷イカズチ!我が光!!その身で味わい焦がすがいい!!」

「つ……熱っ!!」

ヴァレルトから発生した紫電は、周りの木々を一瞬で燃やし焦がしていく。

凄まじい程の電力。まともな体なら、浴びただけで重症となるだろう。だが、それを目の前にしてマルクは笑っていた。

「む……う？笑うか、笑うのか。恐れを抱きすぎて心が壊れたか？はたまた、壁を目の前にして恐れることを知らない愚か者か？」
「どっちでもない……ただ、力が出ない時に食う飯は美味そうだ、って話だ。」

凄まじい魔力は、マルクにとつては餌も同然。その現実をヴァレルトは知る由もなかったのであった。

「ドラゴン……ドラゴンだあ？面白くねえ面白くねえ……今更、出てきたところで……」

「あ、貴方は……戦わないの？」

「……それはテメーも一緒だろ、クソカラスギルド。」

「け、剣を咬んでも壊せない、強がることしか出来ない幼虎に何言われども……笑いの種にしなければならない。」

街の外。クロツカスから離れた平野で、クオーリはただ一人街の外を眺めていた。

マルクに負け、気がついた後に特に理由もなくここまで来ていたのだ。

そして、そこにマホーグも来ていた。ドラゴンが現れてから、城からここまで素早く移動してきたのだ。

「んだと……？」

「だ、だってそう……ま、マルクに負けただけで拗ねて……馬鹿らしい……」

「てめえ……女だからって……！」

「あ、貴方程度なら……私は余裕で倒せる。けど、倒せない存在だっている。」

「……あ?」

クオーリは、イライラしながらマホーグを睨む。彼自身でも、もはや何に対してイラついているのかは全くわかってなかった。

「ど、ドラゴンは……滅竜魔導士でしか、倒せない。どれだけ強くても、滅竜魔法がなかったら……ダメージを与えることすら難しい。」

「……だから、俺に戦えっつか?」

「ドラゴンを、1人1体で倒せない……400年前にいた、と思う滅竜魔導士は、ドラゴンと争えるほど強かった……けど、今の人間では……」

「400年前と違って、争いの最中にいるわけじゃない……だから、400年前と比べて、弱くなってるっつか?」

「そ、そう……」

怯えるマホーグ。だが、面と向かって話している彼女を見て、クオーリも段々と冷静になっていく。

「だから、1人でも滅竜魔導士がほしい……そういう事か?」

「そう……ドラゴンは8体。そして、あなたが加われば……滅竜魔導士は9人」

「……計算、間違えてないか? 剣咬セイバートゥースの虎が俺を含め3人、妖精の尻尾が第2世代含め5人だ。」

「う、ううん……あと一人、ついさつき……来た。」

「あと一人、だと……?」

「じゃ……と、とある人物が……評議院に頼んで、そいつを、牢から引っぱり出してきた……」

牢、そこから出されるのは基本的には囚人だけである。そして、そこから出される滅竜魔導士……その正体は、クオーリも知っていた。

「まさか……」

「……元六魔将軍オラシオンセイイスが1人……毒竜の、コブラ。」

生睡を飲むクオーリ。ナツに負けたとはいえ、強力な滅竜魔導士であることに変わりはない。

「……だったら、余計に俺が参加する意味合いはねーだろ。

剣咬の虎の滅竜魔導士3人を倒した妖精の尻尾の滅竜魔導士の3人、プラスそこに治療系の魔法が使える天竜とお前らレイヴンを全滅させた雷の滅竜魔導士。

剣咬の虎の滅竜魔導士2人に、三大闇ギルドの元メンバーである滅竜魔導士が出張ってくる……」

「……」

「これでどうして俺が参加することになる？そもそも、俺はマルク・スーリアに負けてんだ。あいつより強いナツ・ドラグニルや、ガジル・レッドフォックスが負ける相手なら、俺も勝つこたアねーだろ。」

「……うる、さい。」

「は？え、おいお前何を——」

マホーグは、イライラした様子でクオーリの胸ぐらを掴み、そのまま自身の魔法であるショートワープを繰り返して街に近づき始める。

「て、てめえ!!何のつもりだ!!俺はまだ行くともなんとも……!」

「黙れ。時間が、無い……から、早く行ってもらわないと……困る……!」

真剣な表情のマホーグに、クオーリはこれ以上の糾弾をしなかった。だが、だからといって彼自身が折れてクロツカスの街に戻ろうと思っただけでもなかったのであった。

「……扉を閉める者がいる、と言ったな。」

「あ？」

マルクがヴァレルトと戦い、マホーグがクオーリを説得している頃の頃。飛んでいるドラゴンの上で未来ローグとナツは激闘を繰り広げていた。

「扉を閉めた……勿論、ルーシィ・ハートフィリアを殺すことも目的だった。」

だが、それだけじゃあ足りない……1万のドラゴン？そんなもの、扉を閉められた時点で存在していない。」

「何が言いてえ。」

「世界を支配したのは1匹のドラゴン……お前らも見た、ドラゴン——」

「……アクノロギア。」

「そうだ、アクノロギアによつて、7年後……未来は支配される。だが、例えばドラゴンの王であっても、簡単に世界は滅ぼせない。」

下地があつたんだよ……」

ドラゴンの上で、未来ローグは天を仰ぐ。その顔は笑みも浮かべず、ただただ感情のない顔であった。

「下地？」

「……一体の怪物がいた。全てを食らう暴食の怪物……いや、悪魔と言うべきか。」

「悪魔……」

ナツは過去に何度か悪魔という存在に出会ったことがある。しかし、未来ローグのその口ぶりから察するに、文字通りの怪物だったということも伺える。

「その悪魔の正体……そいつも、ここで始末しなければならぬ。もう1人のルーシィ・ハートフィリアは語ったか？黒色の怪物のことを。」

「しらね、忘れた。」

「ふん……まあいい、そいつも……アクノロギアに世界を支配させた原因の一つだ。」

「だから？」

「くく……つくづく……つくづくお前達は何かを壊さなければいけないのか？」

顔を俯かせ、笑いをこらえる未来ローグ。その表情は、狂った者のそれだと、ナツは直感的に感じ取っていた。

「……誰だ、そのバケモンってのは。」

「……滅竜魔導士とは名ばかり、奴に滅竜魔導士の力は初めからない。真似事真似事……育ての親がドラゴン？笑わせてくれる……」

「……」

「……マルク、マルク・スーリア。あいつが怪物、俺のいた未来で……各地で暴れ周り、最終的にアクノロギアに瞬殺されて終わった男。

傍迷惑なんだよ!!一万のドラゴンが入ればアクノロギアは倒せた筈だ!!だが、ルーシイ・ハートファイリアは扉を閉じてマルク・スーリアは目につくものを破壊していった!!

そんなに、そこまで壊したいか!!フロツシュも、フロツシュも——
」

吠える未来ローグ。しかし、その様子を見てもナツは黙ったままだった。その雰囲気、未来ローグは疑問を抱く。

「……驚かないのか。いや、それともはじめから正体を知っていて黙っていたか……」

「ちげえよ。ただ……マルクはそう簡単に人や街を傷つけるやつでもねえって俺はわかってるからな。」

「ふん……単なる仲間意識か……いいだろう、だったらお前達をまとめて殺す!!そしてアクノロギアを殺し俺がドラゴンの……地上の王となる!!」

「させるか、よ!!」

炎と影が、再び激突する。ドラゴンと人、人と人がぶつかり合う混戦したこの状況は、一体どこまで続くのだろうか。

竜王祭

ドラゴンが8匹。そして、滅竜魔導士が8人かつまもなく9人。ドラゴンスレイヤー多種多様のドラゴン達は、魔導士達の攻撃はビクともしない。だが、滅竜魔導士の攻撃だけは別であった。ドラゴンを滅ぼす為の魔法は、本当のドラゴンに初めて向けられる。

「だらアアア!!」

「痛くも痒くもない!鱗に傷をつけられないようでは無理な話よ!!」
「クソがつ!!」

マルクは、紫電を纏うドラゴンであるヴァレルトと戦っていた。だが、今のマルクの体は力が入らないも同義であった。

そして、魔法もヴァレルトには通じないという状況になっていた。

「ふははは!あつしに傷を与えられない故、逃げながら戦うか!逃げることだけは得意なのだな!!」

「っ……」

街の中には少なくとも木々があった。それを利用するために、ある程度移動しながら、巨体を持つヴァレルトの死角を突きながら戦っていく。

だが、それでもまともにヴァレルトにはダメージが通らない。段々と、マルクは意図せずして城の方へと近づいていた。

「ふははは!!む?なんと、ここはさつきいた所か。」

「え……?ウ、ウエンデイ!」

「マルク!?無事だったの!」

シャルルに背負われ、空を飛ぶウエンデイ。そして、その隣には魔人化したミラと、1匹のドラゴンがいた。

「なんだジルコニス!餌と遊んでいる場合か!?なんなら、食ってしまおうかその餌を!!」

「ヴァレルト!余計な手出しをするな!!こいつらはワシが食う!!」

「なら時間をかけずにさつきと食わんか!!人間の女はお前の好物だろう!!」

「餌、だと?」

ジルコニスとヴァレルトの会話の1部に反応するマルク。その声でようやく存在に気づいたのか、ジルコニスがマルクに視線を向ける。

「何じゃヴァレルト、お前も人間で遊んでおるではないか！」

「思いの外すばしっこくての!!中々仕留められんぶえ！」

突然舌を噛むヴァレルト。その原因としては、自分の下にいた人物が魔法を使ってヴァレルトの下顎を打ち上げたからだろう。

「……食わせるかよ、ウエンデイを!!」

「何だ、まだやるって言うのか人間!!」

「ジルコニス!てめえも後でぶん殴ってやる!!」

「……む?あの小僧、なぜワシの名を……いや、ヴァレルトが叫んだからか。」

一瞬名前を呼ばれたことを疑問に思ったジルコニスだったが、すぐにどうでも良くなり、ウエンデイ達の方に視線を向け直す。

「む?あの小娘共は——」

「天竜の咆哮!!」

「ぐおおお!!」

「隙だらけ、なのよ!!」

ウエンデイとミラのコンボが、空を飛んでいたジルコニスを襲う。城の目の前で、ウエンデイとミラとマルク、そして2匹のドラゴンが戦いを始めるのであった。

「……おい、街にいるのはドラゴン8匹だったんじゃないのか。」

「……わ、私も知らない……こんな、ちっちゃいのがいたなんて……！」

マルク達が戦い始めてしばらくたった頃、ようやくマホーグに運ばれてクオーリはクロツカスの街に戻ってくる。

だが、街の中には小型のドラゴンのような生物が大量に闊歩しており、魔導士の殆どがその相手をしなければならない状況になっていた。

「……あの空飛んでる2匹のドラゴン。なんで争ってる?」

「そ、それも分からない……」

そして、空では2匹のドラゴンが争っていた。1匹は、体が炎で出ているかのようなドラゴン。もう1匹は金属で出来ているかのような体をしたドラゴンであった。

「……炎の奴は味方、って考えるべきか?」

「そ、そうだと思う……」

「……なら、あの小型を倒していくぞ。数が多そうだからな。」

「う、うん……!」

そう言って、2人は小型をなぎ倒していく。一体一体の強さはそれほどでもないのか、一撃を与える度にすぐに戦闘不能になっていく。

「こいつらは雑魚、雑魚だが……!」

「か、数が多すぎる……!」

「お前未来予知できるんだろ!? だったらその目で全部攻撃よければだろ!!」

「無、無理言わないで……強制的に見せられるから……頭の中、さつきから気持ち悪くて……」

「ちいっ……!!」

クオーリは辺り一面を凍らせる。その氷の中には、両手の指では足らないほどの小型が全て凍りついていた。

だが、それでもその後ろから新たな小型が姿を現す。

「うっぶ……!」

そして、マホーグは攻撃しながらも魔眼の強制発動がずっと続いているため、脳に負担がかかり始めていた。

そのため、彼女の体調は悪くなる一方だった。

「……減らねえ減らねえ!!」

「ちよつと無理……あと頑張つて……指示だけする……」

「はア!?お前ふざけ……邪魔だア!!」

マホーグに怒りたくなる気持ちもあつたが、それ以上に小型の殲滅の方が先だと判断したクオーリ。

だから仕方なく、怒らないままマホーグの指示に従つて小型を仕留めていくのであつた。

「次はどこだ!!」

「私の、後ろ以外の……全方向に、それぞれ……3匹……」

「畜生無駄に数が多い!!」

「がはっ……!」

「はあ……飽きた、飽きてきてしまった。」

「んだと……!?!」

「あつしは食うことよりも戦う事の方が好きでな。だが、久々に自分よりも弱い者を相手取つたせいで、変に高揚してしまつていた。

だが、その熱も冷めた。」

「舐め、やがって……!」

傷だらけのマルク。起き上がろうとするが、ヴァレルトはそれを上から自分の手で押さえつける。

「その言葉はお前にも帰ってくる言葉だな。」

「は……?」

冷めた目で、ヴァレルトはマルクを見下ろす。マルクは、ヴァレルトの言っていることがわからずに、ついヴァレルトの目を見返していた。

「ハナから効かない……というのはあるが、それ以上にお前はあつしに攻撃をするのを遠慮している。」

それでは興も冷めるといふもの……まあいい、今から我がブレスをぶつけて、それで終わりでしょう。」

そう言いながら、ヴァレルトは自身の口の中に雷を溜め込む。だが、それが魔法である以上マルクにとってそれは餌なのである。

「何をニヤついているかは知らんが……まあ、期待はせん。」

「いや何……ついさつきまで魔法を使ってなかったなと思つてな。」

「あつしはただ、肉体と肉体のぶつかり合いが好きなのだ。」

「そうか、なるほどな……！」

肉体のぶつかり合いが好きだと語るヴァレルト。その言葉どおりであり、先程までのマルクとの戦いでは魔法を一切使用していなかった。

「では、さらばだ。」

そう言つて、ヴァレルトはマルクを押しえつけてる手を退けた瞬間にブレスを放つ。

そのブレスを、マルクは食べ始める……が、ここで意外な盲点があった。

「うごっ!？」

「ほう、我が魔力を食らうか……だが、食らつても電撃の感電は防げまして……雷属性の滅竜魔導士でも連れてくればよかつたな。」

マルクは、ある程度こそ耐えられるが魔力を食らう際にナツやガジルの様に物の特性を完全に無視できる訳では無い。

火に耐性なんて持つてないから熱いものは熱く、鉄を噛み砕けるほどの顎を持つてないため、噛み砕くことが出来ない。

そしてそれは、電撃も同じことであつた。

「うぐ、ぐう……！」

だが、マルクもここまでの電力だと思つていなかった。ある程度の

無視が効くために、例え少しでも感電するとしてもそれも無視できる範囲だと考えていた。

だが、それは早計だった。ヴァレルトのブレスは、地面を焼くほどの熱量と、電気を通しづらいつくはずの石でできた辺り一面は、帯電していたのだ。

「くははは……無駄無駄、我が紫電は全てのものに滞留する。全てを麻痺させ、その間に食らうのさ。」

「ぐ、うう……!?!」

ずっと電気を食べ続けているマルク。しかし、ブレスは勢いを一切緩めず放ち続けている。

その勢いに、次第にマルクは押され始める。下手に魔法を使えば、この電撃をまともに食らうことになるからだ。

「さあ、早く消し飛ばが良い。電撃を喰らおうとも……たかが人間が、耐えられるものではないわ。」

「———そうか、なら。俺でも耐えられないか試してみろよ。」

「誰だ……ぬぐううう!?!」

ヴァレルトの頭に当てられる電撃。それはヴァレルトを苦しめて、怯ませる。

「……へえ、頭吹き飛ばねえか。結構本気でやったんだがな。」

「ら、ラクサスさん?」

「ほれ、お前はウエンディの加勢にいけ。一人じゃああいつもきつい。」

「ら、ラクサスさんはどうするんですか?」

「最初はウエンディに加勢するつもりだったんだがな……俺アこのドラゴンを相手にする。」

「何け電撃だ……俺と相性がいいだろうよ。」

「………お願いします!!」

そう言つて、マルクは立ち上がつてウエンディの元へと向かう。それを軽く見送つてから、ラクサスはヴァレルトに向き直る。

「お前も人間か?しかし、あつしにダメージを与えたところを見ると……滅竜魔導士か。」

「ああそうさ……しかも、属性は雷。お前との相性はバツチりってわけだ。」

「ほほう……あの小僧よりは楽しめそうだ！」

「ウエンデイ!!」

「マルク! あつちのドラゴンは!?!」

「ラクサスさんに任せた!! 俺には……あのドラゴンは、倒せないから……」

ウエンデイと合流するマルク。戦闘能力的な意味で、倒せないというのもあったが、ヴァレルトにも言われたこと。『攻撃するのを遠慮している』というのが、マルクの心に響いていた。

「……何かあった?」

「……いや、他人が親に似てたって話だ……それを、俺がただ気にしすぎているだけだっけってことも……ともかく! やるぞ!!」

「う、うん!!」

「ふん!! ガキが一人増えたところで!!」

そのまま、また戦いは再開される。舐めているのか、ウエンデイと戦っていたジルコニス は地面に降り立っていた。

「魔龍の咆哮!」

「天竜の翼撃!」

2つの魔法がジルコニスの体を捉える。だが、どちらの攻撃も致命傷にはなりえなかった。

「まったく……面白くない!!」

「何を……」

「がア!!」

「ウエンデイ!!」

薙ぎ払うように、ジルコニスは腕を振るう。ウエンデイに直撃しそうなそれを、マルクはウエンデイを突き飛ばして当たらないようにさせる。

「がはっ……」

「マルク!!」

だが、代わりにマルクが吹き飛ばされる。幸い、爪で切り裂かれた訳ではなく、ただ吹き飛ばされただけだったので何とか立ち上がることは出来た。

「俺は大丈夫だ!!けど、これじゃあ……」

「皆、疲弊するしかないよね……でも……」

「ああ、やらないと!!」

「ふん、ワシを倒せん時点で諦めるべきじゃろうに。」

「だったら……一気に倒す!」

2人は、並んでジルコニスに向かって走り出す。ジルコニスはニヤリと笑ったまま、腕を上げて、振り下ろす。

それに対して、マルクはそのままの勢いでジャンプしてありつたけの魔力を放つ。

「滅竜奥義!・紫電魔皇殺!!」

「ぬう!!」

鞭のように長い魔力の刃を振るい、マルクはその腕を弾く。ダメージこそ与えられないものの、弾き飛ばせただけでもOKである。

その一瞬の間を突いて、ウエンデイはジルコニスの下に入りそのまま魔力を解放する。

「滅竜奥義!・照破・天空穿!!」

「ぬぐおおお!!」

腹に、滅竜奥義を受けたためかジルコニスは大きく苦しむ。だが、それでもまだ倒すには届くことは無かった。

「それどころか——」

「この、小娘があ!!」

「きゃあ!」

ジルコニス は吹き飛ばされきるギリギリで、後ろ足を使い自分の下にいたウエンデイを大きく空へと飛ばす。

「ウエンデイ!!」

「邪魔だア!!」

地面に降り立ったが故に木陰に隠れていたシャルル。咄嗟に飛び出してウエンデイを助けようとするが、ジルコニスはそれを許さずにシャルルを前足で殴って落とす。

「がははっ!このまま食らってやる!!!」

「っ!!やめろオ!!」

足に魔力を貯めて、マルクは空中に飛び出す。ジルコニスが叩き落とそうとするが、その攻撃に自身の魔力を当てて無理やり行わせないようにする。

「っ!!て、天竜の——」

「遅いわ!!」

空中でなんとか体勢を立て直したウエンデイ。そのままブレスで何とかジルコニスを吹き飛ばそうとするが、ジルコニスはそのまま飛行してウエンデイに魔法を使われる前に口を開く。

「あ——」

「させる、がア!!」

ウエンデイが、ジルコニスによって食べられるかと思つた直前。マルクはジルコニスの体を登りきり、ウエンデイをまた突き飛ばす。勢いがあつたせいで、怪我をしないだろうか……と検討ハズレなことを考えるマルク。

「マル、ク——」

腹部と、背中……と言うよりもマルクは体に違和感を覚えていた。足の感覚がなかったのだ。

もつと複雑に言うならば、痛みを感じるところから下の感覚が、全くと言っていいほど存在していなかった。

「マルク、マルクやだよ、やだよ……!」

ウエンデイは必死に治癒魔法を使う。マルクの腰全体に。体温が低くなる感覚を味わいながら、マルクはぼーっと泣きじやくるウエンデイを見て考える。

「かー……男を食らってしもうた。不味い不味い。」

泣かせたのは誰だ、悲しませたのは俺だ、だが原因が分からない、ウエンデイが傷だらけ、したのは誰だ、あのドラゴンだ

なぜ泣かせた?なぜ怪我を負わせた?何故蹂躪した?何故?何故?何故何故何故何故何故何故——

「マルク……?なんで、足が……」

「……………」

足が生えた、あるける、たおせる、Tぶせru、kろせ溜。

「……何だ、貴様。人間では、無かったのか。」

「マルク……!?!体が、変わって……」

変わる体。マルクの体は真つ黒に染まる。腕が太く固く、足も太く固く、爪は鋭くそして長く、牙も長くそして鋭くそして色んな方向に。体も大きく。目の前のドラゴンを裂くために。

彼にとつての全てのトリガーはウエンデイだ。何があったとしても、ウエンデイがキーとなる。

ふと、過去の記憶が蘇る。小さな頃の記憶、一時的に魔法を使ったくなくなってしまった忌まわしき記憶。

「ひい!?!来るなア!!こつちに、こつちに来るなあ!!」

だが、それは自分の記憶していたものと違った。自分は笑っていた。手や服を真っ赤に染めて、2人いたもう1人を追いかける。

次第に追いつき、馬乗りになり、殴りかかる。ただの殴る行為ではなく、貫き殴る行為。

余計に真っ赤に染まっていく。その記憶の中で、ふと合点がいった。魔法を使いたくなくなったのは、人を殺してしまうという恐怖でなく、自分が自分でなくなるといいう恐怖。

マルクはそれを本能的に感じていた。

「ヴオオオオオオオオ!!」

「貴様!人間ではない!ましてやドラゴンでも無い!!悪魔だ!!全てを食らう悪魔だ!!」

恐怖、何の恐怖。ウエンデイを殺そうとするものは全て、彼女が好きな妖精の尻尾を壊そうとするものがあるならば――

「……………全tツぶsu!!」

1分

真っ赤に染まる。綺麗な花の色も、地面の色も、エクリプスであっても……全てが等しく真っ赤に染まる。

そこにいる人もドラゴンも全てが真っ赤に染まる。赤く紅く赫く。胸を抉り、腹を裂いて、噛みちぎり食い荒らす。

そこに転がっているのは、自身を翡翠の竜と語るしていたジルコニスだった。

「マルク、お前は……!?!」

驚きを隠せないラクサス。だが、そのラクサスを無視して黒い怪物は新たなドラゴンに牙を剥く。

「悪魔だったか小僧！ジルコニスを倒したのは褒めてやろう、だが自我を忘れるようでは……あつしには勝てん!!」

蛇のように動き回り、黒い怪物を拘束する紫電竜ヴァレルト。その長い体を使った拘束は、完全に動きを縛ったかのように見える。

だが、怪物は体に力を込めてヴァレルトを引き剥がそうとし始める。

「何っ!?!くっ……!?!」

「……!」

体をちぎられると感じたヴァレルトは、拘束を緩ませて一旦離れようとす。だが、怪物はそれを許さなかった。

「何っ!?!くそ、離せ!!ぐが、はっ……!?!」

咄嗟にヴァレルトの体を掴み、握りつぶしながら地面に叩きつける。それに、ヴァレルトは確かなダメージを負っていた。

「……kエろ——」

怪物が拳を振り上げ、地面に叩きつけようとした。だが、その瞬間に訪れたのは『運命が戻る時であった』

怪物が現れた時同じくして、行動を共にしていたクオーリとマホーグは満身創痍になっていた。

「その家の物陰と屋根、瓦礫の中からも一匹……」

「はあ、はあ……」

ただただ、ひたすらなまでの魔力の消耗。魔力量だけなら他の群を抜いているマホーグでさえも、魔眼で見せられ続けている未来の映像と、消費され続ける魔力で既に何度か吐いてしまっていた。

「おい、あと何匹だ……」

「……」

「……おい？」

「……わかん、無い。見えなくなった……」

「……は？」

つい聞き返してしまうクオーリ。だが、その言葉の意味はすぐに理解出来ていた。

問題は、その言葉が出てしまった意味そのものにある。

「……尽きたか、魔力。」

「うん……けど、魔眼は……それでも、私の危機を意地でも見せようと、して……」

倒れるマホーグ。その倒れた光景を見て、クオーリは視界に入った小型を

凍らせながら、口角を上げて笑みを浮かべる。

「は……魔力量だけが取り柄の奴が、魔力の枯渇で死ぬなんざ……滑稽滑稽。」

どれだけ凍らせても現れる小型。早く移動できればよかったが、マホーグは初めから魔眼の処理で、ショートワープするのも一苦労であり……つまりはそういうことである。

「……あー、駄目だ。ドラゴンフォースもアイスドライブもこいつらにア勿体ねえ。」

そして、クオーリ達を囲うように現れる大量の小型。クオーリのその手は震えていた。

小型に対する恐怖ではない……力が込めようとして、震えているのである。

「ちっ……俺も魔力が空か。」

両手を下ろして、その場に腰を下ろすクオーリ。その顔には、諦めしか無かった。

「ダメだな……畜生。」

そして、小型がクオーリ達に向かって飛んできたところで――

「――今、のは？」

「何だったの……あれ………」

マルクとウエンデイは並んでいた。ジルコニスの目の前に、その2本の足で立って。

まるで、先程までのことは夢だったかのように、なかったことになっていた。

「俺が、怪物……?」

「……マルク。」

「……いや、気にしてなれない。ジルコニス……うん、まずはジルコニスを倒さないといけないんだ。」

「行こう、ウエンデイ。」

「う、うん………」

首を左右に振り、今の一瞬の夢を振り払うマルク。そして、行動をなぞるかのように、ジルコニスに突撃していく。

「紫電魔皇殺！」

ジルコニスが振るった腕を、滅竜奥義で弾くマルク。しかし、夢で見たその後のことを思い出す。

ウエンデイが、ジルコニスを吹き飛ばした直後にジルコニスに空中に打ち上げられた事を。

「っ……………」

「照破・天空穿!!」

ウエンデイがジルコニスの下から滅竜奥義を当てる。夢と同じように、ジルコニスは打ち上がる。

「しゃがめウエンデイ!!」

だが、夢と違うのはマルクが駆け寄ったことである。まだ、魔力に余分はある。

命を使い切る覚悟で、先程よりも力と魔力を込める。

「滅竜奥義……………魔光絶闇激!!」

ドリルのように回転しながら、振るわれようとするジルコニスの後ろ足に魔法を当てるマルク。

そして、それは綺麗に弾かれてジルコニスはただ自分だけ空へ打ち上げられることになった。

「……………あの夢の通りになった。」

「あれ……………何だったんだろ……………」

すぐさま戦いに気を戻す2人だったが、あの夢が現実だったのか、はたまた違うものなのかは、分からないままなのであった。

「……今の、なんだ。」

「私達が死ぬ、夢？え、縁起でもない……」

頭を振るマホーグ。クオーリも頭を抑えて、今見た映像に不快感を示す。自分達が死ぬところなんて、見せられても不快感しかないのだが。

しかし、たかが夢幻と決めてしまうには、現実味がありすぎた。

「だが、俺達が一緒に見てたつてことは……ここは危ねえつてことだな。おい、運んでやるから敵の少なさそうな場所に行くぞ。」

「そ、そんな所、どこに……」

倒れているマホーグにも分かるように、向かう方向に指で指し示す。その方向にはつい先程まで観客で賑わっていた大魔闘演武会場があった。

「闘技場だ。簡単に壊れそうにもねえ屋内なら、多少はてめえもマシンにاندらる。」

マホーグを担ぐクオーリ。そのまま氷で足場を作りながら、瓦礫や家屋を飛び越えて闘技場に、一直線で向かい始める。

「わ、私のことはいいから……ドラゴンを……」

「てめえを運んだら考えてやる……ん？」

直線移動の先、クオーリは見慣れた2つの人影と見慣れない2つの影を目撃する。

「ん？おー、クオーリじゃねえか!!」

「お前今までどこに……」

「げっ……」

そこに居たのは、同じ剣咬セイバートゥースの虎であるステイングとローグであった。

そして見慣れない影は2頭のドラゴンだった。

「……」

「……んだよ。」

「お前、少女誘拐はダメだろ。」

「まずはてめえから氷漬けにされてえ様なステイングウ!!」

ステイングは、クオーリに抱えられたマホーグを見て、本気で戒める。その事にブチ切れたクオーリだったが、マホーグを落とすようなことはしない。

「こいつ今から危なくねえ場所に運ぶから、てめえらとは共闘できねえ!!しばらく自分達だけで頑張つといてくれ!!」

「あー?まあ、いいけどよ。ちゃんと戻ってこいよ?」

「……約束はできねえよ。」

そのまま2人の場所を通り過ぎるクオーリ。離れてからしばらくして、マホーグがぼそつと呟く。

「……素直じゃ、無い。」

「そんだけ元気があるなら捨てていくぞ。」

「あ、待っ、それだけは……それは死ぬ、ほんとに死ぬから……」

「なら黙ってる。」

そして、そのまま2人は小型を軽く処理していきながら、闘技場へと向かうのであった。

「ウエンデイ!!」

「うん!!」

「何をしようとも無駄だ!!」

ジルコニスと戦い続けるウエンデイとマルク。ジリ貧になりつつはあるが、それでもドラゴンとの戦いになんとか耐えていた。

「魔龍の咆哮!!」

「天竜の碎牙!!」

「ぬぐう……!」

2人の攻撃に、なかなか決め手を出せないでいるジルコニス。人間が見ても、イラついてるのがはっきりわかる表情になっていた。

「人間如きが!!小童共が!!」

「……もしかして、さっきの夢をこいつ、見てないのか?」

ふと、疑問に思ったことを呟くマルク。ウエンデイが見ていたので、自分だけが見ていたものだけでない、そして恐らくそこで戦っているラクサスもそれは同じだろう。

「多分……見てないと思う。」

「だよ、な……」

記憶に鮮明に映る猟奇的な光景。確かに、ジルコニスはあの怪物に負けたのだ。

あれだけやられて、最後に殺される。そこまでされておいて、全く無反応というのもおかしい話なのである。

「……気にしても、しょうがないか。」

「とりあえず、行くしかない!」

「そう、だね。」

空元気、でもないがマルクがどこか無理しているであろうことは、ウエンデイはなんとなく感じ取っていた。

だが、あのことを今掘り返す必要もなく、またこれ以上マルクを追い詰めるようなことはしないほうがいい……と、考えたのでこの場での追求は全くしないと決めたのであった。

「け、けど、どうするのマルク。」

「何が。」

「……私、ドラゴンがこんなに強いなんて初めて知ったよ。」

「それは、俺もそうだよ。子供の頃は漠然と強いつてことしか知らなかった。」

「でも、だからこそ——」

「燃えてきた?」

「その通り!」

微笑むウエンディ。すっかりナツの影響を受けてか、困難な状況になっても、2人は全く弱気にならなくなっていた。

それどころか、この状況でどうやって敵を倒すか……その事ばかり考えていた。

負けることなんて、一切考えてなかった。

「ぐう……む？」

「ん？」

睨みつけてきていたジルコニスが、突然視線を上に向ける。その視線は、自分たちの後ろを見ているようだったが……

「マルク、あれ!!」

ウエンディが指し示した方向に、視線を向けるマルク。その先では、空を飛んでいたドラゴンの1匹が落ちてきていた。

「ってあれ、乗ってるのナツさん!」

そしてそれは、エクリップスに向かっていき……大きな轟音と共に、エクリップスを完全に破壊することとなった。

「エクリップスが、壊れた……」

「ドラゴンは、あの扉から来て……全部、過去からやってきた。じゃあ、あれが破壊されるってことは……?!」

「——ぬおおおお!!」

答えを言い切る前に、答え合わせが始まる。エクリップスが壊れた直後から、この時代に現れたドラゴン達の体が総じて光り始める。

ジルコニスも例外でなく、苦悶の声を上げながら体を光らせていた。その体は、徐々に透けていった。

「ドラゴンが……」

「消えていく……」

「人間ごときが、人間如きがア!!」

しかし、ジルコニスは最後の足掻きと言わんばかりに未だに暴れようとする。

だが、その場に新たな人物が現れる。

「ごめんなさい……」

「え、誰……」

「危ないですよ!?!」

ヒスイ・E・フィオーレ。この国の、姫である人物。今この場にその人物が現れていた。

「時をつなぐ扉を建造したのは私です。あなた方の自然の時の流れを乱してしまった。」

あなたは400年前に生きる者。我々は現在に生きる者。本来、争うべき理由が全くないもの同士……それを歪めてしまったのは私です。」

「何だ貴様は……」

「ヒスイ・E・フィオーレ。」

「ヒスイ……?」

ヒスイ姫の名前に引つ掛かりを覚えるジルコニス。それもそうだが、ヒスイ……翡翠というのは、彼の体の色なのだから。

「そう、あなたの体の色と同じ翡翠です。」

「同じ、だと?」

「同じです……『翡翠の竜』」

ジルコニスは、その呼び名に対して顎を撫でる。どうやら、少し気に入ったようだった。

「翡翠の竜……悪くない響きだな……ん?うわっ!!ちよつと待て!!くそつ、はめられた!!オレは——」

最後に、何かを言いかけていたがジルコニスはそれで消滅する。マルクは、なんとなく視線をずらす。

ラクサスと戦っていたヴァレルトの方に、視線をずらす。だが既にヴァレルトも姿を消していた。

「……終わっ、た?」

「みたいだな……」

座り込むウエンディと、倒れ込むマルク。勝利を得れた……という訳じゃないが、少なくとも戦いは終わったのだ。

「……」

マルクは天を仰ぐ。ドラゴンは、倒せなかった。滅竜魔導士と名乗っておいてこのざまである。

だが、今のマルクは自分が滅竜魔導士かどうかさえも怪しかった。そう考えられるほどに、夢の出来事が脳裏にこびりついていた。

「いや……違うよな。夢なんかじゃ……ないんだ。」

現実を起こったこと、きつとあれはそういうことである。だが、何かしらの要因で無かったことになった……マルクはそう感じていた。

「うん、夢なんかじゃなくて……私達、勝てたんだよ。」

「勝った？」

「だって……どっちにしても、ドラゴンを負い返せたんだもん。」

「……それも、そうだな。」

微笑むウエンディ。そしてそれに微笑みかえすマルク。今このときで、漸くドラゴンとの戦いが終わったのであった。

パーティー

エクリップスから現れた8頭のドラゴン。そのドラゴンと対峙し、無事に世界を守りきれたということ、城側が魔導士達を城に招いてパーティーをすることになった。

その際、やはりいつもの格好ではダメだったのだが、城側がタキシードやドレスなどを総じて用意してくれており、それらを着込んで王宮でパーティーが始まろうとしていた。

「な、なんで私まで……」

「まあまあ、いいじゃんいいじゃん。」

「て、天空の滅神魔導士!?!」

ドレスを着こんでいる女性陣。マホーグもそれに参加していた。というよりも、あの後偶然ルーシィ達に見つかって連れてこられた、というのが正しいのだが。

「や、やっぱり参加したくなかった……似合っていない……」

「そんな事ないよ、すごい似合ってるよ?」

「か、顔近い……!」

物陰にかくれながらも、なんだかんだ断りきれずに参加するはめになったマホーグだったが、存外嫌な気持ちにはなっていなかった。彼女自身も、なぜなのかは理解していないが。

「ウエンデイ、似合ってるわよ?」

「そ、そうですか?」

嬉しそうにはにかむウエンデイ。魔導士とはいえ、未だ年頃の少女である。綺麗な服を着飾りたい、という願いはあるものである。

「そ、そう言えば……マルク、は?」

「え?もうそろそろ来てると思うけど……」

マホーグがウエンデイにマルクの所在地を問い掛けるが、ウエンデイはそれに確信がある答えを言うことは出来なかった。

「あれ?マルクどうかしたの?」

「それが、何か用事があるから先に城に入ってきてくれ……って。」

「用事?何してるんだろ。」

顎に手を当てて考え込むルーシイ。途端に、何か思いついたのか顔が驚愕の色に染まる。

「まさか、見知らぬ子と駆け落ち!？」

「か、駆け落ち!？」

「……さ、流石にそれは…ない、と思う。」

冷静にツツコミを入れるマホーグ。流石に冗談だったのか、頭を撫でて苦笑するルーシイだったが、ウエンディはどうやら軽く真に受けてしまったようだ。

「さ、流石にすぐに来ると思うし……ね？」

「う、うん……」

「……珍しい、と言うべきなのか。俺は君のことを良く知らない。

だから、何故呼ばれたか聞かせて欲しい……マルク。」

クロツカスから離れた場所、とある岩陰にジェラールとメルディはいた。そして、その場にいるのは評議院のドランバルトと……マルクだった。

「ウエンディはいいのかよ、城でパーティって聞いたぜ。」

「……重要な事だから。だから、わざわざ2人を呼び出しました。」

「ジェラールはともかく……よく俺がいるってわかってたな。」

「ラハール…さんがいるんだ、付き添いできてるだろうと思っただけです。」

真剣な顔で、2人を見るマルク。一体、何の話をされるのかと3人は身構える。

「……悪魔、悪魔について調べてほしいんです。」

「……何があった。」

ドランバルトが、睨みつける。好き好んで悪魔を調べようとするものは少ない。

そして、彼の中ではマルクは好き好んでそんなことを調べる性格ではないと思っていた。

「時間が戻った……事を知ってますか？」

「…直後の相手の行動が見えた、あれ？」

口を開いていなかったメルデイが、そこで口を開く。どうやら、メルデイ以外の2人も覚えがあるのか、驚く様子はなかった。

「それ、です……その中で俺は——」

マルクは、自身の身に起こったこととその影響で起こったことを話した。こと細かく、鮮明に。

「……体が化け物になって、ドラゴン一頭を仕留めた。そして、もう一頭を仕留める前に……」

「気がついたら元の体に戻っていて、仕留めたドラゴンも蘇った。」

「……はい。」

「だがな、幾ら何でも情報が曖昧すぎるぜ。それが悪魔なのかどうかってのもわからん。」

魔龍の滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーなんて訳わかんねえ力を持っているんだ、その影響つてのも考えなかったのか？」

「考えました、考えましたけど……何というか、直感です。」

「直感ねえ……だが、悪魔だけにしても情報が曖昧だ。もう少し、何かないのか？ 情報がよ。」

マルクは考え込む。そして、一つのとある情報にたどり着いた。だが、その情報が自分に繋がるのだとすれば、全てが繋がるが……自分が何者か、という答えを得てしまう。

マルクは、それが何故か妙に恐ろしく思ってしまった。

「……『暴食』」

「……暴食？ 食いすぎる悪魔……いや、この場合何でも食べてしまう悪食の意味合いで使われていそうだ。」

「……まあ、それならなんとか調べられそうだがな。つーかなんで俺お前を手伝おうと……」

「お願いします。」

「……頭下げられて断るわけにもいかねーな。」

踵を返して、軽く手を振りながらドランバルトはその場を後にする。少し離れた後で、ジェラールが口を開く。

「……やはり、ウルティアだろうか。」

「時間が戻った理由……多分、そうじゃないかと思っています。」

「……」

「……ウルティアさんは、多分この町のどこか……いないとしても周辺にいます。」

それでも、2人に会いに来ないのは……会いに来れない事情が――

「会いに来れない事情って?」

マルクの言葉を遮って、メルデイが言葉を発する。少なくとも、ウルティアを知る者で一番彼女を好んでいる人物だろう。

「……ごめん、当たってもしょうがないのに……」

「……俺の方こそ、無神経でした。」

再びその場は沈黙に染まる。このままでは埒が明かれないと思ったのか、ジェラールは立ち上がる。

「君は城に戻れ。これ以上いければ、流石に怪しまれる。それ以上に……俺達といるべきじゃない。」

「……わかりました。」

「君の言っていた悪魔の件……俺達の方でも独自に調べておくとしてしよう。」

「はい、ありがとうございます。」

そして、その後すぐにジェラール達とマルクは別れた。自分に対する不安は、ドラゴンとの戦いが終わってからの方が強かった。

だが、そればかりを考えてはいられない……そう思ったマルクは、その不安を考えないようにして、王宮に向かうのであった。

「あ！遅いよマルク」

「ごめんごめん、そのドレスよく似合ってるぞウエンディ。」

「えへへ、ありがと……ね、ナツさん見なかった？」

「へ？今来たばかりだからなあ……え、ナツさんいないの？」

「うん、ルーシイさんもグレイさんもみんな見てないって。」

「ウエンディ！やっぱりここ何かいるよ!!」

談笑するウエンディとマルク。そして、遠くから顔を真っ青にしてシエリアが何かに怯えていた。

妖精の尻尾フェアリーテイルのメンバーだけにしかわからない存在、初代マスターメイビスが、シエリアの持っているゼリーに狙いをつけているだけなのだが。

「ずっと姿見せてないの？」

「そうみたい。」

「俺が来るまで割と時間あったと思うんだけど……なんか、嫌な予感するなあ……」

「な、ナツさんが怪我をするとか!？」

「そういうのよりも……『いつもの妖精の尻尾』って感じの嫌な予感……」

マルクがそう呟くが、ウエンディは首を傾げるばかりである。対してマルクは、その嫌な予感に対して呆れ顔になっていたが。

「あれ、なんかあっちの方が騒がしいね。」

ウエンディが、何かに気づいたようでそちらに視線を向ける。続いてマルクもその方向に視線を向ける。

「——待てーい！それはうちも黙ってられんな!!」

「何の騒ぎですかこれ。」

「ん？いや、ユキノ争奪戦というやつだ。」

「ゆ、ユキノさんを……?」

話が飲み込めないマルクとウエンディ。争奪戦、と言うからには原因があるはずだと少し周りを見渡して……すぐにその原因が理解出来た。

「ふじやけるなー！ユキノは人魚の踵マーメイドヒールのものらー!!」

「カグラ、さん……」

「酔ってる……お酒、弱いんだ……」

話の大筋が、大体理解出来た。ステイング辺りが、ユキノを再度剣咬セイバートゥースの虎に誘おうとして、それをカグラが遮る。

すると藪蛇の如く他のギルドも次々と、ユキノを誘い始めた……と言ったところだろう。

「マスター、何とかあの人たちを止め——」

「やってやろうじゃねえか！」

「大会の憂さ晴らしに丁度いいぜ……」

「回るよ。」

「若い頃の血がゾクゾクしちゃうわ〜」

マルクは、マカロフに助けを求めようとしたが、マカロフどころか他のマスターたちまでやる気満々になっていたのだ。

「マスター達まで!？」

「どうしよ……」

「愛だね。」

そして、そのままユキノ争奪戦はリアルファイトという形で実行される。大会であろうがなからうが、どこに行っても暴れるのが魔導士ギルドである。そう言わんばかりに争い始める。

「あわわわ……どうしよう……!?!」

「まあ……放っておけばその内止まるでしょ。言葉で止まらないだらうしよ、この状況。」

「マスター達も、乗り気だもんね〜」

ウエンディは焦っていたが、マルク、シエリアの2人はそのまま争いには加わらず、ゼリーや他の食べ物で頬張る。

混じらない事が今この場での正解だと言わんばかりに。

「妖精の尻尾的には、ユキノさん入っている場面みたいだけど？」

「結局選ぶのはユキノさんだし……結局元鞘になると思うけど。」

「ほ、放っておくのが……1番……」

「そうそう……で、いつの間に俺の足元に？」

「今。」

気づけば、何故かマルクの足元にはマホークがいた。どうやら、ずっとテーブルクロスの内側に隠れていたらしい。

「……わ、私……招かれざる客、なのに……」

「気にしないでいいと思う。本戦に出てるギルドだけかと思ってたけど……よく見たら本戦にいなかった黄昏の鬼トワイライトオーガがいるし。」

骨付き肉を頬張りながら、マルクは呆れ顔で暴れているギルドメンバー達を見る。

本当に、実はひっそりと混じっているのだ、本戦に参加していないギルドのメンバーが何人か。

「皆の者!!そこまでだ!!陛下がお見えになる!!」

「やっぱり止められた。」

正装をしたアルカディオスが、大きな音と声を出して暴れている者達の注目をひかせる。

当然、止まれ、と言われて止まる者達でもないが……流石に王様の前では、止まるようだ。

「この度の大魔闘演武の武勇と、国の危機を救った労をねぎらい、陛下直々に挨拶をなされる。心せよ。」

アルカディオスのその言葉が終わってから、奥の垂れ幕から人影が見えてくる。しかし、その人影は妙に見覚えのある姿で――

「皆の衆!楽にせよ!!かっかつかつかつかあ!!」

「返すカボ!!」

「ぶーっ!」

ナツであった。王冠を被ったナツと、奥から大臣とマトー君が大慌

てでてきていた。

そして、あまりの出来事にマルクは食べていたものを吹き出してしまっていた。

「俺が王様だーっ!!王様になったぞー!!」

「ナツさん……」

呆れ顔になる妖精の尻尾、真っ白になって燃え尽きているマカロフ。その他一同も呆れていたり顔を青くしていた。

「いいだろ優勝したんだからっ!!俺にも王様やらせろよ、お前ら子分な!あーっはっはっはっ!」

「返すカボ!!返すカボ!!」

「ふふ……もう、やりすぎなのよ。」

あまりにも突拍子のない出来事に、笑う妖精の尻尾の一同。ドラゴンとの死闘があつた後でも、いつも通りであるナツを見て夢のようにも思えたからであつた。

「でも……流石にあれまですよね、マスター燃え尽きてますよ。」
「……まあ、なんとかなるだろ。」

でもやっぱり、王冠を奪つたことだけは不安を感じざるを得ないのであつた。

そして帰路へと

「色々あったね。」

「何だかんだ楽しんでたもんな……クロツカス。」

「そうね……ちよつとボロ酒場が恋しいわ。」

大魔闘演武を終え、各ギルドへと帰っていくギルドメンバー達。
妖精の尻尾も例外でなく……ただいま馬車に乗って帰路に就いてい
た。

「本当に……色々、な……」

遠い目をするマルク。深く尋ねるべきではないだろう、とウエン
デイは見守ることにしていた。

彼がどうであろうともマルクはマルクなのだ、認識しているから
だ。

『時』か……」

「……」

「 그레이さん?どうかしたんですか?」

「いや……」

外を眺める 그레이。その心はまるでここにあらず、といった様子
だった。その様子を見て、深く尋ねるといったことはする気になれな
かった。

恐らく、本当に聞くだけになってしまふのだから。

「ん……?」

ふと、馬車にかけられたカーテンがなびく。その隙間から、 그레이
は何か気がなったのか、外へと視線を向ける。

その視線の先にあるものを見た瞬間に、表情を変えた。

「止めろ!馬車を止めろ!!」

「どうしたの!?!」

慌てて馬車を止めようとする 그레이。しかし、何かを止めた
のか、手を強く握りしめながら、顔を俯かせる。

「いや……なんでも、ない……」

「……?」

疑問に思う一同。しかし、真剣なその顔からは何も尋ねることは出来なかった。

グレイの中で起きた葛藤に、水を差すわけには、いけなかったからだ。

「……帰るか、マグノリアに。」

「おう。」

「来たぞ！こつちこつち！」

そして、マグノリアに着いた一行。大魔闘演武に出る前と違い、優勝チームを迎えるその歓迎はとても熱烈なものであった。

「皆さん！大魔闘演武優勝ギルドに盛大な拍手を！」

「あ、黄昏の鬼……あのギルド、調子いいなあ……」

「まあ、いいと思うよ？悪い気はしないんだし。」

「そうね、悪くは無いわ。」

呆れ顔になるマルク。しかし、笑顔でウエンディはその歓迎を迎えていた。

「皆さん、応援ありがとうございました。」

「もう、シャキツとしなさいよ。」

「まあいいんじゃないか？応援されてたのはそうだったしな。」

「ま、昔からの付き合いのある人達だけだったけど。」

シャルルの冷静なツツコミに苦笑いになるが、マルクは歓迎してくれている街の人々に手を振る。

時折マルクやウエンディよりも年の小さな子が、大きく手を振っているのを見つけると、そちらを優先的に返していた。

「あら、小さい子好きなの?」

「というか、なんか見ると……ロメオを思い出す。今だとアスカちゃんだけど。」

「まあ、分からなくてもいいわ。あんな感じだったものね。」

「懐かしいなあ……」

そのまま街を一直線に歩いていく妖精の尻尾。すると、ナツが担いでいた袋を下ろして漁り始める。

「みんなにいいもん見せてやるぞ……じゃーん!!」

そうして袋から取り出したのは……国王の冠だった。それに対して、周りにいた妖精の尻尾の面々が顔を青くしていた。

「国王の冠!?!」

「持ってきちゃったんですか!?!」

「あ、違った。これじゃねえや。」

「その王冠王様のですか!?!王様のなんですか!?!」

ナツは周りの声を無視して袋を漁り始める。大丈夫だろうか?と不安になる一同。大魔闘演武に優勝したにも関わらず、ギルドが王関連の罪状で潰されてしまったのは元も子もないのである。

「優勝の証!!国王杯!!」

「す、スルー……で、でも何も言われてないしいいのか、な……?」

優勝して感動しているこの空気、果たして壊していいものなのだろうか。それを思いながら、マルクは何だかんだで感動していた。

「……優勝、か。なんか感慨深いなあ……」

「そうだね……確かに、思うところはあるよね。でも、嬉しい事に変わりはない……よね?」

「ああ……言葉で表せないくらい嬉しいよ……」

笑みを浮かべるマルク。釣られて、ウエンディとシャルルも笑みを浮かべていた。

「えー、コホン。大魔闘演武優勝記念として、妖精の尻尾に町長からの記念品の贈呈です。」

「記念品？いやはや照れるの…そんな気を使わなくても——」

「妖精の尻尾の皆様、こちらをどうぞ。」

そう言つて町長は腕を広げて奥にあるものを見せる。それは、今となつては懐かしいものであった。

「妖精の尻尾は我が街の誉れであります。よつて、ギルドを修繕して贈呈したいと思ひます。」

「ギルドが元通りだー!!」

「あいさー!!」

喜び、驚き……色々な反応を個々がしている中で、マルク達もまた驚きと喜びで修繕されたギルドを見ていた。

「なんだかんだ言つて、妖精の尻尾は愛されてるわよね。」

「そうだね。ずつと……7年間ボロボロになつても、残してくれてたもんね。」

「……ん？」

「どうしたのマルク。」

「……いや、なんでもない。」

とあることに気づいたマルク。確かに、大本である元々使つていたギルドは大体の形を残していた。

しかし、かなり大きな建物なために優勝してからだったとすれば、1日2日そこらでは掃除や修繕が効かない部分の方が多いはず……だが、目の前にあるギルドは、作り直さと言わんばかりに綺麗になつていた。

そして、マルクはとある結論にたどり着く。

「……優勝しようがしまいが、修繕して返すつもりだったろうに。」
「……優勝する前から修繕しておけばいいだけの話なのである。」

たった、たったそれだけの事だが、マルクはそれを理解した瞬間に笑みを浮かべていた。感動と嬉しさ、それが入り交じっているのだから。

「ワシはこの街が大好きじゃあー!!」

マカロフの嬉しさの余り感極まった声が響く。その中で、怪しげな小さな影ひとつ。

「キキツ……」

小さな黒い生物。大鴉レイザンテイルの尻尾にいた、オーブラが使っていた生物だった。

それは、街を駆け抜け抜け近くの森へと走り抜けていき……黒髪の男、黒魔導士ゼレフの肩へと乗る。

「やはり大魔闘演武を見ていたのですね、ゼレフ。」

「声は聞こえず……姿も見えず。だけど僕には分かるよ。そこにいるんだね……メイビス。」

ゼレフの後ろに降り立つメイビス。だが、妖精の尻尾の紋章を入れていないゼレフには、その声も姿も確認することが出来ない。

だが、それでも彼はメイビスがいると判断した。

「7年前、あなたは私の近くにいた。」

「7年間、君は僕の近くにいた……」

「貴方は、まだ自分の死に場所を探しているの？」

「死に場所はまだ決まっている……僕は何百年の間、時代の終わりを見続けてきた。」

人々の争い、憎しみ……悪しき心。新たなる時代において、それらの浄化をいつも期待する。もう何度目だろう……人々は繰り返す、何度でも同じ過ちを。」

「それでも、人は生きていけるのです。」

「だから、幾らか前にこう思ったのさ……人は生きていないよ……本当の意味では。人と呼べる愛しき存在は、もう絶滅している。」

「もう、待つのはやめたのですか。」

「だから、待つのは止めたよ……そうだね、7年も考えて出した結論なんだ。もう、変わらない。」

世界が僕を拒み続けるならば、僕はこの世界を否定する。」

見えないはずのメイビスに向かって、視線と声を飛ばす。会話になっっていない会話、しかし見えない者との会話をしているのだ。

「妖精の尻尾はこの世を肯定するでしょう。」

「これは僕からの贈り物……世界の調和、そして再生。」

「……戦いになるのですか？」

悲しげに、しかしメイビスは凜と声を張りながらゼレフに投げかける。聞こえていないはずなのに。

「でも、それは戦いにはならないよメイビス。一方的な殲滅になると、誰一人として生かしてはおけない。」

君の好きな妖精の尻尾にも…訪れる。外側からか内側からかはわからないけれど…滅びが。」

その答えに、メイビスは少しだけ唇を噛む。だが、すぐにその表情は彼女の見た目にはそぐわない、冷たい表情となる。

「妖精の尻尾が阻止します。滅びるのは…貴方の方だけです、ゼレフ。」

周りの木々が一斉に枯れていく。ゼレフの魔法により、命を吸われたのだ。だが、ふとゼレフは笑みを浮かべる。目の前にいるメイビスすら気づかないほど小さく。

「滅びは誰にでもやってくる…誰かの憤怒によって。仲間内での嫉妬によって。家族の誰かによる強欲によって。強者の傲慢によって…」

「何が言いたいのです。」

「他の大罪は知らない。けれど…全てを食らう暴食の悪魔は、そこにいるんだよ、メイビス。」

せいぜい…妖精の尻尾が食べられないように、気をつけておくといい。」

そう言っつて、最後にゼレフはその場を歩いて去っていく。メイビスは、姿が見えなくなるまで、ゼレフを睨み続ける。

「暴食の、悪魔…」

メイビスは、それをぼそつと呟く。その悪魔は、敵か味方か…その答えにはすぐにメイビスは辿り着く。

だが、味方であったとしても妖精の尻尾に危害を加えない訳では無い。い。

「マルク・スーリア…貴方が、妖精の尻尾の敵にならない事を祈ります。」

「……地下の書齋、結構本が新しくなってる…前のと並んでるのは変わらないのに。」

マルクはレビイと共に妖精の尻尾のギルドの下にある書齋に来ていた。レビイ個人に、頼みたいこともあり着いてきてもらったのだ。「それで、頼みって?」

「はい……ここだけで調べるのは難しいかもしれませんが、悪魔関連の本読もうかと。」

「悪魔?なんでまた……」

「悪魔の心臓グリモアハートのマスター、ハデス……いえ、妖精の尻尾ギルドマスター2代目であるプレヒトが作った土塊の悪魔。」

それがゼレフ関連であることは間違いないですけど、土塊以外にも……大元の悪魔がいるんじゃないかと思っただんです。」

無論、建前である。ジェラールや、ドランバルトに頼んだもの自分で動かないわけにはいかないからだ。

ただ、有名ギルドと言えども1ギルドの1つにそこまで重要な事は書かれていないのかもしれないと、マルクは考えているが。

「ふーん……まあ、でも調べるのはいいことだと思うよ。私もここ使いたかったから読みたいし。」

「あれ、レビイさんってヒルズの部屋に本すぐく置いてませんかでしたっけ。」

「……置けない本も、あるからね。量的に。」

視線を逸らすレビイ。本棚関係で、昔何かあったようだ。マルクも

それが良くわかっておらずただただ首を傾げるだけであった。

「と、とりあえず調べよつか。悪魔だけでいいの？」

「って言うとか？曖昧すぎるから絞って探すか、みたいな話ですか？」

「あー、そうじゃなくてさ。ゼレフ関連を調べないのかなって。」

「……って言われても、ウチのギルドは多分一般で扱われてる本よりも、ゼレフのこと知ってそうな気がしますけどね。」

「……主にナツ達がゼレフ関連とよく会うもんね……」

苦笑いをするレヴィ。ゼレフ書の悪魔やゼレフ本人、ゼレフ書の魔法を使ったりなど色々なゼレフ関連と惹かれあっているナツ達。

それを考えると、ゼレフの事を調べても知っていることが多そう……な気がするという話である。

「じゃあ悪魔だけだね。とりあえず片っ端から見たいこつか。」

「……便利ですよ、その眼鏡。」

「まあね、調べたいこととかある時に便利だよほんと……マルク、使ってみる？」

「いえ、俺が使っても使いこなせない自信があるので……ルーシイさんやレヴィさんは本読むの好きですよ。」

「ルーちゃんはどっちかって言うと言おうと書く……つと、これ喋っちゃダメなやつだった。」

「何か言いました？」

「何でもないよ〜」

本を速読し始めるレヴィ。彼女のつけている眼鏡は、速読ですぐにページを捲つても、本の内容がちゃんと頭に入るといふ不思議のメガネである。

「しばらく待っててねツと……」

そのまま、レヴィに任せてマルクは自分の速度で1枚1枚ページをめくっていくのであった。

クロツカスの街を

「うーん……」

「どうするのよ、ウエンディ。」

クエストボードの前で悩むウエンディ。今出揃っているクエストの中で、何を受けるか悩んでいるのだ。

「モンスター討伐に、草むしり……」

「洞窟で秘宝を取ってこい、って言うのもあるわよ。」

しかし、どれもこれもクエストの難易度が少し高めだったり……ウエンディとシャルルの組み合わせで行くなら、妥当なのが草むしりくらいしかなかったのだ。

「でも、この草むしりって……」

「えーっと……』とある山奥に生えている雑草の一部には、寿命を伸ばすと噂の根っこがある。それを探してほしい』……範囲が山なのね。広すぎるわ!!」

「……あれ？」

「どうしたのよウエンディ。」

ウエンディは、クエストボードにあった一枚の紙を指さす。シャルルもウエンディの肩に乗って、その紙をよく見る。

「見てシャルル。『私の服を着て街を歩いて欲しい』だって。」

「怪しい依頼書ねえ……」

「でも流石に、今の妖精の尻尾を騙そうって人いるかなあ……？」

「まあ、前に受けたのは最弱の時だったものね。」

「とりあえず受けてみよっか。」

「で……男女の2人組が受ける前提だったから、誘ったんだな俺を？」
「うん。でも良かったの？レヴィさんと調べ物してたみたいだけど……」

「気分転換がてらに行つてこい、つてレヴィさんに言われたからな。折角だから、好意に甘えたんだよ。」

依頼にあつた場所に向かうウエンデイとマルク。今は、クロツカスの街を歩いていた。

「ゆつくり見る機会無かつたし…時間があれば3人で歩こうか。」

「そうだね〜」

楽しそうな顔を浮かべるウエンデイ。それを見て、マルクも釣られて笑顔になつていた。

「……つと、ここが依頼にあつた場所だな。」

「し、失礼します！」

ドアをノックしてから、マルクとウエンデイは依頼主のいるところに入る。入つた部屋には――

「あら……あらあらあら。まさか、大魔闘演武に出場してた二人が参加してくれるなんて。」

「貴方が、この依頼を？」

「ええ、ええええええ。そうなのよ。私が依頼主、名前は……カトリーヌでいいわ。」

明らかに偽名なのは確定だ。しかし、依頼主である以上無碍にはできない為、改めて依頼の話をし始める。

「私、所謂デザイナーなのよ。で、今度貴方達くらいの年頃の子達の服を作ろうと思つてて。」

それで……ならいつそのこと着てもらえばいいと思つた訳よ。」

「それなら、名指しの依頼書を出せばよかつたのでは？」

「それでも良かったけれど……他にも色々、色んな年頃の子の服を作つてるのよね。」

だから、誰でもよかつたわけ。」

「なるほど。」

依頼主、カトリーヌは掛けてある服を一つとってそれを2人に見せる。どうやら、それが今回着る服の様だった。

「この服と……こっちの服、この2つを着て街を歩いてちょうだい。それが今回の私からの依頼よ。」

「わ、分かりました。」

少し食い気味に話してくるカトリーヌ。しかし、服のデザインは存外までもであり、2人が素直に可愛いやかっこいいと思える服だった。

「ちゃんと衣装部屋も用意してあるから。」

「はい。」

こうして、2人は服を着て移動することになったのであった。因みに、シャルルが来るのは予想外だったらしく、彼女の服は用意されなかったらしい。

「まったく……エクシード用の服も欲しいものだわ。」

「ハッピーってすごいや服着てないな……」

「そう言われてみれば……」

クロッカスの街を歩くウエンデイ達。大魔闘演武の時も歩いていたが、あの時は色々あって、ちゃんと見れていない店なども多くあった。

「あ、そのケーキ屋さん寄ってもいい？」

「練り歩くなら何してもいいって言ったもんな……しかもこの服、報

酬とは別にくれるみたいだし。」

「太っ腹だよね〜……」

そう言いながらケーキ屋に入店する3人。席は空いていたので、簡単に座ることが出来た。

「美味しそうだなあ……」

「高い……って程でもないか。丁度いい値段だ。」

「まあ私は、紅茶に合うケーキがあればそれでいいわ。」

和気藹々とする3人。その姿を、影からじっと眺める者がいた。マホーグである。

「……」

その視線は獲物を射殺すかのような目をしつつも、根底にはマルクのことだけがあった。

おかげで、その異質さを目の当たりにした町民が全てそこを避け始めていたが。

「っ!？」

「マルク?どうしたの?」

「い、いや……なんか、悪寒が……この服別に薄着って訳でもないのに……」

「風邪でも引いた?」

「そんなことは、無いと思うけど……」

その悪寒の正体分からないまま、とりあえずウエンデイ達はそのケーキ屋を後にするのだった。

そして、今度はとある場所に立ち寄る。

「劇か……」

「あ、今ラブストーリーやってるんだって!見に行かない!？」

「ウエンデイがいいなら、俺はどこにでもついて行くよ。」

「でもあんたこういうの疎そうよね。」

「いやいや、きつとそんなことないって……」

道すがら、見つけた劇を見に行くことにした3人。ウエンデイも少女なので、恋愛ものなどの話にはどうにも滅法弱いようだった。

「……」

「マルク? どうしたの?」

「いや……劇一覧に書いてあった『1分の過去や未来』ってタイトルが妙に引っかかって……」

「うーん……どんなお話なんだろう。」

「ちよつと気になるわね……」

建物内の廊下を歩いていく3人、ふと気づくと目の前に見慣れた赤毛……否、紅の髪の色が目に入る。

「……エルザさん?」

「ん? おお、なんだお前達か。なんだ、劇を見に来たのか?」

「ええ、まあ……依頼内容でここら一体を歩いてほしいって依頼だったんで。」

「……ウエンデイ、ウエンデイ。」

ウエンデイに手招きをするエルザ。首を傾げながらも、ウエンデイはエルザに近づく。

すると、エルザはウエンデイと共に少し離れた後に耳打ちで話し始める。

「……ウエンデイ、デートの誘いはもう少しストレートな方が相手に伝わりやすいぞ。」

「ひゃい!? う、嘘じゃありませんよ! 本当にそういう依頼なんです!! 2人で受けに行っただんですよ!!」

顔を真っ赤にするウエンデイ。エルザがなんと言ったのか、マルクには聞こえなかったが、どうにもエルザが依頼内容を疑ってる事だけは伝わってきた。

「ウエンデイー、どうしたー?」

「へ!? う、ううん! 何でもないよ!!」

しかし、疑っているだけならば、ウエンデイがあそこまで大きな声を出すことはないと思いますので、とりあえずマルクはウエンデイに声をかけた。

「……本当なのか? いや、すまない……ウエンデイが嘘をつくとは思っていないんだが、その依頼内容が不可思議すぎてな……」

「……正直、簡単すぎるなあって思っています。この服を着ながら

…というのを含めても、簡単すぎますし……これで本当にいいのかわかって。」

「指定された服を着ながら…か。依頼主がどんな人物か、聞いたか？」

「は、はいデザインーさんだと。」

エルザは、それで納得したのか少し笑みを浮かべる。ウエンデイはその理由がわからないので、また首をかしげていた。

「なら仕方ないな。私が昔受けたクエストにも、デザインーがいたが…やはり、変なクエストを出す人物だったよ。」

「え、で、デザインーさんってみんなあなんですか？」

「あれは、自分の世界を他人に表す職業だからな。多少違和感のある依頼の方が多いだろう……しかし、悪い者はいないはずだ。」

微笑みながら、明後日の方向を見るエルザ。過去にやはりデザインーが出した依頼を受けたのだろう。

どこか、嬉しそうな表情だった。

「さて、ウエンデイ達も見るとなら一緒に劇を見るとしようか。」

「は、はい！マルク、行こう!!」

「……俺おいてけぼり感あるなあ。」

「今更でしょ……」

そのまま、ウエンデイ達のところに向かうマルクとシャルル。どうにも、シャルルはウエンデイとエルザが何を話していたのか分かっていられしく、エルザとのことを会話にしていた。

「……ウエンデイと何話してたんですか？」

気になるので、マルクはエルザに聞こうとするが、エルザは自分の唇の上から指一本立ててジェスチャーをする。普通ならば『静かに』という意味合いのジェスチャーだが、このタイミングで行うということとは『話せない』の方の意味合いが強い。

つまり、何を話していたかは秘密ということである。

「……気になるなあ……」

ぼそっと呟くマルク。しかしそれを呟いても話の内容がわかるはずもなく。少し気になりながらも、劇を見に行くのであった。

「……まさかあんなに感動するとは。」

「ああ、良かったな……」

「ま、まあまあじゃないかしら……」

「シャルル、泣いてるよ……」

感動して、涙を流す一同。劇の内容が、とてもいいものだったのも相まって、かなり満足出来ていた。

「……つと、もう夕方か。3人も、クエストはいつまでするんだ？」

「……そう言えば、いつまでか聞いてない……」

「でも、そこまで長い間しろ、ってわけじゃないでしょう。一旦戻ってみない？」

「そうだな……エルザさん、ではまた後で。」

「うん、お前達も気をつけてな。」

そして、その場でエルザと別れた3人は一旦依頼主のところへと戻っていく。夕日に照らされるクロツカスもまた、綺麗な街並みながまた少し感動できるところであった。

「……で、戻ってきたわけだけど。」

「置き手紙だけが置いてある……」

「とりあえず読んでみましょ、私達宛じゃなかったら問題ないだろうしね。」

「それもそうだな……えーつと——」

『拝啓、ウエンディちゃんとマルクくん。』

この手紙を読んでるってことは、仕事終わってここに帰ってきてるのね。だいたい夕方くらいかしら？

戻ってきているのなら、多分クエストの話ね。既に報酬は妖精の尻尾の方に預けてあるわ。後で誰か大人の方と一緒に引き出してもらいなさい。

服もあげるわ。私はこれでも仕事が忙しいのよ、だから貴方達にちゃんと渡せなくてすまないと思っっているわ。

又機会があったら仕事、頼むわね。』

「――だって。」

「妖精の尻尾に振り込まれてる……?」

「まあ、少し面倒になっただけね。払われないよりはマシよ。」

手紙を読んだ後に、少し首を傾げるマルク。というのも、疑問に思っているのだ。『何故戻ってくるのが夕方』という前提で置き手紙を出しているのか、ということである。

「……どこかで見えた? いや、まさかな……」

「マルクー? どうしたの?」

「早く帰らないと夜になっちゃうわよー」

「分かってるー!」

とりあえず、そのことは一旦頭の隅に置いてからマルク達はギルドへと戻るのであった。

「ミラさーん、昨日やった仕事の報酬振り込まれてるって話なんですけどー」

「電話で聞いているわよ。でも、2人ともどんな仕事したの?」

「へ？依頼書見せた奴ですけど……」

ミラは、少し困り顔になりながらとあるトランクを取り出す。どうやら、昨日の間に引き出してきていたらしい。

だが、問題は報酬を払って使われているのがトランクという点である。

「……これだけ、あるんだけど。本当に街を歩くだけ？」

「へ……えー……はへえっ!？」

札束、札束、札束。トランクいっぱい、札束がぎっちり詰め込まれていた。確かに、この報酬額は破格すぎた。

「で、でも依頼書に書いてあった報酬額とは違うような……」

「それがね……向こう側が『思った以上に成果を出せた』って言うて……上乗せしてきたのよ。」

「10……100……1000倍？」

困惑するマルク。ウエンディに後で報酬額を渡すつもりで、先に受け取りに来ていたのだが、頭の中で大量の数字が飛び交っていた。

「あーマルク!!ちようど良かった!!」

「る、ルーシイさん?き、聞いてください1が100とか10000になりました……」

「へ、何を……うわ何このお金!?ってそうじゃなかった!!これ見なさいよ!!今週の週刊ソーサリー!!」

ルーシイは慌てながら、週刊ソーサリーのとあるページを開いてマルクに見せる。

マルクも最初は、なんなのかよく分かってなかったが、開かれたページには見覚えのある服を着た男女が映っていた。

「……『今の流行りはこれ!かわいい系コーデとかっこよさでカップル度アップ!』……?」

「これ、まさか……」

「そうよ!目線入ってるけどこれあんた達じゃない!!しかもこれ超有名ブランドの!!」

「……ま、まさかデザイナーって言うてたけど……昨日の依頼主って……」

「多分そうよ!!」この社長は顔を出さない事で有名だから、あんた達顔を見たことになるのよ!!」

顔を見せない社長の素顔、とんでもない大金の報酬額、隠し撮りされていた事実。

それらが相まって、マルクの頭はオーバーヒートしかけていた。だが、これだけは伝えておきたかったのか、ミラに視線を向けて一言。

「お金……預かっててください。」

「そうね、流石に……ね。」

冥府の門編 心機一転

「……勝手に上がっていいもんなんでしょうか。」

「ナツやグレイも上がっているが、口だけの文句で済んでいる。」

「それ多分、あとから気にしなくなってるだけで、普通にその場では怒ってると思いますよ。」

とある仕事を終えたウエンデイ、マルク、エルザ、シャルル。帰りにエルザが、ルーシイの家に行こうと言い出しそれ自体は3人ともOKしていた。

だが、エルザは当然のごとく窓から入ってそれに何とか続く形で他の3人も入っていた。

因みに寄った理由としては、報酬でもらったケーキがかなり多かった、というもので所謂お裾分けである。

「にしても、最近仕事の依頼増えてきてませんか？今回の依頼とかもそうですけど…特に、指名する人も増えてきていて。」

「確かにそうね、私は大魔闘演武に出場してないからそういうこともないけれど…ウエンデイも指名で来てたものね。」

「病院の手伝いなんて滅多にしないから、あの時は大変だったなあ……」

「エルザさんも何度か指名来てませんでした？」

マルクが話を振る。エルザは少し自慢げにうんうんと頷きながら、その目はキラキラと輝いていた。

「洞窟のモンスター退治、超巨大モンスターの退治、山賊に海賊、拳句の果てには犯罪組織……全部倒してきたぞ。」

「全部討伐系……というか犯罪組織って何ですか。」

「ふっふっふっ……」

余程報酬がお気に召したのか、はたまたその倒した記憶が嬉しいのか、エルザはものすごく自慢げな顔になっていた。

「そう言えば、この間雷神衆の皆さんと依頼受けに行っただですよ。」

「珍しい組み合わせだな……どんなクエストだったんだ？」

「そうですね、たしかその時の内容は――」

マルクが依頼内容を語ろうとしたその時、部屋のドアが開く音が聞こえる。どうやら、家主であるルーシイが帰ってきたようだ。

「おかえりなさい。」

「邪魔をしているぞ。」

「お邪魔してます。」

「なんか懐かしー!!」

ツツコミを入れるルーシイ。自分の家に、知らない間に誰かが入っていた時の反応ではない。

どれだけ昔から勝手に入られているのだろうか、マルクは内心そう思っていた。

「すみません、勝手にお邪魔しちゃって。」

「中々いい部屋じゃない。」

「報酬で貰ったスイーツだが……ちよつと私たちでは多すぎてな。お裾分けに来たというわけだ。」

「わぁありがとう!」

切り替えが早いのか、はたまたスイーツに釣られたのか。マルクはルーシイが偶に見せるチョロさに、何だかんだ凶太さを見ていた。

「じゃあ仕事上手くいったんだね!」

「え、まあ……」

「……そう、ですね……」

「バッチリだ。」

再び自慢げな顔を見せるエルザ。仕事内容は、劇団の劇の手伝いだったのだが……まあ、失敗もいいところであった。

何故か向こうは感謝していたが。

「それより、ハッピー達はまだ帰ってきてないの?」

「あ、そう言えはいませんね。」

「簡単な仕事って言ってたのに……遅いね。」

「馬鹿な……もう3日も経っているんだぞ。」

ナツとグレイの2人だけという珍しい組み合わせ。よく喧嘩をす

る2人が、珍しく一緒にクエストを受けたので、妖精の尻尾全員が驚きながらも送り出したのはよく覚えていた。

「近場のはずだから、ちよつと見に行ってみようか。」

「別に心配してるわけじゃないんだけど……」

「そうだな……あの二人の実力でこれほど遅いとなると、些か気になる。」

「何かトラブルでもあったんですかね？」

「とりあえず……行きましょう。」

「待つて!!あたしも行く!!」

こうして、帰ってこない2人を迎えに行くために5人は迎えに行くことになった。

ただ、全員が少しだけ思っていることがあった。『喧嘩をしているのではないだろうか』と……

しかし、2人とも既に何度も死線をくぐり抜けてきた仲であり、流石に喧嘩を優先するほど子供でもないだろうと……そうも思いながら向かっていくのであった。

そして、依頼場所に到着する……が、一同の目の前には巨大なモンスターが倒れていた。

「でかつ!!」

「これは……」

「依頼書のモンスターです!!」

「普通に倒されていますね……って事は……いや、まさか3日も連続で

……？」

絶句している一同の茂みから、音が鳴る。そこから現れたのは、木の棒を杖替わりにして歩いているハッピーであった。

「シャルルウゥ……助けてえ……」

「ハッピー？」

「どうした、何があった。」

「それが……」

エルザがハッピーの側により、ハッピーに事情を聞こうとする。しかし、それ割も先に一同の耳に聞こえてくる声があった。

「いい加減にしろよクソ炎!!」

「それはこっちのセリフだ馬鹿野郎!!」

グレイとナツの声であった。その声は、仲良くしてるそれとは程遠い……完全に喧嘩をしている様子だった。

「てめーが考えなしに突っ走るから……!!」

「てめーがモタモタしてっから……!!」

殴り合いながら文句を言いづける2人。既に顔はぼこぼこに腫れ上がっており、見るからに長時間の殴り合いを続けているようだった。

「ああ……なんだいつもこの事か。」

「心配してたのに……」

「清々しい程に予想通りでしたよ。」

呆れる一同。この2人の喧嘩はいつもの事だが、今回この2人にハッピーという組み合わせだったので、止めるものがいなかったのだ。

「3日もこれ続けてんの？」

「寝たりぐ飯食べたりはしてるよ……」

「あら、可愛らしい喧嘩ですこと。」

シャルルがそう呟くが、当然皮肉である。そして、軽くため息をついたあと、エルザが2人のそばによって笑顔で語りかける。

「こらお前達、その辺にしないか。」

手を叩いて、2人に静止を呼びかけるエルザ。しかし、喧嘩をして

いるので当然2人は今は気が立っているのだ。

声をかけたものに、無差別に殴り掛かるほどに――

「――うるせえ!!」

2人は、ほぼ同時にエルザに殴っていた。顔を、1回で狙えるほどに。当然、2人はすぐにエルザを殴ったことには気づかない。

そして、エルザ以外にこの場にいた面々は恐怖と驚きで一瞬で満たされた。エルザがこのようなことをされて、キレるはずがないからだ。

「……ほう?」

「エルザー!」

「なんでここにー!」

全ての原因は、ナツとグレイにあり。故に、エルザからの折檻を受けている2人を庇うことは出来ない。

というよりも、単純にキレてるエルザがとてつもなく怖いだけなのであった。

「「あはははははっ!!」」

妖精の尻尾で。ナツとグレイを連れ戻してきた一同は、一旦ギルドに戻ってきていた。

そして、ナツとグレイの話をすると思いの種にされていた。

「仕方ねえなあ二人とも。」

「もうこいつとは行かねー」

「こつちから願い下げだ馬鹿野郎。」

「二人ともガキじゃないんだから……」

ロメオは呆れていたが、それで収まるほど2人は仲良くできていない。最早この二人の仲の悪さは、笑い話になるほどであった。

「ナツ！グレイ！またお主ら2人を指名じゃ!!」

「またかよ!!」

これを聞いて、ルーシイは1人納得していた。この指名があったからこそ、ナツとグレイという水と油の組み合わせがクエストに行っていたのだと。

「せっかくの指名だ！今度は仲良く行ってこい。」

当然といえば当然だが、エルザも未だ怒っているのだ。だが、いつもならこうなったエルザを前にするとナツとグレイは、萎縮して表面上は仲良くするのだが、今回ばかりは違った。

「もうこいつとは行かねーぞ。」

「俺も行かねー」

「触んな!!」

また喧嘩を仕掛ける2人。だが、エルザが睨みをきかせているおかげか、その程度ですんでいた。

「む？むむむ……？」

「なんだよじつちゃん。」

「い、いや……行かねばならぬ。そして、絶対に粗相のないようにせよ……」

いつになく真剣なマカロフ。その真剣さに何かを感じ取ったのか、ナツもグレイも黙っていた。

「依頼主の名は、ウォーロッド・シーケン、聖十大魔道序列四位であり、イシユガルの四天王と呼ばれる方々の1人じゃ……!」

そして、これを聞いて妖精の尻尾中が大騒ぎになり始める。何せ、あのジュラよりも上の聖十大魔道からの依頼。

本来、ギルドに依頼を頼むことが必要なのかさえも、分からないほどの強者。故にイシユガル四天王。

「一体……何が起こってるんだ……!?!」

「じよ、序列四位って……」

「ラミアのジユラさんよりも上…要するに、ジユラさんでさえ叶わない相手ってことになるけど……」

「イシュガル四天王が依頼ってなにごとだよー！」

クエスト内容よりも、ただ頼んできた人物だけで妖精の尻尾は大荒れであった。

一体これから何が起こるのか……誰も想像ができなかった。

そして、ナツとグレイは件のイシュガル四天王のところへと向かう。だが、その付き添いとしてルーシイ、エルザ、ウエンディにマルクが来ることとなった。無論、ハッピーとシャルルも一緒である。

「のどかなところですね。」

「うん、空気も美味しいし。」

「風も心地いいな。」

「なんか、ピクニックみたいで楽しいよね。」

「そうね。」

一同は、道中を楽しんでいた。野ウサギや、野鳥などが自由に動き回れ、尚且つ人の手が、ほとんど加わって無さそうな場所だった。

だが、一同が楽しんでいる中マルクは、後ろを見て呆れ顔になっていた。

「まあ、あれがなかったら俺もそんな気分だったかもな……」

「そうね、全く同じことを考えていたわ。」

マルクの視線の先、そこにはナツとグレイがいた。先程まで中が悪かった2人が、当然仲良く移動しているわけもなく……

「俺の肉食つただろお！」

「テメエのもんなんか食うかよ!!」

「てか服着ろよ!!」

「髪の色が目についてえ!!なんとかしろよ!!」

「……ほとんど言いがかりレベルの喧嘩ですなあれ。」

呆れ返る一同。いい意味でも悪い意味でも変わらないのは結構な事だが、全魔導士の中でも、トップクラスの実呂を持つ魔導士に会いに行くのですらこうなっているのだ。

中々、これはその人に見せるには厳しいものがあるだろう、と一同は感じていた。

「おまえたち、いい加減にしろ。これからとても位の高い人に会いに行くんだぞ?」

「2人だけじゃ心配だからついてきたけど……先が思いやられるわ。」
呆れていたルーシイだったが、ふと何かを思い出したかのように喋り始める。

「聖十大魔道つて言えば、評議院が定めた大陸で最も優れた魔導士10人……だっけ?」

「そうだ、ウチのマスターやラミアのジュラもその1人だ。かつては、フアントムのジョゼやジェラルもその称号を持っていた。」

中でも、序列上位の4人はイシユガルの四天王と呼ばれる第魔導士だ。」

「イシユガル?」

聞きなれない名前に、聞き返すウエンデイ。少なくとも彼女の記憶には、イシユガルという名前の地名はなかったからだ。

「この大陸の古い名だ。」

「そんなすごい人がなんで……あんなのをご指名で……」

ルーシイ達は再びナツ達の方に視線を向ける。口論に飽きてこないのか、未だに口論を続けていた。

「てめえなんかエルザに食われちまえ!!」

「てめえこそエルザの糞にまみれてろよ!!」

「……今、わたしがデイスられているのか。」

「ほらほら！もう喧嘩やめてくださいよ二人とも！流石に、序列四位の人の目の前で喧嘩なんてしてたら……何が起こるかわかりませんよ!!」

マルクが仲裁に入る。その一言で、ぴたつと口論が――

「てめえ俺の服どこに持って行きやがった!!」

「てめえが勝手に脱ぎ捨てたもんなんぞ知るかよ!!」

止まるわけもなかった。少し考えたあとに、エルザ達の方に振り返るマルク。先に少しだけ進んでいた。

そして、意を決して2人の近くに行く。

「……エルザさんがそろそろブチ切れますよ。」

「……」

ぴたつと喧嘩が止んだ。それを見てから、マルクは走ってエルザ達と合流する。

目指すは序列四位ウォーロード・シーケンが住まう家である。

ウォーロッド・シーケン

聖十大魔道序列四位、イシユガルの四天王と呼ばれるウォーロッド・シーケン。その彼が、妖精の尻尾フェアリーテイルに依頼をした。

ナツとグレイを指名していたが、あの二人だけでは心配という事で、ルーシイやエルザ、ウエンディとマルク、そしてシャルルとハッピーが着いていくことになった。

そして、のどかな平原を超えた先にウォーロッドの家は、存在していた。

「ごめんください、魔導士ギルド、妖精の尻尾の者です。」

「……しー、静かに。」

家の中は、大量の草木が育てられていた。余程の植物好きなのか、水をやりながら、低い声で喋り始める。

「草木は静寂を好む……理解したなら、その忌々しい口を閉じよ。」

ルーシイ、ウエンディは口をきつと手で覆う。他の者も口を閉じてじつと黙っていく。

「……なんてな。」

と、声が聞こえた瞬間。辺り一面に花が咲き始める。しかも、一瞬で大量に、である。

「冗談じゃよ、冗談！ぷふー！草木も花も人間の声は大好きなんじゃ!!わはははは!!」

急に高い声で喋り始めるウォーロッド。そのいきなりの変容に、一同は驚いていた。

そして、そのウォーロッドの見た目は……木だった。

「いやあ、よく来てくれたね。妖精の尻尾の魔導士達よ。ナツ君とグレイ君というのはどちらかね?」

そう言いながら、ウォーロッドはハッピーとシャルルを手に乗せて驚いた表情を見せる。

「ややつ！予想より猫っぽいな!!」

「……」

「冗談じゃよ、冗談!!わはははつ!!ぷふつ……」

ウォーロツドの余りのテンションの高さに、一同は段々と呆れ始める。というか、疲れ始めていた。

「テンションの高いおじいさんね……」

「う、うむ……」

「おっと、喉が渴いた。うはははははっ!!」

喉が渴いた、と言いながらウォーロツドはじょうろの水をそのまま口に流し始める。正直、テンションが高すぎて異様にしか見えなくなってきた。

「ああああ……」

「何だこのじいさん……なんだ、なんなんだ……」

「失礼ですが、貴方が聖十大魔道のウォーロツド・シーケン様ですか？」

話を切り替えようと、エルザがウォーロツドに問いかける。その質問に対し、ウォーロツドは真剣な顔で返事をする。

「いかにも！ワツシこそがウォーロツド・シーケン……冗談だけだな。」

「えーっ!？」

「……というのは冗談じゃ。」

ルーシイとウエンデイがずっこける。エルザも肩透かしをくらったのか、軽くずっこけていた。

「……疲れるじいさんだ。」

一同は、1度外へ出て話し始める。外にはテーブルと人数分の椅子

があつたので、全員が座りウォーロードの話聞いていく。

「ワツシは引退してから、ずっと砂漠の緑化活動を続けてきた。」

「引退？ウォーロード様も昔はギルドに？」

「はっはっはっ！いいギルドじゃったよ。」

ワツシは、緑の魔法を持って砂漠の広がり食い止める。慈善活動といえは聞こえはいいが、実はただの趣味じゃ。」

「趣味でも、素晴らしいことだと思いますけど？」

「ありがとう、そう言われると悪い気はせん。」

……そんなわけで、何年もあちこちの砂漠を旅しておるのだがね。この前奇妙な村を見つけてのう。文献によれば、そこは『太陽の村』永遠に燃え続ける炎を守護神とし、信仰していた村だった。」

「永遠に燃え続ける炎？」

『炎』という単語にナツは引っかけかりを覚える。つい最近、長く燃え続けている炎に出会ったような気がしたからだ。

「そう……だが、その村は凍りついていた。天災なのか人災なのか……人も動物も植物も、建物も川も……村を守護する永遠の炎さえも凍りついていた。」

「炎が凍りついて!？」

「そんな……」

本来、そのようなことはありえない筈だが、ここに来てまで冗談を言うわけもないのか、茶化すことは無かった。

となると、とんでもない氷の魔導士がその村を凍らせたことになる。

「その村で何があつたのかはわからん。だが、氷の中で村人は生きておった。」

「氷の中で、生きてるなんて……」

「どういうことなの？」

「生きた村人が凍りついている。放つてはおけん、その村を救ってほしい……それが、ワツシの依頼じゃ。」

「なるほど！それなら簡単だ!!俺の炎で全部の氷溶かしてやる!!」

ナツは乗り気だったが、グレイはいまいち乗り切れなかった。氷を

溶かすのが仕事ならば、凍らせるグレイは役割がないと言われていたようなものである。

無論、それがただの氷ならば、の話だが。

「そういう事なら俺はいらねえだろ。」

「いいや、あれはただの氷ではない。きっと君の力も必要になる。」

「……………」

『ただの氷ではない』という言葉に疑問を抱くグレイ。だが、依頼である以上断るわけがないので、それ以上は追求しなかった。

「…………お言葉ですが、ウォーロッド様。貴方ほどの魔導士ならば、ご自分で解決できる事件では…………」

突然、エルザが声を上げる。聖十大魔道が依頼するというのならば、S級ほどでないにしろ、それが聖十大魔道に解決できない事案という事である。

しかし、凍った村をどうにかする…………というのは聖十大魔道ならば、簡単に解決出来るのではないか？エルザはそう思っていた。

「ふむ…………君達は、何か勘違いしているのかもしれない。」

「勘違い？」

「ああ…………聖十大魔道と言えど万能ではない。評議院勝手に定めた10人に過ぎん。」

この大陸には、ワツシ以上の魔導士は山ほどいるし、大陸を出たらそれはもうワツシとても小さな存在。

現にワツシは攻撃用の魔法はほとんど知らぬ。若者と武力で争つても、勝てる自信もない。」

「ですが…………」

「誰にも、得意不得意はある。それを補い合えるのが仲間、ひいてはギルドであろう。」

ニッコリと、微笑みながらウォーロッドはそう答える。そう、誰にでも不得意なことがあるのだ。だからこそその仲間、だからこそそのギルドであるとウォーロッドは答えたのだ。

「…………仰る通りです。」

「その依頼引き受けた！」

「おう！」

「あたし達に任せてください！」

やる気を出す一同。先程まで喧嘩をしていたナツやグレイまでもが、拳を合わせてやる気を出すほどに。

それを見て、ウォーロッドは満足げに微笑む。

「それでその村はどこにあるんですか？」

「ここから二千kmほど南じゃ。」

「馬車乗り継いでいかないと厳しそうですね……」

「なーに、移動くらいは手伝ってやろう。そこに集まって、荷物も忘れんようにな。」

ウォーロッドが、杖で指した場所に集まる一同。何が起ころのかと、ワクワクしながらも緊張していた。

「回れ右……というのは冗談じゃ。」

「「オイ!!」」

そう言われたから、つい回れ右をしてしまった一同だったが、ウォーロッドは冗談好きというのをすっかり失念してしまっていた。

「……………」

「何か生えてきた……」

呪文を唱えていくウォーロッド。すると、足元から芽が生えていき、それがだんだんと大きくなっていく。それは、その場にいた妖精の尻尾のメンバー一同を、全て乗せることが出来るほどの大きさだった。

「え？」

「なにこれ…!？」

「うわっ……!？」

「頼んだぞ……妖精の尻尾の若者達よ。」

芽は大きくなり葉となる。そして弦は幹となり、それらがまとまって木となって行く。

それは加速度的に大きくなっていき……ウォーロッドの家から離れるのは一瞬だった。

生えた木は、凄まじい速度でその巨体を伸ばして一同を運んでい

く。

「早っ!？」

「すげえけど確かにはええ!!」

喜んでいいのか、驚いているのか……それすら判別できないくらいには、テンションが上がっていた。

伊達に、聖十大魔道という選ばれた10人の中でも、序列四位という地位に選ばれた者の魔法である。

「まるで乗り物ですね。」

「落ちるわよ。」

「……思いの外落ち着いてるなウエンディ。」

「シャルルと一緒に飛んでる時……よりは早いけど、でも純粹に驚きの方が強いから……かな?」

かなりの速度で飛んでいるので、向かい風が凄まじく髪の毛が揺れる揺れる。

だが、やはり感動もあるのだろう。これほどまで強力な魔法……大自然を操る魔法というのは、類を見ないからだ。

「これと列車どつちが早いんだろ……」

そう呟くマルク。真面目に考えても、素人にはわかるはずもないのだが、それを考えたくなくなるほどには早かったのだ。

「何分くらいしたらつくんだろ?」

「……案外、10分もかからなかったりしてな。にしても、本当にすごい人だな。木をここまで正確に、しかも早くでかく使える魔法なんて……」

「ラキさんとか、ドロイさんも似たような魔法使うよね。」

「あの二人には悪いけど……うん、文字通り桁が違うよ。」

「着いたのか…？」

「あつという間だったな。」

「すごい魔法ですね。」

木が降り立った場所、一同はそこに足を踏み入れる。その辺はまだ凍ってはいないのだが、少しだけ肌寒く感じる程度であった。一人を除いて。

「……」

「マルク？どうしたのそんなに震えて……」

「い、いや……大丈夫……」

「顔真っ青だぞ？お前大魔闘演武の時に、氷の滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーと戦ってから、寒さに弱くなったんじゃないの？」

顔を真っ青にして震えるマルク。彼自身も、なぜ自分が震えているのか理解出来なかったが、この場がとても不快感あるものだとは何故か感じていた。

「寒くは、無いんです……ただ、ここにいると不安になるというか…恐怖を感じるというか……」

「私は何も感じないけど……」

「ここで休んでいくか？」

「い、いえ……行きます。」

この場にできるだけいたくないのと、自分だけ何もしないと云うのが嫌になり、マルクは頑張って一同について行くことにした。

「見て、岩肌が凍りついてる。」

「村はこの先ね……」

道を進んでいくと、次第に凍っている面積が大きくなっていく。そして村が見えてくる頃には、辺り一面氷の世界だった。

しかし、肌寒さは変わらなかつたので普通の氷ではない、と改めて思い知らされた。

「本当に建物も何もかも凍りついてる。」

「何があつたんでしよう…」

「ウォーロツド様の話では人も…ということだったが…見当たらないな。」

入った村を探索する一同。しかし、巨大な建造物ばかりが見えてくるだけであり、村人というのが一向に見えてこない。

「て、ていうかこの村…建物デカすぎじゃないですか？」

「うん…大きいものを作るのが、好きな村の人達だったのかな。」

「…ん？」

何かに気づいたナツ。隣にあつた巨大なものを恐る恐る見上げる。それにつられて他の者達も視線を上にあげる…そして、真実が見える。

見上げた巨大なものは…巨大な人だったのだ。

「でかー!!でかっ!!でかっ!!でかっ!!ちつき…でかー!!ここは巨人の村なのかー!？」

「あの…今、私の方見て何か言いました？」

巨人、巨人、巨人、ルーシイの胸、ウエンデイの胸…それらを見ながら、ナツは驚き続けた。

『そう言えば大事なことを伝えるのを忘れていたような…冗談だけど』

「とか、あの人は思ってるんでしょね…」

「…まあ、巨人の村つてのも確かに驚きだけど、やっぱり氷漬けつてのがな…」

「驚いたな…こんなに大きい人間がいるとは。」

ナツ程でもないが、やはり驚く一同。巨人というのも、この世界にひいるものなのだ、しみじみ感じていた。

「犬も大きいです。」

「犬、なのかしら…」

「少なくともこの見た目で猫はないだろう。」

「とにかくはえーとこ助けてやらねえとな！俺の炎で溶かしてやらア!!」

「ナツー！頑張れー!!」

自分の炎で氷を溶かそうとしはじめるナツ。だが、どれだけ炎を当てても、その部分すら溶けることは無かった。

「どうなってんだこりゃあ……」

「あい……」

「木のじーさんが普通の氷じゃねえ……って言ってたけど……」

氷を触るグレイ、その異質な氷を前に、違和感としか言いようのないものを感じていた。

「なんだ、この氷の感覚は……今までに感じたことの無い魔力。」

「お前の魔法でも溶かせないのか。」

「そう簡単にはいかないかあ……」

「ま、まだ魔力を感じるなら……俺の魔力を使えば……」

魔力を奪えば、例えどんな氷であっても溶けるだろう……と考えたマルク。その手に魔力を込めて、巨人の足にくつつける。

「いっつ!?!」

激痛を感じて、後ずさりをするマルク。その手は、あの一瞬で真っ赤になっていった。

「ま、マルク大丈夫!?!」

「あ、ああ……なんで、こんな痛いんだ……?」

「俺が触った時は何ともなかったんだがな……」

「まあ、マルクは特殊だからな……何かあるのだろう。」

「——おや、先客か?これは参ったね。」

唐突に聞こえてくる声、見れば後ろには三人の男が立っていた。

「超女子供ばかりだと?」

「ドゥーンドゥーン。」

突如現れた3人の男。この男達の正体、そして氷漬けになった村人、巨人の村……後者2つに驚きながらも、あとから現れたこの3人と妖精の尻尾一同は睨み合うのであった。

トレジャーハンター

聖十大魔道、序列4位の座にいるウォーロード・シーケン。彼からの依頼を受けたナツ達は、彼が向かったという氷漬けの村に行くことに。

その村は所謂巨人の村だったのだが、ナツの炎では氷は全く溶けず、またグレイが触っても何も起こることがなかった。

この村に来てから、悪寒が止まらないマルク。『氷が未だ溶けていないのは、氷に魔力が籠っているのでは?』と考えた彼が、氷の魔力を抜こうとしたが、触るだけで激痛が走る。

どうしようかと悩んでいたその時、突如3人の男が現れたのだ。た。

「トレジャーハンターギルド…」

「シルフラヒリンス風精の迷宮。」

「ドゥーン。」

その名を言った男達だったが、ナツ達の反応が全くなかったのを、聞こえていないと判断したのか、顔を見合わせてからもう一度、突如現れた風として表情を戻す。

「トレジャーハンターギルド…」

「風精の迷宮。」

「ドゥーン。」

「いや、分かった。」

単純に、唐突に出てきたせいで反応に困っただけであり、聞こえていなかったと言う訳では無いのだ。

「トレジャーハンターギルドって…」

「まあ、名前の通り……だと思う。」

「宝探しが専門って所かしら。」

「悪いが、ここに眠る宝はウチらのもんだ。邪魔は勘弁な。」

向こうの1人が発した言葉に、ナツ達は首を傾げる。宝がある、とは聞かされてないからだ。別段、あれば取りに行くという話ではないが。

「宝？」

「んなもん興味ねえよ。」

「永遠の炎狙いじゃねえのかよ!!」

「じゃあ魔導士がどうしてこんなところに超いるんだ!!」

「この氷を溶かして住人を助けに来たんだ。」

ハッピーの台詞に、向こうの三人は顔を見合わせる。だが、すぐに顔をこちらに向け直す。

「それを邪魔っていうんじゃないか!!」

「ドゥーン!!」

「はあ……?」

ちよつと意味がわからない、と言わんばかりに首を傾げるマルク。というよりも、相手側に少し呆れ始めているのだ。

「永遠の炎は何百年も燃え続ける幻の炎よ。俺達トレジャーハンターの間じゃあ、超S指定されてる超お宝だ。」

「けど、村を守る巨人達のせいでお宝には近づけなかった。」

「それがどういう訳かドゥーンって凍っちゃまっただろ?」

「今が永遠の炎を狙う絶好のチャンスってわけ。」

トレジャーハンター達は目的を唱える。が、その目的に流石にこちらはいい顔をしなかった。

永遠の炎は、所謂この村の守り神的存在であり、それを奪うのはやはりいいとは思えなかったからだ。

「でも、その炎はこの村の守り神でとても大切なものだと言きました。」

「勝手に取っちゃうなんてドロボーじゃない。」

「というかトレジャーハンターなら、村の宝じゃなくて洞窟とかの財宝取つてろよ。」

再びトレジャーハンター達は顔を見合わせる。ウエンデイ、ルーシイ、マルクの言い分になにか、思うところが――

「トレジャーハンターに宝をとるなって言うのかよ!!」

「そんなもん取られた方が超悪いに決まってるだろ!!」

「ドゥーンドゥーン!!」

「こうしちゃあいられねえ!!魔導士どもに邪魔される前にお宝頂いちまおうぜ!!」

無かったようだ。激昂して、トレジャーハンター達はそこから離れ始める。だが、永遠の炎が凍っているのにも関わらずどうやって持って帰るつもりなのか。

「頂くって……残念だが、その炎も凍ってるって話なんだけだな。」

「トレジャーハンターの超お宝力、舐めんなヨ。この超秘宝『月の雫』ムーンドロップがあれば、氷を溶かす事が出来んだヨ。」

そう言つて、トレジャーハンター達は小瓶に入った少量の液体を見せる。

「なーっ!?!」

過去に、ナツ達はムーンドロップに関連する事件に出くわしていた。その際に知り合ったのが、リオンやシエリア達である。

そして、そのムーンドロップがあれば如何なる氷であっても溶かすことが出来るのは、彼らも知っているのだ。

「ムーンドロップって……」

「ガルナ島でリオン達がやっていた魔法……」

「液体にできたのか……」

「……てかアレがあれば村を元に戻せんじゃねえか!!」

ナツが、その事実気づく。そして、他の者もそれに気づいた時にはもう遅い。一同は、完全にトレジャーハンターのムーンドロップを奪う気でいた。

「追え!!トレジャーハンターを捕まえるんだ!!」

「奪えーっ!!」

「取っちまえばこっちのもんだ!!」

「魔導士なんかには捕まるかよ!!」

「あいつらさつきまでの超綺麗事どこに行ったんだ……?」

「ドゥーン。」

「まてえー!!」

「その雫があれば巨人を助けられるんだ!!」

「冗談じゃねえ!このムーンドリップを手に入れるのにどんだけ苦労したと思っただ!!」

「超悪魔ばつかりの島に行って超必死に探したんだぞ!!」

「つーか巨人が蘇ったらドゥーンって怖えだろーが!!」

ひたすら続く追いかけっこ。しかし、全く追いつく気配がなかった。かと言ってトレジャーハンター側は、撒ける気配がなかった。

「あれ?そう言えばエルザは?」

「何かほかの手掛かりを探すって村に残ってます。」

「大丈夫かなあ……なんか、嫌な予感する。」

「まさかと思うけど巨人を壊しちやったりしないよね?」

「大丈夫って信じたいわ……」

追いつく気配も撒ける気配も全くしないまま、森を駆け抜けていく。この終わらなさそうな追いかけっこに飽きあきしてきたのか、トレジャーハンター側に動きがあった。

「ドレイク位置につけ!!魔導士ごときに舐められちゃ超終わりなんだよ!!邪魔な奴らは排除する!!」

「トレジャーハンターは危険な仕事だぜ、ドゥーン!」

「危険な仕事はお互い様だろ!」

「やるなら話をはええ、ぶっ潰す!」

「依頼の邪魔はさせねえぞ!!」

「ドゥーン!」

「うお!」

トレジャーハンターの1人が、ハンマーのような武器をナツ目掛けて振り下ろす。しかし、その武器の形はまるで手のようだった。

「強化甲型鎚ストロンガーの威力はドゥーンと来るぜ!!」

「なら……火竜の鉄拳!!」

速攻で決める、と言わんばかりにナツはハンマー使いであるトレジャーハンター、『ハンマー・ララ』に魔法を使う。

だが、手が閉じている状態から開くことで、この武器は盾にもなるらしくナツの魔法を封じていた。

「ドゥーン!!」

「うおおおおああー!」

そして、防いだ直後に拳を閉じられて、ナツは投げ飛ばされてしまう。その直後にマルクが貯めていた魔力を使う。

「だったら……魔龍の咆哮!!」

『ブレスで吹き飛ばせばいい』と、マルクはブレスを放つ……が、放った瞬間にブレスは突然姿を消した。

「なんで!? 魔力は充分に……」

「ドゥーンドゥーン!!」

「がはっ!? いっで!」

隙を見せてしまったマルク。そのまま殴り飛ばされて、地面を滑っていく。氷が皮膚に触れたのか、激痛が走って身をよじっていた。

「こいつら……」

「意外と、強い……!」

他のメンバーも、残り2人のトレジャーハンターに翻弄されていた。魔導士だから、と油断してしまっていたのだろう。気を引き締め、かかることにしたのであった。

「お前ら魔法も使わねえのにすげーな……」

「おいおい、俺達風精の迷宮をそこらのトレジャーハンターギルドと超一緒にしないでくれよ。」

フィオーレーのトレジャーハンターギルドを決める、大秘宝演舞超優勝ギルドだぜ!!」

「ドゥーン!!」

そんな祭りがあったことは、正直知らなかったと一同は思った。どうでもいい、という程でもないがその祭りを知らなかったため、反応に困るのだ。

「トレジャーハンターさんの世界にも、同じようなお祭りあったんですね…」

「お、おめでどう…」

「それはすげえ!!」

「本気で感心するな。」

「ナツさんその祭りのこと知らないでしょ。」

何故かナツだけは、本気で感心しているが…だが、少なくとも魔法を使う魔導士と互角に渡り合えるくらいの方は、あるということである。

「分かったらとつとと帰りなヨ。そこらの魔導士じゃ俺達とはやりあえないぜ。」

「それが、そこらの魔導士じゃねえんだな…じゃん。」

グレイは、ムーンドリップの入った瓶をトレジャーハンター達に見せつける。それに対して、やはり驚きを隠せない様子だった。

「何っ!？」

「ムーンドリップが!？」

「アイスメイク…盗賊の手、つてね。」

「いつの間に!!」

「あー!ドロボーだ!超ドロボーだ!!」

「あんた達が言えたことか!!」

「ドレイク撃てーい!!」

「サジタリウス!」

「何っ!？」

グレイを狙う銃弾と、サジタリウスの矢が共にぶつかり相打ちとなる。流星に驚いているのか、動揺の音が聞こえてくる。

「それがしもまた…弓の名手であるからして。」

「返せドロボー!!」

「巨人を助けるんだ、悪いがいただく。」

ソード・ヒロシ、変形武器『変形銃槍剣』チェインブレイドの使い手のトレジャーハンター。

変形させて、槍の形態でグレイを突こうとする。グレイはそれを避けて、即座に瓶を投げる。

「ナツ!!」

「おう!!」

「ドゥーン!!」

振り下ろされたストロンガー、それをナツは避けて更に瓶を投げ渡す。

「ルーシィ!」

「OK!!」

「チェインブレイドガンナー形態!!」

乱射を始めるヒロシ。瓶に当たってもいいのだろうか、とふと思ったマルクだったが……今はそんなことを気にしてる場合ではなかった。

「ウエンデイ!!」

「はい!!」

受け取るウエンデイ、未だ続けられる乱射。ウエンデイは銃弾を避けながら、瓶を投げる。

「シャルル!」

「了解!!」

「撃ち落として終わらせてやるヨ!!」

シャルルに投げられる瓶。それがシャルルの手にわたる前に、シャルルを打ち落とそうとする。スナイパーである、スナイパー・ドレイクはそれで勝ちを確信した。

「シャルル一旦上に飛べ!!」

「え、ええ!!」

「ちっ、外した!!」

その瓶を、シャルルが受け取る前にマルクがキャッチ。当たらないようにシャルルに回避を促しながら、自分も乱れ撃たれている銃弾を避けていく。

「んでもって、改めて！」

「ええ！」

シャルルは高速で飛んで、マルクの手から直接瓶を掴んで飛んでいく。そして、シャルルはハッピーに向かって瓶を投げる。

「ハッピーー！」

「あいさー!!」

そして、シャルルの投げた瓶はハッピー……の頭上を通り過ぎる。そして、少し遅れて大きな音が響く。

「あ——」

「割れたー!!」

割れる瓶、当然の如く漏れる中身。液体版ムーンドリップは、これで全ておじゃんになってしまう。

「何てことしやがるー!!お前ら超悪人だなー!!」

「盗んだもん壊すとか……ドゥーンドゥーンドゥーン!!」

「……こればかりは、反論出来ない。」

「ごめんなさい……」

余程悔しかったのか、泣きながらこちらを糾弾するトレジャーハンター達。

だが、漏れた中身でとある事実がわかった。

「でも、あれ見て。」

「あ……」

ルーシイが指をさした先、漏れたムーンドリップが溶かした氷は、液体がかかったところだけであった。

「たったあれだけしか氷が溶けてない……」

「やっぱり、初めからあの量のムーンドリップで、村全体を救うのは無理だったんだ。」

「永遠の炎も……これで溶けるかどうか微妙なところですね……」

『少ないムーンドリップでは無理。』という結論を出されたトレジャーハンター達。追い討ちをかけるかのごとく悲鳴をあげる。

「そんなあ!!超駄目な計画だったのかー!」

「ムーンドリップで永遠の炎がドゥーン溶けると思ったのに……」

「ドゥーンと作戦変更だ!!」

「超やり直しだな!!」

「口調逆になってますよ。」

よほど混乱したのか、口調が入れ替わるララとヒロシ。少しだけ警戒しながら見ていた一同だったが、なにかに気づいたナツが耳を溶けた地面に押し付ける。

「なんか聞こえる……誰かの、声……」

「え……」

「声、ですか?」

「氷の溶けた地面から、誰かの声がある。呼んでるみてーだ。」

「オイラには何も聞こえないよ?」

少し考えるナツ。既にトレジャーハンター達のこととは頭になく、そのまま走り始める。

「こっちか!!」

「ナツ!!」

「ナツ待てよ!!」

「ちよつと、なんなの?」

「何を聞いたんですか!?!」

「とにかく追いかけてよ!!」

「待っててくださいよナツさーん!!」

そのまま、妖精フェアリーテイルの尻尾側はその場から走り去っていく。置いてかれたトレジャーハンター達は、というと……

「このままじゃ終われねえ!!あいつら追うぞ!!」

「あの金髪の鍵見たか!?!アレ、超レアものだぜ!!」

「トレジャーハンターが宝を持たずにギルドに帰れるかっての!!ドゥーン!!!」

先程とは打って変わって、トレジャーハンター達が追う側になったのであった。

はぐれた先で

「きゃうー！」

「ウエンディ大丈夫？」

「すみません、地面が凍ってて……」

「たしかにちよつと滑りやすいもんな……にしても、ナツさんどころかグレイさんともはぐれるとは……」

ウエンディを起こしながら、マルクはそう呟く。どこもかしこも凍っており、普通の森よりも行き来が難しくなっているこの森。

先行したナツとも、いつの間にかグレイともはぐれてしまっていた。

「どうしよう……全然訳が分からないわよ、ここ。」

「空から2人を探すって言ってたハッピーとシャルルも……戻ってこないし。」

「そう言えば……さつきから、ちよつと気になることが……」

急にしどろもどろになるウエンディ。マルクとルーシイは、その様子に首を傾げる。

「気になる、ていうか……絶対変、ていうか……付けられてるみたいです。」

後ろに視線を投げるウエンディ。その先にルーシイとマルクも視線を向けると、トレジャーハンターのふたりがいた。

なぜか、1人は顔を青く塗りもう1人は顔を白く塗って。

「やだなあ、オイラ超ネコだにや。」

「白ネコだニヤドゥーン。」

「きゃあああああー！」

「うわ、これは……」

悲鳴をあげるルーシイと、ありえない程に不快感を感じているマルク。似ても似つかない変装に、何故か腹を立てていた。

「トレジャーハンタースキル、変装が見破られた……だと!？」

「やっぱ俺が青ネコやるべきだったんだよ!!」

「そもそもあの二人はそんなにでかくねえし、喋り方もしない!!」

「本気で騙せると思っていたのかしら……」

「奥が深いですね、トレジャーハンターって。」

トレジャーハンターの2人は、顔のメイクを消してから立ち上がる。割と素早くとつてたので、変装する手間が早い分雑だったのだろうと……そう考えておくことにした3人だった。

「バレちまつたら超仕方ねえ!! 標的変更!! お前のその鍵、超レア物だろー!」

「ドゥーンと頂いていくぜ!!」

「何なのよこいつら……」

ルーシイは黄道十二門の鍵を隠しながら、1歩下がる。代わりに、ウエンデイが1歩前に出て説得しようと試みる。

「あの、小瓶の事はすみません……けど、私達は争うつもりは無いんです。巨人さんを助けたいんです。」

「巨人? そんな奴らはどうでもいいよ。トレジャーハンターにとって、ものを見極める基準は一つだけ……それが宝か、宝じゃねえかだ!!」

そう言うと、チェインブレイド変形銃槍剣でその場にいる凍った巨人の足を切り裂くヒロシ。

その行動に、3人は驚く。

「止めなさい! まだ生きてんのよ!!」

「生きてようが死んでようが、宝じゃねえものに興味はねえ。」

「止めて下さい。」

ウエンデイが、少し言葉を強くしながらもまだ論そうとする。だが、トレジャーハンター達にはそれは届かない。

「辞めねえよ、やりてえ事をやる……欲しいものをいただく。それがトレジャーハンター——」

「やめてください!!」

ウエンデイは、ブレスでトレジャーハンターを吹き飛ばす。なんとか、そこまで吹き飛ばされないようにした2人だったが、もはやそんなものは関係なかった。

ウエンデイとルーシイ、そしてマルクは既に戦う体勢に入ってい

た。

「争うつもりは無かったけど酷いです、ほ放ってけません!!」

「村人を傷つけるつもりなら、あたし達が相手よ。」

「イイネ…宝も女ももらっていくか。」

「女はイラネ、殺そうぜ。ドゥーンつと。」

「……あ?」

『殺す』という単語を発したララを、睨みつけるマルク。ルーシィとウエンデイは、そのマルクの様子に少しだけ焦りを感じ始める。

だが――

「きゃっ!!」

「わっ、わっ!?!」

「ちっ!!」

そう、トレジャーハンターはもう一人いたのだ。スナイパーである、スナイパー・ドレイクが。

遠いところから狙い撃つ彼は、ウエンデイ達を一方的に狙い打てるのだ。

「あっ!!」

「ウエンデイ!」

氷のせいでコケるウエンデイ。そのウエンデイを庇うように、マルクが即座にウエンデイと、射線上で居場所だけはわかったドレイクの間に入る。

「ウエンデイ!マルク!!」

銃口が光り、弾丸が放たれる。だが、その弾丸はウエンデイ達に届くことは無かった。

何故なら、弾丸は止められていたからだ。赤い髪に。

「ふふ……女は4人、男が1人……」

「フレアさん!?!」

「なんでこんな所に……」

突如現れたフレア。彼女の事もそうだが、『女は4人』というセリフに少し引っ掛かりを覚えていた。

ここに居るのは3人、1人足りないのだ。

「……わ、私。」

「マホーグ!?!」

「ま、マーちゃん……って呼んで。マホーグって名前……可愛くない、らしいから。」

「お、おう……う?」

そしてまた突然現れたマホーグ。何の気配もなしに、いきなりマルクの後ろに立っており、ルーシィとウエンデイは当たり前だが驚いていた。

「なんだこの女……」

「奴らの仲間か。」

トレジャーハンター達も警戒しており、攻撃は仕掛けてこない。

「あの……ありがとうございます。」

「なんであんたがここにいます。」

「それと、マホー……ま、マーちゃん……も何で?」

本名を言いそうになって、ぐるんと首を回して視線を向けてきたため、少しビビって訂正し直すマルク。

それで満足したのか、トレジャーハンター達の方に再度視線を向け直す。

「……金髪をつけてきた。」

「ええ!?!」

「ていうか、いつもつけてる。」

「えええっ!?!」

ニヤニヤと笑いながら、フレアは語っていくが……すつ……と、真面目な顔付きになる。

「ウソ……私、行くところなくなった。だから、帰ってきた。」

「帰って……きた?」

「そう、私の故郷……この紋章は、太陽このむらの村の紋章。」

フレアは、胸のマークを見せながらそう語る。巨人の村……太陽の村といったこの村が、フレアの故郷なのだと。

「フレアさんってこの村の人だったんですか!?!」

「ウソっ!?!」

「小さい頃、巨人に育てられたの。帰ってきたら村の人が…私の、家族が…許せない。」

「氷漬けにしたのは俺達じゃねえよ!!」

「俺たちは永遠の炎をドゥーンと頂くために——」

「それとダメっ!!」

大声を張り上げるフレア。彼女にとって、この故郷を汚されることは…何人たりともしてはならない事なのである。

「永遠の炎は村の守り神…大切な物!!誰にも汚させない!!」

「髪が伸びた!？」

自らの魔法を使い、フレアは髪を伸ばして攻撃を仕掛ける。それに驚いてもいたが…相手には、剣を使う相手もいるのだ。

「任せる!!チェインブレイドで…超斬る!!」

「さ、させるわけ…でない!!」

咄嗟に割り込まれ、鏢迫り合いを始めるヒロシとマホグ。だが、ヒロシは瞬間的にチェインブレイドを變形させて、フレアの髪を銃モードでバラバラに撃ち抜く。

「っ!!」

「開け、巨蟹宮の扉…キャンサー!!」

「髪のことなら任せろ…エビ。育毛スカルプケア!!」

キャンサーは、フレアの髪を自らの魔法で治していく。短くなつた髪が、元の長さを取り戻していく。

「金髪……」

「巨人を守るのよ。」

「一緒に戦いましょう!!」

「家族を狙われるのは…まあ、辛いよな。」

フレアは、3人の言葉に少しだけ微笑んだ後にすぐさま治つた髪をヒロシにぶつける。

そして、交代であるかなようにマホグがフレアの後ろまだ下がってくる。

「ふ、フレアお姉様……ごめんなさい……」

「わ、私の髪はどうせ伸びるから……気にしない。」

そして、元レイヴンのふたりがヒロシと戦っている間に、ウエンデイとマルクはララと戦っていた。

「ドゥーン!!」

「天竜の、鉤爪!!」

「魔龍の尾激!!」

振り下ろされるストロンガーを、ウエンデイが蹴りあげて一瞬止めて、その好きに横からマルクが蹴りつける。

「ブレスじゃなかったら使えるっぽい!!」

「逆になんでブレスはダメなの…?」

「さあ……? 何で俺だけ……」

「ともかく、いこう!!」

「おう!!」

戦いは白熱を極めていく。だが、相性の問題か徐々に5人は押され始めていく。

「髪しぐれ狼牙!」

「所詮髪の毛! 剣の敵じゃねえ!!」

「な、なら……武器が相手、なら?」

マホーグ、ヒロシにハンマーの形となった武器を叩きつけようとする。だが、それは避けられるだけに終わってしまう。

「……一瞬でも、いい。」

「あ?」

「この髪は永遠の炎から授かった私の誇り……髪しぐれ蛍火!」

「おごおっ!? み、味方ごと……」

「わ、私ワープできるし……」

切れた髪の毛が、爆発を起こす。ヒロシは吹き飛ばされるが、マホーグはショートワープでそれを回避する。

「ヒロシー!!」

「やあ!!」

「ドゥーン!?!」

ヒロシの援護にまわろうとしたララだったが、ウエンデイに蹴られて軽く怯んでしまう。

だが、即座にストロンガーを動かしてウエンデイに掴みかかろうとする。

「ふん!!」

「わわっ!?!」

だが、マルクが即座に間に入ってウエンデイが掴まれるのを阻止、代わりにマルクが掴まれてしまう。

「このストロンガーは並の力じゃあ外せねえぞ!!」

「……」

「動くなよ……この男の体がドゥーンと爆発するぜ!!」

「マルク!!きやつ!!」

マルクのヘルプに回ろうとしたルーシイだったが、即座に足元に弾丸を打ち込まれて、コケてしまう。

「ちいつ……えっ……?」

髪を動かして、ルーシイを助けようとするフレア。だが、動かそうとしたその瞬間に、何かに引っかかるような感覚を感じる。

後ろを見れば、フレアの髪がいつの間にかヒロシによって木に結びつけられていた。

「姉様っ!?!」

「私の髪が!?!」

「トレジャーハンタースキル!固結び!!うははははははっ!!」

「一丁上がりってな。」

「ドゥーン。」

髪を結び付けられたフレア。動けば、すぐさま撃ち抜かれるルーシイ。拘束されたマルクに、そのせいで動けないでいるウエンデイ。状況は確かに悪いが……トレジャーハンター達は、その状況で勝ちを確信してしまった。

「魔導士ゴのときが俺らに喧嘩売るなんて、超10年はええよ。女は女らしく、男の前でケツ振ってればいいんだよ。」

おい、ちよつとケツ振ってみろよ。」

「うはははははっ!!いいなっ!やれやれ!」

「……あんたら、ばっかじゃないの?」

呆れた顔をするルーシイ、すぐ後ろで星霊のバルゴが何故か言われたとおりに振っていたが、いつもの事なのか完全にスルーしていた。

「魔導士に喧嘩売るなんて100年早いだよ。」

「よいしょっ。」

「うへっ!?!」

軽く体を動かすように、両手と両足を動かすマルク。それだけで、ストロンガーの指関節は壊れてしまう。

「ウエンデイ、俺じゃあ壊しきれないからあと頼んだ。」

「攻撃力強化!!」

そして追撃と言わんばかりに、ストロンガーは破壊される。もうこれで、厄介なストロンガーは使えなくなった、というわけである。

「結ばれてても私の髪伸びるし。」

「何っ!?!」

「マホーグ、よろしく。」

「はい!フレアお姉様!」

「俺のチェインブレイド!?!」

ものすごく嬉しそうに、マホーグはフレアから投げられたヒロシのチェインブレイドを、叩き壊す。はつきり言うと、ここまでする必要は無い。

「ルーシイ!!」

「間に合った!」

そして、いつの間にか召喚していたロキが、ドレイクを後ろから強襲してルーシイに向かって投げつける。

「魔龍の逆鱗!!」

「天竜の翼撃!」

マルク、ウエンデイのそれぞれの一撃でララは吹き飛ばされる。そしてそれにならない他のふたりも……

「髪しぐれ千鳥!」

「ルーシイキーツク!」

「&バルゴキーツク!!」

そして、3人は遙か彼方へと吹き飛ばされる。それを見てから、一

同は勝ちを確信したのであった。

「やったわね！」

「……うん。」

微笑むフレア。今回の勝利は、全員の力で勝ち取った勝利なのであった。

異変の中の異変

「私……小さい頃、この村にいた。でも、私だけ……みんなと違うのが嫌で……村を出ていったの。」

それまで、自分と同じ大きさの人間見たことなかった。それが……逆に怖くなって。私……こんななんになっちゃって……」

少しだけ、自分の過去を話すフレア。それは！彼女がどうしてこの村から離れて今のようなになったのか……を掻い摘んで話す説明だった。

「それでレイヴンに入ったの？」

「私、お金稼ぐ方法知らなくて……何も知らずにレイヴンに入った。そのギルドは、妖精フェアリーテイルの尻尾を嫌って……でも、それが当たり前だと思ってる……」

「初めて出会ったギルドが悪いよ、それは。」

「もういいんです、仲直りしましょう？」

朗らかに笑うウエンディ。その笑みを見て、フレアは余計に罪悪感に苛まれる。

「うん……ごめんなさい……」

「ううん、全然気にしてないから。」

「フレアさんが久しぶりに故郷に帰ってきたら、村がこうなっていたんですよね？」

「うん……」

今の巨人の状態を思い出して、涙を浮かべるフレア。『防げなかったのだろうか』と後悔をしまっていた。

だが、溶かすことが出来ることを理解しているのか、その顔からすぐに悲しそうなのは消えていく。

「泣かないで！みんなまだ生きてるんだから！」

「うん……もしかしたら、永遠の炎ならみんなの氷を溶かせるかもしれない。」

「ついてきて！案内する！」

フレアの案内により、永遠の炎のところに向い始める一同。ふと、

気になったのかマルクはマホーグに視線を向ける。

「……わ、私は別にこの村の出身……とかじゃない、よっ。」

「……本当に、ついてきただけ？フレアさんに？」

「う、うん……ついてきただけ。だ、誰に……とは、言わない、けど……」

笑みを浮かべるマホーグ。その瞬間、妙な恐怖感がマルクの背筋に走る。今度からまともに眠れそうになりそうもないと、マルクは予感していたのであった。

「……あれ？」

ふと気がつくマルク。いつの間にか、フレアの案内から外れて1人になってしまっていた。

だが、ついてきて走っていたにも関わらず、なぜこうなったのか全く理解出来なかった。

「……声？誰かいるのか？」

遠くから聞こえてくる声。それが女性のものでは無いとだけわかるため、エルザやウエンデイたちでないことははっきりしていた。

とりあえず、マルクは多少警戒しながら進んでいく。トレジャーハンターが、3人で終わるとも限らないからだ。

「っ……あれはグレイさん!？」

「マルクか!？」

近くによると、いたのはグレイと……謎の怪物だった。一瞬気圧されはしたが、すぐにマルクは敵だと判断する。

「なんですか……こいつ!!」

「うおっ!? わかんねえよ! だが……この感じ、ゼレフ書の悪魔……デリオラと同類だ!!」

1 発攻撃を回避しながら、マルク達は速攻で決めようと魔法を放とうとする。

だが、突然目の前の悪魔は口を開いて何かを発し始める。目にこそ見えないため、マルクは何をしているのか分からなかった。

「……? あいつは一体……ってグレイさん!? 何でちっちゃく……てか子供になってるんですか!?!」

「そういう魔法なんだよあいつのは! ん……? というかなんでお前小さくなってるねえの!?!」

「いや俺にもわかりませんけど!?!」

小さくなるグレイ、小さくならないマルク。グレイもマルクも、何故マルクが小さくならないのかが理解出来なかった。

「と、とりあえず! あいつの魔法は小さくなるだけじゃねえ! 魔法も、単純な力も、防御力もすげえ下がるんだよ!」

「つまり、見た目以上に出るること少なくなってるんですか?」

「そういう事だ!!」

「だったら……俺がやります! 下がっててください!!」

そう言いながらグレイの前に出るマルク。小さくならない、ということももしかしたら魔法の影響を受けてないのかもしれない。

だが、それ以上にマルクがこの村に来た時の体調の問題が、残っていることをグレイは覚えていた。

「うわあああああ!?!」

だが、それを遮るかのように2つの声が空から落ちてくる。この声は、シャルルとハッピーだった。

「つと……大丈夫か?」

「ありがとうマルク……なんか急に上手く飛べなくなっちゃって……」

「てかあんたちっさ! グレイも何その姿!」

マルクは、シャルルとハッピーを落下する前にキャッチする。だ

が、今は悠長に話している時間もないため、2人を地面に立たせる。よく見てみれば、ハッピーとシャルルまでグレイと同じように小さくなってしまっていた。

「こいつ、村中に魔法を!?!」

「グレイさん! 援護できますか!?!」

「わかんねえよ! けど俺達が止めねえと、みんなが危ねえ!!」

グレイは、アイスメイクで目の前の悪魔に攻撃を仕掛ける。だが、体が小さくなって、力が弱くなっていく為に全く効いていなかった。

「なら俺が……ふん!」

マルクが、顔を殴るが……後ろに軽く引いたものの、マルク存在をまるで認知していないかのように、グレイに向かって歩き始める。

「なんで!?!」

「なら足を凍らせる!!」

驚くマルクだったが、その一瞬の隙にグレイは足元を凍らせる。だが、それと関係ないと言わんばかりに、すぐに割れてしまう。

「駄目か!?!」

「なんでそつちに……行くんだ、よ!!」

今度は、全力の蹴りを浴びせるマルク。だが、それも無意味だった。後ろに仰け反るものの、ダメージを与えているはずなのに、それでもグレイに向かっていく。

「……!」

「ぐあつ!?!」

「グレイさん!!」

一気に距離を詰められ、蹴り飛ばされるグレイ。何故ここまでグレイを敵視するのか、自分という存在を無視してまでグレイに敵意を向け続けるのか。

「くそつ……!」

マルクは首の後ろから飛びつき、一気に後ろに体重をかけて転ばそうとする。だが、マルクの体重では無理なのか、全く倒れる気配がなかった。

「なんでだ!?!なんでこいつ……!」

マルクは考えた。グレイが狙われる理由。

グレイは、目の前の敵を悪魔といった。そう、悪魔なのだ。マルクも、自分の中に悪魔がいると、なんとなくだが理解している。

その真偽はともあれ、その悪魔が忌避するものが自分の身をもつて体験していた。

「まさか、氷……!?!」

グレイは氷の魔術師である。そして、この村を覆っているのも氷である。それだけでは、少し狙う理由としては足りないものを感じるが、少なくともこの悪魔は氷が苦手だと判明した。

「うぐっ!?!」

マルクを抱えたまま跳び上がる悪魔。そのままいくと、グレイが次の一撃でやられてしまうのは、すぐにわかった。

「やらせるか、よ!!魔龍の咆哮ゼロ距離Ver.!!」

悪魔の背中に、そのままブレスを放つマルク。悪魔はそのままブレスの勢いで、氷の地面に叩きつけられる。

「ゴガアツツ!?!」

「苦しんでる……そういう事かよ!!」

「グレイさん、こいつは……」

「分かってるー!この氷が弱点なんだろう!?!なら、やってやる!!」

氷の上で苦しむ悪魔。グレイは片手を氷につけて、もう片方を悪魔の方に向ける。

「何をやる気ですか!?!」

「この体を通して、氷の魔力をぶつける!!そうだ、俺はビビってたただけだ……ガキの頃を思い出すこの光景に。だからやろうとしなかった!!」

体を貸してやる!!だから、通っていきやがれえええええええええ!!」

グレイの体を通して、氷に秘められた魔力が悪魔に向かって放たれる。純粋な魔力だけを叩きつけられてしまったのか、そのまま吹き飛んでいく。

「……戻った!グレイさんの姿が戻った!!」

悪魔が苦手な魔力を通したためか、または倒したからなのか。ハッピーとシャルルも含めて、小さくなっていった者達は全て元の姿に戻っていた。

「グレイさん、大丈夫ですか？」

「ああ。お前こそ大丈夫か？」

「はい!!」

「……くくく。」

倒れた悪魔から、声がする。まだ倒しきれていなかったのかと全員が身構える。

「お前らは開いちまったんだな……冥府の門を……もう後戻りはできない。そして——」

最後の言葉を言い終える前に、悪魔は空から降りてきた怪鳥に食べられてしまう。

「っ!」

「出たアアアアアア!!」

「鳥……鳥!」

「とりあえず、逃げるぞ!!」

グレイのその言葉に、全員がその怪鳥に背を向けて走り出す。村の場所が見えるいちだったので、少なくともエルザとは合流出来るだろうと考えたのだ。

「ていうかシャルル!こいつ知ってるのか!」

「飛ぼうとしたら初めからいたのよ!!不気味ったらありやしないわ!!」

「同感だ!こんなん逃げるが勝ちだ!!とりあえず誰かと合流しない限りは……」

「あれ、皆いせん!？」

「お前ら逃げろー!!」

村にたどり着いたグレイ達。だが、走りながらなので説明している余裕も時間もなかった。

「なあああ!？」

「何あれ!？」

「わかんないけど、オイラ達を食べるつもりだよ!!」

「敵よ敵!!」

ハッピーとシャルルが走りながら、叫ぶ。村にたどり着いたのを確認したマルクは、一旦振り返る。

「グレイさん!時間稼ぎますから、村の氷を頼みます!!」

「おうー!」

グレイとハッピー、シャルルはそのまま走り抜けていく。そして、マルクは時間稼ぎの為に怪鳥と戦い始める。

「先に行かせるか、よオ!!」

「グゲツ!？」

大きな1つ目玉に、マルクの蹴りが直撃する。その直後に、走ってきたナツがさらに追撃でもう一撃を叩き込み、怪鳥を吹き飛ばす。

だが、吹き飛ばされた怪鳥は空中で体勢を立て直してから、ナツとマルクをに迫ってくる。

「たかが突撃で……なっ!？」

「っ!」

マルクとナツは、そのまま足に鷲掴みにされて、空中に投げ飛ばされる。そして、怪鳥はその隙を狙って喰らおうと口を開けて迫ってくる。

「ナツ!」

「マルク!」

「俺達は大丈夫だ!!」

「だから早く氷を……永遠の炎を復活させるんだ！きつと炎がこの村を救ってくれる！」

だが、吹き飛ばされた程度で2人は怯まなかった。カウンターで、怪鳥の目玉に強烈な一撃を与えて、叩き落とす。

「にしてもなんだよこい、っ!!」

「俺に聞かないでくださいよ!!ああ、にしてもこんな体調が悪くてよく戦えるな俺……」

と、その時マルクの体に悪寒が走る。弱々しくも圧倒的プレッシャー、そしてその魔力。

どこかを感じたことのある魔力。その魔力の感じる方に、マルクは空中で戦いながらも視線を向ける。

「永遠の炎が……!?!」

「いえ、あれは……あの炎は……!!」

「——ナツさんなら、きつとあの炎を復活出来ます！」

聞こえてくるウエンディの声、その言葉に戦っているふたりもつい笑みを浮かべていた。

「ナツー!!」

「ああ……任せとけ！」

「援護はまかせてください！」

怪鳥は空中で一回転して、尻尾をナツとマルクに叩きつける。だが、二人とも尻尾を掴む。

ナツはそのまま回転させて投げ飛ばそうとし、マルクは巻き込まれないために尻尾を主軸にして更に上の空中に飛び上がる。

「っ!!」

「させるか!!」

だが、投げ飛ばされた怪鳥も、そのままの勢いのまま目からビームを発射する。

それに対して、マルクはついブレスを放つ。

「マルクーブレスは……あれ?」

「オアア!!」

そのままブレスを放ち、ビームを飲み込みながら怪鳥もまとめて飲

み込んでいく。

「……ブレスが出た!?何で!？」

「なんでもいい、行くぞ!!」

「……はいー!」

マルクはナツを蹴り飛ばす。その勢いのままナツは、炎を纏う。まるで打ち出された弾丸のごとく、ナツの体は怪鳥の体に直撃する。だが、それだけで終わらせるわけもない。

「火竜の……煌炎!!」

そのまま、永遠の炎があつた祭壇に怪鳥を叩き込むナツ。そしてそのまま魔力の炎をひたすらに叩きこんでいく。

「まだまだア!!」

もはや、勢いだけで空中に浮かぶほどに激しい攻撃。ありつたけの炎を叩き込んだあと、ナツはトドメとして更に濃い魔力を一瞬で溜め込む。

「滅竜奥義……紅蓮!爆炎刃!」

ありつたけの炎を叩き込まれた祭壇。そして、怪鳥という燃料もあつたためか……勢い良く燃え上がり、永遠の炎は復活した。

「……俺が聞いた声。お前だったのか。」

「私が聞いた残留思念……そっか……」

「永遠の炎って……」

「……400年ぶりか、イグニールの子よ。」

炎が喋る。否、永遠の炎はただの炎ではなかった。体が常に燃え滾り、炎で体が構成されている……ドラゴン。

炎竜アトラスフレイルム……大魔闘演武の時にエクリップスから現れたドラゴン。それが、永遠の炎の正体だった。

悪魔祓い

炎竜アトラスフレイム。時を超える魔法、エクリップスにより400年前から現れたドラゴンの一頭。初めこそ、敵対していたもののナツと関わったことにより未来から来たローグから離反し、仲間として一緒に戦ってくれたドラゴン。

体が炎でできており、物理攻撃は愚かブレスさえも並大抵のものは効かないのだ。

そして、アトラスフレイムは巨人の村…太陽の村にある永遠の炎だったのだ。それが今、ナツの炎によって復活する事が出来た。

この村で何が起こったのか……今、それが明らかになる。

「あいつは……」

「エクリップスから出てきたドラゴンの一頭!?!」

「400年前に帰ったはずじゃあ……」

「400年……ウム…400年、われは燃え続けておる。」

「ドラゴンって……分かってはいたけど、長命なんだな。」

驚きのあまり、その驚きが言葉に出来なくなっているマルク。それは、他の者達も同じだった。

「生きてたんだな、おっちゃん。」

「お久しぶりです……」

「生きて……? いや、違うな……」

「この姿は、私のミルキーウェイで魂を具現化したものです。」

「つまり、ナツさんの炎があつてようやく魂が具現化できるレベルだったってことか……」

「死んだ、ということか……? それも、遙かなる古……」

困惑したかのような声を出すアトラスフレイム。どうやら、本人にも死んだことが良くわかっていかなかったようだ。

「意識がはつきりしてねーのか?」

「意識…と言うよりは記憶が、混濁しておる……ムム、ここは……我は……」

「しつかりしろよおっちゃん。」

「イグニールの子は、覚えておる……」

困惑を続けるアトラスフレイム。残留思念だからなのか、それとも他に別の理由があるのか。彼の記憶はあやふやになっていた。

「どういう事？ ジルコニスの時は記憶もはっきりしていたのに。」

「氷のせいかも……」

「どういう事だ？ ウエンデイ。」

「元々残留思念というものは、とても強い意志に反してとても弱い魔力なの。それが、氷の魔法によって長時間凍結されたことで記憶の1部が損傷したのかも……」

「要するに……脳みそにダメージを受けたようなものかな……」

「氷……ウム、氷だ……」

そのウエンデイの言葉に、アトラスフレイムが反応を示す。どうやら、何かを思い出しそうになっているようだ。

「世界は氷に包まれた。」

「おっちゃん、この村のこと言ってるのか!？」

「何が、あつたのですか……あの、教えて……」

この村の出身者でもあるフレアが、恐る恐るアトラスフレイムに近寄って話しかける。

「ムググ……あの男は、我を……何かと間違えて……ムウウ……!？」

「あの、男……?？」

「…そう、だ。たった一人の人間が……世界を氷に変えた。」

「氷の魔導士の仕業だったのか……!？」

氷を使う魔導士だというのは、予想ができる範囲ではあつた。グレイは、改めて答えを得られたことで確かな納得を得た。

だが、問題は村1つを丸々凍らせるほどの魔力を持った、1人の人物によってこれが行われた、ということである。

「たった一人の魔法でこの村をこんなふうにしたの!？」

「な、何のために……!？」

「あの男は……我を、悪魔だと思っていた……我を消すため、村中を凍らせた……悪魔祓いの魔導士、滅^{デビルスレイヤー}悪魔導士」

滅悪魔導士、その言葉を聞いて一同が驚く。竜でも神でもなく、悪

魔を滅ぼす為の魔法。

「悪魔……そうか、だから……」

自身が氷に触れた時の激痛、そして怪鳥に食べられた男。どちらも悪魔だったからこそ、この村の氷が効いたのだ。

妙に納得すると同時に、マルクは自分の異質さを改めて理解することになった。

「ムググ……思い出せん、われは一体……!」

「——あなたはこの村の守り神! 巨人の炎!!」

「ム……」

我慢出来ずに、声を出すフレア。永遠の炎なら、アトラスフレイムならこの村の氷を溶かせると、その気持ちがついに爆発してしまったのだ。

「どうかお願いします! この村に再び光を! この村を救ってください!! どうか……!」

「フレアお姉様……」

土下座をするフレア。その一心が、村を救いたいという気持ちが……奇跡を産んだ。アトラスフレイムの記憶に、その奇跡が宿った。

「われは……そうだ、我が名は巨人の炎。アトラスフレイムこの村を作った者……!」

「いいぞ! 思い出してきたんだな!」

「我が村の不幸は我が痛み……我が村の悲しみは我が涙……我が……魂の最後の残り香と、イグニールの子の炎を持って……この村を解放せし……我が名は炎竜アトラスフレイム、この村の守護竜なり!」

アトラスフレイムから、凄まじい熱気が吹き出してくる。熱気とともに、アトラスフレイムの炎が激しく燃え盛る。

その圧倒的な雄々しさに、圧巻の一言しかでなかった。

「魂が消えていく……」

「え!?!」

「文字通り、最後の残り香って事か……!」

燃え盛るアトラスフレイム。その最期の最中、靄に包まれていた記憶が鮮明に思い出されてきていた。

「イグニール、竜王祭、アクノロギア、ゼレフ……思い出した、思い出

したぞ……！ゼレフ書最凶最悪の悪魔『END』400年前、イグニールはENDを破壊できなかつた……」

「イー……エヌ、グディー……？」

ゼレフ書最凶最悪の悪魔、ナツの親であるイグニールが倒せなかつたという悪魔。否、倒せなかつたのではなく……破壊できなかつた悪魔。

その言葉だけを残したあと、アトラスフレイムは完全に消えていくのだった。

「アトラスフレイムの思念は完全に消えました。」

「現世に残る僅かな魂が、ここまでの力を引き出せるなんて……」

「……お姉様、嬉しい？」

「……うん……！」

「わはははははは！」

「わははははははははは!!」

「わーっはっはっはっはっはっはっー!!」

巨人の頭の上に乗る、高らかに笑うナツ。そして、乗られている人もまた大きく笑っていた。要するに、意気投合しているのだ。

「すっかり馴染んじやって……」

「小さきものに救われてしまったな。」

「元に戻れてよかったな。」

「小さきもの…」

「その中でもウエンディとマルクは更に小さい部類ね。」

「わははははははは!!」

「……楽しそうな人達だな、ほんと。」

先程まで凍っていたことすら、実は夢だったのではないかと思うほどに、巨人達はとてもおおらかだった。

「一体この村で何があったのだ。」

「そう言えば、エルザさんいませんでしたね……何かあったんですか？」

「まあ、それは後で話そう。マスターにも話さなければならぬだろうしな。」

「氷の滅悪魔導士って言うのが襲ってきたんだって。」

その事で、巨人達も少し申し訳なさそうな顔になっていた。どうにも、自分達が一瞬でやられたとは思っていないようだった。

「ワシらも武器を取って立ち向かったのだが……」

「そこからの記憶が無い。」

「ウム。」

「……という事は、一瞬でとんでもない範囲を凍らせたってことですかやっぱり。」

改めて、氷の滅悪魔導士の強さを思い知る一同。認識出来ないほど早く、凍らされたということなのだから。

「永遠の炎……つまり、アトラスフレイムを悪魔だと思って倒しに来たらしいの。」

「犯人の勘違いが、引き起こした事件だということか？しまらん話だな。」

「いや、その犯人の真意はまだ分からねえ。サキユバスの男が言ってたんだよ……」

闇ギルド『サキユバス・アイ夢魔の眼』、マルクとグレイが戦った男はそのギルドに入っていた。その男が最期に行ったセリフ、それがグレイには引っかかっていた。

「……『お前らは開いちまったんだ、冥府の門を。もう後戻りはできな

い』…でしたっけ。」

「冥府タルタルスの門!？」

「ひいっ!」

「恐らく犯人は冥府の門の人間だ。その下部ギルドにあたる夢魔の眼がこの村の守備にっていたんだ。」

「何か別の理由があつて村を凍らせた、つてこと?」

「そうね…:まだ何か裏がありそうだわ。」

冥府の門、夢魔の眼:闇ギルドの一角が動き出している以上、どうしても気が引き締まってしまう。

だが、その緊張は今の間だけは必要のないものである。

「まあ、とりあえずは仕事完了だ。」

「あいさー!」

ナツは朗らかに笑い、仕事の完了を喜ぶ。それにつられてほかのメンバーにも笑みが浮かぶが、ふとそこにフレアの姿がないことにルーシイは気がついた。

「そう言えばフレアは?」

と、後ろを見ると何故か木陰に隠れているフレアとマホーグが、そこにはいた。

「何で隠れてるの?というかなんで二人共…:ねえ、フレア。」

「フレアだど!?!そこにおるのか!?!」

突然、人が変わったかのように巨人達は立ち上がる。当然、頭の上に乗っていたナツとハッピーは転がり落ちる。

「ほら、久しぶりに帰ってきたんだからさ。」

「私、この村捨てた:勝手に出て言った…:だから…」

「大丈夫だよ、怒ってなんかないって…:」

ちらつと、巨人の方を見上げるルーシイ。しかし、その顔はしかめっ面になっており、とても安易に『怒っていない』とは言えないものだった。

「本当にフレアなのか?」

「久しいな…」

「大きくなったが…:まだワシらより小さいな。」

「外の世界はどうだった？」

突然尋ねられ、言葉に困るフレアだったが、たどたどしくもなんとか紡いでいく。

「た、楽しいことも…辛いことも、いっぱい……」

その言葉を聞き、巨人達とナツは笑みを浮かべる。それを見て、怒ってなく寧ろ歓迎していることが良くわかった。オドオドしているフレア以外は。

「それはどこにいても同じだ、生きている限りな……出ていこうが戻ってこようが、ここがお前の家だ。」

「自由にすればいいさ。」

「ウム。」

「まあ……しかしなんだ、これだけは言っておかんとな。」

「二「おかえり、我らが娘よ。」二」

巨人達のその言葉に、フレアは顔を俯かせる。そして、涙を流し始める。それは、悲しみの涙ではなく……巨人達に、親に捨てられていなかったと思える嬉しさの涙だった。

「た、ただいま……！」

そして、笑顔を浮かべるフレア。そこには、闇ギルドに所属していた者の面影はどこにもなく、ただ一人の少女がいるだけであった。

「マルク、混ざらないの？」

「俺、酒飲めないし……」

「私だって飲めないけど、参加してるよ？」

「う……」

森の影に一人でいるマルク。そこにウエンデイがやってくる。笑顔で近づくとウエンデイに、どうにも申し訳ない気持ちになっていた。

「……思うところでもあった？」

「…村が凍ってる時に、俺の体調が悪かった理由。フレアさんについて行ってたはずなのに、いつの間にかはぐれて悪魔だった男とグレイさんの近くに出て…偶然とは思えないんだよ。」

「……マルクは、人間だよ？」

「ウエンデイ？」

「私と一緒に生活して、一緒に育って、魔法も使って……」

指を折りながら、色んなことを確認していくウエンデイ。小さなことから大きなことまで、思い出を上げていく。

「それに、マルクの髪も…肌も…姿形も、人間にしか見えないよ？おかしいところなんて何も無い。」

「に、人間の姿になれるらしいし…悪魔って。無意識にそうなってるだけかもしれない……」

「それを言っちゃったら、私だっていつかはドラゴンの姿になるかもしれないんだよ？」

「う……ジルコニスの話か……」

滅竜魔法を使い続ければドラゴンになる。結局、アルカディオスはゼレフが原因だと言っていたが、あれの真実はどっちなのだろうと少し考えてしまうマルク。

「それでも、私は自分が人間だって思ってる。なら、マルクも人間だよ？」

「……わかった、俺は人間だよ。ただちよつと変な弱点が多いだけのな。」

「うん！ほら、混ざりに行く？」

「おい待って、引つ張らなくてもついていけるから！」

そして、この日はいつまでも巨人達と一緒に一同は朝まで騒いで過ごしたのであった。

妖精の尻尾メンバー

「わはははっ！やっぱり君たちに任せて正解だったよ、いやー、よくやったよくやった。」

「楽勝だったな。」

「無事にウオーロッド様の依頼を達成出来てホツとしています。」

太陽の村から、ウオーロッドの家まで戻ってきたナツ達。依頼完遂の報告と、今回の事件の現況や途中で起きたことも踏まえて、全て話していく。

「冥府タルタロスの門が関わってたのには驚きでしたけど…」

「それに、滅悪魔デヘルスレイヤー導士っていうやつがいることも、だな。」

「ウム、その辺の調査は評議院に任せておけば良い。それより君達に報酬を渡さねばな。」

「待ってましたー!」

花壇の中の草花を少しだけ掻き分けながら、ウオーロッドはナツ達に渡す報酬を取り出す。

「ほい。」

「ほい…って。」

「ワツシの畑で取れたジャガイモ。」

楽しそうに笑うウオーロッド。しかし、それは逆にナツ達は反応に困っていた。何せ、取り出されたのがジャガイモ1個だけなのだから。

「…というのは冗談じゃ。」

「だ、だよな!？」

「あは、は……」

「じよ、冗談キツすぎますって……」

「本当は隣の村で買ってきたジャガイモなのじゃ。」

「どっちでもいいわア!」

「金寄せこらあ!」

「報酬ジャガイモ1個は流石にキレますよ!？」

「……まったくあのじーさんは……」

「ま、まあまあ……夜景眺めながら温泉は入れるって、いいじゃないですか。」

「まあ……それもそうか。」

「あいー……」

ナツ達は、ウォーロッドに案内された温泉に入っていた。ただ入れるならと、とりあえず先に男性陣が入っていたのだ。

「あー……にしても、腹減りません？」

「そうだな、帰りにどっか寄って飯食いに行くか？」

「お、なら肉食いに行こうぜー」

「オイラお魚がいい。」

ゆっくりくつろぎながら、他愛もない会話を続けていくナツ達。すると、遠くから声が聞こえてくる。

「……なんか聞こえてきませんか？」

「そうかア？俺ア何も聞こえねえが。」

「……いや、この声……ルーシイ達か？」

ドラゴンスレイヤー
滅竜魔導士であるナツとマルクだけが、声の主を聞き取る。

自分たち以外のメンバー、所謂女性陣であった。

「まあ……温泉に興味ありそうですね、俺ら以上に。」

「だな……」

ゆったりしていたが、突然マルクは疑問を抱いた。『あれ？そう言えばここの温泉男女で別れてたっけ？』と。

「あの、この温泉ってまさか混——」
「黙ってろ。」

グレイがマルクの口を塞ぐ。そして、マルクは確信した。ナツとグレイは分かっているがら入ってきていたのだと。

「——仕事の後のお風呂って最高だよね。」

そして、女性陣が温泉に浸かる音が聞こえてくる。マルクは叫ぼうとしたが、口を塞がれて叫べないのと、叫んでも叫ばなくてもこれアウトだな、と理解してしまったために……思考を放棄していた。

「疲れた心と体を癒し、また明日に向けて気持ちを切り替えられるしな。」

「でも、マルクやナツさんグレイさんにはなんか、悪いですよね。」

「いのよ、あいつらどうせ温泉になんか興味無いでしょうし。」

「いや、そうでもねえぞ。」

「たまにはこういうのも気持ちいいもんだぜ。」

ナツとグレイが言葉を発する。マルクは目を瞑って、更に腕で目を隠している。

エルザは呆然としており、同じく呆然としていたウエンディとルーシイは咄嗟に状況を把握する。

「きやああああああ！」

「何勝手に女湯入ってきてんのよー！」

「先に入ってたのは俺達だ。」

「お前らがあとから入ってきたんだろー！」

マルクは何も見えていないが、頭に何かぶつかった様な気がした。実際、ルーシイがナツに向けて投げた桶が、マルクにクリーンヒットしただけの事なのだが、もはやそれすらも気にならなくなっていた。「あれ？言っとらんかったかの？混浴じゃと。」

「堂々と入ってくんない！！」

そして、ウォーロッドが最後に入ってくる。最早隠す気もない清々しさが、何故かそこにはあった。

「……あれ、もしかして今ウエンディの体見ました？」

「……いや、そもそも湯気でよく見えねえから、うん。」

「そ、それにあいつらとはちよつと距離があるしな。」

唐突にマルクがウエンデイのことに気がつく。女性陣がいるのなら、当然温泉なので服は脱いでいるだろう、そしてそれはウエンデイも同じである。

そう、ナツとグレイはウエンデイの体を見た可能性があるのだ。

「いやでも見たんですよね？」

「全身潜ってるから分かんねえ。」

「……」

マルクは目を隠している。だが、どうにもじつと睨まれているような気がして2人はバツが悪そうな顔をする。

「ちよつと男子は出ていきなさいよ。」

「そうです！ 恥ずかしいです……」

「お前の裸なんか見飽きてる。」

「新鮮味はねえな。」

「うわー、超最低。死ぬの？」

段々と悪化していく言い争い。それに見兼ねたのか、エルザが1歩前に出てくる。

「まあ落ち着けみんな、仲間同士だ。これくらいのスキンシップは普通だろ。」

「普通じゃありません！」

なんの躊躇もなくエルザは立ち上がって、ナツとグレイに近寄っていく。物凄く堂々としているが、これがジェラルルの前とかになると恥ずかしがったりするんだろうか……と目を隠しながらマルクは冷静にそう考える。

「昔はナツやグレイと一緒に、風呂に入ってたんだ。」

「それが普通じゃないのよ。」

エルザはナツとグレイに近寄って。風呂から引つ張り出そうとする。姉御肌というかなんというか、基本的にエルザは世話を焼きすぎるタイプなのだ、この場の一同は改めてそう感じる。

「久しぶりに背中を洗ってやる。」

「いつ、いいよー！」

「もうガキじゃねえんだ！」

「マルクもどうだ？」

「え、遠慮します！」

これらの光景を見て、ウォーロッドは嬉しそうに笑みを浮かべていた。とても懐かしそうに、とても嬉しそうに。

「ほっほっほっ仲間というものは、いいもんだのう。」

「あんた違うでしょうが!!」

「おや？そうか…まだ言つとらんかったか。」

ウォーロッドは、浸かっている左腕を上げて、一同に見せつける。そこには一同と同じ…妖精の尻尾フェアリーテイルの紋章が刻まれていた。

「ワツシはメイビスと共に、妖精の尻尾を創った創世期メンバーの一人。君らの大先輩じゃよ。」

当然、その場にいた全員が驚いた。生きているのもそうだが、聖十大魔道序列4位の人物が、妖精の尻尾創世期の人物だったのだから。

「おじいさんの昔いたギルドって…」

「妖精の尻尾って事？」

「そっか、だから…同じ聖十の称号を持つマスターの言い方は気になつてたのよ。」

「明らかに、目上の人を敬う言い方でしたもんね…俺は最初、序列的に敬っているのだとばかり…」

「……というのは。」

「冗談なのか!？」

「本当じゃ。」

ずっこけるグレイ。冗談ばかりを言い続けていたために、最早話が進まない状態が悪化してきている。

「それでウチのナツとグレイを指名なされたのですね。」

「ウム、いかにも。君達がワツシの家を訪れた時、ほのかに懐かしきギルドの古木の匂いがした……というのは冗談じゃが。」

「話が進みませんね……」

「君達若き妖精に出会えて、ワツシは本当に嬉しいのだ。メイビスの唱えた和…血よりも濃い絆で結ばれた、魔導士ギルド妖精の尻尾。」

その精神は時が流れた今でも、君達の心に受け継がれておる。それは仕事の成否にあらず、君達を見た時に感じたこと。」

微笑みながら、ウォーロッドは語る。初代ギルドマスターメイビスの残した言葉と、その心を。

「かつてメイビスは言った。仲間とは、言葉だけのものでは無い…仲間とは心、無条件で信じられる相手。」

『どうか私を頼ってください。私も、いつかきつとあなたを頼ることがあるでしょう。』

悲しい時も、苦しい時も…私が隣についています。貴方は決して1人じゃない。空に輝く星々は希望の数。肌に触れる風は明日への予感。さあ歩みましょう…妖精達の詩うたに合わせて…』

感慨深く、聞き惚れる一同。その言葉が、全員の心に残る言葉となっていた。

「…変われ。」

「あ、うん。」

いつの間にか、ナツの背中を洗っていたエルザ。そして今ナツがエルザの背中を洗う番となっていた。

交代しつつ、その言葉に感慨を寄せる。

「妖精の尻尾、創始の言葉かあ…なんか感慨深い物があるね。」

「つー事はあれか!?!じっちゃんより歳上なのか!?!」

「失礼だぞ、ナツ。」

「いや…もしかしてそんなに昔の人だとき、ENDって悪魔の話知ってるのかなって。」

「END?終焉…?」

「ゼレフ書の悪魔らしい。俺の親父のドラゴンが倒そうとしてたみてえなんだ。」

「ゼレフ書…また物騒な名前を…」

ナツの言葉に、指を顎に当てて考え込むウォーロッド。どうしても聞き覚えがないのか、真剣に考えこんでいた。

「そのENDってのがなんなのか分かれれば、イグニールの居場所のヒントになると思ってただけだな。」

「アトラスフレイムが言った言葉ですね。」

「ウム…すまんが知らんのう。」

申し訳なきように頭を下げるウォーロッド。だが、別の話なら思いついたのか、すぐに頭をあげて語り始める。

「だが、昼間冥府タルタロスの門と聞いてこんな話を思い出した。」

奴らは正体が一切わからぬ不気味なギルド。本拠地も、構成員の数も不明じゃ。だが、何度か周回を目撃した者の話を聞くことがある。

その者達は、口々にこう言う……『あの集会は悪魔崇拜』じゃと。その言葉に息を呑む一同。悪魔崇拜、要約すればまともではない者達の集まりということになる。

それこそ、悪魔になる男がいるくらいなのだから。

「これは我々、イシユガルの四天王の推測ではあるが……奴らは協力なゼレフ書の悪魔を、保有している可能性がある。」

「ゼレフ書の悪魔を保有!?!」

「もしかしてその悪魔がEND!?!」

「いや、悪魔崇拜だと言うんだったら下手をすれば複数……」

「嫌なこと言わないでよね!?!」

憶測を飛び交わせる一同。ゼレフ書の悪魔、それ一体で圧倒的な力を持つ凄まじい悪魔。

闇ギルド3大同盟、バラム同盟。その1つであり、そして残り一つにもなっているギルド。ならば、それ相応の力を持っているのは確かに必然と言える。

「そっか……どこにいるかわかんねーってんならやりようがねえな!!
くそっ!!見つけたら叩き潰して吐かせてやる!こうやってギツタン
ギツタンに——」

「おい、ナツ……」

「ア?」

「……な、ナツさん…今エルザさんの体を洗っていたんじゃあ……」

殴るジェスチャーをしていたナツ。しかし、自分が一体直前まで何をしていたのか、完全に忘れていたようだった。

そう、マルクが言った通り今ナツはエルザの体を洗っていた。そし

て、殴るジェスチャーとはいえ、殴る蹴る自体の行動には出ているのだ。

つまり――

「…ほう？ギツタンギツタンに……なんだ？」

「あ……」

石のタイルできてきているはずの床が、エルザの握力でヒビが入る。そして、目の前にぼこぼこにされたエルザがいた。

「……フンッ！」

「ぎゃあああ!!」

ナツの悲鳴が、夜空に響き渡る。その凄惨な光景に、誰もが目を背けていた。

背ける必要もなく目を瞑っていたマルクだったが、今の今まで女子と一緒に風呂に入って恥ずかしがっていた気持ちだが、この光景の音だけですっかり冷静になるほどだったのだという。

暗雲立ち込める

「……こりゃあ酷い事件だなあ……」

「評議院が爆破!？」

「9人の議員が全員死にまったらしい。」

レストラン8アイランド。元評議院の1人であるヤジマが経営しているレストランであり、今ここに雷神衆のメンバーとマルクが仕事に來ていた。

「それだけじゃないぞ……死傷者119名……大惨事だわい。」

「そんな簡単に、落ちる様な場所でもないでしょう……一体誰がやっただんでしょうか……」

「さあな……けどよ、アンタ評議院止めてて良かったねえ。」

「バカタレ!不謹慎な事を!!」

「しかし、不幸中の幸いでしたね。」

「ちよつとあんた達!幾らお客さん少ないからって、真面目に働きなさいよ。」

店の制服を着たエバーグリーンが、他の男勢に注意のために声をかける。しかし、フリードとビックスローは呆れた顔でエバーグリーンを見る。

「お前似合わねえなその格好。」

「ウム。」

「あんたらに言われたくないわよ!!」

「まあでも、ほんとに少ないですもんね……評議院爆破されたから、みんな警戒してるんでしょうか。」

「いや……そこまで警戒している者も少ないだろう。大陸中の魔導士を全滅させる!と爆破犯が言わない限りはな。」

片付けた食器を持ってきながら、エバーグリーンはボヤク。珍しく、仕事戦いなどとは一切無縁の依頼である。

「大魔闘演武の影響で、ここんとこ重たい仕事が多いってぼやいてたから、軽い仕事を見つけてきたんじゃない。」

「これこれ、飲食店は軽くないよ。」

「まあ、俺もココ最近ずっと色んな所行ってるから…付き添わせてくれてありがとうございます。」

「単純に5人の方がいいと思っただけだ。それに、料理を作れる人数はなるべく多い方がいい。」

包丁を丁寧に掲げながら、フリードはマルクに感謝を述べる。鍋を掻き混ぜながら、マルクは軽く照れていた。

「料理じゃなくて、盛りつけなら得意だぜベイビー。」

「もりつけもりつけー」

「ま…私もお色気は得意分野だけどね。」

「ここってそういう店じゃないんですけど。」

会話をしていく内に、ヤジマはラクサスのことを思い出す。実は、彼もこのクエストに着いてきているのだが、お使いをする担当になっているので、店にはいないのだ。

「ところで…ラクサス君はまだ戻ってこないのかね。」

「道に迷ってるのか？」

「お使いもできないとは…仕方の無いやつめ。」

「何でちよつと嬉しそうなんですか。」

と、ここで店の裏口の扉の開く音が聞こえてくる。ラクサスがお使いから戻ってきたのだと、全員が思い、振り返ると…見知らぬフリードの男がいた。

「あの、ここ関係者しか入れないんで——」

「……ヒュル。」

マルクが、その男に対して注意をしようとしたその時、男が一言だけ呟いた。

……直後、轟音とともに店から竜巻が発生して、店を粉碎していった。

「何じゃこいつは!？」

「ヤジマさん!」

そして、竜巻をまといながら男はヤジマに向かって突撃していく。だが、フリードとビックスローが間に入って、男を撃退しようとする。

そして、その直後にマルクが上から仕掛ける。

「これで……！」

「どどん。」

男は、両手をフリードとビックスローに押し当て、またも一言呟く。すると、フリードとビックスローの体が回転しながら吹き飛ばされる。

「があああああ！」

「ぐっ……！」

「フリードさん！ビックスローさん！！」

吹き飛ばされてしまった2人だが、両手を使ってしまった以上、既につかる直前であるマルクの攻撃を防ぐ手段はない。

故に、そのまま勢いよくマルクはかかと落としを決めようと、振り抜いた。

「ヒュル。」

「なっ……!?く、うううう!!」

だが、間髪入れずに男は蛇のように曲がりくねっていふ竜巻を発生させて、マルクを地面に叩きつける。

魔力を吸収しようにも、既に勢いだけはあるのでただぶつけられるよりも乱回転だけの影響を受けて、悲惨な事になっていた。

「小癩な……！」

「ボツ。」

「ぐあああああ！」

ヤジマは、魔法により自分の体を薄くして、男に立ち向かおうとしたが、男の体から吹き出した風によって、やはり吹き飛ばされてしまった。

「ヤジマさん……！」

「妖精機銃『レブラホーン』!!」

更に間髪入れずに、エバーグリーンが魔法を男に向ける。だがそれさえも――

「ヒュル。」

「きやあああああああ！」

エバーグリーンもまた、男の竜巻によって吹き飛ばされ、店の残骸

に激突してしまう。

「エバー！」

「こいつ……」

「風の、魔法……なんてもんじゃない……！」

男はヤジマに歩み寄る。フードのせいでうまく顔が見えてないため、どのような顔かも判断出来なかった。

「ぐうう……！何者じゃ……！」

「我に名はない……九鬼門の一人。人類は我を厄災と呼ぶ。」

男は、ヤジマの首を掴む。確実に殺す為に、腕には男の魔法である竜巻が既に滞留し始めていた。

「くそ……何なんだこの魔法は……体が、動かん……！」

「俺は、まだ大丈夫そうです……！」

既にボロボロになっているが、マルクは何とか立ち上がる。体が動かない、という程でもないが……うまく動く、というわけでもなかった。

それでも、立ち上がらねばならないのだ。

「冥府の門は開かれた……」

「ヤジマさんを、離せ!!」

「ほう、あれを受けて立ち上がるか……」

マルクの一撃は確実に男の頭にヒットした。だが、男には通じていなかった。

「なっ……頭狙ったのに……」

「貴様の『魔』では、我は倒せん。」

だが、先に死ぬか、後に死ぬかの違い……人類に裁きを。」

「ぐっ……!?!先か、後かの違い……だと!?!」

首をヤジマと同じように掴まれるマルク。だが、男の言葉の意味がどういう意味なのか、それに対する嫌な予感を感じていた。

「そうだ、我らによって——!?!」

「殺すのか、色んな人を……大事な人を……！」

マルクは、男を睨みつける。そして、男の腕にある竜巻を無視してその腕を掴んだ。

「殺すのか！苦しみを、味わせるのか！」

「この男、人間では……ぐっ!!？」

男は、マルクに掴まれた腕を離す。だが、タイミングが一瞬遅かったのか……男の腕は掴まれたところが完全に消えて、千切れていた。

離れた瞬間に、力尽きたのかマルクはそのまま倒れ込む。

「冥府の門……冥府の門タルタロスか!!」

「こいつら……現評議院だけでなく、元評議院も対象なのか!? 一体なんの目的で……」

「ぐっ……だが、この男だけは……冥府へ、落ちろ……!」

「よせえー!!」

男は、ヤジマにいき直り、再び竜巻を回転させ始める。ヤジマを仕留めようと、確実に殺そうとその魔の手を伸ばす。

「ヤジマさーん!!」

そして、ヤジマが殺される……そう誰もが思った瞬間に、どこからともなくきた攻撃によって、男の竜巻が消える。

男は振り返る。ヤジマは驚く。そして、他の者達は喜んでいた。

「っ……!」

男の体に、落雷が落ちる。既にその場には、先程までその場にいなかった人物が一人いた。

「道には迷っちゃまったが……てめえを殺すことには、迷いはねえから。」

「ラクサス、さん……」

「何なんだこいつア。」

ラクサス。買い出しのために店の外に出ていっており、今しがた戻ってきた。

「冥府の門よ！ヤジマさんを狙ってきたの！」

「ほう……」

「……!」

被っていたフードを破り脱ぎ捨て、その姿を現す。獣のような顔つきに、とても人間とは思えない肌色。それだけで人間でないと、すぐに判断出来た。

「人間じゃねえ!？」

「そいつ、は……」

「マルク？」

「そいつは、多分悪魔です！前の以来の時に出会った……悪魔の男と、気配が似てます!!」

「……なるほど、そりゃあ納得だ。」

悪魔と聞いて、妙に納得するラクサス。マルクも証拠こそなかったが、男の言葉やフードを脱ぎ捨てたあとから、ビシビシと感じる嫌な気配が目の中の男が悪魔だと断言するまでの確信を得ていた。

「ヒュル！」

男は、ラクサスに向かって回転しながら突撃してくる。そして、片腕で攻撃をするが、ラクサスは悠々とその攻撃をかわしていく。

追い打ちで攻撃を仕掛けようとするが、ラクサスは電撃をまとい一瞬で後ろに回る。

速度では、圧倒的にラクサスが勝っておりそのまま後ろから蹴り飛ばした。

「コイツ……」

「相手が悪かったな……」

蹴り飛ばされた直後に立ち上がった男だが、その時には既にラクサスは後ろにいた。

速度では……否、パワーもラクサスの方が上であった。

「雷竜の顎!!」

男の顔が地面にめり込む。そして、その衝撃の余波で周りの地面も全て凹み、まるでクレーターのようになっていた。

それで男は動かなくなり、完全に仕留められたとラクサスは思っ結構えを解く。

「さすがラクサス！」

「よっしゃー！」

「やっぱり漢ね〜」

「ヤジマのじいさん、こいつどうするよ。」

動けるようにはなったのか、その辺のものに座り込むラクサスとマ

ルク以外の面々。マルクは、未だ動けるようにはなっていないのか、倒れたままだった。

喋るくらいは、出来るようだが。

「ウム…評議院は機能スておらんスなあ…よくもワスの店を…」

「本部はそうだろうけど、支部とか沢山あるんだろ。」

「トップがやられちや下は機能せん、評議院などそんな脆い組織よ。」

「意外と難しいものですね…やっぱり妖精の尻尾フェアリーテイルに連れて帰るべきなんでしょうか。」

「連れ帰る…尋問すべきだろうし、異論はないな。」

「アラ、私そういうの大好きかも。」

エバは近くにあった、まだ切り分けられていないソーセージを、まるで鞭のように引つ張ってしならせる。

「ゴイツらは現評議院だけでなく、元評議院まで狙ってきた。目的が気になる。」

「そうだな。」

「まあ、ろくなものじゃないことだけは確かですね…」

「妖精の尻尾、か…」

「こいつ、まだ…」

倒したはずの男が、再び話し始める。だが、倒れたその場から動こうとしない辺り、まだそこまで回復していないのかもしれない。

「まさかこれほどの魔力を持った人間がいたとは計算外、想定外のダメージ。」

「我は1度死ぬしかないか。」

「死ぬ？何を言ってるやがる。」

「相手が悪かった…ということだよ人間。」

瞬間、男の体が消えて黒い霧状の物質になる。その変化の仕様に、一同は不意をつかれてしまった。

「自爆!？」

「この、霧は…!」

「どンドン広がっていく!」

「人は厄災には勝てん。これは魔障粒子…空気中のエーテルナノを破

壊し、汚染していく。」

「アンチエーテルナノ領域!?ぐは、ごほっ!!」

「それは魔力欠乏症や、魔障病を引き起こす。」

「ぐ、うう!」

苦しむ一同。魔道士にとって、魔力欠乏症や魔障病というのは死にやすすくなる病気である。

それが、とんでもない濃さで街中へと広がっていく。

「魔道士にとっては死に至る病……唯一の弱点は、我の体を再生するために本部に戻らねばならぬこと。」

「本部、だと……!ごはっ!!」

「冥府で会おう、死人達よ。」

「霧は吸い込むな!!」

「このままじゃ、みんな……!」

「町中が汚染される!!」

「みんな、とにかく逃げるんじゃ!霧のないところへ……おぐ……!」

倒れるヤジマ、そしてエバやビックスロー……次々と倒れていく一同。そんな中、ラクサスだけがそのまま立っており、マルクも無理矢理立ち上がった。

「誰も死なせねえ!死なせねえぞオ!!」

「全員、生きて連れて……帰らないと!」

「ラクサス!マルク!!2人とも口をふさげ!!」

フリードは吸い込むなど2人に伝える。だが、2人は大口を開けて吸い込んでいた。

「滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーの肺は特殊なんだ……こんなもん全部吸い込んでやる。」

「つてわけで……後頼みましたよ……!」

「全員連れて帰るのが、お前の仕事だ……!」

勢いよく吸い込んでいくマルク、勢いは劣るがとんでもない量を吸い込んでいくラクサス。

その後2人は、完全に気絶して倒れるまでずっと魔障粒子を吸い込み続けるのであった。

情報源

「う、あ……う？」

マルクは目を覚ました。明らかに、外でもないしましてや知らない家フェアリーテイルにいる、という訳でもない。

妖精の尻尾の医務室、そのベッドの上にマルクは倒れていた。

目覚めた直後は、頭が完全に覚醒していなかったが、両隣から聞こえてくる苦悶の声に、つい起き上がって見てしまう。

「ラクサスさん……フリードさん……エバさんとビックスローさんまで……」

両隣どころではなく、よく見れば一緒にクエストに向かった4人が全員倒れていた。

何があつたのか、即座に思い出すマルク。あの後、恐らくフリードが連れて帰ってくれたのだろうと思ひ至る。

「とりあえず……出ないと……」

横に置いてあつた服を取り、状況を把握するために一旦医務室から出ようとするマルク。だが、医務室の外が妙に騒がしいことに気づいて、少し疑問に思いながら外に出た。

「ん!?お、おいマルク動けるのか!？」

「へ……う、動けるって……?」

「お前と同じくらいの量の、魔障粒子吸い込んだラクサスがやべえんだぞ!?!」
というか、少量吸ってもフリード達みてえになるってのに!」

マックスが気づいて、マルクに駆け寄ってくれたが、マルクはマックスの話がいまいち理解出来ていなかった。

確かに、魔障粒子と呼ばれるものを彼らは吸ったが、動けないのは目覚めてないから出ないのか、と。

「か、体なんともないのか？」

「ちよつとふらつく程度ですけど……特には。」

「……顔色は悪くねえし、嘘は言っていないみたいだし……まあいい、動けるんならちよつと悪いが手伝ってもらうぜ。」

腕いっぱい担いである資料を、近くのテーブルにおいて、マックスは座り込む。

「えつと……何をですか？」

「よし、まずは色々説明していくか。」

まず、今俺達は元評議院の住所を調べ回ってる。何人かの住所は既に判明してて、そこに何人かのチームで向かってもらってる。」

「……元評議院を、冥府タルタロスの門から守るためですか？」

「そう。まあ最初にわかった評議院は、ロキがちよつとしたルートで知ってたらしいがな。」

で、色々な手を使って他の評議院も探してるってわけだ……一応合法だぞ？」

「……分かりました。なら、俺も手伝います。」

「ナツ達は既に向かっている、調べ倒して他のギルドにも連絡取って……ああもうやる人が多い!!」

とりあえず、こんだけ頼んだ!!」

資料のほんの一部を、マックスはマルクに手渡してから離れる。その資料を軽く目を通しながら、ふとマルクはとある疑問に辿り着く。

「こうやって、調べないといけないような事なのに……冥府の門はどうやって元評議院達の位置を知ったんだろ……？」

裏ルート、と言えばかつこよく聞こえるだろう。しかし、元評議院の家の場所を知ったところで、はつきり言えば意味は無い。

スキャンダルを狙えるわけもなし、命を狙ったところで意味もなし。せいぜいさらって身代金を要求する程度だが、秘匿情報の元評議

院の居場所を知るリスクを犯してまで、身代金の要求というのも変な話だ。

「……教えた人がいる、それもかなり評議院に精通している1人が。」

1人、頭に思い浮かんだ人物がいた。ジェラールである。だが、ジェラールがそんなことをするとも思えない以上、マルクは他の人物の可能性を考える。

「おい！連絡用の魔水晶ラクリマに連絡入ってるぞ!」

「誰だ!?一応出るぞ!」

「通信……」

ふと気になって、資料を見ながらラクリマのあるところまで向かうマルク。辿り着くとほぼ同時に通信用ラクリマに映像が映る。

「良かった！やっとな繋がった！持ってきたの壊れちゃって……これ、街のやつなの!」

「ルーシイか!?そっちの様子は!」

「ミケロさんは無事よ!」

ルーシイの声で、歓声を上げる仲間達。その映像からでは、マルクがいることは分からないらしく、そのままルーシイは話を進めていた。

「ナツは大怪我しちゃったけど。」

「勝ちだ。」

「タルタロスの1人を倒しました!」

「勝ちだ。」

「……だそうです。」

「ウエンデイ!」

「え、マルク!」

ウエンデイの声が聞こえてきて、つい前に出るマルク。ウエンデイも、マルクが起き上がってることに驚いたらしく、驚いた声を上げていた。

「も、もう起きて大丈夫なの!」

「うん!」

「すまん、今は……」

「す、すいませんマスター……」

マカロフと代わり、マルクは一步後ろに下がる。しかし、ナツが大怪我をしたということは、それだけ強い相手が冥府の門にいるということになる。

「それで、ミケロから何か情報は聞き出せたのか？」

「それが……」

ルーシイは、少し困り顔になりながらラクリマに元評議院であるミケロを映し出す。何やら、放心した状態でブツブツと何かを呟いていた。

「白き遺産…フェイス……ワシは何も知らん……本当に、何も知らん……」

「フェイス……？」

「フェイスは……評議院が保有する平気のひとつ。」

その言葉に、一同が息を呑む。超魔導砲エーテリオン、それ以外にも評議院は秩序を守る為に様々な兵器を保有しているが……

「兵器だア？評議院が何でそんなもんを……」

「私だっと思うところがあるけど……」

「いくつもある兵器は、その危険度や重要度などによって管理方法が違ってくる。」

例えばエーテリオン……この大陸中全てを狙える超魔導砲。その威力は1国をも一瞬で消滅させるほどの力……これの発射には、現評議院9名の承認と上級職員10名の解除コードが必要となる……

「つまり、今はそのエーテリオンが使えないってことに……」

「エーテリオンを無力化することも奴らの狙いか……」

同時に通信を聞いていたリリー達も、呆れながらも冥府の門の手腕に敵ながら感心する他なかった。

「フェイスとは一体どんな兵器なんじゃ！」

マカロフがそう聞くが、ミケロはモゴモゴするだけで一向に答えようとはしない。例の秘匿義務、と言うやつだが今ここでそれを使われなくても、意味があるものではない。

それは、ミケロ自身も分かってはいるのだ。

「秘匿義務があるのは分かる！しかし今はそれどころじゃ無いんじゃないぞ!!」

「っ……………！魔導パルス爆弾……………大陸中、全ての魔力を消滅させる兵器……………」

「なっ!!?」

「た、大陸中の魔力を消滅!?!」

もし、魔力が消滅してしまえば魔力のある魔導士達は、全員魔力欠乏症にかかり、苦しむ事になる。それこそ、今のフリード達のように。

「しかも、冥府の門の使う力は魔法じゃなくて呪法だとか言ってた!!」

「全魔導士が魔法を使えず、苦しむ中で……………冥府の門だけが自らの力を使える世界……………」

「何というとんでもない兵器を……………!」

「それはどこにあるんだ!!奴らより先に俺達がぶっ壊してやる!!」

ナツがミケロに掴みかかり、情報を吐かせようとする。しかし、ミケロは首を横に振る。

「し、知らないんじゃない……………本当に……………封印方法は、三体の元評議院のリンク魔法だと聞いたことはあるが……………その3人が誰なのかは、元議長しか知らない情報じゃ。」

「生体リンク魔法……………」

「3人の命が封印を解く鍵……………」

「だから、フェイスの情報を得ようともせず殺すわけか……………」

「けどそれって……………逆に言えば、情報を得る必要が無いということですよ。冥府の門は、フェイスの隠し場所まで掴んでいるということでしょう?」

憶測が飛び交うが、わかっていることはただ一つ。元議長を含めた元評議院のメンバーが殺されてしまえば、フェイスが冥府の門の側に渡ってしまう、ということである。

「急いでその3人を見つけ出し、守らねば!その3人のことは元議長が知ってるんだな!」

「お、恐らく……………」

「元議長の割り出しはまだか!?!元議長も敵に狙われてるはずじゃ、急

げ!!」

「大丈夫！追加で16人の元評議院の住所を見つけた!!他のギルドにも頼んで護衛についてもらってる!!」

忙しく動き回る中、見つけた情報。そして、その情報の中には皆知りたがっていた者の住所も入っていた。

「その中に元議長長の住所もありました!!」

「急いで誰か向かわせろ!!」

「安心してください、既に向かっています!!最も頼れるふたりが!!」

エルザとミラ、既にその2人は発見された元議長の家へと向かっていた。

そして、マルクは他の者達を手伝いながら住所を探していた。しかし、どうにも気がかりなことが多すぎるのだ。

「おい、どうしたー、マルク。手が止まってんぞ。」

「マカオさん……いや、なんか、大事なことを見落としてるような気がして……」

「大事なこと?なんだ、何が気になってんだ。」

ずっと考え続けているマルクに、マカオが話しかける。マックスやウォーレン達が話を通していたらしく、起きていることに驚く様子もなかった。

「……気になってるところと言えば、なんで元評議院の住所やフェイスの情報を知れたんでしょう。」

「そりゃあおめえ、闇ギルドなんだし特有の情報網があるだろ……つてそもそもその情報源の話か。」

「はい。幾ら闇ギルドと言っても、秘匿情報である住所やその他の情報……流石に、知りすぎている気が……」

「……なんつーか、改めて聞かされると確かに気持ち悪く感じるな。」

例の呪法とやらで知った……の割にはフェイスの事に関しては、どうにも分かってねえこともあるみてえだし。」

マカオも、一緒になって考え込む。何か、とても大事なことを見落としているかのような。そんな気持ち悪さを覚えていた。

「……もし、仮になんですけど。元評議院全ての住所を知ってる人が

いるとすれば、どういう人でしょう。」

「……地道に探した、つつうのはねえな。見つけた矢先から殺していきやあいい話だし、誰かが探したって訳じゃねえ。」

となると、初めから知っているやつ……元評議院の情報を管理するほど偉かったらあるいは……元議長？」

「……いや、まさかそんな。」

辿り着いた答えに、マカオもマルクも『ありえない』と首を振った。しかし、元議長が情報を流したとすれば……ここまでの暗殺が全てスムーズに行われてあるのも、理解ができる。

むしろ、元議長という答え以外に当てはまる人物はいない。

「……マカオさん、嫌な予感がします。俺はエルザさんの方に向かってもいいですか？」

「……おめえ、体は動くのか？別段無理はしてねえのだけはわかるがよ。」

「大丈夫ですよ。今から言っ……間に合うかどうかだけは分かりませんが。」

「……よし、俺からマスターには話を通しておいてやる。おめえもなるべく無理せずにいけよ。」

「はい、ありがとうございます。」

マルクは、自分の調べていた分をマカオに渡してからギルドの外へと走り出す。目指すは元議長の住所、馬が1頭だけ余っていたのでそれに何とか乗ってからマルクは向かうのであった。

「…………む？」

冥府の門本部。そこで、ラクサス達を襲った悪魔と同格の悪魔である1人の悪魔……名をキョウカという。

そのキョウカが、冥府の門本部にあるとある部屋にて異変を感じ取った。

「…………テンペスター、妙に騒いで…………」

「我ではない。奴だ。」

「…ほう、今の今までただ居座り続けてきたあの悪魔が…………反応している、というのか？」

「そのようだ。」

ラクサス達を襲った悪魔……テンペスターと呼ばれたその悪魔は、とある液体の入ったポッドにて、体がゆつくりと再生し続けていた。

そう、悪魔達は不死なのだ。たとえ何度倒されても…………ここで復活ができる。

「…………しかし、奴が騒ぐということは…何か、面白いことが起こる可能性があるな。」

そして、ポッドが大量に置かれている部屋…………その部屋の隅の隅にその騒いでいる悪魔はいた。

意味のある言語を発してはおらず、体も首から下が再生されていない…………という状態だが。

「どちらにせよ、用心しなければならぬ。我ら九鬼門外の、強力な悪魔の復活となると。」

騒いでいるその悪魔を尻目に見ながら、キョウカは軽く微笑むのであった。

裏切り

「……この先が元議長の……！」

馬を走らせ、何とか元議長の家近くまで辿り着いたマルク。体に不調は一切ない、逆に不安になるほどにその体には一切の負担はなかった。

動けるのだから、自分は働ける。何もしないよりマシだと、思いながら向かい続ける。

だが、途中で気づいたことがある。地面がやけに荒れているのだ。何十人もの足跡が見える。既に、ことが終わっている可能性が一気に高くなる。

「あれは……冥府タルタロスの門か！」

目の前に見えてくる半壊した屋敷。そこには同じ格好をした何十人も兵士が倒れていた。

そして、そこにはミラとエルザを抱き上げている元議長……クロフォード・シームの姿があった。

「ちっ……やっぱり元議長は……！」

「む!？」

「2人を、離せエ!!」

「うおっと!？」

「くそ、以外に身動き素早いな!!」

馬から直接ジャンプして、マルクはクロフォードに殴り掛かる。咄嗟に気づかれて、クロフォードは避けてしまうが。

「な、なんじゃ!?!わしは2人が倒れたから介抱しよう……！」

まるで、自分に害はないと言わんばかりにクロフォードは首を振って焦る様子を見せる。

しかし、マルクは鼻をこすつてその部屋の異臭に顔を顰めていた。「部屋中にハーブを炊いてて、かなり分かりづらいが……その2人に、薬を持ったことくらいは匂いでわかる。」

「カップからハーブ以上に臭い匂いがする……！」

「……！」

マルクが自身の不快感を表しながら、クロフォードを睨みつける。流石に誤魔化せないと判断したのか、焦っていた様子から一点……恨めしそうな顔を見せる。

「折角上手くいったと思っと思ったんじゃがのう……」

「なんでだ……なんで、元議長であるアンタが冥府の門なんかに従っている!？」

「従っている……?はん、ワシと冥府の門は協力関係にあるだけじゃ。

お前さんが来なけりゃあ、もっと上手く事が運ぶはずじゃったんがのう。」

溜息をつきながら、クロフォードは逆にマルクを睨みつける。洗脳か、はたまた無理やり従わされているか……それなら、まだ情状酌量の余地があつたが、完全に自分の意思で協力している。

それがわかつた瞬間、マルクの頭からクロフォードに対しての遠慮が完全に消え去つた。

「……まあよい、どうせ冥府の門の場所はお前さんらにはわかるはずもないからのう。」

「評議院でも分からなかつた冥府の門の位置……あんたは、知ってるんだな。」

「ふん、協力者なんじゃ。当たり前じゃろう。まあ……吐くことは無いがな。」

その瞬間、クロフォードのいる場所が光り始める。転移魔法、指定された場所から場所まで移動する魔法。

だが――
「移動させるわけないだろう。」

マルクが、魔力の塊を飛ばして魔法を無効化する。マルクの魔力により、元議長の魔法は発動する前に停止してしまう。

「な、なんじゃ!？」

「大魔闘演武とか、見てなかったのか?いやまあ見てなかったから助かったんだろうけど……」

「き、貴様何をした!？」

「お前を逃がすわけないって話だ……さあ、連行してやるよ。」

フェアリーテイル
妖精の尻尾に。」

「ふ、ふぎけるな！ワシを誰だと思っておる！」

「闇ギルドに協力し、元評議院を何人か殺したり殺そうとした殺人の主犯——」

ふと、マルクは後ろにとんでもない殺気を感じる。相手は誰であっても関係ない、まずは攻撃をしなければならぬと本能で答えを出す。

「がアッ!!」

「つと……いやはや、最近の若いやつつてのは血気盛んなのかい？」

身を反転して、マルクの放ったブレスを避ける男。その男から、嗅いだことのある匂いと、本能的に逃げろという直感ととんでもない殺気を感じるマルク。

「なんだ、お前なんだ!!」

「ん？俺か？わかりやすく言えば……冥府の門、九鬼門つて奴だ。ほれ、テンペスター倒したのお前の仲間だろ？」

まああいつは自爆して道連れにしようとしてたみたいだが。」

「相打ち……っ！お前、ヤジマさんを殺そうとした悪魔の仲間か!!」

「ん？いやそのヤジマつてのは分からねえが……けどまあ、ある意味面白いことになってるとは感じたね。」

やれやれ、と言った感じで両手をあげる男。妙に掴みどころのないその喋り方やそれと相反するかのような寒気に、マルクはクロフォードのことも相まってイラつき始めていた。

「元議長サンよ、早く戻りな。」

「す、すまん！」

「くそ、待て!!」

マルクが追おうとするが、突如マルクとクロフォードの間に巨大な氷の壁ができる。

「この、氷は……!」

「お、なんだ見覚えがあるのか？あ、いや……もしかしてお前が氷を溶かしたのか？」

「……俺は溶かしてない、けど……あんたは太陽の村を凍らせた張本人

か。」

「そういう事だ。」

目の前の男は手をマルクに向ける。攻撃の予備動作なんて、いらぬのは既に分かりきっているが、それでも避けなければ攻撃に当たってしまう。行うとしたら、の話だが。

「ほーら、当たれ当たれ。」

「くそっ！舐めてるのか!!」

「舐めてはいない、様子見つてところだ。まーた間違えるわけにもいかねえしな。」

「間違えるって、何を——」

ここでようやく、マルクは目の前の男の事をより詳しく思い出した。滅悪魔導士という存在が、村を凍らせたのだと。

目の前にいる男がアトラスフレイムを悪魔と間違えて凍らせたというこを。

ならば、『間違えた』というのはアトラスフレイムの話だろう。なら何を？当然、マルクが悪魔かどうかをきっちり確認するためだろう。

「ぐっ……!」

「お？ようやく疲れてきたか？今すぐおうちに帰るってんなら、見逃してやらないこともないぜ。」

「嫌だ！エルザさんとミラさんを連れ去ったあいつを追うんだ!!」

「子供は強情だねえ……ま、本当に子供かどうか怪しいがな。」

「っ!」

男はマルクとの間合いを詰めていく。段々と、後ろの氷の壁に迫りやるように。

だが、それをまどろっこしいと判断したのか巨大な氷の塊をマルクの頭の上に出現させる。

「ほれほれ、逃げないと押しつぶされるぞ!」

「ちっ!」

マルクはその場を急いで離れる。だが、落ちてきた氷の塊が……地面に落ちたと同時に割れて、破片を辺り一面にばら撒き始めた。

そして、その破片のいくつかがマルクの顔を掠めてしまう。

「ぐ、がああ…!？」

「ビング、その掠り傷でその痛みがりは……てめえ悪魔か。」

「何、でだ……!？」

「あ？」

「なんで、悪魔を滅する奴が悪魔の側についている!!」

痛みを堪えながら、マルクは男を睨みつける。マルクが悪魔だとわかった男は、少しだけ考えるがすぐさまため息をついて少しだけ構える。

「悪魔だつてんなら殺すまでさ。それが俺の使命なんでね。」

マルクの質問には答えず、男の魔力が一気に膨れ上がる。が、男の魔力が急に霧散する。

「——なんだよキョウカ。あ？こいつ連れ帰ってこいだと？……ちっ、わかったよ。」

男は、振り返る。だが既にマルクは姿を消していた。一瞬の通信の隙をつかれて、逃げ出したらしい。

「……だが、見た目はまだガキだ。そこら辺を一瞬で凍らせれば見つかるだろうさ。」

その言葉の直後に、辺り一面がすぐさま氷漬けになる。太陽の村の時よりも広い範囲を一瞬で、である。

「……案外離れてたのか。が、運が悪かったな。」

少し歩いたところに、氷漬けになったマルクが倒れていた。キョウカからの命令で、連れて帰らなければならないと言うので、一応どこも破損していないか確認する男。

「……ま、純粋な悪魔だったらこれで死んでるだろうな。ゼレフ書絡みなら多少は生き残る……さて、こいつはどっちかね。」

氷漬けになったマルクを担いで、男は凍ったところを一瞬で解凍する。そしてそのまま、クロフォードと同じように冥府の門へと帰還するのであった。

「ぐっ……っ？」

目を覚ますと、そこは檻の中だった。だが拘束もされてなければ、何かを取られたというわけでもなく、ただ檻の中に入れられているだけの状況だった。

「ようやく目を覚ましたか。」

「……誰だあんた。」

「九鬼門のキョウカ……とだけ覚えておくがいい。今言ったところで、意味をなさないとは思うがな。」

「……何を言ってるんだ。というか、エルザさんとミラさんはどこだ!!」

マルクは檻を掴んで、檻の向こうにいるキョウカに迫る。だが、焦った様子を見せずに、キョウカはただマルクを見据えるだけだった。

「エルザは、ジェラルルの場所を探るために拷問中だ。ミラという女は……悪魔に改造している。」

「なっ……!!?ふざけるな、2人を解放しろ!!」

「ふざけてなどいない。むしろ、貴様の存在そのものの方がふざけているだろう。」

「俺の存在、だと?」

キョウカは、一切表情を変えないままマルクに近づいてその人間のものとは思えない手を檻の中に入れて、マルクの首を締めない程度に掴む。

「悪魔の力を持ちながら、体は人間そのものだ。だが、悪魔なのだお前は。」

ゼレフ書の悪魔ではない……のにも関わらず、我らよりも強い力を

持ちえている。」

「お前らより強い、だと？」

「完全な悪魔として覚醒すれば、の話だがな。だからこうして貴様だけは特別な扱いをしている。」

檻の中に入れてあるのにも関わらず、特別扱いをしているというのはマルクはイマイチ理解出来なかったが、悪魔の感性に人の基準を当てはめるのは無理だという話だろう。

「……覚醒すれば、という話と特別扱いの話がいまいち繋がってないように思えるが。」

「だから覚醒させるのさ、お前という悪魔をな。」

「だから関係ない、か。俺が消えて新しい悪魔が生まれるから。」

「察しがいいな、その通りだ。」

それだけを言つて、キョウカはマルクから離れて、檻からも離れていく。キョウカがいなくなったことを確認してから、マルクは檻から出る算段を考えていく。

「俺がどれくらい気絶してたかにもよるけど……皆、大丈夫かな……」

手のひらを開き、マルクはぎゅつと拳を握る。自分か悪魔だというのは、薄々気づいていた。

紫電竜ヴァレルトが、自分の親であるイービラーだということも。

「……けどさ、何で俺が悪魔なのかよくわかんねえよイービラー。初めからだったのか？それとも……覚えていないだけで、知らない間になつていたのか……？」

マルクは、過去の記憶を探っていく。イービラーと過ごした日々、魔法も教わったが、なにか自分が悪魔になるようなことがあつた記憶は、まるでない。

「い……っ……なんか、頭痛いな……」

過去の記憶を探ろうとすると、突然頭が痛くなった。よくよく考えてみれば、自分が覚えている小さい頃の記憶はイービラーとともに過ごした日々と、化猫ケットシエルターの宿で過ごした日々だけだった。

「……まあいい、とりあえずここから出るか。」

魔力は充分、寧ろ手足を拘束しなかったことが、逆にマルクの不安

を誘っていた。

だが、それでも出なければならぬ。エルザとミラは完全に囚われた。その2人を救出して、どうにかしてここから脱出しなければならぬ。

「多分、ここが冥府の門の本部なんだろうけど……さて、俺一人でどこまで行けるか……」

魔力を出して、檻を殴る。檻は壊れて、簡単に脱出することが出来た。不気味な程に、簡単に。そして、壊した時の物音で冥府の門の誰かが来るかと思っていたが……誰も来ない。

「わざと出られるように仕向けていたってことか……」

マルクは、自分が舐められていると感じていた。しかし、だからこそ……

「こんな真似してくれたことを、後悔させてやる冥府の門……！」

苦戦

「ごめんなさい、元議長の家まで行ったんですけど……」

「エルザもミラさんも、ナツもハッピーもいなかった。」

「私の鼻じやあ後を追うまでは難しくくて……」

フェアリーテイル妖精の尻尾に戻ってきたウエンディ達。しかし、そこにはナツとハッピーの姿がなかった。

なぜなら、別行動とはいえナツは元議長の裏切りに気づいて先に向かっていたからだ。

「なあおい、マルクも向かったはずなんだが……」

「いえ、マルクもいませんでした……」

「ガジル、お前が元議長の家まで行って匂いで搜索できないのか？」

「このガキに出来なかったんなら俺にも無理だ。人の匂いってのはそれほど長時間は残留しねえ。」

「すみません……」

タルタロス「冥府の門……何とかして本拠地の情報を得られるものか。」

顔を俯かせるウエンディ。マカオもそれで軽く気を落としていた。だが、いつまでも気を落としてはいられないと、何とかして本拠地を探れないか思索し始める。

「——見付けたー！オイラ本拠地見つけたよー!!」

その時、フラフラになりながらハッピーが戻ってくる。しかし、戻ってくる時に力尽きたのか、着地すると同時にそのままの勢いで転がる。

なんとか、その場で立ち上がって皆に説明しようとするが……

「エルザとミラが捕まっちゃって！元議長が裏切り者で……ナツまで、

オイラ……!」

「落ち着きなさい。」

「あい!!」

慌てるハッピーを落ち着かせるために、シャルルが両頬を押さえつけて無理やり落ち着かせる。

そして、ハッピーがそのまま事の顛末を話し始める。

「マルクの考えた通りだったとはな……」

「しかし信じられん……元議長が冥府の門側に……」

「エルザとミラが捕まるなんて……」

ハッピーの説明により、元議長であるクロフォードが裏切っていたこと。エルザとミラが薬を盛られて、眠らされて捕まったこと。それに気づいたナツは冥府の門に乗り込み、逆に捕まってしまったこと。

「それと……」

「？」

ハッピーはグレイを見るが、すぐに首を振る。そして、今度はアジトの情報について話始めるが……

「あいつらのアジトは移動してるんだ……変な四角い島みたいな……」

「移動じゃと!?!」

「それじゃあ正確な位置は分からないの？」

「ハッピー、大体の場所と向かってる方向わかる？」

レヴィが、ハッピーに尋ねる。ハッピーは、来た時のこととアジトに向かっている時のことを思い出して、ジエスチャー混じりでなんとか説明していく。

「オイラ……向こうから来て、あつちに動いて……」

「任せて！私が的の進行経路を計算する!!必ず場所を突き止めてやるから!!」

「急げレヴィ！他の者は出撃準備じゃ!!」

「おお!!」

活気づく妖精の尻尾。しかし、ウエンデイは顔を俯かせていた。マルクが捕まったこと。

マカオは大丈夫だと信じて送り出したらしいが、やはり心配なものは心配なのだ。

「……ガキンチョ、前見ろ。」

「ガジルさん……?」

「てめえがいの一番に諦めてちゃあ、アイツにわりいだろうが。」

「……はい!」

ガジルに励まされて、ウエンデイもマルクを助けるために動こうとするのであった。

「ああクソっ!!」

そして、当の本人であるマルクはイラついていた。檻から出て、ずっと一本道であるはずなのに、誰も止めようとしなかった。襲ってくれば、まだ戦闘して突破する方法もできるのに、例え目の前に来ても襲うどころか全くのスルーを決められてしまっているのだ。

調子が狂いすぎて、イライラが高まっていた。

「隠れるところもねえのに……んだよこの扱いは……ん?」

しばらく走っていくと、少し大きな部屋へと出た。看板に書いてある文字は『ラボ』と書かれていることだけがわかった。

「ラボ……?」

何故か妙に気になり、マルクはそのラボの中をゆつくりと進みなが

ら回っていく。

どこかに別の道があるかもしれない……という事は、一応考えていたものの、それ以上の何かによって突き動かされていた。

「……………」

「つ……………なんだ、この声……………」

マルクの耳に響く声。その声の主を探そうと、無意識の内にマルクは足を向かわせていた。

エルザ達を探さなければいけない、と考えているにも関わらず、だ。「どこから……………この声が……………」

「ウウ……………」

「……………いつ、か？」

マルクの目の前に、顔だけが入ったポッドが存在していた。しかし、顔だけといえども生きているのだ、目の前の顔は。

「……………いつ、どこかで……………」

早くエルザ達を探さなければいけないのに、と考えているのにマルクはその場から離れることが出来なかった。

魔法で、離れられないようにされている訳では無い。だが、マルクはそれに何か得体の知れないもので、引き寄せられていた。

「早く、行かないと……………」

呼吸が荒くなり、心臓が高鳴る。頭は理性的な事は考えられなくなってくる。体が熱くなり、目の前が湾曲して見えてくる。

『まずい』と思った時にはもう既に遅かった。

「あ……………」

マルクはポッドに触れる。そこから、意識が途切れる。そして、ポッドの中には顔だけの何かが存在しておらず、ポッドの前にマルクは存在していなかった。

「……………」

黒く、薄い鎧をまとったかのような見た目の人物が、代わりにそこに立っていた。それは、そのまま歩き始めてそのラボから出ていくのであった。

「……………終わったようです。」

「ふ…なるほどああいう風になるのか。進化と言うべきか？セイラ。」
「いいえ、あれは進化というより同化…どちらかと言えば、元に戻った…というのが正しいかと。」

そしてラボの天井の骨組みから、2人の女性…否、悪魔が一部始終を覗いていた。

1人は、キョウカ。もう1人はセイラと呼ばれる悪魔だった。

「ふ…しかし面白いな。あれを、こちら側に引き入れるのもいいのではないか？」

「…私個人としては、反対です。得体の知れないもの以前に、あの力は危険です。」

「しかし、どちらにせよ決めるのは私達ではない。処分すると決まったら…：処分するだけだ。」

冷たい笑みを浮かべながら、キョウカは新しく生まれ変わった悪魔を見据える。

冥府の門にとっての敵か、味方か。妖精の尻尾にとっての敵か、味方か。あの悪魔を今のところは第3勢力として扱っている以上、様子見するのはとても大事だと思っていた。

「さて…：では、我々は我々の仕事に戻るとしよう。まずは…：邪魔な者達を潰さなければ。」

「元議長が、ジエラールを見つけてくれると嬉しいのですけど。」

そのまま2人もそこを去った。キョウカは元議長の元に、セイラも頼まれた仕事を終わらせるために動くのであった。

「……………」

黒い甲冑は、言葉を発さない。否言葉を発せないというのが正しかった。まだ声帯から声を出せない。

だが、肉体はある。動ける。多少違和感こそあれど、それは唐突に変わったとも言える視点の高さの問題だと認知していた。そして、時期に違和感もなくなり声を発せるように鳴るだろうと。

「……………」

ここがどこかは分からない。だが、分かっていることはここが人外の集まりだということ。

自分よりも上か、はたまた下か。どちらにせよ、恩自体は存在しているために、返さなければならぬと思っていた。

義理深いという訳では無い。ただ、借りを作るのがそれにとっては嫌なだけだった。

「……………」

目の前の部屋から話し声が聞こえてくる。気になったのか、そのまま足をその部屋に向けて歩き始める。

「——あば、あばばば!」

目の前で、肥え太っている老人が刺されていた。同種の存在が2人、その場にいた。

そう言えば、似た気配をさつき感じていたような気がしていた。

突然、地面が揺れ始める。

「冥界島^{キューブ}も反応している。フェイスの封印は解かれた。……それにしてもすごい反応だな。」

「間違いありません!フェイスの封印が解かれたのです!」

「座標は!」

「出現予想地点とはかなりズレてますな。」

話し合っている中、関係ないと言わんばかりに部屋に入り込む。2人は1瞬だけこちらを見たが、すぐさま元の話に戻り始める。

「…構わん、起動させろ。」

「それが…お?振動が収まりましたな。」

えー、ここからでは無理ですな。」

「なんだと?」

「遠隔操作は不可能、フェイスは手動でしか起動出来なくなっております…正確には、元議長様なら遠隔操作が出来たのですがね。」

「此方とした事が…早まったか。仕方あるまい、誰かを向かわせるか……」

目の前にいる悪魔…キョウカは少し後悔を感じながら、誰を出すか考え始める。

「また妖精の尻尾に邪魔されなければ良いのですがね…」

「その点はご安心を……」

そう言いながら、セイラが現れる。甲冑姿の悪魔を同じように一瞬だけ視認し、再びキョウカに視線を向ける。

「間もなくですわ。妖精の物語が終わりを告げる時です。」

「……」

妖精、と聞いて甲冑は少しだけ反応を返す。だが、なぜ自分がその言葉に反応したのかわからず、頭に疑問符を浮かべていた。

「セイラがそう言うのなら、間違いはないだろう…しかしこいつは言葉を喋らないのか?」

「喋らない、というよりは喋れないのでしょうか。発生の仕方を忘れたとか体が馴染んでないとか…色々ありますし。」

「歩けるだけマシ、という事か。」

「そういうことでございますな。」

「……とりあえず、妖精の姿はそろそろ確認出来る頃だと思えます。」

セイラがそう告げる。どうも、自分が目の前にいるのにも関わらず、他の者の話をされるのは不愉快と感じるらしい。

「ふ……ならば、確認せねばなるまいな。」

「妖精の尻尾ギルドの真上までは、もう少しですよ。」

モニターに、冥界島の下が映し出される。それを見て、ただじつと待つだけというのは手持ち無沙汰なのか、少しだけ連絡版を操りメンバーに連絡を取る。

「おや、誰かに伝言でも?」

「エゼルに向かわせようと思ってな。仕事がしたいと言っていたし、

「丁度いいだろう。」

「なるほど。」

そう話し合いながらも移動していく冥界島。そしてついに妖精の尻尾…マグノリア上空まで移動してくる。

「……」

甲冑はただ眺めているだけだった。だが、心に湧き出た感情がなんなのか分からなかった。

眺めていると、心がざわつくような感覚に襲われ始めていた。

「……クスツ」

セイラが微笑んだ瞬間…妖精の尻尾は大爆発を起こした。ギルドそのものが吹き飛ぶほどの大爆発。

建物どころか、周辺の土地すらもひび割れるほどに大きな爆発。

「ご覧の通りですわ、キョウカ様。」

「よくやったセイラ。」

恍惚とした表情で、セイラはキョウカに報告を改めてする。そんなセイラをキョウカは褒め、セイラはより恍惚とした表情となっていた。

「ゲへへへ…失ったお命は、おいくらかおいくらか。」

「一掃出来たのなら、こんな辺境の地までキューブを動かす必要はなかったな。」

これより、作戦を従来のフェイス計画に一本化する。時は満ちた……人間共の猜疑心が生み出した白き遺産によって、人間共は自らを滅ぼすのだ。

フェイスは人間共から全ての魔力を奪い、我ら魔族の時代を約束するだろう。

全ては、ゼレフの望む世界のために。」

「……まだ、だ。」

声を発する甲冑。発したその言葉に、キョウカはただ冷徹な目で視線を向ける。

「…まだ、とはどういう事だ？」

「おんや？」

「どうしたフランマルス。」

「いえね、多数の魔力反応が……」

フランマルスが報告する中、1人の兵士が部屋の中に大急ぎで入ってくる。

「大変です！冥界島に向かってくる三体の影を確認しました！」

「三体？いや、これはもつと大勢の魔力ですぞ？」

「視認できるのは3体のみです！」

「……何事だ？」

「アンダーキューブを移しますわ。」

島の下側、その映像が映し出される。そこには確かに、三体の影がいた。ハツピー、シャルル、リリー……大量のカードを抱えた3人が、今まさに冥府の門に向かってきているのだ。

「……まだ、終わって……いない。」

妖精の尻尾は、まだ終わっていないのだ。それを、この3人が証明したのであった。

一転攻勢

冥府タルタロスの門、九鬼門の1人であるセイラの策略により、妖精フェアリーテイルの尻尾のギルドは爆破されてしまう。

それにより、最早邪魔されることがないと確信した同じく九鬼門が1人、キョウカは計画をフェイス計画ひとつに絞ることを決定。

しかし、その後九鬼門フランマルスが大量の魔力反応がある事を確認、映像で確認してみると、カードの束を抱えたエクシードの3人、ハッピー、シャルル、リリーがこちらに飛んできているのだった。

「ネコ…!?!」

「あれは確か妖精の尻尾の…!?!」

フランマルスは、ハッピーに見覚えがあつた。それもそのはず、ナツが冥府の門のギルドに乗り込んだ時に、一緒にいたのをフランマルスは確認していたからだ。

そして、その時は九鬼門の1人シルバーに任せてきていた。てつきり同じく捕まっているか、殺したかと思っていたのだが…:シルバーが取り逃したことを即座に理解した。

「あんな小動物から多数の魔力反応だと!?!」

「キョウカ様、手に何かを持っているようですわ…:カード!?!」

持っているカードを見て、啞然とするセイラ。だが、この場にいる唯一の九鬼門では無い…:それどころか、冥府の門ですらない悪魔である甲冑の悪魔は、一人の女性の姿を思い浮かべていた。

何故、自分がその女性のことを知っているのか分からなかったが、段々と理解し始める。これは、身体身体の記憶なのだ。

「カナ…アルベローナ…:カードに関する…魔法を、使う…:」

「つまりあのカードは…:妖精の尻尾の魔導士ですぞ!!」

「なんだと!?!」

「そんな…私の…:失態…:」

声を震わせながら、驚くセイラ。彼女にとって、妖精の尻尾は既に全滅していなければならぬ存在。

だが、生きているのは自分の失態。その恐怖と、生きていたという

驚きが合わさって、声が震えてしまっていた。

「防衛線を張れ！アンダーキューブに重力場を展開！フロント・リア・サイドキューブは第1先頭配置！」

「トップキューブには近づけさせな!!」

冥府の門のギルドがあるのは、空中に浮かぶ立方体の島。そこに向かって、ハッピー達は飛んでいたが、急に島の底部に引き寄せられていく。

「わ!?!」

「何これ!」

「吸い寄せられてる!!」

「これは…重力!?!」

地面に叩きつけられるハッピーとシャルル。見事に着地するリリー。そして、その直後に冥府の門の兵士達が襲いかかってくる。

「オイラ達逆さまになってるの!?!」

「そんなことより敵が出てきたわ!!」

「——全員カードから解凍!行くよ!!」

「!!おおおおおおお!!妖精の尻尾、出陣!!」

カナの魔法の一つにより、ハッピー達が持っているカードが全員妖精の尻尾のメンバーに戻る。

「……………」

その様子を、遠くから一人の悪魔が見ていた。あの甲冑の悪魔である。戦うでもなく、かと言って情報を見て届けているなどでもなく。

ただずつと傍観に徹していた。冥府の門側も、そんな悪魔に構ってはいられないのか、無視して妖精の尻尾との戦いを続けていく。

「……ウエンデイ、マーベル……」

そんな中、一人の少女を甲冑はじつと見続けていた。胸が激しく高鳴る。これがどんな感情なのかわからない。

だが、とても不愉快なものに感じていた。その不愉快なもの正体は、見れば治るのか？ 答えは否と、甲冑は即座にたどり着く。

「消せば、あの少女を消せば……！」

地面に手を付き、足を曲げて……一気に伸ばして飛び上がる。狙うはウエンデイの頭上。

その小さな頭に、手を向けるだけでいい。触れるだけで、終わりである。

「っ……!?!」

だが、向けられない。向けることは出来ない。しかし既に飛んでしまっていた。

「……」

「っ?!冥府の門?!」

故に、ウエンデイの近くに着地することになってしまった甲冑。ウエンデイは、落ちてきた甲冑の悪魔に即座に気が付き、距離をとる。

そして、魔法で迎撃しようとして……匂いに気がついた。

「あれ……この匂い……マル、ク……?」

「……」

「死ねええええ!!」

武器を振るって、ウエンデイを殺しにかかる冥府の門。その武器に向かつて甲冑は、ただ手を向ける。

「なっ!? な、なんで俺の武器が……」

「……」

そして、触れた部分から武器が消えていった。なにかに飲み込まれたかのように。

「き、貴様……そちら側に着くのか!?!」

「……っ。やりたいように、やっているだけだ。」

自分でも、なぜ目の前の少女を助けたのか分かっていない。だが、何故か助けなければならぬ気がしたのだ。

「……く、くそお!!」

兵士の一人が逃げ出す。それを見届けてから、甲冑は一跳びで何処へと消え去っていく。

その場には、ただ呆然と立っているウエンデイだけが残された。

「マルク……マルク、なの……?」

「……」

自分は何者なのか。妖精の尻尾の魔導士全てを食らう悪魔。違う、何かが違う。

記憶が混濁している。

「……フェイス、白き遺産。」

先程部屋にあった地図。あれにはフェイスの位置が記されていた。既に誰かが向かっているらしいが、自分には関係の無いことである。

だが、そう思いながらも足はそちらに向かっていた。

「おや? 存外貴方もお暇なんですね。それだったらエゼルさんの手助けにでも行ってほしいものです。」

部屋には未だフランマルスがいた。甲冑はそれを無視して、地図を確認する。それに軽いため息をつくが、すぐに地図に視線を向け直す。

「うーむ、やっぱりおかしいですね。フェイス出現予想地点とは別の場所に現れるなんて……小さなズレは予測していましたが、これ程とはぐむむむむ……どう思いますかこれ。」

フランマルスは甲冑に再度視線をむける。考えるような仕草をしてから、甲冑は口を開く。

「……予想地点が、ズレていた訳では無い——」

答えを言い切る前に、ここに来るまでにあるエレベーターが止まる音が聞こえてくる。

フランマルスはそれをいち早く察知し、甲冑を引っ張りこんで物陰に隠れる。

「何……!?この部屋……」

「沢山文字が浮いてる……あの大きい球体、地図みたいですよ。」

「制御室かしら……」

来たのはウエンデイ、シャルル、ルーシイ、ハッピーであった。4人は隠れたフランマルス達に気づくことなく、部屋を見渡していた。「おお……もうこんな所にまで……守備兵のしよぼさはおいくらかおいくらか……」

「……何故隠れる。」

操作板を操作しながら、ルーシイは現状の再度把握に務めていた。そして、悔しそうな表情でため息をついていた。

「エルザが言ってた通り、フェイスの封印が解かれたみたい。」

「そんな……」

「この魔法陣使って、また封印できないのかな？」

「駄目ね、完全にロックされてるわ……動かせない。」

「……あれ?ここには現地の手動操作じゃないと起動出来ない、って書いてあるのに……起動してる!?!」

その事を聞き、フランマルスはニヤリと笑みを浮かべる。既にエゼルが向かっていて、仕事をこなしているようだったからだ。

「仕事が早いですね……エゼルさん。」

「……これ、フェイス発動まで後41分って……!?!」

ウエンデイのその言葉に、隠れている2人以外は驚き焦り始める。何せ、一時間を既に切ってしまっていたからだ。

「41分!?あとたった41分で大陸中の魔力が!?!」

「どうしようどうしよう!!みんなに知らせなきゃわー!?!」

「落ち着きなさいハッピー。」

「ここを壊してもダメ!？」

「起動も解除も現地のみです!!」

「みんなに知らせてる時間はないわね……私たちで行きましょう!」

「あい!!」

即座に判断し、フェイスを止めようとした矢先…錫杖の音が鳴り響く。その音に、後ろを振り向くウエンデイ達。

「仄暗き乙女の祈りは、地獄に響く鈴の音か。照らす魔皇は、大地を回復せし明星の息吹。」

冥界に落ちた妖精の乙女よ…骸となりて煉獄を彷徨え。」

「が、がいこつ……」

「お面ですよきつと……」

冥府の門九鬼門、漆黒僧正キース。見た目は、完全に骸骨だが彼も歴とした悪魔である。

「……時間が無い、スキを作って脱出しよ。」

「はい。」

すぐに切り替え、いかにここを突破しようかと考えるウエンデイ達。だが、ここにいる悪魔は彼一人ではない。

「早くフェイスを止めないと……」

「大変なことになるわ。」

「もう大変なことになっているんですよ、お嬢さん方。ゲヘヘヘヘ。」
「……」

キースの影からフランマルスと甲冑が現れる。そして、甲冑にウエンデイは戸惑いを感じてしまう。

「っ……2人……!」

「あたしに任せて! 開け金牛宮の扉、白羊宮の扉!! タウロス、アリエス!!」

「MOオ! 出番ですかな!」

「頑張りますすみません!!」

ルーシイは2人の精霊を呼び出す。フランマルスは驚いていたが、キースと甲冑は特に驚くことなくその場に立ち尽くしていた。

「モコモコウール100%!!」

「もっ!?ぶほお!!」

「MOOOOOOO!ウールタイフーン!!」

「ぶほほっ!」

アリエスが出したウールを、タウロスが戦斧を振り回して勢いよく巻き上げる。倒すための技でなく、アリエスのウールで拘束して、吹き飛ばす完全な足止め技である。

「今のうちよ!!」

「あい!!」

「フェイスの場所分かる!」

「ドクゼリ溪谷の大空洞よ!!」

「急ごう!!」

「はい!!」

そのままルーシィとウエンディは、ハッピーとシャルルに捕まつて、飛びながら移動し始める。

「……ふん。」

甲冑は、ウールの影響を全く受けていなかった。そのまま、普通に歩いて出てくる。

「MOオ!」

「な、なんでモコモコが……すみません……」

「あー、すみませんね。驚くことは驚きましたが……『吸収』させてもらいますぞ!!」

フランマルスがそう言いながら、モコモコに絡まれた状態で腕を伸ばす。

「接続!!」

「MOッ!?こ、これは……」

「ひうっ!」

「吸収!!」

フランマルスの腕が、タウロス達と同化する。まるで電撃のようなものが流れて、タウロス達は次第に力が抜けてきているのか、足を付く。

そして――

「レボリューション！」

「酷い見た目だ。」

「酷くありません!？」

タウロスとアリエスは、姿を消した。しかしそれは星霊界に帰ったのでなく、フランマルスの中に取り込まれたのだ。

アリエスを吸収したことにより、モコモコを気にせずに進めるようになったフランマルス。

「とりあえず……キースさんも先に行ったみたいですし、追いましやう。近道はあるのですよ、ゲヘヘヘヘ。」

「逃がしませんぞお!!」
「え!？」

モコモコを出しながら、フランマルスはルーシイ達の先回りをする。不意を突かれたのか、ルーシイとハッピーはモコモコにぶつかってしまう。

「なんでアリエスのモコモコが!？」

「ルーシイさん！」

「ハッピー!!」

「ウエンデイ、時間がない行って!!」

「はい!!」

ルーシイの言う通りに、ウエンデイはそのまま外へと飛び出す。だが、そのあとをすぐ追うように、甲冑が窓辺から飛び出す。

「あとは任せましたぞお！」

フランマルスの声も届く前に、甲冑は落下していく。しかし、走っていくのは些か時間がかかりすぎる。

そう考えた途端、甲冑の背中から機械質の羽が形成される。

「……」

そのまま甲冑はウエンデイ達に続くように、空を飛び始めるのであった。ウエンフェイスデイをエゼルあいつらから守るために。

喰の呪法

「……俺は、なんのために。」

ウエンデイ達よりも遅れて、ドクゼリ溪谷にたどり着く甲冑の悪魔。喋ることに慣れてきた、だがそれと共に自分がなんなのかが分からなくなってきた。

時間が経つ事に、2つの記憶が入り交じる。この世のありとあらゆるものを取り込み強くなっていく悪魔の記憶。ドラゴンに育てられ、ギルドに入った少年の記憶。

その2つの記憶が混じっている自分は、何のためにここまで来たのか。

「考える必要は……ない。」

頭を振り、そう呟く甲冑。考える必要が無い、という言葉の意味は彼にとっては2つある。それを彼自身は理解していない。

フェイスを止める少女の殺害、もう1つはウエンデイ・マーベルを守ること。

その2つの願いの矛盾に気づかず、甲冑は歩を進める。

しばらく歩くと、フェイスが見えてくる……が、その場所に悪魔が1人立っていた。

「あ？誰だお前。」

恐らく、エゼルという悪魔だろう。甲冑はエゼルの姿を見やっ……ウエンデイがボロボロになって踏みつけられていることにきづいた。

「……その少女をどうする気だ。」

「壊すんだよ！暴れたりなかったからなあ……ま、全然楽しめてないけどなっ!!」

「そうか……ならば、俺が相手をしてやろう。」

「……あ？何言ってるんだお前。」

「その少女は俺が殺す。守らなければならぬんだ。」

甲冑の言葉を聞いて、エゼルがイラついた様子で溜息を吐く。自分の楽しみを邪魔されたこと、そして知りもしない悪魔に命令されてい

ること。

そして、目の前のイカれた悪魔の存在そのものが、彼をイラつかせていた。

「うるせえ!!なんならお望み通り切り刻んでやるよオ!どうせラボで生きかえんだ!!せいぜい後悔しながら……いっぺん死ねやア!!」

「……気が荒い。」

身体中の刃を使い、呪法によって斬撃を飛ばすエゼル。それを、甲冑は見てからかわす。

「刃……剣……剣士……」

ふと、その斬撃に思うところがあつたのか……甲冑は記憶を無意識的に探っていた。

そこで、1つの記憶に辿り着く。

『エルザさんって、鎧以外にもいろんな武器を持ってますよね。剣だけじゃなくて、槍とか大鎌なんかもあるって聞きましたけど。』

『よく知ってるな。ルーシイか誰かから聞いたのか……そうだ、1つマルクにも聞きたいことがあるのだ。』

『聞きたいこと、ですか?俺に剣の知識とかないですよ?』

『いやいや、ただどう思うかが聞きたいのだ。この剣なのだが……重い上にでかいので振り回すしかないんだが、どう思う?』

『なんで自分の身長の数倍くらいあるもの買って持ってるんですか……でも、そうですね。』

薙ぎ払うくらいなら……』

『なるほど、ルーシイやウエンデイも同じ意見だった。やはり振り回すしかないのか……』

少年と、緋色の髪の女性との会話。その記憶から、自分が行うべきことを一つだけ考え、行っていく。

「……振り回す。」

甲冑の姿が変化していく。皮膚に張り付くような形だった鎧は、分厚いものに変貌していき……その手には巨大な剣が存在していた。

「アアッ!？」

「フンっ!!」

その攻撃は、全ての斬撃を打ち消していく。それどころか、エゼルすらもそのまま狙えるほどに長い剣だった。

「クソがつ!!」

「……やはり攻撃には向いていないな。素早く、狙わなければ——」
再び、自身の記憶の中を探る甲冑。今度は、悪魔と人間が戦っている記憶だった。

『クソっ!なんで銃弾が効いてねえんだよ!!』

『怯むな!!速度上昇の魔法を使って、攪乱していきながらその隙を突くんだ!!』

速度、そして銃弾というキーワード。今度は、確実に狙うための姿へと変わる。

鎧は再び薄くなり、いや初め以上に薄くなる。最早、鎧と言うよりはただの布をまとっていると言っても過言ではないほどの薄さ。

そして、頭からは長い楕円形のもものが2つ生えていた。

「……っ!」

「んだこのスピードはア!」

凄まじい速度で、エゼルの周りを縦横無尽に駆け巡る甲冑。大空洞ということもあり、上下左右前後の360。全ての足場を使って飛び回っていた。

その姿は、まるで真つ黒なうさぎのよう。

「ぐ、ああ!?!うぜえうぜえうぜえ!!」

「……しかし致命傷まではいかないか。」

「てめえてめえてめえ!!」

エゼルは激昂しながら、飛び回る甲冑を睨みつける。既に、完全な敵判定を受けているようで、甲冑にはそれが妙に清々しく感じられた。

「くそがつ!何だてめえの呪法はよオ!」

「……そうだな。敢えて言うとするば……『喰の呪法』とでも言ってやろうか。」

「何が『喰らう』だア!」

「なん、で……」

「ウエン、デイ……」

フラフラになりながら、倒れているウエンデイの近くにシャルルが近づく。ウエンデイは、起き上がることもすらもできずにシャルルに視線を向ける。

「シャル、ル……」

「空気……」

「あ……そうだ、空気……」

ウエンデイは大きく空気を吸い始める。それは、この場所自体の空気が濁っていないこと、そしてフェイスという凄まじい魔法兵器の場所にたまり込む、大量エーテルナノを取り込むという行為である。

そんなことをすればどうなるか？ウエンデイは空気を取り込んで、魔力を回復させる……ならば、過剰なエーテルナノの吸収はウエンデイの体に何をもたらすか。

「あああああああー！」

「な、なんだ…!?!」

「……ドラゴンフォースか!!」

ナツやガジル、ステイングやローグが使える滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーの力。それを今、ウエンデイは手に入れた。

ウエンデイの髪色は、濃い魔力のせいに変色して薄紫色へと変わる。

「なんじゃこりやア!?!」

「……危険大丈夫だな、ウエンあデイ少女は!!」

甲冑は、ウエンデイに向かって素早くジャンプする。仕留めるため

か守るためか。

だが、甲冑のとつた行動は自身の鎧を分厚くして、手には先程の大きな剣を手にとっていた。

「どいて!!」

「消えっ?!?!ぐうう?!」

甲冑は吹き飛ばされていた。自身の目ですら追えないほどの超高速。甲冑は無理矢理な高速移動だったが、ウエンデイはまるで川を泳ぐかのように素早く、かつ滑らかに移動する。

「がああああ?!」

そして、後ろからエゼルの声が聞こえてくる。どうやら、甲冑を蹴り飛ばした直後にエゼルの後ろに回り込んでいたようだった。

「くっ……」

「このガキ!!」

甲冑はすぐさま立ち上がり、エゼルは裏拳でウエンデイを殴り飛ばそうとする。

だが、即座にウエンデイの姿が消えて再びエゼルを後ろから殴り飛ばす。最早、地面にしようが空中にしようが関係なく、ウエンデイはこの空間の空気で自由自在に移動ができるようになっていた。

「おもしれえ!!」

だが、エゼルは先程とは打って変わって面白そうにウエンデイの所へと突っ込んでいく。

だが、エゼルが楽しんでいてもウエンデイにはそのような時間は残されていない。

「フェイス起動まで残り……4分30秒を切ったか。」

「ウエンデイ……もう時間が……」

「分かってる……これで……決める!!」

ウエンデイは空気を集め出す。エゼルの周りに竜巻を起こして、完全に閉じ込める。

「滅竜奥義!・照破・天空穿!!」

「俺の呪法は!・全てのものを切り裂く!!妖刀!・三日月!!」

エゼルは自身の腕を振るって、ウエンデイの滅竜奥義を出鱈目に切

り刻んでいく。

「あああああ!!」

その反動で吹き飛ばされるウエンディ。だが、エゼルはそんなウエンディに追い討ちをかけるかのように、その姿を変貌させていく。

「斬撃モード!!俺の妖刀の切れ味は更に増すぜえ!!」

「……私、は……この空間を支配してるんだ!!」

再びエゼルの周りに風がまとわりつき始める。だが、エゼルはその体そのものを振るって竜巻を切ろうとする。

「俺の妖刀に切れないものは……何っ!?!」

「ぐっ……」

だが、一撃目を甲冑が受け止めていた。鎧にヒビが入り、横半分が崩れ落ちていく。そして、人間の顔が現れる。

「てめえ!どつちの味方だア!?!」

「……俺は、妖精の尻尾の魔導士だ。」

「っ!?!てめえ、悪魔だったんじゃ……何っ!?!」

竜巻に体を奪われながらも、エゼルはその光景を確実に見た。崩れ去った鎧が、まるで意志を持っているかのように動き、流動体となつて一つの塊になっていくことを。

「ちくしよう!ちくしようちくしよう!!」

「このまま、くたばってもらうぞ!!」

そして、2人の体が完全に吹き飛ばされ……フェイスへとぶつかつる。エゼルはそれで気絶し、甲冑の方も……そのまま地面に叩きつけられる。

それと同時にウエンディのドラゴンフォースも解け、力が抜けていた。だが、カウントダウンはそこで止まらなかった。

「え……!?!」

「なんで……?フェイスを壊したのに、カウントダウンが止まらない!!」
「……フェイスの本体は、像ではなく……自立式魔法陣の方だった……のか……」

「く……あう!あれ、体が……」

力が抜けて、地面に倒れるウエンディ。フェイスもやはり止まる気

配がなく、カウントダウンが進んでいく。

「はあ、はあ……シャルル、動けるか……？」

「……あんた、なんで悪魔なんかに……」

「わかんねえ、よ……んなことより、シャルル……お前ならわかるんじゃないのか？」

フェイスの……止め方。」

甲冑……マルクがそう尋ねる。シャルルは、下唇を噛み締めて立ち上がる……が、それをマルクが止めてシャルルの目を見る。

「教えてくれ、止め方。」

「……どういふことか、分かってるの？」

「シャルル……？マルク……？」

「分かってる……だから、何とかしてウエンディを運んでやってくれ。お前にしか、出来ない。」

訳が分からない、と言う表情になるウエンディ。シャルルとマルクは、まるでこれから起こることが分かっているかのように、話し合いを続けていた。

「……分かったわ、けど私も魔力がほとんどない……どこまで行けるかは……」

「それでいい……」

その言葉を聞いて、シャルルはマルクに何かを話す。その言葉が、疲弊しているウエンディには少し聞き取ることが出来なかった。

だが、すぐに話し終えてシャルルはウエンディを掴んでフラフラと飛び始める。

「シャルル……!?マルクも一緒に……」

「マルクには……フェイスを止める手段を教えただわ。」

遠ざかったのを確認してから、マルクは立ち上がりフェイスに近づくと。そして、フェイスに浮かんだ自立式魔法陣を一瞥してから、作業に取り掛かる。

「フェイスは……今大量のエーテルナノを吸収している。」

その属性を、別の属性へと変換させる事で自立式魔法陣を崩壊させる……そうしたら、フェイスは自爆するわ。」

「シャルル……どうしてそんなこと……」

「未来予知……フェイスを起動させなかった未来を、検索して……その未来を見たの。」

「凄い……」

「けどね……本来だったら、そこで私達の未来は……終わりだったのよ。」

「……え？」

シャルルに言われたとおりに、黙って作業をするマルク。その傍らで、マルクから離れた鎧が……エゼルを食らっていた。マルクはそれに気づかなかった。

「真っ白……本来は、そこで死ぬはずだった。」

「死ぬ……って、え？」

「フェイスは自爆する……つまり、本来なら私達が死んでいた。」

何も考えずに、思い出そうとせずにフェイスを捜査していく。残り時間はもう少ない。

「けどね、マルクはさつきこう言ったのよ……『魔力を吸える俺なら、自爆の時にエーテルナノを食らうことが出来れば、問題ない』って。」

「戻って！お願いシャルル!!」

「ウエンデイ……無理よ。今戻ったら、何のためにマルクが貴方を生きさせようとしたか……」

シャルルの震えが、ウエンデイにも伝わる。マルクはあの時に言ったのだ。『俺かウエンデイか、選ぶならお前は迷わずウエンデイを取れ。』と。

「でも、でも……!」

「……ごめんなさい、ごめんなさいウエンデイ……!」

マルクは、出てきたボタンを少しだけ眺める。そして……遠慮なくそのボタンを押して、フェイスを自爆させたのであった。

分裂

フェイスは自爆した。大量に溜め込んだエーテルナノを、別の属性に変化させたことで、魔力の消失を防いだのだ。

だが、自爆の範囲内……自爆するように操作したマルクが、取り残されていた。

「……」

辺りは暗い。それはどうも、自分が目を瞑っているからではないようだった。

自分は死んで、ここは死後の世界なのではないか？とマルクはすぐに考える。だが、殺風景で真っ黒な空間に自分一人が立っていたとしても、なんとなく死後の世界ではない気がした。

「……」

誰もいない。本当に誰もいない。そう確実に思ってから、マルクの体から力が抜けた。

但し、倒れることはあっても地面に倒れ込む事は無かった。まるで、歩いてきた地面が急になくなったかのように、その場で一回転したのだ。

フワフワと、浮いている感覚。姿勢を維持出来ないまま、ただ回転し続けるしかなかった。

「……い！」

そして、声が出ていないことにも気づいた。今の自分には、何もかもが足りない。歩くための地面も、話す為の声も。生きるための基盤とも言えるべき2つが足りない。

「……っ……っ！」

誰もいない。そこには誰もいない。尊敬する人も、愛する人も、ととも言えるべき存在も、ライバルのような存在も。

そして何より、この場には敵も味方もいないこと。誰も自分を認知してくれず、また他の全てをマルクは認知することが出来ない。

「……本当に、そうか？」

「っ!？」

だが、その空間に響く1つの声。マルクは、その声のおかげで地面に倒れることが出来たし、声を発することも出来るようになった。

そして、後ろを見れば……そこには彼の親であるドラゴン、イービラーが鎮座していた。

「……マルク、あつしは……」

「……なんでこうして話せて、なんでイービラーが出てくるのかはわからないけどさ。」

いつも、見守ってくれてたんだろ？」

「……」

軽く頷くイービラー。しかし、その顔は渋いものであった。マルクは少しムツとしたが、すぐに表情を笑顔に変える。

「そ、それならいいんだよ。ずっと見守ってくれてたってんなら……俺だって安心するし。」

「……しかし、お前には……もう——」

「イービラー!? 待てよ、どこに——」

スツ……と突然消えるイービラー。それに驚いて、イービラーのいた所へ走ろうとしていたマルクだったが、そのマルクも意識を突然失ってしまふ。

最後の一際、マルクは自分が持つありつただけの不安を、内心で呟き続けた。特にこれといって意味は無いが、彼にとつてそれが今一時的にでも不安を解消できる1つのことだったのだ。

「……」

目を開けるマルク。ここはどこだ…と、起き抜けにそれを1番初めに考えた。

見渡す限りの平地。だがところどころ溪谷もあり、落ちたらまず助からないだろう。

「ドクゼリ溪谷から…いや、フェイスのあった場所は…?」

明らかに場所が変わっているのだ。フェイスのあった場所は、まず確実にフェイスの自爆のせいで吹き飛んだことだけは確実である。

「いのででででで?」

動こうとして、起き上がろうとして。手に力を込めようとしたその瞬間に、マルクの体に激痛が走る。

いな、そうやって痛みを認識して、叫んだ瞬間にも体中に痛みが増え続けていく。どうやら、声で響いて体が痛みを感じているようだ。た。

「っ……………」

まず確信した。『全部が全部折れているまでは行っていないかもしれないが、全身の骨やら筋肉やらが悲鳴をあげてしまっているのだ。』

「ごはっ……………」

軽く血を吐いた。一体何が自分の身に起こって、こんなことになっているのか。

痛みを耐えながら、ゆっくりと考えていく頭。そして、1つの簡単な答えに達する。

フェイスがあった場所といたところが違い、かつ高低差まで違う。

そして、体中が痛む…つまり、フェイスの自爆によつてそれ自体では確かにダメージはほとんどなかったのかもしれないが、吹き飛ばされてきたことが、大きな原因と言えるだろう。

「っ……………」

だが、マルクはこの時なぜ痛いのかだけを考えていたため、全く気づかないままだった。

自分の肌が、傷ついているところ以外はまるで生まれ変わったかのように綺麗になっていることに。

「……………」

喋らず、呼吸も最小限にしながらマルクは思考を巡らせる。動けない、助けに行けない……そもそもウエンディは大丈夫なのか、と。

「気になっているな、半身。」

「っ!？」

覗き込んできているのは、幾度となくマルクの頭の中にイメージとして現れた黒い怪物だった。

だが、それは明確な言葉を持って、明確な意思と表情を持ってマルクを覗き込んでいた。

「おつと……動かない方がいい。お前の体はかなりぼろぼろだからな。今、俺がお前を食わないのは……ただのお礼だ。」

とは言っても、なんで『お礼なんだ』って疑問があるが言えなさそうだな。」

「っ……っ!？」

確かに、今のマルクは喋ることもままならないくらいに体を痛めていた。ボロボロ過ぎて、喋れない。

「まあ聞いておけ。冥府タルタルの門のギルド内にあつた、あの頭だけのやつ……あれが俺の体だ。そして、お前の体にいたのが俺の意志と理性

……わかりやすく言えば、精神だな。」

お礼っていうのは、体と引き合わせてくれた事だ。何せ、復活出来たんだからな。」

聞きながら、マルクは考える。頭だけしかなかったのに、どうして体は全身残っているのかと。

「それで、なんで俺達が分裂したか、って話だが……あのエゼルって名前の悪魔の攻撃、あれを受けた際に俺とお前が分裂した。」

ほとんど覚えてないだろうが……俺はお前の鎧になってた、ってわけだ。」

「……」

「いやいや、確かに切れ味は凄まじかったな。倒れた後に、取り込ませてもらったがな。」

魂すらも食らって、復活するかどうか怪しいなありゃあ。」

そういう悪魔。そして、じっと睨みつけているマルクを見て、嫌な

笑を浮かべる。

「そう言えば、俺の名前を言っただけでなかったな……俺の名前はグラトニー、暴食の……グラトニー。」

昔は悪魔仲間がいたんだが……全員食って力にしちまったよ。つと、こう言えばお前は『仲間を食ったのか』って思うかも知れないが……人間は人間、悪魔は悪魔だ。思想が相交わる事は無い。『だから説教はやめてくれよ?』と付け加えながら、笑い声をあげるグラトニー。だが、突然真顔になってマルクを見下ろす。

「ま……そういうわけだから、今回だけは殺さないで置いてやる。」

あと一つ言っておくけどな……お前、もう魔法使えないから。」

それだけ残したあと、グラトニーはその場を去っていく。首を動かすことすら出来ないマルクは、呆然と見上げることしか出来なかった。

「っ……い！」

なぜ自分は、敵に見逃されなければいけないのか……何故あの時ラボに近づいてしまったのか……マルクは色々なことを悔やみだす。

だが、どれもこれも後の祭りである。唇を噛むくらいしか、後悔を噛み締めることが出来ないが、それだけでも自分の事を考えるしかなかった。

「……」

だが、今のマルクは動くこともままならないどころか喋ることすらもままならない状況だ。

何もしていなくても、体が激痛に苛まれる。動けばいいが、動かさうとすると激痛が走りそれどころではない。

「……クー……」

「……?」

マルクの耳に、聞き覚えのある声が聞こえたような気がした。だが、彼女が近くにいるとはとても思えない。

「……ルクー、マ……クー……い！」

気のせいではなかった。間違いない、確実に来ているとマルクは確信した。ウエンディである。

「いた!!マルク!!」

「よくそんな体で生きてるなお前……」

ボロボロの体を引きずって、ウエンデイはドランバルトに支えられて来ていた。ワープで飛びながら、迎えに来てくれたのだろう。

「ごめんね……今、なんとか治すから……」

「しかしウエンデイ、お前の魔法はこいつには……」

ドランバルトも知っているとおり、マルクにはウエンデイの治癒魔法が通じないのだ。

だが、ウエンデイが無心でかけた魔法……それは、マルクの体を確実に癒して、治していつていた。

「っ……効いて、る。」

「なんだと?おい、まさかお前だけ魔力が消えた……とかじゃないだろうな。」

「……魔力、というより……魔法が消えました。信じられなかったけど……俺は、魔法を失ったみたいです。」

「え……?ど、どういうこと?」

完全に治癒されながら、マルクはウエンデイとドランバルトに、先程まで起こっていた事を話す。主に、グラトニーの話だが。

「……そんな事があったのか。」

「今の俺は、空気が詰まってる風船みたいなもんだ。空気が無くて、萎んでる状態。それが今の俺だ。」

「だから、ウエンデイの治癒が効いた理由だと思う。だから、ドランバルトも俺を担ぎながら、魔法を使えると思うぜ。」

「……確かに、ウエンデイの頼みで安全な場所に運ぶことはあるだろうが……あんまり遠くには運べねえぞ?」

マルクは首を振る。安全な場所などクソ喰らえ、今の彼が行くべき場所はもう既に決まっているのだ。

「冥府の門だ、そこまで運んでほしい。」

「なんだと!?忘れたのか、今のお前は魔法が……」

「魔力が無くなったわけじゃない。それに、戦うための手段が無いわけじゃない。」

マルクはポケットから魔水晶ラクリマを取り出す。それは小指の爪ほどの大きさしかない。一体それがなんなのか、ウエンディ達は気になるが……今はマルクを信じるだけだった。

「……それと、だ。お前を迎えに来たのはもうひとつ理由がある。」

「もう、1つ?」

「すまんが、また何回か『飛ぶぞ』。」

ドランバルトは再び何回か飛び始める。マルク達は、胸に不安があった。各人それぞれ別の不安だが……その不安は、何かとても大きなことのような気がしていたからだ。

「……ハハハ、なるほどなるほど。こりやあ冥王も守りをそんなに固くしないわけだ。」

羽を広げ空を飛んで、グラトニーは下を見下ろしていた。復活してからの彼は気になっていたのだ。何故、フェイスの守りを悪魔1人にやらせていたのかと。

事実、1人はここに来ていた。それが、あの少女でなく彼女以上の実力者であれば簡単にエゼルはやられていただろう。慢心していれば、の話だが。

「だが、フェイスには自立式魔法陣が組み込まれている。破壊してもその魔法陣を破壊しない限り無理だが……そうじゃなかった。」

例えば複数人……エゼルを倒せる者、フェイスの魔法陣を止められる者、そしてワープ系の魔法を使える者。3人もいれば十分なのだ。だが、その可能性があったにもかかわらず……冥府の門の実質的リー

ダー、冥王マルド・ギールはそうはさせなかった。

「フェイスは複数あった。それでわざわざ最初に出現した1つを守る必要がなかった。」

グラトニーの眼下には、大量のフェイスが存在していた。その数、実に3000機。

故に、たかが1つを守る必要はなかったのだ。残り2999機あるという事なのだから。

「そうか……冥王、初めからこのことを知っていたな？他の悪魔より、切れ者と言うべきかなんというか……ま、見せてもらおうか。ゼレフ書の悪魔の足掻きつてやつをさ……」

呪法を持つ自分には、最早何も関係がなかった。魔法が消えようが消えまいが、彼にとってはその程度のこととは道端の小石くらいにしか感じてないのだ。

たった一つ……自分を喰らい殺したドラゴンという種族がなければ……他は彼にとってはどうでもよかったのだ。

「さて、じゃあ早速見せてもらおうとするかね……」

翼を広げて、グラトニーは飛び立つ。冥府と妖精の戦いを見定めるために……

覚悟

シャルルがウエンディを掴んで空を飛んでいる。眼下には、ウエンディ達が頑張って1つ破壊したフェイスが山のように存在していた。「私達…あんなに頑張って、1つを壊したのに……こんなには、沢山……もう、終わ——」

「言わないでシャルル。もう、絶望なんてしたくない。」

そう言つて、ウエンディは手に風をまとわせる。マルクは何をするのかと一瞬考えたが、即座にウエンディは自身の髪を、その魔力で切つて肩までの長さに揃える。

「ウエンディ!？」

「弱音も吐かないし、涙も流さない。みんな戦つてる……だから私も諦めないよ!」

「だな……諦めてなんかいられない。それをするくらいなら……」

「冥府の門と戦う!!」

ウエンディとマルクの声が重なる。それは、覚悟の決まった顔であつた。

ウエンディとマルクは、2人でドランバルトに向き直す。それだけで言いたいことが伝わつたのか、ドランバルトは頭を掻く。

「妖精の尻尾のところに戻るんだな。」

「はい、これだけの数なら……ウオーレンさんの魔法を使って、他のギルドに連絡を取つて破壊してもらわないといけません。」

「圧倒的にこっちの数が足りないから……評議院の本部はやられちまったが、支部は生きてるはずだ。そっちにも連絡をつけてもらえるように頑張らないとな。」

「……」

「マルク?どうしたの?」

ふと、顔を逸らして冥府の門のギルドがあつた方向を見るマルク。その顔は諦めと、悔しさが入り交じつた表情になつていた。

「いや、本当に俺魔法が使えなくなつてるんだなつて。」

けど、一々落ち込んでばかりもいられないんだ……それでも、戦わ

ないといけない。」

「うん…そうだね!!」

マルクは拳を握りしめる。それは、悲観ではなく『それでも』とやる気を引き出すための言葉。

絶望にはまだ早い、諦めるにはまだ絶望が足りない。そう全員が感じ取っていたのであった。

「これが冥府の門……はつきり見ることは結局なかったな。」

「大丈夫ですか？ドランバルトさん。」

「ああ……」

「あの四角い物体がバラバラになって地面に落ちてる……」

「みんなまだ、あの中にいるんだよ。」

ウエンデイと達は、ドランバルトの魔法により冥府の門へと来ていた。しかし、そのギルドは既に墜落しており、バラバラになっていた。

「ウォーレンさんも、きつ……」

「ウエンデイ!?!おい、どうし……」

突然、マルクとウエンデイが倒れる。2人の心臓は、高鳴っていた。何に対してかはわからない。だが、体は何ともなかった……何かに対して、2人の体は、何も起こっていないにもかかわらず異常を起こしていた。

「ウエンデイ、マルク!しっかり!!どうしたのよ!!」

「ウエンデイ、マルク……っ?この音は一体……」

「あいつが、あいつが……!」

うわ言のようにつぶやくマルク。ドランバルトは何か大きな音が鳴っていることに気付き、その方向に目をやる。それだけで、何が来ていることが理解出来てしまった。

「ウエンデイ！マルク!!どうしちやったのよしっかりして二人とも!!」

「ウソだろ……奴が、来る……!」

その姿は正に雄々しき竜。黒い姿、青い文様……そして、その大きな翼と爪は、全てを破壊するために備え付けられているものである。やってきたのは破壊と絶望……それら2つを体現したかのような存在。そう、『アクノロギア』である。

「オオオオオオオオオオ!!」

吠えながら旋回し、通った場所を風圧だけで破壊していく。凄まじい速度とそのパワー、何をしに来たのか、何を求めてきたのか。

そのふたつが、不明のままやって来ていた。

「アクノロギア!?!」

「クソっ!なんでだ、なんで来たんだ……!」

シャルルとドランバルトのふたりが、驚きを交えながら悔しさやあの時の恐ろしさを思い出しながらも、拳を握りしめる。

それだけ、恐ろしい相手なのだ。

「……」

だが、その中でマルクは何か語りかけていることに気づいた。だが、熱に浮かされた体や、高鳴る心臓の音でよく聞き取れていなかった。

『』

「何を、何を言ってる……!」

「マルク……?」

聞き取れない、聞き取れないが……その声は温かさに満ちているように思えた。

この声を知っている、言っていることは聞き取れないが……自分はこの声をよく知っていると、そう感じ取っていた。

だが、その声に耳を傾けられない。それほどまでにマルクとウエン

デイの異常は大きくなってきていた。

「くそっ……！今ここで狙われるとかなりまずいぞ……！」

「あんたの魔法で一旦離れるしかないんじゃないの!？」

「無理だ、飛んでいるだけで周りを破壊するんだぞ……！下手なところに逃げても、逃げきれずに終わりだ!!」

この危機的状況のせいかわ、シャルルとドランバルトは言い合いに発展仕掛ける。だが、すぐに冷静さを取り戻してお互いその時点でやめる。

事態の解決自体にはなっていないが。

「くそ、どうしたら……！」

「アクノロギア……なるほどなるほど、あれは確かに人間にも……ドラゴンであっても手を焼く奴だな。」

だが……それと戦うのも一興だが……さて、どうするべきかね。」

遙か上空から、グラトニーは見下ろしていた。アクノロギアの破壊行為を。

旋回しただけで、全てを爆散させていく。飛んでいる時の風圧だけで周りを破壊していく。

「強い、強すぎる……戦えば間違いなく俺は負ける……が、それでも戦ってみたい。」

しかし死ぬのは困る。生き返ったばかりなのだから……む？」

飛びながら考えるグラトニー。しかし、ふとアクノロギア以外の……

しかしアクノロギアと似たような気配を感じる。
つまりは、ドラゴンの気配というやつである。

「おかしいな、ドラゴンはこの時代では全滅していたはずだが……？
それも、気配が……増えてきている。これは……この場にいる第2世代を
除いた滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーとやらの数か……？」

周りを見渡すグラトニー、しかし……真下に新たにもう一体現れたこ
とに気づいた。しかも、とびきりの強者の気配。

「熱っ!?これは……炎、か!？」

グラトニーは下を見る。そこでは、アクノロギアに攻撃を仕掛けて
いるドラゴンがいた。

「……くくく、ははは……！そうか、お前か……！お前か炎竜王イグニール
!!」

そう、イグニール。ナツの親代わりのドラゴンであり、そして炎竜
王とまで呼ばれたドラゴン。

「どこから出てきた!?いやいや待てよ……この場にいる第2世代を除い
た滅竜魔導士と同じ数のドラゴンの気配……つまり、そうかそうか……
『お前』もいるのか!!」

歓喜の声を上げるグラトニー。下にいる滅竜魔導士達に視線を向
けていく。ナツ・ドラグニル、ガジル・レッドフォックス、ウエンディ・
マーベル、マルク・スーリア。

そして、いつの間にか来ていたステイングとローグ。今この場にい
る滅竜魔導士の数は合計で6人。ドラゴンの気配も6人。

「ふははは……待ってる待ってる……！マルクがいるならば、『お前』も
いる！待ってる紫電竜ヴァレルト！」

そのまま高笑いをしながら、飛び去るグラトニー。イグニールや、
アクノロギアのごとは既に頭から抜け落ちており、一心不乱に向かう
だけだった。

「……あれ？」

「なんだ……？急に楽になった……」

突然体に異変が起きたウエンデイとマルク。しかし、元に戻る時もまた、突然だった。

「ちよ、ちよつと2人とも大丈夫なの？」

「う、うん……」

「何だったんだ……」

「よし、今は合流するぞ。」

ドランバルトはそう言つて、他のメンバーがいるところにジャンプする。何やら喜んでいる妖精の尻尾がいるが、ウエンデイ達はそれに割り込む形で入り込んでいく。

「まだ、フェイスが残ってます。」

「ウエンデイ！マルク!!」

「シャルル！それにあんた評議院の……」

「二つーかその髪どうしたんだー!?!」

ドロイ、ジェット、ウオーレンの3人がウエンデイを見て、声を荒げる。彼らにとつては、衝撃的なことだったようだ。

「今はそれより大量のフェイスをどうにかしないと……」

「大量!?!」

自分たちに起こったことを話し始めるウエンデイ。そして、これから行うこともまとめて話していく。

だが、それにウオーレンは渋い顔をした。

「作戦はわかったけど、無理だよ……俺の念話はせいぜい5kmしか届かねえ。大陸中の魔導士に呼びかけるなんて……」

「そんな……」

「何千機ものフェイス……」

「もう起動しているんだ、発動まで間もないはず……」

「どうすれば……」

「くそっ！くそっ！！俺のしよぼさが情けねえ!!」

『まだ諦めるには早い。』

「この声……」

頭の中に響いてくる声。念話で、話しかけるものが1人。マカロフだった。

いつの間にか移動しており、どこかで対策を練っていたようだった。

「こちらにも奥の手が残っている。妖精の尻尾最終兵器、ルーメンイストワール。」

「ルーメン・イストワール?」

「何ですかそれは。」

『詳しく説明しとる暇はない、今すぐギルドに戻ってこい。』

いつになく真剣なマカロフ。いまこの状況を打開するための策として、それほどまでに強烈なのだろうかと一同は内心考える。

だが、ギルドは既にバラバラになっている事が憂鬱な気分にする。

「けど、ギルドは粉々に……」

「よせよ。」

『ギルドの地下じゃ、急げ。』

「……俺は残る。」

「エルフ兄ちゃん!?!」

だが、何か思うところがあつたのかエルフマンはこの場に残りたいと言いだめた。

それもそのはず、ギルドを破壊したのはセイラに操られたエルフマンだったのだ。それを、エルフマンは自分のせいだと嘆いていた。

「なんで?」

『ギルドの破壊は主のせいではなからう。』

「それでも、俺は……」

「わかった…気が済むようにせい。」

「エルフ兄ちゃん、気をつけてね。」

「おう。」

「急ぎましょ。」

マスターに支持されて、全員がギルドへと向かい始める。フェイスが発動するまで、もう残り時間も少ない。

急がなければ、ならなかった。

「おいおいおいおい！どうしたんだヴァレルト！その姿は！！」

「お前か……お前も、復活したのか……」

「ははは、お前が心配しているようなことは、何も起こってはいないさ。マルク・スーリアは生きている。もつとも、俺が抜けたせいで魔法は使えなくなっちゃったがな。」

とある場所にて、グラトニーは邂逅していた。目的の者と。だが、嘲笑うかのような、本当に嘆いているかのようなその態度は他者の神経を逆撫でする。

「お前はもつと分かりやすい色をしていたはずだ、何故真つ黒なんだ？一体何があつてお前は真つ黒なんだ？そして……何故生きていられるんだ？その体で。」

「…ほう、分かっているのか。あつしの今の体を。」

「分かるも何も…既に魂は風前の灯火だ。のにも関わらず、お前は何かを成そうとしている…何をだ？」

「我が息子達を助ける…ただそれだけだ。」

「息子、あいつが息子？ いやいや、ドラゴンと人間は血縁関係なく親子にはなれはしない…それに、助けるだど？ フェイスを破壊するつもりか？ ドラゴン全員で。」

グラトニーは大きさにリアクションをしながら、話しかける。その顔には、困惑だけが見て取れた。

「その通りだ。」

「無理だ、とは思わない。むしろ余裕で破壊し尽くせるだろう。だが、それを行っただけでお前は死ぬ。いやお前だけじゃない…ドラゴン全員が消え失せる。」

「そんなことは、とうの昔にわかっている……」

「ならば何故——」

グラトニーの横を、ヴァレルトの吐いた魔力の塊が通り過ぎる。しばらくして地面に激突したのか、とてつもない轟音が響き渡る。

「やかましいぞ暴食の悪魔よ。」

お前にあっしの行動を止める権利なし、そして…お前はまだ間違えているぞ。」

「間違い、だど？」

「ヴァレルトという名は、過去のものだ。既にそんな竜は死んでいる……我が名はイービラー、魔龍イービラー!!」

大きく吠えるイービラー。その声を聞きながら、グラトニーは舌なめずりをして戦闘態勢に入り始めるのであった。

消えたドラゴン

マカロフに言われ、妖精の尻尾フエアリーテイルのギルド地下まで向かおうとしていたルーシイ達。

フェイスの発動までに、時間はもう残されていない。そう思い大急ぎで向かっていたのだが……

「うわっ！」

「ルーシイ!?!」

「なんか、力が抜けて……」

突然倒れるルーシイ。その表情はとても苦しそうなものだった。そして、直後に仲間達が自分達の不調に気づき始める。

「オイオイ嘘だろ!?!力が出ねえ!」

「念話を通じねえよ!?!」

「まさかフェイスが……!?!」

「そんな……」

『間に合わなかった』と思い込んで肩を落とし始める。そして、魔法が使えなくなってきたということ……

「きやつ!?!ちよ、やだ……アニマルソウルが解けたら私……!」

リサーナは、捕まえられていた。その時に服を奪われていたのか、常時アニマルソウルで乗り切っていたようだが、魔法が使えなくなりアニマルソウルも解けてしまう。

「……」

「あ、ありがとう……」

「エーテルナノが薄くなってる。」

ドランバルトは、自分の上着をリサーナに着せる。しかし、それらの事が気にしていられないほどのなのか、ウエンディを遠くを見ていた。そして、マルクも今気づいたかのように、ウエンディとは別の方向を向き始める。

「この感じ……」

「この気配は……なんで……」

2人の顔は驚きよりも、困惑の方が勝っている表情だった。それに

気づいたのか、仲間達も不思議そうな顔で見ている。

「グランデイーネ天 竜…？／魔龍《イービラー》…」

2人は、自分の親の気配を感じとっていた。それだけで、いつもの状況なら喜んでいただろう。だが、今のこの状況で喜んでいなかった。フェイスが発動した後に、気配を感じ取れた。まるでフェイスの事を初めから知っていたかのようなタイムミングである。

「なんで、なんでだよ……！」

「ど、どうしたのよ二人とも…」

「イービラー……！」

マルクの心臓が高鳴る。しかし、その高鳴りは先程倒れた時とは全く関係がない高鳴りである。

「ん？お、おいおいおい！なんか来るぞ!!」

ウォーレンが、とある一方方向に指を指して焦り始める。そこには確かに『飛んでくる何か』が存在しており、一同の方向に向かってきていたのだ。

「ごめんみんな！先に言つといてくれ!!……おいイービラー！」

「マルク!？」

そして、マルクは見ていた方向に…ウォーレンが指を指していた方向に向かって走り出す。

このままだとみんなが巻き込まれる、という気持ちとなぜ今まで出てこなかったのか、自分はなんなのか…という疑問が頭の中でぐちゃぐちゃになって起こった行動である。

「ぬう!？」

「ほらお出ました。お前と争うには、こいつとは近すぎたんだ。」

そこには、マルクを育てたドラゴンであるイービラーと、悪魔のグラトニーが存在していた。

「早く行け！ギルドに向かうんだろう!!」

「うるせえ！お前らの戦いの動きが早すぎて巻き込まれかけてんだよ!!」

「ははは！その通りだ！ヴァレルト…いや、イービラーよ。自分達が戦うためには大陸一つ分は必要だ。派手に移動するからな。」

「ぐっ……！」

「ヴァレルト…やっぱりお前はヴァレルトだったんだな!!」

口ごもるイービラー。凶星だったようで、その表情は気まずそうなそれだった。

「事情は後で話す！今はとりあえずどこかに……！」

「え、お前いくらなんでも遠慮がぐがっ!？」

マルクは、イービラーの体を足場にしてグラトニーを蹴り飛ばす。この時点で履いていた靴が一つダメになってしまったが、大して気にしてもいなかった。

「俺だって戦える!!こいつには拳も蹴りも通じる！なんでも食らうとか言つといて……！一枚でも間になにか挟めば、殴れるじゃねえか!!」

「へえ……なるほどなるほど、俺にそんな対策してくるのか。いやはや、人間の進歩は早いねえ。」

「なんだと……?」

「マルク、あいつの言葉に耳を貸すんじゃねえ!!」

怒鳴るイービラー。何か、意味がある言葉ではあるのだろうとマルクはここで察した。意味の無い言葉に対して、『耳を貸すな』というのも変な話。『無視をしろ』というのであればまた別だとマルクは考えたからだ。

「…どつちにしろ、今はあいつを倒す。フェイスが完全に発動する前に。」

「それに関しては……無問題だ。あっしいがいにも、ドラゴンは復活している。」

「……なんだと!？」

イービラーの言ったことに、驚くマルク。それに対して反応したのはイービラーではなくグラトニーの方だった。

「んー、当たり前前だろう？何故イービラーだけが、復活したと勘違いしている?」

そこの嬢ちゃん…ウエンディ・マーベルのドラゴンも復活してるんだぜ?そっだよ、なあ!!」

「はっ!？」

グラトニーはウエンディに向かって攻撃を放つ。既に、ウエンディも行ったとばかり思っていたのでマルクは、不意を突かれる形となった。

だが、それでもウエンディを守ろうと即座に動く。だが、ウエンディと一緒にあの攻撃をかわすほどタイミングは良くない。

「ウエンディ!!」

「マルク! 私だって、やれるんだよ!!」

故に、突き飛ばしてでも守ろうとした瞬間だった。ウエンディはそれで反応できていたのか、大きく横に飛んで回避出来ていた。

それで、マルクは安心出来ていたが同時に考えを改めることになった。たとえば自分と同じ年だったとしても、小さい少女だとしても……ウエンディは歴戦の『戦士』なのだ、と。

「マルク、私も……!」

「いや……だつたら余計に、離れていてくれ。」

「どうして!?!」

「行つてやれよウエンディ・マーベル。こいつは、今みたいに俺がお前に攻撃をするかもしれない、と考えている。」

今の攻撃は、かわせるくらいのものだつたとしたら? そう考えると夜も眠れないって考えてるんだよ。」

グラトニーは、身振り手振り大げさに動かして説明をする。それに納得してしまったのか、ウエンディは小さい拳を握りしめながら唇を噛んでいた。

「大丈夫だウエンディ……絶対に戻る。」

「あ……うん!」

ウエンディはその言葉で十分だったのか、伝わったようだった。そして、踵を返して皆の元に戻り始める。

「……さっきの攻撃、本当に手加減していただろお前。」

「さて、どうだろうな。あれが俺の全力がしれないし、お前の言う通り手加減していたかもしれない。」

「相変わらず、心の読めねえやつよ。」

「心は読むものじゃないからな。そんな当たり前のことすらわからない」

いとほ…ドラゴンというのは馬鹿なのだな。

そうそう、ドラゴンついでに1つ昔話でも——」

「ぐあ!!」

イービラーは大声を出しながら、グラトニーにその大きな爪を向ける。体をうねらせながら、大きく叩きつけようとする。

「危ない危ない、まったくドラゴンというのは気性も荒いのか…まるで野生動物だ。」

「てめえの方がよっぽど野生動物だグラトニー! またお前を食い殺してやる!!」

「できるのか? やれるのか? ヴアレルトから、イービラーというドラゴンになって弱体化したお前が!!」

「弱体化…?」

「だから、あいつの言葉に耳を貸すんじゃないやねえ!!」

イービラーは叫ぶ。だが、その言葉は既にマルクの心にあつた小さな不信感を大きくする役割しか果たしていなかった。

「イービラー、終わったら話してもらおうぞ…全てを!!」

「…それで、お前が満足するならば。」

「終わったら!? 終わったらと言ったのかマルク・スーリア!

無駄無駄! 弱体化してただの俺の劣化版となったドラゴンと、魔法の使えない魔導士、それに対して俺はありとあらゆるものを触れるだけで、この身に蓄えそして自身の呪力とすることが出来る能力だぞ!!

相手になるわけがない!!」

「無駄かどうかは…やって見なきゃあわかんねえだろう!!」

イービラーは更に体をうねらせて近接戦闘を挑み始める。しかしグラトニーはそれを尽くかわしていく。

かわす必要性がないはずなのに、である。

「あいつ、なんでわざわざ避けて…」

「同じ力のぶつかり合いならば、たとえ小さな方であっても能力同士の矛盾が発生して、起こらなくなるようだな。」

喰らい合う力同士のぶつかり合いになれば、単純にパワーの方が勝つらしい。

先程、一撃だけを入れることが出来た。」

「そういう事だ。単純に舐めているからじゃない。だが分かっているなイービラー。お前の体に、俺が呪法を当ててしまえばお前の体に穴が開くってことを。」

「……そんなことー！」

「うおっ!!」

マルクが振りおろとされかねない激しきで、イービラーは戦闘を続けていく。だが、決して振り下ろされないようにマルクはイービラーの体を必死で掴む。

「ぐぐぐっ……いー！」

「ぐうおっ!?!」

「爪ばかり意識を向けていると、別のところから攻撃が来るぞー！」

イービラーはその蛇のように長い体を活かして、爪で攻撃しつつ尻尾で同時に攻撃を繰り出す。

意識を向けていなかったのか、グラトニーはそのまま吹き飛ばされる。ダメージはあったのか、吹き飛ばされた直後に血を吐いていた。

「ぐはっ……ははは、そうだ、そう来なくっちゃいけな——」

「らあっ!!」

「ぐうっ!?!」

破れていない方の靴を履いている足で、マルクは飛び蹴りをグラトニーに加えていた。

触れたところから食らって行くだけであり、肉弾戦ではダメージを与えることが可能ということだけはわかった。

「はあ、はあ……」

「へえ……思っていたよりも、強くなっていたじゃないか。何のために、そこまで強くなったのかはともかく……だがな。」

「強くなりたいたい理由に、だめな事があるみたいな言い方だな。いや、ダメな事がないとは言わないがな。」

イービラーは、両手をあげて『やれやれ』といったポーズを取る。それがマルクに本気で呆れているのか、はたまたただの挑発行為なのかは分からないし、マルクにとってもどうでもいい事だった。

「いいか？強くなる理由には、純粋な気持ちと不純な気持ちの二つがある。

強くなりたいから強くなろうとする、つてのは純粋な気持ち。誰かを殺したい、誰かにいい顔をしたい……つてのは不純な気持ちだ。仲間を守るつて言うのも、いい顔をしたいつて部類だ。」

「……そうか、よ……！」

マルクは、道端の石を拾ってそのまま喋ろうとするイービラーに向けて、全力で投げる。

「いやいや、蹴りとかは靴がクッションになっていたおかげつて言うのを忘れるなよ。」

「やっぱりダメか。」

だが、石はイービラーにダメージすら与えずに飲み込まれていく。やはり、何かワンクッション置かなければならないようだ。

その行為に業を煮やしているのか、イービラーがマルクを掴んで自分の頭の上に戻す。

「うおっ!？」

「試すのは勝手だがな、あまり無理はして欲しくないな……！」

「親ばかか！これが親ばかというやつか!!」

高笑いしながら、グラトニーはイービラーを狙う。もはや弱点同然のマルクは、いないものであるかのように扱いながら。

「マルク・スーリアー！貴様は後で殺してやろう！だが今は、こいつだ！俺を食ったこいつを殺してくらつて俺の方が強いということを見せる！」

「その思いは、不純な気持ちつてやつじゃねえのかよ……！」

「悪魔にまともな思考は求めるんじゃない!!」

イービラーと、グラトニーとの戦い。それを眺めるマルクという形になりながら、未だこの戦いは続いていくのであった。

悪の真実、魔なる勇氣

「ぐがあ!!」

「もつとだーもつとだ!!」

殴ればかわし、反撃として攻撃しようとしたら先に攻撃をされる。先程からのやり取りは、このようなものばかりだった。

イービラーが殴り、地面が大きくえぐられる。それを軽々とグラトニーはかわしていく。

「くそ、くそっ……!」

「何も出来ない悔しさか?それとも怒りか?もしかしたらどっちもか!?だが、お前は俺に触れない!何も力を持たない『人間』では土台無理な話だ!!」

それを、イービラーの頭で眺めているマルク。だが、1番嫌そうな顔をしているのは彼だけだった。

自分では何も出来ていない、イービラーの力になることが出来ないことが、彼は1番悔しがっていた。

「マルク!お前は力を持たんでいい!あつしが守るからだ!!」

「守られてるだけで、いい訳ないだろう!!俺だってイービラーを守りたいんだ!そのために強くなったんだ!!」

「だがその力は元々俺のだから!!人の力で強くなっていい気になったのか!?滑稽だ!!」

「っ……」

「反論出来ないか、出来るわけないな!悪魔の力を借りていたのだから!!」

グラトニーは、ハイテンションになりながら攻撃を避け続けている。ずっと激しい攻撃をかわし続けているにも関わらず、彼には疲労のひとも見当たらなかった。

「ぐ……」

「ははは、疲れてきたかイービラーよ。当たり前だな…お前は俺との戦いで、確かに俺には勝っていた。

だが、それはお前の電撃あつてのものだ。今のお前では俺には到底

相手にならない、下位互換なのだからな!!」

「俺が、俺が戦えていれば……!」

「……それに、及ばん!!」

吠えるイービラー。それにマルクは下唇を噛み締める。頼られないのが、彼にとつて今最も避けたかったことだ。

割り込んだのは自分である。しかし、自分の親だけが戦っていて何もしないまま逃げるのだけは、したくなかったのだ。

「さてイービラー、貴様はあとのくらい戦える? 何時間、いや何分か?」

「何を…」

「……それを聞いて、なんになる。」

「分かっているぞイービラー、お前は既に『死んでいる』」

グラトニーの言葉を聞いて、マルクは本気で何を言っているのかわからなかった。

目の前にいるにも関わらず、イービラーが死んでいるとはどういうことなのだろうか、と。

「貴様!」

「怒るなよ怒るなよ……ならどう説明するつもりだった? どうせ正直にしか喋れまい。」

「だったら……俺から語っても問題なからう。」

「だからと、だからと言って!!」

「怒るな怒るな……あ、いややっぱり怒れ。そちらの方が戦いがいいがある。」

「本気を出していないのはわかっている!! あつしをなめているのか!!」

困惑しているマルク、しかし執拗なイービラーの怒声の中に否定する言葉は入っていないなかった。それどころか、寧ろ肯定とも取れる意見を言っていた。

「なめているさ、当たり前だ。貴様の雷は死んだ、そしてそれがなくなった貴様には、ある意味で絶望している。」

「貴様の絶望なぞ——」

ふと、マルクは浮遊感を覚えた。だが、イービラーから手は離していない。それでも落下し始めていた。

ならば、自身でなければ落下しているのはなんなのか。

「絶望しているさ……かつての強敵が、こんなに簡単に殺せるのだから。」

「イー、ビラー……？」

「ご、は……!？」

「貴様の雷が強くなったのなら、俺はやられていたかもしれない。その雷の延長線にて、俺のような能力を有していたのなら、圧倒的にやられていたかもしれない。」

『そうでなければただの雑魚だ』と、一蹴した。地面に落ちたイービラーの頭から、マルクは投げ出される。

「……親を守れない悔しさはどうだ？それとも絶望に沈むか？」

「イービラー……イービラー!!」

「聞こえていない、か。それもまたよし。」

マルクは即座に駆け寄る。だが、首から下と首から上が離れ離れになっているのだ。もはや息がないのが当たり前だろう。

「あ……ああ……!!」

『俺に力があつたのなら』と思つたな？思つてしまったな？その表情、絶望に染まつているな？

ここから覚醒すれば、お前は戦士だろう。だがしかし、このまま潰れれば……お前はその程度の人間だったということになってしまうな？」

グラトニーの言葉は、マルクの耳には一切入っていない。彼の目には、目の前にいるイービラーだけが倒れていた。

まだ何も話していない、まだ何も聞いていない。話したいことも聞きたいことも山ほどあつたのに。

「っ!?!イービラーの体が、光って……」

「やはり、魂だけの存在か。」

「魂だけ、だと……？」

「その通りだ。そうだな……もう長居する必要も無いし、語るだけ語つ

てやろう。

フェイスも全滅したようだし、冥王マルド・ギールもやられたよう
だ。」

冥府タルタロスの門があつた方向を向いて、グラトニーはそう呟く。しかし、も
う気にもならなくなったのかマルクの方に再び振り返る。

「簡単に説明しよう、イービラー…いや、ヴァレルトと俺の過去をな。」
「そんなもの……！お前がただ話したかろうが、俺には関係ない
……！」

「うーん、そこまで興味を持たれないのか。流石に少し落ち込みそう
だ。」

誰が見ても嘘だと思える。そんな様子で、全く声のトーンを変えず
に言われても、信用ならないのだ。

「イービラー、イービラー……！」

「ふむ……」

「イービ……ん……？」

ひたすらイービラーの名を叫び、悲しんでいたマルク。だが、少し
してから気づいたのだ。イービラーの体が消えていく矢先、消えた部
分の光の粒子が『魔力の塊』だということに。

「魔力…魂……」

「…マルク・スーリア、今貴様は何を考えた？」

マルクが何かに気づいた事を、気づいたグラトニー。その言葉は激
しく言っているが、その顔は口角が上がっていてどこか楽しみに待っ
ている子供の様だった。

「…はあ、ぐっ!!」

マルクは、その場で『喰らい』始めた。何を？イービラーの体を構
成していた魔力を、魂を、である。

「…ふ、ふははは、はははは、ははははは!!親を食らうか!そうかそ
の魔力を体に取り込めば、魔法が戻ると思っているな!」

戻らん、戻るわけがないぞ!!何をするかと期待した——」

高笑いをし、実に楽しそうにしていたグラトニーだったが…一瞬で
真顔に戻る。

「――俺が馬鹿だったよ。もう、何にも期待せん……死ぬ。」
「っ!!」

マルクに向けられる攻撃。その攻撃は、確かな殺意と……明確に相手を殺すほどの濃密な魔力が込められていた。

そうでなくとも、グラトニーの攻撃はまともに防御することが出来ない。

「……………」

『これでマルクも死んだ』と、グラトニーがそう思いマルクもそう感じた瞬間……

「――あつしは、あいつの言う通り既に死んでいる身。アキノロギアによって、奪われたのだ。」

真つ暗な世界、確かに目の前で死んだはずのイービラーがそこにはいた。だが、マルクに返事をするには何故かできなかった。

「だが、あいつの滅竜魔法によって魂を奪われる前に、なんとかマルクの体に避難した……それは、グランデイーネやイグニールも同じだろう。」

それが、あつしがお前さんの目の前に現れた理由。それが真実だ。」
続けざまに、イービラーは語っていく。答えられなかった疑問だけでも、解消していくかのように。

「お前さんは、元々人間だった。だが、とある理由により大怪我をおつてな……その際、あつしの血を使って肉体を蘇生することにした……失いたくなかったのだ、お前さんを。」

ふと、頭の中に記憶が浮かぶ。だが、マルクが目の前にいることと、視点が妙に高いこともあり、これはイービラーの記憶だと判断出来た。

死んでこそいなかったが、体と頭から大量の血を吹いていた。マルクも生きていることが不思議なレベルである。

「その結果、お前さんは悪魔となつてしまった……予想、できていなかった。出来なかったのだ……！」

謝るイービラー。自分を守ろうとしてくれたことを謝られるのは、どうにも複雑な気分になる。

自分を責めるな、と安易に言えないからだ。そもそも、返事もできない訳だが。

「……そして最後、あつしとグラトニーの関係性。」

あつしがまだ……ヴァレルトと名乗っていた頃の話だ。その頃のあつしは、ただ強くなりたかった。人間共存派のドラゴン達と戦うために、強くなりたかった。」

イービラーは遠い目をする。あの時の自分を考えて、彼は何を考えているのか。それは、イービラー自身にしかわからないことだった。「そんな時に、全てを食らう悪魔がいると聞いた。その悪魔を逆に食らい、強くなるうとした。」

実際……その勝負に勝つて、あつしはやつを食らった。食らったが……」

まるであのころを悔やむかのように、何故あんなことをしたのかと考えているようにも、見て取れた。

「……結果として……あつしは弱くなった。いや、新しいドラゴンとして生まれ変わったと言うべきか。」

自分の体を見渡しながら、イービラーはそう呟く。400年前から来たドラゴン、ヴァレルト。その本気の力を……いや、ヴァレルトだけではない。他のドラゴンたちも、おそらく本気らしい本気は出していなかったと、マルクは思った。

それほどまでに強力だったのは分かるが、だからといってイービラーが弱いと思つたことは一度もなかった。

「いいや弱くなったさ……そして、変わった自分を見て過去の自分を嘆いた。『なんと馬鹿なドラゴンだったのだろうか』と。」

1度見上げてから、再びイービラーは視点を戻す。その目は、慈愛のようなものを感じた。

「イグニールのように強くありたかった。グランデイーネの様に雄々しくありたかった。メタリカーナの様に堅牢でありたかった。」

子供が親に憧れるように、何かを尊敬する気持ちがヴァレルトにもあった。それが、結果としてイービラーというドラゴンを生まれ変わらせる事となった。

「あつしの……ヴァレルトの思いはそのようなものだった。だが、失ってから気づいたのか……はたまた、別のドラゴンへと進化したことで憑き物が落ちたと言うべきか……『しようもない』と割り切るようになった。」

当時のことは、深くは語らない。簡単なことだけを話すイービラー。時間が無いのか、それとも彼が語らないだけなのか。

「あつしにはあつしの、ヴァレルトとしての強さだけがあった。」

その言葉が何を意味するのか。『力を求めるな』『力に溺れるな』色々な意味を模索することは出来ようが、それも語らない。

「……言葉足らずか、そうなのだろう。だから、一言だけ伝えておこうマルク。」

人であってもドラゴンであつても……力を求めすぎれば、別の何かに変質する。」

イービラーがそうだったように、怒りで悪魔になりかけていた大魔闘演武の時の自分のように、そして――

「アクノロギア、あいつもまた……力を求めすぎた結果なのだろう。だから……求めるのなら、せめて溺れるな。」

まるで自分を省みるかのように、後悔があるようには見えないが……しかしとても寂しそうな目をしていた。

「なにかに変質してもいい、望んでいるのならば孤独になるのもいい……だが、決して溺れるな。」

イービラーの体が消え始める。手を伸ばそうとする、伸ばせない。

その部位を、認識出来ない。

「……だから、お前がお前であり続ける限り…例え今が孤独になつたとしても――」

『自分を見失うな』

「っ!？」

攻撃を弾くマルク。その行動に、グラトニーは驚愕するしかなかった。既に、イービラーの体は消え失せた。

だが、それとは別に消えたはずのマルクの魔法が蘇っていた。

「イービラーはドラゴンであつてドラゴンでなかった。だから、自分は他のドラゴンとは違う……つて、よく言つてたもんさ。」

「……何が言いたい？」

「東洋の文字は、特殊でな。同じ意味の言葉でも、全く別の形をした字があつたりするんだ。」

例えば……ドラゴンを意味する『竜』つて言葉。」

グラトニーを無視して、マルクは話し始めていく。この状況も相まって、グラトニーの緊張感は一気に高まる。

「イービラーは、何故か東洋が好きだった。あいつは、自分のことをあつし、つて呼ぶけど……東洋でそう聞いたらしい。」

「だから何を……」

「そう、だからイービラーは東洋の『竜』という漢字は使わなかった。あいつは、紫電竜から『魔龍』と名を変えた。竜でありながら、竜では無い……龍という文字。」

「……今一度聞くぞ、貴様は何を言いたい？」

「……俺は、一風変わった龍ドラゴンから魔法を教えて貰った一風変わった滅竜魔導士だ。」

マルクの両手に魔力が灯る。それが、マルクの覚悟を表すかのようにしつかりと、大きく。

「だからどうした？」

「返してもらおうぜ……お前は既に死んだ身、その力は俺のものだ!! 全てを守るために、人間を捨ててしまうほどのその力を!! みんなを、もうこれ以上誰も死なせないために!!」

拳を握り、マルクはグラトニーと相對する。過去との決別が、今を進むために今終わらされる。

魔を取り戻す

「うおおおおお！」

「何とも面白い！そうかそうか、力を一時的に取り戻したのかマルク・スーリア！」

連続で拳を繰り出していくマルク。その拳を適度にあしらいながら、グラトニーは少しづつ後ろに下がっていた。

その表情は、未だ余裕を保っていた。

「失われた能力を、イービラーで補ったか！父親を喰らった気分はどうだ!?お前の育ての親の味はどうだった!？」

「うるさい!!お前を倒して、イービラーを安心して眠らせる……それが俺が今できることだ!!魔龍の顎!!」

両足を開き、挟み込むように上下から蹴りを入れようとするマルク。しかしグラトニーは蹴りあげてくる足を自身の足で押さえ込み、かかと落としを決めようとする足を片手で防ぐ。

「惜しいな!!もつと手数を増やせば話は変わっていたかも知れないぞ!？」

「滅竜奥義!!魔光絶闇激!!」

「ぬおっ!？」

両手から魔力を吹き出させて、そのまま体を回転させるマルク。まるでドリルのように回転し始める。それによって、マルクの足を掴んでいたグラトニーも一緒に回転させられて、横顔にかかと落としを決められるハメになっていた。

「だらア!!」

「ぐっ……はははーやられたか!!だがまだまだこれからだ!!」

「くそっ!!」

まるで、ダメージがないかのように振る舞うグラトニー。しかし、恐らくダメージ自体は入っているが、それ以上にこの戦いを楽しもうとするグラトニーの感情の方が上回っているということだろう。

「お前、何でそんなに楽しそう戦ってた!!」

「は?いやいや、楽しいから戦うんだ。戦いそのものが楽しいんだよ、

それ以上の理由なんてあるわけが無い!!」

「……お前みたいなのは、生きてるだけで周りに不幸を撒き散らすタ
イプだ!!」

「ははは、いいだろう!!なら俺を倒して見せろ!!」

「言われ、なくても!!」

マルクが拳を打ち出せば、グラトニーは軽くはたいて回避してい
き、グラトニーが攻撃をすれば、マルクはなんとかガードしきる。

そのの繰り返しを続けていた。

「もつとだ!もつと打ち込んでこい!!」

「くっ!」

グラトニーに、一切の焦りも疲れも感じない。未だあしらわれるほ
どに戦力が傾いている、ということだろう。つまり、対等な立場です
らないのだ。

「俺に勝ちたいか!?!ならもつと強くなるべきだった!自分の体の幼さ
を恨め、魔力のなさを恨め、そして何より上位互換に当たったことを
恨め!!」

「幼くても戦える!魔力はお前から奪い取る!!お前が上位互換なら、
その力もまとめて全て食らう!!」

「なら、この一撃を耐えてみろ!!」

マルクが拳を繰り出す、それに合わせてグラトニーも全く同じよう
に拳を繰り出す。

そして、2人の拳がぶつかり合いそのまま押し合いが始まる。

「ぐっ……!!」

「このまま押し合えば、貴様の拳が碎けるぞ!!」

「お前に碎かせる気もないし、負ける気もない!!」

「何っ!?!」

マルクは、突然拳を引いた。バランスを少しだけ崩したグラトニー
は、即座に立て直そうとするがその時点で既に手遅れとなっていた。

「おらあ!!」

「うぐっ!!」

「もう1発!!」

マルクの膝蹴りが、グラトニーの腹部に直撃していた。そして、その直後には地面に叩き落とされていた。

「ぐはっ……!?!」

グラトニーは、こう感じた。『スピードとパワーが上がってきている』と。それも段階ごとに、一撃を入れ合う事に確実に明確に上げてきていた。

「まだまだぞオラア!!」

「ははは!!イービラーの魔力に適応してきたか!?それでこそ、だ!!」

だが、グラトニーもまだ本気を出していなかった。そこから更に体のギアをあげて、さらに本気に近い力を出し始める。

「まだ、俺の本気に、届いてないぞ!!」

「が、ぐっ!!」

顔、腹、両腕に両足と一瞬でそれらの部位に2発以上拳を叩き込むグラトニー。しかし、それだけでは終わらずに、顎に膝蹴り、そして仰け反ったところで、顔を掴んでそのまま地面に叩き落とす。

「がはっ……」

「まだなのは俺も同じことだ!!」

そのまま持ち上げて、マルクを正面に投げるグラトニー。そこで、マルクの体に対して違和感を覚えるが、それもすぐに忘れられる。

「魔龍の咆哮!!」

マルクが即座に魔法で応戦してきた。だが、違和感はそこではない。しかし、何かが良くわかっていないために即座にそれを保留にしてからブレスをかわしてから、マルクに素早く詰め寄る。

「ふん!」

「遅い!!」

「なっ……!?!」

まだ全力ではないとはいえ、先程よりも早い速度で攻撃を出したにも関わらず、マルクはかわしたのだ。それも、彼にとってはその攻撃が遅い、ということも教えながら。

「ならばっ!!」

「また、早く……!?!」

完全な全力を出すのは、グラトニーはあまりしたくなかった。何故ならば、自身の体が全てを喰らい始めてしまうため、今歩いている地面すら食らい始めかねないからだ。

「触れるなよマルク・スーリア！俺のこの形態は、魔力があったとしても全てを食らう！！暴食なんだよ、俺は！！」

「暴飲暴食するくらいなら、ぶん殴って止めりやあいだけだ！！」

「だったら触ってみろよ！お前の魔力…いや、イービラーの魔力があったとしても、俺はそれを食らうだけだ！！」

グラトニーは、完全に全力を出していた。拳を震えばその場の空気がなくなり、踏んでいる地面は毎秒無くなり続けていた。

「ぐっ………ここまで、とは……」

「本当に喰らえるもんなら、喰らってみろよ！」

しかし、マルクの急激な成長の方が上をいつていた。一撃一撃が、更に素早く、重く……何より、グラトニーに触れることが出来ていた。

「があああああ！！」

「吠えてもなんも、変わんねえからな！！」

マルクの体にまとわりつく魔力が、だんだんと変化していく。黒く、黒く……真っ黒すらも超えて最早暗黒にすら届きつつあった。

まるで、光すらも吸収してしまっているかのような……それほどまでに黒い鎧を、魔力で構成し始めていた。

「そうか……そうか！！先程までの違和感はこれか！！マルク・スーリア！貴様……俺からの攻撃で俺の魔力すらも吸い上げていたな！？それが、その魔力が証拠だ！！」

「わかんねえよ……ただ、がむしやらなだけだ。」

けどな、お前がイービラーを殺し、そして俺も殺したあとにみんなの前に向かうと考えるとゾツとする。」

「はっ、絆とやらか？馬鹿馬鹿しいぞ、戦うにはそのようなもの不要だ！！」

「だっ………たら、俺に勝って俺を殺して証明して見せろよ！！」

マルクは拳を振るう。それはグラトニーの顔面を狙い撃ち、殴り飛ばしかねん勢いのものであった。

だが、吹き飛ばされる前にグラトニーはマルクの腹に蹴りを入れる。本来ならば、それで終わりだったのだが……マルクの腹は蹴りを入れられた跡が付いただけで、グラトニーの魔力が働いているようには見えなかった。

「ぐはっ……」

「ぐうっ……」

お互いに吹き飛ばされて、墜落するかのように地面に落ちる。2人のパワーも相まって、引きずりながらである。

「そうか、俺の魔力を……ならば、俺の方が格下になるのは当たり前か。」
「何?」

「俺の魔力+イービラーの魔力。俺には、俺の魔力しかないんでね。こればかりは量じやない、質のルールだ。」

「質のルール、だど?」

グラトニーは頬を抑えながらすぐに立ち上がる。対照的に、マルクは息を切らしながら立ち上がっていた。

「ああそうだ、質だ。質が上のものは、必然的に勝てるんだよ……自分よりも質が下のものに。」

「……だが、ヴァレルトはお前に勝つたらしいじゃないか。お前の魔力があれば、やつの電撃は余裕で防げるだろう。」

「質というものは、上げられるんだよ。色々な方法で、一時的にでも永続的にでも。」

それで、やつが一瞬だけ俺の質を上回った……それだけの事さ。」

グラトニーは構える。既に体力も心許ないが、マルクは同じように構える。だが、一向にグラトニーが来る気配がない。

「……言っただろ、質は上げられると。」

「っ!!させるか!!」

一向に動かないグラトニーだったが、なぜ動かないのかマルクはすぐに理解した。

魔力を練っていたのだ。それも、とても濃密にである。

「お前がイービラーの分の魔力を使うならば、俺は俺の分×2の魔力の質を上げるだけだ。」

それでようやく、お前以上の力になる。体中の喰らう速度は、早まってしまいがな……！」

「お前、なんでそこまでして……」

「戦いたいだけだ、そのために勝ちを狙うし卑怯な手以外の手段ならば、なんでも取ると決めている。」

「……まるで動物だ。」

「ただがむしやらに戦いだけを求めるその姿は、もはや悪魔ともマルクは思えなかった。」

「戦いたいだけが彼の本能であり、それに知能がついたかのようなレベル。人間とは違う、と言えばそこまでだが……」

「本能で生きる、悪魔だから以前の問題だ。そもそもゼレフ書の悪魔共はいささか理性すぎる。あれだけの力を持っているのだから、本能で生きればいいものを……」

「全員お前みたいに考えなしたと、ギルドどころかチームとして成り立たなくなるからな。」

再び攻めるために、どうするか考えるマルク。しかし、どれだけ頭の中でイメージしても一撃目を入れられるイメージが湧いてこなかった。

「さあ、続きをしようかマルク・スーリア。お前が強くあればあるほど、俺はもつと楽しめる。」

「ちっ……」

「楽しませることは不本意だが、しかし戦わなくては……こいつを倒さなくてはならなかった。」

だが、このままいつでも堂々巡りになるだけである。しかも、自分の体力と魔力だけはただ減っていくおまけ付き。このままいけば、負けることは確実である。

「どれだけ魔力を喰らおうと、魔法をほとんど使わない相手なのでほとんど喰らえないのだ。」

「呪法、呪力か……」

「そう言うもんだと初めて知ったのさ、ゼレフ書共を見てからな。ま、これが本当に呪法なのかどうかはともかく……」

グラトニーは、マルクをじっくりと観察する。そして、鼻で笑うかのように、まるで嘲笑うかのような表情をしながら、マルクに指をさしてくる。

「どうやら、ほんの少しづつしか魔力を吸収できていないようだな。」
「……………うる、せえ!!」

過剰な魔力消費、結果として得られる魔力はそれと比べると1/10もあるかどうか怪しいのだ。

だが、確実にグラトニーの力を魔力として蓄積することは出来つつあった。

「おっと……………!どうした?動きが鈍くなってるぞ?」
「くっ……………」

意識してしまったせいか、マルクは魔力消費を抑えてしまう。その結果、先程よりも動きが遅くなってしまった。

「ふん、言葉程度で惑わされるのはまだまだだな。」
「うるせえ、って!!」

無理矢理魔力消費を増やして、速さを取り戻し始めるマルク。それを見てから、グラトニーはまた気づいたことがあった。

マルクの魔力は元々黒っぽい色の様なものだったが、段々と色の濃さが増してきていたことに。つまり、魔力消費をすればするほど魔力が濃くなっていつている……………ということである。

「……………どうなるのやら。」
「何を一人でブツブツと!!」

「おっとすまん……………貴様が今からどうなっていくのかが楽しみでな!!」

「何を訳の分からんことを!!」

マルクは、自身の魔力の変化に気づいていなかった。もし、完全に魔力がゼロになってしまったら……………ただゼロになるだけなのか、はたまた未知の変化をしてくれるのか……………内心、とても楽しそうにしているグラトニー。

戦いは、ようやく終盤へと向かい始める。

決着

「はあ、はあ……おおお!!」

マルクは大きく吠える。目の前の男に大して、怒りを感じているからである。マルクは大きく叫ぶ。大切な者と、既に会えない悲しさを感じているからである。

悲しみという感情と、怒りという感情が混ざりに混ざってどす黒くなる。

「もつとだ！もつと!!ふはははは!!」

グラトニーは大きく声を上げる。既に戦えないと思っていた少年が、力に目覚めて戦えている事に、嬉しさを感じているからである。グラトニーは大きく高笑いをする。強者だと思っていた者と既に戦えない虚しさを、紛らわせるためである。

「ふっ……だああああ!!」

「ハアッ!!」

マルクは、グラトニーの顔に向けて蹴りを放つが、全く同じ動きをグラトニーが行い、相殺される。

だが、既にグラトニーは本気を出していた。それ故に、周りの地面は激しくめくれ上がり、至る所にクレーターが出来上がっていた。

「ああああああ!!」

「まだ強くなるのか……はは、ふははは!!」

マルクは、真っ黒になっている自身の魔力をグラトニーに向けて放つ。本気を超えて、グラトニーもそれに合わせて打ち込んでいく。

だが、微量にグラトニーの呪力を魔力として回収し続けていたせいで、マルクの体には既にグラトニーの力を持った魔力が循環し始めていた。

「まだ、だア!!」

「この、力は……!?まさか、まさか!!」

マルクの体や、顔にドラゴンの鱗のような模様が浮かび始める。そして、さらに倍加されたような魔力に、グラトニーは嬉しさを覚えながら、確信していた。

「ドラゴンフォース！ドラゴンフォースを使えるようになったか!!」
「AAAAAAAAaaaaaa!」

最早言葉になんの意味も持たない。叫ぶ、獣のようにただ大きく雄々しくそれでいて狂氣的に。

「ははは!!ドラゴンスレイヤー真の滅竜魔導士に目覚めたということか!!」

力の目覚めに、嬉しさを覚えているグラトニー。お互いにギリギリの状況であるはずなのに、一切の焦りなどは感じさせない顔だった。

「がアっ!!」

「ぐっ……はっはア!!」

「がっ……!」

グラトニーに打ち込まれる拳。その一撃は、ついにグラトニーの防御を打ち崩し、直撃させることが出来た。

だが、その一瞬の隙にグラトニーもマルクに攻撃を直撃させる……が、マルクにほとんどダメージはなかった。

「っ!?俺の、拳が……」

グラトニーの拳は、消えていた。そう、マルクに打ち込んだ拳が、消えたのだ。

その理由は、言わなくてもグラトニーは一瞬で理解した。『自分の力』だと。

「ドラゴンフォースに加えて、俺の力までモノにしゃがった!!どこまでだ、貴様はどこまで高みに登る気なんだ!!」

「お前を倒せるくらいに、だ!!」

「いいね！可能だ、お前ならそれが可能だとたつた今証明された!!」

自分が死ぬかもしれないというのに、グラトニーには焦りも恐怖も存在していなかった。最早、頭のネジは吹っ飛んでいると言っても過言ではないだろう。

完全に死ぬことを恐怖しないのは、それはもう生きている者としては壊れすぎているからだ。

「だがまだ足りない！俺を完全に倒すには、まだ足りないぞマルク・スーリア!!」

「だっ、だらあ!」

マルクは拳を打ち込む。だが、その打ち込んだ拳は直後に黒く染まる。そして、侵食していくかのように腕から胴体、そして足まで黒く染まっていく。

「おおああああああああ!!」

「これは……俺の魔力で俺を再現するか!!」

マルクの体が黒く染まり、人の姿を保てなくなっていく。腕は黒く染まり、爪は伸びてまるで異形の手のようになる。そして、足も黒く染まって爪が伸びて異形の足のようになる。

何より、染まった顔が既に人間ではなかった。真っ黒の顔に、まるでトカゲのような前に伸びた顔、そしてその口には牙が生えていた。

「GRRRRRRR……」

「ふははは！正真正銘人間を辞めたか！だが、だがいいぞ！俺は今まで俺と相対したことがなかった!!そうだ、これは俺の生きていた中で最強の力だ!!」

「Aa!!」

言葉にならない声で、マルクは爪を振るう。それを、グラトニーは後ろに回避しようとするが、回避した瞬間に爪が伸びて、グラトニーの体を軽く引き裂いた。

「ぐお……!?だが、傷は浅い!!」

そう、軽く引き裂いただけで傷は浅いものだった。逆に言えば浅かったとしてもそれは傷なのである。

「……」

「……う動かなくなつたな。まさか、諦めたわけでもあるまい。俺に明確な傷を与えたというのに——」

そこで、不意にグラトニーの傷口から黒い魔力が噴出する。まるで、氾濫した川のごとく、激しく大量に。

「なん、だこれは……!?!」

「GUA、GUA……」

まるで笑い声のような声を上げながら、マルクは吹き出した魔力を飲み込んでいた。

まるで魔力がマルクに集まるかのように、誘導されながら。

「……爪で引き裂かれて時点で、終わっていたということか。」

目の前にいるのが、理性を保ったマルクなのかはたまた悪魔としての側面なのか。

体から溢れ出た魔力を食らって、恍惚そうな顔をしているのは最早マルクでは無い何か別のものだろう。

「熱い戦いだと思っていれば……終わりは一瞬か。」
「……」

既に、グラトニーの体からは魔力は出なくなっていた。だが、グラトニーは目の前の存在に喜びを感じながらも一種の恐怖を覚えている。

グラトニーは、魔法を使わない。呪法を使う。呪法は、呪力をもつて使われるが、魔力のようにそこにエーテルナノがある訳では無い。「……エーテルナノがないものに、エーテルナノを付与させて無理やり食らっていた、という事か。」

まったく……俺以上に暴食が似合う悪魔が出てくるとはな。」「体をふらつかせながら、グラトニーは倒れる。呪力を完全に抜き取られ、その体も既に限界となったしまったのだろう。」

マルクは、しばらくそれを観察したあとにゆっくりとグラトニーに歩み寄って――

「AG……AG……」
グラトニーを喰らい始める。まるで食べても食べても、満足出来ないかのような、食欲を完全に逸脱したその欲望は、自身の体に再度悪魔を蓄えることを選んだのだった。

「はあ、はあ……」

イービラーの死体は消えた。自分が食べたのは、魔力だけだったの
で、つまりイービラーの体自体が、まともな肉体ではなかったという
ことになってしまう。

つまり、それは他のドラゴンも同じことである。イグニールも、メ
タリカーナも、バイスロギアも、スキアドラムも。

そして、グランデイーネも。

「……」

ウエンディは強い、恐らくグランデイーネがいなくなってもただ悲
しみに暮れている訳では無いだろう。

ガジルも、ナツも寂しくはなってるだろうが……そこまでである。
情がないというわけじゃない。だが、皆悲しむだけではいけないとい
うことはわかっているのだ。

「……だから、俺も……」

『悲しむだけではいけない』というのを、痛みとともに胸に刻み込む。
孤独になっても、人を止めても……誰かを守るならば、自分はそれ
でいい。これ以上大切な人の悲しみを増やさないように、とマルクは
意思を決めたのであった。

「この、悪魔の力を……使いこなしてみせ、る……!」

片腕だけ変質させるマルク。決着は、ついた。意外な程にあっさり
と、終わる時に終わった……という印象しか抱けなかった。

だが、とりあえず片腕。今はまだそれが限界である。だが、これか
ら先自分でこの力を制御できるようにならなければいけないのであ
る。

「だから……今は……」

歩を進める。みんなのいる場所に、せめてウエンディのところに
は、絶対帰らなければならぬと考えたからである。

痛みは既を感じなくなっていた……というわけじゃなく、無視でき
るようになるほど、高速で慣れたというのが正しかった。

だが、どちらにせよ今のマルクにとつては些事だった。ウエンディ
のところを迎えるなら……何も変わらないのだから。

荒廃したマグノリア。冥府^{タルタロス}の門の本部であった冥界島^{キユーブ}が、まだ動いている時にかなり破壊された。

街の象徴である大聖堂も、完全に倒壊していたし……なにより。

「……本当に、無くなったのか。」

新しく立て直された妖精^{フェアリーテイル}の尻尾のギルド。それは操られたエルフマンによって完全に消滅していた。

地下はまだ生きていたらしいが、少なくとも見えていた部分であった上部は最早欠片も残っていなかった。

「マルクー!!」

「……ウエンデイ?」

ギルドがあつたところに立っていたマルク。そこに、声をかけてくる人物が1人。ウエンデイであった。

ウエンデイは、1度髪を切ったはずだが何故かはわからないが元々のロングに戻っていた。

「その髪、どうしたんだ?」

「ルーシイさんのキャンサーさんに治してもらったの。」

「髪も伸ばせるのか……」

ハサミを持っているのは知っているので、てつきり散髪が得意だと思っていた。いや、髪を伸ばせる理由はわからないが。

「それで、その今日はどうするの……?」

「……寮が無事だったら、そこで寝よう。俺達には……今は休む時間は必要だと思う。」

「まずは何より……な。」

「そう、だね……久しぶりに3人つきり？」

「かもしれないな……」

それつきり、2人とも黙ってしまおう。だが、一人でいるよりも、段違いの安心感があつた。

「妖精の尻尾は……また復活するさ。」

「え？」

「話から聞いている分だけどき……今までもこういうことあつたみたいだし。」

でもその度に立ち上がって……何度だつて諦めずに来てたんだ。だから、今回もまた復活するさ……時間がかかっても、絶対に。」

「……そう、だね。」

完全に何も無くなった土地を見渡してから、2人はヒルズへと向かう。ウエンデイ、シャルル、マルクの3人で久しぶりにいたい……そんな気分だったからであつた。

解散

冥府タルタロスの門を壊滅させた、その翌日。ナツ達は既にどこかへと姿を消していた。

だが、それよりも…もつと重大なことが起こっていた。

「妖精フェアリーテイルの尻尾を、解散させる。」

マカロフの突然の言葉。その言葉に困惑する者もいれば、抗議する者もいた。だが、全員突然の解散宣言に納得するわけがなかった。

「どーゆー事だよマスター!!」

「ふざけんなっ!!」

「明日からどうやって飯を食っていけばいいんだ!!」

「勝手に決めるな!!」

妖精の尻尾に、途中から入った者。子供の時から居場所が無く、最早ここが家同然の者だった。

特に、後者はギルドでしか仕事が入ったことがないために、他の生き方なんてろくに知らない者もいる。

「妖精の尻尾は解散させる。これからは己が信じる道を己が足で進め。以上じゃ。」

これでこの話題は終わりだ、と言わんばかりにマカロフは話を切った。当然、その説明に納得する者はいない。逆に反論をしようとする者だけっている。

マカロフを罵倒する者や、妖精の尻尾はまだ無くならないと豪語する者も現れはじめる。

「今この時を持って妖精の尻尾は解散じゃ!今後二度とその名を口に出すことは許さん!!」

だが、マカロフはそれでも押し切った。反対する者も、この一言で押し黙ったのだ。『マカロフは本気だ』と肌で感じとったのだった。

「どう、しよっか……」

「そうだな……」

その後、まばらにその場から離れ始める。その中でウエンディや、シャルル、そしてマルクも離れてマグノリアの一角に座り込んでいた。

「あたし達、というかウエンディとマルクは本当に他で働けないわよ？」

「だよな……俺達はギルド以外のことを知らなさすぎる。」

「どうしよう……」

しばらく考え込む3人。しばらく何もしないでも、暮らしていける金はある。あくまでも飯の代金だけで考えれば、だが。

つまり、今すぐにもお金を稼ぎに行かないとまずいのだ。

「……蛇姫ラミアスケイルの鱗に行くか。」

「へ？な、なんで？」

突如提案したその案に、ウエンディは困惑する。だが、シャルルは察したのか納得の顔をしていた。

「そうね、確かにそこなら問題なさそうだわ。」

「で、でも……」

「何より、あそこにはシェリアがいるんだ……どこか全く別のギルドに行くよりマシさ。」

「……迷惑、じゃないかな。」

「……ウエンディ、俺達は依頼者としてでもただ宿を貸してくれって言っただけでもないんだ……」

マルクは拳を握りしめながら空を見上げる。彼にとっても、その選択は何も思わない訳では無い。

「新しく蛇姫の鱗に入るギルドメンバーなんだ。」

「……」

「……働くには、生きていくには必要なことよ。」

「うん……そうだね。」

少し渋っていたが、ウエンデイも納得したようでこれで3人で蛇姫の鱗に行くことが決まったのだった。

「まあウエンデイがいいなら、あたしは人魚の踵《マーメイドヒール》でもいいのよ。」

「……それ、俺には別ギルド入れってことか……?」

「あそこ入りなさいよ、四つ首の番犬《クワトロケルベロス》。」

「いやいやいや……」

冗談を言い合いながら、マルク達は進み始める。妖精の尻尾解散、そして自身の親との別れ……そのようなことがあっても、3人は……ウエンデイとマルクは、進んでいかなくちやいけないのだ。

悲しい事があっても、前に前に……しかし、その心にはどこか空虚な感じが居座っているのだった。

冥府の門との戦いから1年が経過した。ウエンデイ達は、蛇姫の鱗に入つて、何とか馴染めていた。

だが、そこにマルクの姿はなかった。

「ウエンデイ、お疲れ様……ウエンデイ?」

「……」

「……ウエンデイ、またブーツとしてるよ。」

「ひゃう!？」

ウエンディの首筋に、冷たいドリンクの入った瓶を当てるシエリア。なぜ彼女がブーツとしているのか、その理由を彼女達は…蛇姫の鱗全体が知っている。

「……また、今日も見つからなかったの？」

「……うん。」

「……いなくなつて、半年か……」

シエリアは、近くにあった写真立てを手に取つてその中の写真を眺める。

その写真には、ウエンディ、シャルル、シエリア、マルクの4人が映っていた。

「……いつからかマルクがいなくなつて、もう半年…どうして帰つてこないんだろ……」

「ま、まだみんな探してくれてるから……」

ウエンディが呟いた言葉に、フォローを入れるようにシエリアが励まそうとする。その言葉に対して、ウエンディは弱々しい笑みを見せるだけだ。

「ウエンディ、あの……」

「…マルクのね、匂いはするんだ。」

窓を見ながらウエンディは呟く。この言葉自体は、前から聞いていた。ドラゴンスレイヤー滅竜魔導士の鼻は、確かに強力ではあるが幾らなんでも近くにいらるといふのに、一向に姿を表さないのは不自然である。

「……マルクはなんで、姿を見せないんだろ。近くにいるんだよね?」「分かんない……理由も告げなかったから…きつと、マルクにとつても触れられたくないんだと思う。」

「……半年前、か。」

「シエリアが私達と一緒に行った、以来の時からだつたよね……」

そう言つて、ウエンディは思い出し始める。半年前から、ウエンディ、マルク、シャルルの3人が蛇姫の鱗に入った頃からの記憶を漁り始める。一体、どこからマルクに何かしらの異変が起きていたのか……それを探るために。

そして、それらの状況を向かいの建物の屋上から覗く、フードを被った男が1人。決して悟られないように、目立たない色のフードを被って誤魔化してはいるが、その視線には並々ならぬものが込められていた。

「……ウエンデイ……」

手も足も、そして顔もフードに完全に覆われており、何者かが完全に把握出来なくなっていた。

それほどまでに自分を見せなくなかったのか、それ以外の理由もあるのか。

「……あれは……」

男は、少し視線を傾けると見慣れたピンクの髪の男と、金髪の女性を見かけた。

火の滅竜魔導士ナツ・ドラグニルと、星霊魔導士のルーシィ・ハートフィリアであった。

「……何故……?」

妖精の尻尾は既に解散している。わざわざここに用事に来ているということとは、ウエンデイが目的だろう。逢いに来ただけか?それは違うだろうと、即座に頭の中で否定する。

「……連れ戻す、のか……妖精の尻尾に。」

ナツは、妖精の尻尾の解散を知る前に出たのだ。そして、彼の性格ならば妖精の尻尾の解散なんてマカロフを殴っても止めようとし

ただろう。

それほどまでに、彼にとっては家族がいるところだったのだ。

「……けど……」

男は、腕に被っている布を取り除く。そこには、明らかに人間の腕ではない真つ黒なものがそこにあつた。

指の数、そして指の長さは人間相当のものだが、その爪の長さや爪の形……そして何より手の色や腕の色が真つ黒に変色しているのだ。

「……この体になった俺は、いても気味悪がられるだけだ。みんなが『大丈夫だ』と答えても、それ以外の全員が気味悪がるだろう。

俺は……戻れない。」

風が吹き、フードが外れる。そこにはマルクの顔があつた。そう、この男はマルクであつた。しかし、その顔の半分は黒く染まり、牙も生え渡っていた。半分だけ、であるが。

「……つとと、見えちゃまずいな……ナツさんにバレる前に戻らないと。」

マルクは踵を返して走つて、建物から飛び降りる。その直後に背中から羽を生やして、大きく空を羽ばたき始める。

「……バレてないといいけど。」

翼をはためかせながら、マルクはどこかへと飛んでいく。ウエンデイのことも気にかかっているが、どうしようもないことだけは、ハッキリしていた。

「……………んあ?」

「ナツ? どうしたの?」

「……マルクの匂いがする。」

「そりゃあ、蛇姫の鱗に入ったって情報があるんだから……いるでしょう。」

ナツは振り返って首を傾げる。確かに、ルーシイの言う通りではあるのだが、彼にはどこか違和感があった。

匂いは間違いなくマルクだったが、なぜここまで来ておいて自分達に会っていかないのか、それが妙に気になった。

「何が気になるのよ。」

「うーん……わかんね!!」

「しっかりしてよね、ナツ。」

やれやれと言った感じでハッピーが首を振る。それを気にしないまま、とりあえずマルクのこととは一旦保留にして、ナツ達はウエンデイに会いに行くのであった。

だが、三者三様の思惑が交錯する中、ギルド・蛇姫の鱗に今まさに重大な事件が起きようとしていることを、誰も気づかなかつたのであった。

一年前、ウエンデイとマルクとシャルルが、蛇姫の鱗に入った日。その日から、3人の全てが動き始めたのだ。

「よろしくお願いします。」

「歓迎するよ、3人とも。」

「ウエンデイ〜」

「シエリアー！」

ウエンデイが来たことにより、テンションが上がっているのか手を握ったりハグをしたりするシエリア。その微笑ましい光景を見ながら、話はマルクが進めていく。

「…しかし、妖精の尻尾の事は…」

「いいんです、確かに悲しいのは事実ですけど…悲しんでばかりもいられませんしね。」

「ふ、確かにその通りだな。」

リオンは、それ以上妖精の尻尾のことに関して追求することは無かった。蛇姫の鱗に入った直後は仕事はせず、色々街やギルド内を案内された。

仕事をするのは、2日目からだった。

「じゃあ、私といこう！」

「うんー！」

3人でチームを組む予定だったが、そこにシエリアが入ってくる。ウエンデイは、自分の傷を回復できないので結構有難いとマルクはこのとき考えていた。

その日の初めての仕事も、次の日も次の日も…仕事はかなり順調だった。だが、入って1ヶ月程でマルクに異変が起きる。

「っ……」

「マルク？どうしたの？」

「……いや、なんでもないよ。」

「そ、そう…？」

マルクのその言葉に嘘偽りはないと感じて、ウエンデイはそれ以上追求することは無かった。

だが、その日からマルクは1人でどこかに行くようになっていた。気づいたらいなくなっており、1度着いていこうともしたが撒かれて後を追うことができなかった。

そして、半年前。

「……あれ、マルクまだ帰ってきてないんですか？」

「受注した記録もないし……依頼でどこかに行った、つて線は薄い…

「何かに巻き込まれたか？」

その日から、しばらくの間蛇姫の鱗の何人かでマルクを探すことにした。しかし、影も形も掴めずにそのまま捜査は打ち切られてしまった。これ以上探し続けていると、仕事もままならない状態になりかねないと、マスターが判断したからだ。

だが、それならば仕事と両立して探してやるという者もいた。だが、何かに巻き込まれた、にしては何も起きなさすぎるしたとえ本当に巻き込まれていたとしても、これほど探して見つからないという事は……という所まで語られた。

「……ウエンデイ、今ちよつといいかしら？」

「何？シャルル。」

この1年で、変身魔法を覚えたシャルル。そのシャルルが、ウエンデイを名指しで指名してきたのだ。

「ナツが来てるわ。ルーシイと、ハッピーと一緒にね。」

「ナツさん、が……!?う、うん、わかった！」

両頬を叩いて、気合を入れ直すウエンデイ。そして、ナツ達に会うために緊張しながらも旧友に会える喜びで少しだけ、笑顔になれたのであった。

妖精の尻尾解散編 蛇姫の鱗で

「どれにする?」

「あんまり差し当たりのない奴を……」

「じゃあ私が選んであげるよ。」

「大丈夫かしら……」

フェアリーテイル妖精の尻尾が潰れて、ラミアスケイル蛇姫の鱗に入った日の翌日。

マルク達は、初めてのクエストにチャレンジすることになった。だが、妖精の尻尾で何度も受けては報酬を貰い……を繰り返してはいたものの、他のギルドで、いきなり難易度が高そうなのを受けるのは、少しだけ躊躇するものだった。

だが、そんな時にシエリアが現れて、1枚依頼書を選んでそれをマルク達に見せる。

「これなんかどう?」

「えーつと……『盗賊団から村を守ってください』?報酬は山分けしても問題ないし……まあ、シエリアとウエンデイと俺がいるなら……大丈夫かな……?」

「待て待て……いつも言っているがな、シエリア。ギルドに入っているとはいえ、あまり危険なことはするな。」

シエリアが選んだクエストに、リオンが反対意見を述べる。年下であることと、彼にとっては妹分であるシエリアが危険な目に合いかねないのは、お断りしたいようだった。

「それを言ったらどのクエストも、危険性は同じくらいじゃないの?雑草抜きとかともかく……」

「はあ……しようがない、俺が着いていく。」

「もう!私達子供じゃないんだから!!行こうウエンデイ、マルク!!」

「え、あ、シエリア!」

「す、すみません……おーい!待てよ2人とも!!」

「私も置いていかないですよ!」

リオンを置き去りにして、シエリア達はギルドから出立する。その後、リオンは頭を抱えてため息をついていたが、他のメンバーからは『心配しすぎ』とまで言われてしまうのであった。

「まったくもう！ リオンはいつまで私のこと、子供扱いしてるんだろ！！」

「ま、まあ……心配するのも本当に大切に思っているからだよ。」

「……ま、まあ……それは分かっているんだけど……」

「複雑な気持ちね。」

ウエンディ達がガールズトークに夢中になっている中で、マルクは外を眺めていた。

これから依頼主に会いに行くために、雨が降って服が濡れるということだけは回避したかったのだ。

「……でも降りそうなんだよなあ……」

「まあいざとなれば、私達2人でこう……ビューっ！ って大きな風吹かせて、雲を散らせればいいんじゃない？」

「魔力の無駄遣いだらうが……」

少し呆れながらも、しかしそれがすぐにできるのならしたいというのもまた事実である。

「でも濡れるのは……」

「そうだよね……私もこの服が濡れるのは嫌だし……」

胸元を指でつまんで、少しだけ服を持ち上げるシエリア。雨が降ると、服が濡れて体温が下がるばかりでは無い。

服が張り付くという不快感も、一緒に味わなければならぬ。ただ、張り付いた場合のことを考えたのか、ウエンデイが軽くした唇を噛んでいたが。

「……ま、一応どこかで降りて雨具を買うべきだろうな。」

「そうだね、何かあるかなあ……」

「傘って、意外と高いもんねえ……」

そうやって、談笑し続ける四人。そして、1度雨具を買うために目的の駅よりも、少し手前の駅で降りる。どちらにせよ、馬車で向かわないといけないような場所なので、そこから向かうのもいいだろうと考えたためである。

「げっ……雨降ってきた……」

「うわあ……嫌だなあ、せつかく降りたのに。」

「走る?」

「ここ結構大きい駅だし……もしかしたら、中にあるかもしれない。」

「探してみよっか。」

駅に着いたと同時に、本降りし始める雨。それに辟易しながらも、とりあえず駅の中で雨具を扱っている店はないか、探し始める。

「あ、あったよ!」

「本当だ!」

「やるじゃない!!」

そして、駅の中で見つけたのでとりあえず子供用3枚と、特別に小さい雨具を買うことが出来た。

そして、そのまま街の中へと向かい始める。

「この街の馬車つてどこに来るんだっけ。」

「とりあえず探してみよう?」

「……」

「…マルク?」

「え?ど、とうした?」

ぼーっとしていたマルク。ウエンデイが心配して声をかけるが、まるで何事も無かったかのようにふるまい始める。

「ぼーっとしてたよ?」

「そ、そうか……雨降ってるのを見て、無意識に憂鬱になってたのかもしれないな。」

「……」

『雨は絶対関係ない』と思いながらも、この時はそこまでウエンディは気にしていなかった。

『話したくないことだっただってあるだろう』としか思いようがなかったからだ。

「とりあえず馬車をさがそうか。あわよくばそのままの依頼地へと迎える。」

「そうだね。」

マルク達は、そのまま小一時間馬車を探す。そして、そのまま見つけたので、目的の村まで行くことになったのであった。

「いやあ、にしてもお客さん物好きだねえ……あの村に行くなんて。」
「いや、俺達はその村の人から依頼を受けたんで……」

「あー、魔導士の方なのね。そりゃあ納得だ。」

馬車の運転手は、マルク達が魔導士だと分かると、妙に納得のいった顔をしていた。

それほどまでに、村に行くことが好き者みたいな扱いを受けるほどに、その村が如何に盗賊達に困っているということが伺える。

「あー、だったら途中までしか送れないよ。あんまり近づくと、こっただって危ないかんねえ……」

「どの辺までですか？」

マルクが地図を広げて、運転手に止まるところがどこかを聞き始める。その間に、シエリアがウエンディに近づいて小声で話し始める。

「……村周辺、襲われるって書いてあった？」

「多分書いてなかったと思う……自分達のとこで手一杯すぎて書くの忘れたんじゃないのかなあ……」

「だいたいけど……もし『見聞きするより体験しろ』っていうタイプの人だったら私はやだなあ……」

「考えすぎだよ。」

「……あ、雨止んできた？」

「本当だ、止んできたね。」

馬車の外から、雨が止んでいることだけが確認出来たウエンディ。しかし、どちらにせよ地面がぬかるんでいるので、タイヤを補強してぬかるんだ地面も走れるようにしていた馬車の、微妙に上乘せされた料金はどちらにせよ払わないといけなのだが。

「んじゃ、このまま後5分くらい動かしますんで。」

「はい。」

そして、村までおよそ1キロ離れた位置に馬車は止まり、あとは歩いていったのだった。

「おお、蛇姫の鱗の方達ですな。お待ちしておりました……どうぞ中へ、村長が奥でお待ちしております。」

「ええ、すぐに向かいますよ。」

村に着いたら、まずは村長のところに案内された。特に変わったことも言われず、また注意されるようなこともなく、早速盗賊を退治することが決定したのであった。

「ところで、盗賊達が来る方向とか時間とか……バラバラなんですか？」

「いいえ、いつも決まった時間、決まった方向から来ているんです……変な話ですよ、何故そこだけ律儀にしているんでしょう……」

「因みに、いつどこから？」

「昼頃に、あの山の向こうから1人ずつ入ってくるんです。と言っても向こうは走り幅跳びの要領でこちらに来るため、1人ずつ入ってくる」

ると言ってもそこまで丁寧ではありませんが。」

しかし、襲ってくる時間が決まっているというのだけ聞けば十分である。なにせ、こちらには支援と回復に特化した人物が二人もいるのだから。

「私達に任せて！やろうウエンディ!!」

「うん！」

「じゃあ……いざと言う時のために、シャルルは俺と一緒に来てくれ。何かあって、上から見る時とか視線が必要なように思えるし。」

「あたしだけ飛べばいいんじゃないの？」

「いや、万が一飛んできるところ狙われた時に1人だったら身を守れない可能性があるだろ？」

マルクを中心に作戦を立てていく一同。昼までにつくことが出来たので、それまで作戦会議をしておくことにしたのであった。

だが、時折その作戦会議でマルクの意識が途切れ途切れになることがあった。一瞬、1秒にも満たない瞬間で時折……といったふうなのでシエリアには分からなかったが、ウエンディだけは気づいていた。そして、こうも感じていた。『やはりマルクはなにか隠している』と。「ウエンディ?どうしたの?」

「ふえ!?う、ううん!なんでもないよ!!」

しかし、『本人が隠していることを、追求するのはいかなものだろうかだろうか』という気持ちにもなっていた。本当に問題ないのかもしれないし、ウエンディの勘違いや気のせいで終わる話かもしれない。

あまりしつこく同じ質問をするのは、マルクも鬱陶しい気がする……と妙に言うのがはばかられた。

「眠いなら、少し仮眠でもとるか?なにせ結構体力つきただろうしな。」

「う、ううん。マルクの方こそ無理してない?」

「…大丈夫だよ。俺はまだまだ元気モリモリだからな!」

ポーリングを取って、悪ふざけをするマルク。確かにパツと見た感じは、本当に元気そうなのでウエンディもこれだけ見たら信じていた

だろう。

「……そう、私も大丈夫だよ。」

信じられるわけがなかった。だが、本人が無理していないと言っている以上、話題はここで打ち切られてしまう。

「さて……んじやまとりあえず、作戦は立てれたんでこれでいこうと思う。」

まずはウエンディとシエリアが山賊達の相手をする、そしてその間俺はシャルルに抱えてもらって空中に待機。流石に山賊達もここで全滅するのは控えるだろうから、逃げるはずだ。」

「それで、その後マルクは山賊の本拠地に行って終わり……だね？」

「ああ、シャルルには一旦入口で別れてウエンディ達を後から連れてくるつもりだ。」

「マルクが打ち漏らした相手も、私達二人なら相手できるもんね。」

「そういうことだ。」

作戦に依存がない様なので、マルクは手を叩いて作戦会議終了の合図を出す。もうすぐ山賊達が来る時間らしいので、先にマルクをシャルルが抱えて空中へと飛んでいく。

それを、シエリアとウエンディが軽く見送ったあとで、お互いに目を合わせる。

「いい？ウエンディ！」

「初クエスト……頑張らないと!!」

やる気を入れ直すウエンディ。両頬を叩いて、目の前のことに集中し始める。

しばらくすると、山賊達が村に入ってくるのが見えてきた。

「来たよシエリア！」

「行こうウエンディ!!」

そして、2人はこの場で山賊を全滅しかねない勢いで、戦い始めるのであった。

「二人とも元気だなあ……俺の出番残ってるといいけど。」

「大丈夫でしょ、あの山賊たちの中にリーダー格っぽいやつがないんだし……少なくとも別で動いている部隊か、どこかで待機している部隊はいるわよ。」

上から眺めながら、マルクは苦笑いを浮かべていた。わかっていた事だが、天空の滅竜魔法と天空の滅神魔法は恐ろしい程に攻撃力に特化している。

荒れ狂う天候の力なのだから、当たり前といえれば当たり前なのだが。

「……ん？山賊達が慌て始めてるな。」

まずは、ウエンディとシエリアが山賊達に魔法をぶつける。近くにいたヤツらは我先にと襲い掛かるが、それらを全て受け流していった。

次に、本気でやらないといけないという雰囲気になったのか、略奪行為をしていた山賊達も混じり始める。

そして、その後すぐに山賊達が逃げようと蜘蛛の子を散らすように村から離れ始める。

「逃げてる方向は……全員同じか。」

「複雑そうに逃げてるだけで、ほぼ一本道ね。」

「前から見るより、上から見た方がわかりやすいなやっぱり……よし、行くぞシャルル。」

「ええ。」

マルクは、シャルルと共に山賊達のアジトであろう場所へと向かうのであった。

兆候

盗賊達のアジトに潜入したマルク。シャルルには、ウエンデイ達を呼んでもらうという仕事があるので、それを任せて自分は先に侵入して場を乱すのが目的だった。

「もう逃げられないぞ!!」

「けっ!! 餓鬼がいきがつてんじゃねえよ!!」

「ただの餓鬼かどうかは、自分の目で判断したらどうだ?!」

マルクは魔法を使い、盗賊達を一網打尽にしていく。しかしそれは、十把一絡げの雑兵達であり、リーダー格が出てこないことには話にならないのだ。

「さつさとリーダーを呼びな!! いきがつてる餓鬼1人に勝てないようなヤツらが、いくら束になってもかないっこないよ!!」

「畜生ー!」

「——お前、見たことあるぞ。そうだ、大魔闘演武に出ていた餓鬼だな?」

声がしたのでそちらの方向に視線を向けるマルク。そこには、一風変わった男が立っていた。

「どうやら、リーダー格のようだった。」

「……それが、どうしたってんだ?」

「そりゃあな……あの時のお前は、妖精の尻尾フェアリーテイルだったはずだ。しかし今のお前の紋章は、妖精の尻尾のそれじゃあ、無い……そう、蛇姫ラミアスケイルの鱗の紋章だ。」

「それが……どうしたって言ってんだ!!」

殴り掛かるマルク。しかし、男は余裕ぶった表情でその攻撃を避ける。まるで、予め見えていたかのようにいとも容易く。

「すると、だ。巷で噂になっていることは本当なのかもしれない。」

「……噂?」

『妖精の尻尾は解散した、三大闇ギルドの一つである冥府タルタロスの門に好き勝手にやられて、解散するはめになった。』って噂がな?」

「なっ……」

そのような噂を、聞いたことがなかった。だが、話しているのは盗賊達であり、もしかすればまったくの冗談を言っているだけかもしれない。なかった。

「おっと……言っておくが、噂自体が流れているのは本当だよ。ただし、俺達のような世間からはみ出しモノ達の噂で……だがな。」

「……要するに、妖精の尻尾に潰された闇ギルドの残党や1度討伐された盗賊とかが噂してることか。」

「まあ概ねそんなところさ。だが、その紋章を見る限り噂は真実だったようだ?」

「違う!!」

大きく声を出して、反論しようとするマルク。確かに、好き放題やられたことは事実だが、その上で冥府の門を返り討ちにして倒せたのだ。

だが、その噂を否定しようとも好き放題やられたことはマルクも事実だと認めてしまっている。

「何がだ?そりゃあ、細かいところはちげーかもしれないが……だが、概ねはあっているだろ?」

自分たちの街も守れず、ギルドも守れず、その上で解散……何が違う?どこがちがう?」

「ぐっ……」

そこが突くべき弱点だと言わんばかりに、リーダーはマルクをひたすらに煽っていく。マルクは、その挑発にまんまと乗って段々と怒りを溜め込んでいた。

「そーいやあ、妖精の尻尾の最後のマスターはジジイだったらしいなあ?大方、最強だと思っていた自分のギルドが負けて、拗ねて解散した……と言ったところか?」

「っ!!」

ブチッ、と何かが切れた音がした。人を小馬鹿にした態度が、マルクの神経を逆なでし続けた結果、完全にブチ切れさせていた。

「ふっ……とまあ、ガキの挑発なんて簡単なもんよ。」

「さすがお頭!!」

「黙れえ!!」

リーダー格に殴り掛かるマルク。右、左、その勢いを利用して回し蹴り。ブレスにその他滅竜魔法を組み合わせながら、初見ではまず避けられないようなコンボを行っていく。

しかし、男はそれを避け続けた。なんだったら、途中で目を瞑り始めたほどだ。

「眠い眠い、そんな攻撃で大魔闘演武を戦ってきたんだったら、マカロフの爺さんもそんなに強くなさそうだな。」

「ぐうっ……!」

反論したいが、攻撃を避けられ続けている以上言ったところでただの言い訳である。

ならば、何故避けられているのかを考えるべきなのだ。

「一番考えられるのは……!」

『魔法による未来予知』

魔法としては、未来予知は存在している。だが、とんでもなくピキーな魔法のため、あまり使い手が少ない魔法でもある。

それに、脳への負担がとんでもなく重いため、それも相まって余計に使い手を減らしているとも言える魔法でもある。

「ふんっ!!」

マルクは、簡易的ではあるが自身の魔力で形成された壁を広げている。自身が対象の魔法であっても、これならばマルクの魔力で無効化することも可能である。

それに、アジトという閉鎖空間であれば避けることは不可能だろう。

「お前の戦い方はよく知っている。普通の魔導士からしてみれば、恐ろしい魔法だ。」

魔力の性質も、とてもじゃないがまともな魔導士からしてみれば弱点だ。しかし戦い方を変えればそこまで弱点でもない。」

「っ!」

マルクとの間合いを一瞬で詰めるリーダー。何かの魔力でブレストをかけたのならともかく、その予兆も全くなかった上に全く姿を追

うことができなかった。

不意打ちの状態で、マルクの顔面に膝が叩き込まれる。

「お……一回でも意識をそらさせれば解除出来るのかこれ。なるほどなるほど」

「お前……今、どうやって……」

「見ろよこの靴、高かったんだぜ？ま、奪ったもんだがよ。」

そう言いながら、リーダーは自身の履いている靴を見せびらかす。ただの靴にしては、やたら装飾が多くそして魔水晶ラックリマが嵌め込まれていた。

「この靴はな、風乗りの靴ってアイテムさ。履いているだけで、まるで風のように瞬時に移動ができる。」

風のように移動じゃなくて、まあ所謂ショートワープみたいな感じで移動するんだけどな。」

「ぐっ……!?!」

「まあ、確かにお前の魔力の中に入ったら、魔法もなんも使えねーや。けどあくまで入るまでの話だ。」

リーダーは指を左右に振りながら、マルクにまるで教えるかのように優しく語りかける。

『「入ったらアウト」なだけだ。魔法は消えるが、『魔法による影響』は消えない。」

転送は1度きりなら可能だし、自分の速度をあげる魔法なら上がったまま、相手に突っ込むことだってできる。」

「よく、お分かりで……」

「まあなんだ、『魔力を食らう』ってインパクトは強いけどその程度だな。」

よくそんなんで妖精の尻尾にいられたな？あ、でももう潰れちまつたんだっけか!!」

「ぐっ……!?!」

ぐっぐつと、腸が煮えくり返る様な感じだった。何度も妖精の尻尾を馬鹿にする目の前の男に、マルクは腹が立っていた。

「実際、妖精の尻尾は1部を取り上げて最強の気分に浸っていただけ

だろう？

天狼島がなくなつてからの7年間、最強ギルドが最弱ギルドになると誰が予想出来た？」

「……」

「ナツ・ドラグニル、グレイ・フルバスター、エルザ・スカーレット、ミラジエーン・ストラウス、ラクサス・ドレアー、ガジル・レッドフォックス……まあこんな所か？」

「……何が言いたい。」

「こいつらがいなきや、妖精の尻尾はそこら辺のギルドよりも弱いって話をしてんだよ!!」

お前や、ウエンディ・マーベルだつてそうだろう？ 滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーなんて物珍しい肩書きがなきや路頭に迷つて——」

その瞬間、リーダーの腹を貫く腕があつた。マルクの腕である。しかし、マルクはその場から1歩も動かずに貫いていた。

「なん……腕、伸びて……!?!」

「俺のこと馬鹿にするのはいいよ、実際弱いし……滅竜魔導士なんて名乗つてるけど俺は『もどき』だしな。」

黒く染まつた腕が、リーダーの腹を貫いていた。そして、そのまま元の長さに戻るように、縮んでいった。

「けどな、妖精の尻尾を馬鹿にするのは許さねえよ。みんな我慢してたんだ……7年間、我慢してくれてたんだ。」

「が……!?!」

「それを馬鹿にするつてんなら、許さない。」

マルクは、歩きながら距離を詰める。周りにいた盗賊達も、先程までリーダーが優勢だった故に騒いでいたにも関わらず、今は静まり返っていた。

「ぐ……だが、てめえは幾多の魔法を使いこなす俺には——」

「今の俺を怒らせない方がいい。意識してしまつてる分、人間じゃない方の俺が、出てきちゃうからな。」

「に、人間じゃないつて——」

「もう言い、だまれ。」

そう言つて、マルクの腕が巨大化してリーダーに振り下ろされる。地面は、マルクの拳の形に抉れていた。

そこに、リーダーの姿は残っていなかった。

「お、お頭……？どこに行つたんで……？？」

「お、お前お頭をどこにやりやがった!!」

「……さあ？どこだろうな。あの世かもしんねえし……俺の腹の中かもしれないぞ？」

「ひ、ひいいい!？」

「いいぞ、どんどん逃げろ……初めから、貴様らを逃がす気もないがな。」

マルクとはどこか違った口調、そして段々と黒く染まつていく顔。表情もそれと同じくマルクのものではなくなつていく。

その様子を見て盗賊達は、こう感じた。『あいつは悪魔かなにかだった』と。しかしそれを誰かに伝えることは叶わない。今この時を持って、盗賊達は全滅するのだから。

「マルク！だいじょう……ぶぶ？」

「……」

「え、なにこれ……やけに静かだと思つたけど……盗賊達は？」

後から、ウエンディ達がやってくる。しかし、その時には既にアジトにはマルク1人しかおらず、周りには謎の破壊の後と散乱している武器だけが落ちていた。

「……いや、ここに来た時には既にいなかった。」

「けど……多分何かしらの理由で同士討ちしたんじゃないか……？」
「そう言いながら、マルクは武器を一つだけ手に取った。しかし、その顔はとても青ざめていて、少なくともマルクに関しては絶対に無事ではないと言いきれた。」

「つていうか顔色悪いよ!？」と、とりあえず一旦村に戻って休もう!!」
「シエリアに連れられて、マルク達は一旦アジトを後にする。しかし、それ以降村に盗賊達が現れることは無くなったのであった。」

「……本当に、全滅したのですか？」

「はい……アジトから逃げた形跡ありませんでしたし。どこか別の場所から逃げた、というのも線が薄そうです。」

「村の者達は、疑心暗鬼だった。あまりにも簡単に全滅してしまったのだ。怪しんでも当然だろう。」

「しかし、代表のものが確認に行ったが……帰ってくる答えはウエンデイ達と同じ事だった。」

「では、報酬は蛇姫の鱗の方に送っておきます……ありがとうございます……ありがとうございました。」

「いえいえ、気にしないでください。」

「私達は……何も出来ませんでしたし。」
「……」

マルクは黙って明後日の方を向いていた。それは、どんな感情からなのか。一体自分達が見ていない間に何が起こったのか。

「だが、ウエンデイには聞けなかった。聞いてもマルクが話さないこと、そして聞くと決まって辛そうな顔をしてしまうのが、ウエンデイの心に小さな痛みを生み出してしまうからだ。」

「聞きたかった、聞きたかったのだ。自分達は何年も付き添った仲であるのが、一番大きいから。一番長く付き合っている自分にすら話さない、という事実が、聞きたいけど聞けないというウエンデイの矛盾した心に痛みを残す。」

「……さ、帰ろう3人とも。」

「ええ、そうね……ウエンデイ、帰るわよー」

「う、うん!」

しかし、ウエンデイはこの時間かなかったことを……ただひたすら後悔し続けるのであった。

発現

「……あれ？マルクは？」

「なんか朝から『一人で行く用事がある』とか言っていないよー」

「えー：私には何も言っていなかったのに……」

「あんだ、今日は凄い寝てたもの。一人で行く用事、って言うならあんなが寝てる間に、出なきやいけなかったんでしょ。」

ウエンデイは軽く頬を膨らませながら、そのまま蛇姫の鱗のギルドの適当な場所に座り込む。

確かに、この日のウエンデイはよく寝てしまっていたので、朝早く出かける用事なら仕方ないだろうとウエンデイは思っていた。

「ウエンデイ、ならこの街で出てる仕事片付けていかない？」

「……マルクが帰ってくる間に終わる？」

「余裕余裕！」

『草刈り』と書かれているその依頼書を片手に、シエリアがウエンデイをクエストに誘う。生活費を稼ぎたいが、マルクも待ちたいという思いのもと、その草刈りのクエストを受けるのであった。

「……あんたかい、随分と久しぶりだね。」

「お久しぶりです、ポーリユシカさん。」

マルクは、一人ポーリユシカの元へと来ていた。ポーリユシカは、少しだけ嫌そうな顔をしたが、マルクの様子を見るなり真面目そうな顔に戻る。

「……診察かい。あんたが1番、自分の体の不調を分かっているんじゃないのかい？」

「分かっているからこそ、です。とは言っても、俺がわかっているのは……『変化が起きている』事くらいです。」

「……分かったよ、診察してやる。但し、何も異常がなかったらすぐに帰ること……いいね？」

「勿論です。」

ポーリユシカの言葉を聞いて、頷くマルク。ポーリユシカは、マルクを家の中に招き入れて、マルクの診察を始める。

初めこそ、真剣な表情で診察していたポーリユシカだったが、徐々にその表情が驚きのそれへと変貌していく。

「……あんた、自分の体の不調は……誰にも言っていないね？」

「はい。ウエンデイにも……言ってます。何か、勘づかれているような気もしますが……シラを切り通しています。」

「それでいい、こんなこと……正直に言うわけにはいかないだろうしね。」

カルテにマルクのことを書きながら、ポーリユシカは呆れたようなため息をつく。

それを見ても、一切表情を崩さずにマルクはじっとしていた。

「……あんた、この体の不調はいつから？」

「冥府タルタルロスの門と戦った時に、悪魔を1人倒してから。」

「嘘をつくんじゃないよ。倒しただけでこうはなるまい……いや、有り得るのかもしれないが、少なくとも『倒しただけ』というのは考えづらい。」

マルクの言ったことを即座に否定し、ポーリユシカは睨みつける。初めから隠すつもりは無かったが、馬鹿正直にマルクは答えた。

自分の体の中にはドラゴンと悪魔がいた事。そして、その悪魔を倒して完全に自分に取り込んだこと。その後、体中に激痛が走り続けていてこと……全てを。

「……あんたね、それが原因だ。むしろ、それ以外の理由はありえない。」

「…人間じゃ、無くなっているんですね。」

「……いいや人間さ、一応今はね。」

「……?どういうことですか?」

今は人間である、という言葉に疑問を抱くマルク。ポーリュシカは、説明のために一時的にカルテを置いて、適当な白紙の紙を一枚取り出してそこにペンで書き込んでいく。

「いいかい、今のあんたはどこからどう見ても人間だ。臓器の位置、動き方、形なんかも全部一緒、まるまる健康体さ。」

「じゃあ、本当に人間に……」

「だが、あたしが気づいたのはそこじゃない。全部魔性粒子に犯されている上でって事さ。」

「魔性、粒子……!?!」

過去に、これを吸った雷神衆は全員重症で倒れていた事もある。少し吸うだけで魔導士に取っては毒当然の代物なのである。

「ああ、けど完全に正常に動いている。ただ表面に被っているだけ……って言った方がわかりやすいね。」

「……一応、『今』って言うのは?」

「表面に張り付いている魔性粒子が、一気に体に取り込まれて体を変貌させる。」

それが、あんたの体に激痛をもたらした原因さ。」

「……一気に取り込まれる。」

「言っておくが、あんたの体が激痛に襲われるだけで済んでいるのは、あんたの体に悪魔がいるからだ。」

けど、それでもそんな頻繁に取り込んでいいものじゃない。」

カルテに再び書き込んでいくポーリュシカ。その様子をただじつとマルクは眺める。

「取り込み続けければ、体もそのうち慣れて来るだろうね。」

『けど』と付け足しながら、ポーリュシカはマルクに指をさす。明らかに今『慣れてくるんだったら』とマルクが安心し切っていた顔をしていたからだ。

「その分、体は戻らなくなっていく。今のその痛みは、体から発せられ

ているストツパーのようなものだと思えばいい。」

「ストツパー？」

「そうさね。『これは危険なもの』という信号が流れてきているのさ。慣れてしまえば、体の感覚が麻痺して痛みが来なくなる。」

「そうなれば——」

「……そうなれば？」

「あんたは、二度と人間には戻れなくなる。」

その言葉にマルクは唾を飲む。しかし、ポーリュシカの注意とは裏腹にマルクは人間を辞める覚悟はどうの昔にできてしまっていた。

「……あんた、『それでも』って考えていないかい？」

「え？」

「大方、あの子を守りたいとかそんなところだろうね。」

「けどね、そんなこととして残された側の気持ちとか考えたことはあるのかい？」

「残された側の……気持ち……」

マルクには、そこまでの考えが及んでいなかった……訳では無い。悪魔化すれば、自分は孤独になるだろう。それでも、仲間と言ってくれる人も当然いるだろう。

だが、それは以前から面識がある殆どの人物に限るのだ。一般人は、どう考えても自分を恐るようになるだろう。

そうなれば、迷惑はかけられない。つまり、どちらにせよ離れるしかないのだ。

自分からか相手からか程度の違い。自分から離れた場合、確かに残された側は自分を仲間だと思ってくれている人がいれば、悲しむかもしれない。イービラーがいなくなった、自分のように。

「……大馬鹿者、って言うのはあんたのことを指すんだねえ。」

「……かも、知れませんが。しかし、多かれ少なかれ……使わなければ行けなくなる時があります。」

「……言っておくがね、体のストツパーは簡単にいなくなるよ。」

「……分かりました。」

マルクは、その言葉を最後にポーリュシカの元から去っていく。

ポーリユシカは、溜息をつきながらこうも考えていた。これほど言ってしまうと、逆に使う覚悟を決めさせたかもしれない、と。

「あの子はほんと大馬鹿者だ。あんたの所のギルドの子は……みんなこうなのかい？マカロフ。」

言葉を呟きながら、ポーリユシカはカルテをしまい込む。人間嫌いの彼女だが、それ以上にマルクのような思考が大嫌いになりそうであつた。

「……ポーリユシカさんは言ってくれなかつたけれど……多分、すぐにいなくなってしまうんだろうな。危険信号っていうのは。」

ポーリユシカの元を去り、そして列車に乗り込んでいるマルク。外を眺めながらブーツとしているとふと意識が引きずり込まれる感覚に襲われる。

気がつけば、周りは真つ暗闇の空間に一人立っていた。

「……どうだ？あの老婦人の言っていることは。」

「信用できる人さ……お前と違ってな。」

「おいおい、俺の何を信用しようというんだ？その言葉が出てくるということは、本当は俺を信用したいみたいに聞こえるぞ？」

「そんな分けないだろ……グラトニー。」

否、マルクの後ろに寝っ転がっている者がいた。かつて、マルクが倒した悪魔……グラトニーだった。

「何度も言っているが……ここにいるのは、ただの残滓さ。魂だとか、

そんな崇高なものでは無い。

呪力を、魔力に変換して吸収しすぎたせいで生まれた、搾りカスのような意識だ。」

「だったら早く消えてくれ。お前の力がないと戦えないが、正直お前と喋るハメになるのは面倒なことこの上ない。」

「出来ればそうしているさ……だが、こうやって話してはいるが……俺に意思なんてものは無い。」

『グラトニーならこうしただろう』『グラトニーならこう言っていただろう』というお前の認識が、こういう形で生み出されているだけなのだからな。」

「……はあ、つまり俺の責任、と。」

「そういう事だ。この搾りカスのような意識を消したければ、お前が力を捨てるか……完全に力に取り込まれる他ない。」

グラトニーは立ち上がり、マルクの目を見る。マルクは、鬱陶しそうにため息をついていたが、実際これも自分の無意識で気づいている答えなのだろう。

「じゃあ何で俺を呼んだ。搾りカスが、俺をこっちに呼べるもんなのか?。」

「それも、お前が望んだ事だ。『取り込まれるという事は、取り込んだあの悪魔しか思いつかない』とでも思ったのだろう。」

「っ……」
確かに、気にはなった。自分の体のことだから、気にならないわけがない。だが、自分でやっているというの目は目の前のグラトニーにだけは言われたくなかった。無性に腹が立つからだ。

「ふ、怒っているなマルク・スーリア。だが、この俺は取り込んだお前の無意識によって話せているんだ。」

無視しても、お前の意識がある限り無限に出てくるぞ?。」

「なんとも悪質な悪霊なこと……」

「自分では面白くないと思っっているのに、そんな事は言うのだな。」
「うるせえ!!くそっ……」

吐き捨てるように悪態をつくマルク。そして、手で顔を覆ってその

まま目を瞑る。恥ずかしさやら何やら色々入り交じっており、今この時だけ感情がぐちゃぐちゃになっていた。

「……ん？」

しばらくしてから声がしなくなったと思い、マルクは目を開けて顔から手を離す。どうやら、いつの間にか戻ってきていたらしく列車の中だった。

「……悪魔の力、か。碌でもない以上のことは無いな……」

先程のことを思い出しながら、マルクはため息をつく。身体中が痛くなるのも、人間じゃないものに変質していくのも耐えられるが、どうにもグラトニーと話すハメになりそうな事だけはまったく耐えられる気がしなかった。

「はー……」

揺れる列車、揺られていくマルク。駅に着くまで、マルクは壁にもたれて先程のことを忘れるかのように目を瞑るのであった。

「悪魔の力、使い続ければ当然体は悪魔に近づいていくだろう。だが、例外もある。」

「……例外だと？お前俺の無意識のくせに、俺が知らないことを喋るんじゃないだろうな？」

「二応言っておくがね、喋っているのはお前の無意識だ。だが、記憶には3種類の者達の記憶がある。」

1人はお前だ、マルク・スーリア。」

「2人目、3人目は？」

「この体の持ち主、グラトニーと悪魔龍イービラー……三者を取り込んだせいかな、その記憶がある。」

お前の脳みそは、その不可に耐えられないから思い出さないようにしているけどな。」

再び入っていた精神世界、目を瞑れば入ってしまうのかと考えてマルクは余計に憂鬱になっていた。

「……で？今回はどっちの記憶からその情報を得たんだ？」

「グラトニーさ。悪魔をやっていると、色々な者から狙われるらしい。」

「それが、悪魔化に関係あるって言うのか？」

「ああ、そうだ。」

そう言うと、グラトニーは指を3本立てる。マルクは意味がわからなかったが、そのままグラトニーは説明を続けていく。

「滅竜魔導士は、使えば使うほど竜化していく。滅神魔導士にはそんな力は恐らくないだろうが……まあ数えておこう。」

で、肝なのが3種類目の滅悪魔導士さ。」

「太陽の村を凍らせた、つてやつだったか……それが？」

「あれは悪魔祓いの力を持つが……そのせいで、悪魔化することもあるようだ。力にはそれなりの代償があるということだ。」

静かに考えるマルク。今の自分は、擬似的な滅悪魔導士になっているのかどうか、と考えたのだ。

「無駄さ、いくら考えたところでお前のような存在はなかなか現れることがないだろう。」

「そう、だけど。」

「三者の記憶を持つ俺でも、お前のような存在はわからないんだ。だから、これに関しては考えるのは無駄さ。」

「……お前に言われるのは、本当に腹が立つ。」

その言葉とは別に、マルクは内心でグラトニーに悪態を着いていた。それと同時に、とある結論にも達していた。『考えても無駄なのは、これから考えなくてもいいから助かる』と。

その結論に達した後、マルクはすぐに目が覚めるのであった。

案外仲間は欺けない

マルク達が蛇姫ラミアスケイルの鱗に入ってから、3ヶ月ほどの時が経とうとしていた。

初めは、妖精フェアリーテイルの尻尾の事を引きずっていたマルク達だったが、段々とそれを見せなくなってきた。だが、時間が経つにつれてマルクがギルドにいる時間も少しづつ少なくなってきた。

毎晩、彼の体に痛みが走り続けるのだ。無視なんて到底不可能なほど、体をひたすら蝕んでいく激痛が。

悪魔の力を使えば、彼の体の変容するために痛みが発生する…とポーリユシカから聞かされてはいた。だが、使っていないにも関わらずその体は毎晩痛みを発し続けるのだ。

そのせいで、彼は毎晩夜遅くまで起きてしまい、そして気絶しては朝を超え昼を超え……と言ったことまでであった。

そして、その痛みにはマルクの感覚ではあるが、段々と収まってきているような気がしていたのであった――

「ふー…ふー………！」

ベッドのシーツを噛んで、必死に激痛によって声を張り上げそうになるのを我慢し続けるマルク。

だが、そんな理性も掻き消えるかもしれない程には未だに体に激痛が走っていた。

そして、この日は運良くすぐに収まった。

「はあ……はあ……」

シーツから口を離して、ぐったりするマルク。クエストよりもこの体の痛みのせいで体力が消耗されていた。

「うえ……汗がすごいな。」

汗を流すために部屋の風呂に行くマルク。あまりの激痛のせいから、体にうまく力が入っておらず、フラフラと歩くハメになっていた。

熱いお湯ではなく、冷めきったほぼ水の風呂でもなく、体温より少し下の少し暖かい程度のぬるま湯に浸かりたい気持ちがあるマルクにはあった。

「……つとと…隣に聞こえないようにしないと……」

元々マグノリアに家を構えていたマルクだったが、あのあと少し確認しに行ったら、冥府タルタロスの門との戦いに巻き込まれていたのか、家具諸共全壊してしまっていた。

故に、引越すことになったのだ。蛇姫の鱗の男子寮に。

「……不幸中の幸いというべきか、目か鼻がいい人が蛇姫の鱗にいなかったからなんとか今の今までバレることは無かったけど……そろそろ、バレそうだよなあ……」

ウエンディやシャルル、シエリアは当然女子寮なので鼻か耳がいい上記の3人は除外されるのだ。

男子には、強力な魔導士は入れどそのような鼻か耳がいいという魔導士は、いなかったとマルクは記憶している。

と、その時であった。突然、マルクの部屋の扉がノックされたのだ。「……服だけ着替えよう。」

汗だくの服でいけば怪しまれる可能性があるのですが、マルクは仕方なく服だけ着替えていくことにしたのであった。何もしないよりは、マシな程度ではあるが。

「はいはい、誰ですかー」

そう言いながら、マルクは扉を開ける。男子寮とはいえ、こんな夜中に人が来る、というのは中々珍しいことである。

「……」

「……と、トビーさん？」

何故か目の前にいたのはトビーだった。いつもの上半身裸で、何故かぶら下がっている靴下。そしてどこを見ているか何を考えているかわからない男である。そして、魔法は爪を伸ばして爪自体に毒を付与する魔法なのだが……一応、顔は犬っぽい見た目だった。彼が鼻と耳がいいなんて話は、全く聞いたことがないが。

「……靴下、知らないか……？」

「……また、無くしたんですか？」

夜中に呻き声を上げていることを言われるかと思ったが、いつもの事というかなんというか、靴下の事だった。

「また、無くして……お気に入りだったのに……！今、部屋を回ってみんなに聞いて——」

マルクは、首からぶら下がっているものに指を指す。その指の先にあるものに、トビーは目を移す。そして、無くしたと思っていた靴下を見つけてボロボロと泣き始める。

「ありがとう……ありがとう……！」

「あ、うん……いやどういたしまして……」

「お礼にこれやるぞ。」

そう言っただけから取り出したのか、箱に入った何かを渡すトビー。それで満足したのかマルクの部屋から離れていく。

「……何これ？」

マルクは恐る恐る箱を開けていく。中には、何やら瓶詰めのだ錠剤のようなものが入っており、ラベルもごく丁寧に貼られていた。どうやら、店で買った薬らしい。

ラベルには『どんな激痛もたちまちスッキリ！痛滅魔法EX』と書かれていた。その瞬間マルクは、心臓が飛び跳ねるように驚いた。

「え……？ば、バレてないんだよ、な？」

トビーの部屋は、マルクの部屋の上下左右のどの隣にもない。というかそもそも、トビーが寮住まいだったかどうか不明である。

しかしこんな時間にここにいるのだから、当然ここに住んでいる……筈である。

「……ま、まあありがたく貰っておこう。」

先程あった痛みなんて、完全に忘れきってしまったマルク。とりあえずその日は、その薬を飲んで寝ようとするのであった。

「……まっす……」

「よー、マルク。元気かー?」

「元気ですよ、というかその質問昨日も一昨日もしてませんでした?」

「いやいや、気のせい気のせい。」

どうにも、マルクは昨日のトビーの事から妙に周りの事が気になり始めていた。

というのも、やけに自分の体調の事を聞いてくる人もいれば、やけに自分の手伝いをしようとする人が増えたような気がする……からである。

「よー、今日も奢ってやるよ。」

「いや、先々週も奢ってくれたじゃないですか。というかココ最近なんでそう奢ってくれるんですか。」

「そんな奢ってねえよ、気のせい気のせい。」

やはりおかしい。マルクは疑心暗鬼とは言わないが、どうにも周りの動きがおかしい気がしていた。

しかし、そこは突っ込めない。ここまで周りが似たような行動をするということは、全体がグルである可能性があるからだ。

「うーむ……」

「おはようマルク。今日はこの仕事行く?」

依頼書を持ってくるウエンデイ。マルクはそれを見て考え込む。依頼内容は、最近暴れている珍獣の討伐、または捕獲を依頼するものだった。

決して安易に簡単だ、とは言えないが……はつきり言えば、ウエンデイとシャルルさえいれば問題なくクリアできるようなクエストだろう。

「……そうだな、一緒に行くか。シエリアは?」

「リオンさんと一緒に仕事だつて。」

「そっか、なら久々に3人でのクエストだな。」

「油断しないことよ。あんた達なら問題なく勝てるでしょうけどね。」

シャルルがそう忠告したのを、頭に叩き込む2人。そして、目的地まで馬車で向かうのであった。

だが、その間マルクはずっと考えていた。自分のことをやたらと可愛がってくれるのは、正直悪い気がしない。しかし、体調のことをやたら聞かれたり、やたらと奢る人物は前までそのようなことはしなかった者達だ。

それが起こり始めたのは、悪魔の力を使っていないにも関わらず、体に激痛が走り始める時期とほぼ一緒だった。

「……やっぱり、バレてる?」

「マルク?どうしたの?」

「いや、なんでもない。」

バレている、のだとしたら声が部屋から漏れているということである。しかし、いつも声は抑えているし、耳がいい人の部屋が隣接しているなんて話も聞いたことがない。

つまり、何かしらの方法でバレている、ということである。と、ここでマルクはウエンディに視線を向ける。バレるとすれば、同じ滅竜魔導士であるウエンディからであろう。耳と鼻がいいのは彼女がそうであり、そして彼女ならば痛みを我慢している自分を、どこかで見聞きした可能性が高い。

「……ウエンディ、終わったら天空魔法を使ってほしい。」

「え?でもマルクの体の痛みは取れるかどうか……あつ。」

「……純粹すぎて、偶にお前のことが心配になるよ俺は。」

というか、やっぱりウエンディだったんだな?最近周りの人がやたら優しい気がしてたけど……言った?」

「うう……うん。」

カマをかけられて、ほぼマルクが望んだとおりの答えを出すウエンディ。バレてしまって、少し落ち込みながらも素直に頷いて答える。

「……どこで、知った?」

「この間……森で苦しんでる声を聞いて……話したら、とりあえずバレルまで優しくしてやろう……ってマスターが。」

「……マスターが言ったってことは、少なくとも事情は全員知って

るってことか？」

「私が、言ったから……」

「そっか……」

少し考えるマルク。別に、怒ることではない。ただ、自分も痛みを我慢出来ずに周りに甘える程の子供でもないと思っていたため、ウエンデイにどう言えばいいか、少し迷っているのだ。

「……バレたら、どうするって？」

「まだ、何も聞いてない……」

「はー……知ってるのは、それくらいか？」

「う、うん……理由はわかんないけど……痛がつてるくらい……なんで、痛いのか？」

マルクは、答えに言い淀む。素直に言うべきか、否か。言えば、間違はなくウエンデイはマルクを糾弾するだろう。なぜ、自分に相談してくれなかったのか、と。

もし素直に話せば、ウエンデイは恐らく蛇姫の鱗でも信用の高い者達に話して、治してくれるような医者を探そう、と言うに違いない。そんな医者、闇医者でもいるわけがない。それ以前に、この悪魔化を無くしてしまえば……自分は力を失ってしまう可能性の方が高い。

ただの人間に戻ることは、決して許されない。ただの守られる立場になってしまっただけは、駄目なのだ。

「……さあ、だから最近ポーリユシカさんのところに通ってるんだ。」

「……いないのは、それが理由？」

故に、話せなかった。恐らく、これからまた色々なことが起こるだろう。ウエンデイの隣には、シエリアかシャルルが立つだろう。隣に自分がいないのはいい。背中でも、彼女の前でも……どこでもいいから今の守り、守られるの関係は決して崩してはいけないのだ。

だが、力を失えば……一度自分はただの守られる立場になる。何もお返しができない、守られるだけの一般人になる。自分だけが……逃げってしまうのと何ら変わらないのだ。

「ああ、ごめんな？理由が判明するまでは、こんな生活続けるだろうけ

ど……」

「ううん、ありがとう話してくれて。」

「あんた、重要なことはいっつも黙ってるけど……まだ何か隠してるんじゃないわよね？」

「はっはっは……」

「ちよつと!?!」

シャルルが鋭いことを言うが、マルクは笑って誤魔化した。話したあとの結論が、見えきってしまっただけでいるから誤魔化すしか方法がない。今は嘘について純粋なウエンデイは騙せたが、勘の鋭いシャルルは騙せそうにもない。

「あんた、ウエンデイ泣かせたら承知しないんだからね!?!」

「大丈夫だっての……俺は、ウエンデイをいつまでも守るつもりだからな。」

「わ、私だってマルクを守るよ!?!」

「そりゃあ頼もしい、お互いに守り守られて……つと、どうやら着いたみたいだな。」

馬車が停止する。目的地に到着したようで、お札を言ってから料金を払って更に歩いていく。

クエスト内容は、討伐 or 捕獲。出来れば捕獲する方がいいのか、または討伐した方がいいのか。

それらを踏まえて、マルク達はクエストを始めるのであった。

別れ

1人の悪魔の夢を見ていた。一体のドラゴンの夢を見ていた。一人の人間の夢を見ていた。

悪魔の夢では、人間と戦いそして勝ち進んでいた。勝てば勝つほどに強くなり、そして倒した相手を食らうことでさらに強くなる。滅悪魔導士デビルスレイヤーと出会った時に、その力は最大限に飛躍したが、最終的に一体のドラゴンに倒されてしまう。

ドラゴンの夢では、雄々しく空を飛びながら攻撃してくる者をその電撃で焼き殺していた。だが、彼は未だに強さを求め続けていた。最強と名高いドラゴンの背中を追い求め、ひたすらにがむしやりに強くなるうとしていた。最終的に、1人の悪魔を食らうことでその強さに打ち止めがかかった。別のドラゴンに変異したからだ。

人間の夢では、自分は子供となり誰かと遊んでいた。女の子と手を繋ぎ、歳上である子供達の喧嘩を諫めていた。だが、顔を思い出そうとしても微妙にノイズがかかっていた。一人の女性が、手を伸ばしていた。その人の顔も思い出せないが、自分にとって……いや、子供達にとつてとても大事な人だったような気がしていた。

また、ドラゴンの夢を見た。変異したあとの話である。子供を育てていた、夢なので何を思っ育てていたのかはわからないが、とても大事そうに育てていた。

だが、ある日目の前にいたドラゴンに……殺された。明確に思い出せる、確実に、鮮明にそのドラゴンの姿を見た。

破壊のドラゴン、ドラゴンを滅する竜の中の竜……竜の王アクノロギアの姿が、はっきりと目に焼き付いていた。

「……夢、か？」

目を覚ますマルク。目の前にはしばらく住んで、慣れてきた部屋の様子が写っていた。

悪夢ではなかったにしろ、その鮮明な記憶はマルクに汗をかかせてしまっていた。

「……はー……」

安心しきったマルクは、ベッドから降りて個室についているシャルルームに向かう。汗でぐっしよりの為、流したくなったからだ。降りて、ふと違和感を感じて腕に視線を向ける。

「っ……!?!」

黒く変色して、鱗が生えていた。まるでドラゴンのような、自分の親であるイービラーの様な腕だった。

腕の異様さよりも、マルクはなぜ腕が変異しているのかに目を向ける。夢のせいか、それでもまた別の理由か。

この腕は、ドラゴン化というよりは悪魔化に近いだろう。つまり、何も無かったとしても、無意識で発動してしまうということだ。

「……包帯で誤魔化すか。手の方は……何とかなるかな……」

ある意味、恐れていた事態である。だが、いずれこうなっていることは予想出来ていた。

——これが慢性的に続くようなら——

「1人で生きていくしかねえかな……」

仲間たちは受け入れるだろう。恐れるかもしれない、というのは傲慢である。だが、もしこのまま悪化の一途を辿っていけば仕事にすらならなくなっていくだろう。事情を知らない街の人は自分に対して恐怖などの感情を抱くだろう。

そうなれば、迷惑を被るのは蛇姫ラミアスケイルの鱗である。ギルドのみんなに迷惑をかけるわけにはいかないのだ。

「シャルルに怒られるかな……いや、シエリアにも怒られるし……ウエ

ンデイにも怒られるかな。

いやそれ以上に……泣かせちまうか。」

それでも、迷惑だけはかけたくない。黙って出ていこうと、マルクは決める。理由を話せば、間違いなく止められるかもしれないからだ。

いや、案外リオンあたりは止めずにいてくれるかもしれない。その優しさで。

「けど、その優しさに甘えちゃいけないな。」

手紙だけを書いて、部屋の引き出しに入れるマルク。これで、いいなくなっても問題ないだろう。

風呂に入ろうとしていたら、こんな現実と直面してしまうとは思っていなかったマルク。とりあえず、いつものようにギルドに向かう……できれば、腕を隠せるような服も持っていきたいと感じた。

どうせなら、いつもの服ではなく新しい服に変えるべきだろうと考えてから、シャワーを浴びてからマルクは新しい装いを身につける。覚悟の証。決まった覚悟をいつでも実行出来るような装い。そして、マルクはギルドへと向かう。

その日向かった仕事で、最後の仕事になるとは……彼自身も全く予想していなかった訳だが。

「……なんだ、なんで急に前のこと思い出して……」

とある家屋で、マルクは目を覚ます。その家屋は、とんでもなくロボロで人が住めるような場所ではなかった。

「……まあいい、とりあえず今日も街に向かうか。」

マルクは、ベッド代わりに使っているソファから降りて、外に出る。そこは、廃村だった。

近くに何故かあった廃村を使って、マルクは何とか雨風を凌いでいるのだ。

「夜か……昼寝するつもり無かったんだけどな。疲れてんのかな……」

空を見上げながら、マルクはふと先程のことを思い出していた。全て夢ではなく、現実に起きたこと。仕事内容は、いつもと何ら代わりないものだった。だが、溜まっていた何かが爆発したのか翌日には今のような姿になっていた。あそこから去るには、十分な程に変異していたのだった。

「……やけに街の方が騒がしいみたいだけど。」

「マル、ク……」

「マホーグ？」

マルクの後ろから声をかけてくる人物が1人。マホーグ・オロシ、かつてマルクと戦った少女だった。

この廃村も、彼女が勝手にお邪魔しているのに便乗した結果である。とは言っても、マホーグはこの廃村に住むことを快くOKしてくれたが。

しかし、そのマホーグの様子がどうにもおかしい。

「ら、蛇姫の鱗が……」

「何かあったのか!?!」

「ま、モンスターの群れに、襲われて、る……ま、街ごと……」

「モンスターの群れだと……!?!」

マルクは思考を巡らせる。何故蛇姫の鱗に、いやそもそも街そのものにモンスターが入り込んでいるのか。

すぐにその答えは出てきた。明らかに自然行動ではない行動、そしてそれが大軍で押し寄せているということ。そう、これは誰かがモンスターを操っているということだとすぐに理解した。

「人間を警戒してるから、モンスターは街に入つてこない。それこそ

目や耳が機能していないやつか頭が働いていないやつくらいだ。」

「だ、誰かが蛇姫の鱗を潰そう、と……………」

「仮にそうだとしたら、犯人は1人…いや、犯人は1ギルドだ。」

「ギ、ギルド?ど、どこの闇ギルド……………」

「いや、正規ギルドだったはずだぞあそこは…………魔導士ギルド蛇鬼の鱗《オロチノフィン》!」

歯ぎしりしながら、マルクは走り始める。その突然の行動に、マホーグは驚いていた。

「ど、どこに!?!」

「モンスターを操ってるんなら多分街の外から見てるはずだ!そんなもって、モンスター達の位置が見渡せる高い場所!そこにあいつらはいるはずだ!!」

「じゃ、じゃあ私のショートワープで……………」

「頼む!!」

マルクはマホーグの魔法であちこちに飛び始める。そして、マルクの出した条件の合う場所はほとんど少なく、すぐに見つけることが出来た。

「あそこか!頼むぞ!!」

「う、うん!」

そして、マルクに言われるがままにマホーグはそこにワープする。

ほぼ敵地のド真ん中にワープしてきた為、敵は油断だらけである。

「な、なんだおま…あぐっ!?!」

「てめえらゲスに名乗る名前なんてねえよ!!マホーグ下がってる!!」

「わ、私も……………」

「俺に巻き込まれて死にてえなら別だ!!下がってる!!」

「う、うん……………」

マルクの鬼気迫る表情に、マホーグは気圧されて渋々後ろに下がる。確かに、今のマルクに近づけば危ないと、彼女の魔眼が告げていた。

今一緒に合わせて戦えば、1分も経たずに死んでしまう。

「てめえら幾ら嫌いだからってよ…………街ごと狙うのは闇ギルドレベル

だ!!」

「狙えるところから狙っただけだつての!!」

「そうか……なら、遠慮はいらん!!」

「おめえこそ1人で1ギルド全員相手にして生きて帰れると思つてんのかア!？」

「安心しろ……全員殺しはしねえよ……!」

「ほぎけ!!やれやてめえらア!!」

オロチのリーダー核のような人物が、周りに命令を下す。その命令に従つてか、一斉に魔法を放つオロチ達。だが、その魔法は全てマルクが食らつていった。

「ま、魔法を食つたア!？」

「こんなやついるなんて聞いてねえ……ふげつ!？」

「俺を怒らせたこと、後悔させてやるからな……!」

魔法を無効化しながら、次々と倒していくマルク。漆黒の腕を振るい、顔の半分が黒く染まつているマルクのその姿に、オロチ達は段々と気圧されていく。

「な、なんだよあいつ……て、テイクオーバーしてるわけじゃねえのに何であんな姿なんだよ!？」

「し、知るかよ!!ジユ、ジユラがいねえから狙い時だと思つたのによ!!こんなやついるなんて!!」

「今度からちゃんと調べておくべきだぜ……!」

「くっ……先生、先生ー!!」

「……先生?」

先生と突然呼ぶオロチ。言葉通りの意味ではないだろうが、しかしマスターと呼ばない辺り、どうやら他の魔導士を雇つたようだ。

「……お前、俺を飛ばせてくれるか?」

「お前は……」

マルクは、その男を見たことがない。だが、突如として割れる地面に自分の身にかかる重み。

そして、その風貌はウエンディ達に聞いたことがあった。

「まとめられた髪、それでもつて重力の魔法に、おあつらえ向きに羽

織っているだけの上着とはだけている胸元！

7年前…いや、8年前の時の天狼島と同じ格好をわざわざしてくれてると思つてなかったぞ…ブルーノート・スティンガー!!」

元悪魔の心臓が1人。重力を操る魔法を持つ男、ブルーノート・スティンガー。

完全に壊滅した悪魔の心臓だったが、ウルティア達のように生きているものはそれぞれ独立したようだ。いい意味でも悪い意味でも。

「お前…どこかで会ったか…?」

「直接はあつたことはねえよ…多分な。お互いに記憶に残つてないんだから。その辺はどうでもいいだろう。」

「…まあ、その通りだな。だが…俺の重力下で動けるやつなんていない。どちらにせよ、記憶に残らないほどには、弱かつたということか。」

「…いいいや、今からあんたの脳みそに強く刻み込んでやるさ。」

今マルクが重力下で動けないのは本当である。しかし、あくまでそれは素直に重力操作の魔法を受けているからである。

マルクは、全身に魔力を纏う。悪魔化をなるべくせず、かつこの魔法を打ち消すために魔力を絞り出す。

まどえたのなら、最早あとは敵の処理だけである。

「なんだと…お前、なんで俺の重力下で——」

「ただの魔法特攻なだけだ、お前も捕まっとけ。」

そのセリフと共に、マルクは即座にブルーノートに近づき。いいパUNCHを当てて殴り飛ばす。

ブルーノートは、2度3度地面を水切りする石のように飛びながら転がって行ったあと、動かなくなる。

「せ、先生が一撃で…!?!」

「見たろ?俺には魔法は通じない。逃げるならご勝手に…まあ、その時は捕まえるなんて生易しいことを言わずに…殺してやるからな。」

「ひ、ひいいいいいい!!」

オロチ達は、腰を抜かして動けなくなっていた。ロープが無いの

で、このまま捕縛することが出来ないのです、どうしたものかとマルクが悩んでいると、上から声が聞こえてくる。

「お、オロチが全滅してる!？」

「ブルーノート・ステインガー!?なんでこんな所に!？」

「——マルク!!」

シエリア、シャルル、ウエンディの3人の声。どうやら、街はリオン達に任せて直接ここに来たらしい。

ナツ達もまだいるのか、ハッピーとともに来ていた。

「これ……マルクが1人で……?」

「マルク、マルク!!どうして一人でいなくなったの!？」

「……」

ウエンディは、色々な思いを込めてマルクを糾弾する。その姿に気づいていないのかいるのか分からないが、ともかく気にしていないようだった。

「……俺は、ただの化け物だ。こいつらをやったのも、ただ煩かったからだ。」

「……蛇姫の鱗に、戻る気は?」

「……知らない、な。それに俺のようなやつが行ったところで、街のヤツらから気味悪がられるのが関の山だ。」

自分がつける精一杯の嘘をつくマルク。当然、そのような嘘は簡単に見破られてしまっている。

だが、その言葉にウエンディはマルクが思っていることが理解出来たようだった。

「……気味悪がられるのがいやだから、いなくなったの?」

「街の人間達はただの一般市民だ。テイクオーバーでもない、初めからこんな姿をした歪な化け物を見たら卒倒するだろう。」

「そんなこと、分からない!」

「そう、分からない。だから俺は避けている、というだけの話だ。あの街へは行かない、俺はそう決めている。」

「——戻ってやれよ、ウエンディの為に。」

突如聞こえてくる声。そちらに視線を向けると、見慣れた桃色の

髪、白色のマフラーをつけている男。

「…ナツ・ドラグニル。」

「ようマルク、お前随分黒くなったな。」

久しぶりに合った2人は、言葉とは裏腹に一触即発の空気を見せているのであった。

対面

「よー、マルク…お前随分黒くなったな。」

「……大魔闘演武優勝ギルド、妖精の尻尾。フェアリーテイル その中心核とも言える存在、ナツ・ドラグニル、か。」

「あ？何言ってるんだ。お前だって妖精の尻尾だろうが。」

ナツと再開したマルク。しかし、できる限りナツとは関わりたくなかったため、ウエンデイと同じように面識のないフリをしていた。

「知らんな。俺はずっとその森に住み着いているだけだ。マルクなんてガキは知らないな。」

「んなこたア知るかよ。お前はマルクだ。忘れたってんなら、殴って思い出させてやる。」

「ナツー、あんまり無茶苦茶やっちゃダメだよー？」

「わーってるよ。」

マルクは焦っていた。今のナツは、一年前とは比べ物にならないくらい強くなってしまったことに、気づいてしまったからだ。

「さて……おい、3人とも離れてろ。服溶けんぞ。」

「服が!？」

ナツが言った通りに、とりあえず一旦は従うウエンデイ達。ある程度離れたのを見送ってから、再びマルクに面と向かう。

「さて……で、なんで離れた。知らねえフリして誤魔化そうとしたら、燃やすぞ。」

「……街に向かえば街の者達が、恐るからだ……これで、いいだろう!!」

マルクは、足に魔力を貯めてそこから一気に飛び出して、脱出を図ろうとする。

事実、一瞬で離れることは出来た。前のナツなら、恐らくこの時点で鼻で匂いを追って追おうとするだろう。なにせ、一瞬で空高く飛んでナツが豆粒のように小さくなっていったからだ。

だが――

「そんなんで納得出来るかア!!」

マルクに向けて、ナツはブレスを放つ。前よりも大きく、それでいて炎の質もちゃんと上がっている。直感的に、これを浴びるのはマズいと感じたマルクはお返しと言わんばかりにブレスを吐く。

「ちっ、流石に厄介か。」

「む、無茶苦茶じゃないか……!」

一応防げたものの、熱量だけでとんでもない熱さという事だけが理解出来た。マルクは直撃しなくてヒヤヒヤしていた。

「お前、ウエンデイには話したのか?」

「……話せるわけ、無いでしょう。」

ここで、マルクはついに心の仮面を外す。今の一言で納得さえしてくれたら、どれほど良かったのかと思いつながら。

「ウエンデイ、シエリアに話してみたことを考えてくださいよ!!黙っててくれ、と言えば黙っててくれるような子達ですか!」

「……まー、ウエンデイは優しいからな。話したのに、黙っててくれと言われりゃあ一番困るだろうな。」

「ええ……あの子に負担をかけたくなかった。それに、さつき言ったこともありますよ。」

「んなもん、1回1回説明していきやあいだろうが。」

「それでも、恐る気持ちは変わるわけじゃないでしょう。怪物が目の前にいるんですよ?」

「街のヤツらのことを考えてまで、お前はウエンデイと離れてよかったのか?」

とても、意地悪な質問だ。この答えのわかりきっているものをぶつけて、ナツはマルクの真意を探ろうとしているのだ。

そう、ナツにも答えはわかりきっているのだ。

「いいわけが、無いでしょうが!」

「っ!!」

そして、この質問に対して完全にキレたマルクは、ナツに殴り掛かる。その拳は、簡単にかわされてしまったが。

「どんだけ寂しかったか!一人で生きていく覚悟はあった!それでも、寂しかったんだ、悲しかったんだ!!」

けどしようがないだろ！そんな気持ちを押し殺さなきゃあいけなかったんだ!!」

「なんで押し殺す必要があんだよ。口で言わなきゃあ……分からねえだろうが!!」

マルクにカウンターと言わんばかりに殴り掛かるナツ。しかし、その拳は受け止められてしまう。

「っ!!」

「さっきも言っただろうが……言って一番負担がでかいのは、ウエン・ディなんだよ……!」

ここで、マルクの蹴りがナツの腹に入る。だが、浅かったのかナツはすぐさま距離をとる。

「ああもう……あなたに対して『これ』は使いたくなかったんだ……けど、あなたがわざわざ俺を挑発するからだ……魔力が完全にキレルか、俺が落ち着くまで……止まらない。」

「よし、1回本気で殴り合いたかったんだ。全部だし切れよマルク……ぶん殴って終わりにしてやるからな。」

さつきとは、全く比較にならないくらいの熱量を持った炎を噴出し始めるナツ。それに対して、マルクの体は段々と変色していく。

「あなたの炎も！挑発も！全て食らってなかったことにしてやる!!」
「そうだよ、その意気だ……!」

「俺の魔力なら、あなたの炎を無効化できる！いつまでも負けてばかりだと思ふなよ……!この1年間、自分の魔力を制御できるようにしたんだ……!」

魔龍の咆哮!

マルクは、ブレスを放つ。それは、とても範囲が広いものであり普通の魔導士なら避けようがないものだった。

だが、それをナツはかわそうとすらしない。

「吸収されんなら……されねえくらい強い力でぶちかましてやらア!!
火竜の咆哮!!」

「っ!?!」

マルクよりも圧倒的にでかいブレス。それは、マルクのブレスで即

座に吸収できる量をはるかに上回っていた。

「ぐ、ぐあああああ……!!?」

当然、かわせるはずもなくマルクはその炎に焼かれる。しかし、あくまでも熱いだけで、だ。

「はあ、はあ……!!?とんだ化け物になって……!」

「にっしっしっ」

ギリギリで、なんとか自分の魔力を体にまとうことで完全に焼かれることを阻止したが、とんでもないパワーである。

力を出し惜しみしては、勝てるとは思わない。だが、悪魔化をするべきか、と言われれば……

「どうした?勝つ気なんだろう、俺に。」

「……ああ、あんたに勝つ気だよ俺は!!」

マルクはナツとの距離を詰めるために素早く近づく。ナツも、それに合わせて構えを取って対抗しようとしてくる。

「だらア!!」

「つと…」

連続で拳を繰り出すマルク。だが、ナツはそれを全て紙一重でかわしていく。全て、『任意』でギリギリでかわしているのだ。

受け止めることすらしない。それが、マルクの心にさらに拍車をかける。

「うがアアア!!」

アツパーを繰り出そうと、マルクは拳を振り上げる。それも、ナツは紙一重でかわすが、その直後に顎に衝撃がはしる。

「なっ……!!?」

「油断しすぎだ!!何も出来ないまま翻弄されるだけと思ったか!!」

「へへっ……燃えてきたぞ……!」

「何が燃えてきた、だ!!」

マルクは、アツパーの勢いのまま顎に膝を入れていたのだ。全てを紙一重でかわしていくその自信が、その一撃を入れることを許してしまっただのだ。

だが、逆に言えばもう通じない小手先の技だろう。それほどまでに

ナツは手加減してくれていた。

「は、はあああ!!」

「ふんっ!!」

間髪入れない連撃を行っていくマルク。拳を放ち、かわされれば即座に魔法で、あいた距離を詰める。

しかし、ナツはマルクの魔法でさえもすべてかわしていき、逆に距離を詰めてきたマルクを蹴り飛ばす。

「そんなもんじゃねーだろ、お前の力は。」

「だから、何だつてんだ!!」

「中途半端に使うから、中途半端に終わるんじゃないやねえのか。全部出し切っちゃえば、食うやつもいなくなんだろ。」

「あんた……何を言つて——」

ふとここで、マルクはナツの言葉で閃いた。ポーリユシカの言葉に、恐れだけを抱いてしまい、単純な対策を怠っていたことを。

そう、自分が悪魔の力を中途半端に使うから、体が中途半端に悪魔化していったのではないかと。

なら、自分の中の魔力を全て一旦使い切り、改めて悪魔としての力である魔力を『自分で食って完全に自分に同化させればいいのではな
いか』と考えたのだ。

「……そうか、なら初めからそうするべきだった……!」

「へっ……顔つきが変わったな。」

「覚悟しろよ、ナツ・ドラグニル……今から俺は、あんたを殺す気でいく。ただ怒鳴るばかりで、感情を振り回してるだけじゃあダメだったんだ。」

「なんか思いついたか?」

「ええ、おかげさまで……ついでに、今からあんたを倒して、妖精の尻尾でのパワーバランスを崩してやる。」

「かかってこいよ。まだ俺は、お前に倒されるほど落ちぶれちゃあいねえからな。」

お互いに不敵な笑みを浮かべるマルクとナツ。しかし、お互いにとんでもない量の魔力を練り込んでいる。

それが、圧となって周りにいる者達に緊張を与えていく。

いつもなら、ナツが勝つだろう。だが、今のマルクはナツに対しての遠慮が全くないのだ。そして、今のナツと同様の力があるかもしれないということを、肌でひしひしと感じ取っていた。全てを出し切つて、の話だが。

「その余裕……いつまで続きますかね!!」

「へっ、そう簡単に負けるわけにやあいかねえよ。」

「そうです……かつ!!」

マルクは一気に飛び上がり、かかと落としをナツの頭上から決めにかかる。当然、ナツはこれを避けて当たらないようにしようとするが、直前にその行動をやめて、遅れながらも同じく足技で対抗しようとする。

「魔龍の尾激!!」

「火竜の鉤爪!!」

ナツは気づいたのだ、その一撃にはかなりの量の魔力が込められており、ただ避けるだけではその魔力の塊にやられてしまう。

そして、2人の足技がぶつかる。ナツの炎はマルクの魔力に吸収されてしまう。つまり、単純な蹴りと魔力によるブーストのかかった蹴りの勝負になるのだ。

「へっ……けど、あんまり一直線だと意味がねえぞ?」

「へっ……!?!」

だが、ナツは繰り出した足を折り曲げて力を抜いた。今まで押し合いをしていたにも関わらず、片方が力を抜けばどうなるか?当然、押していた方は空回りするかの如く一気に相手に踏み込むだろう。

マルクだって、ナツが力を抜いたことによりかかと落としが空を切つて、地面に激突していた。

「しまっ——」

「火竜の鉄拳!!」

それが、大きな隙となりマルクの体にナツの強烈な一撃が直撃する。油断していたところからの一撃だったので、防ぎようがない。

しかし、マルクもただでやられるほどではない。咄嗟に、ナツの繰

り出した腕に、自分の腕を絡ませて拘束する。

「魔龍の尾激イ!!」

絡ませた直後、ナツの脇腹にマルクの一撃が入る。ガードすらさせていない、マルクの中では最良の一撃だった。

「ガハッ…!?!」

「ぐっ……」

マルクとナツは、お互いに距離をとる。お互いにブレスがあるのは理解していたが、それが相手に通用するものではないと理解しているのだ。故に、肉弾戦が得意な相手に対して距離を取って様子を見る、という行動に出た。

「……まさか、あんな手を使ってくるなんて。ナツさんらしからぬ手ですね。いつものあんななら、あそこからさらに追加で威力を出してくるタイプなのに。」

「あ?俺だって頭使うぞ。」

「いやいや、ナツってば使う時少ないじゃん。」

「んだとー!?!」

ハッピーがやれやれと言った感じで、呆れている。しかし、この場にいるシェリア以外のメンバーは、『いや頭を使う時は確かに少なかつただろう』と内心思っていた。

それでも、信念で突破していくのが一同のナツ・ドラグニルという男に対しての認識なのだ。

「……ま、そんなことはどうでもいいんですよ。」

「……まだやる気か?」

「言つたでしょ、あんたを倒すつて。」

「へっ……!?!」

ナツのその笑みの直後、再びぶつかり会う2人の滅竜魔導士ドラゴンスレイヤー。魔力が尽きるまでは、終わらなさそうであった。

ゼロで馴染ませ

「が、ア!!」

「おらア!」

攻防が繰り広げられていく。黒い魔力が爆発するかのように荒れ狂い、それでさえも燃やすかのような熱い炎が、燃え盛る。

黒い魔力は、放たれる度にその濃さを消していった。だが、濃さが消えていく度に、別のものへと変質していくように感じた。

熱い炎は、地面を焼いて土すらも溶かしていく。炎に込められた魔力を喰らい、さらなる糧としていく。

「セカンドオリジン第二魔法源…じゃねえな、その力。」

「似て非なるもの、ですかね…俺の中にあるもう一つの魔力源、と言えばまあ似たようなものなんでしょうけど。」

「…けど、まだ全力じゃあねえだろ!!」

「そりゃあお互い様!!」

黒い魔力…マルクは自分の中の別の魔力が体に馴染んでいくような感覚を覚えていた。

今までは、痛みを感じていた。ポーリユシカが言っていた『使う度に体に変質していく』というのは、自分の中の魔力が完全に無くなっていないため、それが別の魔力源…悪魔としての力である呪力が、マルクの魔力を食らっている為だった。

そして、喰らわれ続ければその結果悪魔となる…というのが、今マルクが思いついた仮説だった。

ならば、食らうべき魔力を無くせばどうなるか？完全に魔力が無くなった場合、人間は死ぬ。そのため、最低限の魔力は無意識で残すようにしているのだ。

だが、マルクはその魔力でさえも使い切る。すると、体を生かそうと呪力が流れ込んでくるだろう。だが、食らうべき魔力が無いためそこにあるのは『ただの呪力』もしくは『変換された魔力』となるのだ。「だからせめて…俺の魔力が無くなる前に倒れないでくださいよ!」

「へっ……！」

戦っている当事者であるマルクとナツは気づいていなかったが、マルクの体は段々と『人間』に戻りつつあることに、周りの者達は気づき始めていた。

無論、離れたところで見ているウエンディ達も。

「ねえ……ウエンディ。マルクの体……戻ってきてない？」

「うん……半身が、あんなに黒かったのに……今は、腕の部分だけしか黒くない……！」

少しだけ見たマルクの異様な姿。それを見たウエンディは自責の念に駆られていた。『気づいてやれなかった』と。無理矢理にでも、聞くべきだったのだ。

たとえマルクに嫌われたとしても、マルクの体を守るために無理矢理にでも聞いておけば良かったと。

だが、今はそれが収まってきていた。マルクが対処法を見つけたからか、ナツが発散してくれているかはともかくとして、マルクは元に戻りつつあるのだ。

「どうしたマルク！軽くなってきてんぞ!!」

「もうちよつと……だから待っててください……よ！滅竜奥義！」
「っ!!」

マルクは、本当の意味での自分の魔力を全て使い切る一撃を、ナツに向ける。この滅竜奥義で、これを行えばどうなるのが自分でも想像がついていない。

「滅竜奥義……！紅蓮爆炎刃!!」

「先出し……!?けど！それなら——」

先に、ナツが滅竜奥義を放ちマルクの滅竜奥義を防ごうとする。だが、マルクはそんな状況で逆に笑っていた。

ナツはその笑みに気づいたが、先に発動させてしまっているために、もう止められない。そして、直後に思い出した。マルクの滅竜奥義の1つのことを……

「はあ、はあ……ははっ、防ぎきりましたよ？ナツさん……」

「……早まりすぎた、か。そう言えば、あんまり使わないんで忘れてた

よ、その魔法。」

「滅竜奥義、紫電魔光壁……あなたの魔法は全部吸収させて貰いましたよ。そして、俺の魔力も……」

ナツの全力を防ぎきったマルク。だが、それで全ての魔力を使い切ったせいなのか、自らの意識が曖昧になっていくのを感じていた。

気絶一歩手前、というのがしつくりくる感覚だった。なんとか、完全に気絶するのを耐えながら、マルクは自分の魔力源に何がが流れ込んで来るのを感じていた。

目論見通り、と言えればそうかもしれない。しかし、その結果は……マルクが思っていた以上に良い結果となって返ってきていた。

「すー……はー……」

「……スッキリしたか？」

「……ええ、まあお陰様で。この魔力を使いこなすための手がかりを、掴んだ気がします……あー、でも待って……まだちよつと頭ふらつきます……」

「マルク！」

ウエンデイが駆け寄って、マルクを支える。マルクは、突然の事で驚いたが、しかしそれ以上に安心感を感じていた。

久しぶりに、本当の意味でウエンデイと会えたのだから。

「……どうする？止めるか？」

「あー、えっと……これ収まったら……いいですか……ちよつとだけ手合わせ……」

「おう、慣れてねー力扱うのは疲れるのわかるしな。」

大きく笑いながら、ナツはマルクの頭を撫でる。あれだけ戦いあつて、それでも膝をつかせることすら出来ない事実が、ナツに対して尊敬の念を寄せることになった。

「……そう言えば、なんでナツさんいるんですか。」

「ルーシイもいるぞ。」

「……ルーシイさんって、今は記者やってたんじゃ……？」

「よく知ってるな、でも俺が連れ戻した。妖精の尻尾が潰れた、って聞いたから……作り直そうって話になつてな。」

ナツの言った言葉にマルクは目を丸めた。妖精の尻尾を作り直す……それがどれだけ大変なことか、わかっていない訳では無いだろう。

だが、それを知ってもなおナツは作り直す気なのだ。目の前の男は、妥協も諦めも、ないと知っているのだから。

「ナツー、とりあえず街に戻ろうよー」

「お、そうだな。」

「……」

マルクは、少し怯えていた。勝手に消えて、今また勝手に戻る……それがどれだけ自分勝手な事なのか、マルク自身が良くわかつている。

だからこそ、怖いのだ。拒絶されることが怖いのか、自分が怒られてしまうのが怖いのか……いずれにせよ、自業自得なのだと認識はしているが。

「……大丈夫だよ、みんな優しいから。」

「……ありがとう、ウエンディ。」

ウエンディは、マルクの手を握る。マルクは、それに励まされてウエンディの手を握り返す。とても暖かいものだった。手の温もりも、それによって出てきた心の温かさも。

「マルク！なんだ随分と遅い帰りじゃないか。」

「えっ。」

「全く、勝手に出かける時は連絡網を回せ、と言われなかったか？」

「知らねーよそんなもん!!」

「お前がキレんなよ、嘘に決まってるだろ。」

「嘘かよ!!」

戻ってくれば、随分と簡単に終わらされてしまった。もっと厳格な感じで怒られるものかと思っていたが、まるで怒られる理由がない、と言わんばかりに簡単な注意で終わらされてしまった。

「あ、あの俺……」

「たった半年だ。10年20年いなくなっていたのならともかく、半年程度ならちよつと長いクエストに行っていた程度だ。」

「そ、そうですか……」

「……ふふ、みんなああ言ってるけどみんな心配してくれてたよ?」

「おいシエリア!それは言うな!!」

リオンが、凜とした表情でクールに決めようとしていたのか、シエリアが笑いながら真実を明かす。

しかし、どちらにせよマルクには一っだけわかったことがあった。

「まあ、とりあえず……おかえり、マルク。」

「はい……ただいま……!」

このギルドもまた、家族なのだ。マルクは、しばらく泣き続けていた。帰って来て安心してたのか、それとも迎え入れられた安心感なのか。だが、優しさに触れたことだけが、今わかっていることであつた。

「……すみません、お見苦しい所を。」

「いや、いいさ。滅多に見られないからな、お前の泣き顔なんて。」

「意地悪いですよりオンさん……」

「……あれ?ウエンディとシエリアは?」

「二人で話しがあるってさ。」

いつの間にかいなくなっていたウエンディとシエリア。だが、マルクは2人が話すことでは大体理解していた。

それでどういう結末を迎えても、マルクはウエンディについて行くことを決めていた。

「ダメだったなー…」

「え、何が？」

「ウエンデイの前で、私は1人でも大丈夫って見せたかったんだ。でも、それを見せようと思ってたら、全部マルクが終わらしちゃった。」

「あれは私もびっくりしちゃったよ……」

シエリアとウエンデイは、今は丘の上で話し合っていた。諦めが入ったような、なにか覚悟決めたような……そんな表情をしていた。

「……ウエンデイは、マルクと一緒に妖精の尻尾にいた方がいいよ。ううん、マルクと一緒にいなきやダメ。」

「え？」

『『愛』してるでしょ？』

「うええ!? そ、それはえっと……」

顔を真っ赤にするウエンデイ。しかし、否定するべき程の言葉も気持ちもウエンデイにはなかった。

「……ね？」

「うう……」

「行かなきゃ後悔するよ? ナツ言ってた。妖精の尻尾は潰れてない… ナツは妖精の尻尾を愛しているからここまで来たんだよ。」

マルクだって、1人でどこかに行ってたけど…それも、ウエンデイを愛しているから、だと思おうよ。」

シエリアの言葉に、ウエンデイは俯く。本当の気持ちは、彼女が抱える本当の気持ちは、既にわかりきっているのだ。だが、従来の彼女

の性格である大人しさが、それを邪魔していた。

「私……」

「素直になつて？ウエンディ。ギルドが違つても、私達はずっと友達……」

「シエリア……」

2人は肩を合わせる。ウエンディは、シエリアの優しさに触れられたこと、それによって自分の気持ちを完全に意識してしまったのだ。

つまり、妖精の尻尾に戻りたいという気持ちである。それが、今のウエンディにある大きな気持ちだったのだ。

「友達だよ。」

「……うん……！……」

そして日が昇り、昼頃になつてから一同はギルド前に立っていた。ウエンディの、見送りのためである。

「長い間お世話になりました。」

「元気でなウエンディ。」

「私も一応礼くらい言つとくわ。」

「シャルル……」

「本当に、なんて言つたらいいのか……私、自分勝手に……」

涙を流しながらひたすら感謝を述べていくウエンディ。その頭を、マルクが撫でる。

「自分勝手、つて言うならマルクの方が上だからな。気にすることは

無い。」

「う……すみません。」

「気にするな、冗談だ。それに、二人とも元からそういう約束でウチに入ったんだろ。」

「そうだったのか!?!」

「妖精の尻尾が復活するまでお世話になるってね。」

ウエンディは、感謝や申し訳なきでいっぱいになってきたが、それを打ち消すかのようにシエリアが間に入ってくる。

「ウエンディは泣き虫だなあ〜」

「だって……うう……」

「天空シスターズの片割れ俺がやるからさ!!」

「やめとけよ。」

「出番か。」

「オババもやめとけよ!!」

笑わせて、励ますかのように明るく振る舞う蛇姫ラミアスケイルの鱗の一同。それで後押しされて、ウエンディは少しだけ泣き止んだ。

「妖精の尻尾の復活頑張れよー?」

「グレイに宜しくな。」

「そう言えば足取りがわからなくなってるのよね。」

「ジュビアさんが絶対追いかけていつてる気もしますけどね。」

「気をつけてなー!!」

「おおーん!!」

他愛もない話をしながら別れていく。ウエンディ達が見えなくなるまで、蛇姫の鱗の一同は手を振り続けた。

それだけ、ウエンディとシャルルが与えた影響が大きいということだろうとマルクはそう思っていた。

「……ふ、ふふ……そのまま追いかけるから、ね。」

……ただ一人、マルクを追いかける少女がいたのだが……それは、さしたる問題でもないだろう。

妖精の尻尾復活のために、ナツ達は向かうのであった。

新たな虎の元へと

「見事にあそこだけ雨が降ってるわね。」

「怪しいですね……」

ナツ達は、今仲間を探している途中だった。ルーシイの情報網を頼りに、『アメフラシ村』と呼ばれる場所に向かうことになった。そこは、ずっと雨が降っている場所、ということらしい。

「けど……前までこれ治ってましたよね？」

「やっぱり気分の問題なのかしらね……今はそういう気分、つてことかも。」

「なんかあったのは間違いないみたいですけど……」

マルクとルーシイが話し合う。ずっと雨が降っているなんて、彼女達の中では一人しか思いつかないのだ。

が、真面目に話してるのはこの2人とウエンデイとシャルルの2人だった。

「こつちが雨！こつちは晴れ！こつちが雨!!」

「ふはは、まだまだ甘いなハッピー。今の時代は半分雨！」

「半分雨かー!!」

「そんなに楽しいの？」

「いや、俺に聞かれても困るんだけど……」

一同は、村の中に入り中を突き進んでいく。しかし、家屋や小さな倉庫があるばかりでそれ以外の生物の姿は一切見ることがない。

「人の気配が全くしない……」

「誰も住んでないみたいですね……」

「いや、ジュビアの匂いがする……こつちだ。」

「ナツさんどんな嗅覚してるんですか……」

歩き続けていくと、この大雨の中で向こう側に人影が見える。この雨の中、当然こんなずっと雨を降らし続ける人物は1人しか思いつかない。

ジュビア・ロクサー、 그레이に惚れ込んでいる彼女なら、 그레이と共に住んでいるかもしれないと踏んだのだ。

「あ、あれジュビアさんじゃないですか？」

「おーおーいー！ジュビアー!!」

お互いの顔が認識できる距離まで近づく。しかし、何やらジュビアはとても感動したかのような顔になっていた。

「グレイ様……」

「迎えに来たぜ、ジュビア。」

「……あれ、ジュビアさんなんか様子おかしいような……」

「やけに感動してるわね……」

ルーシイとマルクは、ジュビアのその様子に違和感を感じていたが、その答えは直後の彼女の行動で判明した。

「グレイ様！ジュビアはジュビアはー!!」

「落ち着け……よ！元気だったか？」

「相変わらずのテンションで安心したわ。」

「お久しぶりですジュビアさん!」

「どうも、ジュビアさん。」

どうやら、ナツをグレイと勘違いしていたらしく、一瞬は飛び込んできたが、改めて声をかけ直すと理解し直したのか驚いた表情になっていた。

「ナツさん……ルーシイに、ウエンデイ……マルクも……」

「オイラたちもいるよ!」

「あんたこんなところに1人で住んでるの?」

シャルルがそう問うが、ジュビアは涙を流し始める。そしてさらに、そのまま安心しきったかのように、涙を流しながら倒れ込む。すんでの所で、ナツが抱えて事なきを得たが。

「オイ!どうした!？」

「ジュビア!!」

「すごい熱です……」

「こんな雨の中にいたら具合も悪くなるわよ……ここつてジュビアの家かしら?」

ジュビアが倒れた、ということ傍にあつた家の中に入る一同。一旦ジュビアを薄着にさせてから、ベッドで寝かせて濡れて服は乾かしていた。

「うーん……少しグレイの匂いもするぞ。」

「グレイもいるの?」

「はあ、はあ……ジュビアは、グレイ様と……はあ……ここに住んでました……」

「えっ!?」

息を切らせながら、ジュビアはあつたことを語る。まだそういう話に免疫がなかったためか、ルーシイとウエンデイは顔を真っ赤にしていた。

「2人で……!」

「すごいドヤ顔……」

「一緒に食事をして……一緒に修行をして……一緒に仕事をして……一緒にベッドで——」

「っ!!」

「言わなくていいから!!」

「——寝ようとして蹴飛ばされたり。」

こんな雨こそ降るような状況になってしまっているが、ジュビアは相変わらず変わりないと、ルーシイ達は妙な安心感があつた。

だが、幸せそうに語るジュビアの顔が少しだけ曇った。

「幸せでした……ですがある日……グレイ様のからだに、黒い跡が出てきて……グレイ様は、心配するなど仰いましたが……その日以来1人で外出することが多くなって、帰ってこなくなったのが半年前です。」

「そんな……」

「ジュビアさんに黙って、ですか……」

グレイの行動に、それぞれの反応を見せる一同。その中で、ナツは少しだけ怒っていた。

「勝手に出ていくとかあの野郎……」

「あんたが言う？」

「俺は遺書を残しただろ。」

「ナツ…書き置きね。」

「それでも勝手に出て行ったのは同じ。残された方はね……残された方は……」

ルーシイが顔を伏せる。一年前の妖精の尻尾フェアリーテイルがなくなった時のことと言っているのだろう。あの時、マカロフの解散宣言よりも早くナツはいなくなっていた。

それが、同じチームであるルーシイには寂しさを覚えさせていたようだ。

「イチャイチャしないでください。」

「してないわよ!!」

「それで、グレイはどこにいるか分からないの？」

「分かっていたら、ここにはいないでしょ。」

「……ジュビアは、何日も探して歩きました。」

ジュビアは、グレイを探した時のことを思い出す。脇目も振らず、どこに消えたのかと探す日々。

だが、その結果は言うまでもないだろう。

「でも……グレイ様は見つからなくて…待つことにしたんです。ここはグレイ様とジュビアの…思い出が詰まっている家だから……きつといつか…グレイ様はここに帰ってくるって。」

涙を流すジュビア。彼との思い出に泣いているのではなく、彼の心配が形になった涙だろう。それほどまでに、ジュビアはグレイに惚れ込んでいた。

「……ごめんなさい、久しぶりにあったのに。」

「俺が見つけてやる。いや、必ず見つける……仲間を全員集めるんだ。」

妖精の尻尾を復活させるために。」

ナツのその言葉で安心したのか、ジュビアはそのまま幸せそうな顔で眠り始めた。余程疲れていたのだろう。

一同は、ジュビアをしばらく寝かせるためにその家から外に出て雨を眺めていた。

「ジュビアさん眠っちゃいました。」

「ま、元々かなり疲れてたみたいだしな……」

「見つけるって言ってもアテあるの？」

「あたしのメモでも足取りが掴めてないんだー……」

ナツは、黙っていた。その顔は少しだけ怖いものを感じさせる程のものだったが、しかし何か考えがあるようだ。

「どうしたのナツ、そんなに怖い顔しちやつて。」

「確かこの近くだったよな。」

「？」

「セイバートゥース剣咬の虎に行くぞ。」

唐突な宣言、その宣言にナツ以外のこの場の全員があっけに取られていた。

「なんでセイバー？」

「……わりい、今はちよつと理由が話せねえ。」

「セイバー……ナツさん、行くなら一つ確かめに行つてほしいことがあるんですが。」

「んあ？あんまり面倒そうならやんねーぞ。」

「違いますよ……セイバーにいるもう氷の滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーのこと覚えてますか？」

クオーリ。一時期はマルクは彼に目をつけられていたが、大魔闘演武以降全く彼の耳にはクオーリのことは入ってこなかった。そう、大魔闘演武以降である。

「あー、いたなそんなやつ。で、そいつがどうした？」

「……一年前の冥府タルタルの門との戦いの時、あいつはいませんでした。そして、俺達の体内にいたであろう親のドラゴンでさえも、あの時の戦いに参加していないんです。」

「いれば、その理由を聞いてほしいんです。」

「……そういや、いなかったなあん時。」

「親のドラゴン……いなかったの？」

「ああ、確かいなかったと思うが……というか、話題にすら上がらなかった。話す時間が無かった、という方が分かるんだが……」

顎に手を当てて、考えるマルク。しかし、その答えには簡単には辿り着けない。

「……うし、いたら聞いてきてやる。」

「お願いします。」

「出てこなかった……ってことはまだ体内にいるのかな？」

「フェイスをガン無視してか……？」

「イグニールだつてずっとアクノロギアと戦ってたぞ？」

一年前、冥府の門との戦いの際に突如として現れたアクノロギア。それと戦い、ギルドの者達から目を離させたのがイグニールだった。

そして、他のドラゴン達は皆フェイスの破壊を行っていたのだ。故に、フェイスが完全に壊れきるのも恐ろしく早かった。

「うーん……とりあえずお願いします。」

「つーか一緒に来ねえの？」

「いざと言う時に戦える奴がいた方がいいでしょ。ウエンデイはジュビアさんの介抱でかかりつきりになるだろうし。」

「ああたしかに……ウエンデイがいないと、ジュビアの回復がかなり長引いちやうもんね。」

納得したかのようにルーシイが声を出す。ウエンデイの魔法で治せるかどうかはともかく、ジュビアの介抱は絶対の必須条件である。

しかし、それを男性陣がする訳には行かないのでマルクは外に出て監視である。

「でも必要あんのか？そんなのつて。」

「確かにウエンデイは1人でも戦えますけどね……けど、だからといって1人で放っておくわけにはいかないでしょう？」

「まあ……私はナツ見とかなきやいけないし、それ以上に道案内をしないよね……」

「おい、それじゃ俺がまるで方向音痴みたいじゃねえか。」

「ここから確かにセイバーは近いけれど、道わかるの?」

「うぐつ……」

ルーシイの言った言葉が、ナツを怯ませる。地図を持っていたとしても、ちゃんと見て移動出来るか、と言われているのだろう。

思い当たる節があるのか、反論がなかった。

「あんたとハッピーだけにしたら、心配なのよ。だから私もついて行くわよ。」

「しようがねえなあ……んじゃ、ルーシイと俺とハッピーがセイバーに行つて——」

「俺とウエンディ、シャルルがここに残るということで。」

「うしっ!んじやあ行くか!」

「おー!」

声を上げて村を歩き始めるナツ達。それを見送ったあとで、マルクは傍にあったソファに腰をかける。

「……」

「その、クオーリさんが気になるの?」

「ああ、あいつも滅竜魔導士のはずなんだけどな……つて考えて。」

「……けど、考えても仕方ないことは仕方ないんじゃないかな?もしかしたら、その時クエストに行つていただけ……つて可能性もあるし。」

ウエンディの言うことは最もである。しかし、マルクにはどうにも引つかかっているのだ。

あの後、結局セイバーの2人と話すことが出来なかったため、クオーリがいらないことなんて気づけなかったのだ。

「……今考えてても仕方ないな。食料とかなんかあるかな……病人食でも作つてやらないと。」

「そうだね……つて、マルク料理出来たつけ?」

「……まあ、うん色々とな。」

ラミアスケイル蛇姫の鱗から離れていた頃、住んでいた森で動物や食べれそうな木の実を見つけては、それを調理して食べていた……ということを思い出しながら、マルクはぼかして話す。

その辺の事をウエンデイに話すのは、少しばかり気まずいような気がしたからだ。

「ナツさん達が戻ってくるまで、どのくらいかかるんだろ……」

「まあ、1週間とか2週間とか……それくらいかかってても帰ってこないのなら……少しばかり様子見に行つた方がいいのかもしれないなあ。」

マルクがそう呟きながら、未だ雨が降る空を見上げる。グレイが戻ってくるか来ないか……それは、ナツ達次第なのであった。

新たな氷竜

「ウエンディ……ジュビアさんの容態はどうだ？」

窓越しから、マルクがウエンディに尋ねる。しかし、ウエンディはとてもつらそうに返事するだけだ。

「私の治癒魔法でも全然熱が引かない……」

「……今頃ナツ達はセイバーのギルドに到着したかしら。」

「着いてるといいけど……でも、それにしてもなんでセイバーのギルドにグレイさんのいる所が分かる、って思ったんだろうなナツさん。」

「……それは私にもわからないわ。」

「グレイさんの知り合いでもいるのかな……？」

「それはリオンさんくらいだと思うが……まあ、どちらにしても俺達は待つしかないか。」

未だ振り続けている雨を眺めながら、マルクはナツ達の帰りを待つ。そうして待ち続けている内に、マルクは異変が起こり始めているに気付いた。

「……なんか、寒くないか？」

「雨で冷えたんじゃない……って思ったけど、確かに寒いわね。雨も心無しか——」

「……シャルル、家の中戻つとけ……誰か来た。」

マルクは立ち上がり、構えを取る。それだけで何か察したのか、無言で頷いてそのまま部屋に戻る。

「……この寒さ、まさかグレイさんの魔法……」

「違うね、魔法だよ……俺のな。」

「……その声……クオーリか。」

「ああ俺だ。探してるんだってな？俺を。言つてたぜ、ナツ・ドラグニルがよ。」

姿を現すクオーリ。ナツが探していたから、自分の前に姿を現す……それだけで今の異常性がわかる。

そんな性格じゃないと、一言で断言出来る。

「だからって、お前はここに来るような性格じゃあないだろう。誰だ

お前。」

「……あー、なるよな…そんな反応に、そりゃあよ。」

頭を搔くクオーリ。どうやら、何か向こうにも事情があるようだ。自分じゃどうしようもできない何かがあつて、マルクを迎えに来たのだと。

「まあ、言うぞ簡潔に。力を見せろ、お前の。」

「……俺の？なんでお前なんかに見せなきゃならん。」

「ちげえよ、俺じゃねえ。俺の親のドラゴンにだ。」

クオーリの育ての親であるドラゴン。なぜ今そのドラゴンの話題になるのか。一年前、それぞれの滅竜魔導士達ドラゴンスレイヤーの体から出てきたドラゴン達は、フェイスを破壊し終わった後姿を消した。体内で、滅竜魔導士のドラゴン化を防ぐ抗体を作り出すためであり、それが終わった以上いなくてもいいという判断になったそうだ。

だが、クオーリの親は未だに生きているかのようなセリフを吐いた。それに、疑問を抱いてしまう。

「……よくわかんねえな。お前だつて俺達の親のドラゴンの真実は知っているはずだろう。」

何故だ？」

「違うんだよ、事情がな。未だ俺の体内には、俺の親のドラゴンの魂が眠っている。」

「なっ……」

そして明かされる突然の真実。その事に、マルクは言葉を無くしてしまう。その反応を見て、散々説明し飽きたと言わんばかりにクオーリはため息を吐きながら頭を搔く。

事の顛末は、一年前の冥府タルタロスの門と妖精の尻尾フェアリーテイルにまで巻き戻される。

「が、ぐ……!?!」

その時、クオーリは運悪く別のクエストを行っている最中だった。ステイングやローグ達のように、戦いの場に参戦出来なかったのだ。だが、大陸中に広がるフェイスを見る事は出来た。それに困惑している中、その時の滅竜魔導士達と同じく体の急な変化に苦しんでいた。

「はあ、はあ……なんだったんだ、今は……?」

『相変わらず、そんなカツコつけた喋り方しか出来ひんのやなあ……』

「っ!?!誰だ!!」

『誰だ……って、実の親にそりやあないんとちやう?』

「っ……この声、そのなんか撫でるような癩に障る喋り方……フリーゾか!?!」

『ほんで余裕なくなったら、普通の喋り方に戻る……せやで、フリーゾさんのお帰りや。』

突如、クオーリの頭の中に響いた声。それは、彼を育ててくれた親であるフリーゾの声だった。

突然のことに、クオーリは驚きを隠せなかった。

『色々あつてなあ……今、あんたに真実を話しておこうと思つたんや。』

「し、真実……!?!いやいや、そんなことより周りに面の巨大な物体はなんだ!?!こいつとアンタに何が関係してるんだ!?!」

『……あー、周りのものとこっちは関係ないんよ。せやけどな、滅竜魔導士の体ん中からドラゴン達が出ようと思つたみたいやわ。んでこっちも影響受けたみたい。』

「ド、滅竜魔導士の体の中から……ドラゴン!?!」

次々と暴露されていく驚愕の事態。最早、驚き続きでクオーリの頭の中は困惑しきっていた。

だが、それでも言葉の端々に違和感を感じるこくくらいは出来た。そう、違和感とは滅竜魔導士の体の中からドラゴンが出てくると、頭

の中に聞こえてくるフリーゾの声の事だった。

「……いや、いやいや。ちよつと待てよフリーゾ。仮に出てきたのが本当だとしても、だ。」

「ならなんでお前は俺の体から出てこない？」

『……その前に、なんで滅竜魔導士の体内からドラゴンが出てきたかの説明をしとかなな。』

「……」

道端で座り込みながら、クオーリはフリーゾの話聞くことにした。喋り方はともかくとしても、その声音は真剣のそれそのものだったからだ。

『まずな……滅竜魔導士の体内におけるドラゴン達は皆死んだ。アクノロギアの滅竜魔法によつてな。』

「アクノロギア……」

『殆どのドラゴンは、魂だけとはいえ滅竜魔導士の体内に避難できた。それでな、滅竜魔導士にドラゴン化を防ぐ抗体を作るためやったんや。』

「それで、いつかの時になったら全員体の中から出てきて真実を話そうて……そう決めとつたんや。』

「……お前が出られないのは？」

『全員が、ほぼ同時にやられたわけやない。誰かが足止めして、アクノロギアから魂だけでも逃がす役割を果たさなあかんかったんや。』

「それが、ウチや。』

その言葉を聞いて、クオーリは自分が驚くかと思っていた。しかし、驚きよりも先に納得したような感情があった。

「やはり、というかなんというか……すつとそれが受け入れることが出来た。」

『つちゅーても、ギリギリお前さんの中に避難はできたわ。魂の大部分持っていかれて、ほんで何とか魔力も引っ張ってこれた。』

「抗体も出来た……けど、出た瞬間にウチは消える。』

「……それが怖えのか？」

『いや……怖いとか、そんなんやない。実態化するだけの力も残され』

てないんや。それが災いして、お前さんの1部みたいにくつついてしまってるんやウチは。』

「悪霊かなんかかよお前……」

苦笑しながら、クオーリはそう呟く。魂の力が小さすぎるが故に、いざ出ようと思っていた矢先、くつついて出られなくなった……間抜けだとクオーリは思った。だが、もう二度と会うことがないかもしれないとまで思っていた親が、こうして出てきて話してくれるのがまだ続くのだと考えたら、安心感があつた。

『これから……あんたにはウチの指導にしたがつて強なつてもらおうで。子供時代ん時みたいにな。』

「……つつても、滅竜奥義も滅竜魔法も教えることはなくなつたんじゃねえのか。」

『いや？さつきは災いして言うたけど……ウチが取り付いていることに対してのメリットが、一つだけあつたんや。』

「メリット？」

『そう……それは、あんたがウチの魔法と魔力を再現出来る、つちゆう事や。』

「っ!？」

ドラゴンの魔力と、その魔法。強烈にも程がある。いくら戦っていなかったとはいえ、滅竜魔導士の魔法であつても倒せなかつたドラゴン。その力を使えると考えれば、確かにメリットではあるのだ。

『……んでな、一つだけ試してほしいことがあるんや。』

「試してほしいこと？」

『アクノロギアが、元は人間つて知つとるか？』

「……まあ、その辺は。」

『元人間、つまりはあいつも元滅竜魔導士やつたんや。今はドラゴンやけどな。』

けどな、いくらあいつが強い言うても……もしかしたら、の可能性があるかもしれんのや。それを確認したいたために、時が来たたら——

「……マルク・スーリア。戦うってことだよ、お前と。」

「なんでそうなる。」

「知るか、教えてくんねえんだわこれ以上を。」

時は戻り、現代。睨み合うマルクとクオーリは、未だ戦闘態勢をとっていない。

「……けどま、時が来たら、ってことか……何だか知らねえけど、戦えばいいってことだな？」

「ああ……フリーゾ曰く、お前じゃないとダメだそうだ。死ぬ気にかかってこい。」

「……言われなくても、お前を殺す気でかかるよ。新しい力を試して見たいと思ってたところだ……用事が終わったらすぐ帰れ、マジで。」

「人を邪険に扱う才能だけはあるのかもなお前……」

体勢はそのままに、2人は話し合っていく。だが、表情は真剣そのものだった。

お互い、構えながら様子を見計らっていく。近くの家には、ウエンデイ達がいることが分かっているが、どうにもクオーリが移動している暇はないと言いたげだったのだ。

「……一応聞いていいか？」

「後ろの家にいる奴らには、被害は出さねえようにするよ。力見ながら離れりゃあいい。」

どうせ雨が降ってんだから目立つ。」

「そうかよ……」

雨の音だけが響く。マルクは、ひとつだけ気になっていた。クオー

リがここに来てからというものの、どうにも気温が下がった気がしてならないのだ。だが、仮に下がったのだとすれば……既に、そこにいるだけで周りの気温を下げるほどになっている、ということになる。

「……んじゃ……行くぞー」

「っー」

クオーリは、マルクに向かって真っ直ぐに突っ込んでいく。その際に、巨大な氷の塊を飛ばして、自分の体をマルクに見せないようにする。

「そんな目くらまし程度で——！」

ブレスを放ち、後ろにいるであろうクオーリ諸共吹き飛ばす予定だった。

実際、当たればこの一撃だけでクオーリの魔力の殆どを持っていくのだ。マルクはそう確信していた。

「——上だ。」

「なっ……ぐっ!?!」

だが、既にクオーリはマルクの上空を捉えていた。氷の翼を生やし、さらにその両腕に、氷でできたまるで獣のような武装がなされていた。

「フリーゾがいることでできる、俺の新しい力……『モード真氷竜』今の俺は、小型化したドラゴンみたいなもんだ……戦闘力は恐ろしく高いと思え。」

マルクの頭を抑えながら、クオーリは一切表情を変えずにそう言葉を放つ。今手を出せば、まずマルクの頭を氷漬けになるだろう。

だが、今のマルクにそのような事は関係ない。

「そうか……なら、今の俺に魔力関係でまとった武装は効かないと思え……！」

マルクの腕に、即座に高濃度の魔力が集中する。クオーリは、それにいち早く気づき、マルクから離れる……が、クオーリは気づいていなかった。マルクの両足にも、同様のことが起きていたということ

を。
「逃がすか!!」

「早っ……!?!」

「俺なりに編み出した滅竜奥義だ……!滅竜奥義!『濃魔一閃』!!」

振るわれる拳、クオーリは即座に氷をまとった両腕でガードするつもりだった。

それは氷とはいえ、ステイングやログを拘束できる氷よりも、はるかに硬いつもりだった。だが、どれだけ固くても意味をなさないのだ。

「ダラア!!」

「氷が、消えっ——!?!」

両腕の上から、マルクの拳がクオーリに入る。ガードしたとはいえ、それなりにクオーリの腕にダメージが入る。

「ぐっ……なんだ、今の……」

「言っただろ……俺なりの滅竜奥義だつてな。俺は、自分の力をどれだけ効率よく動かせるか考えてたんだ。

で、考えた結果が……どれだけ非効率的に、自分の魔力を大量に消費できるかって結論になった。」

「……非効率的に魔力を消費する、だあ……?とんだ大馬鹿だ……」

一旦氷を解除して、両腕を軽く動かしながら慣らして行くクオーリ。お互い、軽く手の内を見せ合いながらの戦い。それを、窓からシャルルがじっと見ているのであった。

真氷竜

「真氷竜の、咆哮ー！」

「魔龍の咆哮ー！」

クオーリが、ブレスを放つ。それを打ち消そうと、マルクがブレスを放つ。2人の戦いは、熾烈を極めていた。

戦っている間に移動したのか、既に場所は雨が降っている村ではなく、その隣にある平原だった。

「ぐっ……！」

「どうしたア!? 鈍ってきているぞ動きがア!!」

クオーリは叫びながら、両腕を振り回して氷を飛ばしてくる。魔力をものすごい速度で消費しているのもあるが、それ以上にクオーリと戦っているだけで体温が奪われていくのがわかるのだ。

クオーリが新たに手に入れた力、モード真氷竜。それは、その場に立っているだけで周りの木々が凍りついてくるほどに極寒の寒さを誇っていた。

「濃魔一閃!!」

「遅い!!」

飛んできた氷を新技で砕いていくが、それでは堂々巡りである。しかも、向こうは寒さで体力を奪われる心配がないため、堂々巡りしてはジリ貧で確実に負ける。

「増やしてやるよ、もっと手数をな!!! 真氷竜の複腕!!」

「氷の、腕……?」

クオーリの背中から、まるでドラゴンの腕のような形の氷の造形が生えてくる。ただの氷の造形なら問題なんて皆無なのだが、クオーリはそれをわざとらしく動かしまくっていた。

「気持ち悪っ!!」

「へっ……暇があるのかア!? んな事言ってるよオ!!」

「ちい……！」

さらに濃い魔力を捻出するマルク。新たな滅竜奥義である濃魔一閃のおかげか、その魔力はとんでもない速度で減っていく。もう魔力

がすつからかんと言っても過言ではない。

何せ、この魔法は生物以外の魔力の伴うもの全てを、破壊すること
が出来る技なのだ。

だが、逆をいえば素手で戦うような相手には効き目は薄いのだが。
「あんまり調子乗っていると……痛い目に合わせんぞ……!」

「やれんのかア!? お前がア!!」

「大魔闘演武のこともう忘れたのかあ!」

大声を張り上げながら、マルクは虚勢を張る。このままでは、魔力
を使い切る前に本当に寒さで倒されてしまう。

すでに皮膚の何割かは凍ってしまっている。まだ筋肉や、骨まで
凍っていないのが不思議なくらいである。

「ギリギリの勝負ってかあ……!」

「暇があんのかア!? ブツブツ言ってるよオ!!」

魔力がゼロになるのが先か、凍りつくのが先か。皮膚の氷を弾き飛
ばすように、凍っているとところに魔力を集中させて、無理やり剥がす。
剥がしたところから、血が出ていないのが不思議である。

だが、おかげでマルクの魔力は――

「うっ……!」

「……おいおい、魔力の使いすぎかよ。もう魔力がすつからかんに
なったのか?」

「ああ……けど、これでいい。魔力がゼロになるのが俺の目的だった
わけだ……」

「……ああ、なるほど。だからか。」

何やら視線をマルクから外し、クオーリは1人で話していた。どう
やら、彼の親であるフリーゾが何やらクオーリに言ったのだろう。
元々、今この状況を作り出したのは他でもないフリーゾなのだ。

「いいぜ、待っててやるよ。見せてもらうには、十分だろうしな……お
前の新しい力をよ。」

「後悔すんなよ……モード、悪魔龍……!」

マルクの無くなった魔力源に、呪力が変換されて注ぎ込まれてい
く。何も取り込んでいなかった胃袋に、液体が満たされていくような

感覚。

そしてこれが、マルクの新たな力である。

「う、ぐ……!」

「体の形が変わっていく……悪魔、か。」

マルクの体に、黒い鎧のようなものを取り付けられていく。マルクの体に張り付くような形のその鎧は、見ているだけで直感的にやばいと思わせられるものだった。

「ぐ、が……ここ、から……!」

「……?おい、何して——」

だが、マルクはそこから無理矢理形を変え始める。彼からしてみれば、この鎧は……グラトニーを彷彿させるものだったからだ。

彼の力と、彼が同類を食らって手に入れた力。それらの力を発揮するためには、今の形は中途半端でもあるのだ。1個体である悪魔を自らに写すのは、力を狭める行為だ。故に、マルクはグラトニーの力を、自分の知っているグラトニーの姿とは別に、新たに作り出していく。その結果、両腕は鎧ではなく、ドラゴンの頭のようなものが作られ、本来顔がある位置にも似たような頭が形成される。

そして、尻尾が生え、足は魔力で太い形に形成されていく。

「グルルルル……」

「……おいおい、操れてんのか?これ。暴走しているようにしか見えねえぞ、どう見ても。」

「……いや、ちゃんと意識もあるよ。ただそうだな……お前の知っている、俺の魔力を形にしたって言うべきか……」

「……魔力を食らう魔力、なるほどだから3つ首のドラゴン……」

クオーリは納得したように声を出す。だが、両腕が頭となり攻撃方法が少なくなっている時点で、クオーリは正直あまり強そうには見えしていないかった。

「……舐めてると、腹に穴あくぞ?そんな気がする……からな!!」

「おっと……!?!」

マルクは、片腕を振りかざす。すると魔力によって形成された頭だからなのか、首は伸びて真っ直ぐクオーリに向かってきていたのだ。

だが、そんな直線的な動きなら見切れるものであり、クオーリは簡単にそれを避けた。

だが、それが地面に落ちた瞬間……綺麗な穴を開けながら、縫い合せている糸のように、ジグザグに進み始めてきたのだ。

「こ、こいつどこまで……」

「お前が喰らわれるまでさ。そいつは、なんでも食らう頭だ。何をどうされようとも、絶対に追いかけて続けるハンターだ。」

「なら、首なら切り落とす……」

そう言つて、クオーリは長く伸びた首を狙つて、魔法を放つ。薄く鋭い刃のような氷の魔法を、首を切り落とすために使う。すると、呆気なく首は切り落とされる。

「へ……お前、前より弱くなつて……うおっ!？」

「言つただろ？何をどうされようともつてな。」

クオーリの顔面横を、先程の頭が通り過ぎる。しかも、それは先程切り落としたばかりの頭だった。

「さ、さつき切り落としただろうが!!」

「例え切り落とされようとも、何か食らうものがある限り、それを動くエネルギーに変換し続け、追いかけて続ける。」

ちなみに、その頭はそうやって動き続ける訳だが……魔力の塊なんだから、当然首も再生するぞ。」

そう言われて、クオーリは気づいた。いつの間にかドラゴンの頭の総数が一つ増えていたことに。

切り落とされた頭と、離れた首から再生した頭……もう1つの腕の方と、マルク自身の变化した頭を含めて合計4つになっていた。

「この形態は、意地でも何でも喰らう形態だ。そうだな……暴食喰らいとでも名付けようか。」

「……まだ増やす気か？その言葉が出てくるってことはよ。」

「おう、俺の体の中にいた悪魔、グラトニーは自身の同類の悪魔を6体食った。力が欲しかったらしいからな。」

「だか、あいつはそれで自分の力が高まった、としか思っていなかった。んでもって……俺はその残り6つの力を使えるようにしなければ」

ばならない。」

「へえ……！」

頭からの攻撃を避けながら、クオーリはちゃんと返事を返す。クオーリは器用にも、頭の攻撃を避けながらマルクの間を伺っていたのだ。

そして、マルクの話聞きながら、必死に弱点を探し始める。

「言っておくが……初めの3つ首は、この魔力が形になったものだが……それは、俺の魔力の性質が形になったものの結果だ。『過程』の方をちゃんと見て考えねえとジリ貧になるだけだぞ?」

「過程、だア……?」

マルクのヒントを元に、クオーリは避けながら考える。表情はないはずだが、マルクのドラゴンの頭が全てニヤニヤ笑っているように見えてきたが、あえて無視をしていく。

まず、過程と言えば体の変化である。両腕と頭がドラゴンの首と頭に変換されて、体もドラゴンのようなものに変貌していった。

体の変化、が答えなわけが無い。あまりにもその間に行われたことが多すぎるからだ。

ならば、その過程の間にある『過程』が答えだろう。

「頭の変化……足の変化……体の変化……頭の数の変化……?」

クオーリはハツとした。そうだ、全てを食らう頭も切り落としたり増えたのだ。そして、体が変貌した時も『頭が増えた』のだ。

つまり、答えは頭が増える……ということだろう。つまり、半端な攻撃をしようものなら……あのドラゴンの頭は増えて、確かにジリ貧になるということである。

「なら、本体を……！」

「ヒントを与えたとはいえ……すぐに気づくもんなのかね、こういうのは……！」

クオーリは、動く2つの頭を無視してマルクに一直線に突っ込んでくる。そして、その体を凍らせるために巨大な冷気を再びマルクに向かって吐き出す。

「真氷竜の、咆哮！」

から。なにせ、雲を通り越すほどの巨大な氷である。簡単には抜け出せそうにもない。

「……」

「見事にカチコチだなあ……おっと、思うなよ？ 脱出しようなんてな。」

氷をノックするように叩きながら、クオーリは余裕綽々といった風で笑っていた。

反対に、マルクの方は表情こそ変えられないが、なんとか氷から脱出しようとしていた。だが、気づけばマルクの姿は元に戻っており、先程の形態のような力はもう發揮できない。

「ただ凍らすだけの氷じゃねえんだよ、その氷はな。そいつは封じるんだよ、魔法を。魔法すらも凍らせる……それが、力なんだよ真氷竜のな。」

不敵な笑みを浮かべながら、クオーリは高笑いをし始める。大魔闘演武の時に、辛酸を飲まされたのがよほど堪えていたようだ。

「……さて、ま。このまま凍らせとくわけにもいかねえし、しゃあねえから溶かしてやるよ。」

そう言いながら、クオーリは氷を溶かし始める。今回のこの2人の勝負は、マルクではなく、クオーリの勝利だった。

ジョーカー

「……それで、なんでお前は俺の力を測ろうとしてたんだよ。」

「……」

「……おい、なんとか言ったらどうなんだよ。」

クオーリとの戦いを終えて、再びマルク達はジュビア達の居る家屋へと戻っていた。そして、クオーリから話を聞こうと一旦中に入っていたのだが、どうにもクオーリの様子がおかしいのだ。先程から、ずっと黙り続けているのだ。

「……それは、ウチから説明させてもらおうわ。」

「なんで急に口調変えて……」

「クオーリが言つとつたやろ？自分の体の中には、育て親がいるつて。」

「あんたが、その育て親ってわけね。」

マルクの頭の上に乗って、シャルルがそう言う。それに対してクオーリ…否、彼の育て親であるフリーゾは頷く。

いつのまに入れ替わったのか全く気づかなかったが、恐らく黙っているどこかで入れ替わったのだろう。

「でや、何であんたの力を測ろうとしたって話やねんけど…アクノロギアに対して、あんたが使えるかもしれんからや。」

「俺が、アクノロギアに……？」

「せや。アクノロギアはホンマに強い…竜の王でありながら、竜を狩ることだけを考えているとんでもない奴や。」

あのイグニールでさえ勝たれへんかったんやからな……」

「……けれど、俺達は一年前の大魔闘演武じゃあドラゴンに勝つことは出来なかった。」

それよりも強いアクノロギアに勝つなんて……難しいんじゃないのか？」

「なんや、まだ気づいてないんかいな。あんたは、ドラゴンに勝てるくらいに強さはあるんやで？」

「……は？」

マルクは絶句している。確かに、自分はその時よりもかなり強くなったとマルクは感じている。新しい力もあるし、格段に戦闘能力に差はあるだろう。しかし、それでドラゴンに勝てるくらいの強さがあるとは、イマイチ理解ができていない。

「そもそも、あんたの力……悪魔のそれは、元々ドラゴンを屠れるレベルのもんや。実際、覚えがあるんちゃうか？」

「覚え……」

ふと思いついたのは、ドラゴン達と戦っている時に見た夢のようなもの。しかし、あれは恐らく現実起きたことだったのだろう。フリーゾが言っているのは、おそらくその部分だ。

「……」

「あるみたいやな……多分、あんたには自信が無いんやろう。」

「自信って、なんの……」

「勝負事に関しての自信や。自分では、『○○に勝つ！』言うてるけど……実はそんなに勝負で勝ったことないやろう？」

「うぐつ……」

マルクは、自分の戦績を思い出しながら苦々しい表情になる。事実ではある。基本、マルクは重要であろう勝負事で勝ってないことが多い。

六魔将軍オラシオンセイイスとの戦いの時は、誰とも戦っておらず。エドラスではギリギリと言ったところで、悪魔グリモアハートの心臓との戦いの時は、アズマに負ける。大魔闘演武の時も、クオーリに自身の力で勝ったとも言いつらい。冥府タルタロスの門の時は、囚われていたので基本戦っておらず……

「……確かに、全く勝ってない……」

「まあ、そういうことやな。あんたの場合、相手が悪かったのもあるが……自分の力で戦って勝った、って自信が無いんや。」

「いや単純に実力が足りてないだけで……」

「そういう所やで。相性の問題を加味して考ええや、絶対相性が悪い戦いつてあったはずや。」

「……まあ、今はそんなこと考えんていいな。」

フリーゾはため息を吐きながら、改めてマルクを見すえる。その目

は、何かを覚悟を決めている目だった。

「あんたの力、今からできる限り仕上げんで。ウチもずっとクオーリの体乗っ取ってる訳には行かんし、クオーリにも私情があるからな。」
「……なんで、俺を？」

「まあアクノロギア云々もあるけど……ヴァレルト……いや、イービラーの忘れ形見やしな……今じゃあ、魂だけとはいえドラゴンはウチだけや……できる限り、あんたらの力を仕上げておこうとも思ってる。」

「……ら？」

「グランディーネの娘、あんたもやで。」

「わ、私もですか？」

「せや、あんたもドラゴンフォースをもっと使いこなせるように今から特訓や。」

幸い、ここら辺の空気はあんたに力を与えてくれるやろうし、魔力に関して問題ないやろう。」

フリーゾはウエンディに視線を向けて宣言する。突然話を振られて驚いたウエンディだったが、直ぐにジュビアに視線を向け直す。

「ああ、その娘に関してはウチが何とかしたるわ。氷作るだけが氷竜の力やないんやからな。」

「いや、氷作るから氷竜なんだろう？」

「まあそれも、そうやねんけどな……ま、見とき。」

そう言っつて、フリーゾはジュビアのデコに手を当てて目を瞑る。数十秒ほど経った頃だろうか。突然目を見開いて、フリーゾはジュビアに自分の魔力を通す。

「……ほい、これでええで。」

「え、今何したんだ。」

「熱出してるんやろ？知恵熱とかじゃなくて、微妙な風邪気味やったみたいやし、病原菌を凍らせたんや。」

「……病原菌って……」

ハッキリいえば、とんでもない器用さである。病原菌だなんて、肉眼で見えない程の小さいものを凍らせる……そんなことをいとも簡

単にやってのけているのだ。

「しばらくしたら、目を覚ますやろうな。病原菌を殺しただけやし、完全に回復するにはちよつと時間かかるやろう。」

その間に、あんたらの力を仕上げんで。」

「は、はいー」

「一応、あんたが本当にジュビアを治したかどうか確認するために、ここに残って確認経過をしておくわ。」

「それでええよ、あんたらからしたら信じられへんやろうしな。」

そう言つて、フリーゾは部屋から出ていく。ウエンデイ達3人は顔を見合わせて、そのままシャルルを残して一旦部屋から出ていくのであった。

「ほらー！もつと頑張りや！あんたらの力こんなもんやないやろ!!」

「め、滅茶苦茶スパルタじゃないかこいつ……」

「で、でも私達を強くしてくれようと、特訓してくれてるんだし……」
何十分か経過したころ、既にマルクとウエンデイの膝が笑うほどに、2人は疲れきっていた。ずっと戦い通しだったのだ、いくらこの辺一带の空気がよかつたり、魔力が供給され続けているといつても疲労は溜まり続ける一方である。

「……マルク、あんたは自分の力をもつと研究してみ。あんたの中に取り込んだのは、仲間である6体の悪魔を食らった暴食の悪魔や。」

ウエンデイ、あんたには言うことは無い。ドラゴンフォースをもつと安定させるために魔力をもつと増やすんや。」

「は、はいい！」

指示を出しながら、フリーゾはひたすらに2人をいじめぬく。しかし、2人は一生懸命すぎてまだ気づいていないが、既に形は整っているのだ。あとはそれを自分の意思で気づけるかどうかが問題なのである。

「……」

マルクは、目を瞑って意識を集中させる。グラトニーは、一体どのような悪魔達を食べたのか。

その記憶を、グラトニーの記憶を辿りながら考えていく。

「すー……はー……」

そしてウエンディは、ひたすらに深呼吸を繰り返す。空気を体の中に取り込み、自身の魔力へと変換させるために。

「……5分や、5分経ったら成果を見せてもらうで。」

フリーゾはそう言って、地面に座る。まだ未熟とはいえ、滅竜魔導士^{ドラゴンスレイヤー}2人を相手にするのは、中々骨が折れるからだ。

今できることを、精一杯行っている2人を見ながらふと生きていた頃を思い出した。クオーリに滅竜魔法を覚えさせている時のことを。

「……懐かしいなあ……」

『教えていた時のことか？俺を。』

「せやで……いやあ、あん時のあんたは泣き虫やからめっちゃ困ったわ。ま、その分覚えもめっちゃ早かったけどな。」

『当たり前だろ。天才だぞ俺は。』

「はいはい……昔はあんだけ可愛かったつちゅーに……今は自信過剰のカッコつけにまでなってるなんてなあ……」

頭の中でクオーリと会話しながら、フリーゾは思い出に浸る。だが、ふと気づけばウエンディとマルクの2人に、変化が訪れていた。

『おい、あの二人……』

「ウエンディはドラゴンフォースを……完全に習得しかけてんな。マルクの方は……なんやあれ、クオーリを戦った時とは別の姿になりかけてんで。」

『多分、力の再現だろうな……食らった悪魔の力のな。いかにその力

を最大限に活かせるか、ってコンセプトであいつは形を作り上げるらしい。』

「つまり……何かしらの力の顕現ってことかいな。」

『ま、お楽しみってことだ。発現してみるまでのな。』

ウエンデイの髪の色が、青色から薄紫へと変貌していく。マルクはマルクで、段々と体の大ききそのものを変えていく。

「……暴食、か。」

『あんのか？ 思うところでもよ。』

「七つの大罪って知つとるか？」

『言葉だけなら。』

「それぞれには、それを司る悪魔がいるつちゅー話やけど……」

『おいおい、そいつらって言いたいのか？ 食らったのは。』

フリーゾは真面目な顔で首を横に振る。否定の首振りではなく、その真偽が分からないために横に振っているのだ。

「ウチには、分からん。ヴァレルトが、悪魔を喰らおうとした時には既にその悪魔は6体の同種を食らった後、としか聞いてないからな。」

ただ7体の悪魔に、その一体が暴食を名乗ってる……偶然じゃ片付かんやろ。」

『……だからって、それがどうとなるわけでもあるまい。マルク・スーリアってやつの評価は簡単には覆らんさ。』

「……あんた、案外信頼高いんやなあ。」

『信頼というか……いや、そういうことにしとく。面倒臭い。』

クオーリと、フリーゾは目一杯話し込む。勿論、ウエンデイとマルクを見ながらの作業となつているので、そこまで深くは話込めないが。

「さて……そろそろ来んで。交代するか？」

『やりたいようにやれよ、お前がな。教えることは、出来ねえからな……俺にはよ。』

「自己分析がようできてるようやな!!」

「——もう一度、いいですか？」

まずは先に、ウエンデイが目を開ける。発現したドラゴンフォース

は、簡単に切れるような事がないとだけ、断言できた。

「ええで……と言いたいところやけど、マルクの準備が終わってからするかな……」

「俺も、今終わりましたよ……」

「えらく、単純そうな見た目になったけど……それでええんか？」

「ええ、それで構いません。」

フリーゾが目線をマルクに向けた瞬間に、どうやら彼の準備は終わったようだった。

その姿は、フリーゾからしてみればかなりシンプルな見た目であるが、マルクはそれでいいと感じていた。

「因みに……その姿は何の力や？」

「……暴食とは違うまた新たな姿……そうですね、これは……憤怒……
フューリー・ラーズ
憤怒怒りとも名付けますよ。」

「憤怒……怒りの力。」

「どんな力があるのかは、今から戦って見ればわかると思いますよ……」

「なるほどな……にしても、あんたますますドラゴンからかけ離れていってないか？」

「元々イービラーでさえ、元々の力じゃなくて悪魔の力を行使してたんだ……けど、ヴァレルトの力がなくなつたわけじゃない……筈です。」

マルクは、少しだけ言葉に詰まる。滅竜魔導士じゃない、と言われれば確かにその通りなのだ。だが、イービラーは自分がヴァレルトだった時代の時の技は覚えているのかよくわかっていない。

唯一名残のある紫電魔光壁でさえ、別の技として変わってしまったているのだから。

「けど、俺を育ててくれたのはヴァレルトじゃなくてイービラーだ……なるべく、こっちの方の力を使っていけますよ……」

「……なるほどな。ま、ええわ……あんたが戦ってくれるならな。んじゃ、行くで!!」

「はいつ!!」

再び、フリーゾの特訓がこの場所で始まる。その姿をシャルルとともに、少しずつ体調が良くなってきているジユビアが、覗いているのであった。

出陣

「——はっ！グレイ様の危機の予感!!」

「起きてたんですか!?というか急にどうしたんですか!?!」

マルク達が特訓をしていた頃、突然ジユビアが家から出たと同時にそのようなことを言い始めた。

突然の事で特訓をしていた3人は驚いたが、しかしジユビアのグレイに関してのセンサーは何故かとてつもなく優秀なため、おそらく何かがあったのだろうと考えた。

「待つててください今行きますからあ!!」

「……特訓はここまでやな。」

「あ……ありがとうございます。」

「ありがとうございます!」

マルクとウエンディは、大急ぎで駆けていったジユビアを追うためにフリーゾに軽く礼を言ってからそのまま追いかける。

その背中を見守りながら、フリーゾはため息をついていた。

「いやはや……あの娘っ子の回復力凄まじいんやな。」

『凍らせたんだろ?病原菌を。だったら、おかしくないんじゃないのか?治ってもよ。』

「考えてみいや、回復魔法ですら全然回復せんかった娘がただ病原菌を凍らせただけで回復すると思ってるのか?」

『……そう言われてみれば。』

「元々、ストレスによる部分が大きかったんやろうな。だから、病原菌を凍らせた以上のことが、それよりも前にあったんやろう。」

ウチがやったのは仕上げに近い。」

『仕上げ、ねえ……』

「ま、人間のことはようわからんけど……愛の力ってのはすごいんやな。あの二人見てもそう思うわ。」

『お前、ラミアにいる天空の滅神魔導士ゴッドスレイヤーみたいなこと言い出すんだな。』

「実際、友愛か恋愛かは知らんが……いい関係やと思ってるで。」

2人を見送りながら、クオーリとフリーゾはお互いに会話しながらジュビアやウエンデイ達のことを話しているのであった。

「グレイさんはこっちです!!」

「ありがとうウエンデイ!!」

ウエンデイの道案内の元、ジュビアとマルクは移動していく。途中にあった馬を借りて、颯爽と駆け抜けていく。

「それにしても、ナツさん達は上手くいったのかな!？」

「分からん!けど、ナツさんなら何とかしてくれてるだろ!?!きつとまた仲良く喧嘩してるんだらうぜ!!」

2人のことを考えて、自然と笑みがこぼれる3人、しかし、その3人を諷めるようにシャルルが注意する。

「気をつけなさいよ!この辺、ゼレフの信者が多いって場所の近くなんだから!!」

「なんだっけ!?!アヴァター黒魔術教団だっつけ!?!」

「そうよ!闇ギルドみたいな無秩序じゃなくて、秩序あるゼレフ信者達の集まりよ!ルールがある分、余計にタチが悪い!!」

「けれど、このまま言ったら街の近くですよ!?!そんなところにまで現れるとは……」

馬を走らせて、風の音が大きいせいか大声で話し合うジュビア達。しばらくすると、向こうの方に大きな土煙が見える。

その異常さを確認したため、一同は一旦そこに馬を止める。

「あの土煙は……っ!」

「……何人いるんでしょう。ここからでも大量の人の匂いがします。」
「少なくとも、100じや当たり前に利かない数だ。」

流石に、無策でそんな大軍の中に押入るのは少し無謀である。しかし、ジュビアは何かを感じとったのか、途端に視線を巡らせる。

「ジュビアさん？」

「……感じます！あの中にグレイ様があります!!」

「ということは、もしかしたらナツさん達も……」

「可能性はあるだろうな……よし、ならさっさと突入しよう。数だけとはいえ、俺達の方だけでも簡単に突破できる。」

「じゃあ、どうするの?」

「簡単だ……あの大群に、『穴』を開ければ入れるだろ!!」

マルクの体に、呪力が満ちていく。先程まで、悪魔の力を行使し続けていたので、自分の魔力はまだ回復しきっていないのだ。

そして、その体は再び形を変えていく。

「暴食、憤怒、傲慢、色欲、怠惰、嫉妬、強欲……それら7つが俺の力となってるわけで……!さて、俺が先行するんで……三人はあとから来てくれ……!」

マルクに翼が生えて、その場から一気に飛び立つ。馬を走らせるよりも、シャルルやハッピーが誰かを抱えて全速力で飛ぶよりも、圧倒的に早い速度で、迫っていく。

「モード悪魔龍!強欲欲しがり!」
ディザイア・グリード

羽をはやし、小型の肉食恐竜のような体の形になったマルク。そのまま彼はその大軍の中に突っ込んでいった。

「うわっ!?!何だこの化け物?」

「こいつも邪魔する気か!?!とりあえず潰すぞ!!我らがゼレフの為に!!」

マルクは、大軍の中に入り周りの魔導士を一瞥していく。それぞれの使う魔法は、どうやら統一されているようで、全員が杖を持って魔法を放っていくようだった。属性は、どうやらバラバラらしいが。

「統一されると結構やりづらいな……ま、いいか。」

「ひっ!?!こいつ喋れるのか!!」

「構わんそのまま仕留めちまえばいい！この数相手に生き残れるとでも——」

「あー、もう……遅いから。」

瞬間、マルクの両手と口、そして生えてきている尻尾からそれぞれ相手が使う魔法が放たれる。

「ぎゃあああ!？」

「な、なんで俺たちの魔法を!？」

「強欲欲しがり、強欲の力は相手の魔法を瞬時に無条件でコピーできる。ま、使うのに魔力を消費するからあまり変わらないんだけどな……」

マルクはそのまま、周辺の敵と一直線上にいる敵を全て薙ぎ払っていく。さすがにそれで魔力を消費しすぎたのか、一旦悪魔龍を解除してその場に立つ。

「魔力に変換されてるとはいえ、元はと言えば呪力だ。これは回復するのに時間がかかってしまうんだよな……」

「に、人間!?!あいつ人間のガキだったのか!!」

「大方テイクオーバー接収の魔法がなんかだ!!今なら仕留められるぞ!!魔力の使いすぎで魔法が解けちまったんだ!!」

「魔力の使いすぎ、ねえ……なら、その魔力を回復させていくとしますか。」

マルクは元の姿に戻ってから、大軍の中へと飛び込んでいく。当然、魔法が大量に放たれてしまうが、マルクにとって杖から放たれる魔法なんていうのは、格好の餌でしかないのだ。

「いただきます……はぐつ、あぐつ……!」

「なっ!？」

「ま、魔法が食べられたア!!」

「へへ、ご馳走様つと……魔龍の咆哮!!」

魔力を一旦回復させてから、マルクはブレスで周りを吹き飛ばしていく。このまま悪魔龍を続けても問題なかったかもしれないが、悪魔龍は基本的に周りを巻き込む可能性のある力である。そして、呪力も暴食の力以外では中々回復させることができない。

故に、元の姿に戻って戦うことも時には必要なのだ。

「へへっ……」

「こ、こいつ見たことあんぞ！そうだ、大魔闘演武の時にいた妖精の尻尾のマルク・スーリアだ!!」

「へー、黒魔術教団なんて名乗ってるから知られていないと思つてたよ。案外有名人かな、俺は。」

拳に魔力を纏わせて、マルクは拳を大きく振り抜いた。それは、爆発するかのように魔力を破裂させ、周りにいた敵の魔力をごとつそり削り、自分はその分の魔力を回復させていく。

「んー……しかしこうも多いと、倒しきらないと合流出来なさそうだなあ……」

向かってくる敵をなぎ倒していきながら、マルクは少し考える。

『遠距離がダメなら近接で』と考える敵がいたのか、杖を持ちながら殴りかかってくる敵が増えてきていた。理屈としてはわかるが、しかしそう簡単に上手くいくと思つていたのだろうか。

「……ま、しばらく殴り続けていたらそのうち誰かと会うだろ。幹部なり、ナツさんとかウエンディ達と。」

「うおおおおおー!」

「おっと……!?!」

後ろから殴りかかってくる敵がいたので、マルクは一旦回避してその回避した人物を、殴り返そうとする。だが、パツと見た時のその外見が他と明らかに違うのを見て確信した。『只者ではない』と。

「おおー!地方幹部のザークオさんだ!!」

「ふしゅう……ガキが、あまり調子に乗ってるんじゃないぞ。」

「筋力強化の魔法か?随分とパワー型なんだな。その手に持っている杖と羽織ってるローブは飾りかなにかか?」

杖を叩きつけたところを、改めて把握し直すマルク。地面が、一気にひび割れておりどんな超人でも、魔法無しにはなし得なさそうな攻撃力だった。

「ふん……確かに筋力強化も使っている。だが、俺の魔法は杖を叩きつけた相手の防御力を下げること……一撃でもヒットすれば、どんな

ガードも関係なしに――」

「長い。」

マルクは、耐えかねてザークオと言われていた男を殴り飛ばす。体
がかなり大きい人物であったため、少しジャンプしないと届かなかっ
た。

「ぐう……!?だがこれしき!我が魔法の力の前には――」

「滅竜奥義!濃魔一閃!」

殴った手に即座に魔力を溜め込み、マルクはそのままザークオを殴
り飛ばす。

殴られたザークオは、即座にマルクの魔力が体中に伝染していき、
その時点で既に勝敗は決してしまっていた。

「うわああああ!?ザークオさんがやられ――」

「どけどけえ!!」

マルクは叫びながら、周りの兵士達を一網打尽にしていきながら進
んでいく。

近接戦闘型が一定数いれば、また話は違っていたのかもしれない
が、わざわざ杖から発射するというオーソドックスなものを使用して
いるあたり、形から入るタイプなのだろうか……などとマルクは微妙
に見当違いなことを考えていた。

と、そうやって戦っている最中に見覚えのある紅の髪が近づいてい
た。

「――ふ、見ない間に随分と成長したんだな。」

「あれ!?エルザさん!?何でこんな所に!?!」

「なんだ、知らずに来たのか?この戦いは、元々私とグレイ……そしてナ
ツとルーシイで起こしたものだぞ?」

「えっ!?!」

突然のことで驚きを隠せないマルク。戦いながらやっていたが、ま
さかエルザも関わっていたとは驚きだったのだ。

「私とグレイは一応今は評議員でな……その時に、この黒魔術教団に
当たったという訳さ。」

「じゃあこの戦いも、評議員絡みって事ですか?」

「厳密には、極秘として扱われている事件だったからな…手をこまねいていたの事実だが……！」

エルザは敵を斬り、マルクは敵を殴り飛ばす。それを続けていきながら戦い続けていた。

「だが、この黒魔術教団が浄化作戦というのを行うと聞いてな。それで、強制的に潰そうとしたらこの状況というわけだ!!」

「要するに、こいつらがとんでもなく悪いことしようとしてるから無理やり止めようって話ですね!？」

「要約するとそういう事だ!!」

「なら、このまま全員倒せばいいですね!!」

マルクが不敵な笑みを浮かべるが、エルザは今だ真剣な顔をしている。何か、思うところでもあるらしい。

「だが、黒魔術教団にはそれぞれ幹部が存在する。そして、トップが未だ倒されていない……」

「……でも、幹部はもう既に全滅してそうですけどね。」

「まあ、私も1人倒してきた所なのだが……もしかして、ウエンディやジュービアも来ているのか?」

「そうですね、それが?」

「……なら、勝ったも同然だな。このまま全員捕まえるぞ!!」

「はい!!」

黒魔術教団は、とんでもない人数を従えている者達である。その人数だけが、彼らの強みと言えるだろう。

黒魔術教団を壊滅させ、全員を捕縛するという新たな目的のために……妖精の尻尾は戦い続けるのであった。

代償召喚魔法

「っ！」

「なんだ!？」

エルザとマルクは、突如現れた巨大な魔力を感じる方向に顔を向ける。しかし、その方向は通常の間人ならばありえない方向だった。

空である。見れば、雲は渦のように回りながら何かを形成しているかのようにも思える。

「アーロック様の代償召喚魔法だ！」

「うおーすげー!!」

黒魔術教団アザアタールのメンバー達が騒ぎ始める。そして、直後に地面が振動し始めて更にひび割れ始めていく。

「避けるマルク！」

「危ねえ!？」

「何事だ!？」

「うわっ!?!ちよ、アーロック様これじゃあ俺たちまで……!」

雲がうずまき、地響きが鳴り始め、雷が鳴り響き始める。そして渦の中心から、渦よりもはるかにでかい『足』が現れる。

「でかい足!？」

「代償召喚魔法……まさか……!」

「うわああああ!？」

現れた足は、黒魔術教団のいる所へと一気に踏み抜かれる。代償召喚魔法、何かを代償とすることで強力な者を呼び出す魔法。

何を代償にしたのかは分からないが、しかしこれを召喚した者は黒魔術教団までもを生贄に捧げようとしていることはわかっていた。

「な、仲間ごと……やったってのか……」

「外道め……!」

「エルザさん、アーロックって一体……」

「簡単に言えば、黒魔術教団のトップだ。ゼレフを信仰しているというから、余りまともさには期待していなかったが……これ程とはな……!」

エルザは手に持つ剣を握り締めながら、アールックに対して怒りを燃やす。そしてそれは一理あるマルクも同じだった。

自分の部下や、仲間すらも簡単に生贄に捧げるような男にかける情けは既に消えていた。

「ふははははは！闘神イクサツナギは誰にも止められん!!この場全ての命を奪い尽くす迄なあ!!」

遠くから聞こえてくる声。その声を、ドラゴンスレイヤー滅竜魔導士の聴覚で聞き取ったマルクは、出てきた名前に疑問を抱く。

「…エルザさん、闘神イクサツナギってなんですか。」

「闘神イクサツナギだと……!?まさか——」

その名を聞いて、エルザは驚きながらも上を見上げる。既に、現れた足から上を覆うように竜巻が発生しており、それにも巻き込まれて黒魔術教団の何人かが吹き飛ばされていた。

だが、徐々にその竜巻が薄れていき……呼ばれた神が、その姿を現す。

「いやいや……足すらあんなにでかかったのに……本体は予想以上にでかいな……!?!」

「っ……ヤクマ十八闘神の一人を召喚したというのか……!」

黒い体、巨大な角、最低限の装備はより呼び出された者が神であるかの証拠のように軽装であった。そして、手にはとても長い剣を携えていた。

「あれが、闘神イクサツナギ……」

「っ！攻撃してくるぞ!!」

闘神イクサツナギは現れた直後は、獲物を見定めるかのようにじつとしていたが、ゆっくりと手に持つその剣を振り上げる。それが、降伏や和解の合図であろうはずがない。

「げっ!?!」

振り下ろされた剣は、一直線に地面を裂いていく。遙か向こうの台地まで、一直線に削り取っていく。

例え、直撃しなかったとしても致命傷は免れないだろう。

「くっ……むっ?」

「あれは……剣の上に、誰か……」

闘神イクサツナギが振り下ろした剣の上を、がむしやらに走る人物が1人、そこにはいた。

桜色の髪を持ち、白いマフラーをたなびかせている人物。

「ああああああああああ!!」

「ナツさん!? あれ避けた上で速攻で乗ったんですか!？」

「ふ……ナツ……」

マルクは驚くが、エルザはまるでわかっていたかのような反応をする。だが、マルクもすぐに理解し直した。『そうだ、これがナツ・ドラグニルなんだ』と。

「ふぎけるなよー仲間の命をなんだと思っていやがる!!」

素早く走りながら、ナツは闘神イクサツナギの体を跳ねて移動していく。まるで自分の身にまわりつく虫を叩き落とすかのように、闘神イクサツナギは手でナツを払おうとするが、今のナツの前には遅すぎる速度だった。

「仲間とは目的の為の手段だと悟る時が来るよ、お前にもな。」

「違う！ 仲間ってのは同じ目的に一緒に進んでいく同士だ！ いや、目的なんか違ってもいい、一緒に笑って時には支えあって、互いが互いを信じ合えるようになる!」

「それはただの依存だ。」

「どんな言葉でもいいさ……とにかく、そういう絆がいつも俺を救ってくれた!! 仲間の絆を舐めるなあ!!」

アールロックの言葉に、ナツは言い返す。ひたすらに言い返す。バカや仲間を無下にするアールロック。仲間との絆を信じ、仲間と共に歩んでいくナツ。どちらが勝つか、というのは……実に簡単な話である。

「……勝ちましたね。」

「同じ事を考えていたな……しかし、何故そう思った?」

「そりゃあ……まあ、感情的な部分が大きいですけどね。そもそもあの闘神イクサツナギっての……凶体とパワーがとんでもないくらいあるだけで、圧倒的にスピードが足りてない。」

マルクが、エルザにそう呟きながらナツを見ていた。エルザも同じ

ことを考えていたのか、その表情に微塵もナツが負けるといふ心配はしていなかった。

「ああああああ!!」

ナツの一撃が、闘神イクサツナギの頭に入る。しかし、少し怯んだ程度で未だ倒せてはいない。

「その大切な仲間達を守る為に……もう目の前で誰かを失わないために、俺は強くなる!!」

だが、ナツは諦めなかった。拳に宿る炎がひたすらに、ただひたすらに大きくなっていく。

その炎の大きさは、簡単にイクサツナギの頭の大きさを超えていた。

「これが炎竜王の炎だア!!炎竜王の崩拳!!」

その巨大な炎はイクサツナギの頭を砕き、爆煙と共にその体をも爆散させていった。

完全に砕かれたイクサツナギは、それで完全に終わったのか復活することなく、壊された建物のように崩れていく。

「……やっぱり、本気出してなかったんですねナツさん。」

その一撃を目撃して、マルクはそう呟く。しかし、あの技を受けたとしても例え暴食の力を使っていたとしても……マルクは自分が立っている自信がなかった。

「闘神が！アーロック様の闘神が破壊されたア!!」

頭から破壊したので、当然ナツは落ちてくる。だが着地して立ち上がる。先程見た恐ろしいまでの強さ、そしてそのナツの威圧に押されて、黒魔術教団の者達は完全に戦意を喪失してしまっていた。

「化け物だーっ!!」

「逃げろー!!」

「ひいひいひい!!」

「あ、待てお前らも全員評議院に突き出して……!」

逃げ出した者達を捕まえようと、マルクが魔力を噴出しようとした時、突然第3勢力が現れる。

「全員逮捕だーっ!!逃がすなよコラア!!」

「……っ!?!????!?!」

現れた人物はガジルとリリー、そしてレビイの3人とその他大勢の評議院だった。

そう、評議院にガジルが命令を下していたのだ。その様子を見て、マルクは混乱していた。何故ガジルが、評議院をやっているのかと。

「お！レビイとリリーか！」

「ナツ！」

「久しいな。」

「ギヒ。」

そして、ナツも評議院の服を着ているガジルを見て、心底困惑したのかとても複雑な表情になっていた。

「……と、ガジルによく似た人？」

「喧嘩売ってんのかコノヤロウ!!」

「いやー、あのガジルさんが評議院なわけないし。」

「なんでさん付けしてるんですかナツさん……」

混乱こそしていたが、とりあえずその場に合流するマルク。エルザも共に来ていた。

「あー、えーつと……ず、随分とワイルドになりましたね……ドラムバルト……」

「おうおめえも喧嘩売ってんのか？」

苦笑いをしながら、マルクはガジルから目をそらす。それが、マルクにできる精一杯の現実逃避だった。

「食い扶持を探してる時『木』のじーさんに誘われてな。」

「ウォーロツドさんだ。」

「多分今頃冗談だったのに、とか言ってみっちゃ後悔してそうですね。」

「おうホントに逮捕すんぞおめえ……とりあえず、こうしてギルドの上立つことになった。」

そう言いながら、自慢げな顔でガジルはナツに指を指す。確かに、評議院ともなればギルドの上に立ったも同然であろう。

「ちなみにお前も逮捕だ火竜^{サラマンダー}。『目付きが悪い罪』でなあ？」

そう言いながら、ガジルは次々に妖精の尻尾のメンバーに指を向けていく。ルーシイ、ジュビア、ハッピー、ウエンデイ、シャルルにマルク。

「お前は『格好がエロイ罪』で逮捕。」

「なっ…」

「ジュビアは『じとじと罪』で逮捕。」

「じとじと?」

「お前は『魚食いすぎ罪』」

「美味しさは罪だったのか…」

「お前はなんか…その存在が何となく逮捕だ。」

「え? 何ですかそれ…」

「誤認逮捕で絞られて下さい。」

ガジルが、ウエンデイに対して言ったことにマルクが噛み付く。それをガジルはスルーしてそのままシャルルの方に視線を向ける。

「えーつと… 『紅茶飲みすぎ罪』」

「今適当に考えたわね。」

「『魔力食いすぎ罪』」

「…あれ、なんか俺だけ本当にありそうな気が…」

そして、ガジルは最後にグレイに目を向ける。その目は、先程までとは違い本気の目だった。

「お前は…言わなくてもわかるよな? グレイ。オレア甘くはねえぞ。ぐほっ!」

だが、後ろからエルザがガジルの頭を籠手を付けた手で軽く拳骨を入れる。先程から居たのだが、ようやく今エルザの存在に一同が気づいたようだった。

「エルザ!」

「エルザがいたーっ!!」

「機嫌悪そうだよー!!」

「貴様…ガジルに似てる癖に随分と調子に乗っているな。」

「俺はガジルだ本物のなっ!!」

「いや、あのガジルさんが評議院なわけなからう…」

そして、エルザもガジルに対しての勘違いをしていた。それに対して見かねたのか、リリーが助け舟を出す。

「実は本物のガジルだ。」

「何っ!？」

「本気で偽物だと思ってたの……?」

エルザとナツは驚いたが、しかしエルザはすぐさま真面目な顔に戻って状況説明に戻る。

「ならば話は早い、黒魔術教団の浄化作戦を止めたのは我々だ。いや、もつと言えは……」

「分かってるよ。」

「グレイのおかげで俺達もここまで来れた、感謝している。」

「しかし迷惑かけたことになりねえ。済まなかった。」

グレイは申し訳なさそうに謝るが、それを咎めるものは誰一人としていない。結果的に黒魔術教団を止められたのだから。

「ジユビアは…グレイ様が無事ならそれでいいです。」

「私もまんまと騙されたよ。」

「お前はもう少し変装に気を遣わねえとバレバレだぞ。」

「えー、バレてたの〜?」

話が進んでいく中、ウエンデイ、マルク、シャルルの3人は少しだけ疎外感を受けていた。

ジユビアのように長い間グレイを待っていた訳ではなく、ナツ達のように黒魔術教団に忍び込んだわけでもなく、そして密かに侵入作戦を執行していたエルザ達というわけでもなく。

本場に、黒魔術教団以外の情報がほとんど抜け落ちているのだ。それに加えて、シャルルとウエンデイはエルザのことも知らないので余計である。

「とにかく、街は守られた。」

「まさかみんなに助けられるとはね。」

「ケツ」

リリーとレビイが嬉しそうにする中、ガジルは少々つまらなさそうな顔をしていた。

だが、その表情は満更でもなさそうなものだった。

「俺達が揃えば無敵！」

「またみんなと一緒に戦えるなんて……」

「少し大きくなったか？二人とも。」

「いいえ、全然変わってません。」

「俺達、強くはなりませんでしたけどね。」

「なんかギルドにいるみたいだね。」

「このメンツが揃うと、ね。」

「こーゆーの久しぶりだなあ……」

その場の一同で和気藹々と話し合いながら、かつてのことを思い出す。そして、そのままの勢いでエルザが指揮を執る。

「さあ私達の勝利だ！勝鬨を上げろ！」

その一言で、全員が大きな声を出して勝鬨を上げる。それを見て、連行されていく黒魔術教団達はこう思ったらしい。

『これが妖精の尻尾なのだ』と。

マグノリアへ

「うおー、懐かしいなー」

「見て見て！カルディア大聖堂が直ってるよー！」

ルーシイ、ナツ、ハツピー、ウエンデイ、シャルル、マルクの6人は、マグノリアに帰ってきていた。

それぞれ、一年前のことがあったためまったくここに戻ってきていなかったのだ。一年前の冥府タルタロスの門との戦いで、マグノリアは壊滅。カルディア大聖堂も、その時に完全に破壊されていたのだが、1年経って見てみればまるでそんなことが無かったかのように完全に復元されきっていた。

「二年前は酷い有様だったのに……」

「この街は遅しいわね……」

グレイ、エルザ、ガジル、リリー、ジュビア、レビイの6人は後で合流することになっている。

というのも、ガジルとレビイとリリーは、評議院に報告後退職届けを出してマグノリアに戻り、グレイは今回の件の後始末、ジュビアはグレイについていき、エルザはジェラルドに報告しに行くためである。

何故、マグノリアなのか。それはナツが提案した妖精フェアリーテイルの尻尾復活に全員が参加してくれたからだ。

そのために、今は一旦離れている……というわけである。

「……………」

「…ルーシイさん、大丈夫ですか？」

「え？」

「なんか元気ないですよ？」

「ううん、なんでもない。久しぶりでちよつと思ひ出に浸ってた。」

そう言っつて、氣遣つてくれたウエンデイにほほ笑みかけるルーシイ。だが、その言葉が嘘だとすぐにほかのメンバーは氣がついた。思ひ出にひたつているかの真偽はともかくとしても、明らかに『なんでもない』表情ではなかったからだ。

「……」

「どうしたのルーシイ？」

「ギルドはこの先だぞ？」

「ルーシイさん？」

「……あたし、この先に行くのが怖い。」

立ち止まるルーシイ。その不安は、明確な形としてないものの皆少しは持っているものだった。

「ギルドが残ってないからか？」

「……」

「建物なんかどーにでもなる。ここから始めるんだ。」

「残ってるか不安なのは皆の心……突然ナツが現れて妖精の尻尾復活だーって話になって……あたしちよつと舞い上がっちゃって。」

ルーシイが、ぽつりぽつりと自身の不安を述べていく。妖精の尻尾のギルドの有無ではない。妖精の尻尾という家族に対しての気持ちだが、みんな既に無くなっているのではないか？彼女は、そう思っているのだ。

「1年間1回も連絡をとってなかった仲間達に、手紙を送ったの……所在がわかる人だけだけど。」

妖精の尻尾を復活させるために、マグノリアに集まろうって。」

「……」

「冷静に考えれば、みんな自分の道をそれぞれ進んでる。あたし達の思いが、みんな一緒かは分からない。」

みんな……もうギルドのことなんか忘れてるかもしれないし……あたし——」

「——1年くれーで忘れるかよってんだ。」

「っ!!」

ルーシイの後ろから、彼女の肩に突然腕を回した人物。それは、カナだった。また昼間から酒を飲んでいいのか、片手には酒瓶が握られていた。

「カナ！」

「カナさん!!」

「よおーっ！ナツ、ハッピー、シャルル〜！あ、ウエンデイとマルクちよつと大きくなった？」

「い、いえ……」

「いいえ、特には……」

「そうかそうか……相変わらずチチでけーな。」

テンションを上げながら、再会を喜ぶカナ。ルーシイの胸を触りながら、楽しそうに一同を見回す。

「カナ……」

「いやー、この1年は私にとつても充実してたねー……とりあえず、ギルダーツでも探そうと思つて旅してたんだ。手紙を受け取れたのは運が良かったよ。」

「ギルダーツさんを……」

「……ルーシイ、あんたが思つてゐることはみんな似たようなもんだつたと思うよ。」

「え……？」

ルーシイに微笑みかけながら、カナは優しい言葉をかけていく。その言葉に、ルーシイは戸惑つていた。

「特に私は、ガキの頃からギルドにいたからね。突然解散なんて言われても意味わかんねーつつーか……どうやって食つていくのかさえ、よく分からなかった。」

「まあ、いい人生経験にはなつたよ。」

酒瓶を煽り、一飲みしながらカナは語つていく。ルーシイだけでは、みんな持っていたのだと。

「みんな違和感みたいなのは持つてたんだ。だから連絡する勇氣もなかった……それを、お前が撃ち破つてくれたんだ。ルーシイ。」

「あ……」

ルーシイは、カナに言われたことで心が少しだけ軽くなつていた。先程まで、皆妖精の尻尾を忘れて新しい生活を楽しんでいるかもしれない……と思つていたが、その皆の1人であるカナは手紙を出してくれたこと、妖精の尻尾を復活させようつてことに感謝してくれていたからだ。

「来いよ！みんな待つてる!!」

「みんな……?」

カナが、ルーシイを引つ張って連れていく。それを見て、ナツ達も顔を見合わせて歩いてついていく。少しは、ルーシイに花を持たせようと思っただからだ。

「へへ、やっぱりみんないるんだな。」

「さつきから匂いがしてましたもんね。」

「こういう時、滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーの鼻っていうのは便利ですね。」

「ルーシイ、びつくりしてるよね。」

「そうね、多分手紙を出した人全員来てるんじゃないかしら。」

顔を見合わせながら、悠々と歩いていく5人。そして、その先には……ルーシイの待ち望んでいたであろう光景が広がっていた。

「えーっと……ウォーレンにナブ、リーダスとマックスと……」

「アルザックさん、ビスカさん、それにアスカちゃんもいますね。」

「ジエツトさんとドロイさんもいますし、マカオさんにワカバさんにロメオもいますよ。」

「ラキとビジターとキナナもいるよー!」

「エルザ、グレイ、ジュビアとガジル、リリーとレビイもいるようね。」

ルーシイを中心として、ぐるっと取り囲んでいる者達を、一人一人誰がいるかを把握していくナツ達。合流予定だったグレイ達も既に居たようだった。

「漢の再会だーっ!!」

「ナツー、ルーシイ、ハッピー、久しぶりー!」

「リサーナ……エルフマン……」

ルーシイが、2人の名を上げて……そして、目の前に現れた者でついに我慢が効かなくなったのか、涙を零し始める。

「ミラ、さん……」

「——おかえりなさい、ルーシイ。」

「ただ、いま……!」

ミラが、ルーシイにほほ笑みかける。『おかえり』という言葉聞いて、ルーシイは安心して完全に我慢が効かなくなってしまった。どれ

だけその言葉が聞きたかったのだろう、どれほど待ち望んだ言葉だったのだろう。

ルーシイは、声を上げてひたすらに泣き始める。みんなに会えた事、皆が妖精の尻尾を忘れていなかったこと、まだ妖精の尻尾はただいまとおかえりを言い合える家族の関係なのだ……それら全てが、ルーシイにとって嬉しいことだったのだ。

嬉しさと、喜びのあまり感極まってしまった、というわけだったのだ。

「……ん？ナツさん、どこ行くんです？」

「ちよつと、一年越しの忘れ物探しだよ……お！あつたあつた。」

ルーシイ達から少し離れた位置にある瓦礫の中から、ナツがとあるものを発掘する。

マルクは、その発掘したのを見て随分と驚いていた。

「これって……」

「まあ、後で縫い直したりするだろうし、ボロボロだけどまあいっか。」

「……ですね。」

マルクが、ナツが跡地から発掘したのを見て苦笑する。それは、彼にとっても……いや、この場にいる全員にとっても、大切なものだったのだから。ボロボロであっても、その気持ちは絶対に崩れることは無い、彼らの象徴。

「ギルドここに復活!!俺達が妖精の尻尾だ!!」

大きく、ナツが旗を掲げる。それは、ギルドの紋章であり彼ら全員の象徴である。

今ここに、妖精の尻尾は完全に復活したのであった。

妖精の尻尾復活から、2日程経過したある日。マルクは妖精の尻尾跡地のクレーターに設置された簡易テントで話していた。

「家がない。」

「……前に住んでいた家は……？」

「……」

「ごめん、私が悪かった。」

ナツ、ルーシイ、ハツピー、ウエンデイ、シャルル、グレイ、エルザ、ジユビアを呼んでマルクが真剣な表情で相談していた。

「……なら、どうする？蓄えはあるのか？」

「……銀行の講座、ミラさんが天狼島から帰ってきたあとの以来からの時に作ってくれたんで、お金はあると思います。ほとんど使ってなかったはずですし。」

「それで家を買うなり借家を借りるなりすればいいんじゃないのか……？」

「そう、思っただけですけどね……」

マルクはポツポツと話し始めていく。まず、ルーシイが現在住んでいる借家は人がいっぱいだった。

それは、ほかの借家も同じだったのだ。唯一空いている借家は……なんと女性ばかりが多いにもかかわらず、風呂は共通の物件だったのだ。

借家が無理なら、当然一軒家というのはあるわけがなかった。

「……むりです。」

「……すまなかった。」

「……誰かの家に泊めてもらうとかか？」

「それは、考えたんですけどね……」

誰かの家に泊めてもらうにしても、まず女性陣はアウトである。それ以前に、誰かの家に泊めてもらうのは流石に遠慮したくなることである。

「えっと、ヒルズは……」

「無理です、俺が緊張だけで死にます。」

「……ですよね。」

「しかし、家がないというのは中々厳しいものがあるぞ?」

エルザがそう呟くが、しかしまさかここまで埋まっているとは夢にも思っていないかった。

何故ここまで家の空きがないのか、少しばかり不思議な話でもある。

「……一年前の戦いで、マグノリアは全壊。それに何とか復興した今であっても、人は少なくなっている方が普通のはずなんだが。」

「なんでも、殆どが新築状態でピカピカだからガンガンほかの街から人が住み始めたみたいで。」

「……復興した影響で、確かに新築には困らないところばかりだったものな。」

何か覚えがあるのか、エルザは遠い目をしていた。だが、しかしそれで問題が解決する訳でもない。

「うーん……今新しく作られてる家ってあつたかしら?」

「あつたと思いますよ。街の復興がほとんど出来ている今、その勢いで新築もバンバン作られているでしょうし。」

「……ねえ、1ついいかしら?」

「なんだよシャルル。」

今の今まで沈黙を保っていたシャルルだったが、ふとマルクを見上げてジト目で話しかける。

「最悪、家を作るって言うのはダメなのかしら。」

「あー……その技術がないからな……さすがに素人が作るわけにも行かないだろうし。」

「いえだから……そういう道に進んでた人に頼んで、よ。」

「……ああ、確かに金が足りそうなら頼んでもいいかもしれない。」

「世の中にはローンというものもある。それで払ってもいいだろう。」

マルクは、真剣に考え始める。頼んで作らせてもらえばいいだろう。その際には誰か大人の人についてきてもらおうのが1番かもしれないが。

だが、いい考えである。頼んで、自分の家を作ってもらおうという発想がまずなかったのだ。

「……よし、頼んでみよう。」

「ふむ、暫くはどこかに泊まらないといけないだろうが、些細な問題だろう。」

「ですね……私たち女性陣はヒルズがあつて良かったです。」

「確かに、そうですね。」

方向性が決まったところで、一同は解散してそのままそれぞれのやるべきことを行い始める。

後日、マルクは預金通帳を見せて建築家と話し合った結果、それから約一週間後に新しい家が出来たのであった。

フェアリーテイル再建

未だ再建されていないギルドの跡地で、ギルドメンバー達は一生懸命土木作業をしていた。

その中で、マルクも丸太を持ちながらせつせと仕事に勤しんでいた。その中で、ウエンデイが暇そうにじっとしていたのでマルクがそのまま話しかけに行く。

「あ……マルク。えっと、これは……」

「妖精の尻尾を新しく作るにあたって、俺達が初めにやる仕事だな、うん。」

「初めにやる仕事？」

「まあ……ひとまず、ギルドの作り直しだよな。そうじゃないと何も出来ないから。」

「けど、ウエンデイに力仕事は無理よ？」

シャルルがマルクに向かって話しかける。力仕事が無理なのは、大抵の女子陣がそうなのでマルクもそれは肯定しながら話を進めていく。

「それは分かっている、力仕事は俺の分野だ……だから、ウエンデイには怪我した場合の治療担当を頼みたい。」

「怪我の治療……頑張るよ！」

「よし、頼んだ！」

単純な会話だけをしてから、マルクとウエンデイはそれぞれ自分のやる事を行い始める……が、そうそう怪我をする人物がいない。ウエンデイはもう暫くは暇になるだろう。

「……これ一本ずつ運んでたら時間かかりませんか？」

「つつてもな、エルフマンみてえにパワータイプの魔法がねえと中々難しいしよ。」

マックスと共に、丸太やその他資材の束を運んでいくマルク。エルザが、それら全てを板に切り刻むことで幾分か、作業バランスが整っていた。

「パワータイプ……いや、なくてもいいでしょ。マックスさん砂で運

「んでるじゃないですか。」

「あ、バレたか。」

「隣でされてたら嫌でもわかりますよ。」

「ま、無理に運んでいく必要がないってのは、確かにあるけどな。勝手に運んでいたりなんてすりゃあ、今のバランスが崩れちゃうし。」

「それもそうですね……で、ルーシイさん何やってるんですか。」

マルクは、マックスから視線を外して、何故か隣でプルプル震えながら丸太を運ぶルーシイに話しかける。

「いや、何故か成り行きで……」

「成り行きで丸太運ぶ人初めて見ました。俺が運びますから、ルーシイさんは休んでてください。」

「ありがと……」

マルクはルーシイから丸太を受け取って持ち運ぼうとする……が、思いのほか片手で1本というのは、未だ成長途中の彼には難しいものだった。

「うお……?」

「はは、無理するからだよ……しやあないから俺が運んで——」

「うおらあ!!」

マックスが運ぼうとした時、マルクが上空に向けて盛大にブレスを吐く。唐突な出来事だったので、周りの者達も皆全員マルクに視線を向けていた。

「なんで急に魔法使うんだよ……」

「ああいえ、1回使い切らないといけないから……」

「え、ちよ……? どういう事だよ。」

「えーっと、こういう事です……モード悪魔龍、フューリーラース憤怒怒り。」

マルクは、あのブレス1回で魔力を使い切りそしてそのまま流れるように悪魔龍化を行う。体は呪力から変換された魔力によって、倍以上に大きくなりその筋肉量も魔力によって増量していく。

「これなら何本も運べると思って。」

「……」

「マックスさん?」

「いやお前成長期とはいえ、幾らなんでも成長しすぎだろ。」

「あ、そう解釈しちゃいます?」

そのままマルクは丸太を運んでいくが、それを見て他の男達が何かを感化されたのか、一斉に丸太を何本も運び始める。

「ビーストソウル!!」

「む……」

エルフマンも、自身の魔法によって何本もの丸太を運び始めていた。それを見て、マルクは自分の方が丸太が少ないと思い、さらに腕いっぱい丸太を運び始めていた。

「……マルク、随分と楽しそうだね。」

「そうね、前まであんな事しなかったのに……今じゃあ男連中に混じって馬鹿やるようになったわけね。」

「ふふ、私はちよつと嬉しいよ?マルク、私達以外にはずっと1歩下がって見てる感じだったし。」

「……確かにそうね。ある意味、この1年間で色々あつてふっ切れた結果かしら?」

そんなマルクの様子を見て、ウエンデイ達が楽しく微笑んでいた。マルクが楽しそうに他の者達と張り合っているのが、どことなく嬉しかったからだ。

「……蛇姫の鱗ラミアスケイルにいた頃も、あんな楽しそうにはしてなかったよね。」

「まあ、マルクは半年しかいなかったんだけど。」

「シヤ、シヤルル……」

「——まあ、実際本当にそうだしな。」

と、シヤルルとウエンデイの2人が話し合っている間に、マルクは仕事を終えたのか元の姿に戻って2人のところに来ていた。

「あら、もう仕事はいいの?」

「なんかやたら丸太運んだせいで、仕事なくなっちゃった。」

「アホね。」

「ま、否定はしない……ん?」

冗談を言い合いながら、マルクはふとかけてうんうん唸っているレビイを見つける。

「あれ、レヴィイさん？」

「ほんとだ……レヴィイさん、何してるんですか？」

「ちよつと書類の整理をね……」

「うわ凄い量……これ何の書類ですか？」

「実はね……ギルド復活って言っても実は言葉だけじゃあどうにもならないの。評議院に認可されなきゃ闇ギルドと同じだからね。これは、それらの書類。」

かなり積まれた書類を見ながら、マルクはレヴィイに素直に感動していた。ある意味、ギルドを建てることよりも重要な仕事であるからだ。

「ま、その点に関して言えば俺たちが一年かけて根回ししておいたからな。」

「気が利くじゃない。」

「だから表向きにも妖精の尻尾は完全復活と言える。」

「ありがとうございますレヴィイさん……」

何故かウエンディは涙を泣きながら感謝し、マルクはレヴィイの手を持って祈るように感謝を捧げていた。

しかし、レヴィイは感謝を受けることこそしたが未だ悩んでいるところはあろうだ。

「あとは……この欄を埋めるだけなんだけど……」

「迷うわね。」

「迷う？」

「……『7代目ギルドマスターを誰にするか』」

「……7代目ギルドマスター。」

ウエンディとマルクは息を呑んだ。確かに、今それを決めることはかなり重要なことである。

6代目……マカロフ・ドレアーがない今、帰ってくるまでの暫定的なものだが。

「別にオレは……どうしてもって言うなら……」

「父ちゃん早めてくれ!!」

「ロメオ、どうどう。」

「ギルダーツでいいじゃねえか。」

「あんなどをほつつき歩いているかわからねー奴を、マスターに出来るか!!」

それぞれ、思惑を言っていくがどうにも反対意見が出てしまう。マカオも、ギルダーツもマスター経験があるとは言え苦い思い出があるツも、はつきり言ってしまうえば向いているとは言えないだろう。

「6代目が帰ってくるまでの暫定でしょ? 誰でもいいじゃない。」

「俺も同意見だ。」

「でも、今回は今までのギルドとは違う…… 6代目がいないこいつらを、誰がまとめられるのかって話しさ。」

カナが、少し視線を奥に飛ばす。そこでは、エルフマンとナツが殴りあっていた。

「ああ……そう言われてみれば確かに——」

ウエンデイが少しだけ呆れながら、頷きかけたその瞬間だった。喧嘩の影響で色んなものが飛び交っている中で、ウエンデイに向かって工具が飛んできたのだ。

「ふんっ!」

「ま、マルク?」

「危なっ!? 誰よ今工具ぶん投げたの!!」

無論、当たる前にマルクが叩き落として事なきを得た。それに対して、レビイは珍しく怒って向かおうとしていたが、それよりも先に飛び出す影があった。

「今投げたやつ出て来いやあ!! てめえの脳天かち割りながら反省させてやらア!!」

「ま、マルク!?!」

「……脳天をかち割られたら、反省も出来ないと思うのだが。」

「ほっときなさい、あれに無用なツツコミを入れると死ぬわよ。今ウエンデイに危害が及びかけたから、ブチ切れてるんだし。」

マルクがウエンデイを守りきるとわかっていたのか、シャルルは落ち着いた態度で、接していた。

「やけに落ち着いているな、ウエンデイの事になったら怒るのはお前も同じだろうに。」

「あら、無事だと分かりきってるのに怒るのもね。」

「ふ……確かにな。」

そう言つて、リリーとシャルルの2人は喧嘩しあっている者達を傍観していく。しかし、だんだんと喧嘩に入ってくる人数が多くなつていく。知らぬ間にグレイやカナ、ロキなども混じつて喧嘩を始めていく。

このままではせつかく作りかけであるギルドも再び壊されてしまふ……そう他人事のように喧嘩していかない者達が考えた瞬間、大きな足音が響く。

「――仕事しろ。」

「はい……」

エルザのその足音と一言で、場が静まり返つた。それだけ、今のエルザの足音とと声が彼らを威圧するレベルだったのだ。

そして、その様子を見てレビイは少し微笑んでから書類に最後の記入事項を埋めていく。

「クス……やっぱりこれしかないよね。7代目ギルドマスター『エルザ・スカーレット』」

それを聞いた一同は、簡単な声を上げる。だが逆にエルザは焦つて首を横に降り始める。

しかし、もう既に決まってしまうのを覆すことは、エルザであつても容易ではないだろう。

「ちよ、ちよつと待て……私がマスターだと？それは……」

「――お前しか適任者はいねーだろ。」

突如として、そんなナツ達に声をかける存在があつた。全員、そちらの方を向くがマルクを除いては変な反応を繰り返すばかりである。何せ、彼らからしてみれば、初めて会う人物なのだから。

「お前は……！」

「えーつと……あれ？」

「だれでしょうか……」

「いや……ウチのメンバーだ……けど、名前が思い出せない……？」

マルクは全員の様子を見ながら、少し困惑していた。少なくとも、天狼島を出た時には全員覚えていたはずだからだ。

しかし、ならば考えられる手段はひとつしかない。

「……また記憶をいじったのか。」

「お前には、魔法が通用しないからな……この時を待っていた。皆が再び集うこのときを。」

6代目マスターマカロフを助けられるのは、お前しかいない。」

「……どういふことだ説明しろ。」

「まあ待て、全員の記憶を元の状態に戻しながらお前には口頭で説明する。」

そう言つて、『彼』は少しだけ魔法を使う。その様子を、マルクはじつと眺めていた。

「まずひとつ……俺の名前だ。」

「ドランバルトじゃないのか？」

「いや……天狼島で使っていた名前、メスト・グライダーというのが本名だ。」

「ややこしいな……つまり、評議院にいた時の名前は偽名だったのか？」

「その辺も、語るよ。だがその前に……『7代目ギルドマスター』にはついてきてもらいたい場所がある。」

そう言つてドランバルト……否、メストはエルザに視線を向ける。

エルザは真面目な顔でメストの言うことを一旦聞いていた。

「なんでエルザだけなんだよ！」

「後で説明してやる。今は我慢しておいてくれ。」

そう言つてメストはエルザをどこかへと連れていく。勿論、彼のもう一つの魔法であるワープを使つて、だが。

「……クソっ！なんでエルザだけなんだ!!」

「わざわざ7代目ギルドマスターって言ったつてことは……つまりマスターじゃないと入れないところがあるつてことですよね。」

「そういうことになるな……」

「えーつと、……メストさん、は……どこに行つたんでしよう……」

「分からないわねえ……ねえマルク、魔力の痕跡とかで辿れない？」

ルーシイがマルクに質問するが、マルクは首を横に振る。ダイレク
トラインという魔法は、そういうものでは無いのだ。

「そうよね……」

「けど、案外近くにいると思いますよ。わざわざギルドマスターを指
定したんですから……案外この跡地になにかあるかもしれない。」

「うしっ！エルザ達の臭いがする所探すぞ!!」

ナツは意気込んで猛ダツシユで跡地を捜しまわる。いくらかして
から、謎の地下への入り口を発見した一同は、そのままその地下へと
足を運ぶことにしたのであった。

メスト

「まさかギルドの地下にこんなものが隠されていたなんて……」

地下に通じる階段を降りながら、ルーシイは呟く。ルーシイはここにいるウェンディやマルクよりも早く妖精の尻尾フェアリーテイルに入っているが、それは半年ほどだけであり知らないのも無理はないと言える。

「いや……ここいつア、俺達も知らない場所だ。」

「ああ……しかもこの匂い……なんというか、いろんな匂いがする。」

「いつからあるものなんでしょうか……」

「少なくとも、私達が天狼島に行くよりもっと前……下手をしたら皆が妖精の尻尾に入る前からあった可能性も……」

ルーシイが壁を触りながらそうつぶやく。あまりにも古すぎると言っているほど昔なのだ。

そして、ふと思い出したかのようにマルクが語り始める。

「そう言えば……天狼島から帰ってきてすぐに、ギルダーツさんと6代目がここに来たことありましたよね。」

「そういやそうだな……あん時は特に何も思わなかったが、ここに来ていたってこともありうるんだよね。」

マルクの呟いた言葉に同意するグレイ。そんなこんなで話し合っていると、階段の終わりが見えてくる。

「あんなところに扉があるな……」

「エルザ達も向こうにいるっぽいな……聞きみ見立ててみつか。」

ニヤニヤと笑いながら、ナツは扉に耳を当てる。それに続いてルーシイやグレイも扉に耳を当てる。

それを苦笑しながらマルク達が止めようとするが……それだけの重さに、扉が耐えられるわけもなく、扉は勢いよく開いてしまう。

「うわっ！」

「きゃあ!!」

「バカ押すな!!」

「どこ触ってんのよー!」

「うわわわわわ!」

そして、突然扉方向に体重をかけていたのでそのまま全員放り出されるように倒れてしまう。だが、扉の先には確かにエルザとメストがいた。

「お前達……」

「代々マスターにしか入ることが許されない……と説明するつもりだったんだがな。」

呆れていたメストだったが、マルクはとんでもなく鳥肌が立っていた。扉の先にあつた空間、いや正確には扉の先にあつたものに本能的な恐怖を抱いていた。

「ま、マルク？」

「……そうか、ほかの滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーに対してお前は魔力とかに関して感じ取りやすい体質だったな。」

そこにいた……いや、あつたのは初代であるメイビスの姿だった。しかし、その体は宝石のような何かに包まれており、幽霊の時のような服は一切纏っていないかったのだ。

「ずりーぞー！俺達にも教えろ!!」

「なんなんだこれは……」

「初代……ですよね……ごめんねマルク……見ないで……」

そう言いながら、マルクの目をウエンデイが塞ぐ。それで少し落ちて着いたのか、マルクは緊張の意図を少し弛めていた。

「素っ裸！」

「ハイ、あまりガン見しないの。」

「これって初代の肉体？生きてるの？」

「なんでギルドの地下に水晶に入った初代が……」

全員が困惑の声を上げる……それもそうである。ギルドの地下に、代々マスターしか入れないところ、それも直前まで知る事の無い場所があり、そこには水晶に入った初代マスターであるメイビスの体が、腐敗することなく綺麗な形で入っているのだから。

「……どういふことなんだメスト。」

「……俺にもこいつの正体はわかんねえ。だが、これがとてつもなく重要な何かであるのは間違いない。」

メストは真剣な顔で話しているが、しかしナツはそれはあまり重要視することではないのか、全く別の話題でメストに食ってかかろうとしていた。

「それよりじつちゃんはどこだ!!知ってんだろ!!」

「それよりって——」

その時、マルク以外のここにいる全員の頭の中に、何かを送り込まれる。その何か、というのは記憶である。

「なに、これ……頭の中に……」

「…映像?」

「俺の記憶だ。マルクには送れらいから、丁度いい……口頭で話させてもらう。」

そう言つて、メストは語り始める。その過去がマスターに繋がるのだから……

「今から十年前……天狼組にとつては3年前か。オレはマカロフからある任務を任された。」

「ある任務?」

「ああ、評議院に潜入して西の大陸に関する全ての情報を流して欲しい、っていう任務だった。」

詳しい理由はわからなかったが、俺はその任務を引き受けた。無論、自分が妖精の尻尾のメンバーだという記憶も一時的にして、潜入した。」

「おまつ……随分と念入りにするんだな。」

「評議院になりきらねばマズかったからな。マカロフに解いて貰えば記憶は引き継げる仕組みだったんで問題はなかったさ。」

「器用だなあ……」

念入りさに少し呆れながらも、マルクはメストの話を聞いていく。ほかのメンバーは、メストから渡された記憶と共に辿りながら話を聞いている。

「そして、定期的にマカロフは俺に会いに来てくれたが、記憶をなくしている時の弊害が起きてしまつてな。」

「弊害?」

「ああ、記憶をなくしている時の俺は自分の魔法を使って妖精の尻尾に潜入しようと考えた。」

そして、妖精の尻尾の悪事をばらまいてやる……と意気込んでいたのさ。評議院潜入と同じ……名前を変えて、な。」

「おい。」

「本当に済まなかった。」

記憶を消しているとはいえ、潜入している側が別の場所に潜入する、と言うことをしてしまっているのだ。徹底したやり方ではあったが、その事にナツもグレイも突っ込んでいた。

「……それで、だ。大魔闘演武の時に俺はマカロフと再開した。だが、俺はその時はまだ帰る気はなかった。」

「なんで？」

「もう少しでマカロフの求める情報が手に入る状況だったからだ。そして、情報を集めに集めて……冥府タルタロスの門との戦いが集結した時だ。」

その時、マカロフは解散を決意した。」

「……待てよ、何でそうなる？」

「そうよ、意味がわかんないわよ？」

グレイとルーシイがメストに物申すが、メストは『すぐに分かる』とだけ言っつてそのまま話を続けていく。記憶を渡されていても、自分から引き出すのは難しいようだ。

「マカロフはこう言った『家族を守るため』だと。」

「西の大陸……そこに何かあるのか？」

「ああ、その通りだ。西の大陸にある大国……アルバレス。それが、再び侵攻してこようとしていたんだ。」

「アルバレスって……？」

「確か……今からだと曆的に11年前にこつちに侵略してこようとしてきた国だったはず。」

けど、あの時は失敗してたような……」

ウエンデイの疑問に答えたルーシイだったが、彼女自身が言ったことにメストは首を横に振る。事は、そのように簡単ではないと言わんばかりに。

「失敗なんてしていない……あの時は『中止』になったんだ。評議院の力があつたからな。」

「あつ……エーテリオンとフェイス!!」

「そうだ、街一つ簡単に吹き飛ばせるエーテリオンに、魔法を完全に封殺するフェイス。」

そのふたつをチラつかせることで、侵攻を阻止していたんだ。」

「でも、なんで侵攻してこようとしていたんですか?」

「……こいつさ、ルーメンイストワール……これを手に入れるために向こうは侵攻しようとしてきていたのさ。」

メストが軽く視線を促して、ルーメンイストワールを指し示す。だが、マルクは気づいた。

冥府の門との戦いの後に……評議院ごとエーテリオンとフェイスは失われてしまっていることに。

「……冥府の門との戦いで評議院が、その戦いの後にフェイスが潰れてしまってる。」

「気づいたかマルク。そうさ、アルバレスに対しての抑止力をこの大陸は失っているんだ。」

つまり……あの時から侵攻作戦は再開されていた。」

「だが、実際にはいまだ攻め込まれていない……これはどういうことなんだメスト。」

「……」

「メスト?」

メストは少し黙つたが、口を開く。今黙っておくべきことは、一切何も無いのだから。

「……マカロフは、アルバレスに向かった。」

「……!!」

その時言葉に全員が驚いていた。つまり、行方不明だと認識されている時には既にマカロフは誰にも言わず敵地に乗り込んでいるのだ。「……ギルドの歴史よりも、体裁よりも……家族の命を守るために。もし侵攻してくれば、ルーメンイストワールを発動させるといふのをチラつかせるために、マカロフはアルバレスに交渉に向かったんだ。」

「……そこまでする必要があったってことなのか？ そんなにもアルバレスは強力なのか？」

「……この大陸には、約500のギルドがある。」

突然語り始めるメストに一同は疑問符を浮かべたが、そのままメストは話を続けていく。

「そして、アルバレスには正規も闇も含めた約730のギルドがある……いや、『ある』って言い方はおかしいか。」

「どういう事だ？」

「アルバレス……その実態は、730のギルドが全て統一されてできている国なんだ。」

正式名称は『超軍事魔法帝国アルバレス』

「なっ……」

「じゃ、じゃあじっちゃんはそのなんとか、って国に行つたきり帰ってきてねえのか!？」

「ギルドの解散も全ては私達の為に……」

全てを理解し、そしてその上で確認を取るナツ達。理解したからこそ、再確認を取らなければならぬのだ。余りにも、信じられないような話が多すぎた。

「1年間連絡が無いのか？」

「ああ……」

「メストは止めなかったの？」

「止めて『はい分かりました』っていう思う？ あのマスターが。」

「無事なのかしら……」

「心配ですね……」

「交渉を続けているのか……幽閉されているのか……あるいは……」

「その先は言うな。」

交渉を続けているのか、幽閉されているのか。前者ならばまだ希望はあり、後者ならば希望はあれど危ない状況だろう。

だが交渉を既に終えており、そしてそれが和解ではなく失敗に終わっていたのだとしたら……その先を考えられないほど、ナツ達は現実が見えてはいない訳では無いのだ。

「俺はマカロフの計画通り評議院を復活させるために動いた。

ウオーロツド様を頼り、聖十大魔道を中心とした新評議院を立ち上げた。」

「そう言えば評議会でもマスターの行方については問題になってるって。」

「ウオーロツド様は事情を知っているが、他の方はおそらく知らないはずだ。」

だが、アルバレス帝国の脅威については皆、共通認識だ。すぐに防衛戦を敷いたため、西の大陸への抑止力となりつつある。」

「じいさんの時間稼ぎは成功したってことか！ だったらもう帰って来れるじゃねえか!!」

「……本来ならば、な。」

グレイが熱くなるが、メストがそれを制すように言葉を発する。帰って来れる状況だからこそ、考えなければならぬ。

「この情報がマカロフの耳に届いていないのか、帰って来れない状況なのか。」

「だから助けに行く……だろ？」

「ああ、マスターに言われた通り評議院は復活させた。ここから俺は妖精の尻尾の魔導士として動く。」

「ギルドのメンバーが揃えば、どんな敵だって怖くないよ！」

「みんなで行きましょう!!」

「待て。」

熱くなっているところに、エルザが静止させる。それに対して、皆は驚いていた。

「そうですねよ、みんな落ち着いてください。」

「おい、マルク……」

「いいですか、いくら俺達が1年間で強くなっていたとしても……アルバレスは強敵だ、無策で突撃するわけには行かないですよ。」

「この1年間で強くなったんだ！ 俺どんな敵だろうが負けたりしねえ!!」

ナツは熱くなるが、それをマルクやエルザは制す。落ち着いて考え

てみる、と言いたげに。

「幾らナツさん達が強くなっていたとしても……無理です。俺達が『戦闘』を行ってしまえば、6代目が殺される可能性があります。」

「そうだ……それに、マスターが身を挺して作った時間、私達への思いを無駄にするつもりか。」

「うぐっ……」

「ギルドを立て直し、仕事を再開し……妖精の尻尾を復活させる。」

再び集まった皆がみんながいつも通りに笑っていてほしい。これが私の、7代目マスターとしての考えだ。」

「エルザさん……」

「おい、そりゃあ!!」

この言葉で、ナツ達は考えてしまった。『エルザはマカロフを助けに行かない方がいい』と言っているのではないかと、と。

「だが……1人のギルドメンバーとしての考えは違う。必ずマスターを救出しなければならぬ。」

だからここにいるメンバーのみで行動する。」

「戦闘ではなく潜入……少人数がいいですね。アルバレスに潜入して6代目を救出、そして脱出。」

「ああそうだ。これは戦いではない……潜入、救出作戦。無駄な戦いも騒ぎも一切起こさない。」

いいか、ナツ。」

念入りに押すように、エルザがナツを睨む。エルザもマルクも、マカロフを助けに行かない方がいいとは全く思っていない。

しかし、さすがに一ギルドで730のギルドを相手するのは難しいと考えたのだ。故に、潜入である。

「お、おう……必ずじっちゃんを助け出す!!」

気持ちを新たに考え直して、ナツ達はアルバレスへと乗り込む決意を固めたのであった。

アタラキシアへ

西の大陸、アタラキシア大陸へ向かう為に一行は誰にも伝えず出発した。まずは、距離があるために間の島を1つ経由して補給しながら進んでいく為に、今はカラコールという島に向かって進んでいくのだ。

しかし、大陸間の移動を…かつ最短距離を渡っていかねばならないので、当然その移動には船が伴う。

そして、残念なことに船は乗り物であるために揺れる。

「ふ、船で行くのかよ……うぶ……」

「何で行くと思ってたんだ。」

「ほら、メストの瞬間移動でピューつと……」

「そんな長距離は無理だ。」

ナツは、思いつきり酔っていた。滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーの性とも言うべきか、乗り物には滅法弱いのだ。

そして、同じ滅竜魔導士であるマルクとウエンデイも例外ではなかったらしく――

「ウエンデイ……酔い止めの魔法……」

「うう……」

「ウエンデイ……大丈夫かあ……!」

「ウエンデイ!マルク!」

ルーシイが、既にグロッキーになっているマルク達に近づいて何とか介抱しようとしていた。しかし、こればかりはどうしようもないのだ。

「すみません……なんか、私も…乗り物に弱くなったみたいで……うぶ……」

「大丈夫……?」

「こうなるとウエンデイにもトロイアは使えないわ。」

「魚食べる?」

「仕方ねえ、寝室に運んでやるか。」

倒れている3人を、グレイがなんとか担ぎあげて船に備わっている

寝室へと寝かせていく。

マルク達は、そのまま寝かされたままひたすらに酔い続けるという一種の地獄を味わっていた。

「これでOK。」

「服どこいったー!!」

「大声は、耳に響く……」

そんなことを呟きながら、マルクはなるべく酔いをマシにする為に何とか寝ようとする……が、船から降りるまで、寝ることは出来なかったのであった。

「アルバレス帝国の船だと!？」

「なんでこんな所に……」

「カラコールはアルバレスの領土じゃないはずよ?」

「港で何かの検閲をやっているようだ。」

「これじゃあ島に近付けねえぞ。」

ある程度時間が経った頃、一行はカラコール島の近くまで船を進めることが出来ていた。

しかし、そのカラコール島には何故かアルバレスの船が止まっており、迂闊に近づけない状況になっていた。

だが、寝室でもあまり落ち着けなかったナツ達が部屋から出てきて、酔いながら船のへりに体を持たれさせていた。

「スパイの仲間を探してる……みてーだ……」

「スパイさんも、捕まってはいいないようです……」

「どうやら……そのスパイってのがバレてしまったらしいですね……」

「え?」

ルーシイは、ナツ達が言ったことが一体何なのかは理解していたが、海から聞こえてくるのはカモメの鳴き声ばかりであり、人の声なんて言うものは大して聞こえていなかったのだ。

「あんた達港の声が聞こえるの?」

「微かにだけど……」

「どうする。」

「奴らに諜報員が捕まる前に接触せねばな……その為には、変装だ。」

一同は、船をカラコール島に付けて上陸していた。その際に、怪しまれないように色々と変装を凝らして、バレないように工夫をしていた。

諜報員がバレてしまった以上、恐らく妖精の尻尾フェアリーテイルというギルドは目をつけられているかもしれないからだ。ひとまず、水着を着て怪しまれないようにしていた。

「いいかナツ、大人しくしてるんだぞ。」

「分かってるよ……」

コソコソと、小声でナツに注意を入れるエルザ。島民観光客その他諸々……アルバレスの兵隊以外の人間は、港検閲のために1列に並ばされていたので、コソコソ話も楽でよかったのだ。

「次。」

兵隊が、次の人物を呼ぶ。次の番はナツ達である。男達は一步下がっており、その辺の誤魔化しは女性陣に任せているのだ。

「あたし達観光でこの島来ましたー!!」

「あい!!」

「この島のスターマンゴーが絶品と聞いてな。」

「楽しみだね『お姉ちゃん』」

ウエンデイが人間の姿に化けているシャルルに大してお姉ちゃんと呼ぶ。その事に男達は微妙な反応を返していた。

「お姉ちゃんって……」

「そんなキャラ設定いるか?」

「まあ、一応誤魔化すにはいいでしょ……ギルドマークすら偽装してるんだし、俺としては別にいるとは思いませんけど……」

小声で男達は疑問を語り合う。女性陣と兵士達はそれに気づかないまま話を進めていく。

「その紋章はギルドのものか。」

「魔導士ギルド化猫ケットシエルターの宿です。」

ギルドマークを、上から隠して化猫の宿のマークを貼り付けた一同。ウエンデイもマルクも、妙に懐かしい気持ちになっていた。

「聞いたこともねえギルドだな。」

「そもそもイシユガルのギルドなんぞ、数える程しか知らねえよ。」

「……まあ、大きいギルドではなかったけどさ。」

直でそういうことを言われると、さすがにショックだったのかウエンデイもマルクも、微妙にしよげていた。

しかし、化猫の宿は8年前に無くなったギルドである。故に知らない人物がいてもおかしくはない……と、考えておかないとどうしようもなかったのだ。

「どうする?魔導士は特に厳しくチェックしろと言われてるし……」

「いや、そもそもスパイの仲間がギルドの紋章付けてやってくるか?」
「確かに。」

兵隊達は話し合い始める。しかし、今一同には時間が無いのだ。故に、こんな所で兵隊達の話し合いなんて待つわけには行かないのだ。

「ねえ……早く通してくれる?」

「スターマンゴーが売り切れてしまうではないか。」

ルーシイ達は、胸を寄せて兵士達を誘惑する。微妙にウエンデイがこれでシヨックを受けているようにも見えたが、如何せん水着な為にマルクはウエンデイ達を直視できていなかった。

「わ、わかった!全員荷物を見せろ!!」

「……通つてよし!」

荷物を全員見せて、なんとか島の中へと入る事ができた一同。それに関して、ルーシイとエルザは妙に自慢げになっていた。

「流石だな」

「全く恐れ入るぜ……」

「人間のオスも大したことないわね。」

「シャルル、多分私達役に立ってないよ。」

何故か人間体になっているシャルルまでが自慢げになっているが、ウエンデイは最早シヨックを通り越して達観の域に達し始めていた。「いやいや、そんな事ないぞ?ウエンデイだって凄く可愛かったからきつと役に立つ……いや待てよ、そうならあの中にウエンデイが狙う奴がいるってことに……ちよつと殴り飛ばして……ぐえっ。」

「お前までナツのようになってどうする……街中に兵隊がうろついている、迂闊なことは出来ん。」

マルクの首根っこを直で掴んで、マルクを止めるエルザ。周りを見渡して、街中の兵隊の数を見ながらそう呟く。

「ナツ、大人しくしててよ。」

「なんで俺ばっかり……」

「お前が1番潜入の意味を理解していないからだ。」

「分かっているって、あれだろ!俺の好きな『忍者』みてーなもんだ。」
「げほ、げほ……忍者って昼間は一般人に紛れてるらしいんで今はあながち間違っていないみたいですけどね……ん?」

冷静になってから開放されたマルク。しかし、遠くから聞こえてきた声があり、それに視線を向けていた。

「お父さんを返して……」

「ム？」

「どこに連れてつたの〜！お父さ〜ん!!」

「親父に似てこのガキも反抗的だな。」

「どうやら、兵隊たちに父親を連れていかれた子供が、その兵隊達に父親を返すようお願いしている場面のようなのだ。」

「しかし、兵隊達はフルヘルムの兜で顔こそ見えないが、あまりいいように受け取ってはいなかった。」

「っ……………」

「我慢するんだナツ。」

「絶対に奴らに手を出しては行けない。」

「エルザとメストの静止により、ナツはまだ兵士たちに殴りかかろうとはしなかった。」

「だが、そんなこととは関係なく子供と兵士は段々と険悪になっていく。」

「うわあーん！お父さーん!!」

「黙らねえと殺すぞ!!」

「相手は子供だぞ!!」

「正気なの!?!」

兵士達は泣いている子供に武器を振り上げて、一切の遠慮なく殺しにかかる。しかし、その武器は子供振り下ろされる前に…………兵士達が吹き飛ばされていた。

「何事だーっ!!」

「まったく…………流石にここまで無視は出来ねえって。」

「やつちまった……………」

エルザ、ルーシィ、グレイ、ナツの4人が兵士達を吹き飛ばしたのだ。そして、ウエンデイが子供を守る体勢に入り、マルクがそのウエンデイと子供をまとめて守る体勢になっていた。

「忍法、吹っ飛ばしの術だ。」

「ナツさん、これ忍法じゃなくて魔法…………というかもはや体術ですよこれ。」

「そう突っ込みながらも、マルクは手に魔力を込める。兵士達を殴り

倒す準備である。

「もう島から出れねえぞ……!」

「そうね、全員倒すまでは。」

「こっちは任せてください。」

そう言いながら、ウエンデイは子供をこの場から一旦離れさせるために動いていく。

マルクはナツ達とアイコンタクトを取って、ウエンデイについて行く。

「メスト、お前もいけ。」

「しかし……っ!!」

メストは、子供を安全な場所まで避難させようとするウエンデイとシャルルに視線を移す。

何を思ったのか、少し赤面しながら2人をじっと見つめてる……所に、マルクが頭を掴む。

「おい、てめえ今ウエンデイ達見て変な考え起こしてる場合じゃねえだろうが……諜報員と合流しろって言ってるんだよ……!」

「そ、そうか……ここで騒ぎを起こしてるうちに……」

「いいアイデアだ。」

「忍法別行動!」

「みんな、気をつけろよ。」

マルクが一旦手を離れたので、そのままワープでメストは諜報員と接触するために動き始める。

そして、マルクもウエンデイ達について行くのであった。

「どうだ、ウエンデイ。」

「人の匂いで分かりづらいけど……この子の持ってたお父さんのものでどうにかなりそうかも。」

「そうか……っ!?!」

「マルク、どうしたの?」

ウエンデイ達は、子供のお父さんを探すために動いていた。ウエンデイの鼻の良さを利用して、なんとか探し出そうとしていた時だったが、その時マルクがナツ達の方向に視線を向ける。

「……ナツさん達がいた場所に、とんでもなくでかい魔力の感じがする。」

「……っ!わ、私は集中しないとわからなかったけど……確かに、大きい魔力が、2つ……」

「……お父さん、急いで探さないとな。」

「……マルク、多分私達大丈夫だから行ってきてもいいよ?」

ウエンデイが、真剣な顔でマルクに伝える。その言葉を聞いて、マルクは冷静に考える。

今こうやって、何事もなく子供の親を探している以上、恐らくナツ達の方に戦闘員達は集中しているのだろう。

という事は、確かに戦えるウエンデイとシャルルのふたりが残っても問題は起こりづらいだろう。

「……子供のお父さん探し、任せてもいいか?」

「うん!」

「私達がそう簡単にやられるわけないでしょ?もっと私達を信用しなさいよ。」

シャルルが片手でVサインを作って自慢げな顔をする。それに、つい笑ってしまうマルクだったが、しかしシャルルの言っていることも正論なのだ。

「なら、任せた。俺は……ナツさん達と合流してくる。」

「ナツさん達なら大丈夫だと思うけど……けど、マルクがいてくれるだけで安心だと思うよ。」

「そりやまた何で……」

「だって、マルクは魔力を食べるんだもん。これ以上ない強さだよ。」
「……ま、そりやあそうか。じゃ、行ってくる!!」

マルクはそう言っつて、足に魔力を貯めて一気に大ジャンプをする。
大きな魔力が2つ。この2つに、マルクは勝てるかどうか多少の不安を感じながらも、向かうのであった。

新たな2人

「皆さん大丈夫ですか!？」

マルクは大急ぎでナツ達の所にやってきた。そして、跳んできた際に見知らぬ2人を見つけた。先程感じる強力な魔力はその2人から感じるものだった。

「マルクー！」

「おや、もう一人増えたつすね……」

「知らない、関係ない………帰る。」

男女二人組のペアだったが、ちらりと視線を移すとメストが傷だらけで倒れていた。

どうやら、この2人のどちらかを見て間違いがなさそうだったが、ナツとグレイ……それにルーシィとエルザの4人を相手にしてよく生きていたものだ、とマルクは思っていた。

つまり、どちらにせよこの2人はナツ達よりも強いということになる。

「ブランディッシュ様、あつし等の任務はスパイの捕縛とその合流者を見つけることつす。手ぶらで帰国したんじやワール様辺りになんて言われるか……」

「放っておいてもイシユガルがアルバレスに手を出してくることはないでしょ。」

「そりやそうつすけど見つけれませんでした、じゃ格好がつかないつすよ?不合格ですよお。」

「私はそーゆーの興味ないから。」

そのままブランディッシュと呼ばれた女性と残った男性1人が帰ろうとする。しかし、ナツは逃がす気はサラサラないようで皆よりも1歩前が出る。

「待てよ、こっちは仲間1人やられてんだ。このまま黙ってるわけにはいかねーぞ。」

「ナツー！」

「よせナツー！」

ブランディッシュと呼ばれた女性は、振り返ってナツを見る。そして、何を思ったのか片手を男性の方に上げる。

「え?」

男性は、その一瞬の挙動で消える。まるで何もなくなったかのよう、初めから何もいなかったかのよう、一瞬で呆気なく消えた。「これでこつちも仲間を1人失ったわ。おあいこね。悪いけど私……めんどくさいの大嫌いなもの。」

「自分の仲間を……!」

「めんどくさいのは大嫌いだからね。スパイも合流してた奴も始末したってことにおいてあげる。」

だから西の大陸には近づかないでね。」

ナツ達はそれで一瞬驚愕した。自分達のやろうとしていることが、完全に敵側にバレてしまっているのだ。

「……マカロフは生きているわ。けど貴方達が余計なことをしたら……どうなっちゃうのかしら。」

これは忠告、私達に近づくな。特に——」

一瞬、たった一瞬。その一瞬でナツたちの足元にあった地面は消えて、ナツ達は海面に落ちる。

しかし、ブランディッシュだけが地面の上に立っていた。まるで、カラコール島をフィギュアサイズまで小さくしたような島の上に乗って。

「今さっき来た君は、特に来ない方がいい。私がたった今危険と判断した……けれど、君には魔法が通用しない。」

「なっ!」

マルクは自身に対して魔法が効かないということ、すぐさまバレていることが一番の驚きだった。

何故、そんなことがバレてしまっているのか。

「アルバレスにはこの程度の魔導士が12人いる。それら全員が、君の力を『危険なもの』として処理をする。」

けれど君もその12人に勝つことは無い。適わぬ戦はしない事ね

……つ妖精の尻尾。」

マルクに対して、妖精の尻尾に対しての宣言。こちらに手を出すな、出せばマカロフの命はないという宣言。

それだけを行い、ブランディツシユはすぐさま姿を消す。

「…ウエンデイ!!」

自分だけが、特別視されているのが少し恐怖に感じたマルク。それは、自分が殺されるかもしれない、という恐怖とはまた違った恐怖を感じているのだ。

ウエンデイ、シャルル…他にも妖精の尻尾の仲間達が、今回の件とは別件のところで巻き込まれる可能性が高いのだ。ブランディツシユという女の魔法ならば、一瞬でウエンデイ達は死に至るだろう。

もしそんなことになった場合、自分で自分を抑えられるのかどうか…仲間達が、自分のことで巻き込まれる恐怖、その際に誰かが死んでしまうかもしれない恐怖…それらが、マルクを不安にさせた。

「っ……………」

「……………うつぶ。」

ウエンデイ達を見つけたあと、マルクはナツやウエンデイ達とともに寝転がっていた。理由としては、島が無くなったので船に乗るしかなかったためである。要するに、滅竜魔導士ドラゴンスレイヤー特有の乗り物酔いのせいとも言える。

「め、メストさん…………だ、大丈夫ですか…………」

「あんたもね。」

「ごめんなさ……うぷつ……私、上手く回復の魔法が……」

「……そう言えば、あの子供の親は見つかったのか？」

グレイが、ふと気になったのでウエンデイ達が連れて行っていた子供のことを聞いた。ウエンデイはダウンしているので、代わりにハッピーが答えていた。

「あい、もう大丈夫。」

「ねえ、これからどうするの？」

待ち合わせ場所であるカラコール島は、姿を消した。待ち合わせするにしても、今のこんな状況では待ち合わせもへったくれもないので、どうしようか悩んでいた。

「そうだな……まずは例の諜報員を——」

そして、1度船に乗っているかの確認を取ろう……という話をしようとしたエルザが、一瞬で姿を消した。

「っ!？」

「なっ……」

「なにこれ!？」

「うわっ!？」

そして、ルーシイやナツ、グレイ……全員が船から姿を消した。ただ1人、マルクを除いて。

「うぷつ……え、ちよ……みんなどこに……」

「ま、マルク……」

「……ま、マホーグ……?？」

酔っている上に困惑しているマルクの目の前に、何故か水着を着ているマホーグがいた。

そう言えば、いつからか姿を見なくなっていたがどこに行っていたのか……という疑問を抑えながら、マルクからマホーグを見つめる。

「ちよ、ちよつと……落とす、よ。」

「……へっ!？」

マホーグは、マルクの体を持ち上げてそのまま一緒に身投げするかのよう^に海へと飛び込む。あまりの事態に、酔っているマルクでは対

処が難しいものだった。

「ふはあっ!?お、おい!なんでこんなこと……!」

「ま、魔力……抑えて?酔ってた、から……マルクの魔力、安定してなくて……め、メストの魔法が……効かなかつ、た。」

「……みんな消えたのメストの魔法か。そうか、1回お前のショートワープは受けてたことあったな。」

あん時、悪魔の力を無理やり押さえつけてたからワープ自体は受けれてたんだな。」

「ま、マルクの力は……押さえつけてれば、あ、ある程度魔法の効果を受けれるように、なるから……」

「うしっ、なら魔力抑えるから……頼むわ。」

「う、うん……」

マルクは、一旦自身の魔力を極限まで押さえ込んだ。一時期は、ウエンデイの回復も、ウォーレンの念話も効かないと嘆いていたこともあった。どうやらそれは、あの時は自分の力を予想以上にコントロール出来ていなかった、ということらしい。

そして、悪魔の力が暴走していた時は、無意識にそのコントロールに成功していたため、魔法の影響を受けることができるようになっていた、ということらしい。

「じゃ、じゃあ行くよ……」

「……おお!?これ乗り物じゃないのか!?というかどこだ!?!」

「こ、ここは……カラコール島近海の……か、海中。」

「……諜報員とは接触できていたんだ。この座標へ飛べという指示だった。」

メストが、代わりに説明を続けた。マルクは辺りを見回して全員いることをちゃんと確認する。

が、直後に海中神殿が揺れ始める。

「今度はなんだ!?!」

「メスト!」

「わ、わからん……」

「ちよつとこれ……動いてない?」

内部にいる一同は分からないが、なんと海中神殿は変形し始めていたのだ。

外観である神殿っぽいものは軒並みパージされ、1番上には何故か大砲が着いている。

そして、側面から何故か羽が一对生えて、底部からは細く小さな足が現れて、まるで生き物であるかのように走り始める。

「「乗り物オ……!!?」」

そして、動き出したのとはほぼ同時に滅竜魔導士組は一瞬でグロツキーになる。体が、乗り物と判断したらしい。

「ようこそ……移動神殿オリンピアへ。」

「誰かいたー!?!」

突如、壁だと思われていた場所がひっくり返るように動き、中から1人の人物が現れる。

「艦長のソラノだゾ。」

なんと、中から現れたのは元六魔將軍オランオンセイマスが1人、エンジェルであった。 「な、なんでお前が……だ、脱獄してたんじゃあ……」

「ヒントはジェラルだゾ。因みに、エルザやその氷男は大体のことは知っていると思うゾ。」

「諜報員つてまさか……」

「正解だゾ。」

少し声を高くして、可愛い仕草をとるエンジェル……否、ソラノ。その彼女の登場に、一同は困惑しかしていなかった。

「アンタが敵にバレて…」

「島まで逃げてきたせいで…」

「島が消えた…」

「私だって命からがら逃げてきたのよ！ま……メストには仮があるからね。」

「今回だけは手を貸すけど、仲間になったわけじゃないゾ。」

「ありがとうエンジェル……ソ、ソラノ？」

ルーシイが礼を言うが、エンジェルは彼女を見たまま少し間を置いて、その後でルーシイに近づく。

そして、今彼女が着ているビキニの胸の谷間に位置する紐を指で引っ張って持ち上げながら、笑顔で話しかける。

「カレンを殺したのは、私。忘れちゃダメだゾ。」

「っ……」

「よせソラノ。」

「はいはい。」

エルザがソラノを制して、おちゃらけた様子でソラノはルーシイから離れる。

何を考えているか分からない本心は、彼女にしか分からないことだろう。

「こ、これ……どこに向かっているんですか……？」

「地獄か……？」

「今とあんまり変わらないですね……」

グロツキーになつている滅竜魔導士3人組が、ソラノに行き先を尋ねる。動いている、という事は今どこかに向かっているということである。

ただ逃げているだけ、というのも考えられるべき話ではあるが。

「……や、やるの……？」

「当たり前だゾ。」

「つ、次の行き先はー……ま、マカロフ・ドレアーの現在地、マカロフ・ドレアーの現在地……！」

ひっそりと立っていたマホーグが、ソラノに少し脅されるような感

じで、まるで電車のアナウンスのような喋り方で次の行き先を伝える。しかし、その必死さもまるで無視されて彼女が言ったことに皆が驚いていたのだ。

「まさか……突き止めたのか？マスターの居場所を……」

「ふふん、見直した？」

「よくわかったな……」

「これでも命からがら逃げてきたかいはあった、という事だゾ。」

自信満々に、ソラノは椅子に座り直してふんぞりかえる。しかし、その功績は1人のもので無い。

「……わ、私も……頑張ったんだよ……」

「メストとは細かいところは違うとはいえ、やっぱりジャンパーは便利だゾ。」

「ち、因みに……いつから俺と別れて、たんだ……？」

オロチの1件の時には、まだ居たのは覚えている。しかし、それ以降が全くわからない。

「マルクをストーカーしていたのを、俺が見つけてスカウトしたのさ。俺とは飛べる距離が違うが、膨大な魔力とその魔眼のおかげでかなり助けられた。」

「え、えへへ……」

「戦闘もできて、未来視やワープもできる……攻防兼ね備えているな。」

褒められたのが嬉しいのか、頬を赤く染めるマホーグ。それを褒めながらも、エルザは覚悟を決める。

「よし……なら素早くマスターを確保して帰るとしよう。島の潜入前にも言ったが、できる限りの戦闘を行わないでいこう。」

その言葉に全員が頷き、今まさにアルバレスへと一同は侵入していくのであった。

アルバレス皇帝とその配下

ナツ達は、妖精の尻尾^{フェアリーテイル}6代目マスターであるマカロフ・ドレアーが、730ほどのギルドがひとつになって生まれた国アルバレス帝国へと自ら赴いていたことを知る。

そして同時に、アルバレスが手に入れようとしているものも知った。それがルーメン・イストワール。初代妖精の尻尾マスター、メイビスの体が入っている水晶であるその物体は、どのような存在下まででは分からないが、少なくともでもない兵器だということだけは分かっていた。

アルバレスがそれを求めて、侵攻を開始していたのだが、評議院という存在がいたために向こうはその侵攻を中断していた。だが、冥府^{タルタロス}の門との戦いにより評議院、並びに評議院の兵器の一つであるエーテリオンとフェイスの全てが失われた。

故に、マカロフが交渉に行くことでその間に立て直しができればいいという話なのである。そして、現に立て直しは完了したのだ。

だが、マカロフは戻ってきていなかった。おそらく、戻れない事態になっているのだろう。

それを知ったナツ達は、アルバレスに向かってマカロフを取り戻すために密かにアルバレスへと侵入していくのであった。

「……あれがアルバレスの城ですか。」

「そうみたいだな……」

「大きい……威圧感がすごいわね……」

望遠鏡で、アルバレスの城を覗くルーシイ達。今は城から離れた位置にある森の中でひっそりと身を潜めていた。

「さて……ここからは俺だけで行こう。他がいたら危険性が高くなる。」

メストが、そう言葉を放った直後に消える。有無を言わせないその行動に、ナツが少しだけ憤っていた。

「なんでだよ、俺も連れていけつての。」

「でもメストの言うことも一理あるわよ、だって私たちが入ってたら

目立つし……それに、メストの魔力の消費もできる限り抑えておいた方がいいでしょ?」

「うぐっ……そうだけだよ……」

「あんなバカでかい城です、メストのジャンプもちよつとかかるでしょうし、できる限り目立たないし魔力の消費もできるに限りです。」
各々が喋り、メストの帰還を待つ。1分でも経てば、それはとても異常なことだろうと各々が理解しているため、ほんの数秒待てばいいのだが。

そして、ほんの少しだけ待っていると、メストが戻ってくる。マカロフを連れて。

「jeeさん!」

「マスター!」

「じっちゃん!」

「マスター!」

「わぁ!」

「良かった無事で!!」

「お、お前達……」

メストが、マカロフを連れて戻ってくる。それに嬉しそうに反応するナツ達と、驚いているマカロフ。

だが、メストがそれどころではないと言わんばかりに、驚きと焦りに満ちた顔をしていた。

「……どうしたんだメスト、マスターを連れてきただけにしてはやけにビビってるみたいな顔してるけど……」

「ビビる!そりゃあビビる!!ゼレフ!!ゼレフがいた……!」

肩で息をしながら、状況説明をし始めるメスト。どうやら、マカロフを連れてくる時にゼレフの顔を見たらしい。

「ゼレフがいるのか!?!」

「この大陸に……!?!」

「ワシも知らなかった……!皇帝スプリガンを名乗る男こそ、ゼレフ本人じゃ!!」

マカロフの言葉に、驚きを隠せない一同。しかし、それ以上に今は

マカロフと再び会えたことが嬉しかったのか、すぐにほんわかムードになる。

「お前達がここにいるということは、事のいきさつはメストから聞いてる、という事か。」

「はい。」

「兎に角無事で良かったです。」

嬉しそうな雰囲気になる中、マカロフだけが拳を握って悔しそうな表情をしていた。それは恐らく、例の交渉の件についてなのだろう。

「…ワシの考えが浅はかだった。奴らは初めから、交渉に応じる気などなかったんじゃ。」

ギルドの歴史を汚してまで、西方入りしたと言うに……全てが無意味、こんなに悔しいことは無い……！

「無意味なもんか、この1年があったからみんな成長した。」

「あたし達はまた集まる事が出来たんだよ。」

グレイとルーシイが、マカロフを慰めるかのように言葉をかける。それだけではない、エルザも、メストもウエンデイもマルクも……全員が、マカロフに何かしら慰みをかける。

「人を想って起こした行動は、必ず意味のあるものと信じています。それが、あなたの教えだから。」

「帰ろう、じつちゃん。妖精の尻尾へ。」

泣いて、俯いていたマカロフにナツが手を差し伸べる。それに、マカロフは涙を流す。

「つもる話もあるけれど、まずはこの場を離れましょう。」

「そうだね。」

「連続で瞬間移動ダイレクトラインを使いすぎた。今の魔力じゃみんなを連れて移動できるのは一回。」

「俺がモード悪魔龍を使って、メストの魔法をコピーしてもいいけど、あくまで魔法のコピーだから使い方わかんねえんだよな……攻撃魔法とかならわかりやすいのに。」

「お前の魔力はなるべく、戦いに温存しておいてくれ……ともかく、その1回はソラノの……船？までの1回に使いてえ。」

瞬間移動で船まで行ける地点まで戻らねば……」

「――折角仲良くなれたのに、帰っちゃまうのかマカロフ。」

一同が相談している中、その外部から話しかけてくる人物が1人現れる。マカロフを助けたので、追っ手が来るのはわかっていたが余りにも来るのが早すぎるのだ。

「土産は持ったかい？土の中へは意外とすぐについちまう。」

「アジール！」

「馬鹿な!!どうやってここに……」

「砂！砂はいい……全てを語ってくれ。」

そうやって、現れた男……アジールは手から砂を零す。それだけで、砂を使う魔導士だと言うのはわかったが、問題はその魔力量である。

一同は、アジールから感じる魔力がカラコール島にいた女魔導士、ブランディッシュと同等の魔力だと察したのだ。

その為に、全員が戦闘態勢に入る。

「いいねえ……」

「よせ！戦ってはいかん！勝てる相手ではない！逃げるんじや!!」

「っ！けど……」

「マスターが言うんだ、引くぞ!!」

そう言つて、全員が一斉に引き始める。エルザとマルクが、目くらましとばかりに攻撃を行いながら逃げていく。

「こっちに魔導四輪を用意してあるわ!!」

シャルルの案内の元で、一同は逃げていく。当然、さっきの攻撃でアジールが倒せた、などとは微塵も思っではいなかった。

「今のうちだ！乗り込め!!」

「車……」

「私が運転する!!SEプラグ接続！行くぞ!!」

そして、エルザは自身の魔力を最大限注入して魔導四輪をフルスロットルで動かしていく。

そうしてしばらく逃げ続けたあと。

「……来るぞ……」

「あ？」

「何あれ!？」

「砂!?砂の怪物!？」

魔導四輪で逃げている一同を覆うかのような恐ろしく巨大な物体が現れる。

まるで人型のように作られているそれは、砂の怪物と呼ぶにふさわしい姿を確かにしていた。

「おのれ……!」

エルザは運転しながら、砂の怪物の攻撃を避けていく。大ききゆえに動きがのろいのと、攻撃方法が殴るのみなのでギリギリで避け続けることが出来ていた。

「ルーシィー!迎撃するぞ!!」

「うん!」

「おぶ……」

「すまねえな、ちよつと苦しいぞ。」

魔導四輪で酔ったマルクの上を通るように、窓から身を乗り出して魔導四輪の天井に乗るグレイとルーシィ。

「よせ!適う相手じゃない!!」

「やってみなきや……わかんねえだろ!!」

グレイの体のほぼ半分が、黒く染まる。それは、彼が覚えた氷の滅悪魔法の力の一端であり、それを解放するのは本気を出す、ということである。

「うぐつ……グ、グレイさん……頑張つ……おぐう……」

「ちよつとあんたにまで影響あるの……?」

グレイが滅悪魔法の力を解放したせい、車内でマルクが身を丸めながら横たわり始めていた。

多少の冷気は確かにあるものの、その魔力の質がどうやら冷気と混ざりあって軽くマルクにダメージを与えていつているようだった。

「スタードレス星霊衣サジタリウスフォーム。」

そして、ルーシィの姿も変貌する。先程まで水着の姿だったのが、まるで星霊の着るような服をまとって、その手には大きな弓と矢が携

わっていた。

それは、ルーシイと星霊達の絆を表した姿であり、この力を解放している時のルーシイは、纏った衣服の元となった星霊の力を使用することが出来る。更に、併用して星霊召喚も行えるため、同じ力を持った星霊とともに戦うことも出来る。

「アイスメイク——！」

「へええ、やるつもりかア？」

「——銀世界。」

グレイの魔法により、辺り一面が氷漬けになる。そして、砂の怪物もまとめて氷漬けにされていた。それはまるで、凍らされた太陽の村を彷彿とさせるものだった。

「辺りが一瞬で氷漬けに！」

「凄い!!」

「やるう……い！」

氷漬けになる前に、アジールは砂の怪物から飛び下りて空中に砂をばらまいていく。ばらまかれた砂は、今度は羽の生えた怪物のような姿になり、魔導四輪に襲いかかろうとしてくる。

「砂が怪物になった!!」

「任せて!!スターショット!!」

矢を構えて、ルーシイは次々に怪物を撃ち落としていく。かなりの数があるので狙えないものもいたが、そういうものはグレイが氷漬けにしていったサポートしていく。

「いいねえ、いいねえ!!」

楽しそうにしていたアジールだったが、その姿が突然消える。突然の事で、ルーシイ達は驚いてしまう。

「消えた!?!」

「下じゃ! 奴は砂と同化する!!」

「——蟻地獄ウ!!」

マカロフのその言葉と共に、魔導四輪の下が流砂となる。一瞬のことだったのと、その大きさにより魔導四輪では回避できなかったのだ。

「しまったア!!」

「くぷっ!」

「くそっ!!」

「アーハッハッハッ! いいねえ! 無様な姿が実にいいねえ!」
「車から出るんだ!!」

この状態では既に魔導四輪は使いものにならないので、一同は魔導四輪から一斉に脱出をし始める。

「くそ……魔導四輪が……!」

「砂が!」

「まわりついて……!」

「動けない!!」

全員の体に砂がまわりつき、下へ下へと飲み込んでいく。文字通りの蟻地獄である。

「何人殺してきたかなあ、いくつの街を飲み込んで来たかなあ……この蟻地獄は終わりの扉、逃れられた者はいねえ。

いいかア! 死ぬ前に一つだけ覚えておけえ!! お前ら程度の魔導士は掃いて捨てるほど始末してきた! 格が違うんだよ虫けらもお!!」
アジールは、高笑いしながら一同に上から目線でものを言い始める。しかし、その傲慢さは実力とこれまでの経験から成り立っているものだろう。

「イシュガルの血は神に見捨てられた! これよりアルバレスによって支配されるだろう!! 悔しいだろお!?! いいねえいいねえ! その顔オオオオオ!!」

瞬間、蟻地獄から灼熱の炎が吹き出す。表面の砂は吹き飛び、そして吹き飛ばなかった砂は全て白くなり蒸発していく。

一同のギルドマークが、書き変わっていく。猫のような絵だったのが、段々と変わっていく……妖精へと変貌していく。

「——神に見捨てられた? 上等……まだ、妖精の尻尾がいるからよオ。」

「砂を蒸発……さ、びっ!!」

言葉が続けようとしたアジールだったが、ナツに殴られて吹き飛

ばされていく。ここからが、妖精の尻尾のターンである。

帰還

ナツの炎により、自慢の流砂の魔法の砂を蒸発させられ、そのまま殴り飛ばされるアジール。

砂が蒸発した影響で、全員が流砂から脱出して戦闘態勢を取っていた。

「ははっ…こんないいパンチをもらったのは何年ぶりかな…いいぞ、もつと来い!!」

アジールは、再び辺り一面を砂に変えてナツ達を飲み込もうとする。その前に、すかさずグレイとマルクが飛び出す。

「凍り付け!」

「ふん…乾け。」

「何っ!？」

グレイは、アジールの動かしていた砂を凍らせて、動けないようにさせた。

だが、アジールはその氷を乾かして氷の中の水分を完全に消し去った。ならば、とマルクがさらに前に出てアジールの動かしている砂に自身の魔力をぶつける。

「魔力そのものを吸われちゃあ操作はできないだろ!!」

「——甘えよ。」

「ぐっ……下からっ!？」

砂は、そのままマルクの魔力によって魔力を吸われて地面に落ちるが、ほぼ同時にマルク達の足元から砂が現れて、一同の体に食らいくようにまとわりついていく。

「この砂……まずいぞ!!」

「おのれえい!!」

すかさず、マカロフが自身の腕を巨大化させてアジールへと攻撃を仕掛ける。アジールはすかさず避けるが、その一瞬の間にマカロフは全員を巨大化した腕で包み込んで、全員を守るように体で覆い隠す。

「ワシのガキどもは絶対にやらせんぞ!!」

「じつちゃんよせ!!俺達は戦える!!」

「ナツ、叫ばないで……」

「…へえ、それで全員守れるとでも?」

アジールは、笑みを浮かべる。マカロフの家族を守る気持ちに、笑みを浮かべたのだ。無論、その程度で守りきれないわけが無いという嘲笑の笑みなのだが。

「分かってねえなあ?スプリガン12トゥエルフの力を。」

その言葉の後から、遠くの方で地鳴りが聞こえ始める。マカロフは何事かと、その地鳴りのする方向に視線を向ける。

「のまれろ!!死の砂に!!」

それは、砂の高波だった。アジールの倍よりもでかくなっているはずのマカロフよりも、何十倍もの大きさを持つ巨大な砂の波であった。

「なっ……!?!」

「メスト!瞬間移動だ!」

「どこにだよ!!」

「何があっても……お前達だけは守る!!」

「じつちゃん!!」

迫る砂の波に、マカロフは覚悟を決める。自分が犠牲になってもナツ達を守ろうとする覚悟を。

「——必ず!!」

「終わりだ、この砂嵐は触れたもの全ての水分を消滅させる。」

「だからさつき、グレイさんの氷が効かなかったのか!!」

「妖精のミイラ誕生だな!!」

「オオオオオオ!!」

砂に飲まれいくマカロフ。もうだめかと思われたその時……晴天から雷が一つ、轟いて落ちてきた。

「雷……!?!」

「ラクサス!!」

上を見上げると、そこには天に浮かぶ船に乗ったラクサスの姿があった。マカロフの手から出てきて状況を確認した一同は、その派手

さに驚いていた。

「老けたな、ジジイ。」

「一旦引くぞー！」

「船に乗って!!」

「ここは敵地だしな。」

ラクサスの後から、ガジル、レビイ、リリーの声が聞こえてくる。その船は、一同も何度か見た事があつた青い天馬ブルーベガサスの所有する船、クリステイーナだった。

「クリステイーナ!? え、なんで天馬の船に!?!」

「つーかアレ船だろー! なんてガジルもラクサスも平気なんだ!!」

「グレイ様くジュビアもいますく」

「お、俺にも喋らせる!!」

「エルフ兄ちゃん、やめなよ。」

「これは滅竜魔導士用にカスタムされた船なのよ。」

「……」

あまりの騒がしさに、少し呆れるマカロフ。だが、状況は一刻を争っている状況であり、あまり悠長にしては行られない。

「メスト! いるんだろ!! 瞬間移動だ、この船に!!」

「了解!!」

メストの瞬間移動により、一同は船に乗せられる……だが、アジールはそう簡単に逃がすつもりは無い。

「逃がすかア!!」

「……逃げる? 家に帰るだけさ……夕食に遅れちゃう。」

ラクサスは、軽く手を振り下ろす。すると、飛んできた砂ごと辺り一面を巻き込み……巨大な雷の大爆発が起きる。

「……なんだ、お前先に来てたか。」

「メストが優先的に飛ばしてくれましたよ……他のみんなは部屋にいます。」

ラクサスの横に、マルクが突然現れる。メストがマルク1人をここに飛ばしたのだ。

マルクは魔力の感受能力が高いので、万が一追っ手が来た時はその

魔力を察知することが出来るからだ。

「……あれで仕留められてねえつてのは、俺がいちばんよくわかってるよ。」

「……気づきました？」

「ああ、なんかに防がれた。」

「……ラクサスさんの雷を一瞬で防ぐ程の魔道士……直前まで魔力は抑えてましたけど、出てきました。」

あれが侵攻して来るとなると……」

「……今は、家に帰ることだけ考えとけ。」

「……はい。」

それだけを話し合って、マルク達は一旦ナツ達がいる場所へと向かうのであった。

「マスターも 그레이様もよくご無事で!!」

「何でお前らがここに!!」

マルクとラクサスの2人が部屋に入ると、そこでは全員がちやんと部屋にいることが確認できた。

先にアルバレスに突入していたメンバーを除いて今いるのは、ラクサス、エバーグリーン、ビックスロー、フリード、エルフマン、レヴィイ、カナ、リサーナ、ミラージェーン、リリー、ガジルの11人と何故かいる一夜であった。

「マスターを助けるためにこっちも手を打っていたの。」

「その一つがラクサスよ。」

「抜けがけしやがって。」

「隠密作戦だったんだ。」

ガジルがエルザに詰寄る。恐らく、地下で話し合っていたことがどういう訳か漏れたのだろう。恐らくは、滅竜魔導士と聴覚を利用したガジルが盗み聞きしたのだろうが。

「すげえなこの船！全然酔わねえ!!っーか勝負しようぜラクサス！」
「うぜえ。」

「マルクだけどうして離れてたの？」

「魔力感知能力に長けているからな。だったら、ってことで追っ手が来るか来ないかって判断をするために、別でワープさせてもらった。」
「皆……。」

マカロフが周りを見渡して、涙を流し始める。それは、久しぶりに会った時に流したような悔し涙ではなく、笑顔で流す嬉しさの涙であつた。

「最高の家族じゃ……妖精の尻尾！」
フエアリーテイル

「私は余所者だがね。」

「今は黙っててくださいよ、すいませんけど。」

「辛辣だ……!」

マルクが、微妙に拗ねている一夜を宥めようとするが、微妙に変な拗ね方をしている一夜には逆効果だったようだ。

「いや別に辛辣とかじゃあ……といふかなんているんですか？それに、この船もそうですけど……。」

「いいことを聞いてくれた。説明しよう。」

そう言つて、帰りながら一夜はマルクに説明をしてくれた。まず、雷神衆とラクサスはギルドを再建し始めたばかりの時には、姿を見せていなかった。

しかし、評議院だった頃の情報網を利用してガジルはその4人が青い天馬にいたことを突き止める。

そうして、迎えに行った時に素早く行けるといふことで一夜と青い天馬のマスターであるボブに快くクリステイナを貸してもらつたのだ。しかも、わざわざ滅竜魔導士用にカスタマイズされた特注品

を、だ。

しかし、話を聞いた一夜は放っておくことが出来ずに、このまま着いてきたというこらしい。

「そういう事だったんですか……ありがとうございます。」

「いや何、話を聞いた手前君達を放っておくことは出来ないだろう。無論、エルザさんの無事というのは私にとってはかなり重要度が高いのは事実だが、君達の無事も私の中では同じように重要度が高いと言っただけの話さ。」

「そういう、ナチュラルでかつこいいこと言いますよね。」

文章の後ろに『顔以外はほんとにかっこいいですよ』と付け加えたマルクだったが、どうにか喉元まで抑えることが出来た。

「さあ、まずは戻ろうじゃないか妖精の尻尾に。」

「はい！」

「妖精の尻尾正式に復活を祝して……かんぱーい!!」

「かんぱーい!!」

妖精の尻尾にて、ギルドの完全復活兼マスターであるマカロフが帰還したことによるパーティが妖精の尻尾で行われていた。

「おかえりマスター！」

「あれ？今のマスターはエルザだから……えーつと……」

「マカロフさん！」

「なんかしまらねえな……」

このように他愛もない話をしながら、パーティも時間も進んでいく。しかし、全員がイキイキとしていたかつ楽しそうにしていた。当然である、ギルドもギルドの建物もメンバーもマスターであるマカロフも……全てが完全に揃ったことで、正式に復活したのがみんな嬉しいのだ。

「マスターで良い、私は辞退する。」

「じゃあ改めてマスターおかえり〜」

「8代目ってことになるのか？」

「マスターやるの三回目ってこと!?!何回生き返ってるの!?!」

「死んでないし……」

「5代目と7代目がすぐに辞めてますからねえ……」

マルクが苦笑いしながら、そう呟く。1番短いのは、恐らくギルダーツだろう。明確に全員にマスターだと宣言した時をマスター就任と言うならば、文字通り秒速でやめてしまってるのだから。

「こうなったら死ぬまでやってやるわい。」

「それぞ男!」

「それ、前にも聞きましたよ。」

「あははは!」

ストラウス兄弟姉妹きょうだいが、マスターの言葉を茶化す。だが、彼女たちも嬉しいのだ。

「……なんだ、お前も乗り物ダメになっちまったのか？」

「はい……」

「……実は、はいその通りで……」

ガジルが、ウエンディに向かって同情的な視線を送る。同じ滅竜魔導師として、乗り物がダメになってしまった時の気持ちは理解できるのだろう。

「俺はウエンディよりも前から、乗り物はダメになってましたね。いつからダメになってたかなあ……」

「それ考えると酔い始める、なんてことがあると嫌だな……」

「まー、気にすんな!俺は昔からだ!」

「それ、慰めてるつもりなのか？」

ナツがウエンデイに言葉をかけるが、リーダーはその言葉に驚く。自分のことを話されても慰めになる人はそうはいないだろう。

「もう馬車に乗れない。」

「そんなに残念？」

「どうか生き物が平気なら、無理言つて馬に乗せてもらつたらダメなのかな。」

「あんだ、それ試したことあるの？」

「無理だつて言われた……」

「もう失敗してゐるじゃない……」

マルクは肩を落としてゐるが、シャルルは呆れ顔である。ウエンデイも落ち込みながら、同じように肩を落としていた。

「……やっぱり似たもの同士ね、あんだ達。」

「へ？」

「お似合いつて言つてるのよ、その行動のシンクロ具合とか。」

「……どうううえくい——」

「言わせないからなハッピー!?!」

シャルルが、2人を元気づけるために敢えて別の話題を振つて元気を取り戻させる。ただ、ウエンデイとマルクが赤面しながら顔を背け合う所まで一緒になって、真面目に似たもの同士だということに拍車がかかつてゐる事を考えていた。

西の大陸、アルバレス帝国、スプリガン12……色々な事がおきすぎて、気が滅入つてしまう所だったが、このマカロフ帰還兼妖精の尻尾完全復活パーティーで、ある程度皆活気を取り戻していた。

妖精と妖精

ギルドの完全復活と、マスターであるマカロフの帰還のパーティーが騒がしくしている妖精の尻尾。フェアリーテイル

皆がどんちゃん騒ぎしている所に、マカロフが杖を地面に叩きつけることで大きな音を鳴らす。

皆、その音に意識を向けて一瞬で静かになる。

「皆…済まなかった。言い訳はせん、皆の帰る家をなくしてしまったのはワシじゃ。本当に済まない。」

「メストから聞いたぜー」

「俺らを守るための判断だったんだろ？」

「気にしてねーよ。」

「辛気臭い顔すんなヨ。酒が不味くなる。」

謝るマカロフに対して、皆が慰めの言葉を入れる。そのことを受けながら、マカロフは持っている杖を地図に向けて説明をし始める。

「更にワシの策さえ無意味じゃった。アルバレスは攻めてくる。巨大な大国が、このギルドに向かい進軍してくるのじゃ。」

「それがどうしたア!!」

深刻そうな顔をするマカロフに向かって、ナツは大声を張り上げる。心配する必要性も、深刻そうな顔をすることもないと言わんばかりに。

「俺たちは今まで何度も何度もギルドの為に戦ってきた。敵がどれだけ強かろうが、大切なものを守りたいって意思が俺たちを強くしてきたんだ。」

マカロフに近づき、地図を置いたテーブル一枚挟んでナツはそのテーブルに手をたたきつける。

「恐怖が無いわけじゃねえ。どうやって下ろしていいかわからねえ重荷見てーだよ。」

けど、みんなかきつと手伝ってくれる。」

手から炎を出して、ナツはアルバレスを模した地図の上に置いてある駒に火をつける。それは覚悟、それは勇気。

アルバレスが来たところで、仲間がいれば恐怖は薄れて戦う勇氣となる。

「本当の恐怖はこの…楽しい日の続きがなくなる事だ。もう一度みんなと笑って過ごせる日のために、俺たちは戦わなきゃならない。」

勝つ為じゃねえ!!生きるために立ち上がる!それが俺達の戦いだ!!」

全員が、ナツの言葉に押し上げられる。恐怖は、勇氣になる。明日を失うことの恐怖を、アルバレスと戦う勇氣に帰る。

「全員覚悟は出来てるみてーだぜ。」

「——ワシもじゃ。我が家族に噛み付いたことを後悔させてやるぞ!!返り討ちにしてやるわい!!」

杖を大きく掲げて、マカロフは勝鬨をあげる。それに合わせて、妖精の尻尾全体も一気に湧き上がる。

「燃えてきたアー!!」

「必ず勝利しましょう。」

「当たり前だ。」

「負ける訳にはいかない戦いですしね。」

全員が湧き上がり、勇氣を振り絞っていく中で、マカロフは更に杖を叩きつけて皆を静かにさせる。どうやら、未だ話しておくべきことがあるようだった。

「戦いの前に皆に話しておかねばならぬことがある。」

「ルーメン・イストワール…正式名称妖精の心臓フエアリーハートの事じゃ。」

マカロフが話そうとしたその時、マカロフの後ろから1人の人物が現れる。

「それについては私から話しましょう、6代目…いえ、8代目。」

「初代!?!」

現れたのは、初代妖精の尻尾マスターであるメイビスだった。一部の者達は知っている。ルーメン・イストワールに彼女の肉体が入っていることに。

「皆さん…妖精の心臓は、我がギルドの最高機密として扱ってきました。それは、世界に知られては行けない秘密が隠されているからで

す。

ですが、ゼレフがこれを狙う理由もみなさんは知っておかねばなりません。

そして、私の罪も……」

「…罪？」

「初代……」

「良いのです。全てを語る時が来たということです……これは、呪われた少年と呪われた少女の物語、2人が求めた1なる魔法の物語。」

そうして、メイビスは語り始める。事の発端を、妖精の心臓のことを、自身のことを、呪われた少年とのことを。

過去を話すことで、それらを話していく。

「あれは100年以上も昔、妖精の尻尾創設の少し前ほどでした。マグノリアの東の森で、私たちは偶然出会ったのです。

彼はアंकセラムの呪いに苦しんでいました。それは意図せず、人の命を奪ってしまう呪い。」

その言葉で、知っている者はそれがゼレフだということにすぐに気がついた。そして、奪いたくないと思えば思うほど制御が効かなくなるあの呪いは、メイビスには発動していなかったようだった。

「しかし私は彼に惹かれた。彼から沢山の魔法を教えて貰った……当時、マグノリアは闇ギルドに支配されていました。私達はマグノリアを解放すべく、魔法を覚えたのです。

そしてその戦いの中、私は未完成の黒魔法を使い、勝利しました。その代償に、私の体は成長ができない体になってしまったのです。ですが、この時の私はそれをなんとも思っただけで無かったのです。」

淡々とメイビスは語る。自分のことであるはずなのに、まるで他人のことを語っているかのような真顔で……しかし、マルクはこう思ったのだ。『自分の話だからこそ』なんとも思っていないような顔になっているのではないだろうか、と。

「X684年4月、妖精の尻尾が創設されました。当時は領主同士の通商権争いが激しく、第2次通商戦争が始まった年でした。やがて魔導士ギルドも、傭兵として領主達の戦いに巻き込まれていきました。」

「……その時からですな、貴方が妖精軍師と呼ばれるようになったのは。」

「ええ……」

マカロフがそう注釈を入れるが、メイビスはそれに対して少しだけ目を伏せるのみだった。あまりその呼び名は好きではないのか、それともこの話自体が好きではないのか……とは言っても、戦争の話を好むのも、簡易的に自分が大量に人殺しをした話をするのも、よほどの悪党でない限り好き好んで話はしないだろう。

「X690年、第2次通商戦争が終わりました。第1次戦争に較べて各地の死傷者の数は数十倍に登ったのです。」

それは、戦争に魔導士ギルドが介入したのが原因だと言われました。魔法界もこれを受けて、ギルド間抗争禁止条約を締結しました。」理由としては、妥当な話である。力を持った者達を介入させれば、そのような凄惨な結果が待っていることも、そのような条約が締結させられることも目に見えている。

「この条約により、魔法界はしばしの平和が訪れました。そして、6年後のX696年。私は偶然にも、黒魔道士である彼と再開しました。」

その時です……彼が黒魔道士ゼレフだと知ったのは。その時の私は、純粹すぎました。彼のことを知っても、悪い人だとは思っていませんでした。」

「貴方にとって、その時の彼は恩人だった……『その時殺しておけばよかった』なんて言うのは……」

「分かっています。全ては結果論……私が後悔したところで、意味がありません。」

……その時、知ってしまったのですけれどね。彼の本性と、私が不老不死になっているというのを。」

目を伏せるメイビスだったが、ふと諦めがついたかのようにメイビスは

、再び妖精の尻尾全域を見渡すかのように顔を上げて、話し始める。

「その時の私は、当然信用できませんでした。不老不死の体になり、アークセラムの呪いにかかっていることに。」

そして、そのことを信用しないまま……私はギルドに戻りました。戻った私を待っていたのは、ギルドメンバーの1人が子を産んだところでした。」

当時を思い出すかのように、しかしそれを第3の傍観者であるかのようにメイビスは語っていく。

「……その時の、その子の母親の命を私は奪いました。人を愛すれば愛するほど、命を奪っていき愛さなければ命を奪わない矛盾の呪い……子を産んだことにより、その子を見た時に、私は命の尊さを知って、アंकセラムの呪いを発動させてしまったのです。」

一瞬、誰も気づけないようなほんの一瞬。その時にメイビスはマカロフに視線を移す。それを認識できたのは誰もいないし、それを見たとしてもその意味を理解するものはメイビス以外にいなかっただろう。

「その時のせいで、当時の私はギルドに顔を出さなくなりました。愛する家族である、ギルドメンバーたちの命を奪いたくなかったのです。」

そして、そのまま1年が経過しました。その時に……私はまたゼレフと再開しました。と言っても、彼は私のことを探していたようですが。」

まるで、『下らない理由だろう』と思えるような言い方だったが、その表情にはそのようなことを考えてるような素振りは見受けられない。本当に、ただそう言っているだけなのである。

「半年食事をしていなくても、首を絞めても……死ぬことはありません。彼が言うには、首を切り落としても死なないようです。」

そして、命を奪うアंकセラムの呪いでも殺せない……ゼレフは当時そう考えていたようです。当たり前です、自分以外の者が自分と同じになっているのなんて見ないのですから。

ですが、問題は死なない事じゃなかった。」

メイビスは目を細めて話し始める。永遠の命というのは、時には誰しもが求めることである。

誰だって死ぬことは怖い、死なないというのはそれだけで魅力的な

のだ。

「その時に出会った彼は、エーテリアス…彼を殺すためだけの悪魔を作りだした後でした。」

そして、その当時は、国を作っていると彼は言っていました。」

「それが、アルバレス……」

「彼は、領土を広げていくことを楽しいと言いました。しかし、その後……国づくりは醜い領土の拡大と言って、楽しくないと言いました。」

「思考も、おかしくなるといふことですか……?」

ウエンデイが呟いた疑問に、メイビスは頷いて肯定する。長い年月の中で、永遠に死ねない攻め苦を味わっていたゼレフは100年前の時点で既に壊れていたのだ。

「……私は、彼と一緒に呪いをとく方法を探そうと言いました。先程も言った通り…私は彼に惹かれていた。彼も、長い年月の中で人に優しくされたことがなくて……私達はそこで……」

メイビスが、言葉をそこから続けることは無かった。しかし、言わなくても皆には伝わっていた。

メイビスとゼレフは、その時点で繋がっていたのだ……心が、愛という形で。

「……魔道の深淵、全ての始まり。それは1なる魔法、愛。愛は奇跡を引き起こし、時に悲しみを引き起こす。」

矛盾の呪いをかけられた二人の愛は、ここで最後の矛盾を突きつけたのです。

愛すれば愛するほどに命を奪っていつてしまうその呪いは、不老不死であるはずの私の命を奪っていききました。」

「不老不死である人物の、命を……」

一同は絶句する。それもそうだ、アंकセラムの呪いというのはどこまでも非常に冷徹で、悲しいものだと理解したのだから。

「その後、私の体は妖精の尻尾のギルドに届けられました。プレヒトは、私の心臓が少しだけ動いていることを確認して、私の体を魔水晶ラクリマに封じ込めました。」

いくつもの蘇生魔法をプレヒトは試していくうちに、後に天才と呼ばれるプレヒトは私にかけられたアंकセラムの呪いに気づきました。

その後……プレヒトはギルドメンバー達に私は死んだと告げて、天狼島に墓を建てました。」

「だから、天狼島にお墓が……」

「同年に、プレヒトは2代目マスターとなって仕事の傍ら私の蘇生に心血を注ぎました。30年……それを続けているうちに、プレヒトの類まれなる才能と知識、そして私の不老不死がもたらす半永久的な生命の維持が融合して……説明のつかない魔法が生まれました。」

それが、永久魔法妖精の心臓。」

「永久、魔法……？」

「それは一体……」

「その名の通り無限……絶対に枯渇することの無い魔力。」

メイビスの言葉により、さらに言葉を失う一同。当たり前である。無限に枯渇することの無い魔力、その言葉がもたらす意味が簡単かつ恐ろしいものだとして認識しているからだ。

妖精の心臓に対しての、経緯やメイビスの経緯はこれにて幕引き。しかし、アルバレスに対しての話し合いは……未だ終わることがないだろう。何せ、相手はゼレフなのだから……

妖精の心臓

初代妖精の尻尾ギルドマスター、メイビスから明かされた話。

ルーメン・イストワール…妖精の心臓は、彼女の半永久的な不老不死と、2代目妖精の尻尾マスターであるプレヒトの知識が生み出した、永久魔法というものだった。

それは、絶対に枯渇することの無い魔力…無限の魔力を持つ名前の魔法だったのだ。

「なんだそりゃ!？」

「一生使える魔法源って事!？」

ナツとハッピーが、同時に驚く。いや、声に出していないだけでこの番にいる全員が…正確に言うならば、マカロフ以外は驚いていた。

「例えるなら…エーテリオンという兵器がありました。一撃で国をも消滅させる旧評議院の超魔法。」

妖精の心臓は、そのエーテリオンを無限に放つ魔力を持っているのです。いいえ…魔力を持っている、という表現自体が体をなしません。無限、なのですから。」

エーテリオン、一撃で国をも滅ぼせる超魔法だが…それを何度でも放てるのが妖精の心臓である。

その真実は、マカロフ以外の妖精の尻尾メンバーを絶句させていた。

「そんな魔法が公表されたら…」

「確かに魔法界は根底から覆る…」

「そんな魔法があれば…欲しくなるやつだってそりゃあいるか。」

「かつてイワンもこれを欲した…どこで漏れたのか、アルバレスにも情報が渡った。」

ある程度絶句した後、段々と妖精の尻尾はざわつき始める。『そんなのがあれば、確かに狙う』『誰だって欲しい』『というものばかりである。』

「アルバレスは妖精の心臓を奪うために攻めてくるってのか!!」

「でもなんのために？」

「力は十分に持つてはるはずなのに。」

「恐らくはアクノロギアを倒す為だと推測されます。あれは、ゼレフに取っても邪魔な存在。」

アクノロギア、確かに無限の魔力さえあればあとは力がとてつもない魔法を使えばいいだけなのだから、かのドラゴンを倒すのは不可能では無いだろう。

「逆にそうでもしなきゃ、倒せないってのかいアクノロギアは……」

「そんな……」

「…あのさー、単純な質問なんだけど……そんなに強い魔法なら、アルバレスもアクノロギアもバーンてやっつけられないの？」

ハッピーが質問をなげかける。ある意味、当然の疑問である。目には目を歯には歯を、力には力を……

「確かに一理ある。ワシも大量のフェイスを前に、一度はそれを考えた。」

しかし、一時的な勝利はできてもそのあとどうなってしまうのか。もし、無限に降り注ぐエーテリオンが制御不能だったら……」

マカロフが言ったことに、ハッピーが絶句する。あくまでも妖精の心臓は無限の魔力を持っているだけであり、制御に関しては全くの無関係なのだ。

「ごめんなさい……」

「毒を以て毒を制すわけには行かんからな。」

「毒って……初代の体よ一応。」

「妖精の心臓はいかなる理由があろうと、世に放つてはならん。」

「おう！そんなの当たり前だ！」

「そもそも初代の体だ！他の奴らに渡せるかってんだ!!」

妖精の尻尾全員のテンションが上がっていく。初代の体を守る、アルバレスに妖精の心臓を渡したくない。それぞれの思いが、全員の気持ちを支えていく。

「っ……私の罪から生まれた魔法が、まさかみなさんを巻き込んでこんな事態になってしまふなんて……」

「人を好きになるってのが、なんの罪になるんだよ。そんな罪じゃ、逮捕は出来ねえな。」

俯いたメイビスだったが、まさかのガジルからのフォローが入る。そして、ガジルのセリフも相まって全員が驚いた顔でガジルを見ていた。

「え?」

「いや、その通りですけど……ガジルさんが言うんですか。」

「なんでよてめえら! はっ倒すぞ!!」

ガジル達をそのままに、他のメンバーがメイビスを慰めていく。誰も、今の話を聞いて、メイビスが悪い人物だとは思っていない。それどころか、全員が彼女は被害者の側だと理解しているだろう。

「初代:どうか自分を責めないでください。」

「うん、不幸な出来事が重なってしまっただけ……」

「貴方がいなければ、妖精の尻尾はなかったんです。」

「つー事は、私達が出会うこともなかったんだね。」

「初代はここにみんなを繋げてくれた人なんだ。」

「私たちは、初代の作ったギルドを守りたい……だから戦うんです。」

涙を流しながらも微笑むメイビス。彼女が妖精の尻尾の創始者というのもあるが、それ以上にこれ以上彼女に酷い目に合わせないようにする為に、皆が動こうとしてくれていた。

何故なら、妖精の尻尾メンバーは皆家族なのだから。

「良いギルドになりましたな……初代。」

「しくしく……」

「なっ!？」

気づけば、何故かジュビアが泣いていた。しかし、グレイに恋する彼女としては、今の話は辛いところがあるのだろう。

「メイビス様は、かつて愛した人と戦わなくてはならないんですね。」

「それは遠い過去の話……今のゼレフは、人類に対する脅威です。必ず倒さねばなりません。」

涙を拭くメイビス。そして今度は、ゼレフを倒すための話に移り始める。

「でもよオ……アルバレスの方はなんとかなるにしても……」

「ゼレフという者は不老不死なのだろう？」

「不死身ってことじゃない!!」

「どうやって倒せばいいんだ……」

「…それに関しては俺が——」

「そこは任せてくれよ。」

マルクが何かを言い切る前に、ナツテーブルに飛び乗って包帯を巻いた右腕を皆に見えるように見せつける。

「ゼレフは俺が倒す。そのための秘策がこの右腕なんだ。」

「で?」

「その秘策とやらは……」

「秘密だ、だからこそ秘策なんだ。」

自慢げに笑みを浮かべるナツ。しかし、あそこまで大胆にアピールをされて、いざ秘密ですと言われて引き下がるほど妖精の尻尾のメンバーは大人しくない。

「勿体ぶってんじゃねえ!!」

「その右腕にどんな秘密があるんだー!!」

「……」

その光景を眺めるマルクを、メイビスはじつと見つめていた。何かを言いかけたのを、気づいていたからだ。

「とにかく、この技は1回しか使えねえ。けど、ゼレフを倒すために編み出した技だ。絶対倒す自信がある。」

「1回……本当に奥の手というわけか。」

全員が、ナツの言葉で士気をあげる。しかし、それがナツなのだ。それを理解してしまえば、よりナツのことを信頼できる要因となる。

「私にもいくつか策がありますが、今はナツを信用しましょう。」

「…マスター。」

「…はい。」

「……えーっと、おじいちゃんの方で。」

ルーシイがマスターと呼ぶと、マカロフ、メイビス、エルザとそして何故かマカオが反応していた。

改めてマカロフを指名し直してから、本題に入る。

「これから私達が戦う敵のことを教えてください。」

「うむ……そうじゃな。ワシが知る限りのことを伝えておこう。」

そう前置きを置いてから、アルバレスの主な人物達をマカロフは紹介し始めていく。

「まずは皇帝スプリガン。イシユガルでは最強の黒魔導士として知られるあのゼレフじゃ。」

そして、その配下にスプリガン^{トウエルフ}12と呼ばれる先鋭部隊がいる。わしもこの1年間で会うことが出来たのは6人だけ……土地が広いせいで全員が一同に会することは滅多にないらしい。

冬將軍インベル、奴はゼレフの参謀であり執政官でもある。その異名の通り氷系の魔法を使うと思われるが、詳細は分からん。」

「氷……」

氷という言葉に、グレイが反応する。氷を使う魔導士ならば、氷の滅悪魔導士^{デビルスレイヤー}であるグレイには、相性のいい相手となるだろう。

「砂漠王アジールは、脱出時に交戦した砂の魔法の使い手。12の中でもかなり好戦的な奴じゃ。」

「あいつかあ……」

ナツは、アタラクシアを脱出する時のことを思い出していた。確かに、触れただけで乾かすあの砂は、かなり厄介だろう。

「国崩しのブランディッシュ、好戦的ではないが国をも崩すという魔力の持ち主。」

「奴とはカラコール島で1度だけ接触した。奴は恐らくものの質を変え魔法を使う。」

皆にわかるように、エルザが注釈を入れる。カラコール島で接触したメンバーだけは、ブランディッシュの強さがよくわかっていた。

「戦乙女デイマリア。やつの魔法は知らんが、戦場を駆け巡った女神を通り名に持つ女騎士。」

「女神……神……?」

マルクがふとミラ、エルフマン、リサーナを順に見る。後者二人はともかくとしても、戦うまであまり悪魔^{テイクオーバー}を接収するというのはいま

いちピンときていなかったが、女神という単語でふと神のテイクオーバーもあるのではないか？と思ったのだ。

無論、滅神魔導士ゴッドスレイヤーという存在がいるからこそ、そう思えただけなのだが。

「聖十最強の男、ゴッドセレナ。やつは所謂残念な感じの男なのだが……やつの強さはワシがいちばんよく知っておる。」

「聖十大魔道の序列1位の人が敵だなんて未だに信じられない。」

「何故イシユガルを去ったのでしよう……」

「戦いたかったから、イシユガルでは出来ないことがあったから……色々理由が浮かびますけど……」

「そればかりは本人に直接聞いて見なきゃわかんないよね。」

「裏切り者めえ！」

ゴッドセレナ。聖十大魔道最強の男だった人物だが、今は敵の内の一人となってしまう。

強さはともかく、その魔法についてはマカロフもよく知らないようだった。

「魔道王オーガスト……こやつ、だけは……ワシの知る限り別格……！他の12とは比べられんほどの大魔力の持ち主……聞いた話では古今東西のあらゆる種の魔法を使えるとか……使える魔法の種類だけ言えば、ゼレフより上かもしれん。」

「なっ……」

マカロフが言った言葉に、全員が絶句する。ありとあらゆる魔法が使えるとなれば、対処法なんてたかが知れているのだ。

相対するべき相手に無いことだけは、確実だろう。

「ワシが知っているのはこの6人……あとは名前だけ知っているのが3人。ブラッドマン、ナインハルト、そしてワール。」

「つまりあとの3人は……名前も分からない相手、ということか……」

マルクがそう呟く。最初の6人は、ある程度の予想がつけられる。あとの6人は対処法がないばかりか、その中の3人は名前もわからない状態である。

「これから作戦を立てます。皆さん……よく聞いてください。ゼレフは

全軍を率いて攻めてきます。

私達の置かれている状況は圧倒的に不利と言えるでしょう。敵は今まで戦ってきた敵とは桁違いに強い。

ですが、勇気と絆を持って戦い抜くのです。ギルドの力を見せてあげましょう!!」

メイビスの言葉に、全員が大声を出す。士気は上がり上がった。これ以上は、もう出来ることもないだろう。

決戦まで、じっと待つのみである。

「…マルク、少しいいですか?」

あの後、1度家に帰れるものは家に帰ることにしてある程度は解散が進んでいた。

その中で、帰ろうとしているマルクにメイビスが話しかける。

「なんですか?」

「貴方はゼレフと戦わないでください。」

「…何故?」

「貴方は、ゼレフを倒す手段を持っている。その手段を使って、ゼレフを倒すつもりだったのでしよう?」

マルクは微笑みを崩さない。しかし、考えていることがメイビスに全てバレているとだけ、直感で感じとっていた。

「恐らく、貴方がゼレフを倒そうとするならばその手段は…貴方の力を持ってゼレフを『喰らう』こと。」

貴方の力は、物理的に相手を捕食しますが…喰らったものを魔力

に変換する力を持って、ゼレフを倒そうとしてますね?」

「……それでも、ゼレフは死なないと言うんですか?」

「いえ、恐らくあなたの力ならば確かにゼレフは倒せるでしょう。しかし、貴方はその後のことを考えていますか?」

「その、後?」

マルクが笑みを崩さないままメイビスに質問を返す。メイビスは真剣な表情のまま会話を続けていく。

「ええ、貴方がゼレフを食らったとして…ゼレフにかかっている呪いは、どう処理されるかわかっていますか?」

「…そりゃあ、呪いごと魔力に変換して——」

「貴方自身、そんな事にならないと分かっていますよね?アंकセラム神の呪いは、命を自分の価値観で裁量した者に降りかかる呪い。」

その呪いが…直接貴方に移ったらどうするんですか?食らった瞬間に、命を削られたらどうするんですか?」

「それは……」

メイビスの言葉に、マルクは押される。だが、そのまま笑みを浮かべたまま、マルクはメイビスに言葉を返す。

「……その時、その運命なら俺は受け入れる。ゼレフがウエンデイに牙を向くかもしれない、アクノロギアがやって来てウエンデイを殺しにくるかもしれない。」

「貴方は……自分が死んでもよろしいと?」

「不老不死になったら、その時はその時…ゼレフの呪いの足掻きが俺の命を奪いにくるなら、それも受け止める。」

けど、俺はそれで死ぬ気はありませんよ。後のことを考えてない、って言われたら終わりですけどね。」

「……」

「俺が死ぬ時は、ウエンデイにこれ以上危害が及ばないとわかったときです。」

それまでは……意地でも死にませんよ。」

マルクの言葉に、メイビスは目を伏せる。自分ではああ言ったが、ナツがダメだった時の保険としてマルクを用意している案も、あった

のだ。

いや、彼の力を持ってして死に行かせるような案がいくつも浮かんでいつている。

だが、今は彼も誰も殺される気は無い……誰も死なないような案を、決行しなくてはならないのだ。

全員が恐怖と戦う中、夜が更けていくのであった

戦争編

襲来アルバレス

ほとんどのギルドメンバーがそれぞれの時間を過ごしている中、1部のメンバーはギルドに残って敵に対して警戒を続けていた。

「ウォーレン、索敵状況は。」

「未だファイオーレに敵影なし。」

「それ……本当に信用出来るのか？」

「俺が作った超高性能レーダーだぞ!!」

ウォーレンの作った索敵機を使って、敵が今やってきてもわかるようにしているのだ。予定を進めることも、十分に有り得るのだから。「そう言えば、マルクお前……ウエンディと一緒に居なくてよかつたのかよ。」

「ウエンディは、エルザさんと一緒にいることにしたそうです。多分、誰もが誰かと一緒にいると思うんですけど……エルザさんには、ウエンディが着いていたいと思っただんじやないですかね……」

「へ、ガキの癖に達観してるな。」

「それほどでも。」

マルクとマカオが談話している中、マカロフは真剣な顔でいた。やはり、緊張するものは緊張するようだった。

「北部、南部……あるいは西部。どこから上陸してくるのか分かれば、策を練りやすい。」

「北部を陽動に使い、南部に主力を置くのが一般的ですね。」

「初代……!」

「決戦前の皆さんを見てきました。みんな、この状況に不安を感じてません、とてもたくましい仲間達です。」

メイビスが、マカロフの後ろから現れる。霊体の体の利点を使って、全員の様子を見てきていたらしい。

「初代にはそう映りましたかな……わしには皆不安を押し殺しているように見える。」

友と寄り添うことで、不安を和らげ自分を鼓舞しているように見える。」

マカロフの考えに、メイビスは少し驚いていた。そしてそれは、ギルドに残ったほかのメンバー達も同様だった。

「だが…それが悪いわけじゃない。親がビビれば、子もビビるのは当然…親なら自らガキどもの前に立ち、震える足を地につけてやるのもまた務め。」

「…はい！」

マカロフのその言葉に、メイビスは心がどこか励まされたような気持ちになる。

だが、その励まされた気持ちも……一瞬で変わった。何か吹き抜けたのだ。自然に起こるような風ではない、何か異質な風がフィオーレに吹き荒れていた。

「この感じ……！」

「そんな……」

「ウォーレン！魔導レーダーはどうなっておる！！」

「俺のせいだよ！知らねえよこんなの！！」

突如、ウォーレンのレーダーに大量の敵影を確認する。それを知らせるかのように、アラームがひっきりなしに鳴り止まなくなってくる。

「なんで接近に気が付かなかったんだクソ！！」

「総員戦闘準備！！敵は上空！空駆ける大型巡洋艦約50隻！！」

マルク達は、ギルドの窓から船を確認する。それはとてつもなく大きく、アルバレスが帝国と言われるのが、わかりやすいくらいものだった。

「なんだよあの数！！」

「1隻だけでギルドと戦える大きさだよ！！」

「あれはまだ、帝国の1部でしかない……！」

「鐘を鳴らしてください！敵襲！西方上空に巡洋艦約50！！」

メイビスが即座に指令を出す。ほぼその直後に、アルバレスの軍隊から一斉射撃が行われて、フィオーレの街が狙われる……が、それは

バリアによって守られる。

「早速攻撃してくるなんて……フリードさんの術式、あらかじめ仕込んでおいて正解でしたね。」

「初代！いくらフリードでもあの物量で押されたら持ちませんぞ!!」

マカロフは焦った声を出す。メイビスは落ち着いている様子だった。マルクはその様子を見て、まだ彼女にとっては予想外ではない事態であることを、理解した。

「西の空から来るなんて予想外だ!」

「どうすんだよ!!」

「いえ……ここまででは想定範囲内です。それよりも、先行部隊だと思われませんが、予想より小規模の攻撃なのは嬉しい誤算。」

「え?」

「は?」

マカオとワカバが素っ頓狂な声を上げるが、メイビスはそのままウォーレンの念話を使って指令を出す。

「ウォーレン! 全員に念話! 作戦をDに!! 飛竜隊、ミサゴ隊攻撃開始!!」

マルク、貴方も出てください!!」

「了解!!」

ウォーレンは念話を使い指令を出し、マルクはアルバレスの船まで馬を使って走っていく。

「……くそっ! さっさと魔力を使い切れれば悪魔龍モードで空飛べんに!」

『我慢してくれよ! 流石に魔力使い切つてまでやりきれぬ相手でもねえぞ!!』

ウォーレンから釘を刺されている事を思い出したマルク。飛竜隊……ナツ、ウエンディ、ガジルの3人組だが、彼らには相棒のエクシードがいる為簡単に空を飛べるのだ。

「まあ、そこはしょうがないか……行くしか!!」

「オラア!!」

マルクは馬から飛び出して、敵に1人突っ込んでいた。だが、大軍の中に1人突っ込んだおかげか、敵の大半がマルクに攻撃を当てられずに結果的に同士討ちを招き始める結果になっていた。

「クソっ!このガキすばしっこいぞ!!」

「ああクソ!味方に魔法が当たる!近接戦闘でふう!!」

「その前に殴り飛ばす!こっちは魔法を遠慮なく使いたいんだ!!」

ブレスや拳でひたすら敵を吹き飛ばしていくマルク。その最中に、3つの影が大群に迫っていた。

「オラア!!」

「あれ?!ナツさん!?というかガジルさんにウエンデイまでなんでこんな所に!?上空の船を相手してませんでしたっけ!?!」

「船の上じゃあ戦えねえ!!」

「乗らなければいいのでは!?!」

地上に降りてきた飛竜隊が、アルバレスの降りてきた大群を1人で相手していた。

3人とも、どうやら相手の船の上に直接乗ったらしく、船酔いのせいで降りてきたようだ。

「あれ、なら上は誰が相手を!?!」

「エルザだ!!」

「なるほど!!」

それだけの相槌を打った後に、マルク達は敵をひたすらに倒している。どうやら、これでもまだ1部隊の1つらしく、それでもゆうに1

000人は越えそうなこの数に、一同は魔力を温存して戦わざるを得なかった。

「我らアジール隊にたった数人で挑むとはな!! 舐められたものだ!!」

「アジール……ああ、あの時の砂野郎か!!」

名前を言われて思い出したマルク。どうやら、エルザが相手しているのはスプリガン12トゥエルフの様だった。

「雑魚はひれふせえ!!」

「なら同じ言葉を返してやるよ!!」

マルクは雑魚を吹き飛ばしながら、上空を見る。敵は、今までの強さも数自体もデタラメな程に違う。

勝てない、とは口には絶対に出す気は無いが……それでもこの多さには不安を感じざるを得なかった。

「……どうするべきかな全く……」

「ナツ達にしては結構手間取ったね。」

「仕方ねえだろ! 本気じゃ無かったんだ!!」

「俺なんか百分の一の力で戦ってたしな!!」

「だったら俺は十分の一だ!」

「俺より必死じゃねーか!!」

何とか、その場にいた敵を全員倒すことが出来た一同。しかし、力をセーブしていた都合上、やはり手間取ってしまうものだった。

しかも、敵は未だ9割以上も残っているおまけ付きである。

「まだ降りてくるぞ。」

「キリがないわね…」

「敵の強さも物量も…今までとは全て桁違い。」

「ほんと、嫌になってくる。」

空に浮かぶ船を見上げて、一同は少し憂鬱な気持ちになってくる。文字通りの戦争に、嫌な気持ちがないわけないのだ。

「その通り!!がははははは!!お前らはアルバレス帝国どころか、アジール隊にすら勝てんぞお!!」

ナツの後ろから、巨軀の男が襲いかかる。その拳は、ナツの頭に直撃してしまっていた。

「ナツさん!!」

「———そうか?」

「あ?」

しかし、その一撃はナツには全く通じておらず、逆にそのままナツの反撃を受ける羽目になってしまっていた。

「ごぼお!」

肘で鳩尾を殴られ、そのまま髪入れずにナツの本気の拳で男は天高く打ち上げられる。

それはもう高く高く……

「あ、船まで飛んでったみたいですよ。」

「いや狙った。」

「あそこがエルザさんのいる船ですか?」

「多分。」

飛んでいった男を眺めながら、マルクとナツは短い会話を終える。その後、マルクは倒れている男達に視線を移す。

その視線に気づいたのか、肩を一瞬だけ震わせていた者達が何人かいたが、別にやられたフリであつても既に戦う気が失せている相手に対してどうこうする気はなかった。

「さて、エルザは後どれくらいで敵を倒すかな。」

「どうせすぐに倒してくれましょう。なんせエルザさんですし。」

「だな。」

「……あれ？なんか風が……」

エルザのことを信頼しきっていた一同だったが、ふとウエンデイが何かを感じ取る。空気や風のことに関しては、ウエンデイの方が気づきやすいので、すぐに一同は周りを警戒し始める。

だが、直後に起こったことは一同の予想をはるかに上回るものだった。突如として、砂嵐が起き始めたのだ。

「なんだ!?急に砂嵐が……!」

「あの魔導士の砂でしょうか?!」

「前が見えない!!」

「まずいぞ!!敵はまだ来る!!」

「ネコ共は下がってろ!!竜の鼻を頼りに敵を探して潰す!!」

範囲は、ナツたちの周り……ではなく、もっと広い範囲で行われていた。だが、敵の方は慣れているのかほぼ問題なく進むことが出来ていた。

「この広さ……街一帯が囲まれています!!」

「んな広い範囲だと?」

「急がないと……!」

砂の中から迫り来る敵をなぎ倒していきながら、一同は敵を倒していく。マルクは、適当に魔法を使って砂嵐を消そうかとも考えたが、焼け石に水なのはわかりきっている話である。

「クソが!!おい火竜^{サラマンダー}!お前炎で砂蒸発できんだろ!!やれ!!」

「こんな所で魔力消費してられつか!!」

「チイっ!!」

ガジルは、ダメもとでナツに頼んでみるが、やはり駄目なようで舌打ちをしていた。

「ウエンデイ!シャルル!俺から離れんなよ!!」

「大丈夫!私も戦える!!」

「そうじゃなくてだな!!」

「ウエンデイ!ここではぐれたら滅竜魔導士^{ドラゴンスレイヤー}の鼻とか耳とか使えてても、不意打ちされかねないって話してんのよ!!」

ウエンデイ、シャルル、マルクは互いに背中合わせになりながら敵を警戒している。

マルクは、それに加えて上にも警戒を広げていた。エルザのことは信用しているが、おそらくこの視界の悪さはエルザも同じだろう。

幾らエルザと言えども、この視界の悪さでは戦えない……とマルクは心配をしていたのだ。

「……あれ？マルク？」

「ハッピー!?なんで俺の頭の上乗ってんの!？」

「いや…エルザみたいに、直感を頼りに来たらナツのところにとどり着けるかなあって。」

「いや、幾らエルザさんでも直感だけで戦えるとは……」

マルクは確かにエルザの事を並外れているレベルで強いと感じているが、直感…第六感だけで戦える人はいないとも考えているのだ。当然である、ナツやガジルですら鼻や耳を頼りにして戦っているのだから。

「ううん、エルザならできるんだよ。冥府タルタロスの門の時もそうだったし。」

「ん？冥府の門がどうしたのか？」

一年ほど前に戦った悪魔のギルド、冥府の門。なぜ急にその単語が出てきたのかマルクには分からなかった。

「あ、そうか。マルクは知らなかったよね。」

「……何が？」

「1回、エルザ悪魔と戦った時に視界も聴覚も味覚も…痛覚以外全部消されたけど勝てたんだよ。」

「……」

マルクは、内心で考えていたことを全撤回した。この視界の悪さだけで、どうやらエルザは倒せないということに。

そして、同時にその強さはアルバレスのスプリガン12よりも遥かに強いということに確信を持たせたのであった。

砂嵐が止む頃に

突如として、マグノリアの街全体を覆い始めた砂嵐。その砂嵐は、アルバレス帝国のスプリガン^{トウ}12の1人であるアジールのもたらしたものだつた。

アルバレス帝国と戦争やっている今に、視界を防がれてしまうという最悪の事態。現在、アジールと戦っているのはエルザだが、そのエルザが勝つまでこの砂嵐に耐えなければならず、吹き荒れる砂によるダメージも少なからず続いていくのであつた。

「くそっ……！いつまでこの砂嵐が……！」

「でも、耐えないと!!」

魔力の無駄遣いはできない。だが、それも相まってか一同の精神は磨り減っていた。

だが、この砂嵐はそう長くは続かなかつた。突如として現れた砂嵐は、また突如として姿を消したのだ。

「砂嵐が……！」

「消えた!!」

「……っ！エルザ!!」

砂嵐が消える。相手が意図して消すという可能性は低く、そして、上空にある船の一つが崩れていくところを見ると、どうやらエルザが勝つたということが分かってきた。

だがエルザも無傷では済まされなかつたのか、傷だらけで落ちてくるのがその場にいた滅竜魔導士^{ドラゴンスレイヤー}達の目に映っていた。

「ナツさん!!」

「お前も行ってやれ、ありやひでえ傷だ。」

ナツが、エルザを見て走り出す。気絶しているのか、それとも換装するほどの魔力も、体力も残っていないのか……エルザは落下してき
ていた。

ナツの後を追うように、そのままウエンデイも走り出す。

「こつちは我々がなんとかする!」

「あんたも行ってあげなさい。」

「あい!!」

そして、ナツの相棒であるハッピーもそのまま向かい始める。その場に残されたのは、ガジル、シャルル、マルク、リリーの4人だった。「さーて、これで心置き無く戦える。」

「だな、あの砂嵐鬱陶しすぎんだ……!」

二人とも、所謂『悪い顔』というのをしながら敵に殴り掛かる。アジールがやられたこともあるのか、敵の動きに乱れが生じ始める。「まったくあのバカ!」

「ガジルやナツの影響を、良くも悪くも受けているな。」

「けど……ここは通さないのは同じ!」

「おう!」

リリーとシャルルも、ガジルとマルクに続くように動き始める。既に少なくともこの場にいるアジール隊とやらの指揮系統は崩れ去っており、簡単に敵を倒すことができるようになっていた。

「んだア!? さつきよりも勢いがねえぞゴラア!!」

「部隊のトップがやられたら、下の者達は困惑する……組織にも言えることだが、トップ一強にしてたらダメだということだな。」

「あら、ついこの間までいた評議院のことでも言っているのかしら!!」
冗談を言い合いながら、アジール隊を次々と倒していく。しかし、ある程度立ったところでマルクが上空を見上げる。

「ガジルさん! リリー! 上任せていいですか!?!」

「あ!?!」

「さつきと船潰した方が早いですよ! 地上の敵は俺達が倒しますし!」

「そうだな……リリー!」

「空か、次は乗るなんてことするなよ、ガジル。」

「うつせえ!!」

リリーに軽口を言われながら、ガジルはリリーに支えられて空中へと身を乗り出す。それを少し見送ってから、マルクはシャルルと共に地上の敵を倒していく。

「で、どうするわけ!?!」

「どうする、つてのは？」

「たった2人でこの軍勢倒すつもりなのかつてこと…よっ!!」

「そんなの…当たり前だろうが!!」

敵を倒しながら、マルクとシャルルは会話をし続ける。しかし、もう少ししたらナツも来るだろう言う自信がある。

ウエンディは、エルザを回復させるために残っていなければならぬが、ナツは回復魔法も、何かしらそれを補助するような魔法も持っていない。ならば、こちらに来るしかない。

「それに、空にいる敵が全滅したら、こっちの敵も残等にまでなるだろうしな…さっさとこっちの敵は全滅させる!!」

「なるほど、ね!!」

「魔力を早く使い切りたいところだが…悪魔龍になって、空飛んで…つてしたいところだけど…温存しないと、俺もまずい。」

一瞬、空の方に視線を向けるマルク。空にいる船の部隊は、ガジル達が落としていつているのか、崩れゆく姿が良く見えていた。

「ガジルさんも、順調に船落としていつてるみたいだし…オラア!!
かかってこいよアルバレス帝国!!」

大きく吠えるように声を荒らげるマルク。そして襲いかかるアルバレス帝国。

シャルルとマルクは、地上に降りた部隊を着実に片付けていくのであった。

「はあ、はあ…!」

途中で戻ってきたナツとハッピーも、ガジルと張り合うかのよう
に船を落とし始めて、地上の敵も段々と減ってきていた。

しかし、魔力以上に体力の消耗が激しくなっており、マルクと
シャルルは肩で息をしていた。

「だ、大丈夫か？シャルル……」

「そ、そっちこそ…息が上がってる、わよ。」

「け、けど……今ので地上の敵は全滅したか…？」

「ええ……ナツとガジルが船ごと敵を片付けてくれているもの。」

しばらくすると、目に見えて敵の数が減ってきていた。空に浮か
んでいた船の数も少なくなっており、そろそろアルバレスを向こう
に送り返せそうな気がしてきた。

「しつかし……本気でこつちを侵略しにかかっているな。」

「当たり前よ……それだけ初代の体が欲しいってことなんだから。」

「……もう暫く待機しよう。敵が降りてくる可能性も否定でき
ない。」

「分かってるわよ。」

警戒しながら、マルク達は息を整え始める。体力をかなり消耗して
しまったが、ひとまず警戒しながらとはいえ休憩出来るのはありがた
い。

「……こつちは、俺達の勝ちかな。」

「ええ、エルザも相手を倒したんだし……後は、街の方ね。フリードが
術式を張っているとはいえ、油断は出来ないわよ……」

「たとえば術式を破られたとしても……なんとかしてくれてそうだけ
どな。全ての強い魔導士を、俺達みたいに外側に置いている訳じゃあ
ないんだ。」

そう言いながら、マルクは街に残っているメンバーのことを思い出
す。しかし、すぐさま思考を切りかえて敵の事を考える。

「けど、それが敵に大して油断していいって話しじゃない。スプリガ
ン12 はまだまだいるんだ。」

「私達が倒したのは1人。まだあと11人要るものね。」

「ああ……」

そして、最後の船が落とされるところをマルクは確認する。これで、西から来た的は全滅となり、こちら側は妖精の尻尾フェアリーテイルの勝利ということになる。

「よっ……西の敵は全滅した!!」

ナツとガジルが側に降りてきて、ナツが大きな声を出す。ウォーレンが常に念話を開いてくれているので、そのまま会話につなげていく。

「聞こえるか!? オイ!! 西の敵は全滅した!!」

「これで、フリードさん休めそうですね。」

「だな、あんな馬鹿でかい術式を張り続けんのは大分無理しなきゃなんねえからな。」

そして、他のメンバーからも念話で状況報告が届き始める。ルーシイとカナがスプリガン12の独りを捕獲、なんとあのブランディッシュを捕獲したというのだ。

そして、フリード達が新たにスプリガン12らしき人物を倒したという。

『エルザは大丈夫なの?』

『エルザさんも無事です。』

「ウエンデイ、そっちも大丈夫だったかしら? マルクが心配してるわよ。」

『うん、大丈夫って伝えて?』

念話を通して、シャルルとウエンデイが短い会話を行う。そして、第1陣を凌ぎきったという事により、一旦外に出てたメンバーはギルドに帰還することになったのであった。

ギルドに戻る最中、マルクは後ろからやってくる強力なかつものすごい速度で迫ってくる魔力の塊を感じとった。

「っ?!?何かくる!!」

「っ!」

それは他のメンバーも感じとっているのか、一斉に後ろを振り向く。だが、それよりも早くマルクは大きく飛び上がって、近くの建物を足場として、魔力を溢れさせる。

「よく分からんが……なんか来る!!」

目を凝らしてよく見てみると、遠くの方から巨大な魔法が飛んでいるのが、マルクの目に見えた。

つまり、遠距離射撃を敵の誰かが行ったということである。しかし、どこから撃ったのかも感知できないほど遠くからの射撃を正確に行える敵がいることに、マルクは少し恐れを感じていた。

「マルク! 防ぐ気か!？」

「当たり前でしょう!! 滅竜奥義! 紫電魔光壁!!」

マルクは完全に防ぎ切れるように、大きなバリアを展開する。飛んできたレーザーは、そのままマルクの展開したバリアにぶつかる。

「ぐうっ!？」

あまりの威力に、足場の方が耐えきれなくなってくる。足場としている建物の屋根が崩れ始めてきていた。

だが、防ぎきらないとそのままレーザーがギルドを焼いてしまうのだ。

「重っ……!?!? どんだけ魔力を込めてんだ……!」

さらに足場が崩れ始める。ニルヴァーナによる砲撃でさえ、防ぎきれほどの魔法である。直で防ごうと思えばそれ以上の魔法でさえ、簡単に防ぎきれ程だが、これを飛ばしてきた相手はそれさえも上回るほどの攻撃力を持っているということになる。

「マルク! 手伝うわよ!!」

「つとと……!?!? シャルル! 巻き込まれても知らねえぞ?!」

「今更!!」

マルクの背中を、シャルルが掴む。足場が崩れても、これならば耐えきれるとシャルルもマルクも考えた。

だが、それでもなおもレーザーは消える気配を見せない。マルクの魔法によつて、既に大量の魔力を吸収しているにもかかわらず、未だ威力が衰えることを知らない。

「ちよつと!!これ防ぎきれるの!?!」

「やるしかないんだよ!!」

マルクのサポートをするためか、横からナツ達もブレスを放つて威力を相殺しようとして試み始める。それも相まって、恐らく半分以上の威力は消し飛ばすことが出来たが、それでも未だギルドどころかその周り一体を吹き飛ばせるほどの威力は持っているだろう。

耐えているうちに、マルクのバリアにヒビが入り始める。その時だった。

「私に任せろー!!」

「へっ!?!」

突如、マルク達とレーザーの間に大きな影が入り込む。それは、ブルーベガサス青い天馬の保有する船、クリステイーナだった。

そして、その中から聞こえてきた声は――

「一夜さん!?!」

「クリステイーナを盾に……!?!」

「何で一夜が……!?!」

一夜だった。一夜が、クリステイーナを操作してレーザーを防いでくれたのだ。

ある程度威力が抑えられていたからこそ、クリステイーナで完全に相殺することが出来たのだろう。

しかし、それによつてクリステイーナは全壊してしまっていた。

「これは戦いだ……しかし、君達だけの戦いじゃない……ファイオーレ通信網オオオン!!聞こえるか諸君!!これは、『私達』の戦いだ!!」

一夜が、ファイオーレ中に通信をかける。それは、この大陸に存在する数々のギルドに向けて送られたものだった。

この戦争、大陸を中心にしている以上避けられぬものではあるため、他のギルドも早く妖精の尻尾に味方してくれるのだ。

「い、一夜さんも運ばないと!!」

「エルザさん、もう少し頑張ってくださいね…!」

ガジルに担がれているエルザだったが、そこに追加で一夜が加わった。彼の力がなければ、妖精の尻尾に何かしらの被害が出ていたかもしれない。

マルクは、一夜に感謝をしながら皆と一緒にギルドに運んでいくのであった。

イシュガルVSアタラキシア

「一陣はなんとか守りきった…しかし、四方から責められている状況は、何一つ変わらん。」

アタラキシア：アルバレス帝国が行っているイシュガルへの侵攻の第1陣を凌いだ妖精の尻尾。フェアリーテイルしかし、それはまだ第1陣に過ぎず東西南北の四方から攻められている状況は何一つ変わってはいない。

「まさか…フリードさん達がやられていたなんて。」

「ギリギリ聞けた一夜の話から考えるに、人形があいつらと戦っていたらしいな。」

つまり、本体は未だ出ていないってことになる。」

「昨日の砲撃…」

「…だとしたら、俺アそいつを狙うだけだ。」

静かに、しかし確実にラクサスは怒りの炎を燃やしていた。フリード達を倒した敵、ワールと呼ばれていたその人物を倒す為に。

「…1人は倒し、もう1人は牢の中。残り10人…」

「っ！東の情報が入ってきた！ボスコ国のギルドはほぼ全滅…ただ、目的はボスコ制圧なのかこちらへの進軍は止まっている。」

ウォーレンが、東西南北の戦況を知らせ始める。だが、一国のギルドがほぼ全滅という言葉に、全員が驚くほかなかった。

しかし、一々これで一喜一憂していられないのが現実である。ウォーレンは冷静に、情報を伝えていく。

「朗報もあるぞ。北から攻めてきている軍に対して、セイバートウース剣咬の虎やブルーベガサス青い天馬が向かってる！」

南の軍は、ハルジオン港を制圧。マイメイドヒール人魚の踵やラミアスケイル蛇姫の鱗が解放に向かった。」

「初代…加勢に行かせてくれよ！」

「そうだ！他のギルドに守ってもらってばっかりじゃ格好が付かねえ！！」

「今こそ攻撃に転じるときだ！！」

「勿論です！」

ロメオが言った言葉に、ジェットとドロイが便乗する。しかし、初めからメイビスはそのつもりだったのかすぐさま作戦を展開し始める。

「北へ向かうのはミラジェーン、エルフマン、リサーナ、ガジル、レビイ、リリー。」

南へ向かうのはナツ、グレイ、ジュビア、ウエンデイ、シャルル、ラクサス、マルク。」

と、北と南への加勢メンバーを伝えたとこで一同はとあることに気づく。ナツがいないのだ。

「あれ？ナツはどうした？」

「そういえばどこに行ったのでしよう……」

「つーかこんな時にナツはまた勝手なことをしているのか!？」

「探せーっ!!」

「ナツー!どこだー!!」

ギルド内が一気に騒がしくなってくる。しかし、どうやらギルド内にナツがいないことだけは判明していた。

「ナツならきつと大丈夫だ、代わりに私が南に行こう……カグラにも会いたいし。」

「そんな怪我で……」

「：ルーシイとカナは捕虜の見張りを継続。」

「は、はい。」

「オヤジ共には任せておけねーからな。」

「他の者はギルドの防衛です!また敵が奇襲してくる可能性がありません。」

メイビスは伝令を伝え終える。しかし、残った東西のふたつはどうするのかを今と聞かされていなかった。

「初代：西と東の対処はどうしますかな？」

「西は進軍速度が最も遅く、恐らくゼレフ本体だと思われます。三方の決着がついたあと、残存勢力で迎え撃つ形になるでしょう。」

「本体を、残存勢力で……」

「じゃあ東は!?!俺に行かせてくれうお!?!」

焦るロメオの頭に、マルクが手を置く。落ち着かせるためのものだったが、そのままついつい撫でてしまっていた。

「や、止めてくれよマルク兄……」

「焦んな、初代の説明が終わってからだ。」

「現時点では東が1番の脅威です。ですから、こちらも1番の兵力を投入せねばなりません。」

「どういうことですか!?!」

「ウォーレン、連絡はいつてますね?」

「勿論!こりやフィオーレ最強の戦力だぜ!!」

ウォーレンの持つモニターに、4人の姿が映し出される。その4人とは……イシユガルの四天王と呼ばれた3人と、ジユラの聖十大魔道の4人だった。

「イシユガルの四天王!?!」

「すげえ!!」

「けどなんで……!?!」

「ずっと水面下で戦争回避のために動いていたんだけど、今回の件があつて責任を感じて……彼らのせいじゃないのに。」

「あの3人が突破されるような事があれば……東を抑えられる魔導士は一人もいない。」

ウォーレンの出しているモニターに、突如大きな反応が出てきていた。それな、ナツ本人の魔力を検知したものだだったが、超スピードでどこかに向かっていた。

「あいつ、どこへ……」

「まさか……!」

向かっている方向は西、そして西の方にはゼレフがいる。このたった2つの情報が、一同にナツが向かっている場所と今から行うことの答えを示してくれていた。

「ゼレフのいる所!?!」

「ナツの奴1人でゼレフの所に突っ込んでいったのか?!」

「無謀すぎるだろ!!」

ギルド内は騒然としていた。当たり前である、1人でゼレフと戦う

というのは、あまりにも無謀な作戦だからだ。

「あの野郎……!」

「作戦変更だ! 追うぞ!!」

「待て。」

追いかけてそうなラクサスとグレイを、エルザが手で静止する。その行動にグレイは少し納得がいかないようだった。

「私達は初代の作戦通りに動くんだ。ゼレフはナツに任せよう。」

「本気で言ってるのか!? 相手は、あのゼレフだぞ!! ENDの書も持ってんだ!!」

「ナツはゼレフを倒すための秘策があると言っていた。きっとやってくれるさ。」

「……お前は、いつもナツを信じすぎなんだよ……エルザ。」

グレイがエルザを睨みつける。嫌な空気がギルドに流れていく。険悪な、そんな空気が流れってくる。

「……お前はナツを信じてないのか?」

「ちよつと2人ともやめてよ!!」

ルーシイがグレイとエルザの間に入って、2人をなだめていた。だが、あまり空気は変わらない。

「初代……どうしましょう。」

「……ナツに掛けましょう。一見無謀な策のように見えますが、理にかなった策でもあります。」

四方から包囲されているこの状況……打開するには大将を討ち、戦いを早期決着させるのは上策と言えます。

グレイ……ナツを信じましょう。」

「俺は別に信じてねえわけじゃねえ……1人じゃ心配だって言ってるだよ。」

「グレイ様がナツさんの心配をするなんて……」

「サラツと酷いこと言いますね、ジュビアさん。」

グレイが少し照れながら言ったが、事実心配なのは皆も同じだろう。初代のおかげか、嫌な空気は少しだけ解消されていた。

「二人じゃないわ……ハッピーがいる、でしょ?」

人型になっているシャルルが、グレイを安心させるためにその言葉を紡ぐ。

そして、一同はナツのことを信頼してそれぞれが指定された場所に行くのであった。

「では行くか、ハルジオンに。」

「個別の馬は……使えませんね、全員の分までありませんし。」

「当然だ、それに馬は目立つからな……ある程度、目立たない動きが必要だろう。」

一同が出発して、ある程度時間が経った事である。ハルジオンまでまっすぐ向かうために、魔力を温存しながらも何とか順調に目的地まで進めていた。

「……」

「マルク？どうしたの？」

「いや、ハルジオンが封鎖された話……カグラさんがいて、まだ解放できてないとは思えないけど……」

「敵は大量だ、いくらカグラと言えども物量は骨が折れるものがあるのだろう。」

ふと呟いたマルクの言葉がきっかけで、ハルジオンの話が始まる。街の話……ではあるが、どのような敵がいるかどのように街を解放するか……といった話だが。

「……スプリガン^{トウ}1^エ2^ブ、どうやって戦って勝つか考えておかないと。」

マルクは自分の手を動かして、戦える状態を整える。悪魔龍の力を

使えば、それなりに渡り合えるだろう。

「……ねえ、マルク。大丈夫なんだよね？」

「どうしたウエンディ？俺は別に怪我とかはしてないし……大丈夫、って話したらエルザさんの方が——」

「そうじゃないの。マルクは、大丈夫じゃないのに大丈夫って……言っちゃうから、心配なの。」

「……それ言われると、大丈夫って言いづらい。」

「ごめんなさい……」

ウエンディが、少し落ち込む。怒っている訳では無いのだが、どうにも凹ませてしまったようで、マルクはどうしたものかと頭をかいて悩んでいた。

「……大丈夫だ、本当にな。怪我したら……まあウエンディの治療は俺に届きづらいから、包帯とか巻くだけになっちゃうかもだけど。」

「……私が心配してるのは、マルクの手だよ。本当に使いこなせてるの？本当に……体に不調はないの？」

「……『大丈夫』、不調なんて何もないよ。」

「……なら、いいんだけど……完全に操作できたから、大丈夫って……体が痛くなくなったって言ってたから……」

マルクは本当にどうしたものかと頭を悩ませる。戦争という異常な状況で、心のどこかにあった小さな不安が噴出してしまったのだろう。

勿論、大丈夫だと強く言えるわけじゃない。デメリットの力というものは、この世のどこにも存在しない。無論、使いこなせているからと言ってそのデメリットがなくなることも無い。

だが、嘘も方便というように嘘をつかなければならない時もある。

「体が痛くないのは本当だ。一時は、体が悪魔みたいになってたろ？あんな今起こってないし……うん、大丈夫大丈夫。」

痛みも、目に見える体の変化も完全に収まった。恐らく本当に体は大丈夫なのだろう。

自身の魔力を使い切ったとき限定で使えば、ほぼデメリットはないだろう。少なくとも、今のところは。

「……分かった、信用する。」

「ん、ありがとう。」

マルクはウエンデイの頭を撫でて、笑顔を向ける。ウエンデイはそれで少し不安が晴れたのか、苦笑は向けてくれていた。

「二人とも、少し足を早めるぞ。夜までにはハルジオン近くの森に着いておきたいからな。」

「はい!!」

エルザが2人にそう伝えて、2人は元気よく返事を返す。そうして、一同は足を早めていくのであった。

「明日にはハルジオンに着く、今日はゆっくり休んでおくんだ。」

「はい。」

「エルザさん、1番休まないといけないのはあなたですよ。」

「看病するのウエンデイなんだから。」

夜、森に到着した一同は疲れを癒すために休憩を取る。1度休んで、朝になってから再びハルジオンに向けて歩き出すためだ。

「そう言えばラクサスさんは?」

「なんか腹減ったーって飛び出して行ったわよ。」

「熊でも捕まえて食ってそうだな。」

「美味しいのか。」

「エルザさん、ヨダレ出てますよヨダレ。」

ラクサスの話題。本人がどこかに行ったために起きていたが、マルクはラクサスが何しに一同の元から一旦離れたのかは、おおよそ見当

がついていた。

その為に、一同が寝てから向かおうとしていたが……

「グレイさん？」

「……んだよ、マルクか。お前もラクサスのところ行くのか？」

「……はい。多分、魔障粒子の影響で……」

グレイとマルクはラクサスを探しながら、会話を続けていく。1年前、冥府タルタロスの門との戦いが起こったきっかけとも言える事件。

その事件で、ラクサスは魔導士の体には猛毒でしかない魔障粒子を大量に吸い込んでいた。

マルクも一応吸い込んでいたが……悪魔の力を得たことで体への影響は少なくなっていた。

そして、2人は岩場で滝のような汗を流しているラクサスを見つけた。

「……いつからだ、ラクサス。」

「っ！なんだ、グレイとマルクか……お前らには関係ねえ。」

「関係ねえ事あるかよ。同じギルドの仲間だろ。」

「それに、あの事件には俺も関与してますよ。」

ラクサスは反論できずに口を閉ざす。それは、2人の言い分を認めたとということにほかならない。

「1年前の魔障粒子を大量に吸い込んだ時の影響ですよね。」

「……言うんじゃねえぞ。」

「そんなコエー顔で睨むなよ。」

「……問題ねえ、たまに発作が出るだけだ。なんの心配もいらねえ……戦いが終わるまでは、死んだって守ってみせるぜ。ギルドをな。」
ラクサスは、発作を押しこめる。体の中はおそらくズタズタになっているだろう。魔障粒子とは、そういうものなのだ。

「……そして、服を着ろ。」

「うお!?いつの間にも!?!」

「ほんと脱ぎ癖凄いですね……」

一同は、こうしてそのまま夜を越していく。明日の決戦に備えるために、戦いに、勝つために。

戦女神デイマリア

「見えたぞー！ハルジオンだ!!」

エルザ、グレイ、ジュビア、ラクサス、ウエンデイ、シャルル、マルクの7人は、アルバレス帝国に奪われたハルジオン港を取り戻すために向かっていた。

そして、1日ほどの時間をかけてようやくハルジオンに到着していた。

「俺ア行かせてもらうぜ…!」

「ラクサスさん!」

「ジュビア、俺達も行くぞ!!」

「はい!!」

ラクサスは雷となって、高速でどこかへと向かっていく。恐らく、早速フリード達を倒した敵を見つけたのだろう。

それが火付け役にでもなったのか、グレイとジュビアも前線に加わるために向かい始める。

「まったく…だが、ゆっくりしている暇がないのも事実だ。ウエンデイ、マルク、シャルル…必ず勝つぞ。」

「はい!」

「分かってるわよ!!」

エルザはマルク達と別れて別々の場所へと向かう。エルザはカグラの元に、マルク達はシエリアの元に。

「シエリアの匂いはこつち!!」

「向こうにバカでかい魔力がある…シエリアと戦ってるのはそいつ、多分スプリガン12だ!!」
トゥエルフ

「急がないと!!」

3人はシエリアの元に急ぎ走っていく。途中で現れる兵士達をなぎ倒していきながら。

しばらく走っていくと、シエリアの姿が見える…が、どうにも様子がおかしい。

今、マルクの目にはシエリアが上半身に何も着ていないように見え

ているのだ。

「ま、マルク！目を瞑って!!」

「お、あう!!」

「ちよつと!?見なければいいだけじゃないの!？」

変な声を出しながら、マルクはぎゅつと目を瞑る。魔力探知だけで、どうにか動くこと自体は可能なので、ひとまずこれでどうにかする。

「シエリア!!」

ウエンディは一気にドラゴンフォースを使い、シエリアと対峙している敵に向けて飛び込んでいく。

そして、その敵の頬を蹴っていた。

「ウエンディ!」

「俺もいるぞ!!」

「ま、マルク!？」

マルクは一気に近づいて、追撃でウエンディが蹴った頬とは反対の頬を殴っていた。

特に魔力を込めた一撃だったので、並の魔導士なら魔力の大半が持っていかれていることだろう。

「お待たせシエリア！天空シスターズ再結成だよ！」

「とうかか……なんて格好してんのよ、あんた。ハイ……これウエンディのだけど。」

「ありがとうシャルル……あれ、きつつ……」

ウエンディの上着を裸のシエリアに着せるシャルル。きつい、という単語で少しウエンディがムクれていたが、その空気はすぐさま破られる。

「おチビちゃん達、ここがどこか知ってる？ここは戦場……子供の遊び場じゃないの。」

「気をつけて……あいつ、どんな魔法を使ってるかわからない。」

「うん……平和な街、ハルジオンをそう変えたのは貴方達です。私達は絶対に街を取り戻してみせる。」

「私、子供にも容赦しないから。本当なら一瞬で殺せる……そう、本当

に一瞬よ。」

「来るわよ!!」

「——貴方達にとってはね。」

歯をカチカチと鳴らす女性…否、女剣士デイマリアと呼ばれるその敵。その歯を鳴らす行為に気づいているのは、彼女一人しかない。

その瞬間、全てが止まる。敵も、味方も…ただ一人の例外を除いて全て止まる。デイマリアという例外を除いて、全てが止まる。

「今…世界には私一人。私だけの世界。誰もが1度は願ったことはあるでしょ?もしも時間をとめられたら…って。

時を封じる魔法、アージュ・シール。わかる?絶対に負けない最強の魔法……」

そう独り言を呟きながら、デイマリアはウエンディに近づいて、その頬を掴む。遊んでいるのだ、文字通り。

「だってこの世界じゃあなた達何も出来ないのよ?」

そう言いながら、デイマリアはウエンディの服を掴んで引っ張る。これが、シエリアの服が破れていた理由だった。

「この子の服もビリビリにしてやろうかしら?いや…それはもういい——」

服から手を離すデイマリアだったが、その直後にデイマリアの腕が誰かによって掴まれる。

その事が、彼女にとってはありえない事態なのですぐさま掴んだ方

に視線を向ける。

「……なるほど、時を止める魔法か。そりやあ確かに強いな。本当なら……誰にも勝てないだろうな。」

「……なんだ、お前……」

「……」

目の前には、異形が1人立っていた。パツと見ただけでは、ただの黒い甲冑をまとった騎士だが、その体がモヤのように歪んでいる以上、まともな人間ではないとデイマリアは確信していた。

「このちびっこ達は、全員揃っている!!だから、お前はなんだと聞いている!!」

「全員揃っている……か。まあ、こんなことが怒るのはありえないし……困惑するのも無理はないかもな。」

黒騎士の言動が、デイマリアには理解不能だった。だが、敵であることには変わりはない。

「まあ、いい……!それならこのままその子達と一緒に殺すだけ——」

「……モード悪魔龍、『傲慢傲り』エレガンス・ブレイド……今の俺には、どんな魔法も効かない……但し、呪力の消耗が激しいんで3分が限界か……!」

「何をごちゃごちゃと!!」

モード悪魔龍。その言葉をデイマリアが理解することは無いが、それだけでこの黒騎士の正体がわかる。

マルクである。この力、傲慢の力によってマルクの魂が呪力と共に体から抜け出たのだ。時を止められる、ということの意味わうのは2度目……妖精フェアリースワイアの球によってアクノロギアの攻撃を防いだ際、彼だけ魂と肉体が乖離していたのだ。その事の経験が生きたのか、乖離してもそこまで動きにズレが生じることはなくなった。

「時を止める魔法は、俺には通用しない。いや……今のこの姿の俺には、どんな魔法であっても、この呪力で作られた鎧が適応する。」

「つまり、ただの攻撃で斬り裂けばいいということ!!」

「そういうこと!!」

デイマリアが剣を振るい、マルクが拳を振るう。二人の攻防は続いていく。だが、ある程度殴りあつたところで……デイマリアが不敵に笑

みを浮かべる。

「はあ、はあ……まさかこんなに強いなんてね……」

「……仮にも悪魔だからな。一応だけど……降伏してくれるなら、これ以上あんたは傷つけない。」

「降伏……この私が……？あはははっ！そんなことするわけないじゃない……見せてあげるわ、時を操れる……この私の12としての力を。」

「何……？」

マルクがその言葉に疑問を持ったと同時に、デイマリアが今までに見せたことの無いような魔力を見せる。その片鱗とも言える魔力の塊を、デイマリアはマルクに向けて放つ。

「くっ!？」

だが、その魔力の塊をマルクは避けなかった。何故ならば、後ろに未だに時が止まったウエンデイ達がいたからだ。

「ガアっ!!」

「――テイクオーバー接収ゴッドソウル。」

「神をその身に宿してる、か……！こんな予想当てたくなかったぞほんと……!!」

「畏み申せ、我が名はクロノス……時の神なり。」

マルクは傷こそ負っていないが、舌打ちをしていた。仮に本当に神を接収したとするならば、ドラゴン以上の強敵である。

ドラゴンを倒せる力を持つのがドラゴンスレイヤー滅竜魔導士、悪魔を根本から滅する力を持つのがデビルスレイヤー滅悪魔導士、ならば神を倒せるのはゴッドスレイヤー滅神魔導士だけである。

果たして、自分の力で倒すことは出来るのか……と考え始めていた。

「シエリアがいてくれたなら……!」

マルクが今悪魔の力を行使できているのは、デイマリアが時を止めてくれているおかげで、肉体と魂が乖離しているからである。

唯一倒せる手段があるとするならば、この悪魔の力だが……いざ肉体に魂を戻せば、魔力がある状態になってしまうので、悪魔の力を上手く行使出来ない可能性がある。

「ひれ伏せ……!」

「……いや、やるしかねえ!!」

マルクが無理矢理魔力と呪力を行使しようとしたその瞬間、ありえないことが起こった。

「天空甲矢!」
てんくうはや

「天空乙矢!」
てんくうおとや

「ウエンディ!? シェリア!」

「何っ!」

突然、マルクの後ろからシェリアとウエンディが、デイマリアに蹴りを入れる。その蹴りは不意打ちだったのか、デイマリアの顔面にクリーンヒットしていた。

「どうやら間に合ったようね……時に歪みが生じている。ここは時空の狭間の世界……この世界に居るのはあなた一人? いいえ、ここは私の世界でもあるわ……」

マルクたちの横入りをするように、1人の人物が現れる。その人物は、誰もが知っている――

「ここは時の牢獄、クリムソルシエール魔女の罪が貴方の罪に鉄槌を下すわ。」

「ウルティアさん……!」

「…お前が、私の時を動かしたのか?」

「いいえ、時は封じられたままよ。」

接收により、表情が少し見づらいものとなっているが、デイマリアは拳を握っており、どこか悔しそうな感情を表しているように思えた。

「私は時の狭間の住人……つまりこの封じられた時の中にしか存在しない。」

あなたが時を止めたことよって、本来……自然な時の中でしか存在しない私が、ここにいるの。」

ゆっくりと歩きながらウルティアは3人に近づいていく。その行動に、デイマリアは拳を握りしめていた。

「私の世界を、汚すというの……!」

「…時を止めて、服を破く。悪趣味極まりないな。」

「時が止まってる間…頑張ってくれてたんだよね、マルク。」

「……頑張れてないさ、倒せてないんだから。」

マルクは顔を背ける。結局、ウエンディ達の力を借りないと倒せないと思っただからだ。

「倒せてないのは当たり前よ…あれは神そのもの、本来の実力なら貴方達は到底勝てないような強さと魔力を持つてる。」

『『本来の実力』……って言いましたね。じゃあ、何かあるんですか。実力以上の力が出せて、かつあいつを倒す手段が。』

「…あるわ、けどマルクには使えない。ウエンディかシエリア…どちらか一方よ。」

「そうですね、か!!」

マルクはその言葉を聞いて、デイマリアに飛び込んでいた。自分にはかけられないと知って、諦めた訳では無い。

今からでも遅くないと、デイマリアを倒すために動き始める。

「……ウルティアさん、その方法って何ですか。」

「……未来の力よ。」

「未来?」

「そう、あなた達が今後手にする可能性の力…その全てを今使うの。そこまでしなきゃあいつには勝てない。」

ウルティアは手に持っている水晶を掲げて、そこから見通すようにウエンディとシエリアを見る。

「ただし、この秘術を使えば…貴方達は二度と魔法が使えなくなる。体内からエーテルナノが完全に消えて、二度と生成されない。」

それが第三魔法源…酷な選択なのはわかるわ。けど、それほどの力じゃなきゃあいつには勝てない。」

「そんなの…しなくていいです!!ウエンディもシエリアも、まだ可能性を残しとかなないとダメなんだ!!」

「ここで、力を使い切るなんてそんな……!」

「余所見とは余裕だな。」

「余裕だからな!!」

マルクとデイマリアは殴り合いを続けていた。ウルティアの力で、

マルクの体は動かせない。

彼の体に魔法が効きづらいからだ。そして、秘術に関しても例外はない。

いくら魔法に適応して、無効化する呪法だとしても…ダメージが通らなければ意味が無い。

「ぐっ……この気迫……！」

「てめえのゴッドソウルとやらも、このまま使い切らせてやる！ ウェンデイとシエリアには、無理をさせる訳にはいかないんだ!!」

「……って、彼は言ってるけど…貴方達はどうする?」

ウルティアは、ウェンデイとシエリアに再度視線を向けてこう尋ねる。それは、自分の全ての魔導士としての可能性を捨てて、普通の子供に戻るということ。

その選択に、彼女達は――

最後の魔法

「ぐっ……押しきれない……！」

「悪魔の力を持ってしても…神に勝てるわけがない。勝てるとすれば、それは……」

「ハッ！ENDってか……！そんな強い悪魔なら、アクノロギアを倒して欲しいもんだ!!」

デイマリアとマルクの戦いは続いていた。だが、マルクの体もそろそろ時間が近づいてきていた。

元々、ほぼ無理矢理に魂と呪力を肉体から乖離させたのだ。持てばいい方だったが、しかし今はまだ切れていいときではない。

「無理矢理にでも、持たせる……！」

マルクの呪力の揺らぎが、大きくなる。この時の狭間から押し出されようとしているのを、必死に耐えている。

「無駄だ、神には勝てない。」

「だから、どうしたってんだ……!?勝てないのは神だ、けどお前は人間じゃねえか……！」

「ふん、神と同化したこの私に——」

「同化した？けど、それでもお前は人間だ…神のフリをした人間如きが…神の真似事をしてる人間如きが……本物の悪魔に勝てると思うなよ。」

マルクは、デイマリアを見た。睨むのではなく、大きく目を開けて……ただただ『見た』。

「っ!？」

だが、その行為にデイマリアは怯えた。たった一瞬、カエルが蛇に見られた時のように、一瞬たじろいで動けなくなってしまった。

「わ、私が…恐怖した…?」

「さてと……無理矢理持たせても勝てる気はしねえよ。俺一人じゃ、悔しいけど勝てるとは思えない。」

第三魔法源も解放できない……だが、やれることはあるんだ。」

「はああああ!!」

マルクの後ろから、ウエンデイが割り込んでくる。そして、デイマリアの顔面に蹴りを叩き込もうとするが、腕で防がれてしまう。

「そうか、ウエンデイが…」

飛び込んできたのがウエンデイだった為、マルクはウエンデイが第三魔法源を解放したと思っていた。

だが、魔力の感じ方がどうにもおかしかった。解放したら絶対に勝てる…とまではウルティアは言っていなかったが、しかし今のウエンデイから感じられる魔力は、先ほどと大して大差ないのだ。

「——時が、その体に刻まれた痛みを思い出す。『アージュ・スクラッチ』」

「ああああああ!!」

「ウエンデイ!?!」

マルクは駆け寄る。蹴りを入れたウエンデイが、突如として叫び声を上げ始めたのだ。

だが、ウエンデイはそのままデイマリアに殴り掛かる……だが。

「まだ分からぬか、人が神に触れるという愚行の行く先が。」

「ああああああ!!」

「くそっ!!」

マルクは、ウエンデイを突き飛ばして無理やり離させる。その直後に、デイマリアがレーザーを放つ。

「ぐっ!!」

しかし魔力の体のおかげか、マルクに大したダメージは入っていなかった。

だが、上の方がダメージが大きかったのか、全く動けなくなっていた。

「………終わりだ。」

デイマリアは、ウエンデイに指を向ける。レーザーを放つ動作だったが、そこにマルクが入り込む。

「ならば、その魔力の体諸共……」

「……二人とも、ありがとう。」

「……シエリア?」

レーザーの照準を向けながら、デイマリアは突如マルクの後に割り込んできた人物に目を向ける。

ウエンデイとマルクも、視線を向ける。そこに居たのは……シエリアだった。

「後は任せて。絶対に勝つから。」

「間に、合った……！」

「え……？」

「ごめんね、あたしに秘術をかけるまでの時間稼ぎにしちやつて。」

「ウルティアさん!？」

ボロボロと体が崩れていつているウルティア。彼女自身も、時間が無いようだったが、ウエンデイはそれでも聞いた。その答えを確かめるために。

「シエリアの覚悟も本物だった……」

「まさか……そんな……！」

「あたしのラストステージ、最高の気分だよ。親友たちのために戦えるなんて!!」

そう叫びながら、シエリアはデイマリアを殴る。すると、ダメージが通っているのか、デイマリアは仰け反っていた。

「……ウエンデイを守るために、シエリアが第三魔法源を……！」

「シエリア、シエリアあ……！」

ウエンデイは泣いていた。マルクは悔しそうに下唇を噛んでいたが、すぐさま立ち上がってシエリアに加勢をする。

体は存分に動く、ならばその体を使ってシエリアの援護をするだけだ。

「……シエリア!どこでもいい、魔力込めてぶん殴り続けろ!!」

「……わかった!!」

マルクが叫んだ通り、シエリアは殴り続けた。一瞬、たった一瞬だが……シエリアには、デイマリアの体に黒い竜の様な紋章が浮かんでいるように見えた。

「人間が神に抗うなど!!」

「貴方はきつと悪い神様!!いい神様ならもつと人を愛せると思う！」

あたしの魔法はね！悪い神様を倒す魔法なの!!」

「滅神魔法?!ハツタリじやなかったの!?!」

その驚きと共に、今まで変化していたデイマリアの顔が元に戻る。ゴッドソウルが解けかかっている証拠である。

「ゴッドソウルが解けかかってる!」

「な、なんで……」

「神を殺す魔法と、魔を食らう悪魔の力を受けてんだ……!ちよつとずつだったけど……削れてきてるな!!」

「がはっ……!?!神のこの私に、ダメージ……!?!」

マルクの拳が、デイマリアの腹にクリティカルで入る。今まで受けてなかったダメージが急に入ることになったのが、デイマリアには理解不能だった。

「そのまま神殺しの力で、倒されろ!!」

「おのれええええ!!」

デイマリアは最後の足掻きで、シエリアに攻撃を仕掛ける。だが、それが届く前にマルクが攻撃を完全に弾き飛ばした。

「何っ……!?!」

「攻撃力……最大強化……!」

そして、ウエンデイがシエリアのサポートをする。付加魔法エンチャントで攻撃力を最大限まで上げられたシエリアが、デイマリアに近づく。

「まだまだ!まだ私は止まら、なっ……!?!」

「いいや、お前は止まる。そして、止められなくなる。」

デイマリアのゴッドソウルが直前で完全に解ける。そして、時が動き出すと同時にマルクは自分の肉体へと戻る。

「なっ!?!と、時が動き出した……!?!」

「俺の呪力は元々、色んなものを食う悪食な悪魔のものだ……!そんなものを体に受け続けたら、魔法なんて解けるに決まってるだろうが。」

「ま、あんたの魔力がデカすぎるせいで……時間がかかりすぎたけどな。」

「ありがとう……マルク……!」

デイマリアの体から、竜が飛び立つ。黒い竜はデイマリアの魔力を

根こそぎ持つていき、シエリアに取り付いてその全ての魔力を与える。

「シエリア…私はずっと、ずっと友達だから…！」

「……わかってる。」

シエリアは、懇親の魔力を体に溜め込んで…それを一気に放つ。正真正銘、神を滅する最後の奥義。

「天ノ叢雲!!」

「ああああ!!」

デイマリアは、シエリアの魔法によって一気に吹き飛ぶ。そして、そのまま意識を失って倒れてしまう。

「シエリアー!!」

シエリアは、少しふらついたあとに地面にへたり込む。完全に魔力を失って、ただの少女に戻ったのだ。

「あれ…?何で倒れてるの?えっと、何があったの…?」

そして、時が動き出したと同時にシャルルも動き始める。しかし、当たり前だがまったく何が起こったのか理解していなかった。

「ウエンデイ…?どうして泣いてるの…?」

「だって…シエリアが…!私達が助けに来たはずなのになん…!」

「ウエンデイ、泣かないで…魔法がなくても生きていけるんだよ。愛は魔法より強いんだよ。」

「…うん…!」

ウエンデイはボロボロと泣いているが、シエリアはそんなウエンデイに微笑みかけていた。

魔法を失ったことを、彼女は後悔していなかった。

「…ウエンデイ…」

マルクは、そんなウエンデイに声をかけられなかった。だが、手を肩において、慰めようとはしていた。

「大丈夫…ありがとう、マルク…」

涙を拭いて、ウエンデイは立ち上がる…が少しふらついていた。戦況は、デイマリアが倒されたことで恐らくこちらが有利になってい

くだろう。

その前に、ここから一時的に避難をしなければならない。

「ひとまず…一旦街に行こう。どこかもの陰に隠れて…やり、過ごして…」

言葉を言い終える前に、マルクの体は吸い寄せられるように地面に倒れた。

「……マルク？」

マルクはピクリとも動かない。代わりに、体から数々の傷が浮き出るように現れていき、そしてその傷から大量の血が流れ始める。

「なっ!？」

「なんで、なんで!？」

「……まさか、受けたダメージが体にフィードバックされてる……?!」

シエリアの言ったことに、ウエンデイは心臓が止まる思いだった。確かに、全くと言っていいほどダメージを受けていなかったが、そういうことなのだろうか。

「マルク、マルク……!」

治癒魔法をかけるが、彼の肉体は一向に治る気配を見せずただ血を流し続けるだけだった。

あまりの出来事に、ウエンデイの頭はパンク寸前になっていた。このままいけばものの数分でマルクは失血死してしまうだろう。

シャルルが担いで、後ろからウエンデイが回復魔法をかけながら一同は街に戻っていくのであった。

「駄目だな、あの戦い方は。」

ひたすら真っ暗な闇の中、しかし自分の体と喋りかけてくる相手の体だけはハッキリとこの目で見る事が出来る不思議な空間。

マルクの心の中で、再び対話が行われようとしていた。

「……何がダメなんだ。」

「お前が、魂と肉体を離別したことだ。いかなる魔法にも適応できるあの鎧にも、本来の使い方とは別の使い方をされれば今のような不具合が起こる。」

「は？だったらどうしたら良かったんだよ。」

「止まった時の中を、動かないでおくことだ。お前が無理を行ったせいで、肉体に負荷がかかっている。」

目の前のグラトニーもどきが言った言葉に、マルクは頭を抱えながらも理解を示した。

本来、あの鎧は予め纏っておくことで力を発揮できる。しかし、マルクがやったのは魂を呪力で囲っておくことだった。

「ダメージのフィードバックか……」

「無論、それもあるが……それだけじゃない。魂を悪魔の力で囲ってしまったせいで、お前はもどきとはいえ一時的に完璧な悪魔になっていた。」

「……それに、肉体がついてきていない？」

「Exactly: 正解だ。これからお前は、悪魔との境界線が曖昧になる速度が段々早まっていくだろう。」

この戦争がいつ終わるのかはわからないが……終わる頃を覚悟しておくことだな。」

「…それまでは持つのか？」

「それは、人間としての肉体が、という意味か？それともマルク・スーリアという名前の『何か』の肉体が、という意味か？」

「それは……」

「どちらにしても、お前の体はいつまでも持つさ。それ以前に、寿命が伸びてしまうかもしれないな。」

そう言っつてグラトニーは姿を消す。今のマルクは、デイマリアとの

戦いと無理矢理悪魔化した事へのデメリットのふたつが一気に体にフィードバックされている状態だという。

確かに、段々と体が冷たくなっていくような感覚になっているが、これが悪魔化なのだろうか。それとも、単に死ぬ直前なのだろうか。

そんなことをぼんやりと考えながら、マルクは目を閉じる。体は冷たくなっていくが、思考は逆にクリアになっていく。死ぬ直前なのだったら、恐らく眠たくなる感覚があるはずだ…とせいぜい読んだ子供用の本の知識を思い出しながら、マルクはその空間を後にするのだった。

復活の強敵

「うっ……」

「マルク!?目が覚めた!?!」

「ウエンデイ…シャルル…シエリア……」

目が覚めたマルク。目の前には、泣きそうになっているウエンデイ達の姿があった。

そして、自分が泣かせたのだということに気がついた。そのことで申し訳ない気持ちになるが、自分の体が上手く動かないことに直後に気がついた。

「……なんか、体動かない……」

「当たり前よ…あんたさつきまで血が凄く出てたんだから……少なくとも、アンタの体は今までもに動ける状態じゃないわ……」

「でも、まさかいきなり開いた傷があんな一気に塞がるなんて……」

シエリアは驚きと嬉しさと苦笑を浮かべていた。ウエンデイもシャルルも涙を流しながら喜んでいたが、ただ1人マルクだけが真剣な顔になっていた。

自分の体が異常なことになっているというのが、理解出来たからだ。

「……あくまでも、効きづらいだけだからな。きっとウエンデイの力で治ったんだろうな。」

だが、マルクはその異常を語ることは無い。自分の体が、完全に人間を止めてしまう…前のような中途半端ではなく、完全な異形として成り立つということを、今は語らない。

「そう、なのかな……」

「いいじゃない、治ったんだから。」

「……そうだ!ハルジオンは!?!」

「…ラクサスさんが、もう1人のスプリガン12《トウエルブ》を倒したみたい。」

シエリアが戦況を説明する。その言葉でラクサスが無事であることに、マルクは少しほっとしていた。

デイマリアを倒した一同、そのことを踏まえて考えると残りのスプリガン12は8人ということになる。

「……まだ、頑張らないと……」

「マルクはもう少し休憩してないとダメだよ。まだ体も十分に動かないでしょ?」

「…いや、もうそろそろ動ける。頭がまだぼやっとするけど……大丈夫、動ける。」

マルクはゆっくりと起き上がる。立つことはまだ難しいのか、上半身だけ起こしていた。

未だぼーっとしているマルクだったが、しかしいつまでも休んでいられないのも事実である。

「……う?なんか、変な感じが……」

「へ……?」

マルクは妙な魔力を感じていた。この辺りに、新しいかつ強大な魔力を感じていたのだが……それらの中にいくつか感じたことのある魔力があった。

そして、その魔力は自分達にも――

「っ!!魔龍の咆哮!!」

マルクは咄嗟にブレスを放つ。そのブレスをかわす、1つの影があった。その姿をマルクはうろ覚えでしか覚えていなかったが、ウエンデイの方は見覚えがあった。

「え……!?!?」

「何これ?!?!」

「また会ったなあ……チビィ……!」

「ウエンデイ! シェリアとシャルル連れてここから離れろ!!今すぐいだ!!」

マルクはそう叫んで、ふらつきながらウエンデイ達の前に出る。今のウエンデイは魔力の消耗が激しい。同時に、体も傷を負っているの。今はシェリア達を守らせるようにするのがいいと感じたのだ。

「で、でも……」

「いいから早く!!今、この辺には死者が甦ってんだ!!下手したらシェ

リア達が巻き込まれる！

お前が守ってやってくれ!!」

「う、うん!!避難させたら直ぐに向かうよ!!」

ウエンデイはマルクの意味を読み取ったのか、そのままシエリア達を連れて離れていく。マルクは、可能な限り魔力を放出させながら目の前の敵に立ち向かう。

「思い出した…お前、冥府タルタロスの門にいた九鬼門の1人だったな。名前はよく覚えていないが…ウエンデイと戦っていた魔法すらも切る呪法の持ち主。」

「よく覚えてんじやねえか…俺アてめえに食われて死んだんだよ!!」

マルクは舌打ちをする。先程言った『死者が甦っている』というのは、真実である。

今マルクは知った魔力の気配を3つほど感知していた。

1つは、目の前の悪魔…エゼル。2つ目は、悪魔グリモアの心臓ハートのマスターフェアリーテイルかつ2代目妖精の尻尾ギルドマスター、プレヒト、そして同じく悪魔の心臓の1人アズマ。

それぞれ離れた場所にいるが、突然死者達が甦ってきていたのだ。確定でわかったのはその3人だけで、他も知った魔力をいくつか感知していた。

「アルバレスの仕業か…だが、死者を甦えらせる魔法だろうがなんだろうが…俺には、魔法は通じない!!」

「はん！そんなフラフラで何ができんだ!!」

「お前を、倒す事だ…!」

死者を甦らせる魔法ならば、場合によっては体内の魔力を取り除けば活動は簡単に停止する。

忽然と現れたようなものなので、恐らく魔力の塊の存在なのでは？とマルクは予想していたが…

「はあ、はあ……シエリア、ごめん私……」

ウエンデイは、シエリアとシャルルと一緒に逃げていた。正確に言えば、マルクに頼まれてシエリアを安全な場所に避難させていた。

しかし、ウエンデイは今直ぐにでもマルクのところに向かいたかったのだ。

「いいよ、ウエンデイは私よりも守らなきゃ行けない人がいるんだから。」

それに、シャルルが揃ってようやく3人でしょ？」

「シエリア……」

「気にしないで……私が魔法を使えなくなったのは、貴方のせいじゃない。」

ウエンデイ、私を守ることよりも……もっと大事なことがある、でしょ？」

ウエンデイは申し訳なさそうに顔を俯かせていた。それは、今からでもマルクの無事を確認しに行きたいこと、そして手助けをしに行きたいことの二つがあるからだ。

「行つて？ 私は、大丈夫だから。」

シエリアは、抱き抱えていたシャルルをウエンデイの頭の上に乗せる。そして、優しい瞳でウエンデイの顔を覗き込んでいた。

「友達なら、信用して？」

「……うんー！」

ウエンデイはシエリアに抱きついて、涙を流す。シエリアは苦笑しながら、ウエンデイを送り出す。

ふと、少しだけあれだけ思われているマルクが羨ましく思えてきてしまうのであった。

「ちっ……どうなってやがる……」

「ハハハッ！てめえ弱くなつてんじやねえのか!？」

その頃、マルクは傷だらけで膝をついていた。まず第1に、魔力を吸収すれば活動が停止するかと思われていたが、そのようなことは無く、どれだけマルクの魔力をぶつけても一切活動を停止する素振りはなかった。

そして、先程まで倒れていたせいで体が上手く動かないのも理由だった。相手の攻撃自体はある程度は防いでいるので、深い傷自体はそこまでなかった。

「まあいい……てめえを殺せばそれだけで満足だア!!」

「殺されて、たまるか……!」

振り下ろしてきた両腕に対して、マルクは蹴りを無理矢理入れて弾く。だが、相手の方が強かったのかマルクが吹き飛ばされるような形で距離をとっている結果になってしまった。

「はあ、はあ……」

マルクの心臓が、一際大きく鳴る。恐怖か、それとも高揚か。今マルクの頭には相手を倒すこと以外が思いつけないでいた。

どす黒い感情がマルクを支配していく。相手を殺し、その血肉を喰らい、糧とする。

悪魔としての性が、マルクをつき動かし始めていく。

「――」

「その目だ…その目が気に食わねえ…！俺を倒す気で嫌がるその目がア!!」

エゼルは、そんなマルクに激昂していた。食われたことを記憶しているのが、マルクにはよく分からないが……少なくとも、倒すべき相手だということには変わりはない。

ただ、殺していく……そこまでの発想になった瞬間、マルクの後ろから声が聞こえてくる。

「マルク!!」

「っ!!う、ウエンディ…?」

「てめえもだチビイ!!てめえも気に食わねえ!殺す殺す殺す!!」

「マルク!私達はいつでも一緒だよ!」

その言葉に、マルクの心が冷静になっていく。冷たく、ドス黒かった感情が晴れていくかのような……そんな感覚をマルクは覚えていた。

シャルルに飛ぶのを手伝ってもらい、ウエンディは飛びながら近づいていた。

「私達は、私達はいつまでも一緒にいるんだ!私にも、マルクにもその力があるんだ!」

「ウエンディ…」

「だから……もう一人にならないで!!」

「っ!!」

その言葉に、マルクは泣きそうになっていた。だが、泣いては行かない。ウエンディに笑みを向けて、そしてマルクはウエンディとシャルルと共に目の前の敵を倒すことに決めたのだ。

「よし……行くぞウエンディ!」

「うん!!」

ウエンディはドラゴンフォースを発動させる。そして、同じようにマルクも魔力を放ち出す。

背中に、守りたい人がいるのであれば……誰もが強くなれる。悪魔の力を使わずとも強くなれる……そう信じて、彼らはエゼルに向かつてそれぞれ魔法を放つ。

「天竜の碎牙!!」

「魔龍の鉄拳!!」

「がああああ!?この、クソチビ共がア!!」

ダメージを負ったのか、エゼルは更にブチ切れてマルク達に襲いかかろうとするが、突っ込んでくるエゼルをかわして、追撃を入れるかのようにマルクとウエンデイはそれぞれエゼルの両脇に即座に陣取る。

「お前は、既に負けてんだ…ウエンデイに……!だから、もう眠れ……!」

「滅竜奥義!!」

マルクは飛び上がって、エゼルの真上に飛ぶ。エゼルはそれに視線を誘導されて、ウエンデイの滅竜奥義に一瞬気が遅れてしまった。

しかし、一瞬とはいえ既に時既に遅しというもので、エゼルの周りは既に風で囲まれていた。

「照破・天空穿!!」

「ぐがっ……!?!」

ウエンデイの風の力により、エゼルは空高く打ち上げられる。そして、そこにはマルクがいた。

「魔光絶闇激!!」
まこうぜつあんげき

マルクはウエンデイの風の力でさらに回転を加えられて、いつもよりも激しい回転蹴りをエゼルに浴びせる。それは、ある意味で2人の合体技に近いものと言えるだろう。

「終わりだ……!」

「が、は……!」

エゼルは断末魔を残すことも無く、そのまま体を消していった。着地したマルクは、着地後すぐにウエンデイに抱きしめられていた。

「よかった…無事でよかった……!」

「……ごめんな、心配かけて。ちよつと傷があるだけだから、あんまり気にすんな。」

「うん、うん……!」

死者を復活させる魔法、とはまた別の魔法。肉体に魔力を付与させ

て操っている訳でもない、かと言って魔力で構成された訳でもない。あれは、どう足掻いても生きている頃の本人なのだ。だが、何故そんなものが出てきたのかがよくわからない。

「……まだ、警戒しておかないとな。」

ウエンデイを抱きしめて、マルクは海の方を睨みつける。恐らくやったのはアルバレス。だが、どういう魔法かわからない以上……ただただ戦っていくしかないというのが現状である。

「……マルク、一旦戻ろう？みんなボロボロだし……」

「そうだな……ウエンデイも俺も……みんなボロボロだ。傷を直して、ゆっくり体力を回復させないとな。」

敵は、恐らく瓦解して行くだろう。幹部級であるスプリガン12を2人も倒しているのだ。上がいる組織は、基本上がやられてしまえば砂の城のような脆さも同然となる。

「そうだね……戻ろう。」

2人は手を繋いで戻り始める。シャルルは疲れたのか、ウエンデイの頭の上でぐっすりと眠っているが、2人はそんなシャルルを見ながら残党に気を使いつつ一旦戻っていくのであった。

勝利の余韻

ハルジオンの空が赤く染まる。まるで、勝ったものに見せる勝利の夕焼けと言わんばかりに、立派な緋色の空を見せつける。

第一に、ハルジオンには3人のスプリガン12トウエルブがいた。時を止める魔法を使い、時の神であるクロノスを接テイクオーバー収めた戦乙女、デイマリアア。

機械の体を持ち、相手の弱点に合わせて多種多様な攻撃方法を持つ錬金術を扱う一族、マキアスのエリートであるワール。

そして、対象の記憶の中から強き者の記憶を出してきて、それを復活させる魔法を持つナインハルト。

ハルジオンには、この3人のスプリガン12が存在していたが、それぞれが皆敗れていった。

デイマリアは、時の狭間に存在するウルティアの力を借りて、サードオリジン第三魔法源を解放したシエリアと、ウエンデイとマルクによって敗北。

ワールは、機転によりエラーを起こし、そしてラクサスが起こした特殊な雷撃によって、バラバラに粉碎されてラクサスによって敗北。

ナインハルトは、カグラ、エルザ、ジェラルルの3人と戦っていたが、エルザの記憶から、闇ギルド髑髏会の遊撃隊所属『三羽鴉』の1人である斑鳩と、グリモアハート悪魔の心臓の1人であるアズマ、そして冥府タルタロスの門の1人であるキョウカの3人を復活させていた。その3人は、エルザの気迫によって消されたが、3人との戦いで傷ついたジェラルルが激昂、天体魔法である七星剣グランシャリオを使用することで一撃でナインハルトを倒したのだった。

そして、この戦いでスプリガン12を3人倒したことで残るスプリガンは5人となっている。完全に破壊されたワールを除けば、未だ捕虜になっていたりするがそれでも倒したことに変わりはないのだ。妖精フェアリーテイルの尻尾メンバーである一同は、一旦ハルジオン攻略の本部に赴いて、休みを取っていた。傷だらけの体も、ウエンデイが魔法で塞いでくれるので、どうにかこうにか治療が出来ている。

「う……」

「目が覚めたか。」

目が覚めたエルザの顔をのぞき込む様にカグラが顔を向けている。エルザは最も傷が深かったが、ウエンデイのとおかげで傷は残らない迄には回復するとの事だ。

「傷が深かったので、完全に回復するまで時間がかかります。」

「大丈夫、キズは残らないから。」

「そういうお前らもボロボロじゃねーか。」

グレイが、ウエンデイたちに向かって茶化すように言う。激戦を繰り広げたのはどこも同じであり、誰もが一緒なのだ。こうして安心して生きていることを、確かめあえるのはいい事である。

グレイが服を着ていれば、もつと良かったのだろうが。

「グレイ様、服は…!？」

「そういうジュビアさんも服着てください！マルクが居るんですから!!」

「移ってきてますよね、脱ぎ癖。グレイさんのそれって空気感染でもするんですか…?」

両手で目を完全に塞ぎながら、マルクはジュビアに注意を促す。グレイもジュビアも下着一丁の姿でいるのだ。マルクの目には、まだ移すのは早い代物である。

「みんな……た、戦いはどうなったのだ!!」

エルザが、戦いの行方を一同に尋ねる。それを聞かれたグレイは、ニツといい笑みを浮かべて、結果を報告していく。

「ハルジオン奪還は成功だ。港を取り戻したんだ。ジェラール達はまだ残存兵を追っているが、もう全滅まで時間の問題だろうな。」

「そうか……」

「俺達は一旦ギルドに戻る。」

「ギルドのみんなが心配ですし……」

「ここはマーメイドとラミアに任せな。」

人魚の踵の1人であるリズリーに言われて、動けるメンバーは1度ギルドに戻ることにした。余程のことがない限りは、大丈夫だろう。

「ならば私も……」

「お、お前はまだ休んでなきやダメだ!!」

「そうは言ってられん……ラクサスはどうした？」

「あいつはバケモノ、2連戦でさすがにダウンしてる。」

「確か……スプリガン12の独りを倒したあとに、悪魔の心臓のマスターと戦ってたんですよね……しかも1人で。」

マルクはラクサスの戦いは全て1人で行われていたことに、ただただ驚いていた。

スプリガン12の後に、ギルドマスタークラスなのだ。当然、その疲労度も半端なものでは無いだろう。オマケに、ラクサスの体は魔障粒子で犯されている。それも踏まえると、凄まじいものだったに違いない。

「……そうだよな、考えたらとんでもねえ無茶してたんだなこいつ。」

グレイがラクサスの顔を見ながら考え込む。どれだけ無茶を犯したのかは知らないが、今くらいはゆっくり寝かせてやろうという気遣いをしているのだ。

「……エルザ。その、なんというか……済まない……」

「何の話だ？」

カグラが顔を真っ赤にしながら、エルザに謝っていた。しかし、その顔が真っ赤になってるのが、恥ずかしさのそれであることは何となくエルザも察しがついていた。

他の者も、ただの謝罪のようなものだと思ってそのまま思い思いに話していた。

「っ?!……っ?!?!」

突然、カグラはエルザの頬を両手で軽く挟み込んだ。その時点でエルザは軽く驚いていたが、そこから更に驚くべきことに……なんと、カグラはエルザに口付けをした。要するに、キスである。唇同士の、キスである。

「「……!!」」

「……これで許せ……」

「……………え?」

当の本人であるエルザは言わずもがなだが、その光景を見た一同もまとめて驚いていた。

未だにウエンデイに目を抑えられているマルク以外は。

「カカカカカカカグラ!?!」

「え!?!カグラちゃんそつち!?!」

「い、いや違うぞ!?!今のはそういうあれでなくてだな!!その、なんとうか……」

「え、何…?ウエンデイ見えない、今何が起こったのか全くわからない……」

「マルクにはまだ早いよ!!」

1歳差とはいえ、一応はマルクの方が歳上なのだが、ウエンデイは目の前の出来事に関して錯乱していた。

「か、カグラ…?い、今のは……」

真つ赤に赤面して、何故か泣きそうな顔になっているカグラだったが、エルザがさらにその上に行くほどの真つ赤な顔で、カグラに今の行動の意味を聞いただしていた。

「そ、その……か、関節キスというか…同性だから、ノーカンだけど……間接キスならありかと……」

「待て待て待て待て……ちよ、ちよつと落ち着いてくれ。な、なんでこうなった?」

グレイが困惑しながらカグラに問う。一体何がどうなってそうなったのか。何もかもが理解不能である。

「……その、相手の攻撃でジェラールと一緒に海に落ちて……」

「……あの時?あの時に一体何が……」

「そ、その——」

つまりは、要約すればこうなる。ナインハルトの魔法により、蘇った死人達の攻撃を浴びて、1度カグラとジェラールは海底に沈められた時があったという。

その時、カグラはジェラールに庇われて無事だったのだが、当の本人であるジェラールは瓦礫の下敷きとなって意識を失っていた。カグラは1度見捨ててエルザの援護に向かおうと考えたが、その時に

守ってくれたジェラールを助けて、一度陸に上げてから人口呼吸を行ったらしい。

今思えば、それがジェラールとのキスでは無いか？と意識し始めたカグラ。だが、エルザがジェラールを好いているのは分かっていたので、今のような行動に出たのだという。

「そ、そうか……そうだったのか……」

「カ、カグラちゃんって……すごくカッコイイけど……」

「うん、偶に抜けてるところあるわよね……」

「カグラの天然さ……舐めちゃあいけないねえ……」

エルザが納得しながらも、何故そうなったのかはイマイチ理解できないままひとまず返事を返す。

同じ人魚の踵のメンバーは、カグラの意外な一面というかその天然さを目の当たりにしてどうしていいかわからないと言った感じだった。

「な、何かおかしかったか？」

「……多分、人口呼吸はキスのうちに入らないと思います……」

ウエンデイが、惚けながら答えていた。因みにサラツと、目だけでなく耳までマルクは覆われていたので、本当に何の話だか全くわからないでいた。

一応塞がれていても聞こえることは聞こえるのだが、それでもやはりなんの話しか全くわからない。

「……あの、ウエンデイ？なんでみんな慌てて……」

「……」

「ウエンデイ？ウエンデイ……？」

惚けているため、マルクの声はウエンデイに届いていなかった。故に、目と耳の拘束が解けるのは、完全にこの話しが終わったあとのことであった。

一同はギルドに着くまでの帰路を辿っていた。だが、エルザがどうしても帰りたいと言うので、仕方なくグレイが背負って帰ることになった。立って歩くことすらままならないので、最前の処置である。「まあ大丈夫だとは思いますが……今ここで敵に襲われたら厄介ですね。」

「真っ先に俺が狙われるだろうからなあ……」

「グレイ様は私がお守りします!」

他愛もない話を警戒しながら進んでいく。街は静かなもので、破壊された後がこの街の痛みを訴えているような気がしていた。

「……ん?なんか眩しくなってきましたん?」

ふと、マルクが眩いた。最初は気のせいかと思っていたが、それは間違いだと直後に思い知らされる。

「確かに……」

「おい、空が……!」

「光……!?!」

段々と光は強くなっていく。まるで、影すらも残さないかと言わんばかりの光が、フィオーレ全体を包み込むかのように。

「おい、なんかヤバイぞ!!」

「くそっ!!皆さん早く俺の近くに!!」

マルクが念の為自分の魔力を使ってバリアを形成する。ないよりはマシ程度の代物なので、仮にこの明るさの正体がフィオーレ全体を吹き飛ばす爆発魔法ならば、全く無意味な行動になってしまうだろう。

それでも、やるしかないのだ。

「くそ、眩し——」

そして、その台詞の後にあまりの眩しさに全員目を瞑ってしまうの

であった。

「……………ん？…？ど、どこだこ…？……………」

マルクは見覚えのない砂漠に来ていた。だが、今の魔法により飛ばされたのだとしたら、どうにもおかしな点だけが残ってしまう。

「マルク！大丈夫!？」

「ウエンディ……………シャルル…………… 그레이さん達は？」

「わかんない……………匂いも近くにないからはぐれちゃったのかも。」

「俺の魔法で防げなかった……………？という事は、ワープ系の魔法じゃないってことか……………？」

砂漠に飛ばされているのに、転移が関与しない魔法となると本当に変な話になってしまう。

マルクはこの魔法がどんな魔法なのか検討も付かなかった。

「ただ、おかしな点ならもうひとつあるわよ。」

「なんだよシャルル。」

「あんたの足元、見て見なさい。」

「足元……………？」

マルクはシャルルに促されて、足元を見る。よく見れば、足元はハルジオンの通路と同じ石レンガで作られていた。それも、綺麗に円形になっており、まるでこの部分だけがくり抜かれたかのような状態になっていて、マルクはこの地面が自分達と一緒に飛ばされてきたと考えていた。

「……………の割には、 그레이さん達がない。」

「多分、魔法自体の効果はちゃんと防げてたのね。けど、適当なところに飛ばされるのは……」

「魔法の直接的な効果じゃなくて、間接的に起こることって話か……」
グレイ達ともはぐれて途方に暮れるマルク達。だが、ここで立ち止まっただけでも何も進まないのだから、ひとまず歩くことにしたのであった。

声

妖精の尻尾フェアリーテイルに帰る途中、突然謎の光に包み込まれたマルク達。その魔法により、マルク、ウエンディ、シャルルの3人はグレイ達とはぐれてしまう。

匂いもせず、周りから声がある訳でもない。どうやら、完全に光によって飛ばされて強制的に別れさせられたということらしい。完全に途方に暮れて、ひとまず歩いていくことに決めたマルク達だったが、ウエンディ達に異変が起きる。

「……何、この声……」

「ウエンディ？ どうした？」

「マルク、あんた聞こえないの？」

「シャルル……？」

ウエンディとシャルルは、何やら謎の声を聞いていた。しかし、マルクにはその声が聞こえていない。

魔法による通信だと考えれば、ウォーレンの念話という線が濃厚だが、しかしウエンディが声で驚いているところを見ると、どうやらウォーレンの念話では無いらしい。

「ギルドは……あっちね。」

「なんだ、方角がわかるのか？」

「私たちの頭の中に聞こえてくる声が教えてくれるのよ。ちゃんと味方だと思っ**て**いいわよ。」

「味方、か……まあこの際なんでもいい。ギルドに迎えるだけでいいんだからな。」

謎の声に従って歩き始めるマルク達。この際、味方だと思えるものはなんだ**って**信用していかないと、どうしようもない。

「よし、急ぐぞ。あの強制的にはぐれさせられた魔法が敵のものだったら……ギルド、**と**いうか初代の体が危ないかもしれない。」

「まったく同じこと**言**ってたわね、私達の頭の中に聞こえてくる声も。」

全く同じことを言っていたという事に、少し苦い顔をしながらもマルク達はギルドに向かうのであった。

「凄いことになってんな妖精の尻尾!!」

「お待たせしました!!」

「ウエンディー!マルク!!」

「シャルル!!」

大量の敵、そして、中心には盛り上がった土地。そして、まるでそこが玉座だと言わんばかりにそびえる妖精の尻尾。

土地が完全に変わっている。それが、相手の強大さを思い知らせる。

「天竜の咆哮!!」

「魔龍の咆哮!!」

2人のブレスが、敵軍団を薙ぎ払う。圧倒的な暴風と、魔力を食らう力が敵軍団を無力化していく。

ウエンディ達が到着した後からも、続々と妖精の尻尾メンバーは集結してくる。そして、他ギルドのメンバー達も参戦してくる。

だが、簡単に通すほど世界は甘くはないのだ。

「っ!?なんだあれ!!」

「地面から……ドラゴン!?!」

突如、敵の中心からいくつもの竜の形をしたオーラが湧き出始める。そして、その頂点から一人の男が飛び下りてくる。

「ここから先には行かせねえ……ゴッドセレナ(屍)ゴッド降臨!!」

「ゴッドセレナだと!？」

「ではさっさといかせてもらう! 煉獄竜の炎熱地獄!!」

「炎の滅竜魔法!？」

突如現れたゴッドセレナ。そして、すぐさま攻撃を仕掛けるがナツと同じ……いや、質でいえば煉獄と称される程の火力である。

簡単に言えば、炎の質としてはナツよりも上だろう。しかし、格上ではない。ハッキリといえば、ナツの餌である。無論、魔法である以上マルクの餌でもある。

「メシだーっ!!」

「近接技じゃなくていいのかいゴッドセレナ!!」

2人は飛び込んで、ゴッドセレナの攻撃を全て喰らい尽くす。だが、ゴッドセレナに焦った様子はない。

「へえ……だったら……海皇竜の水陣方円!!」

そのまま、片手で別の滅竜魔法を発動させる。2つ目の滅竜魔法、ラクサスやコブラと同じ魔水晶ラクリマを宿している2世代目の滅竜魔導士だろう。

「炎と水の魔法を同時に!？」

「この水、すごい魔力……それに、炎が混ざって……!？」

「——無駄無駄無駄!!」

マルクはゴッドセレナの起こす魔法を尽く食らっていく。近接技を行わないのは、面倒臭いからかまた別の理由があるのか。

それは分からないが、少なくともゴッドセレナは完全に遠距離で技を行っていた。

そして、ある程度離れていればマルクは相手の魔法を問答無用で食うことが出来る。

「へえ、いいねえ……なら! 暴風竜の——」

「まだ同時に扱えるのか!？」

「問題ありません! 食います!!」

「吟風弄月!」

今度はブレス技だった。だが、マルクは問題なく喰らおうとするが……突如、大爆発が起こる。

「くっ……」

「なんだ……!?!」

「なんだ、今のは……魔法が消え……いや、割れた!?!」

立ち込める砂煙……そして、マルクとゴッドセレナの間一人の男が割り込んでいた。

「……よオ。」

「——ギルダーツ!!」

「腹減ってんだ……早くギルドに帰らせろや。」

ギルダーツ、妖精の尻尾最強の魔導士である。その登場に、ゴッドセレナは全く面白くなさそうな顔をしていた。

「ギルダーツだあーっ!!」

「ギルダーツが帰ってきたーっ!!」

ギルダーツの帰還により、湧き上がる妖精の尻尾。来るだけで、味方の士気が上がっていた。

「カナちやくん!」

「キメエよ目の前に敵いるだろうが!!」

「おっ! そうだった……だが、こいつには生きた人間の魔力を感じねえ。生きてりや、それなりの魔導士だったに違いねえが……これじゃただの雑魚だ。」

「ははっ! 言ってくれるじゃねーの……この八竜のゴッドセレナを相手に……!」

そして、2人はぶつかった。2人の強大な魔力が激突した影響で、味方まで被害を被っていた。

「ふあっ!!」

「なんなのよこのデタラメな魔力!!」

「ギルダーツさん! それ俺が相手してたのに!!」

ただ1人、マルクだけが吹き飛ばされながらギルダーツに対して文句を言っていた。無論、マルクの力はゴッドセレナとかなり相性がいい力だろう。

だが、ゴッドセレナ自身も既にギルダーツを目標として定めてしまったために、戦うのは無理となっていた。無理にわりこめば、ギル

ダーツの魔法の餌食である。

「……大丈夫？ロメオくん。」

「だ、大丈夫じゃないよウエンディ姉……」

ウエンディの声がしたので、マルクは後ろを振り向く。どうやら、敵の力と数を見てロメオが臆してしまったようだ。

それを、ウエンディが励まそうとしているらしい。

「戦いが始まるまではあれだけ息巻いてたのに……こんなの……こんな圧倒的な数の……怖いんだよ!!」

「情けないよ……ずっと足が震えてる。」

「怖いのは、きつとみんな同じだよ。だから一緒に頑張ろ?」

マルクは、黙ってロメオの頭に手を置く。天狼島に行く前までは、目線の下だったロメオの頭が、こうして自分の目線と同じくらいの身長になってるのに、改めて時間の経過を感じていた。

「ロメオ、敵を見る。確かに数は多い……けどな、あいつらは俺達を怖がってないんだ。」

「それが、どういうことか分かるか?」

「へ……?」

「恐怖を感じてないやつは、俺達に勝てると油断してる。俺達を自分で倒せると考えてしまってる。」

「そんな奴らはな……負けてもこう言うんだ。『どうせ強いやつが倒してくれる』『負けるとは思ってなかった』ってな。」

マルクの言葉を、ロメオは目を見てしっかりと聞いていた。マルクの目が、敵を見つめていたから。

「だがな、俺達は怖いと思ってる。けど、それを乗り越えて……なお思ってるんだ。『家に帰りたい』ってな。」

足掻いて足掻いて……足掻き続けられる……だから、俺たちの方が気持ちで何倍も優ってる。怖いって感情を、乗り越えろ……!」

そう言って、マルクは敵陣に1人飛び込んでいく。皆と一緒に。その言葉と、マルクの勇気がロメオに恐怖を乗り越える力を与えた。

「オオオオ!」

「みんなが戦ってる!ギルドへの道を作るために!!負けられねえぞ!」

!!

「通すかー!!この先の陛下の元には行かせんぞー!!」

皆がぶつかつてる中……ギルダーツとゴッドセレナの戦いはもう
終わりを迎えていた。

「魔法が、割れ……!」

「惜しいな……本来の力のアンタと戦ってみたかった。破邪顕正『一天』
!!オラア野郎共……ギルドは目の前だ!!進めええええ!!」

ゴッドセレナは吹き飛ばされ、掻き消える。ハルジオンでマルクが
見た、死人を蘇えらせる魔法によって蘇った、屍人だったらしい。

「邪魔だどけえええ!!」

マルクの魔力が、戦場の敵の魔力を根こそぎ奪っていく。そうして
ぶつかり合つていく中で、マルクは魔力を感じとっていた。

「この魔力……」

「マルク?どうしたの?」

「……どっかに、あの時間を止める奴がいるな。」

「それって、シエリアが倒した……」

マルクは舌打ちをする。シエリアが、未来の可能性全てを投げ打つ
て倒した魔導士デイマリア。どこかに、そいつがいると聞いてキレか
けていた。

「……あいつを倒せんのは、今は俺だけだ。あの空間の中で動けるの
は、俺みたいなやつか、余程の強さを持ったやつしか居ない。」

そう言いながら、マルクはENDの事を思い出していた。デイマリ
アが唯一恐れていたであろう悪魔、END。

彼女は、あの悪魔ならば自分の止まった時の中を動けると言ってい
た。そんな奴が、あまりこの戦争に介入して欲しくはないのだ。無
論、同様にアクノロギアも、である。

「けど、マルク……」

「安心しろ、多分向こうも多少のダメージはあるだろう。それに、今度
こそは……!」

マルクは倒しきると、心の中で覚悟を決める。だが、ウエンデイは
別の心配をしていた。

仮にマルクが倒しても、その戦いでマルクの体は再び傷を負うだろう。そうしたら、また倒れて血を流すかもしれないのだ。

「……信用して、いいの?」

「今度はあんな血まみれになったりしねえよ。」

敵を殴り飛ばしつつも、マルクは笑顔を浮かべてウエンデイの頭を撫でる。

その言葉と、表情をウエンデイは信じきることにした。

「……ま、その前に……!」

「この敵をどうにかして倒さないと!」

大量にいる敵を前に、マルク達は気持ちを切り替える。1万、いや下手をすれば100万は優に越えそうな数の敵を前に、一切の恐れも何も無かった。

「……」

その光景を、1人見下ろす人物がいた。妖精の尻尾のギルドのてっぺんから、ギルドメンバー達が戦う姿とそしてスプリガン^{トゥエ}12^{ブル}が戦っている姿を拝見している人物が。

息を潜め、屋根にうつ伏せでいて、出来る限りの気配を消している。

「……」

その正体は、マホーグであった。彼女は、敵の中心に偶然にも潜り込んでしまっていたのだ。

フィオーレ中が戦いになっている今、どこぞの誰かの魔法により今いた場所とは全く違う場所に飛ばされたマホーグ。最初こそ移動し

ようと思っていたのだが、なんと自分がいた場所は妖精の尻尾のギルドの屋根の上だったのだ。

オマケに、スプリガン12もいるせいで迂闊にこのエリアから動けないでいた。

「…………どう、しよう。」

ぼそつと呟くマホーグ。しかし、そこには誰もいないが故に呟ける一言だった。

だが、まともな動きをすれば下にいる魔導士…………緋色の髪をしたとんでもない魔力の持ち主に、ゼレフに感知されてしまうだろう。

いや、もしかしたら既にバレていて、無視してくれているだけかもしれない。

「…………」

耳を済ませると、下からは3人の声がする。1人はゼレフ、もう1人は緋色の魔導士、3人目は少女のような声。

「…………話を聞いている限り、女の子の声が、ゼレフの目的…………？」

そして、今下で少女のような声の持ち主は魔力を吸い取られているようだ。これが完全に終了してしまったら、どうしようもない。

「わ、私が…………やらないと…………！」

戦争を止めるために、マルクを守るために、今1人の無謀な愚者が敵中心に挑みかかろうとしていた。

決死のチャンス

マホーグの下には、3人の魔力。だが、今迂闊に飛び込めば即座にやられて終わりだろう。それは、彼女の魔眼を持ってしても変わらな
いことなのだ。

彼女の魔眼は相手の行動する先に何が起るかの判別である。だが、それが見えたとしても、広範囲による魔法を打たれてしまえば……と考えてしまつて迂闊に動けないでいた。

「…ん？」

マホーグの目に、一人の男の姿が映る。黒い髪に、真っ黒な服。その上から装飾の施された服は、どこか気品を思わせる。

だが、彼から感じる魔力は強大というにはあまりにも異質が極まっていた。1度触れてしまえば、死んでしまいそうな予感さえしてくる。

だが、触れなければいい。そして、この土地の形状から察するに、逃げる事が出来れば、あとは合流するだけである。

そう、今いるのは少女ともう1人のアルバレスの魔導士。その気になれば――

「下の子を、連れて…逃げられる…！」

希望的観測、というにはあまりにもお粗末な作戦。だが、相手が1人ならば運が良ければ逃げられる。このくらい楽観的な発想に転換しなければ、自分はいつまで経つてもここから逃げることは出来ない。

彼女の魔法の一つであるショートワープを使えば、音もなくギルドに潜り込むことが出来る。

運が良ければ、机の下にでも隠れることが可能だろう。その運を信じて、マホーグは自分の魔法でギルドの中に入り込むのであった。

場所は代わり、今マルク達は的に向かって進軍しつつあった。

ナツ達が先行してどンドン先に進んでしまうため、マルク達は置いてけぼりをくらっていた。

「む……」

「マルク？どうしたの？」

そして、ウエンデイ、シャルルと共に進んでいたマルクは、かなり先の方で強大な魔力を感じた。恐らく、スプリガン12トウエルブだろうということは容易に想像ができた。

「……でかい魔力、けど質的には感じたことの無い魔力。まだ出会っていないスプリガン12が前にいる。」

「ナツさん達なら大丈夫だと思うけど……」

「……ただ、怖いことがある。」

「怖いこと？」

「スプリガン12は、俺達があつたやつのお半がかなり簡単な魔法だ。だが、それを鍛え上げたのか持ち前の才能なのかは知らないが、かなり上位のレベルにまで引きあげてる。」

それこそ、俺達が見た事のないレベルにまでな。」

砂を操る魔法を、極限まで引きあげたかのような強さを見せたアジール。色々な砂の種類の魔法を使うことで、圧倒的な強さを見せつける。

物の大小を変えることが出来るブランディッシュ。それを島ごと行えたり、見えないものまでもを遠隔で小さくすることが出来るその精密さと魔力は圧倒的なものである。

「俺達が戦ったあの魔導士……デイマリアは、テイクオーバー接収で神の力を行使すること、時間をとめられるようになっていた。

ま、スプリガン12の中には例外はもちろんいるけれど……」

マルク達は見ていないが、他にもその系統に属するものは何人かはいるのだ。

電気が弱点ながらも、それを克服して自分の力に変えることを覚えたマキアスのエリートであるワール。

ただ物を見えなくしたりする魔法を、見えないものを感じとったり、色々な武器や体術を駆使することで成り上がったスプリガン12の一人、ジェイコブ。

判明している中で、これらが単純なものからの昇華である。

「で、だ……判明していないのは魔導王オーガスト、そして冬將軍インベル。名前すらわからないのがあと2人……ってところか。」

「それで、何が怖いのか？」

「どんな魔法も駆使できるオーガストはともかく……仮に、冬將軍インベルの魔法を予測するとしたら……多分、氷の魔法だ。」

「それって、氷の造形魔法ってこと？」

「いや……単純な魔法を昇華させたものだって考えたら……触れたものを氷に変換するとか、あるいは何でもかんでも凍らせてしまおうか。」

「っ！」

マルクの予測に、ウエンデイは背筋が凍るような思いだった。ブランドイッシュや、アジール並の進化を果たしたと考えると、炎を用いても溶けない、あるいは炎すらも凍らせることが出来るかもしれない魔法になっているかもしれないのだ。

「……相手してみないとわからない。けど、もしそのどちらかの場合だったとしたら……勝てる人はかなり限られてくる。」

「…… 그레이さんと、 ナツさん？」

「……後はクオーリの野郎だ。属性が氷である以上、 그레이さんとクオーリのやつは絶対に勝つ。」

少しだけしかめっ面をして、クオーリの名前を出すマルク。認めたくはないが、しかし彼の力と実力はスプリガン12に勝てるかもしれないというところを、マルクは信用していた。

「……氷。」

「にしても、本当に単純な魔法を昇華させたやつばかりだ……強力な魔法を使うのならまだしも、こういうタイプはタチが悪い。」

「どうして?」

「本当の意味で強いから……魔法を熟知しすぎると言っても過言ではない。」

「熟知しすぎてる、か……」

「っ……!?!」

「シャルル?どうしたの?」

頭を抑えるシャルル。マルク達は、それが単なる頭痛ではなくシャルルの持つ未来予知の能力が発動した、ということを知っていた。

「……マルク!ウエンデイ!スピード上げて!ジュビアが危ないわ!!」

「何っ!?!」

「シャルル!どこかまで分かる!?!」

「このまま真っ直ぐで構わないわ!!」

シャルルに言われるがままに走り始めるマルクとウエンデイだったが、不意にその2人の鼻が匂いを感じとった。

「この匂いは……!」

「ジュビアさん!?!」

「血の匂いこそ、辺り一面に漂ってるけど……やばい!この量はやばい!!」

2人の鼻に、濃い血の匂いが漂ってきていた。それがジュビアのものとともに二人は判断したが、その匂いがとても濃いことに気がついた。

血の匂いが濃いいうことは、それだけ血を出してしまっているということになる。

つまり、何らかの理由でジュビアはおびただしい量の血を出血していることになる。

「ウエンデイー!急ぐぞ!!」

「うん!!」

そうして2人は、自分の速度を上げてジュビアの元へと急いでかけ

つけに行くのであった。

「うっ……」

「ダメです、まだ起き上がらないでください。」

ジュビアは、目を開けた。しかし、血が大量に大概に出たことで頭がほとんど回っていないかった。

それに加えて、傷事態も深いためにウエンディは動かない方がいいと忠告を入れた。

「この子達が見つけるのもう少し遅かったら危なかったわよ。」

「ううん、シャルルの予知能力で見つけたんだよ。」

「何があったかは、今聞けませんけど……この匂い、スプリガン12と戦ったんですね……」

「……ジュビア、生きてるの？命の恩人です……ありがとう3人も。」

ジュビアはゆっくりと起き上がってから、ウエンディ達に向かって土下座をする。

当たり前のことをしたただけなのに、土下座までされたおかげでマルク達は少し慌てていた。

「いえいえ、それが私の役目ですから。」

「シエリアの分も、必ずみんなを守ります！」

そう言って力強く笑みを浮かべるウエンディ。だが、マルクは少しそのことを悔やんでいた。

自分があの時ディマリアを倒しきれていれば、シエリアが魔法を失

うこともなかったし、こうしてウエンデイが無茶をすることもなかったのだ。

そう考えると、今ウエンデイに無茶を強いているのは自分の責任なのだと、思ってしまった。それ故に、強くこうも思っていた。『ウエンデイに無茶をさせる前に、戦争を終わらせる。』と。

「ジユビア：気を失っている間、グレイ様に口付けをされたような気がします。」

「気の所為よ、きつと。」

「っ！そう言えばグレイ様は!?グレイ様は無事ですか!?グレイ様を……探さなきゃ。」

「まだ動いちやダメですよ。」

「このままじゃ、グレイ様が壊れちゃう……」

ジユビアの頭の中には、グレイへの心配でいっぱいになっていた。その言葉に、マルクも探しに行くか考えているが……ふと、異質な魔力を感じとっていた。

「っ!？」

「マルク?どうしたの?」

「……遠くの方で、でかい魔力を感じとった。いや、これは……呪力、か?けど、そこにグレイさんもいる……まさか、スプリガン12には悪魔もいたのか!?!」

「そんな……少なくとも、ジユビア達が相手したのは人間でした……」

ということは、まだ見ぬスプリガン12か……はたまた全く別の要因か、しかし、このままではグレイが壊れてしまう、というのもマルクは直ぐに理解ができた。

「ウエンデイ!俺はグレイさんの援護に行ってくる!!」

「うん!私もあとから追いかけるから!!」

ナツ達が進軍してくれたおかげか、こちら辺一体には敵がいなかった。おそらく、前に進んだ者達に対して攻撃を集中させているのだから、マルクは考えた。

ひとまず、グレイの加勢に行つて敵を倒そう……この時のマルクはそう考えていたのであった。

全速力で飛ばして、マルクはグレイがいる場所にたどり着いていた。だが、グレイが戦っていた人物が二つの意味で驚愕の人物だったからだ。

「ナツ、さん…!?!」

グレイが戦っていたのはナツだった。しかし、目の前のナツからは魔力以外にも呪力…つまりは悪魔の気配を感じとっていたのだ。

誰かに操られて…といった話ではない。今まで感じたことの無いくらいの、強い悪魔の気配をマルクは感じていたのだ。そう、冥府タルタロスの門のマルドギール以上に強い悪魔の気配を、ナツは漂わせていた。

だが、問題はそれだけではない。グレイは、そんなナツに対して滅悪魔法を使っていた。つまり、今悪魔の気配がするナツに対して…悪魔を滅する魔法を使っているということになる。

「あん、たらは……」

ナツがグレイを、グレイがナツを。これは、いつも起こっているギルド内での喧嘩ではない。あんなもの、まだ仲がいい範疇で起こりうることである。

だが、目の前で行われているのはただの殺し合いである。ギルドメンバー達で、殺し合いを行っているのだ。

「あんたら、は……!?!」

どちらも、正気を失っていた。何かに取り憑かれたかのように、目の前の相手を本気で殺そうとしている。こんな時に、こんな時に……

とマルクは震えながら拳を握りしめていた。

「あんたらは!!今、こんな時に何やってんだ!!」

シエリアが、ウエンデイが、シャルルが……皆が紡いだ道である。それは、こんな所で喧嘩をして同士討ちする為ではない。

マルクの声は、2人には届かない。いや、届いていても無視されているだけの可能性だってあるのだ。

ナツの炎がグレイを焼き、グレイの氷がナツを凍らせる。このまま続けてしまえば、2人とも本当に死んでしまうだろう。それだけは、それだけは止めなくてはならない。

「そんなに喧嘩したいのか!あんたらが、あんたらがこんな時に喧嘩してて……ふざけんなよ!!」

マルクは飛び出した。その体からは、呪力も魔力も彼の体の中にある力全てが漏れだしていた。

2人を、正気に戻すために……マルクは仲間に拳を振るおうとしていた。

「ふんっ!!」

「ガッ!!」

「ぐっ!!」

「何が見えてんのか知らねえが……そんなに殺し合いしたいんなら妖精の尻尾辞めちまえよ!!あんたらが殺し合いするためだけに、この戦争をしてるんじゃないぞ!!」

二人の間に入り込み、不意打ちで2人に1撃ずつ入れるマルク。肩で息をつかせるマルクだったが、グレイとナツは止まる気配がなかった。

「どけよ……俺は、ゼレフを……殺さなきゃなんねえんだ……!!」

「どけ、マルク……どかねえなら……!てめえもENDもまとめて殺す……!!」

「じゃあ殺してみろよ!今の正気を失ったあんたらに負けるほど、俺は弱くはねえぞ!!」

既に熱くなったマルクも加わって、この殺し合いはますます苛烈を極めていくのであった。

2つの悪魔と悪魔狩り

「オオオオオオオ!!」

「ガアアアアアアア!!」

ナツが炎を吹き出し、グレイが周りを凍らせていく。それら全てが魔法なので、マルクは全て吸い込んで無効化していく。

だが、仮にも片方は悪魔を滅するための氷なので、吸い込むたびに軽くダメージが入っていつていた。

「ふん!!」

「ガツ……!」

「だらア!!」

「ゴツ……!」

二人の魔法が直撃しないように、マルクは必死に避けながら二人に一撃ずつ与えていく。

熱くなっている2人を止めるために、マルクもまた全力を出していた。

マルクもある程度は熱くなっているが、しかし2人が言っていたことを頭で整理するくらいの冷静さは残されていた。

ナツ・ドラグニルという男の正体、それが最強の悪魔であるENDの正体である事。

グレイが誰かから聞いたのだろう、それが真実ならばナツから悪魔の気配がするのも理解できる範囲だった。

エーテリアス

ナツ

ドラグニル

E・N・D:それがENDの真の名だった。

エレガンス・ブライド

「モード悪魔龍! 傲慢 傲り!!」

ありとあらゆる魔法に適応する呪力の鎧を、マルクは作り出す。デイマリアとの戦いで使用した時は、かなり異質な状況だったので、色々マルクにも予想外のこと起きていたが、今回ならば正規の実力を発揮できる。

「邪魔だア!!」

「どけええええ!!」

片側からはナツの炎が、もう片側からはグレイの氷がマルクに襲い

かかる。片方でもまともに受けてしまえば、致命傷は免れない。

だが、マルクは受け止めた。

「なっ!？」

「っ!？」

2人は、止められたことに驚いていたが、マルクは間髪入れずに2人を力の限り地面に向かってぶん投げる。

モード悪魔龍の時は、力もかなり強くなっているので、たとえ成人男性だろうが容易く持ち上げて振り下ろすまでができてしまう。

「がはっ……!」

「ぐ、が……!」

「……いい加減止まってくださいよ。俺はあんたらを本気で殺したいわけじゃない。」

マルクは、鎧越しにグレイとナツに語りかける。これで、簡単に冷静になってくれるようならば、苦労はしないのだが……そうは問屋が卸さないと言わんばかりに、二人の魔力はさらに漲っていた。

「お前が殺したくなくても……俺はENDを殺さないといけねえんだ!!」

「俺は、ゼレフを……殺す……!もう、止まれねえんだよ……!!」

「……止まるには、どうしたら——」

マルクは鎧の中で渋い顔をする……だが、その隙を許してくれるほど、2人は冷静ではなかった。

握っていた2人の手から、それぞれの炎と氷がマルクの鎧の上から吹き出るように、襲いかかる。

「っづあ!？」

悪魔を狩る為の氷が、止まった時の中ですら動けるような悪魔の炎が、マルクの両腕を焼いた。

「なん、で……魔法には無類の強さを発揮するモードなのに……!」

この2人の思いが強いのか、マルクが未だ躊躇しているためか。どちらかの理由かもしれないし、どちらもあるのかもしれない。

だが、この一瞬だけがマルクを上回っていた瞬間だった。

「っ……!まだ暴れるってんなら……!もつと本気で止める!!」

「イーター・グラトニー」
暴食食らいを使えば、楽に2人を止められるだろう。しかし、それは息の根ごと止めてしまうという1番ダメな方法だった。

他も使えないことは無いが、周りに被害を巻き起こしたり、2人を本気で殺してしまう可能性の高いものだった。

だから、これでしか戦えない。

「うおおおおお！」

「ああああああ!!」

2人の魔法を、再度受け止めるマルク。2人の力が強いのなら、それを上回る勢いで自分も呪力を解放すればいい。

たった、それだけの事なのだ。そう、たったそれだけ——

「あの二人は殺すしかない。」

マルクの心の中、グラトニーもどきが語りかけていた。攻防の一瞬の最中の会話。しかしマルクはそれを応えようとはしない。

「片方はあのENDだ、放っておけば世界を滅ぼしかねない。滅ぼされると、ウエンデイも死んでしまうぞ?」

一瞬過ぎる嫌な映像。しかしそれを振り切る。怒りに身を任せてしまえば、完全に終わる。

「そしてもう片方は悪魔狩りだ。しかも、上位互換である氷の魔法を使うインベルを倒せるほどだ。今のうちに始末しておかねば不味いだろう。」

何故インベルの魔法を知っているのかはわからない。自分の知ら

ない記憶でもあるというのか。

しかし、今はそこは重要ではない。こちららも、殺す訳には行かないのだ。

「何を躊躇う必要がある？お前は、自分の不利益になる相手を殺さないのか？」

人間というのは、不利益な相手とは関わりあいになりたくないのだから？」

ただ魔法としての相性が悪いだけ…不利益にならないし、まず家族を傷つける奴がいるはずがないのだ。

それを踏まえた上で、マルクはナツ達を本気で殺すつもりは無い。止めるために、意識をぶっ飛ばす方針ではあるが。

「…よく分からんな、人間というものはやはり。」

「…だったら消えろ。」

たった一言、心の中でそれだけ返事をしてマルクは意識を戦いに再度向ける。

グラトニーもどきは、そんなマルクに呆れたのかやれやれといった表情で心から語りかけるのを止めるのであった。

「オオオオオオオオオオオオオオ!!」

叫びながら、3人の男は戦闘を続行していた。マルクはナツとグレイを止めるために。ナツはゼレフを殺すために。グレイはナツを殺す為に。

それぞれの考えの中で、魔法を使つての戦闘が行われ続けていた。

「ガアアアアアアアアアアア!!」

しかし、3人はボロボロになりすぎていた。故に、決着は否が応でもつきそうな状態になっていた。

3人は、1旦距離を取って…その中で直ぐにナツとグレイがお互いがお互いに向かって飛び込んでいた。

「くっ!？」

マルクも、遅れて飛び出す。このままでは呪力も魔力もすっからかんになってしまう。

それはナツとグレイも同じだが、しかし魔力切れを望んでも意味はない。それよりも先にどちらかが死んでしまうからだ。

「アッアッアッアッアッアッアッアッ!!」

ナツとグレイが拳を振り上げる。それに合わせて、マルクも何とか間に入る。

だがその瞬間呪力が完全に切れたのか、マルクの体から鎧が消え去ってしまう。

「もう、呪力が無くなったのか…!けど…!」

それでも尚、マルクは諦めずに二人の間に入り攻撃を受け止めようとす。

魔法等が効かないとわかると、すぐさまただの暴力で殴られて傷も増えているが、今から受け止める攻撃たちに比べれば可愛いものである。

そう考えながら、マルクはナツとグレイが降り下ろしたその拳を、それぞれ右手と左手で受け止めるのであった。

「はあ、はあ……」一体、何をやっているんだお前達は……！」

——死すらも覚悟した。だが、マルクよりも早くその拳を後ろから受止めた人物がいた。エルザである。

そして、そのエルザは今、涙を流していた。

「エルザ……」

「涙……」

ナツとグレイは、それで止まった。過去に彼ら二人は、エルザに涙を流させないために動いたことがあったのだ。

そう、そんな彼らが流させてしまったのだ。エルザに、涙を。

「目の前にいる人間をよく見てみる!! 敵か!? 味方か!! 何があったか知らんが、一時の感情に流されるな!!」

思い出せ! 私達の育んだ時間を!!」

悪魔となっていたナツが、滅悪魔導士としての力を発揮していたグレイが、記憶を思い出して冷静になっていく。

「いいか、よく聞け……」

その言葉が、エルザから発せられる。ナツもグレイもその言葉に聞き覚えがあった。マカロフである。

『時には喧嘩するのも良い、互いが自分に正直に生きていけば当然のこと。』

だが、それは魂をぶつけるべき相手に敬意をもって為す事じゃ。憎しみや恨みは暴力に用いてはならん。

それが家族ギルドじゃ。』

ナツの悪魔化していた部分が、消えてなくなる。グレイの体も、元の姿に戻っていく。

『ワシは——』

「私は、お前達を愛している……心の底から愛しているんだ……」

そう言っつて、エルザは2人を抱きしめていた。それを眺めていたマルクは、2人がようやく落ち着いていたことに安堵して、大の字に寝転んでいた。

そして、マカロフの言葉を出したエルザがふと気になって、マカロ

フの魔力を探り始める。これだけの戦争でも、マカロフ並の魔力はすぐにはわかるからだ。

だが、マカロフの魔力を感じる事が出来なかったのだ。それがどういうことか、マルクは察して……涙を流さぬように拳を握りしめた。痛みで涙を流さないように、したのであった。

時は遡り、マホーグが今やゼレフがいる妖精の尻尾のギルドに侵入した時。

その部屋の中には緋色の髪を持つ女性が、少女から何かを吸い取っているような光景があった。

隠れて、隙間から様子を伺うマホーグだったが、ふと、違和感に気づいた。

「……？」

こちらからしか判別できないのか、緋色の女性は全く気にしてもない様子だった。

しかし、マホーグから見たその少女はどこか生物のような感じがしない気がしているのだ。

「……っ!？」

そして、よく目を擦ってみると少女が二人いた。その少女：メイビスはマホーグにも気づいているのか、手で彼女を招いていた。

恐らく、幻術の類で騙せているのだろう。凄まじく精度の高い幻術である。だが、それ以外の魔法を持たないのか出るのに一苦労しているようだった。

マホーグはその事を察すると、一瞬でメイビスのところからショートワープしてから、さらにそこから連続したショートワープを使ってギルドからの脱出を成功させたのであった。

「……ありがとうございます、助かりました。」

「ま、マルクの為、だから……」

「マルク……彼の知り合いですか？」

「……貴方こそ、知り合い？」

「私は……ちよつと色々事情があつて、こんな姿ですが……初代妖精の尻尾マスター、メイビスと申します。」

「……」

マホーグは、ふと合点がいった。相手が求めているものと、自分が守るもの。

それがこの少女なのだ。触感すら騙されているのでなければ、恐らくまだ生きている。この少女の体には、大きな秘密があるのだろう。

「……アクノロギアを倒す為、か。」

「ひとまず……敵陣営を突破して、8代目と合流しないとなりません。」

「マ、マカロフね……いい、いいよ。は、運んでいつてあげる。」

マホーグはメイビスの手を掴む……が、その反対側の手を別の人物が掴んでいた。

「君のよりも、俺の方がこの場合向いている。」

「……め、メスト……じゃ、じゃあお願い。わ、私も上手く出られそうにない、から。」

似ている魔法だが、マホーグとメストのそれは全くの別物である。

主に、戦闘用か隠密用かで分かれるためだ。そして、今回敵陣に囲まれたメイビス達が脱出するためには、長距離を一瞬で渡り切るべきなのだ。

そして、メストはマホーグとメイビスと一緒に運んでいくのであった。

メイビス

「少女の声がみんなをここに集結させた？」

「おそらく妖精の尻尾のメンバーにだけ聞こえた声。」

「わ、私には聞こえなかった、し……多分、そう。」

妖精の尻尾のギルドから、マホーグの協力もあって逃げ出せたメイビス。そして、何故バラバラに飛ばされたはずのギルドメンバーがギルドに集まってこれたのか。

それが気になっていった。そして、メストに話を聞くと少女の声が妖精の尻尾メンバーにだけ届いたという。

「一体誰が……はっ!!」

「…メイビス？」

「おそらく思い当たる人物がいたんだろう……少し静かにしておくか。」

メイビスは、驚いた表情になってから、胸に手を当てて目を瞑り始める。何か思考しているようだが、その間にマホーグは聞いておきたいことがあった。

「…メ、メスト……何か、した？」

「……何か、とは？」

「と、とぼけないで……あ、貴方はさつきから……何かを隠してる。め、メイビスの目は見れているけど……み、妙に……意識が別の方、向いてる。」

マホーグは、メストの目を見て追求し始める。誰か重要な人物が死んだのか、それとも何かを知ってしまったのか。

酷すぎて、大きすぎて言えないようなことだと言うのはマホーグにも理解ができた。

「……魔道王オーガストにあっていた。和解のためにな。」

「…な、なんで？す、スプリガン12トゥエルブでしょ、そいつ……」

「……少し、長くなる。」

そこから、ひとまず前提をメストは騙り始める。事の発端といえ
ば、スプリガン12のブランディッシュを捕まえた時の話から始まる。

彼女の部下に、空間系の魔法のエキスパートがいたのだ。そいつはカラコール島にてナツ達と接触した男だったが、その男が捕虜として捕まっていたブランディッシュを殺害しようとしたのだ。

そこに、ルーシイとカナが助けに入っただけでどうにか殺害は免れた。そこからか、ブランディッシュはルーシイに心を開いたのだ。

彼女達の間にも、どうやら親同士で関係があつたらしく、その蟠りが解消されて彼女達は仲良くなった。

そして、ブランディッシュが提案したのだ。『侵攻を辞めるように伝える』と。そのためにはまずオーガストに会う必要があつた。そして、そのメンバーにナツとルーシイとハッピーが選ばれたのだが、それにメストが勝手についてきたのだ。

「……………ここまでが前提だ。」

「……………それで？どうなったの？」

「…俺達はオーガストに出会った。そして、ブランディッシュが会話している隙を狙って……………ブランディッシュにある記憶を植え付けた。」

「……………記憶？」

「…オーガストは絶対に殺さなきゃ行けない相手だつてな。」

メストの魔法は、ただの瞬間移動だけではない。相手に記憶をうえついたり、逆に奪い取ったりすることが出来る魔法もある。

そのせいで、妖精の尻尾メンバーから自分の記憶を消していたということもあつた。

それが、言われたりするまでは全く違和感を起こさないと強力的なものであることは、マホーグですら知っていた。

そして、そんな記憶を植え付けられてしまえば……………

「……………自分の手で、和解を壊した……………」

「……………そういう事だ。」

「…す、住んだことは仕方ない……………けど、あ、貴方は少し過剰すぎる……………じ、自分に対しても相手に対しても……………や、やり方が。」

マホーグはその件は責めたりはしなかった。だが、メストのその性格が幸も不幸も呼び寄せているという事は、糾弾していた。

「自分でも、嫌になる。」

「…その魔法、もう使ったら…：駄目、だよ。」

「…：ああ。」

そこまで話してから、ようやくメイビスが目を開けた。そのことに気づいたマホーグとメストは、そこで話を区切っていた。

「初代…」

「ゼーラは帰りました、私の中に…：…」

「俺は、その…：俺は、その…：…」

「次は我々がギルドに帰る時です。」

立ち上がったメイビスは、覚悟を決めた目をしていた。先程の、無垢な少女のような顔をしたメイビスは一時なりを伏せて、今からは妖精軍師メイビスとしての顔が輝く時である。

「…：そろそろですね。」

「な、何が？」

「敵の魔導士…：付エンチャント加の天才であるアイリーンが、私を探すために魔法を行使するでしょう。」

それに合わせて、私は私の幻覚の魔法で…：味方を鼓舞します。」

そう言っ、メイビスは空を見上げた。それに釣られてメストとマホーグも空を見上げる。

そして、それとほぼ同じタイミングで巨大な『目』が空に浮び上がる。この戦場全てを見渡せるかと思うほどの巨大な目が、空に現れたのだ。

『メイビス…：どこに隠れても無駄よ。私の目からは、逃げられない。』

そして、それと共に声も聞こえてきた。恐らく、これがアイリーンという魔導士の声であり、魔法なのだろう。

「ひっ!?!」

「こ、こんな魔法を使えるのか…：…」

「——『私は逃げも隠れもしません。』」

そして、その後にマホーグ達にいるメイビスが喋り始める。勿論、超巨大な自分の幻覚を持ってして、である。

声も戦場全てに届くかのような、大きな声である。

「貴方達のいる場所は私たちのギルド。必ず奪い返してみせます。私の声を聞く全ての同士よ、共に戦え！汝らの剣、妖精軍師が預る！！」

そして、その後から戦場から湧き上がるほどの声が聞こえ始める。戦場に居る殆どの人物が一気に励まされたのだ。

それほどまでに、メイビスの魔法は味方の士気を上げていた。

「……では、行きましょう。マホーグ。」

「……うん。で、でもメストは？せ、戦力は1人でも多い方が……」
「いえ、メストには見つからないように隠れて魔力を回復してもらいます。長距離を一瞬で移動できる、という魔法の性質上、余り魔法は乱発されても困ります。」

「あ……なるほど。」

メイビスの言い分に、納得するマホーグ。今はまだメストの出番が来る訳では無い。

ならば、ここで魔力を回復させて行った方が無難である。

「じゃ、じゃあ私が送っていく、ね。」

「はい、ありがとうございます。」

メイビスはマホーグに捕まり、マホーグは連続でショートワープを繰り返し始める。

マホーグは時折敵をなぎ倒していきながら、進んでいくのであった。

戦場、妖精の尻尾が戦っているところにたどり着いたマホーグとメ

イビス。しかし、既にその場には構えを取っているマカロフがいた。そして、その構えに見覚えがあるのか、メイビスは着くなり走り始めた。マホーグは、念のためにメイビスの様子を確認しながら、敵を倒していく。

「なりません!!妖精フェアリーロウの法律は対する敵が多いほど自らの命を削るのです!!こんな大軍に使ったら、あなたの体が持ちません!!」

「初代……そんなことは承知の上じゃ。止めんでください、ワシの花道。」

「策はあります!必ずこの状況を脱する策が——」

「黙っとれえ!!」

「っ!!」

初めて、初めてマカロフがメイビスに物申した瞬間だった。それほどまでに、マカロフの我慢は利かなかったのだ。

「目の前でガキ共が苦しんどるんじゃ、ガキ共が傷ついているんじゃ。あんたにとっては兵の1人かもしんねえが、ワシにとってはかけがえないガキ共なんじゃ。」

「私は、そんな……」

メイビスが怯えながらも頭を横に振った。妖精の尻尾のメンバーを、誰一人としてただの駒として扱ったつもりは無かったのだ。

だが、『そういう風に見ていた』という風に見られていたというのがメイビスの心に刺さっていた。

「分かっていますとも……初代の策があれば、勝てることくらい。じゃがワシは、これ以上血を流してるガキ共を見ていられんのじゃ!!」

老い先短い老兵の命で、ガキ共の未来が作れるとあれば、安い仕事じゃ……」

マカロフは自嘲気味に笑みを浮かべる。生きることを諦めたのではない、妖精の尻尾に居るもの達が、これ以上傷つくところを無くしたかったのだ。

「マスター!」

「エルザ、よく聞け。」

「いいえ聞きません!!一緒にギルドに帰りましょう!!」

「この先、どんなに辛いことがあっても……仲間と共に歩けば道はある。仲間を信じよ、自分を信じよ……ギルドは家族、忘れてはならん。」

貴様らのお陰で、我が旅は実に愉快であった。」

「マスター!!」

妖精の尻尾が涙を流した。マスターであり、いい父であり、そして祖父でもあったマカロフの死を悟ったからだ。

「思い残すことはなし……みんな、仲良くな。『妖精の法律』!!」

その言葉を最後に、マカロフは手を合わせる。それが、妖精の法律。敵と認識した者全てを戦闘不能にさせる超魔法。

それから発せられる光は、この辺り一体を全て照らして行った。そして、最後に残されたのが、倒れている大量の敵と妖精の法律の構えのまま命を亡くしたマカロフの亡骸だけだった。

「ああ……ああ……ああ……」

メイビスは、絶望と悲しみで膝を着いた。妖精の尻尾のメンバーも同じように泣き崩れ掛けていた。

しかし、それをラクサスが励ます。

「立ち上がってくれ……初代。敵はまだ残ってる……あんたの作戦がなきゃ勝てねえ。」

「ラクサス……」

おそらく、一番辛いのはラクサスだろう。しかし、彼は涙を流すのを堪えて、笑みを浮かべていた。

今やるべき事は、悲しむことではなく敵を倒してギルドに帰ること。それを、彼が1番理解してしまっているのだ。

「……ジジイの為にもな。」

そして、エルザはマカロフの遺体に近づいて地面に膝をついて頭を下げる。それは、マカロフにマスターに対しての感謝、親子の関係でいてくれたことへの感謝……色々な感謝が混ざった土下座だった。

「……え、エルザ・スカーレット……」

「マホーグ……だったな……初代をここまで連れてきてくれて感謝する。」

「……だい、じょうぶ？」

「ああ……悲しむのは、後に回さないといけないからな。」

エルザは立ち上がり、先を見据える。先行していつているナツ達と合流せねばならないからだ。

「……」

そして、マホーグは今までの光景をじつと見ていた。親しい人が死ぬと、悲しむということだけは理解できる。しかし、今の今までそのような環境に置かれたことがなかったので、彼女はそういうものだと理解ができて、それは上辺だけの理解しか出来ていないと自分で思っていた。

この状況を見ても、それは変わっていない。だが、上辺だけしか理解出来ない彼女でも、これだけは心の底から理解していることがあった。

「……こんな、ことを……もう、何度も起こさせ、ない……!」

彼女が初めてする覚悟の目であった。戦争は、親しい人を何人も何人も亡くして、そしてその亡くした悲しみに囚われるのが何百人何千人という。

きつとそれは、許されてはならないことなのだ。互いの正義のための戦争ではなく、これが侵略戦争だというのだから尚更タチが悪い。

「……嫌な予感がする。マホーグ、進むのを手伝ってくれるか?」

「……ん、いいよ。ケーキお、奢って……ね。」

「済まない、助かる。お詫びにいくらでも奢ってやろう。」

戦争が終わったあとの約束をしながら、2人は手を握り合う。そして、一足先にエルザ達はナツ達と合流して、そして現在に時間は巻きもどる――

ラーケイド・ドラグニル

「ナツをポーリユシカさんのところに連れていかないか……」

「グレイとジュビアもね。」

「あい。」

ナツとグレイがお互いに戦い始めて、そしてその決着が着いた頃に時間は戻る。

止めに入っていたマルクも、魔法のダメージこそなかったが、純粋なパンチや蹴りなどのダメージが入っており、イマイチ立てないでいた。

少しだけ無理をすれば、普段通りに動けるのでひとまずそうしても動くことにした。

「3人とも無茶をし過ぎですよ……」

「ま、マルクもね……」

「人の事は言えない、か……」

エルザと一緒に来たマホーグが、マルクを正面から見据えて文句を垂れる。

それに対して苦笑いしかすることが出来なかったが、その直後にマルクは近づいてくる強大な魔力の気配を感じとった。

ほぼ同時に、エルザも何者かの気配を感じとっていた。

「っ!!全員伏せろオー!!」

「ウエンディ!!マホーグ!!」

咄嗟に近くにいた2人を庇って、マルクは地面に伏せる。と同時に近くの地面が爆発する。

「なんだ突然……!」

「しばらくぶりだな、エルザ。」

現れた女性、エルザと似たような緋色の髪を持ち、そしてエルザを知っているかのような口ぶり。

「知り合い?」

「知らん、何者だ。」

ルーシイがエルザに尋ねるが、当然エルザは知りもしない。目の前

の女性…アイリーン・ベルセリオン。

フィオーレの土地を、大陸イシユガルを滅茶苦茶にした張本人。

「私はお前……お前は私……」

「……この魔力、どこかで……」

マルクがふと感じとった魔力は、見知ったものでは無いにしろ……どこか懐かしさを覚えるような魔力だった。

目の前に現れた女魔導士、アイリーン。それにウエンディ達が相対することになったのであった。

「見つけた、ユキノ!!」

「クオーリ様!?!」

ほぼ同時刻、クオーリは同じギルドであるユキノと再開していた。アイリーンの魔法によりバラバラにされていたが、何とか匂いを辿ってここまで来れたのだ。

「無事だったのですね!!」

「大魔法を派手に使ってくれたみたいだな、妖精フェアリーテイルの尻尾のマスターが。」

「目の前にいた敵たちが倒れたのは、それが理由ですか。」

「……ところで、誰だそいつは。」

「おちやめな天使ちゃんだゾ☆」

目の前には、未だ水着姿でいるエンジェル……もといソラノがいた。クオーリが視点をずらすと、レクターとフロツシユもきちんと居た。それに対して、クオーリは少しほっとしていた。

しかし、彼女達の元に現れたのはクオーリだけではなかった。

「——随分派手な魔法を使ってくれたね。」

「誰だ!!」

「おかげで大分兵を削られてしまった。これは少しお返しをしてあげないと……父さんに顔向けできないな。」

現れたのは、後光を背負う男だった。だが、クオーリはここで違和感を持った。目の前に居る男の匂いが、ナツと全く同じだったからだ。

だが、敵に対して余計な疑問を抱いている場合ではないと、そのかんがえをすぐにふりはらう。

「12の1人です!!北で見かけました!!」
トゥエルブ

「ほう、私たち3人を相手にするのか……面白いゾ。」

「一応ボクもいます。」

「フローも。」

目の前に居る男は、笑みを浮かべたまま一同を見下ろす。その表情には、まるで誰も相手にしていないかのような余裕さがあった。

「お返しと言ったでしょ。つまりはそういうこと……相手にするのは私たちに楯突くもの全て。」

男の両の手が合わせた間から、目が眩むほどの光が迸る。その明るさに、全員が目を瞑る。

「白き魂は自由なる空へ。」

そして、光が終わったあとに訪れるのは……異常な光景だった。

「あ、ああ……あつ……」

突然ソラノが顔を赤くして、体を抑え始めたのだ。しかし、その表情には苦しみや痛みといったものが感じられない。

寧ろ、気持ちよさそうな表情を浮かべているのだ。

「お姉様!お姉様しつかり!!」

「どういう魔法だ、一体……!」

「なんでお姉様だけ……」

「……私の魔法は快樂、その味を知るものは私の魔法からは逃げられない。快樂を与え続けられた人間がどうなるか知っているかい?」

「開け！双魚宮の扉!!」

「——死んでしまふんだよ。」

精霊の扉を開く前に、ユキノとクオーリの体に白い何かが巻き付き始める。そして、未曾有の感覚が……快樂が襲いかかる。

「あっ……! ああ……! あっ!!」

「……こんなもん!!」

しかし、クオーリはその何かをまとめて凍らせる。直感的に嫌な予感がしたからだ。

一応他の者達に巻きついたのも全て凍らせたが、あまり意味を為していないようだった。

「君には私の快樂が通用しないようだね……! しかし、仲間の方はどうかな?」

「あ、ああ……!」

「ちっ!!」

再びユキノに絡みつく。クオーリがまた凍らせようとするが、それよりも早く、それを切り裂いた者がいた。

「白と光を快樂だと? 黒魔導士^{ゼレフ}の仲間とは思えんな。」

カグラである。偶然かはたまた目的があつてきたのかはわからな
いが、そこにカグラが来ていた。

「仲間ではないよ、ゼレフは私の父だ。」

「ゼレフの息子だと?」

「私の名はラーケイド・ドラグニル。ゼレフ・ドラグニルの息子だ。」

その事実には、ユキノ達は困惑していた。それもそうである。敵の大元であるゼレフの弟がナツであり、そして目の前の男……ラーケイドがゼレフの息子だというのだから。

「ドラグニルって、え……!?!」

「ナツ君と同じ苗字……!」

「知らなかったのかい? ナツは父上の弟、私の叔父……という事になるね。」

「ナツ様が……!」

「今回の戦いで会えるのを楽しみにしていたんだ……! だって、父上は私

よりナツの方が大切みたいだからね。許せないでしょ？そんなの。」

その言葉の直後に、ラーケイドは光の刃を無数に飛ばし始める。カグラは不倶戴天を抜いて、その刃を弾いていく。弾ききれないものは回避して当たらないようにしていく。それとは正反対に、クオーリは触れる前に全てを凍らせていく。

「いつまで上からもを言っている……降りてこい。」

カグラは、不倶戴天を一振する。すると、ラーケイドが乗っていた岩山が、一瞬で切り裂かれる。

ラーケイドはそのまま岩山から降りようとするが、その間にカグラにもユキノ達にしたようなものと同じ光を、カグラに巻き付かせる。

「カグラ様!!」

「君も快樂の味を——」

「永遠に冬眠しとけ、氷の中でな。」

地面に着地したのとほぼ同時に、クオーリがラーケイドに向けて拳を振るう。

ラーケイドはその拳をバックステップで回避するが、追撃するかのように氷がラーケイドを襲う。

「ふっ……こちらに構っていいのかい？新しく来た仲間の1人が、快樂に飲まれようとしているけれど?」

「……凍らせている、もうとつくにな。」

クオーリとラーケイドの間に、一瞬で入り込む影一つ。カグラだった。カグラが呑まれるよりも早く、咄嗟に凍らせておいたのだ。

「品のない魔法だな……!」

「速い!」

そして、そのままラーケイドが次の魔法を使う前にカグラが自分の間合いにラーケイドを入れる。

カグラ必勝の間合い、不倶戴天による居合切りを避けられるものは、そうはいないのだ。

「成敗!!」

そして、カグラは不倶戴天を振り切る……はずだった。抜かれた不倶戴天を、ラーケイドはたった2本の指で止めていたのだ。

それも、一切の傷なしに。

「私の刀を、素手で…!?!」

「君達、何人か12を倒して勘違いしてしまったんだね。」

「カグラア!!」

クオーリが、カグラの助けに入る。不倶戴天を止めるような相手を、一人で相手させるわけにはいかない、クオーリはそう思ったのだ。

「オーガスト、アイリオン……そして私は特別だ。」

「特別というのか、自分で!!」

「ふ……そうは言うがその顔……もうこの相手には勝てないと諦めた顔だ。」

「アアアアアア!!」

カグラとクオーリのふたりが、同時に攻撃を仕掛ける。しかし、両方の攻撃を、ラーケイドはどちらも片手で止めていた。

そして、余ったもう片方の手で……2人を同時に攻撃する。

「あ、が……!」

「ぐ、があああ!!」

「ほう、傷口を凍らせて……しかし、その苦痛もやがて快樂に変わるよ。」

ラーケイドはクオーリの攻撃をかわしながら、カグラに視点をずらす。相手にされていかないかのようにだった。

「君はさつき、私の魔法は品がないと言ったね。確かに、ある意味その通りかもしれない。」

しかし……これは愛とも言えるんだ。どんな苦痛もなく死ぬるんだよ?」

「死なせるかア!!」

クオーリは、カグラの傷口を凍らせる。血管ごとではなく、血の流出を防ぐためのかさぶたのような役割である。

「ふ……意味は無いさ……白き魂は自由なる空へ……」

カグラは倒れ込む。血の流出を防いではいるが、ダメージは相当受けているようであり、どちらにせよ急がねばマズいと感じたのだ。

「ああああああ……！」

「なっ!？」

「君には効かずとも、君の仲間には通じる……さあ、天国という死へ。」
ユキノに巻き付く光。ふと、クオーリはとある光景を思い出す。スプリガン12に対峙したのはこれが初めてではないのだ。

最初に、これとは違う1人と出会っている。その1人に、セイバートウリス 剣咬の虎と青い天馬が全滅してしまったのだ。

その時、やられた全員は磔にされた。両手足に杭を打ち込まれていた訳では無いので、問題こそないが……その時の惨めな気持ちは、クオーリ達の心に深い傷をつけた。

その時のことで、クオーリは思ったのだ『力が、もっと力が欲しい』と。

「——これ以上、やらせるかア!!」

両の手足が、氷で作られたドラゴンの手足の装備を纏う。モード真氷竜……しかし、彼にとつてはまだ足りないのだ。後から聞いた話だったが、初めに戦ったスプリガン12は、体が魔障粒子で出来ていたためにまともな魔導士では太刀打ちできないとされたらしい。

だが、そんなことは関係なかった。氷の力を、竜の力をもっと引き出すために力を引き出そうとする。真氷竜を超えた、氷竜の力を行使するために。

「っ……この力は……」

『あかん!クオーリ止めえ!!これ以上の力は、ウチの力を引き出しすぎる!……!』

クオーリの体が氷に覆われていく。余りの力の放出に、彼の体内にいる親のドラゴンのフリーゾからストップが入る。

だが、彼はその声を無視した。目の前の敵を倒すために、後ろにいる仲間を守るために、何がなんでも。

「全てを凍らし、砕き……そして食らう。氷竜の力は、全てを凍らせるための……力……!」

「なんだ、周りの土地が凍りついて……」

ラーケイドは困惑していた。目の前の魔道士から発揮される魔力

が、明らかにおかしいからだ。

目の前の男は、本当に人間なのか、という疑問さえも湧いてくる。

「ああ……今から俺は余分な思考を『凍らせる』…感情も、お前に対する遠慮も……全て、全てだ。」

纏う氷は、鎧のように積み重なっていく。そして、纏う度にフォームが洗練されていく。

手はドラゴンの爪のように長く、足もまた然り。しかして腕などの部分はキッチンと鎧のような形を保っていた。

ドラゴンの顔を模した兜を、被れば……ドラゴンと人間の間のような見た目、竜騎士とでも呼べる代物へと変貌していた。

「……何だ、それは。」

「——モード氷帝竜。全てを凍らせ、無に返す……」

奥から見える眼光は、しつかりとラーケイドを捉える。今から行う戦いは、彼にとっても未知数な戦いとなることだけは、間違いがないのであった。

氷帝竜

「……水の冷たさで、強制的に体を冷やしているわけか。」
「……」

モード氷帝竜。そう名付けたクオーリの体は、氷の鎧で覆われていた。スリムになり、小型化したドラゴンのような形をしているその鎧は、氷竜の力を最大限生かしているということなのだろう。

「——フッ……」
一息の間に、クオーリはラーケイドに詰め寄る。焦ること無く、ラーケイドは光の刃を飛ばす。

快楽の魔法に出てきた光の触手や、この刃を見る限りラーケイドの使う魔法は聖属性なのだろう。その割には、カグラが言った通り下品な魔法であるのだが。

「……」
「当たったところから凍って……！」

しかし、ラーケイドの飛ばした刃はクオーリの鎧に触れた瞬間に凍りついて、砕け散った。

そのままの勢いでクオーリはラーケイドに殴りかかるが、ラーケイドはすかさずそれを回避。だが、直前までラーケイドのいた地面は凍りつき、更には砕け散って小さなクレーターを作りあげていた。

「……ふー……」
「……恐ろしいね、インベルがそれほどの氷の魔法を使っていたけど……ふむ、戦い方を変える必要がありそうだ。」

「——クオーリ!!」
「っ!!」
少しだけ間を取った2人だったが、ラーケイドの側面に蹴りを叩き込む人物が1人でできた。

それは、クオーリやユキノと同じギルドメンバーであり、現在はギルドマスターを務めている……ステイングだった。

「随分とウチのギルドのもんが世話になったみてーだな。」
「やれやれ、また私の前に立つ愚かな——」

ステイングは有無を言わずラーケイドに追撃を与えていく。しかし、その攻撃はラーケイドには通じていなかった。

が、隙を作るには十分である。

「氷帝竜の剛撃……！」

氷の副腕が2つ即座に形成され、計4つの腕に強力な魔力が溜め込まれる。そして、その4つの腕から放たれる強力な一撃を、ラーケイドに直撃させる。

「ぐっ……ふんっ……！」

氷掛けていたラーケイドだったが、力を込めて氷を無理やり割っていく。だが、それでも指の先端は完全に凍っていたのか、皮膚が割れてしまっていた。血すらも出てきていなかった。

「……少し危なかったけど、まあこちらにはあまり効いていない。」

「うおっ!？」

ラーケイドが少し力を込めると、ステイングの周りにユキノを襲った光がまとわりつき始める。

だが、クオーリはユキノを助ける時にやった光を凍らせる事を、しようとはしなかった。

「ステイング様！その攻撃は——！」

「お仲間を助けないのかい？」

「ステイングには不要なんだよ……見てたらわかる……！」

そう言いながら、クオーリはラーケイドに襲いかかる。ラーケイドはクオーリに対する脅威度を改めたのか、今まで以上に素早く回避していた。

回避しながら、一瞬ステイングの方に視線を向ける。

「はぐっ！あぐあぐ……なんだこれ、変な味……っ！か……なんか気持ちいいな。」

「なっ……！」

「俺に白いものは効かねえ、白竜の滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーだからなア。

……あんだ、なんか気に食わねえな。ナツさんと同じ匂いがする。「……やっぱり、勘違いじゃなかったか。」

ステイングが、ラーケイドを睨みつける。同じ滅竜魔導士の鼻が同

じ結果を出したのならば、信用ができる。

「アンタ、何者なんだ？なんでナツさんと同じ匂いが……」

「その人もドラグニルの姓を持つてるんです。」

「正確には、ナツ様はゼレフの弟であり……目の前の方はゼレフの息子だと……」

レクターとユキノが補足をするが、ステイングの代わりにクオーリが首を横に振って否定する。

「……いや、それはおかしいんだよユキノ。親や兄弟……その誰であっても同じ匂い、なんてことはありえない。」

「わかって、らしたのですか？」

「これでも滅竜魔導士だ。匂いの違和感には気づいていた。だから、これはどつちかって言う……」

「——誰かの手によって作られた、と言いたいのかい？」

ラーケイドが、クオーリの言葉を続ける。その言葉にクオーリは返答はしなかったが、しかしラーケイドもそのことに触れられても何ら態度を崩すことは無かった。

「それはある意味……ナツもゼレフの子だからね。」

「戯言を……」

光の刃が飛んでくると同時に、クオーリは氷を展開する。氷は光を屈折させて、一つにまとめさせた後にステイングの元へと飛ばされる。

「がぶっ!!あぐあぐ……」

「ステイングの餌をわざわざ用意してくれるなんてありがたいな。」

「俺に光や白いものは効かねえ……ホーリーレイ!」

ラーケイドの魔力を食らったことにより、回復した魔力で威力を上げた魔法が、ラーケイドに襲いかかる。

曲線を描いているとはいえ、狙いは自分自身だとわかり切っているので用意にラーケイドは避けようと動き始める。

だが、その隙を見逃すほどクオーリは甘くなかった。

「氷面鏡! ついでに氷帝竜の猛吹雪!」

クオーリの作りだした氷の鏡が、光を反射させる。屈折、反射……そ

してクオーリ自身のブレスも含めて、何重もの攻撃がラーケイドに襲いかかる。

「ぐっ……!?!」

クオーリのブレスの脅威はわかり切っているのか、ラーケイドはステイングの魔法を無視しながらブレスだけを回避する。

だが、一瞬でも気を取られればステイングはその隙を見逃さずに攻撃を仕掛けてくるのだ。

「ホーリーノヴァ!!」

「がつ……!」

ステイングの拳の一撃が、ラーケイドに直撃する。吹き飛ばされたラーケイドは、多少のダメージを負いながらも次なる一手を既に打つ準備を済ませていた。

「なかなか厄介な相手だ……だが、『悪食の魂』」

「うお……!?!」

「何っ……!?!」

辺り一面に、札が舞い散る。その途端に、ステイングとクオーリは猛烈なまでの空腹感に襲われ始めていた。

いや、実際に空腹になっているのだ。おかげで、2人の腹から空腹を知らせる音が鳴り響いていた。

「ステイング様!クオーリ様!!」

「この空腹感には耐えられまい。」

「ああ……ああ!?!力が、出ねえ……!」

「ぐっ……!?!」

猛烈なまでの空腹に、2人の力は凄まじい速度で抜けていった。魔力自体はまだ持つが、腹が減っていてはまともな思考も期待できない。

「ふっ……!」

「ぐっ……!」

ラーケイドは、自分が背負っていた十字架をステイングに向けて投げける。

何とかクオーリがそれを叩き落すが、空腹感のせいでそれだけで工

ネルギーを使い果たしたかのような状態になってしまう。

「ステイングくーん!!」

「レクター……!」

「ステイング君!ステイング君!!」

レクターは、倒れながらもステイングに呼びかける。しかし、ステイングは呼びかけられるレクターが段々と別のものに見えてきていた。

「——美味そうだなあ……」

「ステイング君しつかり!!」

「どうされたのですかステイング様!!」

「おい…目付きがおかしいぞ……」

「……おいおい、レクターが食い物に見えてるのか!？」

恐ろしい話だったが、自分を襲っているこの空腹感の間違いなくそれほどまでに困窮させる物である。

まるで何日も飯を食らっていないような感覚さえ覚えている。

「くっ……!」

「おや、君は誰かを食べないのかい?」

「黙ってる……」

クオーリは、氷を食べていた。無論、自分の魔力で生み出した氷は流石に食べることは出来ない。だが、クオーリの周りは幸いにも超低温の極寒である。

空気中の水分が勝手に凍ってくれるので、何とかそれを食べて凌いでいた。しかし、空腹感を紛らわすにはあまりにも足りない。理性を保つ分には、まだマシではあるのだが。

「人の世は…欲に満ちている。共に喰らいながら、滅するがいい。」

「……」

ラーケイドの前に、フロツシュが立つ。フロツシュも空腹感に襲われているが、何かを食べると言ったこともせず、ただラーケイドを見上げていた。

「フローもお腹空いたけど…ローグと一緒にご飯食べたいから……我慢するの……!」

「フロツシュ……!」

「っ!!くああ!!」

フロツシユのその言葉を聞いた一同は、一気に目が覚める。正確には目の前の人物を食らおうとすることをやめた。

「僕もお腹すいてるけど…ステイング君になら…」

「スマンレクター!ユキノもカグラさんもすまん!!フロツシユもっ!!」

一気に正気を取り戻したステイングだったが、ひとまず自分とクオーリ以外の全員を殴って気絶させる。

「俺達が空腹を堪えるには、こうするしかねえ…!」

「へえ…でもあなたの空腹はどうするつもりで?」

「お前を食う!!」

涎を垂らしながら、ステイングはラーケイドに突撃していく。たとえ他を気絶させられても、ステイングの空腹が満たされることは無い。

しかしせめて、他を喰らわねば話にならない。

クオーリも氷を喰らいながら、ステイング同様に突撃していく。しかし、二人とも空腹な為にまともに力なんかでやしないのだ。

「ふっ……」

「がっ!!」

ラーケイドは軽くかわしてステイングに一撃を与えたかと思えば、距離を取ってクオーリから離れる。

「空腹では、力が出ないでしょう。」

「それでも、俺は…!」

「無駄なことを……」

拳を振るうステイング。しかし、その拳が届く前にラーケイドの一撃がステイングの体を切り裂く。

「剣咬の虎のマスターだからな!!」
セイバートウース

「聞いたことも無いギルドだ。」

先程打ち落としたと思われる十字架が、ラーケイドの力なのか飛んで戻って来た。そして、ステイングの体へと突き刺さる。

「妖精の尻尾でもないのに、出しゃばるのはやめてもらいたいな。」
フェアリーテイル

「――妖精の尻尾の為だから、でしゃばってるんだよ!!俺達を変えてくれたギルドだから……!ナツさんのためだから!!」

無理矢理十字架を引き抜いて、ステイングは叫ぶしかし、疼く空腹が彼の体力をこれでもかと削り取っていく。

「安心するがいい、そのナツの魂もすぐに自由になるでしょう。この私が必ず殺すと決めているからね。」

「はん、父親とられて嫉妬してるたア……見苦しいな!!」

クオーリも構えて、ステイングと共に攻撃に移ろうとしていたが、その瞬間にユキノの姿が消えて、代わりにローグが現れる。

「ローグ!」

「お嬢のテリトリーか……!!」

「悪いが……俺にも力が残っていない。お嬢のデリバリーだ。俺を食え!!」

ローグはその言葉と共に一気に魔力を解放する。腹が減ったステイングに、魔力を食べさせようというのだ。影の属性を持つ、自分の魔力を。

「ローグ、お前……!」

「腹減ってんだろ!?俺の残りの全魔力を……!」

「違う属性の魔力なんか食えるわけ……いや、食うしかねえ!!」

ローグから溢れ出た魔力を、全てステイングは食らった。しかし、それでもラーケイドは笑みを崩さない。

「人間には3つの欲がある。性欲、食欲……そして睡眠欲。私の与える最後の欲は睡眠欲。しかしそれは永遠の眠りを意味する。」

「ごちやごちやうるせえ!!あんたの匂い、マジで気に入らねえ!!」

「ステイングと同意見だ……そもそも魔法も性格の言動も俺ア全部気に入らん!!」

「私はお前達のような雑魚が息をしていることが気に入らない。」

「ローグ、力を借りるぞ!!」

「行くぞステイング!!」

「おう!!」

白竜と影竜の力を手に入れた白影竜……そして、氷の力を高めた氷

帝竜。今、力を持った2匹のドラゴンが欲を操る者へと挑む。

白影氷／魔天劍

「――燃えてきたぜ。」

「見せてやろう、抗えぬ欲の魔『R・I・P』を。」

ローグの影を喰らい、白と影…二つの性質を持った白影竜となったステイング。

そして、氷帝竜となり氷竜の力を最大限に発揮し始めているクオリ。2人の力が合わさり、目の前にいる敵…スプリガン12トウエルクが1人であるラーケイド・ドラグニルと戦うこととなった。

「俺はずっとナツさんの背中を追いかけてきたんだ。あんたみてーなのはすげー邪魔なんだよ。」

「私はこの手でナツの魂を浄化する。君らごときは初めから眼中にな
い。」

「よく言うぜ、俺の攻撃は一心不乱に避ける癖によ。」

「確かにな…ま、とりあえず試してみろよ…俺達3人の力…セイ
バーの真髄をな!!」

2人はラーケイドに突撃する。白き光を持っているステイングは、
圧倒的な速度でラーケイドに詰寄る。

一瞬で殴り飛ばされたラーケイドだったが、すぐさま態勢を建て直
してステイングに向かって攻撃を放つ。しかし、それもまた『白』な
のだ。

「ふん!!」

「魔法が、消えて…!」

「白い魔法はステイングの力が相殺し…!」

「っ!!」

ラーケイドの周りが凍りつく。ラーケイド自身を凍らせられない
のならば、ラーケイドの周りを凍らせることで逃がさないとクオーリ
はそういう結論に至った。

「俺の氷がお前を拘束する!」

「そして!ローグの影があんたを破壊する!!」

逃げ場を一瞬でも失ったラーケイドに、影を纏ったステイングの一

撃が刺さる。

そして、間髪入れず最大限の魔力を込めてステイングは攻撃を放つ。それに合わせてクオーリも攻撃を放つ。

「そんなでもって3人の力が合わされば!!」

巨大な魔力の一撃が、ラーケイドに直撃する。だが、致命傷には至っていないのか、ラーケイドはどこどころ凍っているだけで済んでいた。

「何人合わさろうが、最後の欲には抗えない……!永遠なる死の眠りを

!!『R・I・P』!!」

「っ!」

「これは……!」

「くっ……」

「睡眠欲、つてやつか……!」

ラーケイドの最後であろう攻撃が、彼らに遅いかかる。凄まじい眠気が、彼らに襲いかかっているが今は戦場である。眠ってしまったが最期と言っても過言ではないのだ。

「目を閉じた時が君達の最後だ。」

「くそおおお!寝るな寝るな寝るな寝るな!!」

ステイングは必死に眠らないように自身の体の傷を抉っていく。だが、それでも痛みよりも眠気の方が優ってきていた。

「人間は欲には逆らえない。アクノロギアでさえね……故に私こそがアクノロギアにも勝ちうる究極の魔導士……」

「——は、自分でそんなこと言っても……全く意味が無いぜ。」

「……何だと?」

クオーリが、ラーケイドに対して挑発を入れる。眠いのは彼も一緒だ。いや、なんだったら纏っている氷の冷気のせいで下手をすれば余計に眠くなっているだろう。

だが、それでも今のラーケイドの一言は、クオーリに取って嘲笑するに値することだった。

「じゃあ、なんでゼレフはこんなことしてんだよ……ただ侵略する為だけに、妖精の尻尾フェアリーテイルだけを狙わねえだろうよ……きつと、あのギルドに、な

んかあるんだろ…？」

「……だから、どうした？」

「それを手に入れるのはなんの為だ…？あの黒魔導士が、ただただ侵略をしただけじゃ、無いだろうに……」

「何が言いたい!!」

「お前、父親に頼りにされてねえよ。」

「――」

指をさして、鎧の奥で表情こそ見えていないがクオーリは笑みを浮かべていた。そして対照的に、ラーケイドは憤怒の表情となっていた。

ただでさえ、ナツに意識を向けていることが気に食わないのに、それに加えてゼレフに頼られていないという言葉が、彼の心に突き刺さる。

「アクノロギアを倒すためだけに、なら…お前を使えば確かに倒せるだろうな…けどな、ゼレフはそう思わなかったってー訳だ……」

「……さい……」

「お前を頼ることより、自分のとる方法の方が确实だと判断したわけだ。」

「……る、さい……!」

「お前は！自慢げに語っている父親に見向きもされてねえってことだ!!」

「うるさいって言うてるだろう!!」

意地が悪い、と言うのは理解している。だが、ここまで欲とやらに振り回されすぎてしまっていたことに対しての、鬱憤を晴らしていたのだ。

自分の魔法は、相手には通じている。しかし、空腹やら睡眠欲やらでろくに当てられていないことに、腹が立っていた。

「じゃあ……黙っておいてやるよ…その代わり――」

「しまっ――」

クオーリの傍を通り、『影』がラーケイドに襲いかかる。クオーリの挑発にひっかかり、ラーケイドはステイングの存在を完全に忘れてし

まっていた。

その影こそが、ステイングなのだ。

「は！簡単に挑発に引つかかったな!!」

「私、も……!」

「カグラ、お前……」

いつの間にか目を覚ましていたカグラが、クオーリに並ぶ。先程は通じなかった不倶戴天だが、力を合わせるにこれほど申し分ないものは無いだろう。

「これが俺達の合体技だ!!白影竜の縄!!」

影と光の爪がラーケイドを切り裂く。だが、追撃はまだ2撃残っているのだ。クオーリとカグラは、魔力の全身全霊を持って挑んでいく。

「不倶戴天!!」

「氷帝竜の雪刃氷牙!!」
せつじんひょうが

クオーリの副腕も含めた一撃が、ラーケイドを切り裂きつつ凍らせていく。そして、トドメと言わんばかりに不倶戴天がラーケイドを一閃。

その連撃は、ラーケイドを戦闘不能にするには十分に足りているダメージとなった。

「――眠るのは、あんたの方だったみたいだな。」

「……はー、疲れた。」

氷の鎧を解除して、クオーリは地面に倒れ込む。自身があそこまで力を発揮するとは思っていなかったが、魔力は完全に尽きてしまった。あれほどの力をもっと上手く使いこなせれば、なんとでもなるだろう。

「……さて、あっちの方は充分かね……」

空を見上げるクオーリ。考えているのはマルクの事だった。この戦い、ラーケイドはあと二人強いのがいると言っていたが……せめてその2人を倒せる奴がいるとすれば、クオーリとしては気に食わないがマルクだけだと感じているのだ。

時は少しだけ戻る。

マルク、ナツ、グレイの3人が死闘を繰り広げて、それにエルザが仲裁に入った後のことであつた。

後からウエンディやジュビア、ルーシイ達が来て1度全員安全なところに避難しようとしていたのだが、それよりも早くアイリーンが襲撃。

マルクはともかくとしても、ナツとグレイは今気絶しているので完全に戦えない状況となっている。

こんな時に狙われてしまうと、守ることしか出来ない……そんな状況となつていた。

「私はお前……お前は私……」

「何を言っている。」

「くく……くく……!?!」

静かに笑つていたアイリーンだったが、突如顔を赤面させて体を軽く悶えさせていた。

「くふ……これは……ラーケイドか……!」

「っ!今のうちにナツ達を安全なところへ!!」

「わかつた!!」

「あいー!」

エルザはその隙を見逃さず、ハッピー達に指示してナツ達を運んでもらうように指示を重ねる。

しかし、ただ飛ぶだけではあまりにも時間がかかりすぎる。

「わた、私ができる……！」

「お願い!!」

その場にいたマホーグが、ハッピー達に触れながら一気にジャンプを繰り返していく。

ただ飛ぶよりも、簡単に移動はできるのだ。

「さて……こいつの言葉の真意を確かめねばな……！」

「くっ……」

エルザはアイリーンに向かって刀を振るおうと突撃する。が、アイリーンは咄嗟に魔法を行使する事で、エルザを迎撃しようと考えた。

だが、その攻撃は届く前に霧散していた。

「私も戦います！」

「俺も…サポートしますよ。」

「ウエンデイ！マルク!!」

「付加術…!?それに、陛下が仰っていた天然物の悪魔……にしても、誰一人としてラーケイドの魔法が効かぬとは……ガキ共め……！」

「ガキ?よく分からんが、このまま畳み掛ける……！」

ラーケイドの快樂の魔法。それは範囲的に効果を及ぼすものと個人を狙った光の触手の二つがある。

前者は味方にも被害が出てしまうため、今アイリーンはそれに苦しまされているのだ。無論、その時の彼はすぐさまその範囲攻撃をやめたため――

「はっ……！」

「ちっ…止められた……！」

「はあ……ラーケイドめ……！」

持っている杖で、マルクの一撃を止めるアイリーン。付加術を行使して弱体効果をつけようとも考えたが、マルクにはその類の魔法は通じないと彼女は既に知っているのだ。

「しやがめマルク！」

「っ……！」

「おおおおおおお！」

マルクは言われたとおりにしやがむ。すると後ろからエルザが不

意打ちのごとく刀を振るって、アイリーンを切り裂こうと動く。

だが、アイリーンの杖はそれをいとも容易く捌いていく。

「肩借ります!!」

「はっ……!」

エルザが刀を振り抜いた瞬間に、マルクはエルザの肩に乗ってアイリーンに殴りかかろうとする。

だが、乗った瞬間にまるでそれを見越していたかのように、杖の先端を2人に向けて突き出す。

「つと……!」

「ふっ……!」

だが、マルクは上に飛びエルザは体を下に倒してをそれを回避。マルクは腕に魔力を、エルザは足の指に挟むかのように剣を取り出して足で二刀流を行う。

「おおおおお!」

「はあああ!」

エルザはまるでコマのように回転しながら、次々と斬撃を足で繰り出していく。マルクはそのまま空中で飛びながらアイリーンに向かって両手足全てを使って殴る蹴るを繰り返していく。

そして、エルザにはウエンデイの付加術エンチャントもあり、並の魔道士ならここまですれば簡単に倒せるだろう。

「ふふ……」

だが、アイリーンはその全てを捌いていく。マルクの攻撃も、エルザの攻撃も同時にたった一本の杖で捌いていく。

「くっ……!」

「ちっ……!」

一旦2人は距離を取って、体勢を立て直そうとする。だが、そんな事すらもアイリーンは隙として、見逃すはずがないと言わんばかりに間髪入れずに攻撃を行うのだ。

「はっ……!」

アイリーンが手を握って、すぐさま開く。まるで子供がするかのよ
うな行為だが、その一瞬の行為だけでエルザ達がいる地面が大爆発を

起こす。

「――天輪――」

「――魔龍の――」

だが、その爆発を利用してエルザは空高く舞い上がる。そして、土煙の中からマルクが渾身と言えるほどまでに、魔力を溜め込んでいた。

ブルーメン・フラット
「繚乱の剣!!」

「咆哮!」

エルザの剣が、マルクのブレスが……直撃したかのように思えた。だが、その場にいる3人は未だ気を緩めてはいない。

当たり前だ、相手しているのは西の大陸最強の1人なのだから。

「――なるほど、無数の剣による無差別な斬撃。これだけの剣を同時に操れるとは大したものだ。」

それに、魔力そのものを食らうと言われる者とペアを組んで遜色ない力を発揮出来る……よく出来ました。花マル!」

拍手をしながら、アイリーンはまるで何事も無かったかのように解説を始める。

そして、土煙が晴れた頃にはエルザが飛ばした剣で文字通り花マルが出来ていたのだ。

その強さは理解出来ていたが、エルザとマルクの同時攻撃でまともに傷すら負わせることができていないと言うことに、ウエンディは相手の強さを思い知った。

相手するは西の大陸最強の女魔導士、マルク達はこの人物に勝つことが出来るのであろうか。

アイリーン・ベルセリオン

「エルザさんとマルクの技を防いだだけじゃなくて…そんな…」

「ふざけたやつだ…」

「けど、実力は本物ですよ…」

「しかし、その小娘の付加術…さらにその悪魔の協力もあつてその程度か、エルザ。」

「話にならない。」

エルザとマルクの攻撃を避け切った上に、エルザが飛ばした無数の剣を花マルの形にしたアイリーン。

杖で、剣を一本軽くつつくと彼女が花マルの形にした剣が全て霧散するかのように溶けてどこかへと消え去ってしまう。

「貴様は何者なんだ。」

「まだ気づかんのか…いや、本当は薄々気づいているが、認めたくないのだな。」

「貴様など知らん。」

緋色の髪、そして滅竜魔導士^{ドラゴンスレイヤー}であるウエンディとマルクは、アイリーンの匂いがエルザから似ていると、彼女がここに来た時から思っていた。

そして、どことなくアイリーンにはエルザの面影があるのだ。それが、どうにも嫌な予感を知らせていた。

「——私はそなたの母親だ。」

「なっ……」

「え…？エルザさんのお母——」

「違う!!私は、ローズマリーで1人だった…ずっと親など呼べる者などいないと思っていた。」

「その親が、目の前にいる私よ。」

「……私が親と呼べる人は、生涯マスター1人だ。」

エルザは、凜とした目で睨み返す。確かに、驚かなかったといえは嘘になる。

しかし、今更でできた血縁者を今更母親等と思えるはずもなし。育

ててくれたのはギルドであり、ギルドメンバーであり、そしてマスターであるマカロフなのだ。母親なんて、どうだっついいい。

「まあ…構わないわ。私も娘がいるとか、本当はどうでもいいから。もうとつくに死んでると思つてたのよ……だが、こうして巡り会うとは数奇なことよのう。」

「ギルドを襲う者はたとえ誰であろうと……敵でしかない。」

「うむ、我がアルバレス帝国に歯向かう者も、敵としか見ておらん。例え我が子だとしてもな。」

お互いに睨み合う。だが、マルクは少し違和感を感じていた。親、というものが彼には正確にはわからない以上、ただの違和感で済ませられてしまうものだが、どうにも無視出来ないものとなっていた。

「……あんだ、若すぎるんだが。」

「女性に対して、あまり年齢の話はするものでは無いぞ?」

マルクの言葉に、エルザとウエンディは少しハツとする。そうなのだ、例え幾らエルザを歳早く産んだからと言われても、違和感のある若さなのだ。

エルザの年齢から、天狼島に封印されていた時の7年をプラス。少なくともその分の老化はしているはずなのだ。少なく見積つたとしても、どう考えても30前後では効かない年齢になるはずである。

だが、どう見繕つても目の前にいるアイリーンは多めに見積つても30前後の見た目である。

「……しかし、そうだな。疑問に答えるために……少し昔話をしてやろうか。エルザの出生の秘密もプラスしてな。」

「秘密?」

「必要ない、どちらもな。」

「せっかくこうして出逢えたんだ……遠慮するな。」

「黙れ!!」

エルザは、鎧をいつもの物に戻してからアイリーンに向かって突撃していく。

だが、アイリーンは敢えて前に出て、エルザの突きだした剣を抑えながらエルザに顔を近づける。

「我が名はアイリーン・ベルセリオン。かつてドラゴンの女王だった。」

そう言うってから、エルザの剣を先程の剣達と同じように霧散させてから突き放すかのように軽く押し飛ばす。

だが、それよりもアイリーンの言った言葉にエルザ達は絶句していた。

「400年前…ドラグノフ王国という所があった。その時代、その場所には人と共存しようとするドラゴンの姿があった。」

だが、西の大陸のドラゴン達は人と共存しようとはせず、そして人を餌と見て食らっている…そんな時代だった。

そんな中、賢竜ベルセリオンと呼ばれたその国の国王がいた。彼は、人間との共存を守るために…西の大陸のドラゴンと戦争を始めた…これが、後に竜王祭と呼ばれる戦争の始まり。

そう、ドラゴンの優しさから始まった戦争だった。」

「400年前、だと…!?その姿で……」

「その辺は面白い話す。面白くなるのはここからよ、エルザ…それに滅竜魔導士のおチビちゃん達にとっても…悪魔としても、関係のある話しよ。」

アイリーンのその言葉に、マルクは反応する。悪魔としての自分にも、滅竜魔導士としての自分にも…どちらにしても関係のある話と言われたのだから。

「私の国は、代々人とドラゴンが共存しともに歩んできた国…イシユガルにはそんな国がいくつもあった時代だった。」

そして、ドラゴン同士の戦いを私達が有利にするために…私は付加術を作り出した。」

「ドラゴン達に付与するために、か。」

「まあ、それがあっても状況はあまり変わらなかった…戦況そのものが芳しく無かったのだ。」

西のドラゴンの物量に加えて…イシユガルでも人との共存を望まないドラゴンが敵対したせいもあったからな。そんな中…ベルセリオンですら、負けると確信する程に状況が振りになってきた中で、私

はある秘術を思いついた。

人の体にドラゴンの力を付加させ、ドラゴンを倒すための力とする……そう、滅竜魔導士の始まりだった。」

「え……!？」

アイリーンが言ったことに、エルザ達は絶句した。目の前にいるアイリーンが、滅竜魔導士の生みの親であり、最初の滅竜魔導士と言っているのだから。

「お前が編み出した魔法、だと……!？」

「そうよ。私は滅竜魔導士の母……人にドラゴンと戦える力を与える作戦は、成功したと言えよう。」

多くの滅竜魔導士が誕生し、戦況はこちら側に有利に傾いた。そして、ほぼ同時期に……ドラゴンを完全に滅すための、組織も立ち上がった……まあ、それは私には全く関係のない所でできた組織だけど。」

「全く関係ない、だと?」

「ええ……イシユガルは、ドラゴンと人が共存しようとするものが多かった国……けれど、イシユガルに人との共存を望まないドラゴンがいたように、人にもドラゴンとの共存を望まない者達がいた。」

それが立ち上げられた組織、と言うやつよ。そして、私の真似事をして行つた。」

「真似事?」

マルクがアイリーンに尋ねていく。答える義務も無いはずだが、嘘か本当か確かめる手段はないものの、正直にアイリーンは答えていく。

「付加術よ、私がドラゴンの力をその身に付加させたように……相手はドラゴンの力ではない力を自分達に付与させた。その力が……悪魔の力だった。」

「っ!!」

「まあ、滅竜魔導士にしる悪魔の力にせよ……大いなる力は人間の体を蝕み始めていた。」

滅竜魔導士は、力を抑えきれずに暴走する者……ドラゴンの視力と人間の三半規管のズレによる極度の酔い……そして、人間の体内で成長す

る竜の種。それは人をドラゴンへと変える、滅竜魔導士の最後。」

まるで過去を見るかのように遠い目をするアイリーン。その目に写っているのは、絶望かそれともただの現実か。

「……ドラゴンの力を付与させた滅竜魔導士は、ドラゴンへと変貌していき…悪魔の力を付与させた者達は、悪魔となった。」

そして、悪魔となった者達の中でも屈指の強さを誇る7人がいた。彼らは彼らでドラゴンを狩っていった。」

「その7人って言うのが…」

「今お前の体内にある力…最終的に同士討ちで全滅して、ドラゴンの一人に食われたらしいがな。」

……それが、こうして目の前にあるというのは現実には小説より奇なりとはよく言ったものだ……」

「……話はそれで終わりか？」

「いいや、まださエルザ……まだ、貴様の出生の話が出来ていない……とは言っても、私がドラゴンに変貌し始めた頃くらいには、既に私の腹の中にいたのよ……エルザ、そなたがね。」

エルザに視線を向け、わざとらしく杖をエルザに向けるアイリーン。エルザも、ここまで来れば話に付き合おうとアイリーンに視線を返す。

「エルザ、お前の父は隣国の將軍だった。人間同士で領土争いをしていた頃の政略結婚と言うやつだ。彼とはいくつもの戦場を駆け抜け、ベルセリオンの最期も共に看取った。戦争は、アクノロギアの登場により勝ちも負けもなく集結した。」

数え切れないほどの死者を嘲笑うかのように、アクノロギア1人が勝った。そして、終戦から一週間……私はその頃にはすっかり国の敵となっていた。」

そのことに対して、皮肉った笑みを浮かべるアイリーン。あの時の自分が馬鹿らしいと言わんばかりの笑みである。

「アクノロギアのようになる……そう言われて、ドラゴンを愛しているといえ、捕まえられる……そんな状況だった。」

捕まえられたあとは悲惨なものだった。拷問、暴力、辱め……まあ

色々されたわ。人間じゃないと言われていたから、私に何をしても全てが不問となっていた。

そして、私はついに……ドラゴンになった。」

「…滅竜魔導士の竜化……」

アクノロギアがドラゴンになり、そして現代の滅竜魔導士であるナツ達のようにまだ対策が確立されていなかった頃の、滅竜魔導士の悲惨な末路。アイリーンはそれを完全に辿り切ってしまったということ。

敵だが、その過去に対してマルクは同情しか思いつかなかった。

「私は国を破壊して……お前が腹の中にいたまま数百年が過ぎた。人気のない山奥で、我が体の呪いを解く方法を探し続けた。

そんなある日……声をかけてくる青年がいた。それが、陛下との出会いだった。彼は魔法の天才だった。私が数百年なし得なかったことを……いとも簡単に成功させた。

竜の体から、人間の体に戻ったのよ。」

その事を聞き、改めてゼレフという人物の凄さを思い知るマルク達。しかし、彼とはいずれ戦うことになるだろうと確信していたため、その事で怯えて等いられない。

「だが、異変は直ぐにやってきた。何を食べても味がせず、どうしようも眠れやせず……身体中が痒く、寒く、そして痛かった。

そのことに気づいた時、私は絶望した……けれど、すぐに思い至ったのよ。

生まれてくる子に、自分自身をエンチャントすれば……人間の体が入ると。私はお前、お前は私……生まれてくる子供は、私の新しい体……」

狂ってしまったが故の、結論だった。恐らく彼女がまともな精神状態ならば考えつかなかっただろう、その事に妙に齒がゆい思いをマルクはしていた。

「……だが失敗した。我が子への付加術など不可能だった。

だからもう興味もなくなつてな……ゴミのように捨てたわ、小さな村の片隅に。」

嘲笑するかのような笑みを浮かべながら、アイリーンはポイと物を捨てる仕草を取る。最早、子に対する愛情は残っていないのだから。

「……それがローズマリー村か。」

「村の名など忘れたわ。」

「エルザさん……」

「……」

心配そうに、エルザを見つめるマルクとウエンデイ。だが、エルザはあくまでも凜とした態度でアイリーンを睨む。

彼女に取って、アイリーンの話は彼女の心を乱すことは出来なかったようだ。

「大丈夫だ……産んでくれたことには、素直に感謝せねばなるまいな。」

「要らないわ、ゴミの感謝なんて。」

「お前っ!!」

「自分の子になんてことを……!」

「——それと、捨ててくれたことに感謝する。そのおかげで私は、本当の家族に出逢えたんだ。」

換装を行うエルザ。白の剣と黒の剣を一本ずつ持ち、鎧はバニールに近い格好の鎧。

俊敏性が高くなる、鎧である。それは、エルザの覚悟でもあった。目の前の敵を倒す……彼女からしてみれば、アイリーンはただの敵になっっているのだ。

今、ここに話は終わり……戦いが再開しようとしているのであった。

エンチャントの祖

アイリーン・ベルセリオン。かつてはドラゴンと人間が共存する国の女王であり、そして王でもある賢竜ベルセリオンの力を自信に付与して生まれた初の滅竜魔導士^{ドラゴンスレイヤー}。

そして、後にドラゴンとなり自分の精神を自身の娘：エルザにエンチャントしようと考えた悲劇の狂人。

だが、今はアルバレスのスプリガン^{トゥエルフ}12であり、妖精の尻尾《フェアリーテイル》の敵である。

それを認識しているエルザは、同情こそすれど敵を倒すことへの迷いは存在していない。もとより、エルザにとっての親は妖精の尻尾のマスターであるマカロフである。

「たとえお前が私の実の母親だとしても、ギルドへの道を塞ぐものなら…斬るだけだ。」

「私も…昔話でもしたら我が子への愛着とヤラが少しは芽生えるかもと思っただけど…：残念、何一つ感情が動かないわ。」

アイリーンは手を一同に向ける。それだけで攻撃の合図だと、すぐさま理解した一同は回避行動に移る。

マルクが喰らえば良いのだが、ただの爆発では何処をどう喰らえばいいのか分かりづらいので、かわすことに専念するのだ。

「ふふ…」

次々とエルザを爆発しようとするアイリーンだが、エルザはその爆発を全て回避。すぐにアイリーンとの距離が縮まり、2つの剣がアイリーンに迫る。

しかし、アイリーンはそれを杖1本で凌ぐ。

「魔力のみで一国の女王となった私に、勝てると思ってるの？」

「本当の家族がいるからな。」

「っ！」

エルザが抑えている間に、両脇から攻めるようにそれぞれマルクとウエンディが迫ってくる。

「天竜の——」

「魔龍の――」

「翼撃!!」

「ぬっ……!」

ウエンデイとマルクの攻撃が、アイリーンの腰を裂く。そして、その傷で怯んだ瞬間に、エルザも押し切る。

「紅黒の双刃!!」

「うあ……!」

エルザの2つの剣が、アイリーンの体をXに切り裂く。だが、それで終わるほど簡単な相手でもない。

「この私に、傷を……」

「あなたの過去には同情します。でも、自分の子を愛せない人を……私は許せません。」

「あんたは聞いている限り、確かに可哀想な人だと思うよ……けど、それで狂ってしまったのなら、誰かが止めなきゃなんねえんだよ。」

「……」

ウエンデイとマルクの2人の言葉に、アイリーンは何も返さない。ただ、笑みを浮かべていたのだ。

「……滅竜魔導士のおチビちゃん、さつき話の中で竜の種……という言葉が出てきたでしょ? それはそなたの中にもあるのよ。」

「はい。でもそれは、私のお母さんが……長年かけて成長しないように抑えてきました。」

「何っ……!?!」

「だから私達は竜化しません。」

「恐らく、ナツもな。」

ウエンデイから聞かされた事実には、アイリーンはわなわなと震え始める。その表情には先程までの笑みが残っているが、内心は恐らく感情がぐちゃぐちゃに入り交じっていることだろう。

「なるほど……ドラゴンが体内に入り、竜の種の成長を止めていたのか……私に魔法を授けたベルセリオンは戦場で死んだ……私は彼の名を受け継ぎ、彼の常を晴らすと誓ったのよ……しかし、そんな方法で竜化を防げたなんてね……」

そして、ついに表情から笑みが消える。恐らく、彼女の中で最も必要ではあるが、知りたくなかった真実だろう。

今まで何百年も生きていたのはなんだったのか…そう、考えてしまったのだ。

「不公平だわ!!」

怒りのままに放たれた一撃が、誰に当たることなく虚空を飛んでいく。最早、冷静さは皆無となって怒りや悲しみ、そして嫉妬が彼女をつき動かしていた。

「私の人生を返して!こんな体要らないのよ!!!」

「——ならば私が楽にしてやる!!ウエンディ!!」

「はい!!全身体能力上昇…デウスエクセス神の騎士!!」

ウエンディのエンチャントが、エルザを強化する。だが、アイリーの得意分野はただのエンチャントではなく、つける外すが上手いエンチャント使いなのだ。

「小賢しいわ。分離エンチャント、デウスゼロ神の無加——」

「おらあ!!」

「くっ!?!」

「ちっ、外した!!」

分離エンチャント。文字通りエンチャントを外すエンチャントだが、それを使われる前に、マルクがアイリーンに対して魔力の塊を放り投げたのだ。

どんなエンチャント使いでも、魔力そのものを喰らわれてしまえば成す術がないだろう。それを理解しているからこそ、アイリーンは避ける事を優先してしまっただのだ。

「おおおおー!」

「……………ふっ——」

マルクが一旦下がり、入れ替わるようにして、2つの剣を合わせて一気にアイリーン目掛けて、振り下ろす。

だが、エルザもウエンディもマルクも少しだけアイリーンが微笑んだ事に気づかなかった。

「これで終わりだア!!」

そして、アイリーンの頭に剣の一撃が炸裂する。しかし、その衝撃のほとんどを彼女の被っている帽子が相殺したのか、頭から流血を流す程度で済んでしまっていた。

「分かったぞエルザ……エンチャントの真理がな。赤ん坊だったから……身内だったから……失敗したのか？ いや、そもそも人間への全人格エンチャント自体が不可能なのか。」

突如語り出すアイリーン。その不気味さに、全員が警戒を強める。だが、アイリーンは一向に動く気配を見せない。

「答えはN oだ。相性……というものが必要だったのね。」

「なっ……まさか、ウエン——」

「滅竜魔導士であり、エンチャントであり……若くて竜化しない体が目の前に現れるなんて——」

アイリーンの体が、痙攣を始める。何かに気づいたマルクが、咄嗟に魔力弾をアイリーンに向けて投げるが、その肉体はなんの抵抗もなく吹き飛ばされるだけだった。

「っ——！」

「まさか……」

「ああ、この時を待っていた……多少、魔力は落ちるが問題ない。」

アイリーンの体は吹き飛び、ウエンデイが語り始める。その光景に、エルザは悲しみと困惑の表情を見せて、マルクは血が出るほどに強く手をにぎりしめていた。

「新しい体、新しい人生……アイリーンは生まれ変わったわ。新しい体、私の体……」

「——貴様ア!!」

マルクが、一気に殴り掛かる。ウエンデイ……否、ウエンデイの体に乗っ取ったアイリーンに向かって、その拳を感情的に振り回す。

「左大腿部損傷、全身に打撲等の挫傷多数……でも問題ない、動くわ。」

「返せ！ウエンデイを、返せエエエ!!」

「あら、悪いことしたわね。けどごめんなさい、あなたはタイプじゃないの。」

感情的になっているマルクをあしらうかのように、アイリーンは攻

撃をかわしていき、鋭い蹴りをマルクの腹に打ち込む。

「がつ……！」

「マルク！」

「何イ？このお胸、可愛い〜」

自分が生まれ変わったのを再確認するかのようになり、アイリーンはウエンデイの体を触って確かめていく。

吹き飛ばされたマルクは、地面を転がって行ったが、すぐさま立ち上がって再び挑んでいく。

「う、ウエンデイは……」

「あら、鈍いのねエルザ。彼女はもう既に存在していないわ……きつき吹き飛ばされた体は、既に肉の塊。

ああでも敢えて言うなら……私かしら。」

「貴様ツ！貴様貴様貴様ア!!」

「しつこい子ね……まだ分からないのかしら？貴方では、もう『今の』私に勝てないのよ。」

マルクに対して、アイリーンは物理攻撃しか行わない。エルザも、冷静になりつつも、しかし怒りは抑えきれずにアイリーンに殴り掛かる。

「ふざけるな！ウエンデイから出ていけ!!」

「にしても頭の悪い子達ね……これは憑依の類じゃない……私はこの子自身になつたの。」

ママだけ若返っちゃってごめんね？」

「がはっ……！」

「ぐっ……！」

「そう、この子はもう既に私自身……だから、魔法を無効化されようと私はもうあの体には戻らない。」

アイリーンが手を軽く持ち上げる。瞬間、エルザ達のいる場所が爆発する。

その魔力は強大なもので、怒りに捕われているマルクもまともにその攻撃を浴びてしまう。

「ふむ、魔力も思ったよりは下がってない。元々この娘にそれだけの

素質があつたということか。

さて……こんな可愛らしい子が子持ちなんてイヤでしょ？だからあなたの存在を消さなきゃ……私の新しい人生が始まらないの!!」

「ガッ……」

「天空の滅竜魔法……こうかしら？」

軽く浮き上がり、アイリーンはウエンデイの体で天空魔法を発動させる。それを、マルクは自分の魔力で相殺する。

「がア!!」

「ふふ……まあその程度なら許すのかしら？でも……あなたはこの体に攻撃を仕掛けられない。このこの人格が戻ってくると信じているから、殺すことをためらってしまふ。」

「……」

「ほんと、そんなこと考えても無駄なのよ！もうこの子の自我は死んだ！今日から私がウエンデイ！ウエンデイ・ベルセリオンよ!!」

天空魔法の力で空に上がったアイリーンは、2人を見下ろす。そこにはただただ嘲笑の意思しか込められていないのだ。

だが、攻撃は仕掛けられない。ウエンデイの体なのだ……攻撃できるはずがないのだ。

マルクもエルザも、攻撃ができない。

「ふ……甘いよ、二人とも……鎧にエンチャント……『爆破』!!」
「っー」

「うああああ!？」

エルザの鎧に、エンチャントが付与される。それは、爆破のエンチャント……つまり、かけた瞬間に爆発するエンチャントである。

「エルザさん!!」

マルクは最悪を予想する。爆発耐性のある鎧だろうがなんだろうが、関係なしに爆発させるエンチャントだろう。つまり、下手をすればエルザは今の一撃で……と、マルクは予想していたがどうにも現実とは異なっているようだった。

「——ダメージが、低い？」

「え……?」

エルザの体には、ほとんどダメージが入っていないかった。鎧こそいくらか破損してしまっているが、破損している程度ですんでいた。

「――全属性、耐性上昇…神の王冠デウスコロナ…同じエンチャンターなら、もしかしたら私にも、できるかもって思ったんです。」

「あ、ああ……！」

動かないはずの体が動き始める。その言葉遣い、そして声質こそちがうものの喋り方の優しさは…紛れもない、マルクが聞き間違えるはずもない人物のそれだった。

「ちよつと、時間がかかりましたけど……私です、ウエンデイです…！エルザさん、マルク…！」

「ウエンデイ!?」

「ウエンデイイイイイイイイイイイイイ!!」

マルクは、最早体がどうか関係なく、ウエンデイに抱きついた。元々が成熟したアイリーンの体のために色々当たっているが、気にしないほどに嬉しさが勝っていた。

「馬鹿な…!?」

「お胸が、重い……」

「ウエンデイウエンデイウエンデイイイイイイイイイイイ!!」

「う、嬉しいのはわかったから……あの、恥ずかしいよ……」

軽く赤面しながらマルクを撫でるウエンデイ。それとは正反対に、アイリーンは絶望の表情となっていた。

「ありえない!!こんな小娘に全人格エンチャントなど!!」

『『貴方』の魔力凄いです。『私』の体なんかに入ったのが間違いですね。』

「……つと、まあ……これで形勢逆転つてところか……！」

魔力を手に貯めるウエンデイ。無論、ウエンデイの体に乗っ取ったアイリーンもまた強者ではあるが、魔力そのものまで入れ替わった訳では無いのだ。

自身の体にある魔力…それは、アイリーンの体の方が大きいものなのだ。

形成は逆転、アイリーンは焦り、困惑しながら…ウエンデイはアイ

リーンを視線に移しながら、戦いは最終局面を迎えようとしていた。

ドラゴンの女王

「エルザさん、伏せて！マルクも…今は私を信頼して…！」

「あ、ああ！」

スプリガン^{トゥエルフ}12が1人であるアイリーン・ベルセリオン。彼女は、元はドラゴンと人間が共存する国の女王であり、またエンチャントと^{ドラゴンスレイヤー}滅竜魔導士を作りしもの。

しかし、滅竜魔導士を作り出した者は、自分の体がドラゴンになっていくのを止められなかった。そして、最終的に体はドラゴンとなり彼女は人間に戻ろうとし始める。

その過程において、アイリーンは自分のお腹の中にいる娘…エルザを産んだ後で、エルザに自分の人格全てをエンチャントすることを思いつく。だが、結局それは叶わずエルザはローズマリー村に捨てられ今に至る。

そして、アイリーンの方はこの戦争において滅竜魔導士であり同時にエンチャントターでもあるウエンデイの体を欲した。自分がエルザにエンチャントできなかったのは、相性の問題だといひウエンデイの体に乗っ取る。

乗っ取られて、マルクはウエンデイとなったアイリーンに攻撃を仕掛けるが、ウエンデイの体に傷をつけるといひことは自分で行えずに、そのまま一方的に飛ばされてしまう。

しかし、そんな時に既に空っぽになっていたはずのアイリーンの体が動き始める。その空っぽの器に入っていたのはウエンデイの人格だった。

アイリーンが人格エンチャントをやるのとほぼ同時に、自分も人格エンチャントを行うことによつて、アイリーンの体に乗っ取ることに成功したのだ。

そして今、ウエンデイは自分の体を取り戻すためにアイリーンの魔力を存分に使う。

「くう…!? 私が、押されている!?!」

「——分離エンチャント。」

「なっ!?体から私を引き剥がすつもりか!？」

「ええ、こつちの方が魔力は上ですから。」

「こいつ、何者…!？」

そして、類まれなる魔力の高さと多さを利用して、ウエンデイはアイリーンの人格を自分の体から引き剥がすことを考える。

アイリーンは、ウエンデイが自分とほぼ同等のエンチャント技術を持っている事に驚き、そして恐怖した。

「私の体、返してもらいますよ!!大きいお胸には憧れますけど、私はその小さい体で生きてきたんです!!」

「おのれえええ!!」

ウエンデイの攻撃に抵抗しながら、アイリーンはウエンデイの傷口を抉る。

その行為は、自傷行為に見えるが、実際は意地でも体を手放さないという欲が見えてしまう。

「何を…!」

「これでもこの体に戻れるかア!?やつと手に入れた体!!渡さん!!!絶対に渡さん!!!」

「体中の傷は私が生きてきた証!妖精の尻尾フェアリーテイルで戦ってきた勲章ですから!!傷なんていくつ増えても構わない!!

その体には……、大切な人達と触れ合った記憶が残っているんです。」

「ウエンデイー!!」

「くそおおおおお!!」

魔力のぶつかりあいが止み、そして2人の女はふらついていた。1人は絶望によって。1人は傷口から出る出血量によって。

「——エルザ、さん…」

「ウエンデイー!戻ったのか!？」

「はい……マルク、エルザさん……あとは、任せてもいいですか…」

傷口と、人格の移動という未知のことを体験した影響か、ウエンデイは尻もちをつきかける。

だが、瞬時にマルクがカバーに入りなんとか尻餅をつかずに済んで

いた。

「ああ、存分に任せてくれ…」

服の袖を破り、マルクはウエンデイの傷口を塞ぐようにそれを巻きつける。簡易的な処置だが、無いよりはマシだろう。

マルクはウエンデイをゆっくりと寝かせた後に、立ち上がる。

「……決着は、私達がつける。」

「小娘共が……！」

「ウエンデイ、直ぐに終わらせてやる……ちよつとだけ待つてろよ。」

「すぐに、だと……？笑わせないでくれるかしら……400年生きた魔力を前に!!」

手を振り下ろし、アイリーンはエルザ達のいる所を爆破させる。だが、エルザはそれをバックで回避、マルクは既にタイミングは覚えたので爆破した瞬間にその魔力を全て吸収する。

だが、アイリーンはマルクを無視して、そのままエルザに攻撃を仕掛けていく。どうやら、倒せるものから倒していく算段のようだ。

「俺を無視、すんな!!」

「くっ！小童が……！」

舌打ちしながら、マルクの攻撃を必死に回避していくアイリーン。その表情には、既に余裕は無くなっていた。

「400年もかけてあなたを守ってきたのに……生まれきたら少しの役にも立たない小娘!!私の幸せまで邪魔するつもり!!」

「あなたの不幸はわかった……だが……私は負けられない!!」

エルザの一太刀が、アイリーンを狙う。だが、その斬撃もアイリーンは防いでいた。

マルクも、反対側から攻撃をしていたが、それも防がれていた。

「あなたの不幸は、確かに不幸だと思えるものだ……けどな、それに他人を巻き込むのは違えだろ!!」

「そなたらに……そなたらに私の不幸のなにがわかる!!」

両腕を降るって、2人を引き剥がす。既に、余裕をなくして我を忘れていた。怒りのままに力を振るうただの魔導士となっていた。

「貴方が捨てた村で私は捕まり、数年間……カルト教団の所有物とされ

ていた。

貴方の400年に比べれば、大した不幸じゃないな……！」

吹き飛ばされてから、すぐさまエルザはアイリーンに迫る。その言葉からは、アイリーンに対する同情と自分の負けられない思いが詰められていた。

「それに、あの時の自分があったから……今の私がいる。大切に思える人もできた。

辛い出来事も仲間がいたから乗り越えられた!!」

「綺麗事を……そなたの存在全てが憎い!!産まなきやよかった!!死ね死ね死ね!消えてなくなれえええ!!」

「っ！エルザさん離れて!!」

マルクは、エルザに注意を飛ばす。アイリーンの魔力が憎しみによって膨大にふくれあがったのを感じとったからだ。

だが、その注意ですら既に遅かった。

「おおおおおおおおおー！」

アイリーンの服は弾け飛び、爪は伸び、そして鋭利化していく。皮膚は全て鱗となり、そして体は肥大化していった。

「がはっ……!?!」

「エルザさん!」

変身途中のアイリーンに吹き飛ばされたエルザを、即座にマルクが受け止める。

しかし、既にそこには女魔導士としてのアイリーンは存在しておらず、ドラゴンが佇んでいたのだ。

「ドラゴン……!?!」

「っ！エルザさん伏せて!!モード悪魔龍——」

ドラゴンの姿に戻ったアイリーンが、腕を振るう。それが即座にやばいと判断したマルクは、エルザを突き飛ばして呪力を使ってモード悪魔龍へと変貌する。

おそらく一番力が強いであろう形態。

「憤怒怒り……!」

体は呪力で覆われて全てが大きくなり、ドラゴン化したアイリーン

と比べても遜色ないほどに大きくなっている。

「たかが悪魔が!!」

「そのたかが悪魔にやられるんだよ!!」

「賢竜はエンチャントの力をさらに増大させる!!ハイエンチャントの上位、マスターエンチャントへと!!」

「んなもんいくら使ったところで俺には勝てねえぞ!!」

「ふん…!大地や空や海…あらゆるものを超越した力、天体へのエンチャントだぞ!!たとえ貴様とて防ぎきれん!!エルザごとまとめて…
砕け散りなさい!!」

デウス・セーマ
神の星座崩し!!」

空を超え、宇宙から星が降ってくる。そんなものをまともに受けてしまえば恐らくこの辺一帯が吹き飛んでしまうだろう。

そして、余波だけでもおそらくエルザとウエンデイが吹き飛んでしまうことに、マルクは気がついた。

「そ、そんな馬鹿な…!?!」

「くっ…!?!」

今ここで受け止めなければ、全てが終わる。そして、今それができるのは自分だけだと、マルクは直感的に行動を起こす。

だが、この形態では空を飛ぶことすらもできない。強欲の力ならば、空を飛翔することも可能なのだ。

マルクは願った。この力を維持したまま、強欲の力を使いたいと。自分の力の足らなさに『憤怒』し、力を貪欲に求める『強欲』さを発揮する。その『傲慢』さは、やがて自分の中の悪魔に対する『嫉妬』を生み出して、マルクはこの力をこのままだ使っていた『怠惰』さに呆れ果てる。愛するものを守りたいという『色欲』のもとに、あの星の魔力や星すらも食らって力に還元してやるという『暴食』を発揮した。

その発揮された力は、マルクの中の何かを…壊した。

「うおおおおー!」

大きな体を維持したまま、体には装甲が現れる。そして大きな翼が生えて、顔も竜のように変貌する。

体は黒い炎で燃え上がり始め、触手のような物体が腰布のように腰に現れる。そして、それを更に閉じ込めるかのように雑な作りの…まるで岩の破片をつなぎとめ張りつけたかのような装甲が、組み立てた。

「ウウウ……！」

「マル、ク……！」

マルクはそのまま飛び上がり、隕石を抑える。ただ、抑えるだけで意味が無いのだ。このまま壊さないといけない。

「悪魔の力を行使しているとはいえ、隕石を止めるだど!？」

「ただの、悪魔じゃあねえからなア!!」

声を張り上げながら、マルクは腕に力を込める。体の中にある呪力がマルクの力をさらに活性化させる。

次第に、隕石はその体積を徐々に減らし始める。マルクの装甲が、隕石を喰らい始めているのだ。そして同時に、隕石を両腕の単純なパワーで破壊しようともしている。

「ガアアアアアアア！」

「馬鹿な、そんな……はっ!？」

マルクが隕石を壊している間、アイリーンはふと地面を見た。そこには既にエルザの姿はなかった。

隕石を呼び、そしてマルクの異形化とその力に意識を向けてしまったのだ。エルザはどこに行ったのか、アイリーンは上を見上げて、気づいた。マルクの肩にいたのだ。

「マルク!!」

「エルザさん!？」

「その力を、貸してくれ!!」

「——はい!!」

マルクは、その隕石を完全に破壊する。そして、ある程度取り込めた隕石の力、アイリーンが付与したエンチャントの力をエルザの刀に付与させる。これほどまでにしないと、ドラゴンの鱗は切れないと判断したのだ。

「覚悟おおお!!」

「例え隕石の力を使つたとしても!!ドラゴンの鱗は切れないわよエルザアアアアア!!」

「だったら……切れる、ように……エルザさんの剣に、滅竜属性を、付与……!」

「なっ……!?クソオオオオ!!」

ウエンデイが最後の魔力をふりしぼり、エルザの剣をさらに強くするために滅竜の属性を付与させる。

最早それを分離している暇はない。アイリーンは、渾身の力を持つてしてエルザを迎撃しようと吼える。伸ばした腕が、エルザを捕らえようと動く。

「はア!!」

「ぐう!!」

エルザは自分の体の限界を超えた力をふりしぼり、まず腕を切り裂いた。この時点で既に片腕が折れてしまっていた。

故にエルザは足も使つて、アイリーンの肩に剣をぶつける。

「ぐうううう!!」

「終わり、だアアアアア!!」

足が折れる。火事場の馬鹿力とはよく言ったもので、鍛え上げられたエルザの筋肉の力に、今まで耐えてきた骨がまた折れてしまう。

滅竜の力があつてもドラゴンを傷つけるのは現代の滅竜魔導士達では難しい。ならばそれを押し込めるだけの力が必要だったのだ。

それを、体を犠牲にしてまでエルザは成しえた。

「ああああああ!!」

そのまま振りぬき、エルザはアイリーンの体を切り裂いた。その時点で体中の骨が折れて軋みを上げてしまつていたため、エルザは地面に投げ出される。

アイリーンは、元の人間の姿に戻つていた。

勝負は、エルザ達の勝利となつたのだった。

親子と絶望

「ああ…ああ…！」

ドラゴンなったアイリーン。それを、エルザは自身の体がボロボロになつてでも自分の体で彼女の鱗を切り裂いた。

だが、斬ろうとして無茶を犯した結果彼女の体の骨はほとんどが折れてしまう。そして、アイリーンもまた切り裂かれた影響で体がドラゴンから人間の体へと戻っていた。

「エルザさん！ぐっ…!?!」

しかし、アイリーンは未だ立っていたのだ。流石はスプリガントゥエルブ1212と言うべきなのだろうか。

マルクはそれを庇おうと一気につめようとするが、体に異変が起こる。呪力を全体的にまとい、体の形すらも変化させていたがその変化がいきなり解ける。そして、体から力が抜けたことで落下してマルクも動けなくなってしまう。幸いな事は、彼が悪魔の力を直前まで使っていた影響か、体のダメージが表面だけで収まっていた、ということである。

「手こずらせやがって…小娘がア…！」

アイリーンは、エルザが使った剣を手に持ちながらエルザに迫る。ウエンデイもマルクも動けないためにエルザを守ろうとすることが出来ない。

「これで終わりよ…もう、諦めなさい。」

アイリーンは剣をエルザに向ける。だが、剣を向けられているエルザは微かに笑っていた。それが、アイリーンに過去をふと思い出させていた。

そして、思い出されたその過去が…彼女の隙を招いた。

「笑うな…笑わないで…笑うなあアアアア!!」

「まだ…諦めてないからな!!」

エルザは、折れてない片腕で一気に起き上がる。自分の体に剣が刺さってしまうが、それを気にするほどエルザに痛みの耐性がない訳では無いのだ。

肩から腹にかけて突き刺さってしまう剣だったが、エルザはアイリーンに頭突きを入れることが出来た。

「エルザさん……！」

「エルザさん!!」

「――まだ、詰めが甘いわね。」

頭突きを入れられたアイリーン。しかし、彼女はすんでのところで踏みとどまったのか、倒れずに二本の足で立っていたのだ。

そして、エルザに刺さった筈の剣をその手に持っていた。

「剣は、ここよ……これで、おしまいね……」

そう言いながら、アイリーンは剣を自分の体に躊躇なく突き刺した。

「え……？」

「っ!？」

「自分の、体に……!？」

突然の事で、困惑する一同。しかし、アイリーンのその顔はどこか満足気な表情となっていた。

「情けないわね……帝国最強の女魔導士の私が……自分の娘だけは、殺せないなんて……」

そして、アイリーンは膝を着いた。最後の最後で、親子の上が湧いたのだ。

いや、もしかしたら彼女は初めからどこか遠慮していたのかもしれない。だが、その親子の情を認識したのは、彼女にとっては今なのだ。

「な、なぜ……」

「さあ、何故かしらね……そなたが笑ったせいね……思い……出したんじゃない……かし……かし……そなたを、愛していたことを……」

そして、アイリーンは息を引き取った。最後は、親子の情に負けたのだ。エルザは唇を噛み締める。

もっと何か違う方法があったのかもしれない、もしかしたら分かり合えていたかもしれない……そんな幻想を抱いて、しかし彼女は首を横に振った。それは有り得なかった、と。

「――さよなら、お母さん。」

もう出会うこともないだろう。唯一にして、たった一人のエルザの『母親』出会った人には。

傍に、ウエンデイとマルクが寄る。二人とも、この結末には少し後悔していた。同じように、考えているのだ。

「エルザさん……」

「大丈夫ですか？」

「ウエンデイ、マルク……私は無事だ。」

2人の心配するエルザ。どう見ても無事ではない為、即座にウエンデイが治癒を行っていく。

全身の骨折に、剣が1度刺さっているのだ。急いで治癒させなければいけない。

「私は……大丈夫だ。」

「いいえ、その……体だけじゃなくて……」

「ああ大丈夫だ。問題ない。ありがか二人とも……」

「……あの人も、母親だったってことですかね。」

「きつとそうだろうな……あの人も、悲しい人だったのかもかもしれない。それでも私の親はマスターだけだ。」

マカロフの事を思い出すマルクとエルザ。マルクは直接目にしていないが、魔力を感じとれなくなったということは、きつとそういうことなのだろう。

「そう言えば、さつきから気になってるんですけど……戦場からマスターの匂いが消えたんです。色んな人の匂いが入り交じってるから、確かではないけど……」

ウエンデイのその言葉に、エルザとマルクは顔を伏せる。マルクはちゃんと見てはいないが、魔力を感じなかった時から恐らくはそうであらうという予想は立てていた。

「……大丈夫、私がついてる。」

エルザはウエンデイを抱きしめて、そういった。ウエンデイも全てが理解出来てしまったのか、涙を浮かべ始める。

「そんな……」

「……マスター……」

拳を握るマルク。だが、間髪入れずに次の事態起こり始める。突如として周りが光り始めたのだ。

この光は、少し違うもののマグノリアの形を変えた光と、直感的に似ているとマルクは察していた。

「くっ！」

「マルク!？」

「2人とも、離れないで!!」

エルザとウエンデイの近くに寄って、マルクは魔力を展開する。恐らく、またどこかに飛ばされるのだと思って、全員なが離れないようにするためである。

そして、光は段々と強くなっていき……一瞬の暗転の後、世界は元の姿に再構成される。

「——ここは…フェアリーヒルズ?」

開口一番、目を開けたマルクは場所を確かめる。妖精の尻尾女子寮フェアリーテイルの、フェアリーヒルズに3人はたどり着いていた。

「ここならば…ある程度装備を整えられるな。」

「そう言えば、エルザさんもヒルズに住んでましたね……とりあえず、ここで少し休憩していきましょう。」

「うん…エルザさんの傷も治さないといけないから。」

完治こそ無理だが、少なくとも折れた骨を治さねばエルザは動くことすらままならない。

ウエンデイは治療術で、エルザを回復させていく。そして、しばらくした頃にエルザは動けるまでに回復していた。

「……エルザさん、歩けますか?」

「本当にお前の治療術は凄いな……」

「私がマスターのそばにいたら、もしかしたら……」

「いや……あれは覚悟を決めた魔法だった。命を燃やす覚悟を……」

ふと、エルザは視点をずらす。そこには偶然なのかアイリーンの死体が転がっていた。

それを見て、落ち込みそうになるが直ぐに振り払う。

「「っ!」」

そして、すぐさまにマルク達三人は強大な魔力を感じ取る。だが、ほんの一瞬、マルクの方が感じ取るのが早かったのか……エルザとウエンデイの前に出て、魔力を込める。

「魔龍の――」

そして、すぐさま全魔力を持つてブレスの準備をする。だが、ゆっくりと魔力を練っている場合ではないのだ。

マルクはほぼ一瞬とも言えるタイミングで、使えるだけのありったけの魔力を、込める。

そして、その直後に……『絶望』が地面に落ちてきた。

「――咆哮!!」

そして、マルクのブレスが飛び降りてきた何かに対して放たれる。マルクの込められるだけの、ありったけの魔力。これが当たれば魔導士であればたとえアイリーンであろうともオーガストであろうとも、関係無く全魔力を奪うことが出来ただろう……自他ともに認めるほどのそれらの攻撃は……相手には通じていなかった。

「――我は飽きた。この世界に飽きたぞ、黒魔導士。」

土煙の中から現れたのは、肌が黒くそして見える範囲で、腕には何かの文様。黒いマントを羽織り、そして黒いズボンを履いている男。

髪は長く、そして青色だった。だが、最も目立ち印象に残ったのはその魔力の強大さと、どこか感じたことのある魔力だったということ。

「誰だお前はア!!」

「……」

マルクは警戒を最大にしているが、目の前の男は通り過ぎる。マルクは相手にしていないかと言わんばかりに。

そして、アイリーンの死体の前にまで歩き、彼女の死体を見下ろしていた。

「うぬであったか……人々に滅竜の力を与えたのは。ならばうぬは私の母……」

そう言い、足でうつ伏せだったアイリーンを仰向けにする。そして、足を上げ……彼女の体目がけて振り下ろした。

「私の罪イ!!アハハハハ!!」

「ひっ……」

男は笑い声を上げながら、アイリーンの死体を踏みつぶした。何度も何度も、笑い声を上げながらただひたすらにアイリーンを踏みつぶしていく。

「クハッ!クハハハ!!」

「……よせ、骸を辱めるのはやめろ……!」

エルザが声をかけると、ピタツと……まるで直前までのことがなかったかのように、男は止まった。

「うぬはこの女と同じ匂いがするなあ……っ!」

「……」

男は、ウエンデイに視線を向ける。それを、マルクが間に入って庇うが男にはマルクが視線にはいっていないようだった。

「滅竜魔導士?こんなガキが滅竜の力を……」

「貴様は何者だ!」

エルザの問いに、男は答えない。だが、エルザもウエンデイもマルクでさえも……その男の正体には気づいていた。

「この魔力……この人……」

「……なんで、ここに居るんだアキノロギア……!」

男は……アキノロギアは、ウエンデイを見すえたまま口角を上げる。それとほぼ同時に魔力を練り始めていることに気づいたマルクは、呪力の方を使って相殺しようと考えている。

「ふん!!」

そうして、2人の攻撃は激突した。しかし、あのアキノロギアの攻撃とマルクの全力の攻撃である。その余波は凄まじいもので、お互いの方に爆風が迫ろうとしていた。

しかし、その爆発の余波を防ぐかのように間にバリアがあらわれ、また新たにこの場に一人の男が現れる。

「——ジエラール!」

「マルク!!」

「ああ!!モード悪魔龍暴食喰らい!!」

イーターグレートニ

即座に呪力をまとい、マルクはアクノロギアに特攻していく。そして、それを支援するかのよう、突如現れたジェラールは魔法を使っている。

「天体魔法！六連星!!」
ブレアデス

「がア!!」

マルクの攻撃を、アクノロギアは避ける。しかし左右に逃げられないように、アクノロギアの左右にジェラールの魔法が刺さる。

そして、マルクの呪力によって生まれていた3つの首が、アクノロギアを喰らおうと動いて行く。

「……っ!!」

「九雷星!!」
キュウライシン

即座に回り込んだジェラールだったが、9つの光の刃をアクノロギアに後ろから浴びせていく。

アクノロギアはこれをかわすが、無駄打ちにはならずそのままマルクが地面に落ちる寸前に拾って、ジェラールの魔法をくらった。

「だらア!!」

「ぐおっ……!」

ムチのようにならせて、マルクの首がアクノロギアを吹き飛ばす。その一瞬の間でマルクは呪力を貯めて、ジェラールはトドメを指すために自分の中で最も威力の高い技を選ぶ。

「7つの星に裁かれよ!!」

「暴食龍の——」

「七星剣!!」
グランシヤリオ

「暴食砲台!!」
グラトニーバースト

3つの頭が、全てを削りながらアクノロギアに迫っていくビームを放つ。ジェラールは、アクノロギアの真上から光り輝く星の裁きを放つ。

だが、アクノロギアは空中で身を翻したかと思えば、未だ余裕そうに笑みを浮かべていた。

「クハ！ハハハ!!ハハ！ハハハ!!」

そして、ジェラルルの魔法をアクノロギアは食べた。その直後に、マルクの攻撃を素手で弾き飛ばした。

「魔法を……」

「食った…!?!」

「な、なんの属性を……」

ジェラルルの魔法を食らったのだから、当然ジェラルルの使う魔法と同じ属性の魔法を使うのだろう。そして、それらを食らうのだろう。だが、だそれだけでこの男はアクノロギアとはなっていない。

「――属性？我にはない。我は最後のドラゴン、全ての魔を喰らいし終焉のドラゴン!!魔竜アクノロギアなり!!」

そう叫びながら、アクノロギアはドラゴンの姿へと変貌した。そして、アクノロギアが告げたアクノロギアの事実。

全ての魔法を食らうその強さに、一同は少し絶望を味わってしまったのだった。

魔竜と魔龍

「全ての魔を……こいつには魔法が効かんというのか!？」

「ああ……あ……」

アイリーンを倒したエルザ達。しかし、突如そこにアクノロギアが立ちはだかる。人型をしていたために、一瞬でも気づくのが遅れてしまっていたのだが、それをマルクとすぐさま駆けつけたジェラルが応戦。

だが、アクノロギアは魔法を全て食らうドラゴンだった。その事実
に、恐れて絶望し掛かっていた。

「天狼島で対峙した時とは、魔力が違いすぎる。」

「か、勝てるわけがない……」

エルザとジェラルは、あまりの力の大きさに屈しかけていた。だが、それを打ち破ろうとするために、ウエンデイが動こうとしていた。

「わ、私が……私がやらなきゃ……滅竜魔導士だから、私が——」

しかし、その表情は絶望によるヤケを起こしている者のそれだった。それでは勝てるわけがないと、子供でもわかるようなことだった。

そんなウエンデイの頭に手を置く者がいた。マルクである。

「あ……」

「……ウエンデイ、エルザさんとジェラルを頼むな。」

優しい笑顔を、マルクはウエンデイに向けていた。ウエンデイは絶望による焦りが無くなり、その分冷静になることが出来たが……これからマルクがどうなるかが、理解出来てしまった。

「マル——」

「モード悪魔龍！セブンス罪なる七悪魔!!」

アイリーンと戦った時に見せた、マルクの悪魔の力を結集させた姿。未だ使いこなせているとは言えないが、しかし時間稼ぎ程度なら出来るだろうとマルクは思っていた。

「魔法が効かなくても！呪法は効くだろう!？」

「……」

アキノロギアはただ黙って、目の前に現れたマルクを滅ぼそうと手に魔力を貯め始める。

だが、それよりも早くマルクはアキノロギアへと追突して、自分事アキノロギアを吹き飛ばして遠くに行くのだった。

「ああ……マルク、マルク!!」

「待てウエンデイ!今向かってでもマルクノ足でまといになるだけだ!!」

向かおうとするウエンデイを、エルザが止める。ジエラールは黙って拳を握りしめていたが、そんな3人の目の前に船がやってきたのだ。空飛ぶ船、クリスティーナ……青い天馬ブルーベガサスが保有する飛行船だが、何故こんな所に止まるのかが理解できなかった。

「エルザさんウエンデイちゃん!」

「一夜!」

「急いで乗り込みたまえ!やつをマグノリアから遠ざけるのだ!!この船で、やつの注意を引く!!」

突如現れた一夜。エルザ達に乗り込むように指示し、遠くで戦っているマルクの方を見て、何やら小さな道具を取り出す。

「マルク君!クリスティーナに着いてきたまえ!!」

「っ!!」

道具を通して、一夜の音が大きく響き渡る。その声はマルクにもちゃんと聞こえたのか、アキノロギアと距離をとるために一旦アキノロギアを蹴り飛ばして体制を整えていた。

「時間が無い!急いで!!行こう、少しでも時間を稼げれば……!」

「振り切れるのか!」

「クリスティーナを舐めてもらっては困るね。それに……アキノロギアを『ある地点』まで誘導できれば、勝機はあるかもしれん。」

「なっ……」

「本当か!」

飛び立つクリスティーナ。同時にウエンデイが酔い始めたが、もはや気にしてる余裕は一刻も存在していない。

「——ですよね。」

「ええ。」

そして、クリステイーナの奥から一夜達の元に一人の女性が現れる。その女性は、どことなく…ルーシイの面影があった。

「発進したか…!」

「…悪魔如きが、我に逆らうか? 竜の王、全ての魔を喰らいし竜の王である…このアクノロギアを!!」

「は…こつちも魔龍なもんでな!! しかも、お前と同じように魔法『だけ』を喰らえるだけじゃねえんだよ!

地面も水も全部が俺の力に還元できる!! お前の方が下位互換なんだよアクノロギア!!」

アクノロギアを挑発するマルク。能力自体はマルクが言った通りではあるが、それだけでアクノロギアは竜の王になった訳では無い。それを可能にする、単純な力も持ち合わせているのだ。マルクの体は、今はありとあらゆる魔法を通さない上に、自分の力へと還元することができるようになってる。

だが、アクノロギアの純粋な腕力や戦闘経験の違いはそれらの能力を含めても天と地ほどの差がついているのだ。

「…」

「よし…!」

マルクはある程度様子を見ながら、クリステイーナについて行くように飛んでいく。

アクノロギアはその様子を少し眺めていたが、マルクの挑発が効い

たのかはたまた別の要因があったのか、アクノロギアはマルクを追いかけるかのように飛んでくる。

「着いてきたな……よし……つと!?!」

マルクはアクノロギアに視点を向けていたが、目の前を飛んでいるクリステイーナが180度旋回しているのを確認して、咄嗟にその直線上から避けて飛んでいく。

その直後に、クリステイーナから魔導砲が放たれてアクノロギアに向かって飛んでいく。

「今の内に……!」

魔法が効かないというのは分かっているが、ほんの一瞬の時間稼ぎにはなっていた。

その際にマルクはクリステイーナに追いついて、器用に船の上に着地をする。クリステイーナの上に乗るのはかなり自殺行為なのだが、今はそんなことも言っていられないので、誰かが来てくれるまでは甲板に待機することになるだろう……と、マルクは思っていたのだが。

「……あれ? 船の上にいるのに酔わない?」

船の上に立っているのに、酔うことがなかった。恐らく滅竜魔導士の用の船なのだろうが、何故そんなものをクリステイーナが積んでいるのかは正直疑問である。

だが、今はそれに助けられたと思ってそのままマルクは船の中に向かうのであった。

「うおおおっ!」

アクノロギアに追われているせいもあってか、マルクは船の中で揺らされて転がっていた。

だが、一同の影が見えたのでひとまずそこに向かっていった。

「マルク!!」

「つとと……すまんウエンディ。」

出会い頭に、ウエンディがマルクに抱きついた。マルクは苦笑いしながら、ウエンディの頭を撫でていた。

「相変わらず仲がいいわね、二人とも。」

「あ……あ、貴方は……」

そして、マルクの目の前に現れる金髪の女性。マルクは、その人物のことを知っていた。

何故今の今まで思い出そうともしていなかったのか不思議なくらいに、綺麗に思い出していた。

「アンナ先生!?!」

「ウエンディにも同じ反応をされたわ。」

「……それよりも、だ。アクノロギアを倒せるという話は本当なのか!?!」

「慌てては駄目。物事には順序というものがあるの。」

アンナ、彼女を見てマルクはルーシィにそっくりだと今更思い至った。だが、どうして今の今迄思い出せていなかったのか。

「大きくなったわね、ウエンディ……マルク。」

「私、まだ少し混乱してて……」

「すみません、俺も……」

「いいのよ。グランディーネやイービラー……他のドラゴン達のことには残念だったわ。でもね、彼らのしてきたことは無駄ではなかった。

私は……400年前、この子達やナツ達に言葉や文化を教えた教師。滅竜魔導士と共にエクリプスを通り、この時代に来たの。X777年……全てはアクノロギアを倒すために。」

アンナは真面目な顔でそう語る。しかし、幾つか疑問点がマルク達の中で生まれていた。まずひとつが、エクリプスを通ってきたということ。そして、それが滅竜魔導士達とともにという言葉がつけ加えら

れていたということに。

「……あ、アンナ先生？俺達がエクリプスを通ってきたって？」

「落ち着きなさい、その説明もしてあげるから……」

それを言い、アンナは騙り始める。アクノロギアを倒す作戦と、それに至るまでの経緯を。

「400年前、アクノロギアに対抗する術は皆無だった。そこで、ドラゴン達は未来に希望を託すことにしたの。滅竜魔導士達の体内に入り未来……つまりこの時代に来ること。」

「俺達は400年前の人間……」

「そう、魔力が一番満ちているこの時代につながったのは結果的に成功だった。」

ゼレフが扉を作り、私が扉を開いた。」

「ゼレフが!?!」

「彼はずっと時の研究をしていたの。でも、あの頃はまだ彼の望みであつた過去に行くことは出来なかった。」

ただ、未来へ希望もまだ持つていたと思うわ。」

少し話を区切って、アンナは再び語り始める。そのゼレフが、何故こんなことをしているのかという気持ちはあるが、マルクはそのままアンナの話を聞いていく。

「……そして、この時代へと繋いだのがレイラ・ハートファイア。私が入口を開き、彼女が出口を開いた。」

「ルーシイの母親か。」

「私は本来、出口にいる者への事情の説明と、貴方達を育てる役目で一緒に扉を通ってきたの。」

「私達を育てるため？」

「まだみんな子供だったからね……でも思わぬ『事故』で、開いた扉からみんなバラバラになってしまった。」

「事故？」

渋い顔をするアンナに、マルクが尋ねる。アンナはマルクの方を見て、少しだけ躊躇ったがしかし語らなければいけないと思つたのだ。

「ナツ、ガジル、ウエンディ、ステイング、ローグ、クオーリ……そし

てマルク。全員の居場所を見つけるまで時間がかったわ。

でもね……みんなの、この時代での暮らしを見ていたらまだ私が接触するときではないと思ったの。物事には順序というものがあるからね……」

「順序、ですか……」

「問題は……実はもう一つあったのだけれど、それは次の話で絡めて説明していくわね。」

私は、みんなを探す過程でとんでもないものを見つけてしまったのよ。エクリプスの事故が原因か別の原因なのかは、その時はわからなかったけれど……とにかくそれは存在していた。

私が表舞台に立てなかったのは『それ』の調査と、準備の為。

『それ』はとても強大で！危険な力……いいえ、力ではなく概念に近いわね。

時の狭間……アクノロギアを封印し、無に還せる唯一の希望。」

そのワードに、しつくりこそ来なかった一同。しかし、言葉だけで聞いていれば使用するのも危険そうなものに聞こえてくる。だが、利用できるものはなんでも利用しなければ、アクノロギアは倒せないのだ。

「X777年に、私はレイラが開いたエクリプスから通ってきた。その時に1つ目の問題……つまり、この時代に連れてきた滅竜魔導士達とはぐれてしまったのよ。」

「その原因は……」

「扉を多人数で通った……って言うのもあるかもしれないけれど……恐らく、原因はマルクよ。」

「え、俺ですか……？」

自分が突然に原因だと言われてショックを受けるマルクだったが、よくよく考えてみれば、自分の魔力と体は特別性なのだ。それが原因ということに直ぐに気がついて、アンナの方を見る。

「……マルクの魔力は、イービラーと同じで特殊。魔法の効果を受けないのよ。けれど、魔力は受けませんが過程と結果は受ける……火の魔法を浴びせられたら、火傷しちゃうけれどその魔法から魔力を奪う、そ

れがマルクの特性。

けど、そのせいでエクリップスは超えられたけれどその魔力を浴びてしまったせいでエクリップスがエラーを起こした。」

「それで私達が飛んでいつちやっただすね……」

「まあ……一番その影響が酷かったのは、多分マルク本人よ。」

「へ？」

自分が原因だと言われた次には、自分は被害者だと言われる。一体どういう事なのかわからずに、マルクは首をかしげた。

「エクリップスの魔力は、その特殊な性質の魔法の根源となるもの……未
来と過去を繋ぐその魔力が、マルク個人に働き掛けたのよ。」

覚えはないかしら？過去に、やけに現実味がある夢を見たとか

……」

「……あつ!!」

マルクは、大魔闘演武の時に夢を見たことを思い出した。あれは夢ではなく現実、しかしそれがどうしたというのだろうか？

「何周したかわからないけれど……その魔力は尽きるまでマルクを過去に飛ばした。トリガーこそ分らないけれど、確実にマルクは同じ時をループしていた。」

肉体が若返っているのか、それとも精神だけが飛んでいるのか分からない……けど、私はマルクがループしていることを認識したの。」

「どうやって？」

「……私がこの時代に来た時に、全員がはぐれたと言ったわね。確かにそう、そうなんだけれど……その時でできた穴は6つだったのよ。」

「……貴方が連れてきた滅竜魔導士は、先程聞いた限り7人の様だが？」

「ええ、確かに私の記憶ではそうなっていた。あとで国王にも確認したけれど、確かに6人だった。」

けど、私がウエンディを見つけた時にいたマルクを見た時に……作られた穴は7つだという記憶が浮かび上がってきたの。」

マルクは、時間を巻き戻って進んでいた。その事実にもマルクは唾を飲む。しかしまだ、アンナは話を終えない。

まだ、話の確信に触れていないのだから。

時の狭間

「え、えつと……つまり？」

「私を知る限り、マルクはこの世界には来ていないと考えてたの。けれど、違った。実際は通っていたのよ。」

ただ、エクリプスの影響で……少しずれた位置に出てきてしまったみたいだけれど。」

「俺が魔力を食べたから、時を超えるその魔力が俺自身に働き掛けてしまった……？」

「そう、そのせいでマルクは恐らく何度か同じ時間を繰り返していた……それが原因なのか、マルクのことをこの時代で認識したその後から、さつき言った時の狭間が生まれたのかもしれない。」

ドラゴンスレイヤー
滅竜魔導士は400年前の過去から来た。この説明を聞いた後、アナはマルクのことを説明する。

マルクが時を何度も超えていたおかげで、時のズレが生じていた、と。

「……あの後もう一度お城に行った、と言ったけれど……初めて扉を通った時にエクリプスは王様に破壊することを提案して、それっきり。」

レイラとも……再開することなく彼女は亡くなってしまったわ。」
「……話を続けてもらえるか。」

自分の子孫だからなのか、気のおける友人関係にでもなっていたのか、アナは目頭を抑えていた。

エルザは、話を進めることを促すことであまりそのことを思い出させないようにしていた。

「そうね……異変には直ぐに気がついた。この魔力に満ちた時代に流れる異なる魔力、それはいかなる元素でもなく、光でも闇でもない無の魔力。」

「無の魔力？」

「そう、この時代にあるべきではない魔力と言うべきかしら。そして見つけてしまったの、時の狭間を。」

さつきも言ったけれど、マルクが何度も時を行ったり来たりしていること、それと私達が400年の時を超えたせいで本来の時間の流れが歪んでしまったみたいなの。

時間という概念の修正力とでも言うべきかしらね、そうした私達の理解を超えた力が生まれてしまったのよ。」

時を超えるエクリプスの代償と言うべきなのか、はたまた全く別物なのか。

そうした理解を超えた何かが、今この世界に生まれてしまっているのだ。

「時の狭間の中はまさに『無』誰も生きられないし、誰も存在できない。たとえアクノログアだろうと。」

「そこへアクノログアを誘導して、閉じ込めようというのか!？」

「ええ……」

「しかし……!信じられん!時の狭間なんてものが何年も発見されなかったなんて……」

ジェラルドは、この場にいる全員の気持ちを代弁するかのよう驚きを隠せていなかった。

しかしそれは、言葉にならないだけで他の者達も同じである。そのようなものが、今まで発見出来ていなかったというのも不思議な話だと感じているのだ。

「私が隠してきたのよ。」

「本当に、その空間は時の狭間なんですか?」

「1年前の大魔闘演武でエクリプスが開いた。あの穴は大きく反応した……間違いないわ。」

「エクリプスが開いたことまで知ってるんですね……」

「……穴?」

アンナが言ったことにエルザが疑問を持ったのか、その言葉の意味を確かめるかのように質問する。

「そうよ、普段は見えてないわ……大きさもこのみかんくらいなの。だけど、間違って触れたら最後……二度と出ることは出来ない。」

「なんか……毒虫みたいですね。」

「ふふ、そうね……さしずめ、肉眼では見えない即死毒を持つ虫つかしら。」

マルクの例えを、受け取ってそれを返すアンナそして、今からがアクノロギアを倒す作戦となる。

「作戦は至ってシンプル！」

一夜が現れ、そしてモニターに映されたイメージ図を使って説明を行っていく。

「我々は時の狭間を迂回し、アクノロギアを待ち構える。追尾してきたアクノロギアは時の狭間に触れ……消滅メエーン!!」

「そんなに上手くいくのか?」

「やるしかないのよ。」

覚悟を決めたアンナの目。しかし、この作戦でしかアクノロギアを時の狭間に押し込めないだろう。

危ない橋を渡っているが、それをしなければならぬのだ。アクノロギアを倒して、この世界を守らないといけないのだから。

そして、マルクとウエンディはアンナと一緒に時の狭間に近づくまで話をするに決めた。色々、マルクとウエンディには思うところがあるのだ。

「私、その……あまり良く思い出せなくて……」

「俺も……」

「仕方ないわ、ナツ達も私のことは覚えてないでしょう。きっと幼い体でエクリプスを通った代償かもしれないわ。」

「思い出したんだけど……すいません。」

「その気持ちだけで十分よ。いずれ思い出すわ、物事には順序というものがあるの。」

マルクとウエンディの頭をアンナは撫でる。しかし、時間は待たてくれないのか、一夜が大急ぎでアンナのところに現れる。

「アンナさん！指定の座標に近づいて来ましたぞ!!」

「……みんな！始めるわよ!!」

アンナの号令が、船中に広がる。操作をするのは、青い天馬のメンバーであるヒビキ達だが、一番緊張しているのは彼らだろう。

時の狭間は、みかんほどの大きさでありなおかつ見えないのだ。それであっても、触れた瞬間全員が一瞬で終わるのでハイリスク過ぎるのだ。

「時の狭間まで後400m!」

艦内に声が響く。400mというのは、直ぐに到達してしまう距離だ。かするだけでもアウトになってしまいかねないため、全員に極度の緊張が走る。

「300……!」

さらに、これをアクノロギアに気づかれてもダメなのだ。ギリギリで回避しつつ、さらに船体を時の狭間の真横に通さなければならぬ。小さくて見えないものを、気づかれないように通る。正に針の穴に糸を通すような作業だろう。

「200……!」

まだ船は真っ直ぐに飛び続ける。それに加えて速度もあげていく。このままアクノロギアに気づかれないように時の狭間を回避し、アクノロギアにはぶつけるように動かなければならない。

「100……!」

「みんな! 何かに捕まって!!」

「バレルロオオール!! メエーン!!」

そして……船体は無事のまま時の狭間を通過する。何事もなく、アクノロギアに気づかれた様子もなく、時の狭間を通過することが出来た。

「あとはアクノロギアがあそこを通過すれば……!」

「時の狭間に触れて……!」

「消える!!」

モニター画面に映る、デフォルトにされた船体とアクノロギア。そして、船は時の狭間から遠ざかっていきアクノロギアは時の狭間に近づいていき――

「当たった!!」

「――いや、まだだ!!」

アクノロギアが時の狭間にぶつかった……と思ったその瞬間だっ

た。アクノロギアが、クリステイーナの船体にその体に乗せていたのだ。時の狭間を、アクノロギアが認識して回避したとは思えないし、またアクノロギアが偶然回避出来たようにも見えなかった。

「ばかなっ!？」

「時の狭間を……」

「通り抜けてきたの!？」

一同に驚きと困惑、そして焦りが生まれる。時の狭間に触れられなかったこともそうだが、何よりも今は船体に取り憑かれてしまったのが大きいのだ。

「どうなっているんだ!!」

「奴は確かに時の狭間に触れただろお!？」

「まずいぞ！船に取り憑かれた!!」

「こんなことありえないわ!!狭間を視認できる状態に戻して!!」

アンナにそう指示されて、一夜が時の狭間を認識できる状態に戻す。再確認した時の狭間だったが……その姿を見てアンナはさらに驚きの表情となっていた。

「そんな…時の狭間が……閉じている……!」

「このままじゃまずい！船ごとやられるぞ!!」

「くそお!!」

「なんで、一体どうして……」

効かなかったことにより、アンナの思考は困惑仕切っていた。だが、現状閉じているだけなのならば、まだ打開策はあるかもしれないとアンナは思考を切り替える。

「一夜！滅竜魔導士搭乗用の魔水晶ラクリマを壊せ!!」

「え?」

「やつも滅竜魔導士だ！船にしがみつけなくなる!!」

「なるほどおーう!!」

一夜は筋力をあげるパルファムを使ってムキムキになって、魔水晶を破壊する。

マルクとウエンディがそれでダウンするが、同時にアクノロギアも乗り物に弱くなってしまうたので、それで突き放される。

「……これからどうする。」

「時の狭間をこじ開けるわ…何としてでもアクノロギアを倒す!」

それしかないよ、アンナは覚悟を決める。だが、取り憑かれた時の衝撃によって、船の一部が大破してしまい先程のような速度が維持できなくなっていた。

「くそう!後部翼端板が大破!」

「速度が維持できない!!」

「追いつかれるぞ!!」

「予備の魔導ブースター添加!!」

なんとか加速は出来たが、それでも危機的状况には変わりない。彼はアクノロギア、ドラゴンがいる限りそのドラゴンを狩り続ける滅竜魔導士なのだから。

「少し時間稼いでちょうだい!!」

「手はあるのか!」

「言ったでしょ!時の狭間を開けるわ!これでも一応星霊魔導士、扉をこじ開けるのは得意なの!」

瞬間、クリスティーナの側面が爆発を起こして船体が傾いてしまう。アクノロギアの攻撃だろう。

距離を離れたとはいえ、既に射程距離にまで近づいてしまっているのだ。

「俺が時間を稼ごう。」

「ジェラルル…」

「ジェラルル…俺も…!」

「お前の今の体調で出来るとでも?」

「下ろしてくれさえすればいい…!」

「……わかった、一緒に行こう。」

酔っているが、マルクはジェラルルと共にアクノロギアを倒すことに。船からさえすれば調子は戻るので、マルクはそのままジェラルルに担がれて、外に出ることに。

「——流れ星。」

ジェラルルは、自身の魔法により空中を飛行する。ついでにマルク

も、そのままぶん投げて船から離させる。

「――モード悪魔龍、罪なる七悪魔。」

2人は空を飛び、アクノロギアへと向かう。時間稼ぎとは言ったが、実際はジェラールはアクノロギアに触れることすら出来ないの
で、マルクが体を抑える役割のような状態である。

「また貴様か…」

「これでも滅竜魔導士なんだよ!!」

呪力を貯めて、マルクはアクノロギアに向かう。魔が効かないのならば、呪で対抗するしかない。

ジェラール1人でも対抗はできるだろうが、擦れた瞬間から魔力を食われに食われてしまう。

「もどきに用はないが…いい、貴様も滅竜魔導士だと言うのであれば、滅竜する。」

「言っとけ!!」

マルクはアクノロギアと掴み合いを始める。お互いがお互いの両の手を掴み合い、そしてその腕を潰そうと力を込めあつていく。

魔法は、マルクにも効かない。それをアクノロギアは分かっているのか、やはり魔法を使ってこようとはしていない。

だが、マルクの呪法はアクノロギアには効く。ナツやガジルの様な、別の属性を食らって新たな力を得るのとは訳が違う。

「ガアッ!!」

「っ!!」

マルクのブレスを、その体制のまま器用にしゃがんで回避するアクノロギア。だが、隙を見つけたのかアクノロギアはマルクの腹に顔を埋めてもそのままブレスを放つ。

「っがっ!？」

悪魔龍の力によりいくらかは威力を軽減できたが、それでもアクノロギアのブレスの力により海に叩きつけられてしまう。

「マルク!!」

「おれは、大丈夫だ…!」

しかし、アクノロギアのブレスは薙ぎ払うようにして海を割って

行った。その威力の凄まじさを見て、アキノロギアの時間稼ぎが務まるのだろうか……と、一同は不安を覚えてしまったのであった。

アクノロギアを

ルーシイの先祖、400年前からエクリプスを通って時を渡った女性アンナ。彼女は滅竜魔導士達ドラゴンスレイヤーの先生であり、そしてアクノロギアを倒すために策を弄していた。

そして、彼女は現代の今この時間において『時の狭間』という場所にアクノロギアを押し込んでこの時代から存在を抹消するという手を思いついた。

そこは、時間の流れも光も闇もない無の空間。そして、その入口は誰であろうと触れた瞬間に吸い込まれ、この時代から消滅してしまう。アンナは、それにアクノロギアを押し込むつもりだったのだ。

大きさは掌に乗るみかん1つ分と彼女は例えた。そして、それほど大ききならば、体の大きいアクノロギアは見えないだろうと言う確信もあった。

だが、時の狭間がある場所にアクノロギアを誘導できたと思っていたが、時の狭間はアクノロギアを飲み込まなかった。

時の狭間が、何らかの原因で閉じていると分かったアンナは、時の狭間を自分の力で開く事にした。しかし、そのためには時間稼ぎが必要だった。

そのために、ジエラールとマルクがアクノロギアに向かって行ったのであった。

「くっ……ガルルア!!」

「無駄無駄……!」

空を飛びながら、アクノロギアとマルクは殴りあっていた。時折マルクは呪法を使いアクノロギアを攻撃するが、アクノロギアはそれを尽く回避していく。

マルクがこの力を未だ使いこなせていないのもあるかもしれないが、敵は全てのドラゴンを倒しているのだ。そもその経験値が、実力差が違うということなのだ。

「ぐうう!!」

「マルク! くっ……!」

アクノロギアは、凄まじい速度でマルクを翻弄していく。マルクもアクノロギアと同じほどの大きさになっているが、それでもなお翻弄されてしまう。

「ガアッ!!」

「ぐっ……」

マルクの攻撃も時折当たるものの、それはただの物理的な攻撃だけであり、呪法は念入りにかわされていた。

自分を倒せる可能性がある呪法は、アクノロギアはひたすらに警戒しているようだ。

「やっぱ強いな……」

「悪魔が幾らかかった所で、勝てぬ。真に勝ちたいと望むのであれば……黒魔導士でも連れてくるんだな。」

「その黒魔導士は、倒す予定なんぞでな!!」

「ふん、一介の魔導士では勝てんさ……それこそ、我や貴様のような人智を超えた何かを呼ばない限りはな。」

「……お前を倒すためには、ゼレフの力がある……けどゼレフを倒すためにはお前や俺みたいなのの方がいい？」

矛盾してるぜ、お前のセリフ。」

「貴様らには、どちらも倒せぬという事だ!!」

「ほぎけ!!」

アクノロギアが拳を振るい、マルクもそれに合わせて拳を振るった。2人の力が打ち合って、強烈な衝撃波が生まれる。

「マルク!!」

ジェラールが、アクノロギアの首元に高速で突っ込んで蹴りを入れる。衝撃は伝わったのか、アクノロギアは少し怯んでいた。

「っ!!はあぁ!!」

マルクは、アクノロギアを殴り飛ばす。無論、時の狭間がある方向にである。

だが、突如として異変が起きる。アクノロギアや、マルクのサイズでも認識できるような大きな黒い球体が現れたのだ。

否、マルクがそれがなんなのかすぐに理解できた。時の狭間であ

る。みかんほどの大きさしないと聞いていたが、どうやら何か異常なことが起こっているようだった。

「時の狭間が、見えて……」

「なんだあれは……？」

「——いや!!」

マルクは、確かに一瞬焦った。アクノロギアに時の狭間がバレてしまえば、確かにこの作戦は台無しである。だが、バレたとしても成功させればいいだけの話だ。そう、自分を犠牲にしようとも。

「はあああ!!」

「ぬうつ!」

マルクは、アクノロギアに突進をした。凄まじい速度から繰り出されるその突進は、時の狭間を見て隙を見せたアクノロギアに、直撃した。

そして、そのままマルクは時の狭間へと目掛けて飛び込んでいく。

「待ちなさいマルク! 貴方何をする気なの!!」

「このままこいつを押し込みます!」

「あれに触れたら貴方まで飲み込まれるわ!!」

「他に方法はありません!! 直ぐに、こいつを押し込まないと勝機は無くなってしまふ!!」

アンナが必死に静止させようとするが、マルクは止まらない。彼はもう、止まる訳には行かないのだ。

「我は魔を喰らいし竜、我は魔竜アクノロギアぞ。貴様如きの力で……!」

「その如きの力に、お前は負ける!!」

一瞬、ちらつとだけマルクは後ろを向いた。そこには、海に不時着していくクリスティーナの姿が。

あの破損状況では、復帰は恐らく難しいだろう。ウエンデイのことが気がかりだったが、しかしアクノロギアを葬りウエンデイが安全な世界に生きていけるのであれば、マルクはそれだけでよかった。

「ぐ、ぐうう……!」

「——えっ?」

マルクの姿が、元に戻った。呪力が、ここで切れてしまったのだ。アクノロギアは、無論時の狭間には触れさせていない。

触れさせていなければ、アクノロギアは倒せない。だが、今のマルクは悪魔の力を使うことは出来なくなっている。呪力が尽きてしまった以上、回復しなければ使うことは難しい。それは、今このタイミングでは間違いなく不可能なことである。

「所詮、もどきの力如きではそこが限界という事だ。大事な時に、何も出来ない弱さがあるのだ。」

「がっ!!」

マルクは、その体をアクノロギアに掴まれてしまう。その体は、アクノロギアによって簡単に碎かれようとしていた。だが、その時に一筋の光が、マルクを掴んでいるアクノロギアの腕を攻撃した。

「——マルクを離せ!!」

「ぬうう……!!」

「ジェラール!!」

「マルク、今君はここで死ぬべきではない!!ウエンデイを守るんだろぅ!!最後の最後まで、守り通せ!!」

ジェラールの不意打ちの攻撃により、アクノロギアは腕の力を緩める。ここがチャンス…マルクはそう確信した。

無論、逃げるチャンスではない。このタイミングならば、アクノロギアを無理矢理にでも時の狭間に押しこめるチャンスである。

「その言葉！そっくりそのまま返してやる！ジェラルルだって、エルザさん救わなきゃなんねえだろうが!!」

「それは――」

そんな2人をまとめて海に落とすかののように、クリステイーナがアクノロギアに特攻していつていた。既にボロボロとなっているその船体は、今にも爆発しそうな程だが……乗っているのは、感じられる魔力反応からしてたった2人。

「一夜さん!? アンナ先生!!」

「マルク！貴方はウエンデイのそばにいなさい！」

「ジェラルル君！君にはエルザさんという女性がいるだろう!!」

その言葉を最後に、クリステイーナはアクノロギアを時の狭間に押し込んでいく。

マルクが稼いだ距離を、ジェラルルが稼いだ時間を、クリステイーナが埋める。そこに乗っている一夜とアンナが、アクノロギアに最後の引導を渡す。

「これで終わりよ！竜王の時代は終わったの!!」

そして、アクノロギアは遂に……時の狭間にその体を触れさせられた。必死の攻防により、ついに作戦は成功したのだ。

「これは……!? 体が……！うお……がはっ……!」

「一夜さん！アンナ先生!!」

マルクは、落ちながら2人の名前を呼ぶ。時の狭間は、アクノロギアがぶつけられたことによる衝撃が原因なのか、大きく発光し始める。

そして、弾けるようにその発光をさらに大きくしたあと……何事もなかったかのように、その姿を消していた。

初めから……時の狭間も、アクノロギアも、アンナも一夜も……そんな存在はいなかったとも言えるかののように、その姿は全て消え去っていた。

「消えた……アクノロギアも、一夜さんもアンナ先生も……みんな、時の狭間の中に……」

海に浮かぶマルク。その体を、ウエンデイがぎゅつと抱きしめる。

心配を、またかけてしまったとマルクは反省する。

だが、ウエンデイの顔は見ない。今ウエンデイの顔はきつと涙で溢れているだろう、その顔を見ては自分も一緒に泣いてしまいかねなかったからだ。代わりに、ぎゅつと強く抱き締めてその頭を撫でる。

「マルク、マルク……！」

「……払った犠牲は大きかったけれど、俺達は勝った、勝ったんだ。」その言葉に、勝利の余韻などはない。ただあるのは、払った犠牲の大きさによる悲しみだけである。

しかし、これで勝てたのだ。もう、誰も魔竜であり竜王であるアキノロギアを見ることがないのだ。時の狭間に押し込まれた存在は消える……その事だけは、アンナが言っていたのだから間違いないと、マルクは確信するのであった。

海に落ちたものの、一同は一旦近くの陸に上がってその身を休めていた。アキノロギアを倒したものの、アンナと一夜という犠牲を払ってしまったため余り喜べないでいた。

「一夜さんと、アンナさんの分まで……生きなきゃ……」

その一言が、皆の心に虚しさを広げる。勝ったのはいい、勝ったのはいいのだが……尊敬する者の死は、答えるものがあつたようだ。

「……空が、青——」

それを見上げていたマルクが、ふと何気ない一言を発しようとした瞬間。その瞬間に、マルクは強大な魔力を感じとつた。

場所は、すぐそこ…そう、時の狭間があつた場所から、強力な魔力を感じとつたのだ。

そして、その直後に空に小さな亀裂が入る。

「空に、亀裂が……」

「——ふざけ……ふざけんなあ!!」

段々と大きくなる亀裂。そして、その亀裂が完全に広がりにきる前にマルクはその体に呪力を覆い始める。

マルク以外の者達は、信じたくなかつた。せつかく倒したはずの敵が、今まさに蘇ろうとしている事に。

「亀裂が、広がって——」

「モード悪魔龍！罪なる七悪魔！」

呪力を纏いきつたマルクは、亀裂に向かって飛ぶ。今となつては、自分がどうにかしなければならぬのだ。

時の狭間から出てこようとするならば、そこに押し込めばいい…… たつた、それだけの話である。

「出てくんじゃ——」

亀裂に向かつて、ブレスを吐こうとするマルク。なるべく近い距離から浴びせようとしたために、時の狭間との距離は全くないと言つても過言ではない。

だが——

「がっ……!?!」

「マルク……!?!」

今のマルクの体で言うところの胸の部分。そこを、マルクは貫かれていた。巨大な、黒い腕によつて。

「力が満ちる…かつて滅竜の道を、極めたかのように。我はさらなる王となった。」

マルクを貫いた腕が、引き抜かれる。掴んだゴミを、離すかのよう
に粗雑に投げ捨てる。

「この世界の全ては、我のもの。」

時の狭間から出てきたアクノロギアは、時の狭間に入れられる前よりも強く、そして強大なものとなつていた。

理由は明白である。食らったのだ、無の魔力で溢れている時の狭間の魔力を。

「おお……これが時の魔力、時の力……溢れる力が制御できぬ。滅せよ人間共。エナーナルフレア。」

たった一言。その魔法の詠唱はそれでよかった。どこからともなく溢れてきた光弾は、その場にいる者達への攻撃ではなくファイオーレ中に対しての攻撃となっていた。陸を焼き、街を破壊し、世界を壊していった。

時の魔力を喰らい、最早別の次元へと昇華されたアキノログア。この男に勝てる術は、あるのだろうか。

完全なる滅竜

時の狭間、そこは1度でも触れた瞬間に飲み込まれて無に帰らされるもの。その時の狭間に、一夜とアンナがアクノロギアを押し込めた。一同はそれで勝ちを確信した。しかし、アクノロギアは時の狭間にある時の魔力を喰らい、さらなるパワーアップを果たして帰ってきた。

その力は、時の狭間に押し込まれる前よりも段違いで強くなっており、たった一言発しただけの魔法で全てが吹き飛んで行った。

海から、小さな陸地やマグノリアの街などの辺り一帯の全ての土地への攻撃をアクノロギアは行ったのだ。

その攻撃の余波で、海は荒れてバラバラになりかけた一同だったが、アクノロギアの攻撃ははまだ終わっていないかったのだ。

「みんな無事か!？」

流されかけたエルザだったが、即座に海から顔を出す。だが、その瞬間に見た光景はエルザの目を疑うものだった。

「ウエンディー!マルク!!」

「っ!？」

「なに、これ……ああああ!!」

「ぐううう!？」

マルクとウエンディーが中へと浮かび、謎の光に包まれる。力が抜かれるような、それでいて激痛が体に走っていくような。

そんな状態が続いて行った。マルクには、ろくな魔法は通じないにもかかわらず、マルクにはそれが『効いていた』のだ。そして、マルクの体は呪力を纏った悪魔龍としての姿ではなく、それが剥がされた状態の人間の体へと戻っていた。

唯一、不幸中の幸いだったことは、マルクは悪魔龍としての姿で胸を貫かれていたが、それが本体にフィードバックされる前に人間の姿に戻れたことだろうか。無論、ダメージは受けているのだが。

「ああ、あああ——」

「これ、は——」

「全てのドラゴンを！我が時の中に!!」

そして、ウエンデイとマルクはその光に包まれたままアクノロギアの手のひらへと飛んでいく。

まるで、何かに吸い寄せられるかのように飛んでいき……ウエンデイとマルクはこの世界から姿を消したのであった。

「っ……はあ、はあ……ここ、は……？」

「どこだ……」

マルクは気がつけば妙な空間の中にいた。周りには流星群のようなものが飛び交っており、自分がいるところは謎の結晶がまるで土地のように広がっている空間だった。

そしてもう1人、マルク以外にも声を上げた人物がいた。ナツである。あの場にいなかったナツでさえもここにいるということは、アクノロギアが何かしたのだろうか、と疑問に感じていた。2人は言葉は交わさなかったが、その異常事態に首を傾げていた。

だが、もう1人……この空間で動く者がいた。

「ここは時の狭間……我的世界だ。」

「アクノロギア……!」

「アクノロギア……そうか、こいつが……こいつが、イグニールを……!」

「てめえ!」一体どういうことだ!!ここが時の狭間だと……ウエンデイ達はどこに――」

「うぬらで最後だ。」

アクノロギアは、まるで聞こえていないかのようにマルクの言葉を遮る。だが、アクノロギアの言葉にマルクは違和感を感じた。ウエンデイが居ない事もそうだが、自分達で最後だという言葉に少しだけ恐れを抱いた。

そして、ふと2人は見上げて気づいた。結晶の中に……人がいることを。

「――ウエンデイ……!?!」

「いや、ウエンデイだけじゃねえ! ガジル、ラクサス……コブラもいやがる……! いや、俺達の知る滅竜魔導士が全員いやがる!!」

結晶の中にはまるで眠りについたかのような顔で、全ての滅竜魔導士が揃っていた。

9人の滅竜魔導士……その全員が、今この場に揃っていた。

「我は時の狭間にて時空の魔力を手に入れた。我は時空を超え、世界を破壊し……時空の中でうぬら最後のドラゴンを滅する。」

「……ごちやごちやうるせえ。」

「ウエンデイを、返せよ……!」

「うぬらもここで……永遠の人柱となれ。」

アクノロギアはそう告げる。そしてその瞬間に……ナツの体から結晶が溢れ始める。ナツを凍らせるかのように、その身を包んでいく。

「が、ああ……!?!」

「ナツさん!?! くそ、なら俺が……!」

「無駄だ、もどきと言えど……貴様も滅竜魔導士である以上、我の人柱となる。」

アクノロギアの言葉を無視して、マルクはナツの結晶を破壊しようと拳を掲げる。そして、それを叩きつけようとしたその瞬間に……マルクの体も結晶に包まれ始めていく。

「調和と滅竜……実に面白い。」

「ぐうう!?! くそっ! 右手が動かねえ!!」

「クソがつー! なんてこういう時に仲間を助けられねえんだ俺は!!」

2人の体はドンドン結晶へと包み込まれていく。魔法を逸脱した何かが、2人の体を包み込んでいるのだ。

「何で炎が出ねえんだよオ!!」

「なんで、魔力が…!」

「あの黒魔導士とやり合ったのだ。寧ろ腕1本でよく済んだものよ。」
アクノロギアは、2人を見守る。飲み込まれていく二人を見ながら、それには手を出さずにただ見ていた。

この結晶を破壊するためには、物理的な攻撃力が必要である。恐らく、ナツの炎ならばそれが可能だっただろう。だが、そのナツの炎は出ない。ナツの片腕が焦げているからである。故に、2人はただ飲み込まれるしかできなかつたのであつた。

「うああああああああ!!」

「く、そ——」

「あああああ!!」

2人が絶望し掛かつたその時。ナツの腕から、炎が溢れ出たのだ。何故出たのか、その時は誰もわからなかつた。

だが、その理由はすぐさまナツ達の前に答えを表してくれた。

「手が、動いた…!」

「——天空魔法でお守りします!!」

「ウエンデイ!!」

2人の前に現れたのは、結晶に閉じこめられた筈のウエンデイだつた。だが、何故ウエンデイが結晶を破壊して出てこれたのかは分からない。

「どうやって結晶を……」

「シャルルの声が聞こえた気がして……」

「——俺も…レビイ、リリーの声がな。」

そして、次々に結晶が割れていき中にいる者達が一斉に動き始める。その光景に、2人は喜びと驚きが隠せなかつた。

「聞こえるぞ……つてか……」

「俺達の帰りを待つ人達の声が——」

「俺たちに力をくれた。」

「ガラじゃねえんだけどな……こういうのは。」

「さあて、やってやろうぜ……ナツ、マルク。ドラゴン狩りだ!!」

「「おお!!」」

中から現れてくるのは滅竜魔導士。彼等の帰りを待つ人の声が、彼らを結晶から出してくれたのだ。

その数は実に9人……滅竜魔導士、揃い踏みである。

「教えてやらねばならぬか……なぜ我が竜王と呼ばれるか。」

「だったら……今日で終わらせてやるよ……アクノロギア!!」

「行くぞオ!!」

ナツ、ガジル、ステイング、ローグ、クオーリの5人がまずアクノロギアに真正面から突っ込んでいく。

「全能力上昇エンチャント! 神の騎士!!」
デウスエクサ

マルク以外の全員に、エンチャントが付与される。最高クラスの上位エンチャント、それを付けられた全員の力は最早それだけで普通のドラゴンなら倒せるだろう。

「おお!こりやすげえ!!」

「力がみなぎる……」

「ウチのチ——」

「ウエンディは凄いですから!!」

ガジルにセリフを被らせるようにして、マルクがウエンディを褒める。少しだけ苦笑するガジルだったが、そのままアクノロギアへと攻撃を行っていく。

「鉄竜剣!!」

ガジルの腕が伸びて、アクノロギアへと刺さる……筈だったのだが、アクノロギアの体へと到達することすらなかった。

だが、それに追い打ちをかけるかのごとくステイング、ローグ、クオーリの3人が攻めていく。

「「おおおお!!」」

「ふん……」

「ぐあ!」

「うあ!」

「ぬあ!」

だが、アクノロギアは腕を横に振り抜くだけの、その行動だけで3

人が1度に吹き飛ばされてしまう。

その攻撃の隙を狙って、後ろからマルクとラクサスとコブラが仕掛けていく。マルクは周りの被害も考えて、悪魔龍ではなく魔龍としての力を行使していく。

「雷竜の——」

「毒竜の——」

「魔龍の——」

だが、アクノロギアはそれに対して再び片腕を動かすだけだった。たったそれだけの事で、全員が吹き飛ばされていく。

ダメージは余りないが、しかしこれはアクノロギアに弄ばれていると言っても過言ではないだろう。

「ラクサス！コブラ！マルク!!」

ナツが3人を心配して後ろを振り向くが、その瞬間を狙ってアクノロギアがナツに対して本気の攻撃を仕掛ける。

巨大な魔力の塊を、ナツに対して放ったのだ。

「ナツさん避けて！」

「っ!!」

ナツは魔力の塊に対して腕を交差させてガードの構えを取るしかない。そして、その魔力の塊にナツが飲み込まれる直前に——

「——させるかよ。」

「マルク……」

その魔力を、マルクは全て食らっていた。だが、攻撃が少し当たっていたのか腕に少し傷を負っていた。魔法による攻撃は軒並み効きづらいマルクが、である。

「なぜ我が竜王と呼ばれるか……この世界で1番強いからに決まっておろう。」

笑みを浮かべながら、指を1本立てるアクノロギア。それは、自分がこの世界で1番強いというアピールである。しかし、その言葉に嘘偽りはないだろう。文字通り最強の力を持っているのだから。

「今、まさに時の狭間の外では我が肉体が世界を滅せようとしている。」

「あ？」

「我は全てを破壊し……終末を告げる。」

拳を握りしめて、アクノロギアはただ破壊だけを求めている。だが、その破壊という目的に、一同は虚しささえ感じていた。

「お前は何がしてえんだ。」

「破壊、それだけよ……クハハハハハ！」

「——悲しいやつだな。」

「…何？」

アクノロギアの言葉に、マルクが悲しそうに言葉を返す。同情されるとは思っていなかったのか、アクノロギアはマルクの言葉に直ぐに真顔になっていた。

「……お前に破壊されるほど、この世界は弱くはねえぞ。」

そして、ナツはアクノロギアに対して怒りを向けていた。無論、ただ破壊するだけの権化に対しての怒りである。

「く、くく……弱くはない、か。ならば、証明してみるがいい。」

「言われなくとも!!」

ステイング、ローグ、クオーリがそれぞれ別方向からアクノロギアに対して攻撃を仕掛けていく。

「甘い！」

「ぐあ……！」

「オラア!!」

だが、3人はアクノロギアの一撃によって吹き飛ばされてしまう。それとほぼ同時のタイミングで、ナツが飛び出していく。

「はっ……！」

だが、アクノロギアもナツとほぼ同タイミングで飛び出した。そして、ナツ、コブラ、ガジル、ウエンディを薙ぎ倒していく。

その直後の背後を、ラクサスが自慢の雷を纏って殴りかかっていた。

だが、アクノロギアにダメージは通らない。

「我に魔法は効かぬ!!」

「なら、呪法はどうなんだよ!!」

呪力を纏ったマルクが、アクノロギアの頭上から攻撃を仕掛ける。モード悪魔龍、傲慢エレガンスプライド傲り…ありとあらゆる魔法に完全に適応するので、如何なる魔法も通じない鎧を身に纏う力。

アクノロギアに対しては、これくらいせねばまずスタートラインにすら立てないだろう。

「悪魔の力であっても…我には通じぬ！」

「ぐっ…!?!」

初手で殴りかかっていたマルクだったが、アクノロギアの素早くも凄まじい連撃に、すぐさま防戦一方にまで持ち込まれてしまった。

「ふんー！」

「がっ…!?!」

マルクは吹き飛ばされ、近くの結晶に激突する。鎧がクツションになったのか、マルクの体自体にダメージは存在していなかった。

「ちっ…!?!…さすがに世界で一番強いを自称するだけはある…!?!」

だが、この圧倒的な強さを前に…マルク達はまだ諦めてはいなかった。なのであった。

最後の戦い

「がはっ……い！」

コブラがアクノロギアに蹴り飛ばされる。吹き飛ばすような一撃ではなく、寧ろ体内にダメージを残す一撃。コブラの体内は、今の一撃で壊れてしまう。

「コブラ!!」

「——まだだ!!まだ、くたばる訳にはいかねえ……俺にだってよオ……仲間ってのがいるんだ!!アイツらを守るなら!!オレア、何だつてするぜえ!!」

コブラは叫ぶ。倒れてしまえば、仲間が殺される……仲間を守る覚悟が、今の彼にはあるのだ。そしてそれは、他の者達も一緒だった。

「アンタを倒さなきゃ、オレはアイツらに顔向けできねえ……」

「皆が待ってる、あの場所へ帰るために……」

「倒さなきゃ行けねえんだよなあ、お前を!!」

ステイング、ローグ、クオーリの3人も叫ぶ。声を絞り出し、体力も魔力も捻り出す。

彼らもまた、守るべきものがある。

「ジジイもギルドの奴らも……誰もやらせねえ。」

「てめえに壊される前に、こつちが壊してやるよ。」

「貴方の伝説は、ここで終わりです。」

「竜王の名は、今日で捨てることになるぜ……い！」

「……最後の勝負だ、アクノロギア。」

ナツ達が、アクノロギアを睨む。だが、意に返さないかのようにアクノロギアは未だ笑みを浮かべていた。

「最後?何も始まっておらぬのに……最後?クハハハハハハハ！」

高らかに笑い声をあげるアクノロギア。自称でもなく、本当の意味での最強のドラゴン。

それを相手にしても、引いてはいけけないのだ。絶対に。

「ここまでのようだな、ドラゴン共。この世にドラゴンは……1頭も残しておく訳にはいかぬ。それこそが滅竜……私の存在する意味。」

全員が、地面に倒れ伏していた。圧倒的な強さの前に、押し負けていたのだ。だが、恐れる訳には行かない。引いてはならない……その覚悟を、消してはならないと。ナツ達は未だ立ち上がる。

「クク、ははは……お前だってドラゴンじゃねえか。中々、面白いジョークだ。『我』が存在したら、ドラゴンが1頭残っちゃうだろ？クク……」

アクノロギアは、ナツの言葉に何も言わない。言えないのか言わないのか……だが、話は遮らなかった。

「それにな……俺達は人間だ。ドラゴンから力を貰った……それだけの人間だ。自惚れんな、バカ。」

本当のドラゴンはなあ……強くて気高くて……優しいんだ。」

「——優しい？ドラゴンが？」

ナツの言葉に、アクノロギアが表情を歪める。その表情から読み取れるのは、見てわかるほどの怒りの感情だった。

「我から全てを奪ったドラゴンが……優しいだと？我が家族を喰い、街を焼き、小さな少女さえも殺した。」

そのドラゴンのどこに優しさなどあるものか……くだらん!!」

爆発するかのように、アクノロギアの怒りに呼応して彼の魔力が噴き出す。その力で、アクノロギア一体の結晶がえぐれて飛び散った。

ナツも巻き込まれたが——

「——言っただろ、『本当』のドラゴンって……ドラゴンにだって色々いるさ。俺達人間と同じようにな。」

好きなやつ嫌いな奴、強え奴弱え奴、悪い奴に優しい奴…そしてお前を倒すやつだ。」

「私の攻撃が、何故…!」

『そりゃあ、お前を倒す為にわざわざ体張ったんだからな。』

『あんたを倒すのが、ウチらの使命やったって事や…!』

突如響く声。アクノロギアが声の方向に視線を向ける。この時の狭間の空間における、上…そこに、2つの影があった。

「ドラゴンと、悪魔だと…!？」

「フ、フリーゾ…!？」

「お前、グラトニーか…!」

「ご明察…いやはや…皮肉なもんだ…この時の狭間は、時の魔力に満ちていた。」

過去の人物が現代にいる…そういう時間の矛盾によって生まれたこの空間内なら、魂だけの存在になっているやつは…実体化できる。お前を強化したこの力が、他の者にも影響を与えるなんてな。」

氷竜フリーゾ、暴食の悪魔グラトニー。その2人がいま彼らの目の前現れていた。

「…今の攻撃、貴様らが防いだのか。」

「そういう事や…あんたと戦う為にはウチらが時間を稼がなあかんねや。ちよーつと、付き合ってもらおうで。」

「例え勝てないとしても、な…!」

2人は、アクノロギアに向かって飛び込む。だが、恐らくは数分も持たないだろう。実力の差と言うよりは、この空間内ではか存在できないような存在が、アクノロギアとともに戦えるだけの力を発揮できさるわけがないのだ。

「…2人が、時間を稼いでる間に…! 私達の魔力を、ナツさんに全てエンチャントします…!」

「ああ…望んでいることさ、フリーゾもな…!」

ウエンディがエンチャントを使い、まず全員の魔力のほとんどを剥がしていく。

そして、それら全てを…ナツに受け取らせる。

「がはっ……!」

「ぐあ……!」

「ふん……この程度か。」

現れたフリーゾとグラトニー。力を発揮出来ないままに、アクノロギアに心臓を貫かれていた。

「ああ……けどな、あんたを止めるくらいはできたで……! さて、ウチらもそろそろ退場せなあかんからな!!」

「その力……全部持つて行ってやるよ!!」

フリーゾの体が氷へと変貌する。それは、アクノロギアを凍らせた。だが、このままではすぐさま砕かれしまうだろう。

それを防ぐために、グラトニーも体を粒子へと変えてアクノロギアの体を氷と共に覆った。

「この力、魔力が……! 死に損ない共め!!」

アクノロギアの力が、吸収されていく。そして、そのアクノロギアの目の前に、ナツが迫ってくる。

「行け、ナツ……!」

「お前になら、全部任せられる……!」

「2人の分まで……!」

「頼むぜナツさん!!」

「俺達の魔力を……!」

「分けてやるよ、全部な!!」

「だから、勝ちやがれ!!」

全員の魔力を、ナツは受け取った。9人の滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーの力を受け取ったのだ。それは、恐らくアクノロギアを倒せる最後の力。

「ああ……伝わってくる。みんなの力が炎に変わる!!これが九炎竜の力だ!!」

だが、それはこの場にいる9人の力だけではない。時の狭間の外：現実の空間でも、皆が戦っているのだ。

その力も、全て受け取っている。

「オオオオオオオオ!!」

「滅せよドラゴン共!これが我が破壊の力なり!!」

アクノロギアは、無理矢理に氷を破壊する。だが、奪われた力は確実に彼の強さを奪っていた。

「はあはあ……破壊、破壊ね……」

ナツとアクノロギアの戦いを見ながら、マルクはアクノロギアを哀れんでいた。

恐らく、元は優しい性格だったのだろう。しかし、家族を失い、友人も何もかもを失い、全てを奪っていくドラゴンを見て歪んでしまったのだ。

「……小さい女の子の命が奪われたことに、お前は怒っていた……」

「マルク……?」

「もうちよつと……頑張ってくるわ……」

マルクは立ち上がり、そして歩き始める。魔力も体力も既に尽きている。けれども、向かわなければならぬ。

「うぬらの力が集まったところで、竜王には勝てぬ!!」

アクノロギアは段々と荒くなっていく。破壊衝動が、自分でも気づかない間に抑えられなくなるほどに暴走してしまっているのだ。

「破壊!破壊!!破壊!!!全てを破壊する!!!」

「あいつ……」

「暴走している……」

「人柱を失ったからだな……俺達っていう……」

「もつと血をよこせ!!もつとドラゴンの血を我に浴びせヨ!!」

荒れ狂うアクノロギア。その瞳には既に理性は宿っておらず、最早暴れ狂うだけの獣と化していた。

「終われねえんだよな……自分じゃ。」

「ヴアア、ア、ア、ア!!」

叫ぶアクノロギア。だが、その体が唐突に動きを止める。フリーゾ達の氷のせいではない、別の原因で、彼の動きは止まっているのだ。

「体が……!?!」

「ウオオオオオ!!」

ナツは飛び込んでいく。全ての力を、祈りを、思いを……その全てを体に宿して、アクノロギアを倒すためにその拳を振るう。

全ての滅竜魔導士の力を結集させた力の一撃が、ナツの腕に集まる。

「これで、終わりだアー!!」

「くっ……!?!」

アクノロギアは、腕を振るう……が、その腕の一撃は届かなかった。彼の腕に、魔力ではない力が彼に取り付いていたからだ。

「これは……!?!」

『『これ』は……ナツさんには渡せなかったんでな……これで正真正銘……全員力を集めたってわけだ。』

マルクの呪力、マルクの悪魔としての力がアクノロギアの腕の力を食らっていた。最早、指一本……今は動かせないだろう。

そして、その一瞬の隙に……ナツの拳が、アクノロギアを捉えるのであった。

「がはっ……」

アクノロギアは吹き飛ばされて、結晶に叩きつけられる。だが、まだ彼は息をしていた。

動けそうな状態ではないが、まだその命は健在だった。

「……アクノロギア……俺はお前が『誰かを守るため』に動いたことを尊敬するよ。」

「尊敬、だと……?」

アクノロギアの近くに、マルクが座る。そして、ゆっくりと語る。その光景を、ナツ達はじっと見ていた。

「ああ……家族のため、友のため……お前は他人の為に自分を犠牲にしてきたんだ。」

もう、この世界にお前を苦しめるドラゴンはいない……いいから、楽になれ。」

「だが、我は……全てを破壊し、全てを手に入れて……」

「全部は手に入らねえ……」

「っ!」

マルクの言葉を引き継ぐかのように、ナツが喋り始める。その言葉に、アクノロギアは驚いたような顔をしていた。

「だから、手に入れたものを大切にするんだ。欲張るな……俺は、仲間がいれば他に何もいらねえよ。」

「そうか、仲間……我に足りなかったのは……」

「あんたには……友はいたのか?」

「……ああ、故郷の街に……友は……」

言葉を言い終える前に、アクノロギアの体が消え始める。零れるかのように、端から消えていく。だが、不思議とアクノロギアには消えることに安らぎを感じていた。

「……うぬこそが……王にふさわしい。」

そして、その言葉をナツに向けて言っただけでアクノロギアは消え去った。だが、その言葉にナツは苦笑するしかなかった。

「王になんかなりたくねえよ……」

「ナツさんが王様だったら……気に入らないどこかの王様に自分から殴りに行きそうですね。」

「おいおい、俺はそこまで喧嘩腰じゃねえぞ?」

マルクの冗談に、ナツは本気で疑問そうに首を傾げる。だが、そのような会話も直ぐに終わらせられる。一瞬の内に視界が眩しくなる一行、そして少しすると……落下していた。

「は!?!」

「ええ!?!」

「んだと!?!」

「げっ……!?!」

「嘘だろ!?!」

全員が時の狭間から追い出されて、そして空中に身を投げ出される形となってしまった。

だが、不幸中の幸いと言うべきかなツ達はマグノリアの街に飛ばされていた。それも、あまり高くない場所から。

「ウエンデイー!」

「ひゃっ!?!」

マルクはウエンデイを抱きしめて、自分の片腕を地面に向けて突き出す。魔力は全くと言っていいほど残ってないが、こここそ絞り出す正念場である。

「ふん、ぬっ!!」

絞り出した魔力は、落下中のマルク達の向きを変える程度のものであったが、それで十分だった。

そのまま落下していたマルクは、ウエンデイを抱えながらきちんと着地を決める。

「——ウエンデイ!!マルク!!」

聞こえてくる声、どうやらウエンデイ達が落ちた場所はシエリアとシャルルがいる場所だったようだ。

「シャルル!シエリア!!」

マルクとウエンデイは嬉しそうに駆け寄り、再会出来たことを喜

ぶ。そして、同時に実感する。全ての戦いは終わり、そしてこれからが始まりなのだ。

「よかった、よかった無事で……！」

「ああ、そっちも2人他も無事でよかった……」

……だが、今はこの喜びだけを噛み締めていたい。全員が、今はそう感じているのであった。

妖精の尻尾

アクノロギア、もとい西の大陸のアルバレス帝国との戦いから1年の時が経った。そんなある日の晩に、マルクはタキシードを着てとある会場に来ていた。

パーティの為に来ているのだ。では、なんのパーティか？それは、仲間であるルーシイが自身の書いた小説で新人賞を取ったパーティである。無論、そのような場は静かにしているのが一般的なルールではある。

しかし、そのルールは仲間…否家族を祝おうとする妖精の尻尾フェアリーテイルのメンバーには出来るようなものではなかった。

「……まあ、うん…騒ぐよなあ。」

「マルク？どうしたの？」

「いや…なんでもない。」

マルクは、別に嫌な思いはしていないのだ。やはりどうしても、このギルドは型破りなのだろうとそう考えて、来てよかったと思っているのだ。

「……いやほんと、色んな事があったなあ…」

「マルクって今年で何歳だったの？」

「16かな…誕生日パーティはちよつと騒がしくしすぎて、家が壊れたけど…まあこれくらいなら微笑ましいなあ…」

マルクは周りをぐるっと見渡す。ルーシイに作家の事を教えているアンナ、その二人を見て会話しているガジルとナツ、酔って服を脱ぎかけてるジユビ――

「そっちは見ちゃダメ。」

「……」

ウエンディに目こそ塞がれてしまったものの、しかし楽しそうな雰囲気は伝わってきている。

と、ここでマルクの耳に入ってくる声があった。

「ガジルーこつちー！」

「オウ。」

ガジルを呼ぶレビイの声である。ガジルが入った当初は、元々敵対していたギルドからのメンバーという事もあり、険悪なムードだったらしいがよくここまで仲良くなれたものだ。マルクは思っていた。

天狼島からより一層距離が近くなったようだが、ハッピーの言う『どうえくいてるう』はここで言うべきなのではないだろうか、とさえマルクは思っていた。

「あのね、赤ちゃん——」

マルクは目を塞がれながらも、ウエンデイの耳を器用に両手で塞ぐ。この会話は自分には刺激が強すぎるような気がしたからだ。

ウエンデイには、恐らくもっと刺激が強い。だがまあ、マルクに聞こえている時点で、ウエンデイにも聞こえているので既に無意味なのだが。

「……何してんのあんた達……」

「……わからないです。」

ルーシイの声が聞こえてくるが、恐らく自分たち以上に今の格好が不自然な者達はいないだろう。ウエンデイもそう感じたのか、マルクの目を開ける。それと同時に、マルクもウエンデイの耳から手を離す。

「……」

「……ウエンデイ……？」

「今のガジルとレビイちゃんの会話聞こえたのかもねえ……って、それはそっちもか。」

ウエンデイとマルクは顔を真っ赤にして、俯く。それだけ刺激が強い会話を聞いてしまったのだ。

そして、今度は少し離れたところからまた別の者達の声が聞こえてくる。

「——男と女じゃあれだろっ!!お前の体は……!」

「お前の体は……?」

「っ………俺の、もの……かもしれねえっか……」

「グレイ様——!」

グレイとジュビアの会話だろう。いつの間にか少し離れた所に

行っていたらしいが、この会話ももれなくウエンデイ達の耳に入っていた。

「あうう……！」

「うう……！」

「こういうところを見ると、まだまだ子供よねえ……」

ルーシイの呆れた声と共に、2人は顔を真つ赤にさせたまま俯いていた。しばらくしてこのパーティも終わりに近づいてきているが、その終わりどころか帰りまでずっと2人は顔を真つ赤にさせながら俯いていたのであった。

「……」

「おはよう、マルク。」

「……えっと、あれ……ここどこ……」

「マルクの家だよ？」

「…ウエンデイってヒルズ住みじゃなかったっけ……」

寝ぼけた頭で、マルクは起き上がる。部屋にウエンデイがいる、シャルルが居ない、いつも一緒にいる2人がいないのは珍しいし、そしてマルクの家でウエンデイが朝早くからいることも珍しかった。基本的に迎えに行くことはあるが、朝早くからいることは滅多にないからだ。

「そうだけど…合鍵、渡してたでしょ？」

「いや、そうだけど……どうしたの急に……」

「うーん…ちよっと、不安になって。」

「……不安？」

ウエンデイが、マルクの寝ているベッドに腰をかける。その顔は、いつも笑顔のウエンデイには珍しいものだった。

「…現実、なのかなって。」

「……？」

「マルクとこうしてずっと一緒にいて…アクノロギアも倒して…でもね、私思うんだ。『実は私達はアクノロギアに負けた』んじゃないかって。」

「ウエンデイ…」

「あの時結晶に閉じこめられて…実は今でも閉じ込められてて…今この時が、夢なんじゃないかって。」

ウエンデイは見上げる。あれだけの死闘を繰り広げたのだ、今このような幸せがあっても現実味が湧かないと言えそう思う者もいるのかもしれない。

「…だったら、夢じゃないって思えるようにしようか？」

「え…？」

「これからもずっと一緒にいる、いつまでも一緒にいる…これから大人になって、おじいちゃんおばあちゃんになっても…ずっとウエンデイと一緒にいる。」

マルクは今までのことを思い出していた。ずっと守ってきたウエンデイ、けれど妖精の尻尾との出会いから彼女は変わった。

強くなったのだ、大切なものを守る為に…誰かを守るために決意を固められるようになったのだ。

「マルク……」

「ウエンデイ…俺はずっと一緒にいる…だから、…その、えつと……」

マルクは言い淀む。いつも似たようなことを言っているのに、このような時ではついつい言い淀んでしまう。だが、精一杯の勇気を振り絞り…その言葉を出す。

「……これからも、ずっと一緒にいてくれないか？」

「……ふふ、当たり前だよ。ずっと一緒…どんな時でも、心で通じ

あつてるんだもん。」

「ウエンデイ……」

「ちよ、マ、マルク……!？」

マルクはウエンデイの肩を抱き寄せる。その温かさに心が落ち着いてくる。このままずっとこうしていたい……とさえ思えてくる時間。だが、そのようなことは続くはずも無い。

「おーい!マルク行くぞー!!」

「わああああああ!？」

「きやああああああ!？」

ナツが窓から飛び込んでくる。割らずにきちんと開けてくるだけマシなのだろうが、いきなりやられると驚くのは誰でも変わらないだろう。

そして、二人の叫び声に驚いたシャルルが家の奥から走って現れる。

「ちよ、何!？」

「お、ウエンデイとシャルルもいたのか。丁度いいや。じつちゃんからついに許可が出たんだよ!!」

「一緒に行こうぜ!!」

「きよ、許可……ですか?」

「えつと、それってなんの許可なんですか……」

「ふふ、聞いて驚け……100年クエストだ!!」

「っ!!」

ナツの宣言に、マルク達は驚きを隠せない。100年クエスト、その名の通り、100年間誰もクリアすることが出来なかったクエスト。そうそう数があるものでもない……そして、恐らくそのクエストはギルダーツが失敗したクエストの事だろう。

「い、行けるんですか!？」

「おう!100年間……あのギルダーツもクリア出来なかったクエストだ!!来るだろ!？」

マルク、シャルル、ウエンデイの3人は顔を見合わせる。断る理由もない、そして受ける理由はある。

ギルドの一員として、そして何よりまた旅ができるのだ。

「俺は行きます!!」

「私も!!」

「2人が行くなら、私も行くしかないわよね。」

「やれやれと言った感じにシャルルは肩をすくめているが、しかし嫌そうな感情は全く見受けられない。」

「とりあえず今からルーシー誘いに行くから!」

「い、今からですか?」

「あー、酒飲み過ぎてぶつ倒れてよー…多分今は家で寝てると思うんだけどよ、一旦運んでやって朝早くから全員集めるために動いてたんだ。」

「マルクのところにウエンデイとシャルルいてくれて助かったぜ。」

「わ、分かりました!すぐ準備していきます!!」

「おう!というわけで俺ら先にルーシーの家戻ってっから!!」

「そう言っつて、ナツとハツピーは窓から飛んでルーシーの家に向かっつていく。その後に、3人は顔を見合わせて笑みを浮かべる。」

「ふふ、100年クエストかあ…」

「楽しみだな……!」

「そうね、とりあえずあんた達2人が何もしないように見張ってないといけないわ。」

「とりあえず——」

3人は手を重ねる。これから向かう100年クエスト、そのクリアのために…そしてこれから向かう旅の為に、力を合わせる暗黙の誓い。

「燃えてきたア!!」

そして、その掛け声とともに3人は重ねた手を上げる。

妖精の尻尾は終わらない、彼らの冒険は終わらない。未知への探求は続いていく。

マルク、ウエンデイ、そしてシャルルの関係も…これからもずっと続いていくのである。

}
F
i
n
{

番外編：悪魔の力

「――そー言えばよー……」

気だるそうな表情で、これまた気だるそうな声を出しながらテーブルに寝そべる姿を見せる男が1人。

アクノロギアを倒し、そして世界に平和をもたらした男：ナツ・ドラグニルの姿が、修理が終わりいつも通りの日常を過ごす妖精フェアリーテイルの尻尾のギルドにあった。

そんなナツの周りには、いつも通りのメンバー：ルーシー・ハートフィリア、グレイ・フルバスター、エルザ・スカーレット、ウエンディ・マーベル、マルクス・スーリア、ハッピー、シャルルの姿もあった。「なんですか、ナツさん。そんなだるそうな声を上げて。」

「暴れ足りないから『暴れさせてくれー!』っていうのは無しよー?」「いやいや、そんなんじゃねえけど。ちよつと思つた事があんだよ……」「んだよ、思つた事つて。」

ルーシーやグレイがナツに話しかけるが、ナツは相変わらずだらけ
ているだけである。

「マルクの事なんだけどよ……」

「俺?」

「悪魔龍…だっけ?あれ結局どのくらい姿あんだ?」

顔だけを起こし、マルクに視線を向けるナツ。そして話されたナツの疑問に対してなるほど、と相槌を打っていた。

「7つ…じゃないですね、8つです。うち一つは、残り7つを全部合体させたようなやつなんで実質7つなんですけど。」

「7つ……でもよー、他の姿はあんまり見てない気がする……」

「そう言えば…確かにその通りだな。使えない理由でもあつたのか?」

「まあ、平たく言えばその通りです。」

「ほへー……なあ、他にどんな姿があんだよ。」

ナツは体を起こして、興味を示しながらマルクに眼差しを送る。マルクは少し考えてから、『見せるだけなら別にいいか』と考えて1人で

頷く。

「じゃあ、ちよつと移動しましょう。あんまり人気の多いところで使ったら、二次災害とか起こりかねませんし。」

「おおー見せてくれんのか!？」

「見せるだけですよ？戦闘能力が無い姿もあるんですから。」

こうしてマルクは、ナツ達に悪魔龍としての力を全て見せることにしたのであった。

「えつと…ここならいいかな？」

「本当に人気のない場所を選んだな。」

「二次災害防がないといけませんし…やれることはやっておきたいんですよ。」

マルク達はギルドから出て、裏にある山…にある小さな洞窟に来ていた。明かりは外からの光だけなので、ナツの炎等で明るくしてから始めていた。

「…ひとまず口頭で説明なんですけど、俺の力は7体の悪魔の力によつて構成されています。」

暴食、憤怒、傲慢、怠惰、色欲、嫉妬、強欲…この7つです。」

「私達が見たのは、暴食、憤怒、傲慢、強欲…の4つだったわね。」

「その4つは、また後で見せますよ。とりあえず見せていない3つを中心に紹介します。」

とりあえずグレイさん、厚めの氷の板お願いします。」

「おう。」

マルクに指示されて、グレイは一同と少し離れた位置にいるマルクの間氷の板を隙間なく詰めていく。後で割るなり溶かすなりすればいいので、今はこれで済ませておくのだ。

「んじやあ最初は…怠惰から行きましよう。モード悪魔龍、レイジネススロウス怠惰怠け。」

そう呟いたマルクの体に、呪力がまとわりついていき…まるで岩のような形になっていく。ひらべったく、ほれでいて分厚く大きい壁のような岩が作られていくのだ。

洞窟の天井にまで届きそうな程の大きさだが、届く前に変身が終わりきってしまう。

「……怠惰、と言ったな。その力はなんなのだ？」

頃合を見計らってか、エルザが質問をする。心無しかそれが妙にキラキラしているように見えたのは、マルクの気の所為ではないだろう。

「自分の体の圧倒的な回復、それと圧倒的な防御力…それがこの姿の売りですよ。まあその代わり、全く動けなくなるんで使い所に困ってるんですよ。」

「ああ…今のよう洞窟を塞ぐか、自分が狙われている時にくらいしか使えなさそうだ。」

「そう言うことです…じゃあ次、嫉妬ジェラシーエンザイいってみましよう。モード悪魔龍、嫉妬嫉妬嫉み。」

そして、次の姿へと変貌していくマルク。しかし、次は岩のような塊から一変、まるでお伽噺に出てくるかのようなとんがった大きな帽子、そして明らかに身長に見合っていないようなダボダボの服のようなものを身に着けた姿へと変貌していく。

「…それは、悪魔なのか？」

「悪魔みたいです。別に俺が姿を決めてる訳じゃないんで…そこはどうにもなりません。」

顔は普通、身長や皮膚の色、髪の色目の色…どこをとってもただのダボダボの服を着たマルクにしか見えないのだ。その点はマルクも気になっているのか、少し不満げな顔になっていた。

だが、エルザやナツはもつと悪魔っぽいものを期待していたのか、ほんの少し落胆したような顔を浮かべていた。

「それで、どんな能力なの？」

「口で説明するより、こっちは見た方が早いと思います。グレイさん、手のひらに乗るような幅の氷の塊作ってもらってもいいですか？」

「ん？おう、その程度ならいいぜ。」

そう言つて、グレイはマルクの手のひらの上に氷を生成する。程よい大きさのために、比較的に見やすくなっている。

「んじやあ行きますよー……ほっ！」

その掛け声とともに、氷に真っ黒な炎が氷を焼き始める。その炎を見た瞬間に、ナツは興味津々となったのか氷の壁に顔を貼り付けるほどだった。

「黒い炎!? それどんな味がすんだ!？」

「あの、これ炎に見えてるだけで全然別物ですからね？」

「あ？ 炎じやねえの？」

「ええ、これは嫉妬の力で生み出された呪力です。まあ熱さこそ感じますが……これはありとあらゆるものに燃やし、そして燃え尽きるまで消えることの無い嫉妬の炎なんです。」

「それを聞く限り、かなり使えそうなのに……なんで使わなかったの？ 自分じや消せないとか？」

疑問に思つたルーシイがマルクに質問をする。その質問に対して、マルクは少しだけ渋い顔をする。それで余計にルーシイは疑問に思わざるを得なかった。

「自分では消せるんですけどね……俺、戦うことはしますけど……相手をおざわざ苦しめるマネはしたくないんですよ。」

「どういうこと？」

「ルーシイさん、自分が燃えたら声を出します？」

「当たり前じゃない、というか燃えてるのに悲鳴をあげない人間なんてそうそういるわけ……あっ……」

ここでルーシイ、マルクの言いたいことがわかったのかマルクと同じ様に渋い顔になっていた。

他のメンバーはわからないのか、首をかしげていた。

「どういうことだよ、ルーシィ。」

「これ…相手を倒すまで、相手の悲鳴を聞き続けなきゃいけない…つてことじゃないの?」

「……あー、なるほど。」

「そういう事です。自分で消すことも出来ませんが、そのためには相手を殺さない…そして五体満足でいられるようにしておかないといけないので…どっちかというと、拷問向きなんですよ、この力。」

全員が納得の渋い顔になっていた。何が楽しくて相手の悲鳴を聴きながら戦わないといけないのか、どんな相手でもそのように一方的にただただ痛めつけるのだけは、全員があまり好まないものであった。

「……と、とりあえず次は色欲だけど…」

「んあ?どうしたルーシィ。」

「ルーシィさん?お顔が真っ赤ですよ?」

色欲と聞いて、顔を真っ赤にするルーシィ。他のメンバーは意味そのものがわかっていないのか、首を傾げていた。因みに、マルクもよく意味がわかっていないのである。

「し、色欲ってね……その…」

ルーシィは手招きをしてマルクを除いた全員をその場に集めて小声で話し始める。とは言っても、滅竜魔導士^{ドラゴンスレイヤー}であるマルクにも問題なく聞こえる距離のために、マルクはその場で聞き耳を立てる。

「……え、エッチな意味として使われることが多いけど……」

長めの溜めの後に、ルーシィはその言葉を漸く吐き出す。そして、出された言葉を聞いて一同顔を真っ赤にしてマルクの方に視線を向ける。唯一、ウエンディだけが顔を真っ赤にしながら完全に頭を抑えていたが。

「べ、別に俺のはそういうのじゃありませんからね!?’と、とりあえず見せてあげますよ!!モード色欲艶やか!!」

そう言つて、最後の紹介が行われる。マルクの姿が、まるで繭のように変貌していく。その後、その繭らしきものから何本もの触手が生

えていき、今まで以上に完全な異形として変貌していく。

そして、その姿の最後に……繭らしきものの中心に、大きな眼球が現れる。つまりは、1つ目である。

「「ぎやあああああああ!!」」

「うわあああああああ!!」

その姿に驚き、そして恐怖を抱いたルーシイとナツとウエンディ。そしてその声に驚いて大声を出すマルク。

「これは…相当……」

「なんでそれだけ手足すらないんだよ……」

「ああ、うん……やっぱ気持ち悪いですよねこれ……」

「口ないのにどうやって喋ってんだ……?」

グレイがそのことに疑問を呈した直後、エルザがマルクを見て少し疑問を覚える。目を凝らして、その違和感がちゃんとあるのを確認してから、マルクに声をかける。

「マルク、今お前の体から出てる煙はなんだ?」

「ああこれですか? 吸ったら寝て、起きるまでいい夢しか見ない煙です。」

「……見た目に反して、随分といい能力にも思えるが……」

「……いい夢、ってどんな……?」

「……その辺は俺にもわかりませんよ。この力で見せる夢、つてのは決められてませんし……」

少し怯えながらも、ルーシイはマルクに質問をする。この異形の見た目でここまで驚かれると多少は傷ついているのか、直ぐにマルクは元の姿へと戻る。

「あー……氷溶かしていいか?」

「…今はやめた方がいいですよ、性欲の力で生み出した煙は俺が元の姿に戻っても消えませんが……皆さんが先に洞窟出てから、俺が自分から出てくる方が安全です。」

「なるほど、ならば我々は先に出ておくか……洞窟の外で落ち合おう。」

「はい。」

一同はマルクの言うことを素直に聞き、そのまま洞窟から出てい

く。それを確認してから、マルクは少しだけ笑みを浮かべていた。

悪魔の力、本来ならば忌み嫌われるその力だが、仲間であり家族でもあるギルドメンバー達は、この力を怖がることは無かった。

無論、先程のようにいきなりでてきた場合は恐怖し驚くこともあるが、それはお化け屋敷でてきたお化けに恐怖を抱くようなものであり、一時的な驚きと恐怖だけである。先程のウエンディとルーシイはその類だった。

「正直、あの姿をいきなり見せられたら誰だつて驚くけどな……」

そう苦笑しながら、マルクは深呼吸してから氷を割るために一撃を繰り出す。氷は簡単に割れて、マルクは割れたことを確認してから洞窟から歩いて出て行くのであった。

「おっ！ やつとでてきたか。」

「さ、さっきはごめんね？ マルク……」

「いや、あれいきなり見せる俺も悪かったし……」

「おーい、さっさと帰んぞー……」

「マルクのあの力…皆で話し合えば、きっと使いやすくなると思うんだよ。」

それぞれが言いたいことを言い、それで会話しながらギルドへと戻っていく。

外に出て家に帰る…これは、そんなとある日常の物語であり……とある何気ない日の話なのである。